新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ＸＩ

# 竹松遺跡Ⅳ

（たけまついせき）

下　巻

古代・中世編

２０１９

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ＸＩ

# 竹松遺跡Ⅳ

（たけまついせき）

下　巻

古代・中世編

**調査区遠景　南から**

手前はTAK201403調査区。中央右がTAK201404調査区。その先に、TAK201405調査区、TAK201407調査区、TAK201406調査区と続く。奥は大村湾。

巻頭図版 2

TAK201405調査区内　区画溝調査風景　南から

カムィヤキ

越州窯系青磁浅椀・椀Ⅲ類

鉄絵青磁蓋

# 発刊にあたって

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴って実施した、大村市竹松遺跡の発掘調査報告書です。

竹松遺跡は、かねてより原始・古代の遺跡として知られておりましたが、九州新幹線の車両整備のため、保守基地（後に車両基地に拡大）が建設されることになりましたので、やむなく発掘調査に至ったものです。

併せて新幹線の車両が走ります路線部の発掘調査も行いました。

調査面積は、約10万㎡にも及び、原始時代から、古代、中世に至る住居跡や墓地など、約700基の遺構が検出され、出土した遺物は約70万点にも上りました。

同遺跡の発掘調査は、平成23年度から着手し、同28年度に終了いたしましたが、これほどの広大な土地を発掘調査いたしましたのは、本県では、壱岐市にある国の特別史跡の原の辻遺跡ぐらいでしたので、本土部では初めての調査規模となりました。

本書は、平成26年度の発掘調査成果のうち、古代と中世の成果を掲載しております。本書を含め、竹松遺跡の一連の発掘調査報告書が、郷土の歴史に新たな発見と展開をもたらすことを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた共同企業体の皆様や、暑さ寒さの厳しいなか、発掘調査に従事された外業作業員の方々をはじめ、さまざまな形でご協力いただいた大村市教育委員会や独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様など、関係者の皆様に厚く御礼申し上げまして、刊行のあいさつといたします。

令和元年７月31日

長崎県教育委員会教育長
池　松　誠　二

# 例　　言

1. 本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設（事業主体：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）に伴って実施した長崎県大村市に所在する竹松遺跡のTAK201403調査区（大村市竹松町676番地3ほか所在、調査面積6,320㎡）とTAK201404調査区（大村市竹松町1201番地1ほか所在、調査面積7,720㎡）、TAK201405調査区（大村市竹松町1101番地ほか所在、調査面積9,487㎡）、TAK201406調査区（大村市竹松町733番地ほか所在、調査面積4,920㎡）、TAK201407調査区（大村市竹松町1,093番1ほか所在、調査面積6,876㎡）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本報告書である『竹松遺跡Ⅳ』下巻は、上記の各調査区から出土した古代および中世の遺構、遺物の報告を掲載している。
2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、TAK201403調査区は㈱埋蔵文化財サポートシステムと扇精光コンサルタンツ㈱の共同企業体の支援を得た。また、TAK201404調査区は国際文化財㈱と㈱三基の共同企業体の支援を得、TAK201405調査区は大成エンジニアリング㈱と㈱創建の共同企業体の支援を得て行い、TAK201406調査区は㈱島田組と扇精光コンサルタンツ㈱の共同企業体の支援を得て行った。さらにTAK201407調査区は㈱大信技術開発と㈱プロレリックの共同企業体の支援を得て行った。調査期間は以下のとおりである。
   (1)範囲確認調査（【　】は遺跡調査番号）
   TAK201403調査区：平成25(2013)年1月10日（木）～同年2月20日（水）【TAK201217】
   TAK201404調査区、TAK201405調査区、TAK201406調査区、TAK201407調査区
   ：平成25(2013)年10月21日（月）～同年12月2日（月）【TAK201309】
   (2)本調査
   TAK201403調査区：平成26年5月28日（水）～平成26年10月20日（月）
   TAK201404調査区：平成26年5月30日（金）～平成27年2月10日（火）
   TAK201405調査区：平成26年5月28日（水）～平成27年2月27日（金）
   TAK201406調査区：平成26年7月3日（木）～平成27年2月9日（月）
   TAK201407調査区：平成26年7月1日（火）～平成27年3月6日（金）
3. 遺物写真撮影は一瀬勇士、柿田佳央理が行った。デジタルトレース及び手トレースは久田ひとみ、柿田佳央理が行った。また、一部は㈱島田組に委託した。
4. 本報告書の執筆・編集は川畑敏則が行った。
5. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系を用い、方位はすべて座標北である。
6. 記録類および出土遺物は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所に保管している。
7. 遺跡調査番号はTAK201403、TAK201404、TAK201405、TAK201406、TAK201407である。
8. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
   SA：柵　SB：掘立柱建物跡　SC：竪穴建物跡　SD：溝　SK：土坑　SL：炉、カマド、焼土、鍛冶遺構
   SP：柱穴　ST：埋葬施設　SX：不明遺構　SS：集石　SU：遺物集積　TP：試掘坑　NR：自然流路
   SF：道路状遺構
9. 本書は紙幅の都合により「調査の経緯」「歴史的環境、地理的環境」を割愛した。『竹松遺跡Ⅰ』『竹松遺跡Ⅱ』を参照いただきたい。
10. 発掘調査にあたっては、木本雅康先生【故人】（長崎外国語大学）、細井浩志先生（活水女子大学）を招聘し、ご指導を得た。
11. 自然科学分析では、赤色顔料について、九州国立博物館の志賀智史氏より玉稿をいただいた。また、イスラム陶器は長崎県立埋蔵文化財センターに分析を依頼した。

# 総　目　次

※（　　）内は執筆者

## 上巻


Ⅰ　調査組織と方法（古門）
1　調査組織……1
2　遺跡位置……3
3　調査方法……4
Ⅱ　層序（古門・川畑）
1　共通土層……5
2　TAK201403の基本層序……5
3　TAK201404の基本層序……5
4　TAK201405の基本層序……6
5　TAK201406の基本層序……6
6　TAK201407の基本層序……6
Ⅲ　遺構と遺物
1　旧石器時代（川道）
(1)TAK201404調査区の包含層出土の旧石器……23
(2)TAK201406調査区の包含層出土の旧石器……23
2　縄文時代（村川・川道）
(1)調査区（TAK201403・201404・201405・201406・201407）の概要…26
(2)主な遺構と遺物……26
(3)包含層出土の縄文土器……46
(4)遺物（石器）……75
(5)蛍光X線分析による黒曜石製石器の産地同定……166
(6)小結……173


## 中巻


3　弥生時代（中川）
(1)掘立柱建物（SB）……8
(2)竪穴建物（SC）……13
(3)溝（SD）……56
(4)土坑（SK）……71
(5)焼土（SL）……87
(6)柱穴（SP）……88
(7)集石（SS）……93
(8)墳墓（ST）……95
(9)不明遺構（SX）……134
(10)畦畔……144
(11)自然流路（NR）……149
(12)包含層出土遺物……151
4　古墳時代（中川）
(1)掘立柱建物（SB）……167
(2)竪穴建物（SC）……173
(3)溝（SD）……245
(4)土坑（SK）……249
(5)カマド・焼土（SL）……254
(6)柱穴（SP）……255
(7)遺物集積（SU）……260
(8)古墳周溝（SZ）……282
(9)畦畔……285
(10)包含層出土遺物……287
(11)まとめ……305


## 下巻


5　古代（川畑）
(1)柵列（SA）……6
(2)掘立柱建物跡（SB）……8
(3)竪穴建物跡（SC）……13
(4)溝・河川（SD）……18
(5)土坑（SK）……32
(6)焼土（SL）……38
(7)柱穴（SP）……39
(8)集石（SS）……49
(9)墓（ST）……50
(10)遺物集積（SU）……51
(11)不明遺構（SX）……54
(12)自然流路（NR）……56
(13)包含層（2層）出土の遺物……57
(14)包含層（3層）出土の遺物……65
(15)小結……88
6　中世（川畑）
(1)柵列（SA）……99
(2)掘立柱建物（SB）……103
(3)溝状遺構（SD）……136
(4)道路状遺構（SF）……211
(5)土坑（SK）……214
(6)畦畔……225
(7)柱穴（SP）……228
(8)集石（SS）……242
(9)墓（ST）……251
(10)不明遺構（SX）……252
(11)包含層（2層）出土の遺物……257
(12)包含層（3層）出土の遺物……278
(13)小結……300
7　その他（古門）
長崎県本土部における古代の土師器坏研究の現状整理と若干の考察－9世紀の彼杵郡・高来郡の土師器坏を中心に－…315

Ⅳ　附編（自然科学分析結果）……327

Ⅴ　まとめ（古門）……370

# 下巻本文目次(1)

※(　　)内は執筆者


5　古代(川畑)……6
(1)柵列(SA)……6
①TAK201404調査区SA1……6
(2)掘立柱建物跡(SB)……8
①TAK201405調査区SB6……8
②TAK201407調査区SB4……8
③TAK201407調査区SB6……12
(3)竪穴建物跡(SC)……13
①TAK201405調査区SC2……13
②TAK201405調査区SC3……15
③TAK201405調査区SC4……17
(4)溝・河川(SD)……18
①TAK201404調査区SD1……18
②TAK201405調査区SD10……20
③TAK201405調査区SD11……27
④TAK201405調査区SD12……31
(5)土坑(SK)……32
①TAK201405調査区SK10……32
②TAK201405調査区SK29……33
③TAK201405調査区SK30……34
④TAK201405調査区SK37……36
⑤TAK201405調査区SK42……37
(6)焼土(SL)……38
①TAK201404調査区SL4……38
②TAK201405調査区SL1……39
(7)柱穴(SP)……39
①TAK201403調査区SP5……39
②TAK201404調査区SP111……41
③TAK201405調査区SP201……41
④TAK201405調査区SP250……42
⑤TAK201405調査区SP381……43
⑥TAK201405調査区SP611……44
⑦TAK201405調査区SP664……45
⑧TAK201405調査区SP680……45
⑨TAK201405調査区SP701……46
⑩TAK201405調査区SP704……47
⑪TAK201405調査区SP960……47
⑫TAK201405調査区SP1488……48
(8)集石(SS)……49
①TAK201405調査区SS2……49
(9)墓(ST)……50
①TAK201405調査区ST5……50
(10)遺物集積(SU)……51
①TAK201405調査区SU11……51
(11)不明遺構(SX)……54
①TAK201403調査区SX4……54
②TAK201405調査区SX4……55
(12)自然流路(NR)……56
①TAK201407調査区NR1……56
(13)包含層(2層)出土の遺物……57
①TAK201202調査区　2層出土遺物……57
②TAK201403調査区　2層出土遺物……57
③TAK201404調査区　2層出土遺物……57
④TAK201405調査区　2層出土遺物……60
⑤TAK201406調査区　2層出土遺物……63
⑥TAK201407調査区　2層出土遺物……65
(14)包含層(3層)出土の遺物……65
①TAK201202調査区　3層出土遺物……65
②TAK201404調査区　3層出土遺物……67
③TAK201405調査区　3層出土遺物……75
④TAK201406調査区　3層出土遺物……81
⑤TAK201407調査区　3層出土遺物……85
(15)小結……88
①鉄鉢形土器について……88
②灯火具について……88
6　中世(川畑)……99
(1)柵列(SA)……99
①TAK201405調査区SA1……99
②TAK201405調査区SA2……99
③TAK201405調査区SA3……99
④TAK201405調査区SA4……102
(2)掘立柱建物(SB)……103
①TAK201403調査区SB1……103
②TAK201403調査区SB2……105
③TAK201403調査区SB3……106
④TAK201202調査区SB8……108
⑤TAK201202調査区SB9……111
⑥TAK201405調査区SB1……113
⑦TAK201405調査区SB2……116
⑧TAK201405調査区SB3……121
⑨TAK201405調査区SB4……123
⑩TAK201405調査区SB5……125
⑪TAK201406調査区SB2……128
⑫TAK201406調査区SB6……130
⑬TAK201407調査区SB1……131
⑭TAK201407調査区SB2……132
⑮TAK201407調査区SB5……133
(3)溝状遺構(SD)……136
①TAK201404調査区SD2……136
②TAK201404調査区SD4……139
③TAK201404調査区SD11……140
④TAK201202調査区SD26……141
⑤TAK201302調査区SD21……147
⑥TAK201405調査区SD4……148
⑦TAK201405調査区SD6……150
ア平成24(2012)年度調査時の出土遺物……153
イ平成25(2013)年度調査時の出土遺物……176
ウ平成26(2014)年度調査時の出土遺物……185
⑧TAK201405調査区SD7……200
⑨TAK201405調査区SD8……203
⑩TAK201405調査区SD9……204
⑪TAK201406調査区SD5……206
⑫TAK201406調査区SD9……208
(4)道路状遺構(SF)……211
①TAK201405調査区SF1……211
(5)土坑(SK)……214
①TAK201202調査区SK106……214
②TAK201202調査区SK107……216
③TAK201405調査区SK2……217
④TAK201405調査区SK4……218
⑤TAK201405調査区SK5……219
⑥TAK201405調査区SK6……220
⑦TAK201405調査区SK11……222
⑧TAK201405調査区SK12……223
⑨TAK201405調査区SK19……224
(6)畦畔……225
①TAK201406調査区畦畔1……225
②TAK201406調査区畦畔3……227
(7)柱穴(SP)……228
①TAK201403調査区SP61……228
②TAK201403調査区SP136……228
③TAK201404調査区SP37……229
④TAK201405調査区SP93……229
⑤TAK201405調査区SP169……230
⑥TAK201405調査区SP228……230
⑦TAK201405調査区SP269……231
⑧TAK201405調査区SP282……232
⑨TAK201405調査区SP303……233

## 下巻本文目次(2)

※(　　)内は執筆者


⑩ TAK201405調査区 SP319 ……234
⑪ TAK201405調査区 SP321 ……235
⑫ TAK201405調査区 SP322 ……236
⑬ TAK201405調査区 SP733 ……236
⑭ TAK201405調査区 SP1167 ……237
⑮ TAK201405調査区 SP1200 ……238
⑯ TAK201405調査区 SP1209 ……238
⑰ TAK201405調査区 SP1606 ……239
⑱ TAK201406調査区 SP184 ……240
⑲ TAK201406調査区 SP355 ……240
(8)集石(SS) ……242
① TAK201202調査区 SS3 ……242
② TAK201405調査区 SS1 ……243
③ TAK201406調査区 SS2 ……249
(9)墓(ST) ……251
① TAK201202調査区 ST3 ……251
(10)不明遺構(SX) ……252
① TAK201405調査区 SX1 ……252
② TAK201406調査区 SX1 ……253
(11)包含層(2層)出土の遺物……257
① TAK201202調査区　2層出土遺物 ……257
② TAK201403調査区　2層出土遺物 ……257
③ TAK201404調査区　2層出土遺物 ……260
④ TAK201405調査区　2層出土遺物 ……261
⑤ TAK201406調査区　2層出土遺物 ……273
(12)包含層(3層)出土の遺物……278
① TAK201403調査区　3層出土遺物 ……278
② TAK201405調査区　3層出土遺物 ……279
③ TAK201406調査区　3層出土遺物 ……294
④ TAK201407調査区　3層出土遺物 ……295
(13)小結 ……300
① 区画溝について ……300
② 区画溝内の遺構の変遷 ……303
③ TAK201406調査区の SX1について ……305
④ 豊前系土師器について ……307
⑤ 高麗無釉陶器について ……307
⑥ カムィヤキについて ……308
⑦ 石鍋の加工品について ……309
⑧ 鉄絵青磁蓋と初期高麗青磁壺について ……311
7　その他(古門)
長崎県本土部における古代の土師器坏研究の現状整理と若干の考察－9世紀の彼杵郡・高来郡の土師器坏を中心に－…315

Ⅳ　附編(自然科学分析結果) ……327

Ⅴ　まとめ(古門) ……370


## 下巻挿図目次(1)


第1図　TAK201403調査区　古代遺構配置図 ……1
第2図　TAK201404調査区　古代遺構配置図 ……2
第3図　TAK201405調査区　古代遺構配置図－1 ……3
第4図　TAK201405調査区　古代遺構配置図－2 ……4
第5図　TAK201407調査区　古代遺構配置図 ……5
第6図　SA1平・断面図、柱穴平・断面図 ……6
第7図　SA1出土遺物 ……7
第8図　SB6平・断面図、柱穴平・断面図 ……9
第9図　SB4平・断面図、柱穴平・断面図 ……10
第10図　SB4柱穴　平・断面図 ……11
第11図　SB6平・断面図、柱穴平・断面図 ……12
第12図　SC2平・断面図 ……14
第13図　SC3平・断面図 ……15
第14図　SC3出土遺物 ……16
第15図　SC4平・断面図 ……17
第16図　SD1平・断面図 ……19
第17図　SD1出土遺物 ……20
第18図　SD10平・断面図 ……21
第19図　SD10遺物出土状況 ……22
第20図　SD10出土遺物－1 ……23
第21図　SD10出土遺物－2 ……25
第22図　SD11平・断面図 ……28
第23図　SD11出土遺物 ……29
第24図　SD12平・断面図 ……31
第25図　SD12出土遺物 ……32
第26図　SK10平・断面図 ……32
第27図　SK10出土遺物 ……33
第28図　SK29平・断面図 ……33
第29図　SK29出土遺物 ……34
第30図　SK30平・断面図 ……34
第31図　SK30出土遺物 ……35
第32図　SK37平・断面図 ……36
第33図　SK37出土遺物 ……37
第34図　SK42平・断面図 ……37
第35図　SK42出土遺物 ……37
第36図　SL4平・断面図 ……38
第37図　SL4出土遺物 ……38
第38図　SL1平・断面図 ……39
第39図　SL1出土遺物 ……39
第40図　SP5平・断面図 ……40
第41図　SP5出土遺物 ……40
第42図　SP111平・断面図 ……41
第43図　SP111出土遺物 ……41
第44図　SP201平・断面図 ……41
第45図　SP201出土遺物 ……42
第46図　SP250平・断面図 ……42
第47図　SP250出土遺物 ……42
第48図　SP381平・断面図 ……43
第49図　SP381出土遺物 ……43
第50図　SP611平・断面図 ……44
第51図　SP611出土遺物 ……44
第52図　SP664平・断面図 ……45
第53図　SP664出土遺物 ……45
第54図　SP680平・断面図 ……45
第55図　SP680出土遺物 ……46
第56図　SP701平・断面図 ……46
第57図　SP701出土遺物 ……46
第58図　SP704平・断面図 ……47
第59図　SP704出土遺物 ……47
第60図　SP960平・断面図 ……47
第61図　SP960出土遺物 ……48
第62図　SP1488平・断面図 ……48
第63図　SP1488出土遺物 ……48
第64図　SS2平・断面図 ……49
第65図　SS2出土遺物 ……49
第66図　ST5平・断面図 ……50
第67図　SU11平・断面図 ……51
第68図　SU11出土遺物 ……52
第69図　SX4平・断面図 ……54
第70図　SX4出土遺物 ……54

# 下巻挿図目次(2)


第71図　SX4平・断面図 ……55
第72図　SX4出土遺物 ……55
第73図　NR1出土遺物 ……56
第74図　TAK201202調査区2層　出土遺物 ……57
第75図　TAK201403調査区2層　出土遺物 ……57
第76図　TAK201404調査区2層　出土遺物 ……58
第77図　TAK201405調査区2層　出土遺物 ……60
第78図　TAK201406調査区2層　出土遺物 ……64
第79図　TAK201407調査区2層　出土遺物 ……65
第80図　TAK201202調査区3層　出土遺物 ……66
第81図　TAK201404調査区3層　出土遺物－1 ……69
第82図　TAK201404調査区3層　出土遺物－2 ……71
第83図　TAK201404調査区3層　出土遺物－3 ……73
第84図　TAK201405調査区3層　出土遺物－1 ……76
第85図　TAK201405調査区3層　出土遺物－2 ……78
第86図　TAK201406調査区3層　出土遺物－1 ……82
第87図　TAK201406調査区3層　出土遺物－2 ……83
第88図　TAK201407調査区3層　出土遺物 ……85
第1図　県内出土鉄鉢形土器 ……88
第2図　竹松遺跡出土鉄鉢型土器 ……88
第3図　竹松遺跡出土灯火具 ……89
第4図　灯火具の例 ……89
第5図　土製香炉・香炉蓋の例 ……90
第89図　TAK201403調査区　中世遺構配置図 ……92
第90図　TAK201404調査区　中世遺構配置図－1 ……93
第91図　TAK201404調査区　中世遺構配置図－2 ……94
第92図　TAK201202(⑥･⑦区)･TAK201302(⑫区)･TAK201405調査区　中世遺構配置図－1 …95
第93図　TAK201405調査区　中世遺構配置図－2 ……96
第94図　TAK201406調査区　中世遺構配置図 ……97
第95図　TAK201407調査区　中世遺構配置図 ……98
第96図　SA1平・断面図 ……100
第97図　SA2平・断面図 ……101
第98図　SA3平・断面図 ……102
第99図　SA4平・断面図 ……103
第100図　SB1平・断面図 ……104
第101図　SB2平・断面図 ……105
第102図　SB2出土遺物 ……106
第103図　SB3平・断面図 ……107
第104図　SB3出土遺物 ……108
第105図　SB8平・断面図 ……109
第106図　SB8柱穴平・断面図 ……110
第107図　SB8出土遺物 ……110
第108図　SB9平・断面図 ……111
第109図　SB9柱穴平・断面図 ……112
第110図　SB9出土遺物 ……113
第111図　SB1平・断面図 ……114
第112図　SB1柱穴平・断面図 ……115
第113図　SB1出土遺物 ……116
第114図　SB2平・断面図 ……117・118
第115図　SB2柱穴平・断面図－1 ……119
第116図　SB2柱穴平・断面図－2 ……120
第117図　SB2出土遺物 ……120
第118図　SB3平・断面図 ……121
第119図　SB3出土遺物 ……122
第120図　SB4平・断面図 ……123
第121図　SB4柱穴平・断面図 ……124
第122図　SB5平・断面図 ……125
第123図　SB5柱穴平・断面図 ……126
第124図　SB5出土遺物 ……127
第125図　SB2平・断面図 ……128
第126図　SB2柱穴平・断面図 ……129
第127図　SB6平・断面図 ……130
第128図　SB1平・断面図 ……131
第129図　SB2平・断面図 ……132
第130-1図　SB5平・断面図 ……134
第130-2図　SB5出土遺物 ……135
第131図　SD2平・断面図 ……136
第132図　SD2出土遺物－1 ……137
第133図　SD2出土遺物－2 ……138
第134図　SD4平・断面図 ……139
第135図　SD11平・断面図 ……140
第136図　SD11出土遺物 ……141
第137図　SD26平・断面図 ……142
第138図　SD26出土遺物－1 ……143
第139図　SD26出土遺物－2 ……145
第140図　SD21平・断面図 ……147
第141図　SD4平・断面図 ……148
第142図　SD4出土遺物 ……149
第143図　SD6平・断面図 ……150
第144図　SD6の年度ごとの調査区 ……151
第145図　SD6上層出土遺物 ……153
第146図　SD6　中層出土遺物－1 ……155
第147図　SD6　中層出土遺物－2 ……157
第148図　SD6　中層出土遺物－3 ……159
第149図　SD6　中層出土遺物－4 ……161
第150図　SD6　下層出土遺物－1 ……164
第151図　SD6　下層出土遺物－2 ……166
第152図　SD6　下層出土遺物－3 ……168
第153図　SD6　下層出土遺物－4 ……170
第154図　SD6　下層出土遺物－5 ……172
第155図　SD6　一括取り上げ遺物 ……175
第156図　SD6　上層出土遺物 ……177
第157図　SD6　中層出土遺物 ……179
第158図　SD6　下層出土遺物 ……180
第159図　SD6　一括取り上げ遺物－1 ……182
第160図　SD6　一括取り上げ遺物－2 ……184
第161図　SD6　上層出土遺物 ……186
第162図　SD6　中層出土遺物 ……189
第163図　SD6　下層出土遺物－1 ……192
第164図　SD6　下層出土遺物－2 ……194
第165図　SD6　一括取り上げ遺物－1 ……196
第166図　SD6　一括取り上げ遺物－2 ……198
第167図　SD7平・断面図 ……200
第168図　SD7出土遺物 ……201
第169図　SD8平・断面図 ……203
第170図　SD9平・断面図 ……204
第171図　SD9出土遺物 ……205
第172図　SD5平・断面図 ……206
第173図　SD5出土遺物 ……207

## 下巻挿図目次(3)


第174図　SD9平・断面図 ……209
第175図　SD9出土遺物 ……210
第176図　SF1平・断面図 ……212
第177図　SF1出土遺物 ……213
第178図　SK106平・断面図 ……214
第179図　SK106出土遺物 ……215
第180図　SK107平・断面図 ……216
第181図　SK107出土遺物 ……216
第182図　SK2平・断面図 ……217
第183図　SK2出土遺物 ……217
第184図　SK4平・断面図 ……218
第185図　SK4出土遺物 ……219
第186図　SK5平・断面図 ……219
第187図　SK5出土遺物 ……220
第188図　SK6平・断面図 ……221
第189図　SK6出土遺物 ……221
第190図　SK11平・断面図 ……222
第191図　SK12平・断面図 ……223
第192図　SK12出土遺物 ……223
第193図　SK19、SP491平・断面図 ……224
第194図　畦畔1平・断面図 ……225
第195図　畦畔1出土遺物 ……227
第196図　畦畔3平・断面図 ……227
第197図　SP61平・断面図 ……228
第198図　SP61出土遺物 ……228
第199図　SP136平・断面図 ……228
第200図　SP136出土遺物 ……228
第201図　SP37平・断面図 ……229
第202図　SP37出土遺物 ……229
第203図　SP93平・断面図 ……230
第204図　SP93出土遺物 ……230
第205図　SP169平・断面図 ……230
第206図　SP169出土遺物 ……230
第207図　SP228平・断面図 ……231
第208図　SP228出土遺物 ……231
第209図　SP269平・断面図 ……231
第210図　SP269出土遺物 ……231
第211図　SP282平・断面図 ……232
第212図　SP282出土遺物 ……232
第213図　SP303平・断面図 ……233
第214図　SP303出土遺物 ……233
第215図　SP319平・断面図 ……234
第216図　SP319出土遺物 ……234
第217図　SP321平・断面図 ……235
第218図　SP321出土遺物 ……235
第219図　SP322平・断面図 ……236
第220図　SP322出土遺物 ……236
第221図　SP733平・断面図 ……236
第222図　SP733出土遺物 ……237
第223図　SP1167平・断面図 ……237
第224図　SP1167出土遺物 ……237
第225図　SP1200平・断面図 ……238
第226図　SP1200出土遺物 ……238
第227図　SP1209平・断面図 ……238
第228図　SP1209出土遺物 ……239
第229図　SP1606平・断面図 ……239
第230図　SP1606出土遺物 ……239
第231図　SP184平・断面図 ……240
第232図　SP184出土遺物 ……240
第233図　SP355平・断面図 ……240
第234図　SP355出土遺物 ……241
第235図　SS3平・断面図 ……242
第236図　SS3出土遺物 ……243
第237図　SS1平・断面図 ……244
第238図　SS1出土遺物－1 ……246
第239図　SS1出土遺物－2 ……248
第240図　SS2平・断面図 ……249
第241図　SS2出土遺物－1 ……250
第242図　SS2出土遺物－2 ……250
第243図　ST3平・断面図 ……251
第244図　ST3出土遺物 ……251
第245図　SX1骨の分布状況平面図 ……252
第246図　SX1平・断面図 ……253
第247図　SX1内柱穴平・断面図 ……254
第248図　SX1出土遺物 ……255
第249図　TAK201202調査区2層　出土遺物 ……257
第250図　TAK201403調査区2層　出土遺物 ……258
第251図　TAK201404調査区2層　出土遺物 ……260
第252図　TAK201405調査区2層　出土遺物－1 ……262
第253図　TAK201405調査区2層　出土遺物－2 ……264
第254図　TAK201405調査区2層　出土遺物－3 ……266
第255図　TAK201405調査区2層　出土遺物－4 ……268
第256図　TAK201406調査区2層　出土遺物 ……275
第258図　TAK201403調査区3層　出土遺物 ……278
第260図　TAK201405調査区3層　出土遺物－1 ……282
第261図　TAK201405調査区3層　出土遺物－2 ……284
第262図　TAK201405調査区3層　出土遺物－3 ……286
第263図　TAK201405調査区3層　出土遺物－4 ……288
第264図　TAK201405調査区3層　出土遺物－5 ……290
第265図　TAK201406調査区3層　出土遺物 ……294
第266図　TAK201407調査区3層　出土遺物 ……296
第1図　TAK201405調査区　SD6(区画溝)とSD6内遺構配置図…298
第2図　畑中遺跡　区画溝と建物跡……301
第3図　富の原遺跡で検出した区画溝……302
第4図　第Ⅰ期の遺構……304
第5図　第Ⅱ期の遺構……304
第6図　周溝を持つ建物の例……305
第7図　竹松遺跡TAK1201406調査区　SX1……306
第8図　長崎県内の高麗無釉陶器出土遺跡……307
第9図　竹松遺跡出土鉄絵青磁蓋……312
第10図　珍山里窯跡出土盒 ……312
第11図　珍山里窯跡の位置 ……312
第12図　『竹松遺跡Ⅱ』SP①1338出土遺物 ……313
第13図　三笠川南条坊遺跡資料 ……314
第14図　珍山里窯跡出土複合口縁壺 ……314


## 下巻表目次(1)


第1表　柵列(SA)計測表 ……7
第2表　SA1出土　土器観察表 ……8
第3表　掘立柱建物跡(SB)計測表 ……13
第4表　SC3出土　土器観察表 ……16
第5表　竪穴建物跡(SC)計測表 ……18
第6表　SD1出土　土器観察表 ……20
第7表　SD10出土　土器・磁器観察表 ……27
第8表　SD10出土　滑石製品観察表 ……27

# 下巻表目次(2)


第9表　SD10出土　金属製品観察表 ……27
第10表　SD11出土　土器観察表 ……30
第11表　SD12出土　土器観察表 ……32
第12表　SK10出土　土器観察表 ……33
第13表　SK29出土　土器観察表 ……34
第14表　SK30出土　土器観察表 ……35
第15表　SK30出土　滑石製石鍋観察表 ……35
第16表　SK37出土　土器観察表 ……37
第17表　SK42出土　土器観察表 ……37
第18表　SL4出土　土器観察表 ……39
第19表　SL1出土　土器観察表 ……39
第20表　SP5出土　土器観察表 ……40
第21表　SP111出土　土器観察表 ……41
第22表　SP201出土　土器観察表 ……42
第23表　SP250出土　土器観察表 ……42
第24表　SP381出土　土器観察表 ……43
第25表　SP611出土　土器観察表 ……44
第26表　SP664出土　土器観察表 ……45
第27表　SP680出土　土器観察表 ……46
第28表　SP701出土　土器観察表 ……46
第29表　SP704出土　土器観察表 ……47
第30表　SP960出土　土器観察表 ……48
第31表　SP1488出土　土器観察表 ……48
第32表　SS2出土　土器観察表 ……50
第33表　SS2出土　滑石製石鍋観察表 ……50
第34表　SU11出土　土器観察表 ……52
第35表　SX4出土　土器観察表 ……55
第36表　SX4出土　土器観察表 ……55
第37表　NR1出土　土器観察表 ……57
第38表　TAK201202調査区2層出土　磁器観察表 ……57
第39表　TAK201403調査区2層出土　磁器観察表 ……57
第40表　TAK201404調査区2層出土　土器・磁器観察表 ……59
第41表　TAK201405調査区2層出土　土器・陶磁器観察表 ……63
第42表　TAK201405調査区2層出土　ミニチュア土器観察表 …63
第43表　TAK201406調査区2層出土　土器観察表 ……64
第44表　TAK201406調査区2層出土　土製品観察表 ……65
第45表　TAK201407調査区2層出土　土器観察表 ……65
第46表　TAK201202調査区3層出土　土器観察表 ……66
第47表　TAK201202調査区3層出土　ミニチュア土器観察表 …66
第48表　TAK201404調査区3層出土　土器・磁器観察表 ……74
第49表　TAK201404調査区3層出土　土製品観察表－1 ……74
第50表　TAK201404調査区3層出土　土製品観察表－2 ……74
第51表　TAK201405調査区3層出土　土器・陶磁器観察表 ……80
第52表　TAK201406調査区3層出土　土器観察表 ……82
第53表　TAK201406調査区3層出土　土製品観察表 ……82
第54表　TAK201407調査区3層出土　土器観察表－1 ……87
第55表　TAK201407調査区3層出土　土器観察表－2 ……87
第56表　TAK201407調査区3層出土　ミニチュア土器観察表 …87
第1表　各報告書の記載内容 ……90
第57表　柵列(SA)計測表 ……102
第58表　SB2出土　土器観察表 ……106
第59表　SB3出土　土器観察表 ……108
第60表　SB8出土　土器・磁器観察表 ……108
第61表　SB8出土　滑石製品観察表 ……108
第62表　SB9出土　土器観察表 ……113
第63表　SB1出土　磁器観察表 ……115
第64表　SB1出土　石製品観察表 ……115
第65表　SB2出土　磁器観察表 ……120
第66表　SB3出土　土器・磁器観察表 ……122
第67表　SB3出土　土製品観察表 ……122
第68表　SB5出土　土器・磁器観察表 ……127
第69表　SB5出土　土器観察表 ……135
第70表　掘立柱建物跡(SB)計測表 ……135
第71表　SD2出土　土器・磁器観察表 ……139
第72表　SD2出土　石製品観察表 ……139
第73表　SD11出土　磁器観察表 ……141
第74表　SD26出土　土器・磁器観察表 ……146
第75表　SD26出土　石鍋加工素材観察表 ……147
第76表　SD26出土　滑石製石鍋観察表 ……147
第77表　SD4出土　土器・陶磁器観察表 ……151
第78表　SD6　上層出土　土器・陶器観察表 ……153
第79表　SD6　上層出土　滑石製品観察表 ……153
第80表　SD6　上層出土　滑石製石鍋観察表 ……153
第81表　SD6　中層出土　土器・磁器観察表 ……163
第82表　SD6　中層出土　土製品・滑石製品観察表 ……163
第83表　SD6　中層出土　滑石製石鍋補修具観察表 ……163
第84表　SD6　中層出土　石鍋加工素材観察表 ……163
第85表　SD6　中層出土　滑石製石鍋観察表 ……163
第86表　SD6　下層出土　土製品観察表 ……173
第87表　SD6　下層出土　滑石製ミニチュア石鍋観察表 ……173
第88表　SD6　下層出土　滑石製品観察表 ……173
第89表　SD6　下層出土　石製品観察表 ……173
第90表　SD6　下層出土　土器・陶磁器観察表 ……174
第91表　SD6　下層出土　石鍋加工素材観察表 ……174
第92表　SD6　下層出土　滑石製石鍋観察表 ……174
第93表　SD6　一括取り上げ　土器観察表 ……175
第94表　SD6　一括取り上げ　滑石製品観察表 ……175
第95表　SD6　一括取り上げ　石鍋加工素材観察表 ……175
第96表　SD6　一括取り上げ　滑石製石鍋観察表 ……176
第97表　SD6　上層出土　土器・陶磁器観察表 ……179
第98表　SD6　上層出土　ミニチュア土器観察表 ……179
第99表　SD6　中層出土　土器・磁器観察表 ……180
第100表　SD6　下層出土　土器観察表 ……181
第101表　SD6　一括取り上げ　陶器観察表 ……184
第102表　SD6　一括取り上げ　滑石製品観察表 ……184
第103表　SD6　一括取り上げ　滑石加工素材観察表 ……184
第104表　SD6　一括取り上げ　滑石製石鍋観察表 ……185
第105表　SD6　一括取り上げ　石製品観察表 ……185
第106表　SD6　上層出土　土器・陶磁器観察表 ……185
第107表　SD6　上層出土　土製品観察表－1 ……188
第108表　SD6　上層出土　土製品観察表－2 ……188
第109表　SD6　上層出土　石製品観察表 ……188
第110表　SD6　上層出土　滑石製石鍋観察表 ……188
第111表　SD6　中層出土　土器・陶磁器観察表 ……188
第112表　SD6　中層出土　滑石製石鍋観察表 ……191
第113表　SD6　下層出土　土器・陶磁器観察表 ……191
第114表　SD6　下層出土　滑石製品観察表 ……194
第115表　SD6　下層出土　ミニチュア石鍋観察表 ……194
第116表　SD6　下層出土　滑石製石鍋観察表 ……194
第117表　SD6　一括取り上げ　土器・陶磁器観察表 ……199
第118表　SD6　一括取り上げ　滑石製品観察表 ……199
第119表　SD6　一括取り上げ　滑石製石鍋補修具観察表 ……199
第120表　SD6　一括取り上げ　石鍋加工素材観察表 ……199
第121表　SD6　一括取り上げ　滑石製石鍋観察表 ……199
第122表　SD7出土　土器・磁器観察表 ……202
第123表　SD7出土　石製品観察表 ……202
第124表　SD9出土　土器観察表 ……205
第125表　SD5出土　土器・陶磁器観察表 ……208
第126表　SD5出土　滑石製品観察表 ……208
第127表　SD5出土　滑石製石鍋観察表 ……208
第128表　SD9出土　陶磁器観察表 ……210
第129表　SF1出土　土器観察表 ……213
第130表　SF1出土　滑石製品観察表 ……213
第131表　SK106出土　土器観察表 ……215
第132表　SK106出土　滑石製石鍋観察表 ……215
第133表　SK107出土　土器観察表 ……217
第134表　SK2出土　土器・磁器観察表 ……218
第135表　SK4出土　磁器観察表 ……219
第136表　SK5出土　土器・磁器観察表 ……220
第137表　SK6出土　土器・磁器観察表 ……221

## 下巻表目次(3)


第138表　SK12出土　土器・磁器観察表 ……223
第139表　畦畔1出土　土器・磁器観察表 ……227
第140表　SP61出土　磁器観察表 ……228
第141表　SP136出土　土器観察表 ……229
第142表　SP37出土　土器観察表 ……229
第143表　SP93出土　磁器観察表 ……230
第144表　SP169出土　磁器観察表 ……230
第145表　SP228出土　滑石製品観察表 ……231
第146表　SP269出土　陶器観察表 ……231
第147表　SP282出土　土器・磁器観察表 ……233
第148表　SP282出土　滑石製石鍋補修具観察表 ……233
第149表　SP303出土　土器観察表 ……233
第150表　SP319出土　土器観察表 ……235
第151表　SP319出土　滑石製石鍋補修具観察表 ……235
第152表　SP321出土　土器観察表 ……235
第153表　SP322出土　磁器観察表 ……236
第154表　SP733出土　金属製品観察表 ……237
第155表　SP1167出土　土器観察表 ……237
第156表　SP1200出土　土器観察表 ……238
第157表　SP1209出土　石製品観察表 ……238
第158表　SP1606出土　土製品観察表 ……239
第159表　SP184出土　土器観察表 ……240
第160表　SP355出土　磁器観察表 ……240
第161表　SS3出土　磁器観察表 ……243
第162表　SS3出土　滑石製石鍋観察表 ……243
第163表　SS1出土　土器・陶磁器観察表 ……248
第164表　SS1出土　土製品観察表 ……248
第165表　SS1出土　滑石製石鍋補修具観察表 ……249
第166表　SS1出土　滑石製石鍋観察表 ……249
第167表　SS1出土　石製品観察表 ……249
第168表　SS2出土　土器・磁器観察表 ……250
第169表　SS2出土　石製品観察表 ……250
第170表　ST3出土　土器・磁器観察表 ……252
第171表　SX1内掘立柱建物跡計測表 ……255
第172表　SX1出土　土器・磁器観察表 ……256
第173表　SX1出土　滑石製石鍋観察表 ……256
第174表　SX1出土　石製品観察表 ……256
第175表　TAK201202調査区2層出土　土器・磁器観察表 ……257
第176表　TAK201403調査区2層出土　土器・磁器観察表 ……258
第177表　TAK201403調査区2層出土　滑石製品観察表 ……259
第178表　TAK201403調査区2層出土　滑石製石鍋観察表 ……259
第179表　TAK201404調査区2層出土　土器・陶磁器観察表 …261
第180表　TAK201405調査区2層出土　土器・陶磁器観察表 …270
第181表　TAK201405調査区2層出土　土製品観察表 ……271
第182表　TAK201405調査区2層出土　滑石製品観察表 ……271
第183表　TAK201405調査区2層出土　ミニチュア石鍋観察表…271
第184表　TAK201405調査区2層出土　滑石加工素材観察表 …271
第185表　TAK201405調査区2層出土　滑石製石鍋観察表 ……271
第186表　TAK201405調査区2層出土　ガラス製品観察表 ……271
第187表　TAK201405調査区2層出土　金属製品観察表 ……271
第188表　TAK201406調査区2層出土　土器・陶磁器観察表 …277
第189表　TAK201406調査区2層出土　滑石製品観察表 ……277
第190表　TAK201406調査区2層出土　滑石加工素材観察表 …277
第191表　TAK201406調査区2層出土　金属製品観察表 ……277
第194表　TAK201403調査区3層出土　磁器観察表 ……279
第195表　TAK201403調査区3層出土　滑石製品観察表 ……279
第196表　TAK201403調査区3層出土　滑石加工素材観察表 …279
第197表　TAK201403調査区3層出土　金属製品観察表 ……279
第199表　TAK201405調査区3層出土　土器・陶磁器観察表 …292
第200表　TAK201405調査区3層出土　土製品観察表 ……293
第201表　TAK201405調査区3層出土　滑石製品観察表 ……293
第202表　TAK201405調査区3層出土　ミニチュア石鍋観察表…293
第203表　TAK201405調査区3層出土　滑石加工素材観察表 …293
第204表　TAK201405調査区3層出土　滑石製石鍋観察表 ……293
第205表　TAK201405調査区3層出土　金属製品観察表 ……293
第206表　TAK201406調査区3層出土　土器・陶器観察表 ……295
第207表　TAK201406調査区3層出土　金属製品観察表 ……295
第208表　TAK201407調査区3層出土　土器・磁器観察表 ……296
第209表　TAK201407調査区3層出土　滑石製石鍋補修具観察表…296
第210表　TAK201407調査区3層出土　滑石加工素材観察表 …297
第1表　長崎県内の高麗無釉陶器出土遺跡一覧……308
第2表　SP ①1338出土土器観察表 ……314


## 下巻図版目次(1)

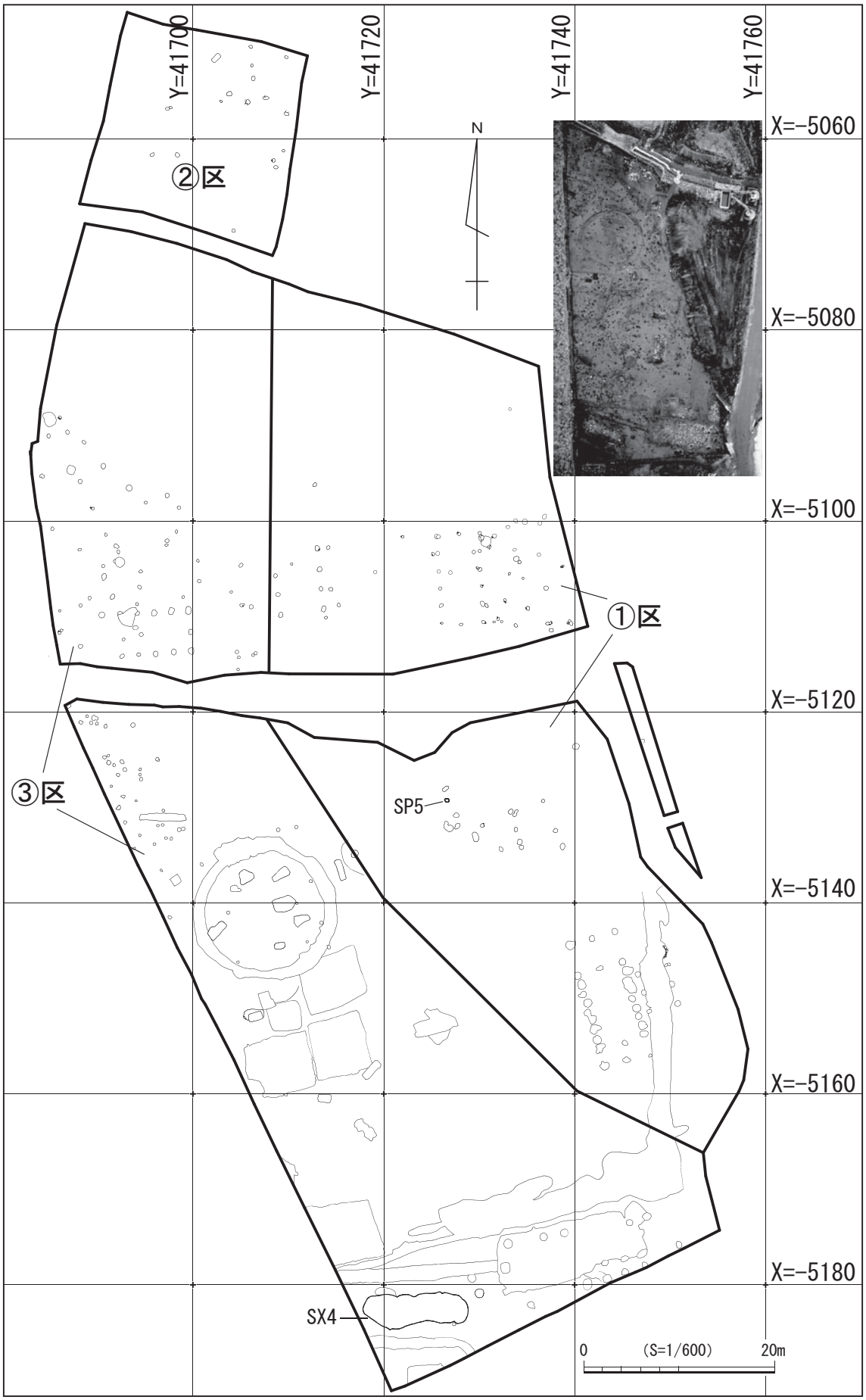

図版1　SA1出土遺物 ……7
図版2　SB6完掘状況　東から ……8
図版3　SB4完掘状況　北から ……11
図版4　SB6検出状況　北から ……13
図版5　SB6完掘状況　北から ……13
図版6　SC2床面検出状況　東から ……14
図版7　SC2掘り方完掘状況　東から ……14
図版8　SC3床面検出状況　北から ……16
図版9　SC3掘り方完掘状況　北から ……16
図版10　SC3出土遺物 ……16
図版11　SC4床面検出状況　東から ……18
図版12　SC4掘り方完掘状況　東から ……18
図版13　SD1掘り方完掘状況　東から ……18
図版14　SD1出土遺物 ……20
図版15　SD10遺物出土状況　北東から ……20
図版16　SD10完掘状況　南から ……20
図版17　SD10出土遺物－1 ……24
図版18　SD10出土遺物－2 ……26
図版19　SD11完掘状況　南から ……29
図版20　SD11土層断面　南から ……29
図版21　SD11出土遺物 ……30
図版22　SD12完掘状況　南から ……31
図版23　SD12出土遺物 ……32
図版24　SK10遺物出土状況　西から ……32
図版25　SK10出土遺物 ……33
図版26　SK29遺物出土状況　東から ……33
図版27　SK29出土遺物 ……34
図版28　SK30遺物出土状況　東から ……34
図版29　SK30出土遺物 ……36
図版30　SK37遺物出土状況　北から ……36
図版31　SK37出土遺物 ……37
図版32　SK42遺物出土状況　西から ……37
図版33　SK42出土遺物 ……37
図版34　SL4検出状況　北から ……38
図版35　SL4検出状況　北東から ……38
図版36　SL4出土遺物 ……38
図版37　SL1検出状況　北から ……39
図版38　SL1出土遺物 ……39
図版39　SP5遺物出土状況　南から ……40
図版40　SP5出土遺物 ……40
図版41　SP111　検出状況　北から ……41
図版42　SP111出土遺物 ……41
図版43　SP201出土遺物 ……42
図版44　SP250出土遺物 ……42

# 下巻図版目次(2)

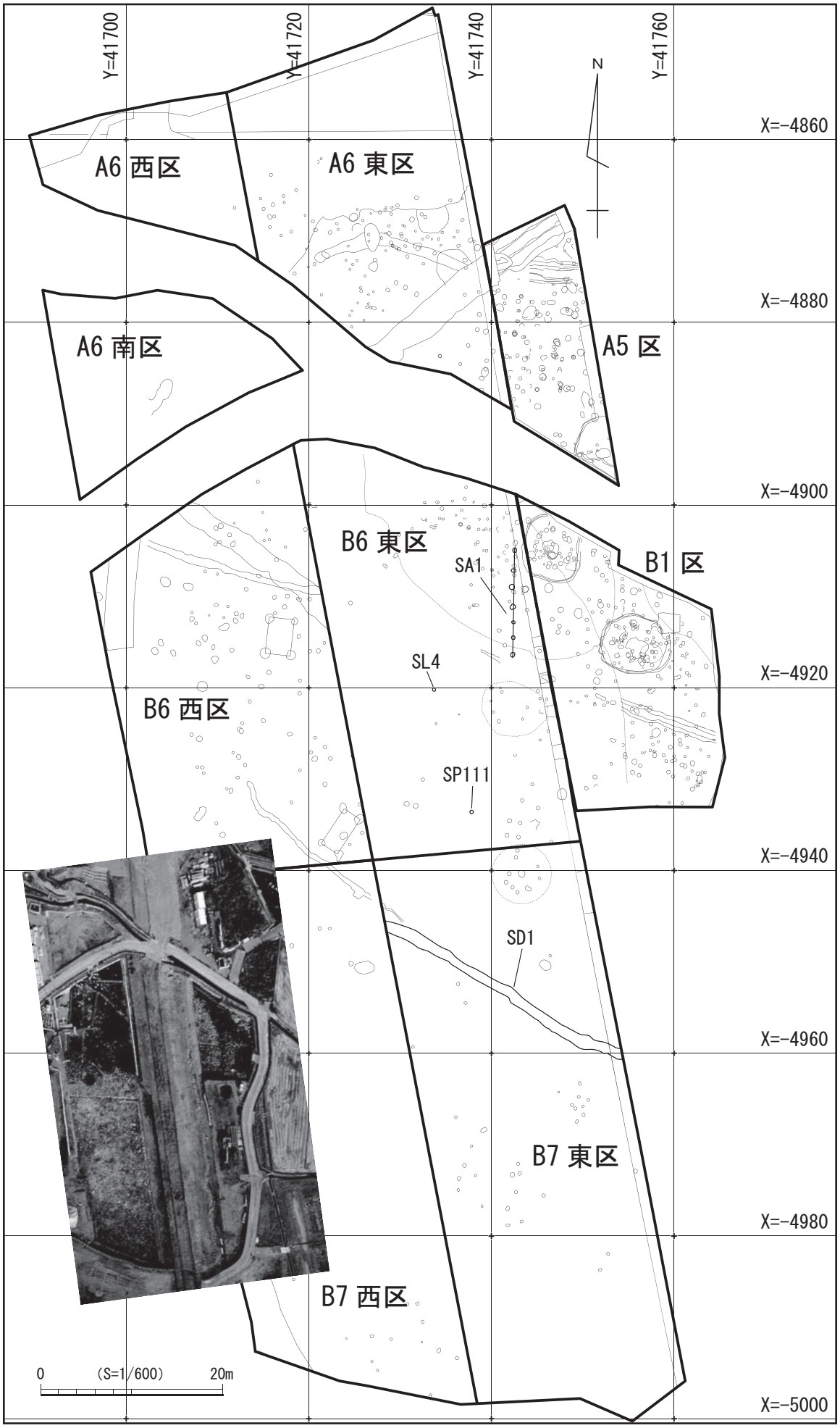

図版45　SP381出土遺物 ……43
図版46　SP611遺物出土状況　東から ……44
図版47　SP611出土遺物 ……44
図版48　SP664遺物出土状況　東から ……45
図版49　SP664出土遺物 ……45
図版50　SP680遺物出土状況　南東から ……45
図版51　SP680出土遺物 ……46
図版52　SP701遺物出土状況　東から ……46
図版53　SP701出土遺物 ……46
図版54　SP704出土遺物 ……47
図版55　SP960出土遺物 ……48
図版56　SP1488出土遺物 ……48
図版57　SS2検出状況　東から ……49
図版58　SS2半截状況　北から ……49
図版59　SS2出土遺物 ……50
図版60　ST5半截状況　南から ……50
図版61　ST5完掘状況　北から ……50
図版62　SU11遺物出土状況　東から ……51
図版63　SU11完掘状況　東から ……51
図版64　SU11出土遺物 ……53
図版65　SX4完掘状況　南から ……54
図版66　SX4完掘状況　東から ……54
図版67　SX4出土遺物 ……54
図版68　SX4検出状況　北から ……55
図版69　SX4半截状況　北から ……55
図版70　SX4出土遺物 ……55
図版71　NR1完掘状況　北から ……56
図版72　NR1遺物出土状況 ……56
図版73　NR1出土遺物 ……56
図版74　TAK201202調査区2層　出土遺物 ……57
図版75　TAK201403調査区2層　出土遺物 ……57
図版76　TAK201404調査区2層　出土遺物 ……59
図版77　TAK201405調査区2層　出土遺物 ……61
図版78　TAK201406調査区2層　出土遺物 ……64
図版79　TAK201407調査区2層　出土遺物 ……65
図版80　TAK201202調査区3層　出土遺物 ……67
図版81　TAK201404調査区3層　出土遺物－1 ……70
図版82　TAK201404調査区3層　出土遺物－2 ……72
図版83　TAK201404調査区3層　出土遺物－3 ……73
図版84　TAK201405調査区3層　出土遺物－1 ……77
図版85　TAK201405調査区3層　出土遺物－2 ……79
図版86　TAK201406調査区3層　出土遺物－1 ……82
図版87　TAK201406調査区3層　出土遺物－2 ……84
図版88　TAK201407調査区3層　出土遺物 ……86
図版1　竹松遺跡出土鉄鉢形土器 ……88
図版2　竹松遺跡出土灯火具 ……89
図版89　SA1完掘状況　北から ……99
図版90　SA2完掘状況　東から ……99
図版91　SA3検出状況　北から ……99
図版92　SB1検出状況　北から ……103
図版93　SB2完掘状況　東から ……106
図版94　SB2出土遺物 ……106
図版95　SB3出土遺物 ……108
図版96　SB8検出状況南から ……108
図版97　SB8完掘状況南から ……108
図版98　SB8出土遺物 ……110
図版99　SB9検出状況　西から ……113
図版100　SB9完掘状況　南から ……113
図版101　SB9出土遺物 ……113
図版102　SB1検出状況東から ……113
図版103　SB1完掘状況東から ……113
図版104　SB1出土遺物 ……116
図版105　SB2検出状況西から ……116
図版106　SB2出土遺物 ……121
図版107　SB3完掘状況西から ……122
図版108　SB3出土遺物 ……122
図版109　SB4完掘状況北から ……124
図版110　SB5検出状況東から ……126
図版111　SB5出土遺物 ……127
図版112　SB2検出状況東から ……129
図版113　SB2完掘状況西から ……129
図版114　SB1検出状況西から ……132
図版115　SB1完掘状況西から ……132
図版116　SB2検出状況北から ……133
図版117　SB2完掘状況北から ……133
図版118　SB5完掘状況北から ……133
図版119　SB5出土遺物 ……135
図版120　SD2完掘状況東から ……136
図版121　SD2断面　東から ……136
図版122　SD2出土遺物－1 ……138
図版123　SD2出土遺物－2 ……138
図版124　SD4検出状況　東から ……140
図版125　SD4断面　東から ……140
図版126　SD11検出状況西から ……141
図版127　SD11完掘状況西から ……141
図版128　SD11出土遺物 ……141
図版129　SD26完掘状況北から ……142
図版130　SD26断面北から ……142
図版131　SD26出土遺物－1 ……144
図版132　SD26出土遺物－2 ……145
図版133　SD21完掘状況東から ……147
図版134　SD4完掘状況南から ……149
図版135　SD4出土遺物 ……149
図版136　SD6ベルト1南から ……151
図版137　SD6ベルト4試料採取状況北から ……151
図版138　SD6ベルト5南から ……152
図版139　SD6ベルト6南から ……152
図版140　SD6ベルト8南から ……152
図版141　SD6ベルト9西から ……152
図版142　SD6ベルト北西コーナー西から ……152
図版143　SD6南西コーナー(2013年度調査)北から ……152
図版144　SD6完掘状況南から ……152
図版145　SD6遺物出土状況(2012年度調査) ……152
図版146　SD6　上層出土遺物 ……154
図版147　SD6　中層出土遺物－1 ……156
図版148　SD6　中層出土遺物－2 ……158
図版149　SD6　中層出土遺物－3 ……160
図版150　SD6　中層出土遺物－4 ……162
図版151　SD6　下層出土遺物－1 ……165
図版152　SD6　下層出土遺物－2 ……167
図版153　SD6　下層出土遺物－3 ……169
図版154　SD6　下層出土遺物－4 ……171
図版155　SD6　下層出土遺物－5 ……172
図版156　SD6　一括取り上げ遺物 ……176

# 下巻図版目次(3)

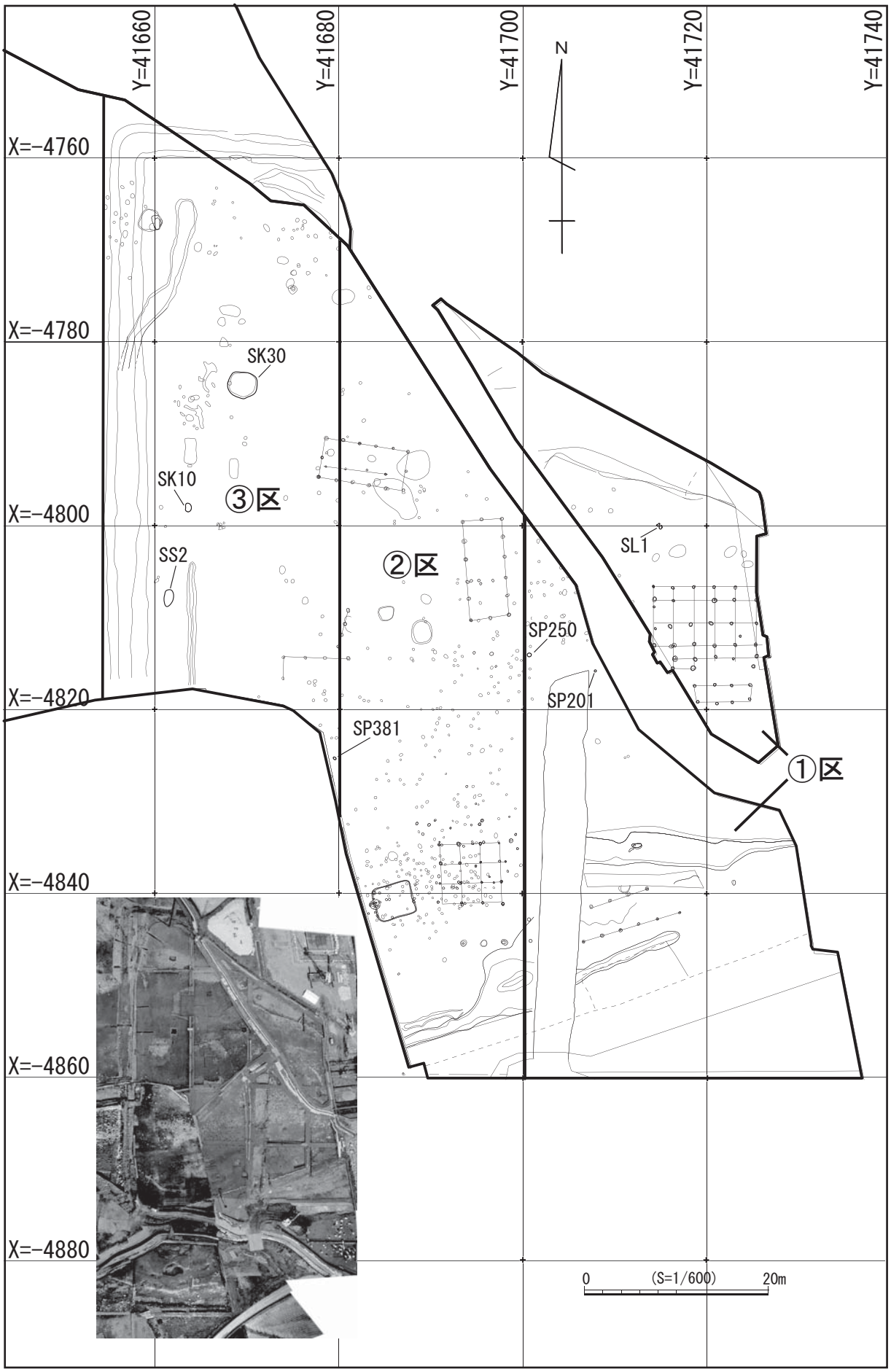

図版157　SD6　上層出土遺物 ……178
図版158　SD6　中層出土遺物 ……180
図版159　SD6　下層出土遺物 ……181
図版160　SD6　一括取り上げ遺物－1 ……183
図版161　SD6　一括取り上げ遺物－2 ……184
図版162　SD6　上層出土遺物 ……187
図版163　SD6　中層出土遺物 ……190
図版164　SD6　下層出土遺物－1 ……193
図版165　SD6　下層出土遺物－2 ……194
図版166　SD6　一括取り上げ遺物－1 ……197
図版167　SD6　一括取り上げ遺物－2 ……198
図版168　SD7検出状況　東から ……201
図版169　SD7完掘状況　西から ……201
図版170　SD7完掘状況　西から ……201
図版171　SD7出土遺物 ……202
図版172　SD8完掘状況　南から ……203
図版173　SD9完掘状況　西から ……204
図版174　SD9出土遺物 ……205
図版175　SD5完掘状況　右が北 ……206
図版176　SD5土層堆積状況 ……206
図版177　SD5出土遺物 ……208
図版178　SD9検出状況　東から ……209
図版179　SD9完掘状況　東から ……209
図版180　SD9出土遺物 ……210
図版181　SF1検出状況　東から ……211
図版182　SF1遺物出土状況－1　東から ……211
図版183　SF1遺物出土状況 - 2　北から ……211
図版184　SF1完掘状況　東から ……211
図版185　SF1出土遺物 ……214
図版186　SK106半截状況　南から ……214
図版187　SK106出土遺物 ……215
図版188　SK107半截状況　東から ……216
図版189　SK107完掘状況　東から ……216
図版190　SK107出土遺物 ……217
図版191　SK2半截状況　北東から ……217
図版192　SK2出土遺物 ……217
図版193　SK4半截状況　北東から ……218
図版194　SK4完掘状況　北東から ……218
図版195　SK4出土遺物 ……219
図版196　SK5土層観察状況　南東から ……219
図版197　SK5出土遺物 ……220
図版198　SK6土層観察状況　南東から ……220
図版199　SK6完掘状況　北から ……220
図版200　SK6出土遺物 ……222
図版201　SK11完掘状況　東から ……222
図版202　SK12半截状況　東から ……223
図版203　SK12出土遺物 ……223
図版204　SK19完掘状況　東から ……224
図版205　畦畔1北側部分検出状況　西から ……226
図版206　畦畔1南側部分検出状況　西から ……226
図版207　畦畔1全景　左が北 ……226
図版208　畦畔1遺物出土状況　西から ……226
図版209　畦畔1出土遺物 ……227
図版210　SP61出土遺物 ……228
図版211　SP136出土遺物 ……229
図版212　SP37出土遺物 ……229
図版213　SP93出土遺物 ……230
図版214　SP169出土遺物 ……230
図版215　SP228出土遺物 ……231
図版216　SP269出土遺物 ……231
図版217　SP282出土遺物 ……232
図版218　SP303出土遺物 ……233
図版219　SP319出土遺物 ……234
図版220　SP321出土遺物 ……235
図版221　SP322出土遺物 ……236
図版222　SP733　遺物出土状況　東から ……236
図版223　SP733出土遺物 ……237
図版224　SP1167出土遺物 ……237
図版225　SP1200遺物出土状況　東から ……238
図版226　SP1200出土遺物 ……238
図版227　SP1209出土遺物 ……239
図版228　SP1606出土遺物 ……239
図版229　SP184出土遺物 ……240
図版230　SP355出土遺物 ……241
図版231　SS3検出状況　東から ……242
図版232　SS3完掘状況　東から ……242
図版233　SS3出土遺物 ……243
図版234　SS1検出状況　北から ……243
図版235　SS1石組み　北から ……243
図版236　SS1石組み　部分　北から ……243
図版237　SS1出土遺物－1 ……247
図版238　SS1出土遺物－2 ……248
図版239　SS2半截状況　西から ……249
図版240　SS2出土遺物－1 ……250
図版241　SS2出土遺物－2 ……250
図版242　ST3完掘状況　東から ……251
図版243　ST3出土遺物 ……252
図版244　SX1検出状況　東から ……252
図版245　SX1完掘状況　西から ……255
図版246　SX1完掘状況　左が北 ……255
図版247　SX1出土遺物 ……256
図版248　TAK201202調査区2層　出土遺物 ……257
図版249　TAK201403調査区2層　出土遺物 ……259
図版250　TAK201404調査区2層　出土遺物 ……260
図版251　TAK201405調査区2層　出土遺物－1 ……263
図版252　TAK201405調査区2層　出土遺物－2 ……265
図版253　TAK201405調査区2層　出土遺物－3 ……267
図版254　TAK201405調査区2層　出土遺物－4 ……269
図版255　TAK201406調査区2層　出土遺物 ……276
図版257　TAK201403調査区3層　出土遺物 ……278
図版259　TAK201405調査区3層　出土遺物－1 ……283
図版260　TAK201405調査区3層　出土遺物－2 ……285
図版261　TAK201405調査区3層　出土遺物－3 ……287
図版262　TAK201405調査区3層　出土遺物－4 ……289
図版263　TAK201405調査区3層　出土遺物－5 ……291
図版264　TAK201406調査区3層　出土遺物 ……295
図版265　TAK201407調査区3層　出土遺物 ……297
図版1　SD6(区画溝)と SD6内遺構(3年分の合成写真) ……299
図版2　筏遺跡Ｂ　調査風景 ……300
図版3　筏遺跡Ｂ　区画溝断面 ……300
図版4　筏遺跡Ｂ　区画溝全景 ……300
図版5　完掘状況　西から ……301
図版6　土層断面　東から ……301
図版7　検出状況　北西から ……301
図版8　切断 ……310
図版9　折り取り ……310
図版10　削り ……310
図版11　刻み ……310
図版12　溝 ……310
図版13　穿孔 ……310
図版14　こすり ……311
図版15　竹松遺跡出土鉄絵青磁蓋 ……312
図版16　珍山里窯跡出土盒 ……312
図版17　『竹松遺跡Ⅱ』SP ①1338出土遺物 ……313



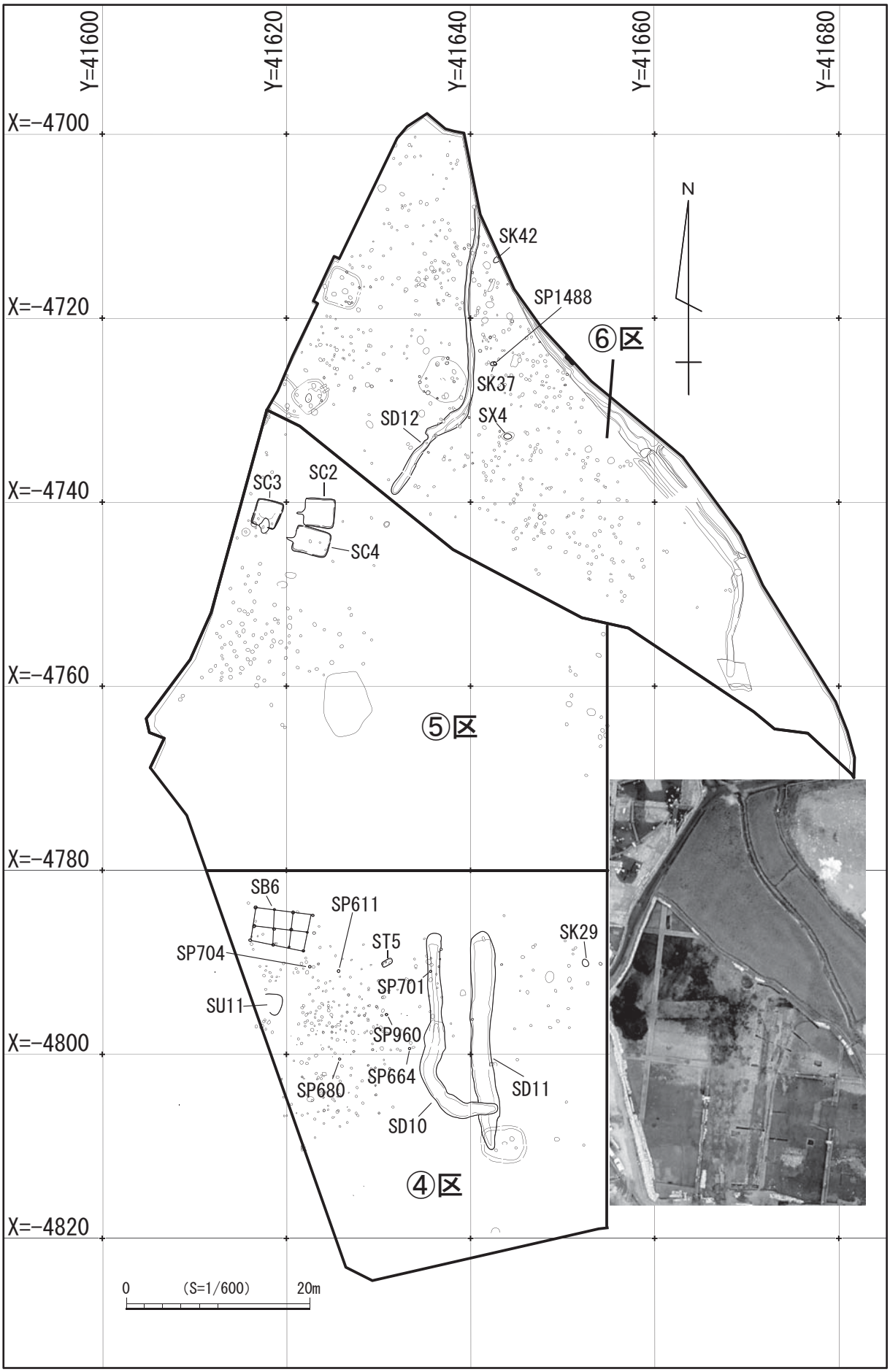

第1図　TAK201403調査区①・②・③区古代遺構配置図(1/600)



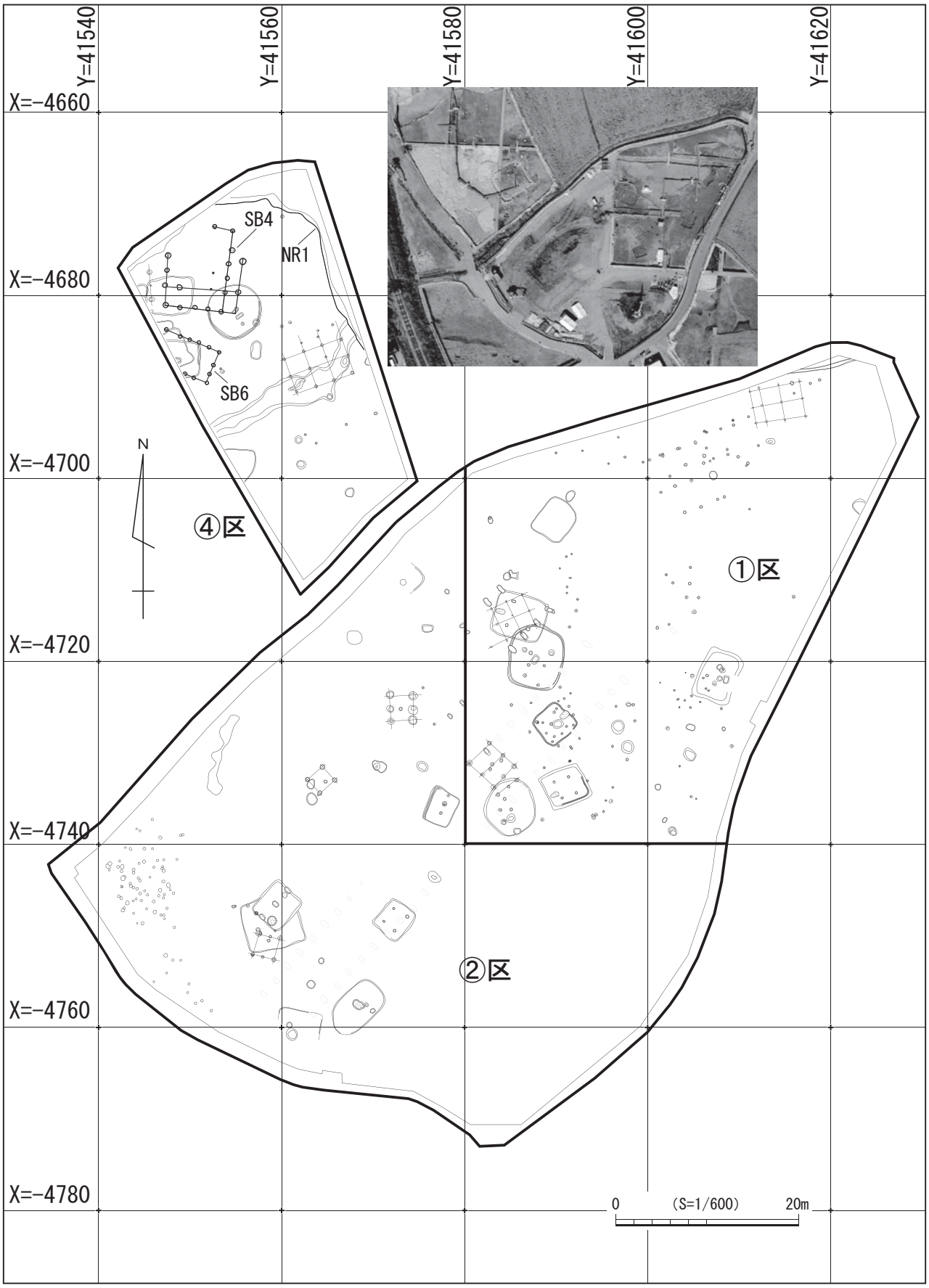

第2図　TAK201404調査区古代遺構配置図(S=1/600)




第3図　TAK201405調査区①・②・③区古代遺構配置図-1(1/600)




第4図　TAK201405調査区④・⑤・⑥区古代遺構配置図-2(S=1/600)




第5図　TAK201407調査区①・②・④区古代遺構配置図(S=1/600)

## 5　古代

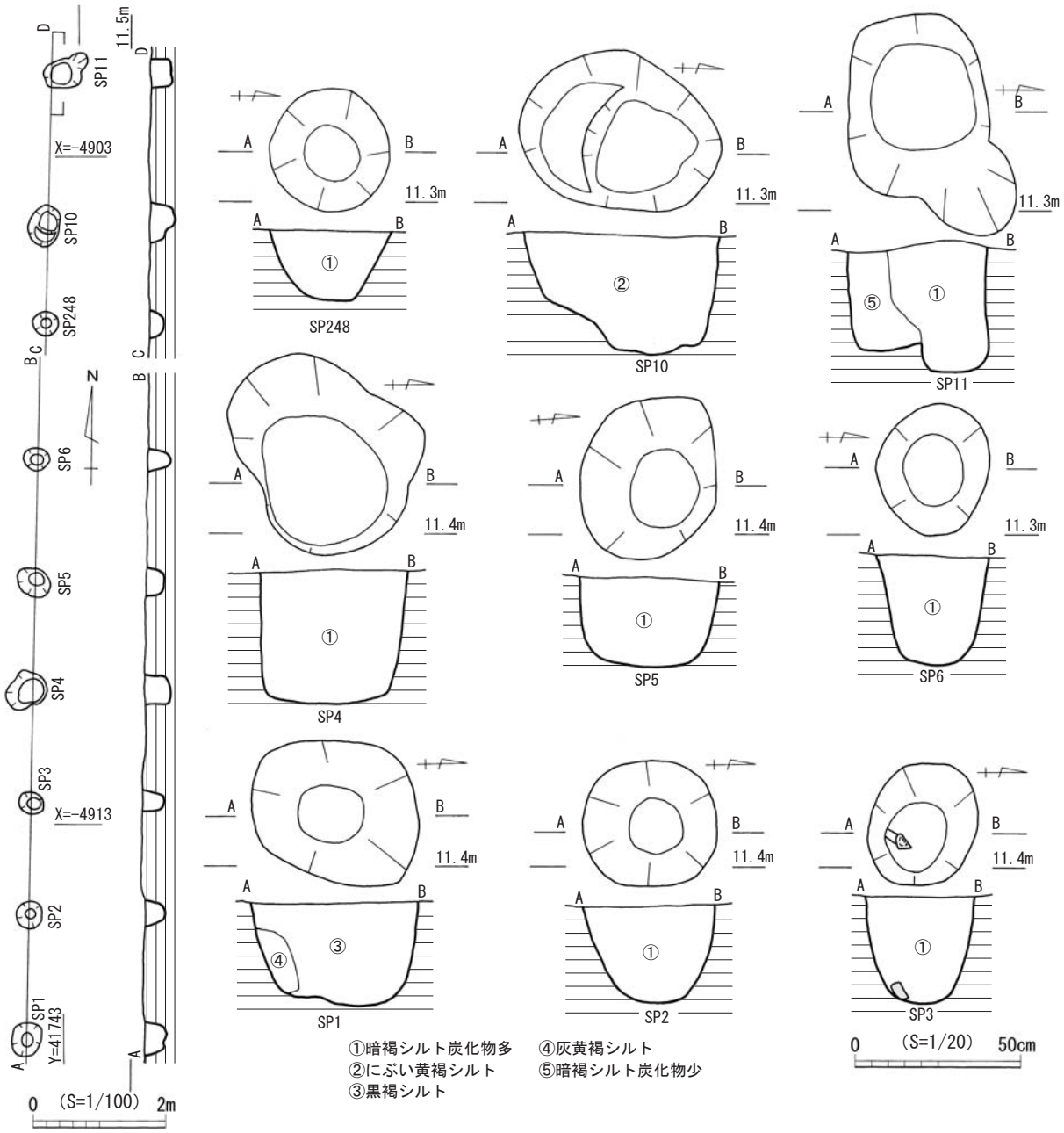
古代の遺構としては柵列、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑、柱穴などを検出したが、TAK201405調査区に集中が見られた。

本報告の時期区分と器種名については『竹松遺跡Ⅲ』を踏襲し、古代の始まりを6世紀末、終わりを11世紀第3四半期までとした。また、土師器の高台付きの杯・椀の名称に関しては8世紀以前のものを杯とし、9世紀以降のものを椀とした。

### (1)柵列(SA)

今回報告する柵列は1基である。

**① TAK201404調査区 B6東区　SA1(第6図、第1表)**




第6図　SA1平・断面図(S＝1/100)、柱穴平・断面図(S＝1/20)

大調査区201404の小調査区B6東区9074グリッド3層からプランを検出した。8間分の柱穴が14.6mの長さで列を成す。柱間は1.4m～2.2m、柱穴径は40cm～60cmの楕円形で深さは20cm～40cmである。主軸はN4°Eである。調査後のピットの並びから遺構を復元したために遺構の写真は撮っていない。

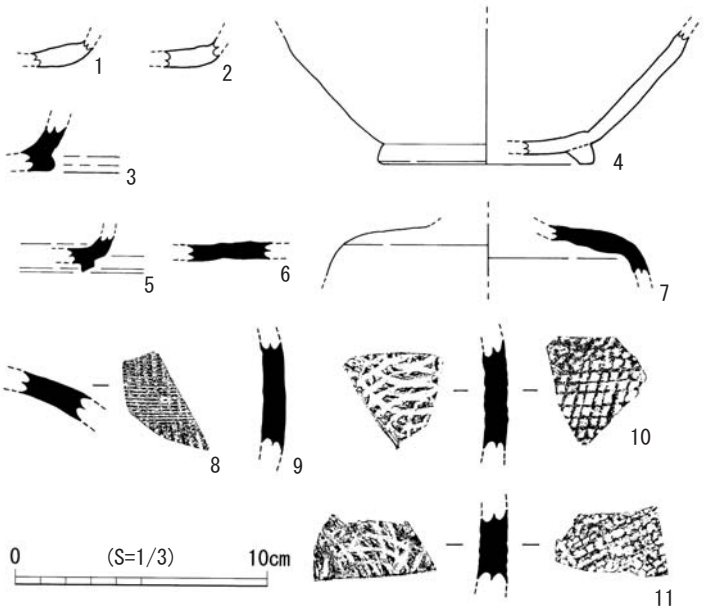
**第1表　柵列(SA)計測表**

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 主軸方向 | 柱間数 | 全長(m) |
|---|---|---|---|---|---|
| TAK201404　SA1 | 6 | ― | N4°E | 8 | 14.6 |

**TAK201404調査区B6東区　SA1出土遺物(第7図、図版1、第2表)**

**1・2**は土師器杯底部である。小片のために計測はできなかった。**1**はSP6から、**2**はSP10から出土した。**3・4**は土師器椀底部である。**3**は小片のために計測はできなかった。SP6から出土した。**4**は内面に横位のヘラミガキが施され平滑である。SP3から出土した。**5**は須恵器杯底部である。底部端よりわずかに内側に断面方形の高台を貼り付ける。SP11から出土した。**6**も高台が付く須恵器杯底部である。SP8より出土した。**7**は須恵器壺蓋である。SP11より出土。**8**は須恵器壺体部である。外面にはカキメが施される。SP11より出土。**9～11**は甕体部である。**9**はP11から出土した。**10**はP13から出土した。外面には格子タタキ目文が内面には青海波文が見られる。**11**はP4から出土した。外面には格子タタキ目文が内面には青海波文が見られる。**4**、**5**の遺物からSA1の年代は8世紀後半と思われる。

図版1　SA1出土遺物




第7図　SA1出土遺物(S＝1/3)

第2表　SA1出土　土器観察表

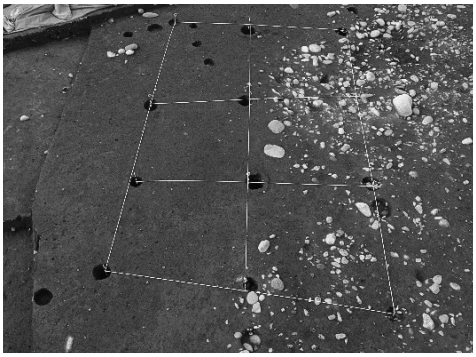
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 1 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.1) | — | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | |
| 2 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.2) | — | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　雲母　赤色粒子 | |
| 3 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.8) | — | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　長石 | |
| 4 | 土師器　椀 | 底部 | — | (5.3) | (8.2) | — | ミガキ | 橙色 | 橙色 | 良好 | 石英　角閃石 | |
| 5 | 須恵器　杯 | 底部 | — | (1.1) | — | | — | 黄灰色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 6 | 須恵器　杯 | 底部 | — | (0.7) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | 回転ヘラケズリ |
| 7 | 須恵器　壺蓋 | 天井部 | — | (2.3) | — | — | — | にぶい黄橙色 | 灰黄褐色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 8 | 須恵器　壺蓋 | 体部 | — | (1.9) | — | — | — | 褐灰色 | 褐灰色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 9 | 須恵器　甕 | 体部 | — | (4.4) | — | — | — | 黒褐色 | 褐灰色 | 良好 | 石英　黒色粒子 | |
| 10 | 須恵器　甕 | 体部 | — | (4.4) | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 11 | 須恵器　甕 | 体部 | — | (2.9) | — | — | — | 褐灰色 | 褐灰色 | 良好 | 石英　長石 | |

## (2)掘立柱建物跡(SB)

今回報告する掘立柱建物跡は3棟である。

### ① TAK201405調査区④区　SB6(第8図、図版2、第3表)

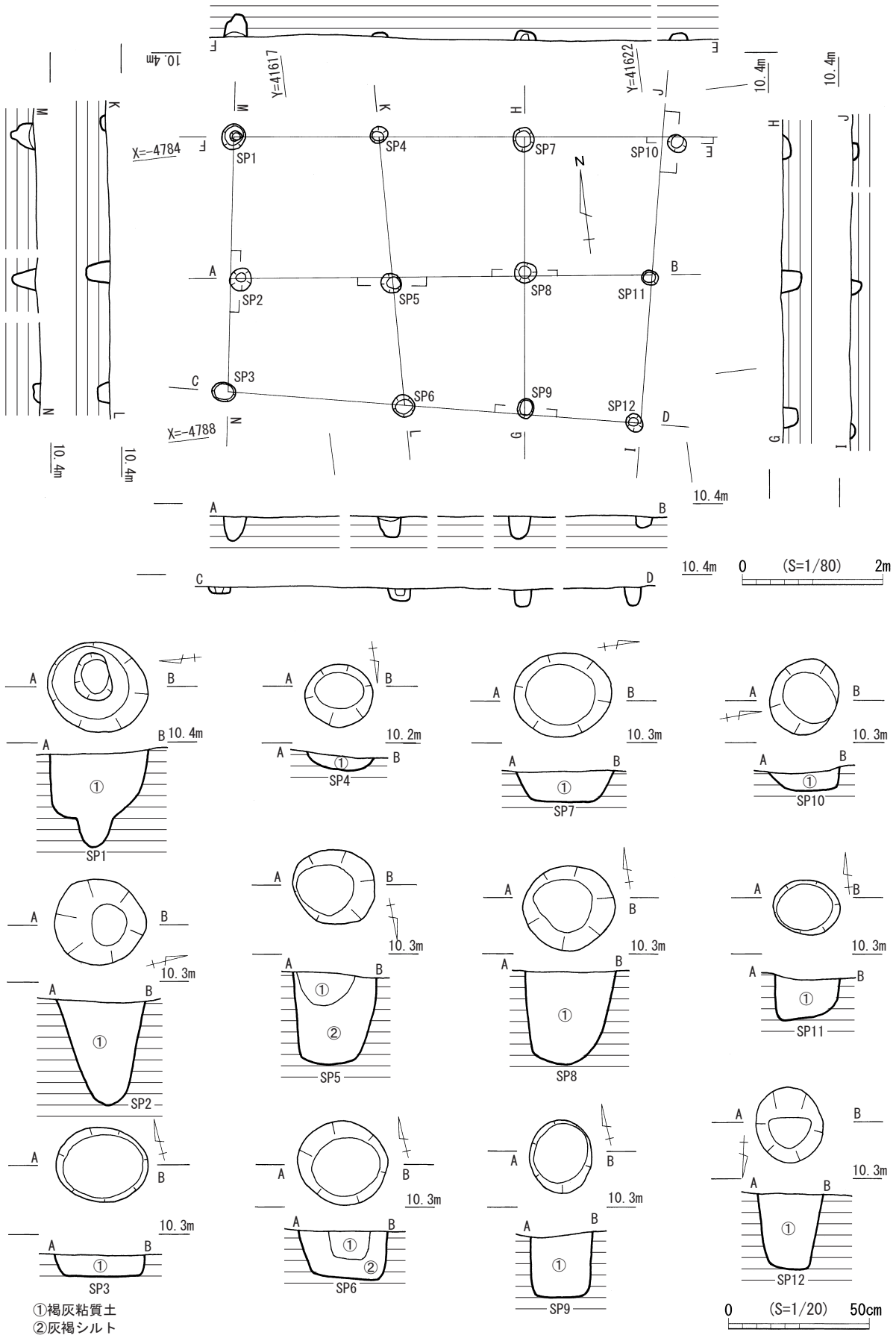
大調査区201405の小調査区④区7860・7862グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行3間の総柱建物で主軸はN82°Eである。柱穴径は25cm～35cmのほぼ円形で覆土は単層であるが柱痕が残るものもある。出土遺物は無かったが15mほど東には10世紀代の溝が2本あり、南5mには須恵器大甕の集積があることから、当遺構も古代に属すると判断した。



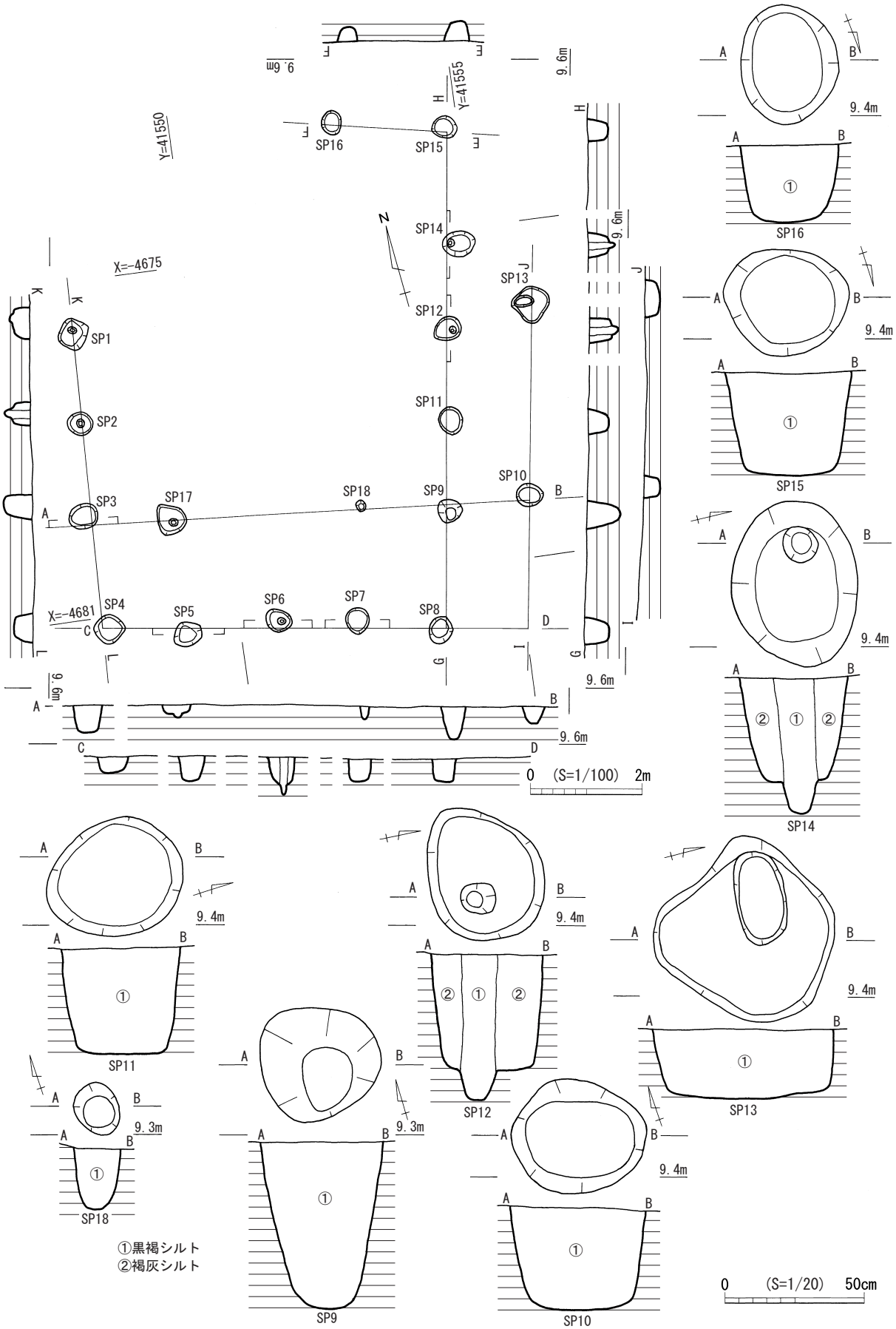
図版2　SB6　完掘状況(東から)

### ② TAK201407調査区④区　SB4(第9・10図、図版3、第3表)

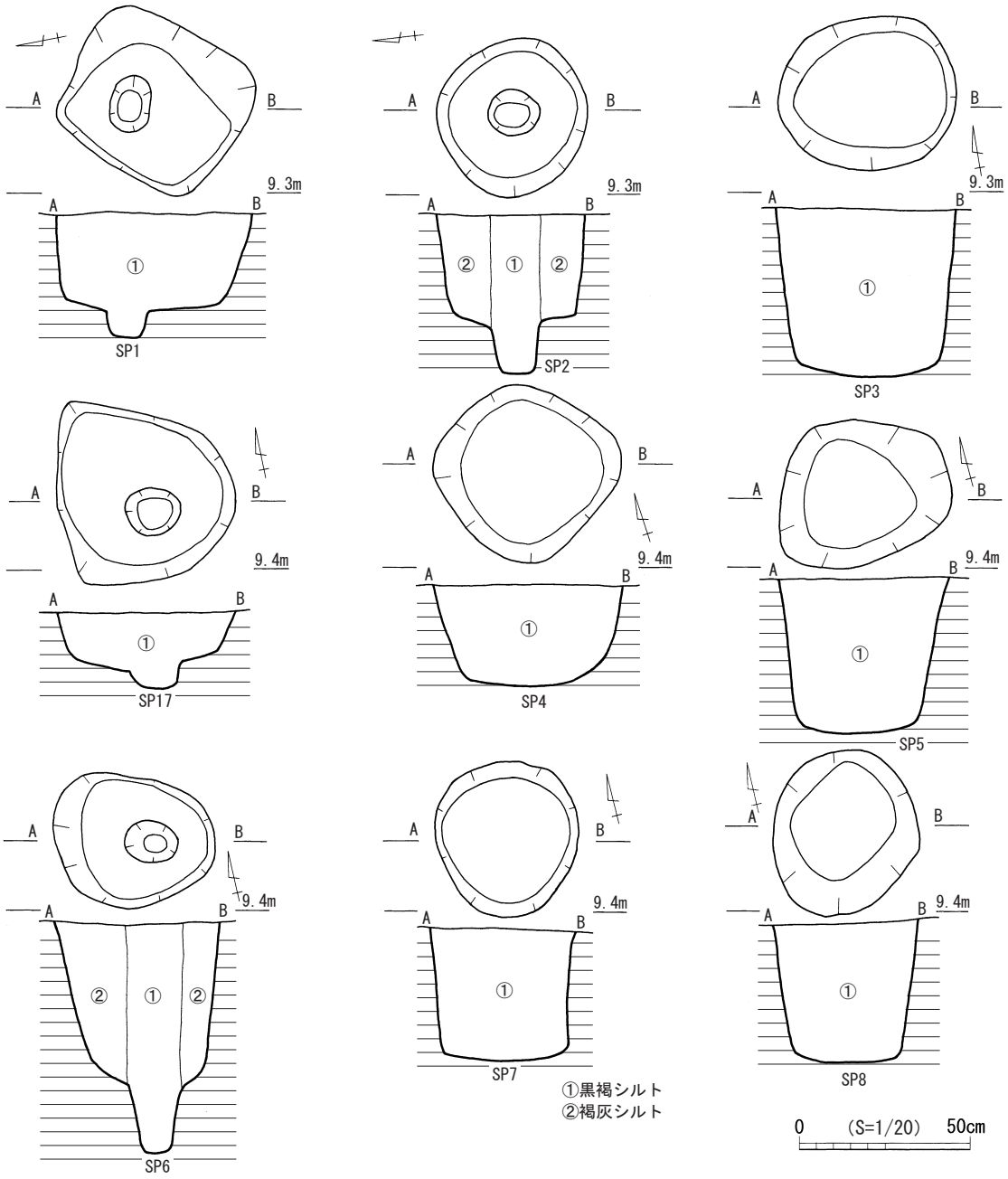
大調査区201407の小調査区④区6654・6854グリッド3層からプランを検出した。梁行4間、桁行5間の側柱建物で主軸はN9°Eである。東に廂を持つ。柱穴径は10cm～60cmのほぼ円形で覆土は単層である。柱径に合わせた段掘りが残るものもある。出土遺物は無かった。




第8図　SB6平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)



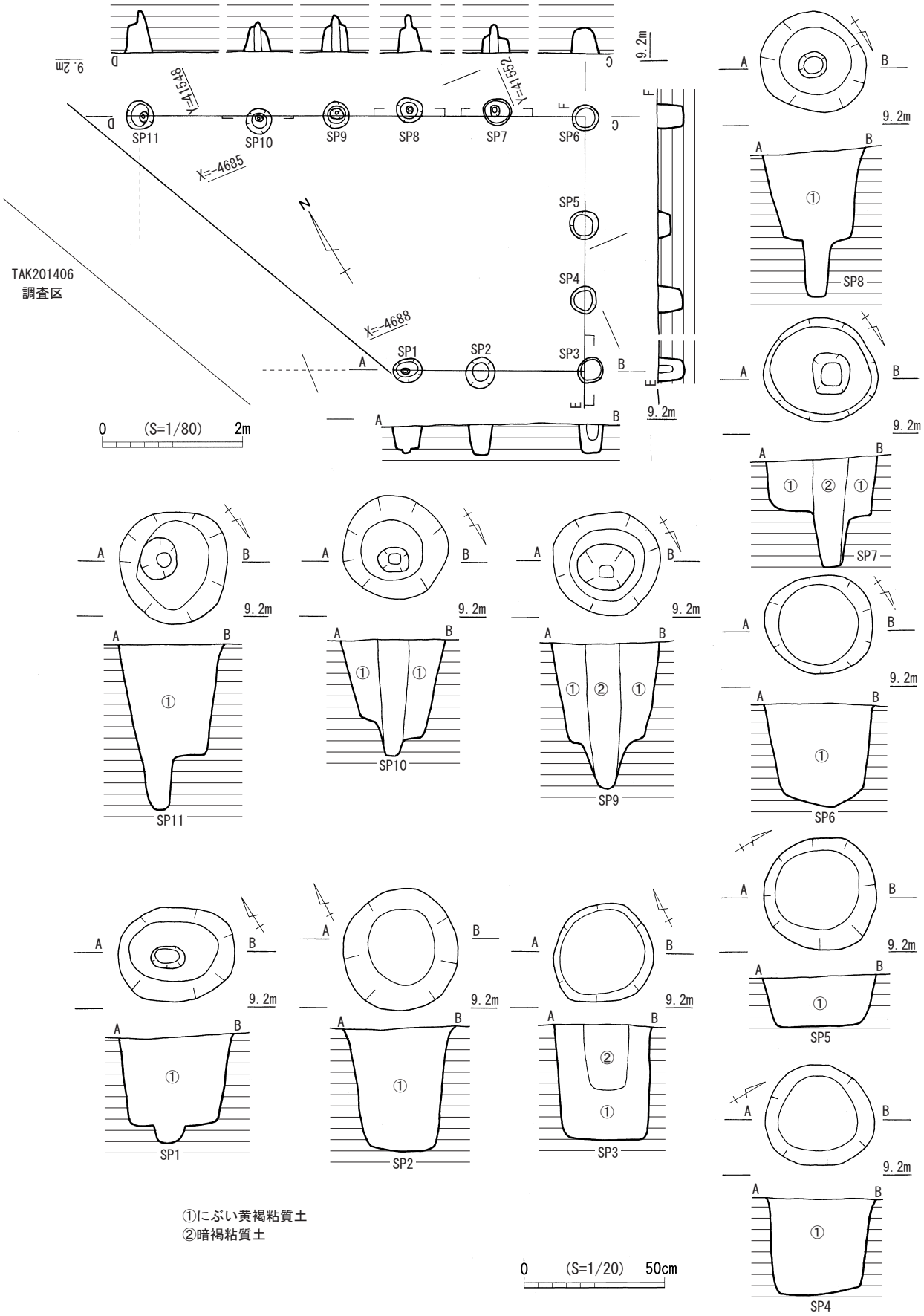

第9図　SB4平・断面図(S＝1/100)、柱穴平・断面図(S＝1/20)




第10図　SB4柱穴平・断面図(S＝1/20)

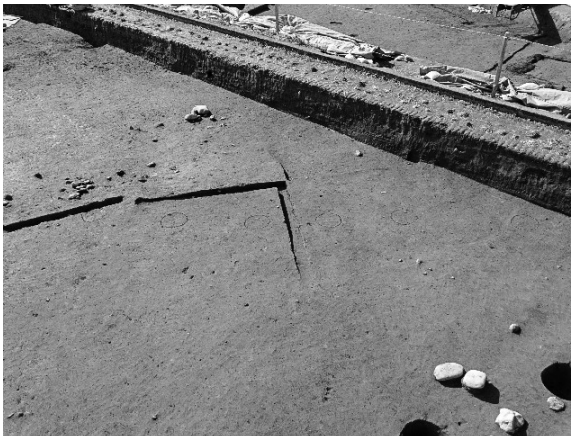
図版3　SB4完掘状況(北から)

③ TAK201407調査区④区　SB6（第11図、図版4・5、第3表）




第11図　SB6平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図（S＝1/20）

大調査区201407の小調査区④区6854グリッド3層からプランを検出した。梁行は3間であるが、西側が調査区外に延びており確認できた桁行は5間の側柱建物である。主軸はN67°Wである。柱穴径は38cm～45cmのほぼ円形で覆土は単層である。柱痕が残るものもある。出土遺物は無かった。



図版4　SB6　検出状況(北から)

図版5　SB6　完掘状況(北から)

第3表　掘立柱建物跡(SB)計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 主軸方向 | 柱間間数 | 規模(m、㎡) | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 梁間 | 桁間 | 梁行 | 桁行 | 身舎面積 | |
| TAK201405　SB6 | 8 | 2 | N82°E | 2×3 | 1.8～2.1 | 1.7～2.6 | 3.6～4.1 | 5.9～6.4 | 23.8 | 総柱 |
| TAK201407　SB4 | 9・10 | 3 | N9°E | 4×5 | 1.5～2.0 | 1.7～2.2 | 6.2 | 9.5 | 63.1 | 側柱　東に廂 |
| TAK201407　SB6 | 11 | 4.5 | N67°W | 3×(5) | 1.0～1.6 | 1.0～1.6 | 3.6 | (6.4) | (23.0) | 側柱　西が調査区外に延びる |

(3)竪穴建物跡(SC)

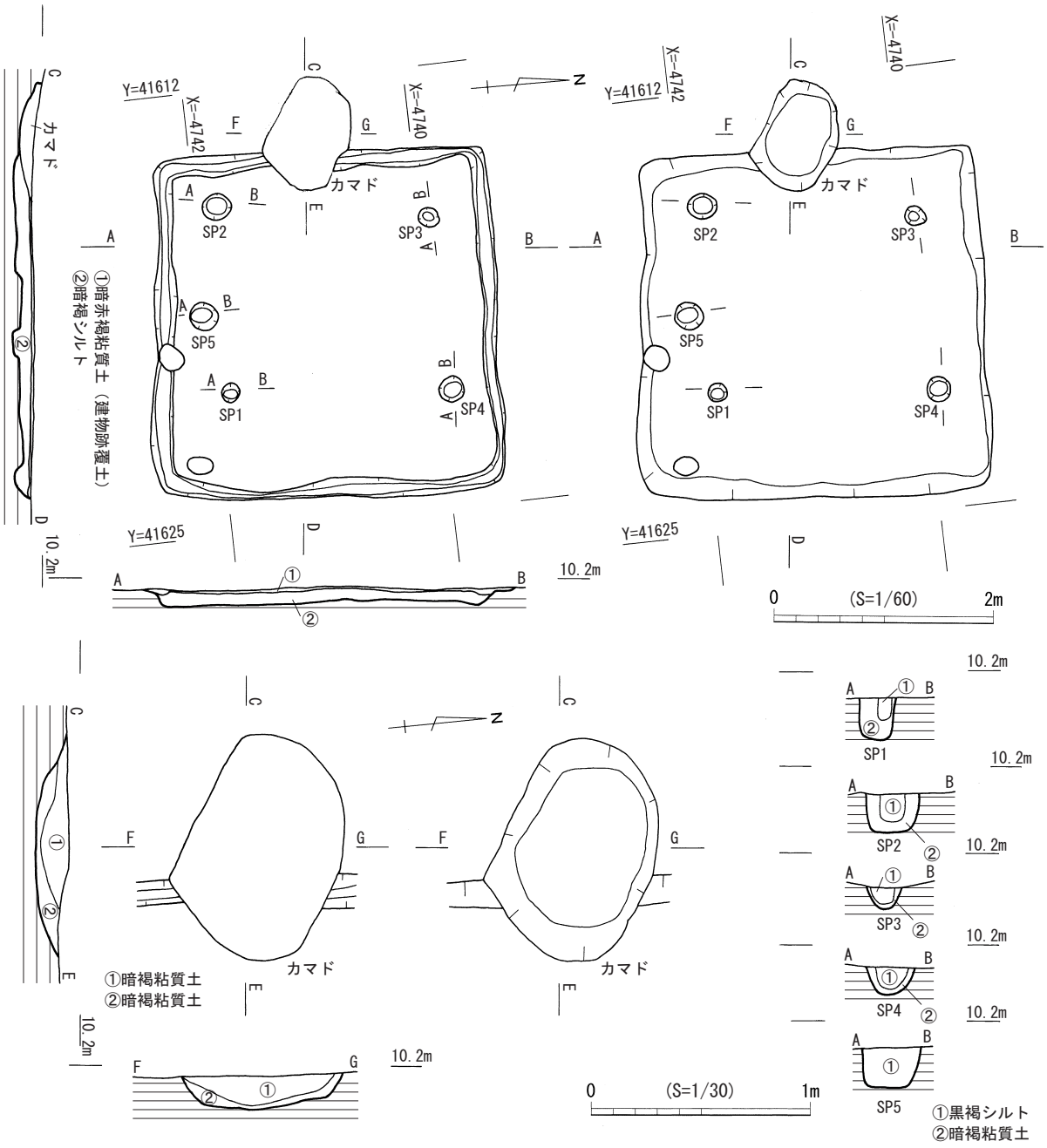
今回報告する竪穴建物跡は3棟である。大調査区201405の小調査区⑤区7462グリッドからまとまって検出した。いずれも削平が激しく壁の立ち上がりはわずかであった。

①TAK201405調査区⑤区　SC2(第12図、図版6・7、第5表)

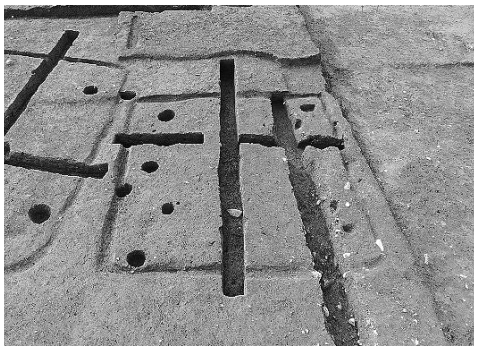
大調査区201405の小調査区⑤区7262・7462グリッド4層からプランを検出した。長軸(西－東)3.2m、短軸(北－南)3.1mの方形で、掘方底までの深さは20cmを測る。削平が激しいが、西壁中央にカマドを、四隅には柱穴を確認した。壁際には周溝が巡る。出土遺物は無かった。南にはSC4が接する。

SC2－SL1(第12図)

削平により上部構造は残存しておらず硬化した火床も確認できなかったことから、火床面よりもさらに下での確認となった。掘方断面は皿状を呈する。覆土は焼土粒を含む粘質土で、カマドの構築材の一部と思われる。



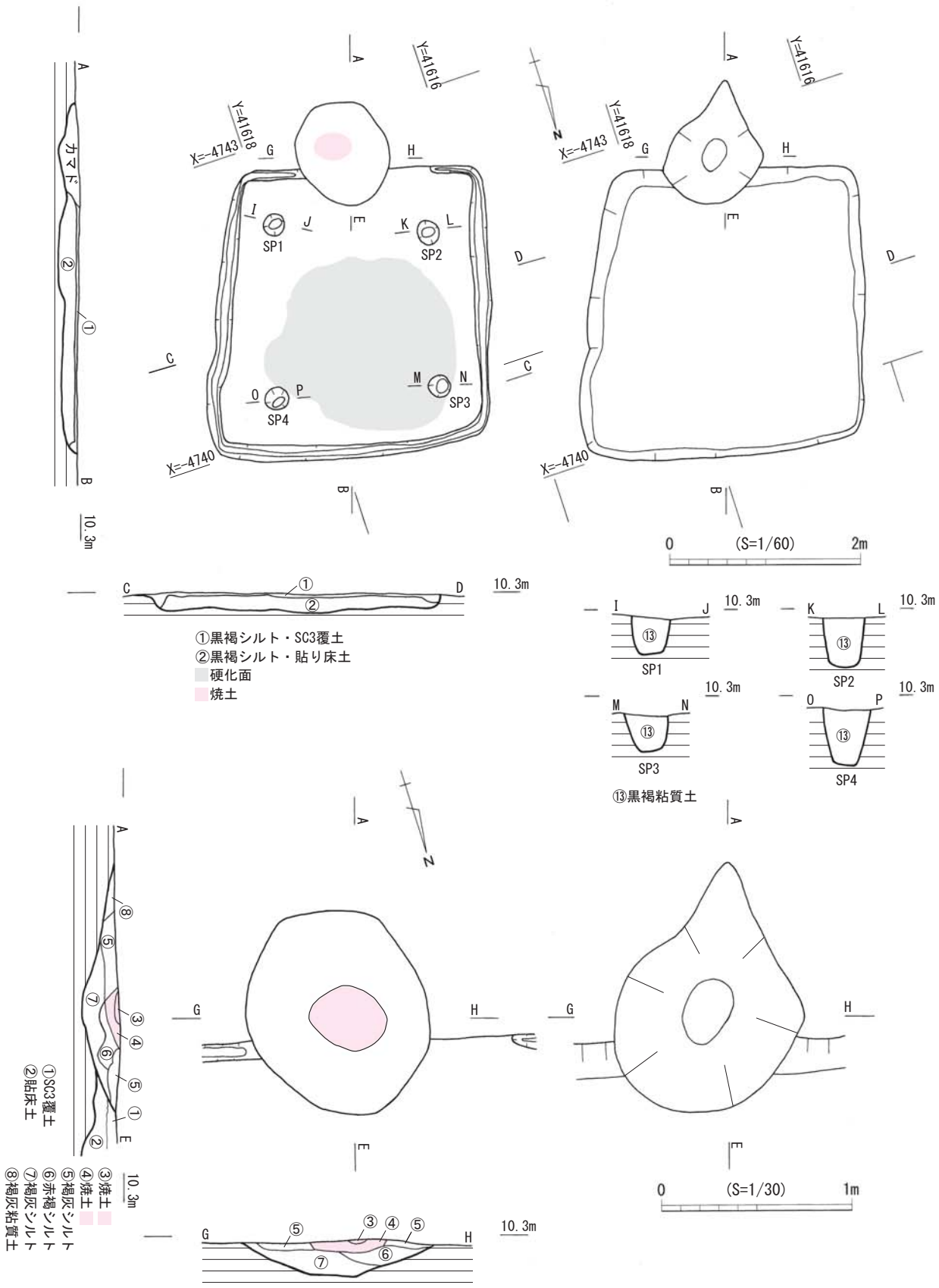

第12図　SC2平・断面図(全体S＝1/60、カマド・SP S＝1/30)



図版6　SC2床面検出状況(東から)

図版7　SC2掘り方完掘状況(東から)

② TAK201405調査区⑤区　SC3（第13図、図版8・9、第5表）




第13図　SC3平・断面図（全体 S＝1/60、カマド・SP S＝1/30）

大調査区201405の小調査区⑤区7260・7460グリッド4層からプランを検出した。長軸(北－南)3.0m、短軸(西－東)2.9mの隅丸方形で、床面までの深さは4cm、掘方底までの深さは20cmを測る。南壁中央にカマドを、四隅には柱穴を確認した。壁際には周溝が巡り床面の硬化も見られた。東2.3mにはSC2が、東2mにはSC4がある。出土遺物は土師器椀1点であるが、この遺物からSC3は9世紀後半の遺構と思われる。

SC3－SL1(第13図)

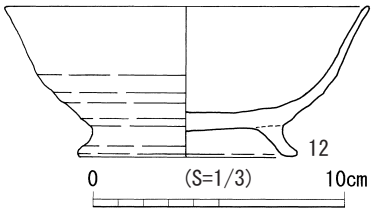
削平により上部構造は残存しておらず硬化した火床を確認した。掘方断面は皿状を呈する。覆土は締まりのある粘質土で、カマドの構築材と思われる。南側には張り出しが見られた。煙道の入り口と思われる。

図版8　SC3床面検出状況(北から)

図版9　SC3掘り方完掘状況(北から)

TAK201405調査区⑤区　SC3出土遺物(第14図、図版10、第4表)

12は土師器椀である。体部はわずかに丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。高台は外方に大きく張り出しどっしりとしている。



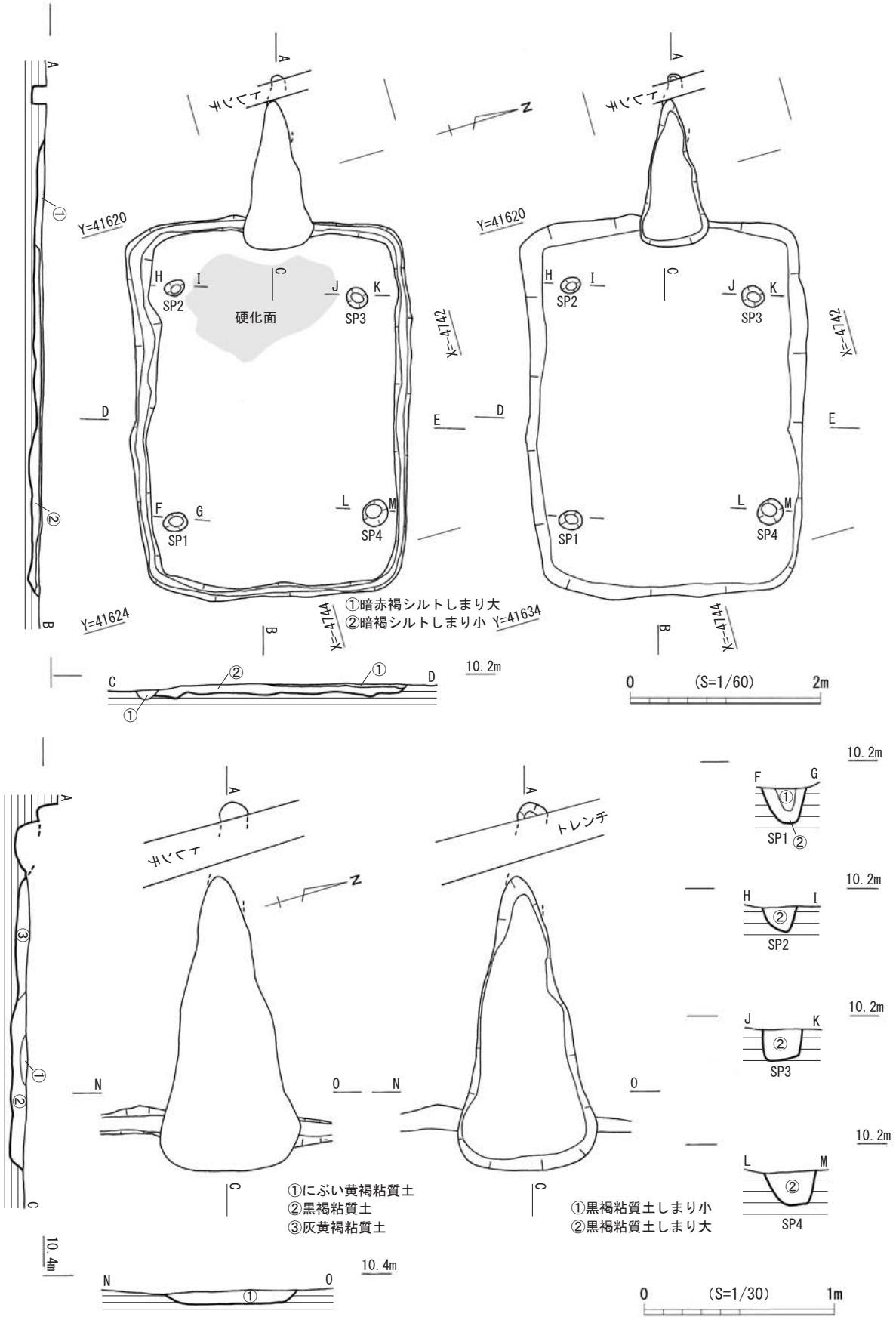

第14図　SC3出土遺物(1/3)

図版10　SC3出土遺物

第4表　SC3出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 12 | 土師器　椀 | 底部～口縁部 | (14.2) | 5.9 | 8.4 | — | — | 浅黄橙色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英<br>金雲母　角閃石<br>赤色粒子 |

③ TAK201405調査区⑤区　SC4（第15図、図版11・12、第5表）




第15図　SC4平・断面図（全体 S＝1/60、カマド・柱穴　S＝1/30）

大調査区201405の小調査区⑤区7462グリッド4層からプランを検出した。長軸(西－東)4.0m、短軸(北－南)2.9mの隅丸方形で、底面までの深さは4cm、掘方底までの深さは12cmを測る。西壁中央にカマドを、四隅には柱穴を確認した。壁際には周溝が巡り床面の硬化も見られた。北に接してSC2が、西2mにはSC3がある。出土遺物は無し。

SC4－SL1(第15図)

削平により上部構造は残存しておらず硬化した火床も確認できなかったことから、火床面よりもさらに下での確認となった。掘方断面は皿状を呈する。覆土は締まりの強い粘質土で、カマドの構築材の一部と思われる。カマドに続く煙道の下端を確認した。煙道はカマドから外へ85cmで立ち上がる。

図版11　SC4床面検出状況(東から)

図版12　SC4掘り方完掘状況(東から)

第5表　竪穴建物跡(SC)計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 規模(m) | | 壁高(cm) | | カマド位置 | 平面形状 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長軸 | 短軸 | 床面 | 掘り方 | | |
| TAK201405　SC2 | 12 | 6・7 | 3.2 | 3.1 | 4 | 20 | 西 | 方形 |
| TAK201405　SC3 | 13 | 8・9 | 3 | 2.9 | 4 | 20 | 南 | 方形 |
| TAK201405　SC4 | 15 | 11・12 | 4.0 | 2.9 | 4 | 12 | 西 | 方形 |

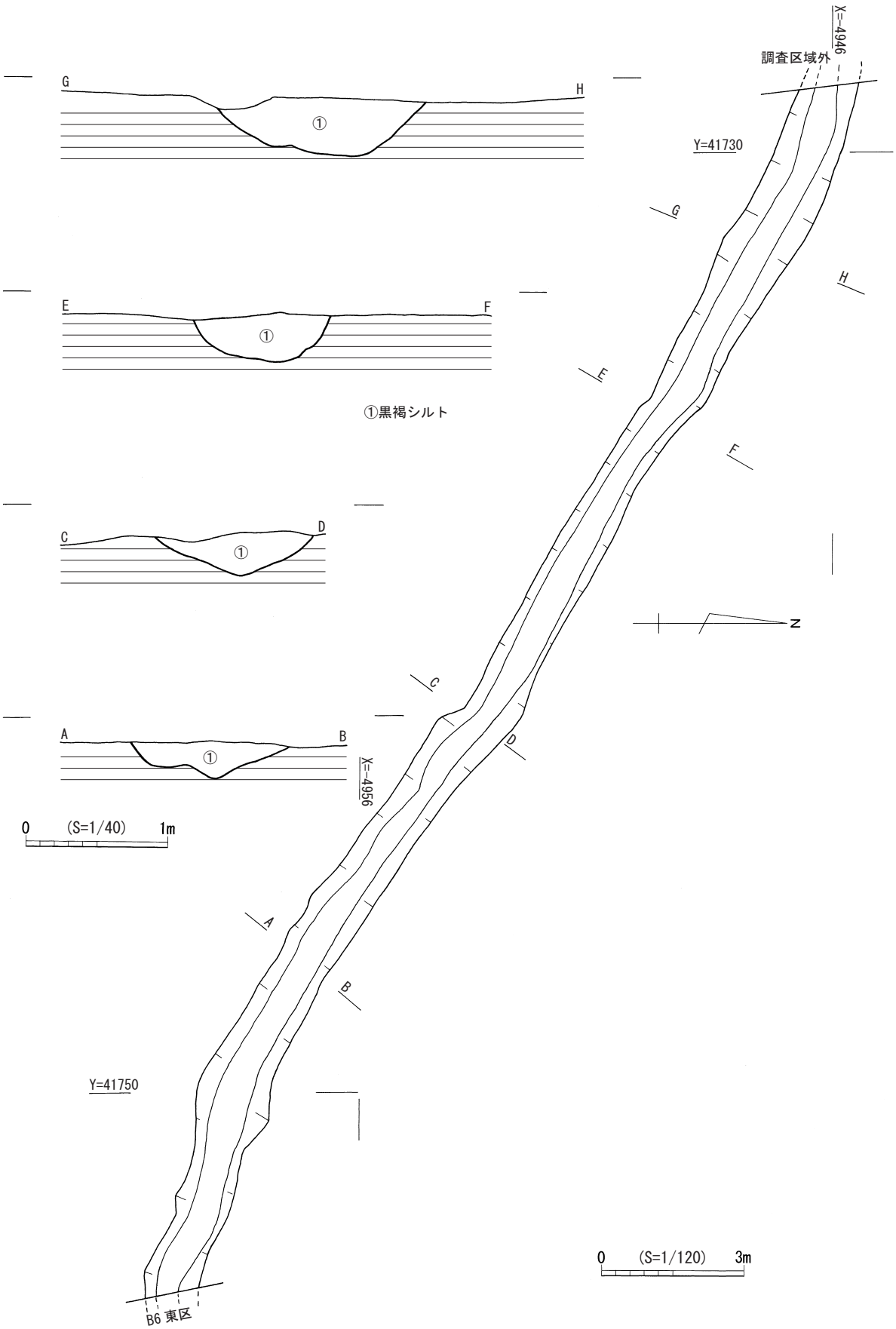
(4)溝・河川(SD)

今回報告する溝・河川は4条である。

①TAK201404調査区B7東区　SD1(第16図、図版13)

大調査区201404の小調査区B7東区9472・9474グリッド3層からプランを検出した。全長(北西－南東)18m、最大幅0.5m、最深20cmで断面は逆台形状を呈している。南東端部は調査区外へ伸びている。北西端部は9470区へ向かい延びているがプランを検出できなかった。須恵器杯が出土した。

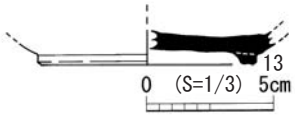
図版13　SD1掘り方完掘状況(東から)




第16図　SD1平・断面図(平面図 S＝1/120、断面図 S＝1/40)

TAK201404調査区 B7東区　SD1出土遺物(第17図、図版14、第6表)

**13**は須恵器杯である断面四角形の高台が底部端部よりわずかに内側に貼り付けられる。この遺物から SD1は8世紀後半の遺構と思われる。




第17図　SD1出土遺物(S＝1/3)

図版14　SD1出土遺物

第6表　SD1出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 13 | 須恵器　高台付杯 | 底部 | — | (1.3) | (8.4) | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 |

② TAK201405調査区④区　SD10(第18・19図、図版15・16)

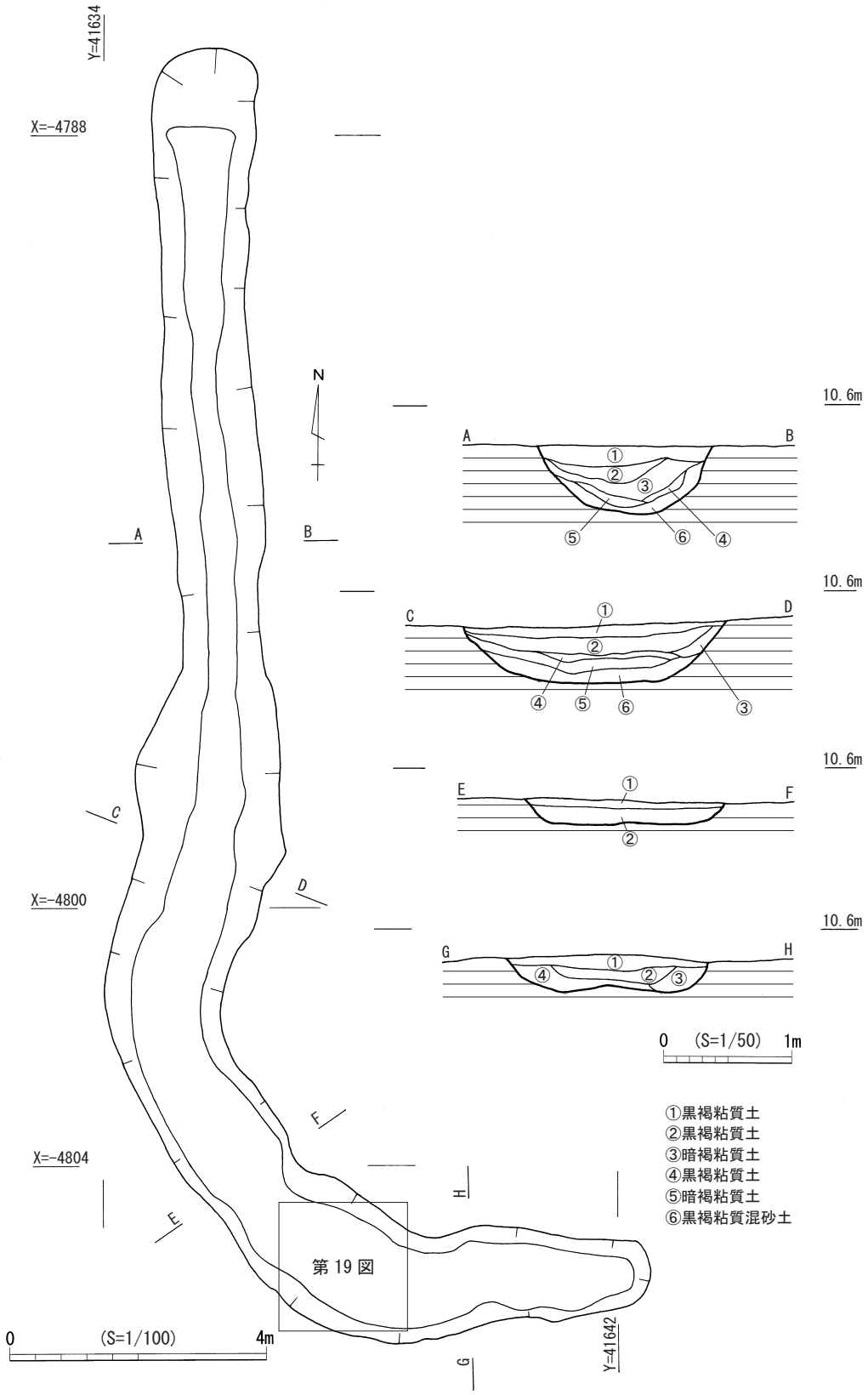
大調査区201405の小調査区④区7862・8062・8064グリッド3層から検出した。全長(北－南東)24.5m、最大幅2.1m、最深52cm で断面は「U 字」状～皿状を呈している。途中で鍵型に東へ曲がる。SD10が切っている SD11から出土した遺物の年代を見ると SD10と同じ10世紀代であることから、SD11が埋没してあまり時間をおかずに SD10が掘削され、SD10は早い段階で埋没したものと思われる。

図版15　SD10遺物出土状況(北東から)

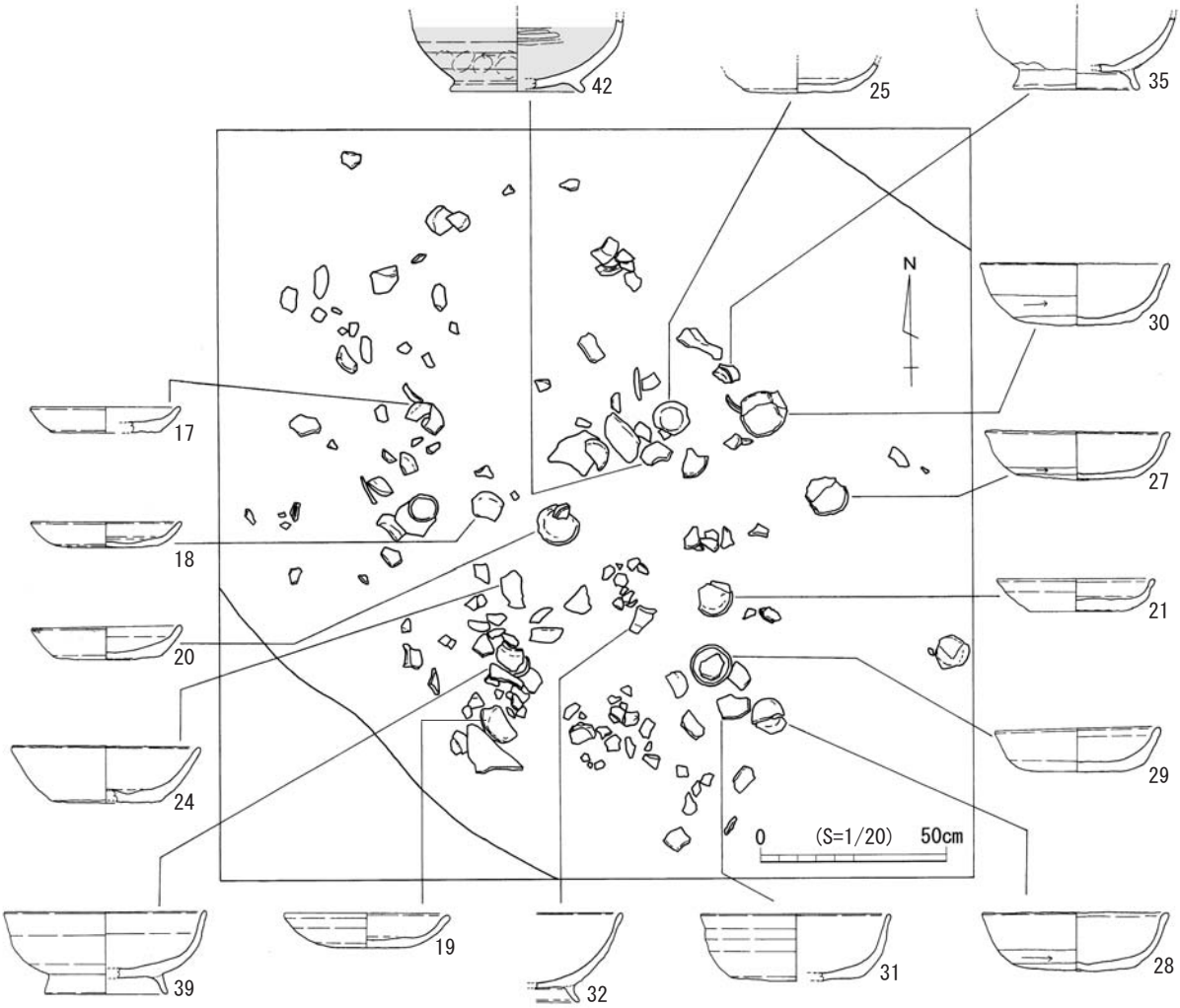
図版16　SD10完掘状況(南から)

TAK201405調査区④区　SD10出土遺物(第20・21図、図版17・18、第7～9表)

**14～22**は、径が小さく器高も低い土師器小皿と杯である。いずれも切り離しは右回転のヘラ切りで、体部は内湾しながら口縁部に至る。10世紀代のものと思われる。**21・22**は板状圧痕が残る。**14**は内面に煤痕が残る。**20**は口縁部3箇所に煤が付着する。灯明皿として使われている。**23～31**は径が大きく器高も高い杯である。すべて切り離しは回転ヘラ切りで、回転方向が判別したものは右回転である。**23～26**は体部が直線的に伸び口縁部に至るタイプである。9世紀代のものであろう。**26**は底部際に右回転のヘラケズリが行われる。**27～31**は体部が内湾しながら口縁部に至るタイプである。**27・28・30**は体部下半に右回転のヘラケズリが行われる。10世紀代のものと思われる。**32～39**は土師器椀である。体部は緩やかに内湾しながら口縁部に至り、高台は外に張り細く高い。回転ヘラケズリがすべての高

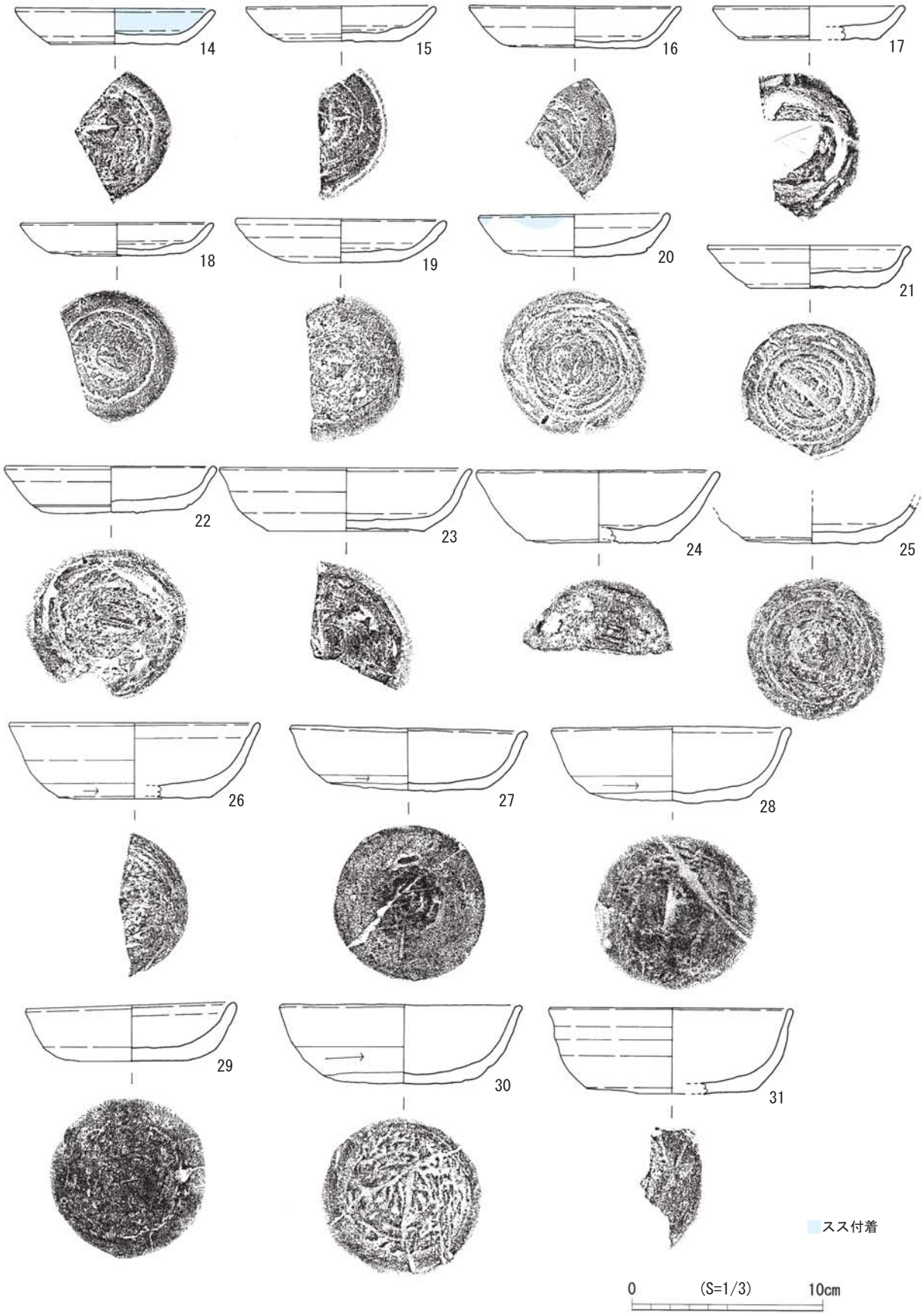



第18図　SD10平・断面図(平面図 S＝1/100、断面図 S＝1/50)

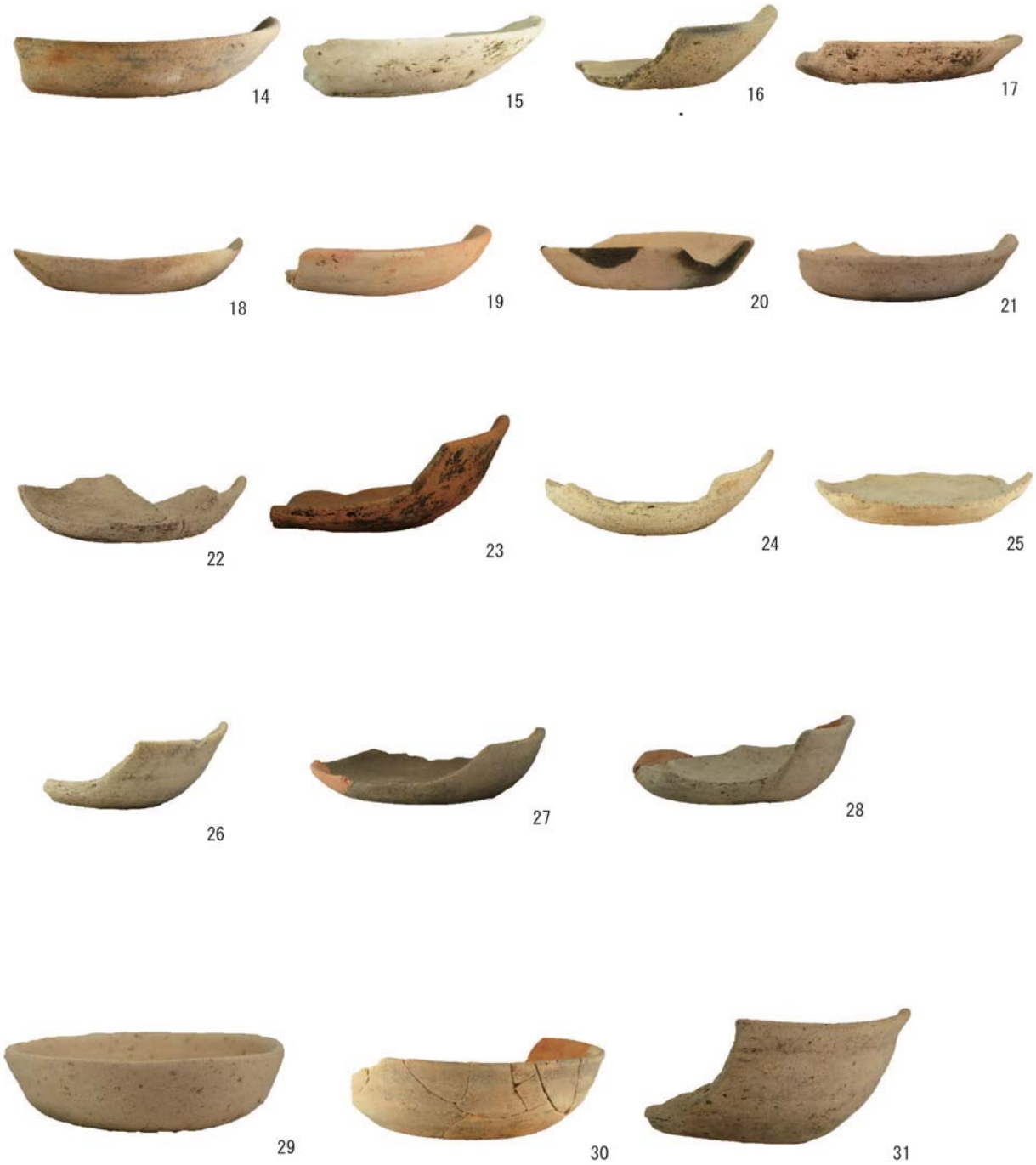



第19図　SD10遺物出土状況図(S＝1/20)　第18図の一部を拡大

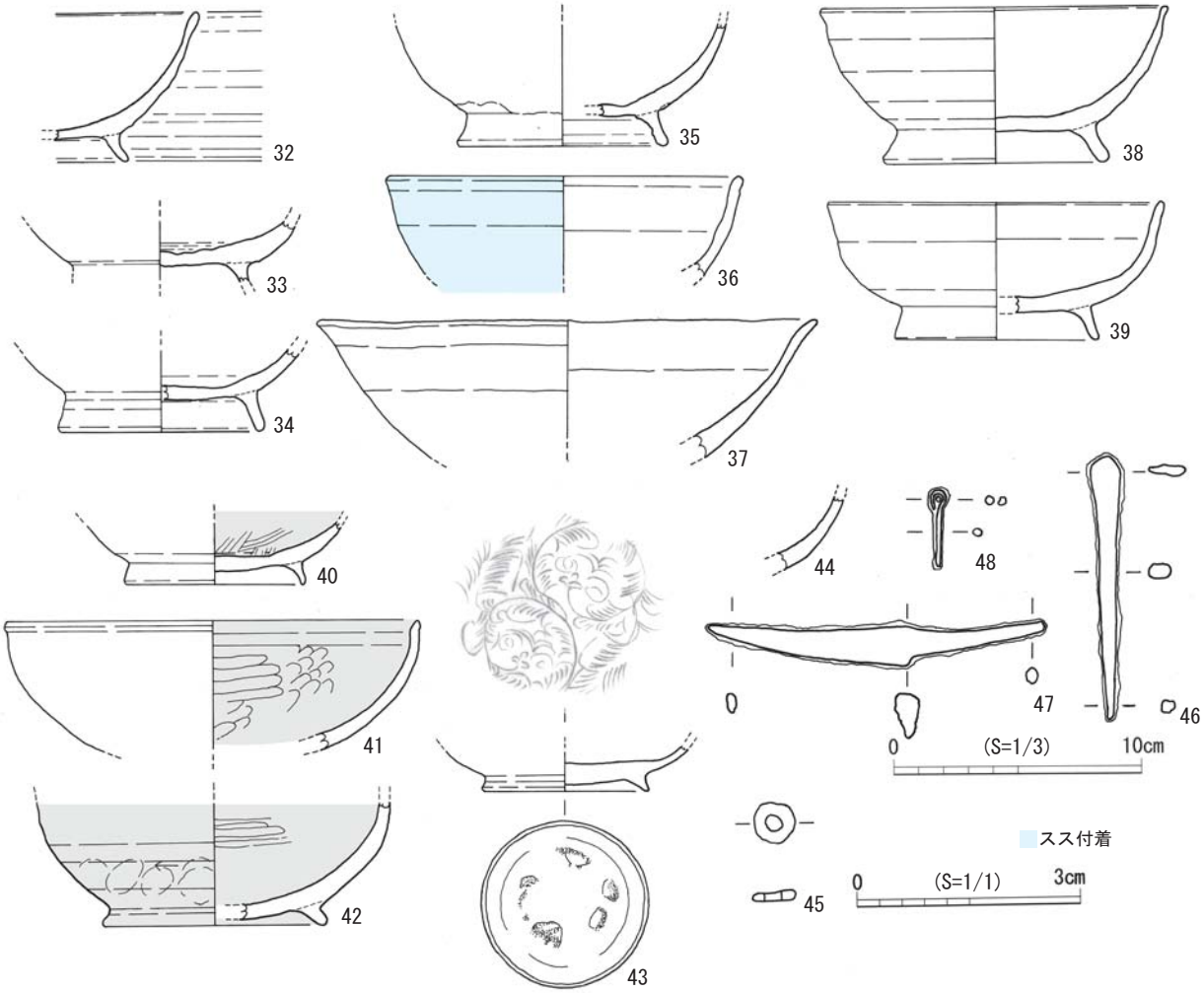
台内に施され、多くは高台の周囲まで及んでいる。10世紀前半代のものであろう。**40・41**は黒色土器A類椀である。**40**は底部片で細い高台がていねいに貼り付けられている。内面には横位と縦位のミガキがわずかに残る。**41**は体部～口縁部片である。ふくらみを持つ体部は口縁部でわずかに外反する。内面には横位のミガキが残る。**42**は黒色土器B類の底部片である。体部下半には左回転のヘラケズリの上から指頭痕が全体に見られる。内外面にミガキが施されていたと思われるが、摩滅のために内面の横位のミガキがわずかに残る。黒色土器はいずれも10世紀代のものと思われる。**43**は越州窯系青磁浅椀Ⅲ類である。高台は外方に開く撥状で、全面施釉される。底部内面には花文であろうか毛彫りが施される。毛彫りの曲線は部分的に滑らかではなく角ばった箇所があることからある程度乾燥した段階で文様を描いたことが考えられる。高台内には5個の目跡が残る。10世紀後半～11世紀中頃の所産である。**44**は初期高麗青磁椀体部片である。粗い胎土にオリーブ色の釉が薄く掛かる。11世紀後半～12世紀前半の所産である。**45**は滑石製の臼玉である。**46**は鏃と思われる鉄製品である。基部断面は方形で先端は薄くなる。**47**は刀子である。刃部の長さは10.0cmを測る。**48**は環付きの針状鉄製品であ




第20図　SD10出土遺物－1(1/3)




図版17　SD10出土遺物－1




第21図　SD10出土遺物－2(S＝1/3、玉 S＝1/1)

る。先端は欠損している。これらの遺物は10世紀代にまとまっていることから、遺構の埋没した年代もこの年代であると考える。**44**の初期高麗青磁は他の遺物より1世紀ほど時代が下ることから混入したものであろう。

図版18　SD10出土遺物－2

第7表　SD10出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 14 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.1) | 1.8 | (6.6) | — | 煤痕 | にぶい橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 15 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.8) | 1.7 | (6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 | 右回転ヘラ切り |
| 16 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.8) | 2.2 | (6.6) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 17 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.8) | 1.8 | (7.5) | — | — | にぶい黄橙色 | 褐灰色 | 良好 | 長石　石英 | 右回転ヘラ切り |
| 18 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.8) | 1.7 | (7.1) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | 右回転ヘラ切り |
| 19 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.8) | 2.3 | (5.7) | — | — | にぶい橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | 右回転ヘラ切り |
| 20 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9.8 | 2.3 | 7 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り　灯明皿 |
| 21 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.4) | 2.2 | 7.2 | — | — | にぶい橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り　板状圧痕 |
| 22 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (10.7) | 2.5 | 7.2 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り　板状圧痕 |
| 23 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.8) | 3.3 | (8) | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 24 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.3) | 2.8 | (7.8) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 25 | 土師器　杯 | 底部～体部 | — | (2.1) | 7 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 26 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.8) | 4 | (7.9) | 底部際に<br>右回転<br>ヘラケズリ | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 27 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (11.8) | 3.1 | 7.9 | 体部下半に<br>右回転<br>ヘラケズリ | — | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 28 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.2) | 4 | 8.3 | 体部下半に<br>右回転<br>ヘラケズリ | | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石<br>雲母 | 右回転ヘラ切り |
| 29 | 土師器　杯 | 完形 | 10.8 | 3.1 | 6.3 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 30 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.4) | 4.2 | 6.4 | 体部下半に<br>右回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 31 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.6) | 4.5 | (8.7) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 32 | 土師器　椀 | 底部～口縁部 | — | 6 | — | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい黄褐色 | にぶい黄褐色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 33 | 土師器　椀 | 底部 | — | (2.5) | — | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい<br>灰黄褐色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 34 | 土師器　椀 | 底部 | — | (3.3) | 8 | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | 浅黄橙色 | 灰黄褐色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 35 | 土師器　椀 | 底部～体部 | — | (4.9) | (8.1) | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 36 | 土師器　椀 | 口縁部～体部 | (13.8) | (4) | — | — | — | 灰黄褐色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 37 | 土師器　椀 | 口縁部～体部 | (19.7) | (5.6) | — | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | |
| 38 | 土師器　椀 | 底部～口縁部 | (13.8) | 6.2 | 8.6 | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 39 | 土師器　椀 | 底部～口縁部 | (13.2) | 5.5 | (8) | 底部に回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 赤色粒子　長石 | |
| 40 | 黒色土器Ａ類　椀 | 底部 | — | (2.6) | (7) | — | ミガキ | 灰白色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 41 | 黒色土器Ａ類　椀 | 底部～体部 | (16.4) | (5.2) | — | — | ミガキ | 灰白色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石　石英<br>雲母 | |
| 42 | 黒色土器Ｂ類　椀 | 底部～体部 | — | (5.1) | (8.7) | 体部下半に<br>左回転<br>ヘラケズリ | ミガキ | 灰色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石　石英<br>雲母 | ヘラケズリの上から<br>指オサエ |
| 43 | 越州窯系青磁<br>浅椀　Ⅲ類 | 底部 | — | (1.8) | 6.6 | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | 毛彫り文<br>高台内に目跡 |
| 44 | 初期高麗青磁　椀 | 体部 | — | (2.9) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |

第8表　SD10出土　滑石製品観察表

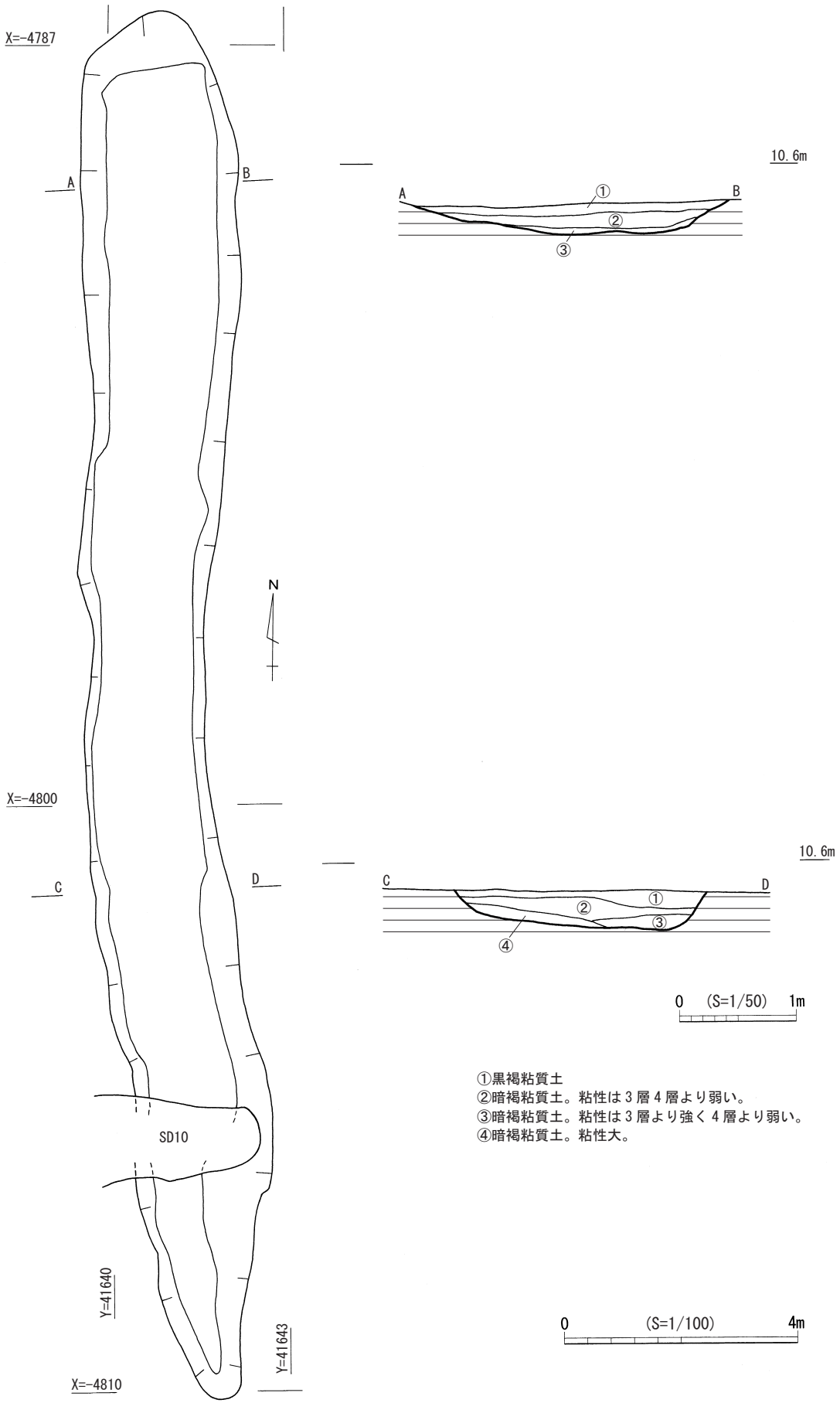
| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | 臼玉 | 5.2 | 5.2 | 1.4 | 0.07 | 青灰色 | 完形 |

第9表　SD10出土　金属製品観察表

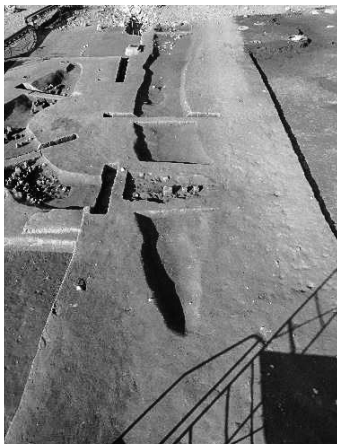
| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 46 | 鏃 | 鉄 | 10.5 | 15 | 6 | 77.8 | 基部断面は方形で先端は薄くなる |
| 47 | 刀子 | 鉄 | 135 | 18 | 10.5 | 104.75 | 完形　刃部の長さ100mm |
| 48 | 針状製品 | 鉄 | 33 | 3.5 | 0.38 | 0.1 | 環付　先折れ |

### ③ TAK201405調査区④区　SD11(第22図、図版19・20)

大調査区201405の小調査区④区7864・8064グリッド3層から検出した。全長(北－南東)24m、最大幅2.2m、最深1.2m で断面は「U 字」状～皿状を呈している。SD10に切られる。

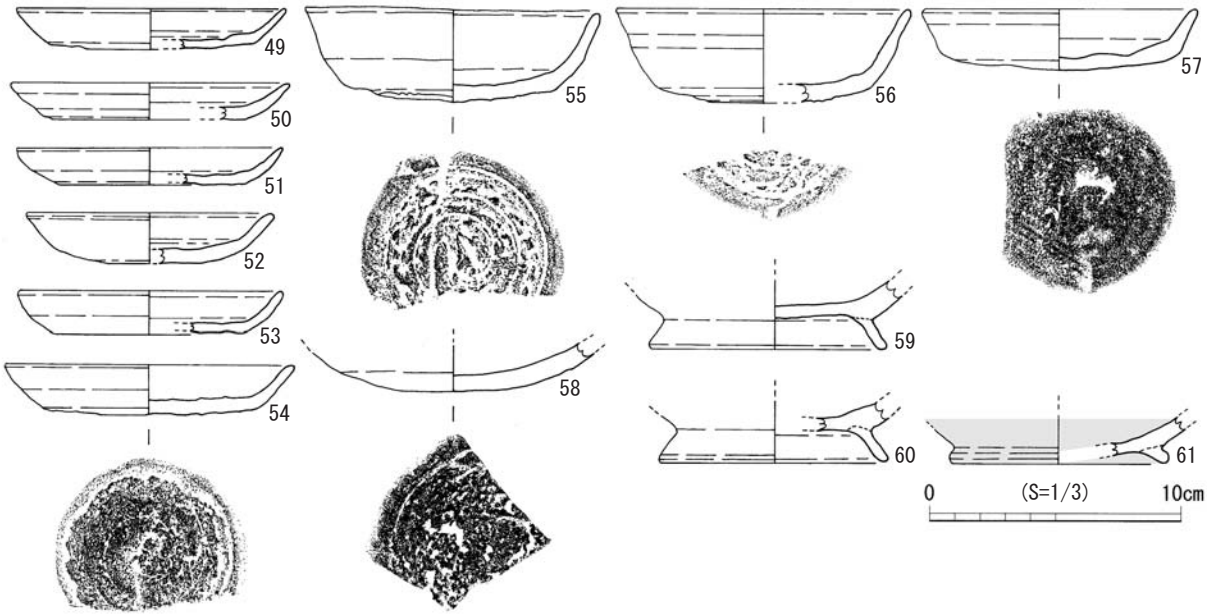



第22図　SD11平・断面図(平面図S＝1/100、断面図S＝1/50)



図版19　SD11完掘状況(南から)

図版20　SD11土層断面(南から)




第23図　SD11出土遺物(S＝1/3)

TAK201405調査区④区　SD11出土遺物(第23図、図版21、第10表)

**49～54**は土師器小皿である。いずれも切り離しは回転ヘラ切りである。10世紀代の所産と思われる。**55～58**は土師器杯である。いずれも切り離しは回転ヘラ切りである。**55・56**は器高があるタイプである。体部はほぼ直線で伸び、口縁部はわずかに外反する。切り離し後の調整は行われていない。9世紀後半頃の所産と思われる。**57**は体部が短く外に伸びる。10世紀代のものであろう。**58**は切り離し後押し出しにより丸底となる。11世紀代のものと思われる。他の遺物よりやや新しく、混ざり込みと思われる。**59・60**は土師器椀である。ていねいに貼り付けられた細く高い高台が外方へ伸びる。10世紀代の所産であろう。**61**は黒色土器B類椀である。端部が肥厚する短い高台が外方へ向かって貼り付けられる。10世紀代の所産である。これらの遺物からSD11は10世紀の早い段階で埋没し、その後SD10によって切られたと考える。

図版21　SD11出土遺物

第10表　SD11出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 49 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.4) | 1.6 | (4.7) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 50 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.8) | 1.4 | (7.5) | — | — | にぶい褐色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石　石英 | 回転ヘラ切り |
| 51 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.4) | 1.5 | (7.1) | — | — | 灰白色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 52 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.4) | 2 | (3) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 53 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (10.4) | 1.7 | (7.3) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 54 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (11.1) | 2 | (8.5) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 55 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (11.4) | 3.7 | (7.8) | — | — | にぶい黄褐色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 56 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (11.6) | 3.7 | (8.3) | — | — | 橙色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 57 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (10.6) | 2.4 | (8.4) | — | — | 浅黄橙色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 | 回転ヘラ切り |
| 58 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | — | (1.8) | (3.8) | — | — | 黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 回転ヘラ切り　押し出し |
| 59 | 土師器　椀 | 底部 | — | (2.7) | (8.9) | — | — | 明褐灰色 | 灰黄褐 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | |
| 60 | 土師器　椀 | 底部 | — | (8.7) | (2.5) | — | — | 灰黄褐色 | 褐灰色 | 良好 | 長石　角閃石<br>雲母 | |
| 61 | 黒色土器Ｂ　椀 | 底部 | — | (1.9) | (8.4) | — | — | 黒褐色 | 黒褐色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | |

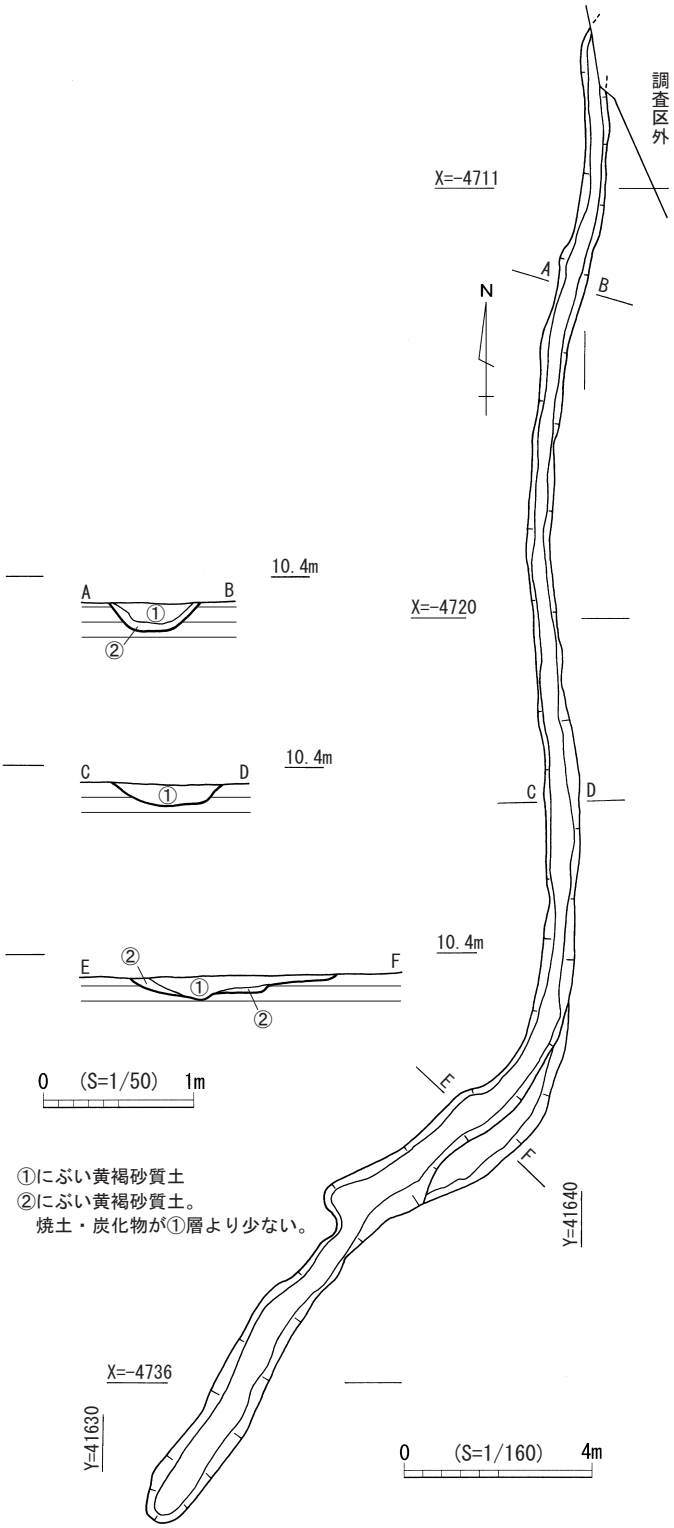
④ TAK201405調査区⑥区　SD12（第24図、図版22）

大調査区201405の小調査区⑥区7062・7064・7262グリッド4層から検出した。全長（南－北）35m、最大幅1.7m、最深70cmで断面は「U字」状～皿状を呈している。北端部は調査区外へ伸びている。遺物より遺構の年代は8世紀前半と考える。

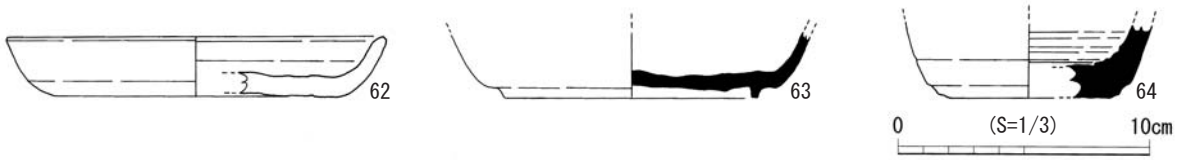
図版22　SD12完掘状況（南から）

TAK201405調査区⑥区　SD12出土遺物（第25図、図版23、第11表）

**62**は土師器皿である。分厚い作りで体部は内湾しながら口縁部に至る。**63**は須恵器杯である。高台は断面四角形で底部の外に近い位置に貼り付けられる。体部はわずかに内湾しながら伸びていく。**64**は須恵器の分厚い底である。小壺であろうか。




第24図　SD12平・断面図（S＝1/160、S＝1/50）




第25図　SD12出土遺物(S＝1/3)

図版23　SD12出土遺物

第11表　SD12出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 62 | 土師器　皿 | 底部～口縁部 | (4.7) | 2.3 | (11.2) | ― | ― | 浅黄橙色 | 灰白 | 良好 | 長石　赤色粒子 |
| 63 | 須恵器　杯 | 底部～口縁部 | ― | (2.5) | (9.9) | ― | ― | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| 64 | 須恵器　小壺か | 底部～口縁部 | ― | (3) | (6.2) | ― | ― | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 石英　長石 |

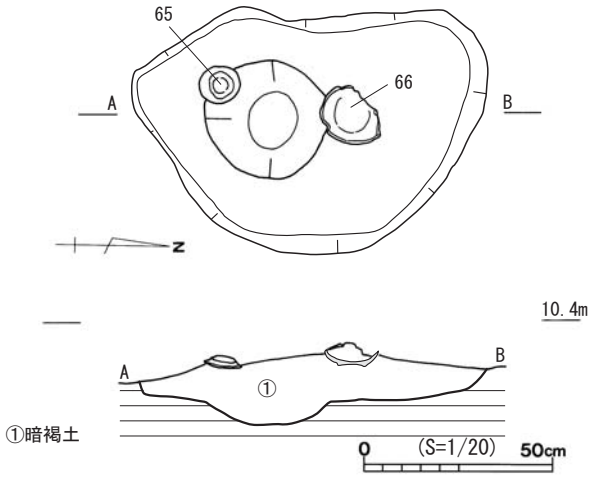
(5)土坑(SK)

今回報告する土坑は9基である。

①TAK 201405調査区③区　SK10(第26図、図版24)

大調査区201405の小調査区③区7866グリッド3層からプランを検出した。長軸93cm、短軸63cmの楕円形で深さは17cmを測る。出土した遺物から遺構の年代は11世紀前半と思われる。

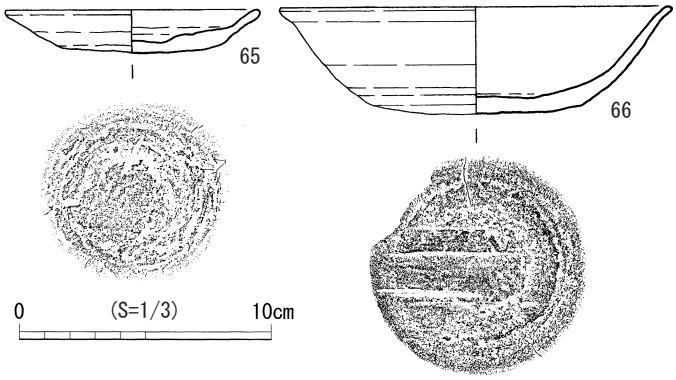
図版24　SK10遺物出土状況(西から)




第26図　SK10平・断面図(S＝1/20)

TAK201405調査区③区　SK10出土遺物(第27図、図版25、第12表)

図版25　SK10出土遺物




第27図　SK10出土遺物(S＝1/3)

**65**は土師器小皿である。体部はわずかに外反しながら口縁部に至る。切り離しは右回転ヘラ切りである。**66**は丸底風の土師器杯である。右回転切り離し痕と板状圧痕が残る底部から体部は丸みを持って立ち上がり外反して口縁部に至る。底部の押し出しは見られない。11世紀前半代の椀の体部と形がよく似ることから同時代のものと思われる。

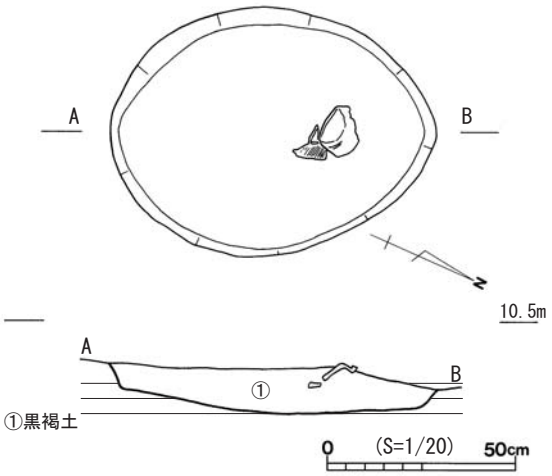
第12表　SK10出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 65 | 土師器　小皿 | 完形 | 9.8 | 1.7 | 6 | ― | ― | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 66 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.3 | 4.3 | 8.4 | ― | ― | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石　雲母 | 右回転ヘラ切り　板状圧痕 |

② TAK201405調査区④区　SK29(第28図、図版26)

大調査区201405の小調査区④区7864グリッド3層からプランを検出した。長軸85cm、短軸65cmの楕円形で深さは12cmを測る。土師器杯が出土した。出土した遺物からこの遺構の年代は9世紀中頃と思われる。

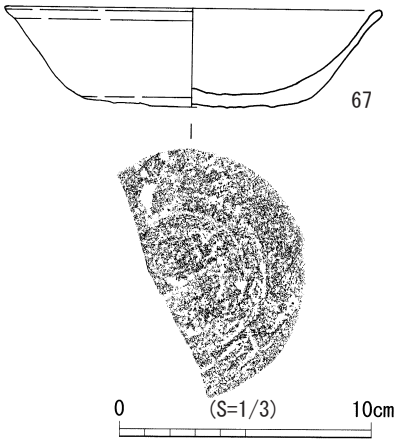
図版26　SK29遺物出土状況(東から)




第28図　SK29平・断面図(S＝1/20)

TAK201405調査区④区　SK29出土遺物（第29図、図版27、第13表）

67は土師器杯である。体部と底部の境は丸みを持ち直線的に体部は伸びた後口縁部は外反する。切り離しは回転ヘラ切りである。




第29図　SK29出土遺物（S＝1/3）

図版27　SK29出土遺物

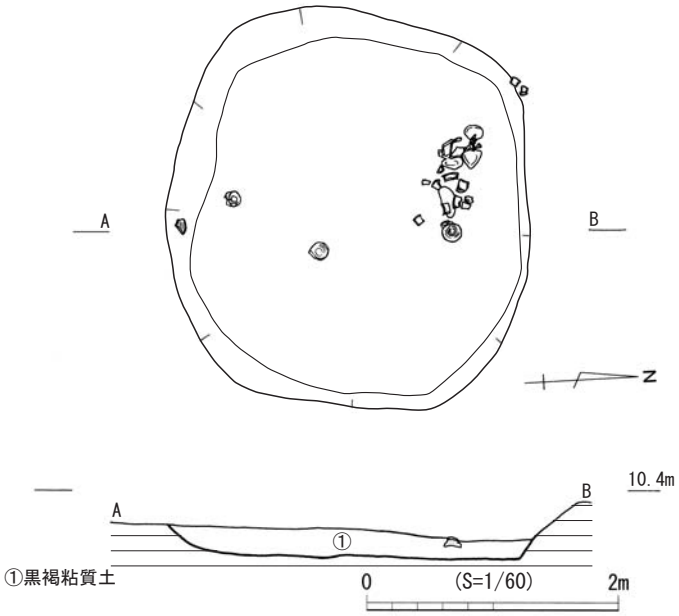
第13表　SK29出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 67 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.6) | 3.9 | 9 | — | — | にぶい橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>赤色粒子 | 回転ヘラ切り |

③ TAK201405調査区③区　SK30（第30図、図版28）

大調査区201405の小調査区③区7866グリッド4層プランを検出した。長軸3.2m、短軸2.9mの楕円形で深さは20cmを測る。土師器杯、椀、石鍋等が出土した。出土した遺物から遺構の年代は10世紀前半と思われる。

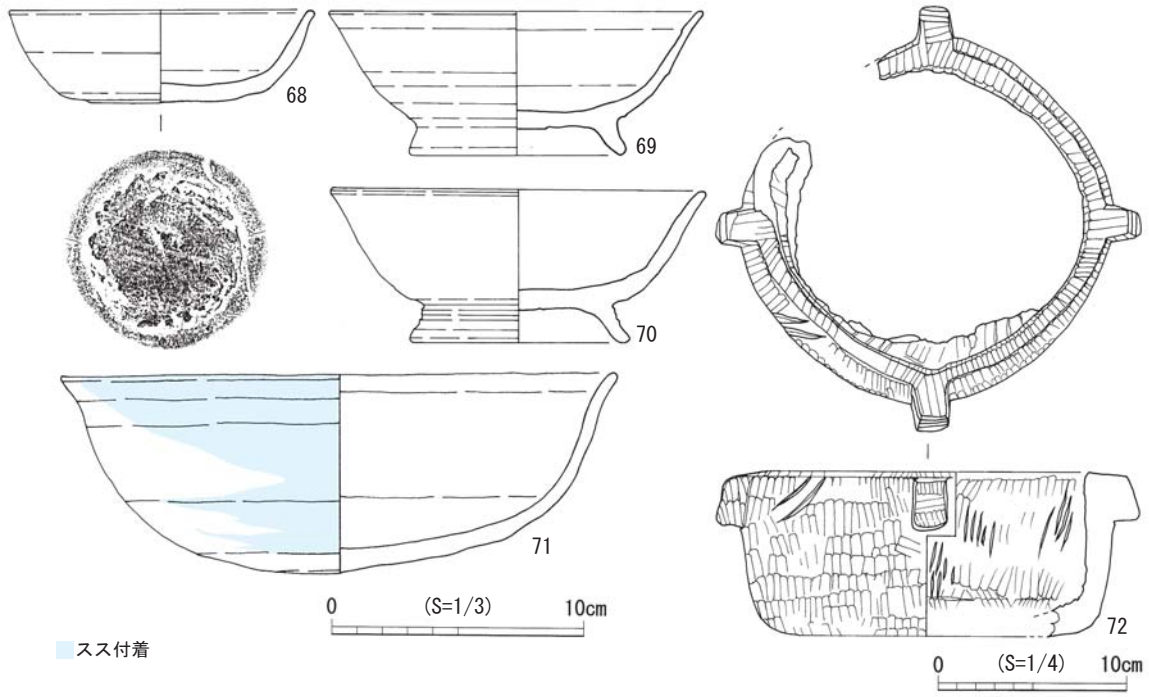
図版28　SK30遺物出土状況（東から）




第30図　SK30平・断面図（S＝1/60）

TAK201405調査区③区　SK30出土遺物(第31図、図版29、第14・15表)

**68**は土師器杯である。回転ヘラ切り離し後の調整が無い底部から内湾しながら立ち上がり、口縁下でわずかに外反する。10世紀前半のものと思われる。**69**は土師器椀である。外に張り出す高台から直線的に体部は伸び口縁下でわずかに外反する。9世紀末～10世紀前半のものと思われる。**70**は土師器椀である。細く高い高台は外へ張り出し、体部は丸みを持って立ち上がった後口縁部下で外反する。10世紀前半のものと思われる。**71**は鍋型の土師器である。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部下で外反する。外面に煤が付着している。10世紀前半の土師器椀体部と形が似ていることから、当遺物も同時代のものと考える。**72**は縦耳が付く小型の石鍋である。平底の底部から体部は直立し、小さな耳が4箇所に付く。灰白色の良質な素材を使用しており底部と体部の一部が欠損している。煤の付着は見られない。




第31図　SK30出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

第14表　SK30出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 68 | 土師器　杯 | ほぼ完形 | 11.8 | 3.7 | 5.6 | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英 角閃石 長石 | 回転ヘラ切り |
| 69 | 土師器　椀 | ほぼ完形 | 14.6 | 5.7 | 8.3 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英 角閃石 長石 | |
| 70 | 土師器　椀 | ほぼ完形 | 14.6 | 6 | 8.4 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 石英 角閃石 長石 | |
| 71 | 土師器　鍋 | ほぼ完形 | 21.5 | 7.9 | — | — | — | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 良好 | 石英 角閃石 長石 | |

第15表　SK30出土　滑石製石鍋観察表

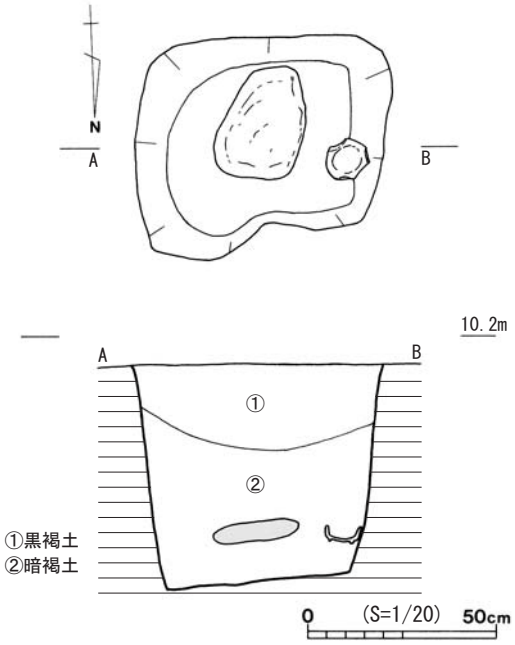
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 72 | 縦耳付小型石鍋 | 口縁～底部 | 16.4 | 8.7 | (16.6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 煤の付着なし |

図版29　SK30出土遺物

④ TAK201405調査区⑥区　SK37（第32図、図版30）

大調査区20405の小調査区⑥区7264グリッド3層からプランを検出した。長辺65cm、短辺50cmの隅丸方形で、深さは57cmを測る。深さ50cmの地点から、平らな礫と正位の須恵器杯が出土した。出土した遺物から遺構の年代は8世紀後半と思われる。

図版30　SK37遺物出土状況（北から）

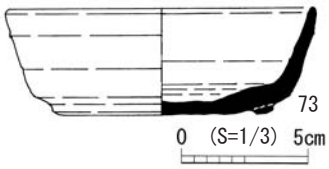



第32図　SK37平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区⑥区　SK37出土遺物(第33図、図版31、第16表)

**73**は須恵器杯である。断面四角形の高台が体部に近い位置に付く。体部はわずかに外に開き直線的に口縁部に至る。

図版31　SK37出土遺物



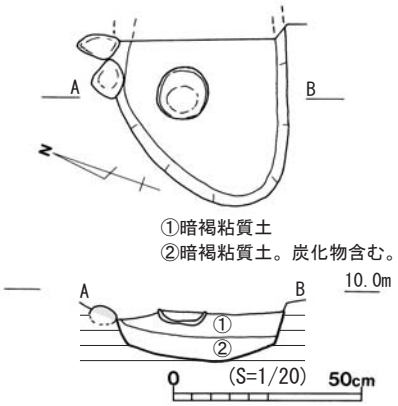

第33図　SK37出土遺物(S＝1/3)

第16表　SK37出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 73 | 須恵器　杯 | ほぼ完形 | 11.8 | 4.2 | 8.6 | ― | ― | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | 長石 |

⑤ TAK201405調査区⑥区　SK42(第34図、図版32)

大調査区201405の小調査区⑥区7064グリッド3層から検出した。長軸方向北半分が調査区外に伸びている。長軸(45cm)、短軸45cmの楕円形で、深さは12cm である。須恵器杯の完形品が正位で出土した。出土した遺物から遺構の年代は9世紀前半と思われる。

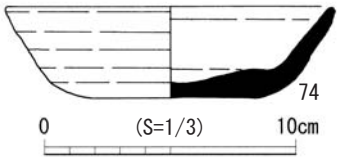



第34図　SK42平・断面図(S＝1/20)

図版32　SK42遺物出土状況(西から)

TAK201405調査区⑥区　SK42出土遺物(第35図、図版33、第17表)

**74**は須恵器杯である。回転ヘラ切り離し後の調整がない底部から直線的に体部は伸びる。焼きが甘く軟質である。




第35図　SK42出土遺物(S＝1/3)

図版33　SK42出土遺物

第17表　SK42出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 74 | 須恵器　杯 | ほぼ完形 | 12.8 | 3.6 | 6.6 | ― | ― | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | 回転ヘラ切り |

(6)焼土(SL)

今回報告する焼土は2基である。

① TAK201404調査区 B6東区　SL4(第36図、図版34・35)

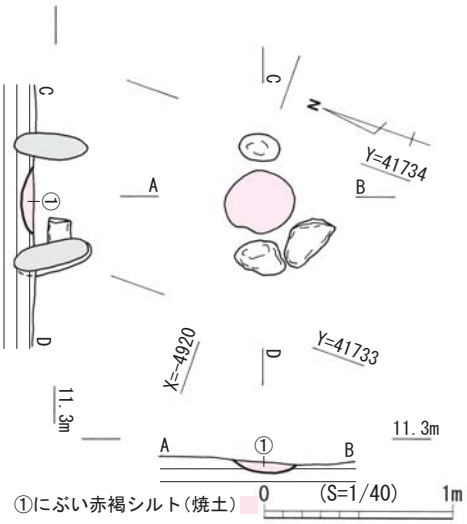
大調査区201404の小調査区 B6東区9272グリッド3層から検出した。長径35cm、短径30cm の楕円形で、深さは6cm を測る。両脇に長辺30cm ほどの円柱状の石が2本立ち奥には倒れた状態で1本が位置することから、当遺構はカマドの床面にあたると思われる。製塩土器が1点出土した。

TAK201404調査区 B6東区　SL4出土遺物(第37図、図版36、第18表)

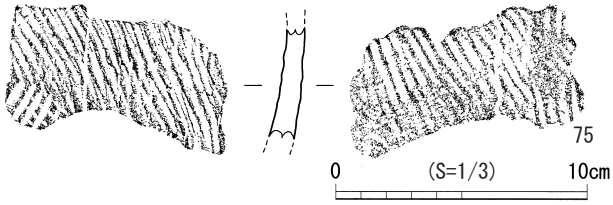
**75**は玄界灘式製塩土器である。外面には格子目ふうのタタキ痕が、内面には平行刻みによる当て具痕が残る。

図版34　SL4検出状況
(北から)

図版35　SL4　検出状況
(北東から)




第36図　SL4平・断面図(S＝1/40)




第37図　SL4出土遺物(S＝1/3)

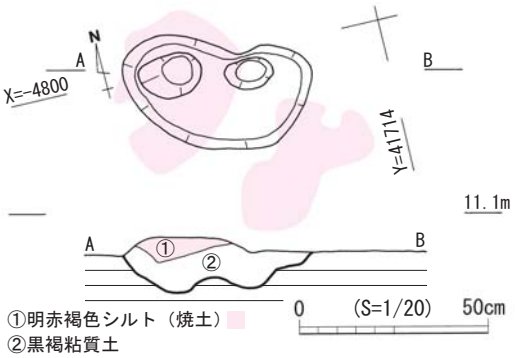
図版36　SL4出土遺物

第18表　SL4出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 75 | 製塩土器 | 体部 | — | (4.4) | — | タタキ痕 | 当て具痕 | 明赤褐色 | 橙色 | 良好 | 長石　角閃石　雲母 |

② TAK201405調査区①区　SL1(第38図、図版37)

大調査区201405調査区の小調査区①区7870・8070グリッド3層から検出した。長軸50cm、短軸25cmの楕円形で、深さは10cmである。厚さ5cmほどの焼土が2塊覆う。出土した遺物からこの遺構は10世紀後半のものと思われる。

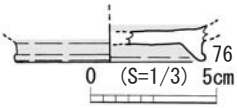



第38図　SL1平・断面図(S＝1/20)

図版37　SL1検出状況(北から)

TAK201405調査区①区　SL1出土遺物(第39図、図版38、第19表)

76は黒色土器B類椀の底部片である。段をもちわずかに外に張り出す高台はていねいに貼り付けられている。




第39図　SL1出土遺物(S＝1/3)

図版38　SL1出土遺物

第19表　SL1出土　土器観察表

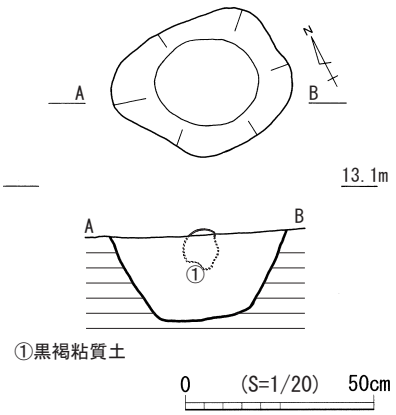
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 76 | 黒色土器B類　椀 | 底部 | — | (1.4) | (7.2) | — | — | オリーブ黒色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 |

(7)柱穴(SP)

今回報告する柱穴は12基である。

① TAK201403調査区①区　SP5(第40図、図版39)

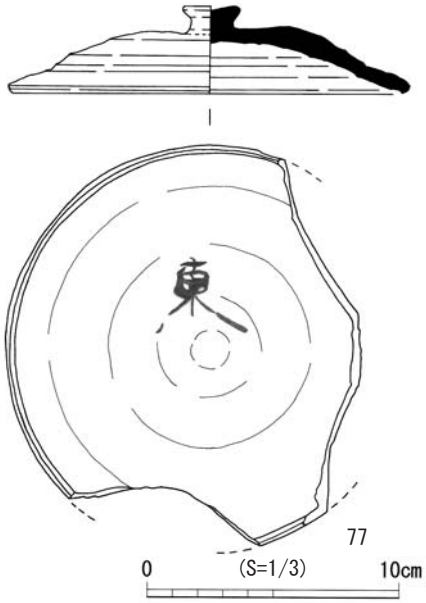
大調査区201403の小調査区①区1272グリッド4層からプランを検出した。長径48cm、短径38cmの楕円形で、深さは23cmである。墨書土器が出土した。




第40図　SP5平・断面図(S＝1/20)

図版39　SP5　遺物出土状況(南から)

TAK201403調査区①区　SP5出土遺物(第41図、図版40、第20表)




第41図　SP5出土遺物(S＝1/3)

図版40　SP5出土遺物
下は「東」墨書拡大

第20表　SP5出土　土器観察表

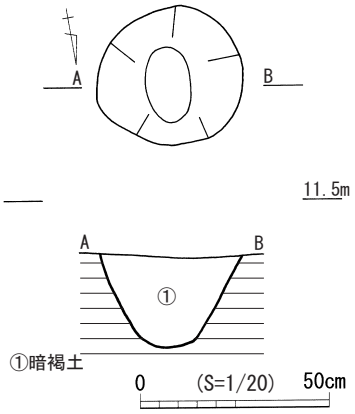
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 77 | 須恵器　杯蓋 | 天井部～口縁部 | 15.9 | 3.4 | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | 墨書「東」 |

77は須恵器杯蓋である。端部がわずかに折れ曲がり、ボタン状の摘みが付く、天井部外面には中心から中位まで右回転のヘラケズリが施される。8世紀中頃～後半のものと思われる。内面の中央近くに、中心を地にした位置で「東」の文字が書かれる。

② TAK201404調査区 B6東区　SP111（第42図、図版41）

大調査区201404の小調査区B6東区9272グリッド3層からプランを検出した。長径38cm、短径37cmの円形で、深さは23cmである。黒色土器椀が出土した。

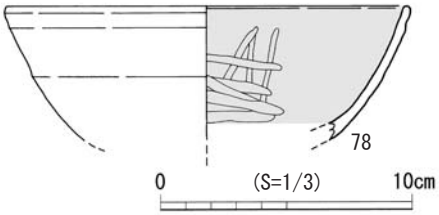
図版41　SP111検出状況（北から）




第42図　SP111平・断面図（S＝1/20）

TAK201404調査区 B6東区　SP111出土遺物（第43図、図版42、第21表）

**78**は黒色土器A類椀である。内面に縦位と横位のミガキが見られる。11世紀前半のものと思われる




第43図　SP111出土遺物（S＝1/3））

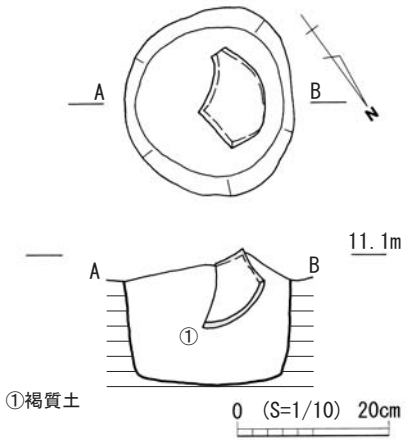
図版42　SP111出土遺物

第21表　SP111出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 78 | 黒色土器Ａ類　椀 | 口縁部～体部 | (15.6) | 5.8 | — | — | ミガキ | 浅黄橙色 | 黒褐色 | 良好 | 長石　石英　雲母 |

③ TAK201405調査区①区　SP201（第44図）

大調査区201405の小調査区①区8070グリッド3層からプランを検出した。25cm、短径22cmの円形で、深さは18cmである。出土した遺物から10世紀中頃の遺構と思われる。

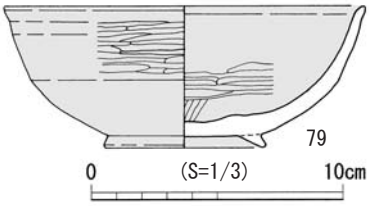



第44図　SP201平・断面図（S＝1/10）

TAK201405調査区①区　SP201出土遺物（第45図、図版43、第22表）

**79**は黒色土器B類椀である。体部は丸みを持って立ち上がり直線的に口縁部に至る。外面体部下半は手持ちによるヘラケズリが行われ上半には横位のミガキが、内面には縦位と横位のミガキが施される。

図版43　SP201出土遺物



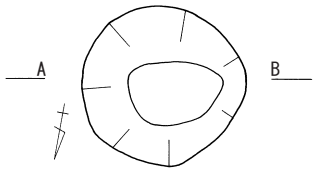

第45図　SP201出土遺物（S＝1/3）

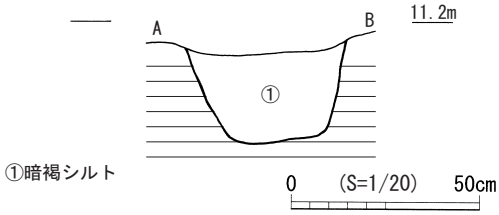
第22表　SP201出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 79 | 黒色土器Ｂ類　椀 | 底部～口縁部 | (14.1) | 5.6 | (6.2) | 体部下半は手持ちヘラケズリ後ミガキ | ミガキ | 黒褐色 | 黒褐色 | 良好 | 長石　石英　金雲母 |

④ TAK 201405調査区①区　SP250（第46図）

大調査区201405の小調査区①区8070グリッド3層から検出した。長径43cm、短径42cm の円形で、深さは25cm である。出土した遺物から11世紀前半の遺構と思われる。

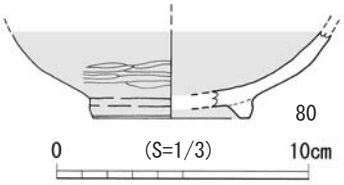



第46図　SP250平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区①区　SP250出土遺物（第47図、図版44、第23表）

**80**は黒色土器Ｂ類椀である。体部は丸みを持って立ち上がる。外面には横位のミガキが施される。内面にもミガキが施されるが摩滅のために詳細は不明である。




第47図　SP250出土遺物（S＝1/3）

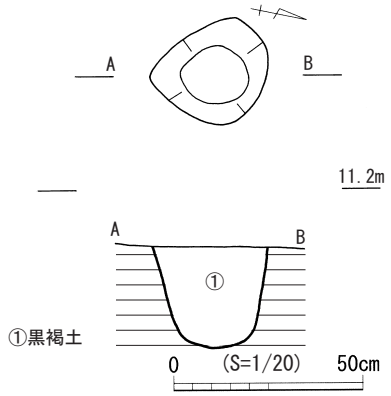
図版44　SP250出土遺物

第23表　SP250出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 80 | 黒色土器Ｂ類　椀 | 底部～体部 | ― | (3.6) | (6.1) | ミガキ | ミガキ | 黒色 | 黒色 | 良好 | 雲母　長石 |

⑤ TAK201405調査区③区　SP381（第48図）

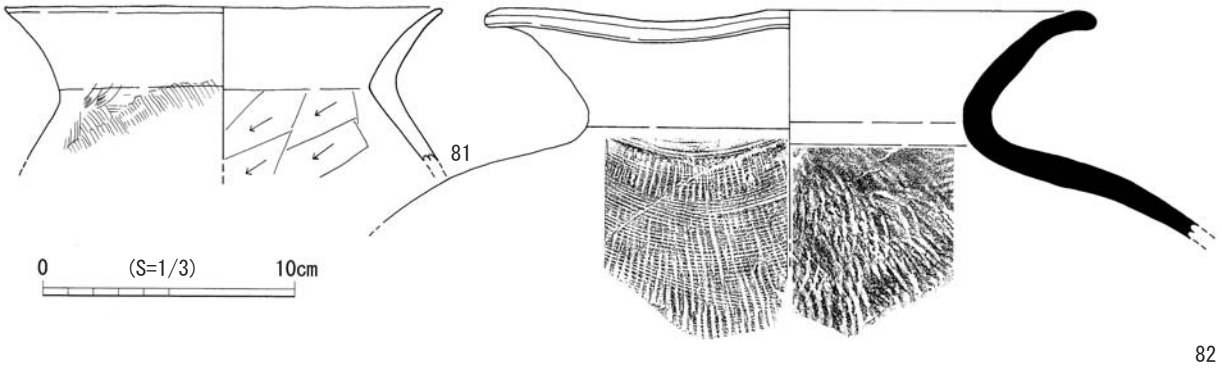
大調査区201405の小調査区③区8266グリッド3層から検出した。長径31cm、短径26cmの楕円形で、深さは26cmである。出土した遺物から8世紀前半の遺構と思われる。




第48図　SP381平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区③区　SP381出土遺物（第49図、図版45、第24表）

**81**は土師器甕の肩部より上位である。最大径は肩部にあると思われる。内面には斜位のヘラケズリ痕が残り頸部との境に稜を作る。**82**は須恵器甕の肩部より上位である。丸みを持った肩部から頸部は大きく外反し、同じ厚さで口縁部に至り外反する。焼成の際の歪みで口縁端部は波打つ。体部には並行タタキ目の上からカキメが施され、内面には青海波文の当て具痕が残る。




第49図　SP381出土遺物（S＝1/3）

図版45　SP381出土遺物

第24表　SP381出土　土器観察表

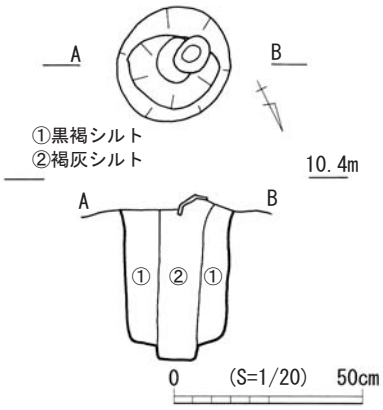
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 81 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | 17.1 | 6 | — | — | 斜位の<br>ヘラ削り痕 | 橙色 | 橙色 | 良好 | 雲母　長石　石英<br>赤色粒子 |
| 82 | 須恵器　甕 | 口縁部～体部 | (22.8) | 9 | — | 体部に<br>並行タタキ目<br>後カキメ | 青海波の<br>当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 歪み有り | 長石 |

⑥ TAK201405調査区

④区　SP611（第50図、図版46）

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド3層から検出した。長径32cm、短径28cmの円形で、深さは42cmである。柱痕が残る。土師器小皿が倒位で出土した。出土した遺物から11世紀前半の遺構と思われる。

図版46　SP611　遺物出土状況（東から）

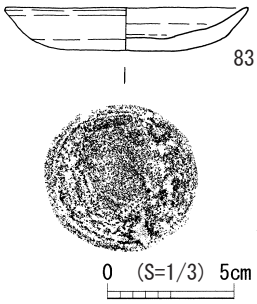



第50図　SP611平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区④区　SP611出土遺物（第51図、図版47、第25表）

**83**は土師器小皿である。体部は丸みを持って立ち上がる。切り離しは右回転のヘラ切りである。

図版47　SP611出土遺物



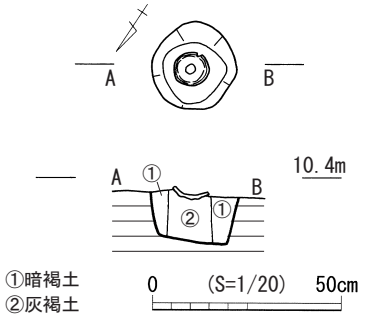

第51図　SP611出土遺物（S＝1/3）

第25表　SP611出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 83 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9.5 | 1.8 | 4.5 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石　石英 | 右回転ヘラ切り |

⑦ TAK201405調査区④区　SP664（第52図、図版48）

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド3層から検出した。長径23cm、短径22cmの円形で、深さは23cmである。土師器小皿が正位で出土した。出土した遺物から11世紀前半の遺構と思われる。

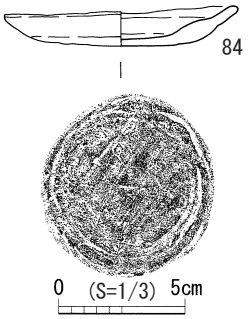



第52図　SP664平・断面図（S＝1/20）

図版48　SP664遺物出土状況（東から）

TAK201405調査区④区　SP664出土遺物（第53図、図版49、第26表）

**84**は土師器小皿である。体部はわずかに外反し口縁部に至る。切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。




第53図　SP664出土遺物（S＝1/3）

図版49　SP664出土遺物

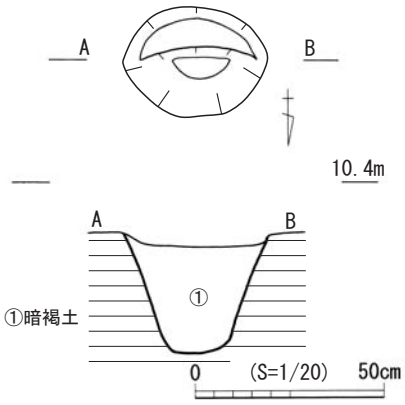
第26表　SP664出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 84 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9 | 1.6 | 5.5 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　角閃石<br>石英　赤色粒子 | 回転ヘラ切り　板状圧痕 |

⑧ TAK201405調査区④区　SP680（第54図、図版50）

大調査区201405の小調査区④区8062グリッド3層から検出した。長径39cm、短径29cmの楕円形で、深さは27cmである。出土した遺物から10世紀前半の遺構と思われる。

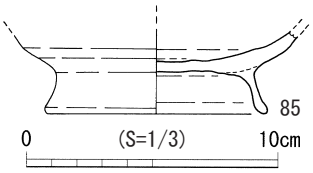
図版50　SP680　遺物出土状況（南東から）




第54図　SP680平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区④区　SP680出土遺物（第55図、図版51、第27表）

**85**は土師器椀底部である。体部は丸みを持って立ち上がる。細く高い高台は外に張り出す。




第55図　SP680出土遺物
（S＝1/3）

図版51　SP680出土遺物

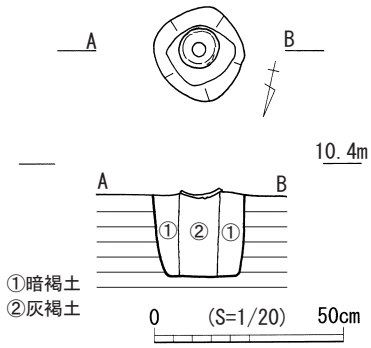
第27表　SP680出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 85 | 土師器　椀 | 底部 | — | (3.2) | 8.4 | — | — | 灰白色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　精良 |

⑨ TAK201405調査区④区　SP701（第56図、図版52）

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド3層から検出した。長径25cm、短径23cmの円形で、深さは21cmである。SD5を切り、柱痕が残る。出土した遺物から11世紀中頃の遺構と思われる。

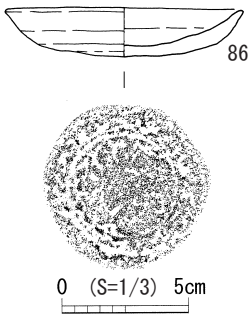
図版52　SP701遺物出土状況（東から）




第56図　SP701平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区④区　SP701出土遺物（第57図、図版53、第28表）

**86**は土師器小皿である。体部は丸みを持って立ち上がる。切り離しは右回転のヘラ切りである。




第57図　SP701出土遺物
（S＝1/3）

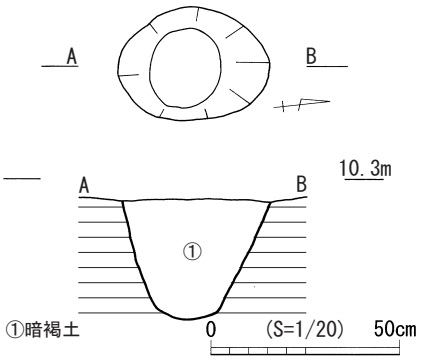
図版53　SP701出土遺物

第28表　SP701出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 86 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9.2 | 1.8 | 5.2 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　雲母　角閃石 | 右回転ヘラ切り |

⑩ TAK201405調査区④区　SP704（第58図）

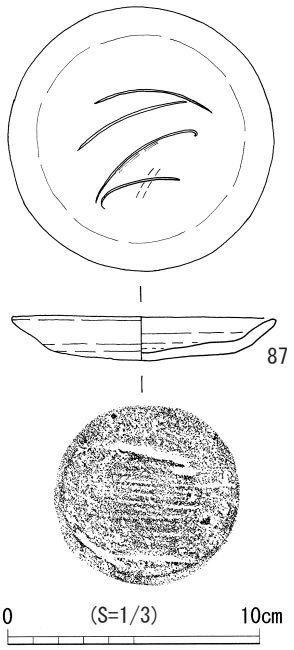
大調査区201405の小調査区④区7862グリッド4層から検出した。長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さは31cmである。出土した遺物から11世紀前半の遺構と思われる。




第58図　SP704平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区④区　SP704出土遺物（第59図、図版54、第29表）

**87**は土師器小皿である。丸みを持った底部から体部は直線状に立ち上がる。切り離しは右回転のヘラ切りで板状圧痕が残る。外面には回転によるナデで付いた斜位の傷が、内面には強いナデで付いた傷が残る。



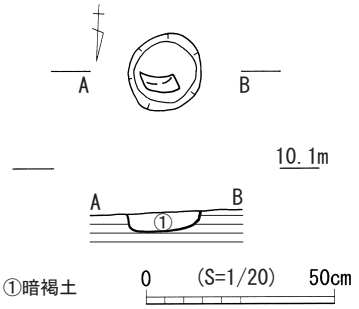

第59図　SP704出土遺物（S＝1/3）

図版54　SP704出土遺物

第29表　SP704出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 87 | 土師器　小皿 | 完形 | 10.2 | 1.6 | 7.2 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | 右回転ヘラ切り　板状圧痕、内面強いナデ |

⑪ TAK201405調査区④区　SP960（第60図）

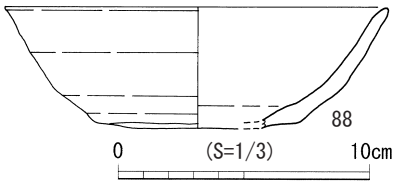



第60図　SP960平・断面図（S＝1/20）

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド4層から検出した。長径21cm、短径19cmの円形で、深さは5cmである。出土した遺物から9世紀前半の遺構と思われる。

TAK201405調査区④区　SP960出土遺物（第61図、図版55、第30表）

**88**は土師器杯である。体部はわずかに内湾した後直線状に立ち上がる。切り離しは右回転のヘラ切りでヘラケズリ等の調整は行われない。




第61図　SP960出土遺物
（S＝1/3）

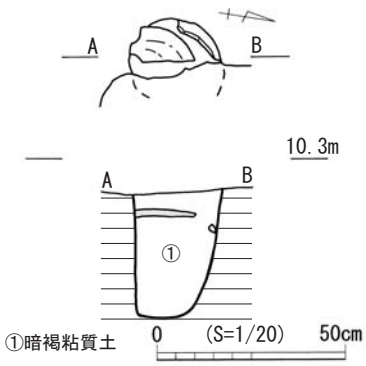
図版55　SP960出土遺物

第30表　SP960出土　土器観察表

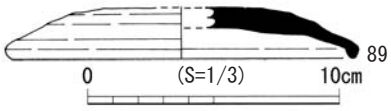
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 88 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.9) | 4.8 | (7.9) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | 右回転ヘラ切り |

⑫ TAK201405調査区⑥区　SP1488（第62図）

大調査区201405の小調査区⑥区7264グリッド4層から検出した。長径21cm、短径19cmの円形で、深さは5cmである。出土した遺物から8世紀後半の遺構と思われる。




第62図　SP1488平・断面図
（S＝1/20）




第63図　SP1488出土遺物（S＝1/3）

図版56　SP1488出土遺物

TAK201405調査区⑥区　SP1488出土遺物（第63図、図版50、第31表）

**89**は生焼けの須恵器杯蓋である。天井部は回転ヘラケズリにより平坦に作られている。口縁端部は下方へ折れ曲がるが鋭さを欠いている。

第31表　SP1488出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 天井径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 89 | 須恵器　杯蓋 | 口縁部～天井部 | (13.5) | 2 | (5.6) | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 不良 | 長石 | 天井部は回転ヘラケズリ |

(8)集石(SS)

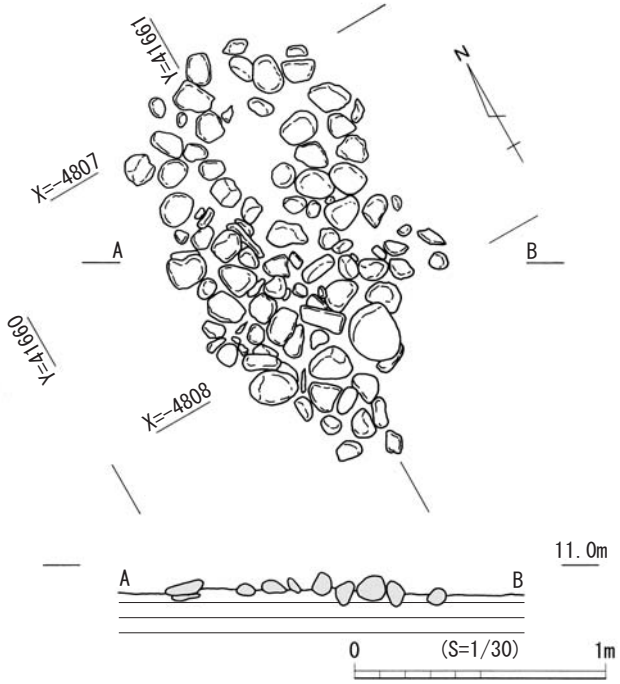
今回報告する集石は1基である。

**①TAK201405調査区③区　SS2(第64図、図版57・58)**

大調査区201405の小調査区③区8066グリッド2層からプランを検出した。長辺3.4m、短辺1.7m、深さ15cmを測る拳～人頭大の礫が浅く集まる。

**TAK201405調査区③区　SS2出土遺物(第65図、図版59、第32・33表)**

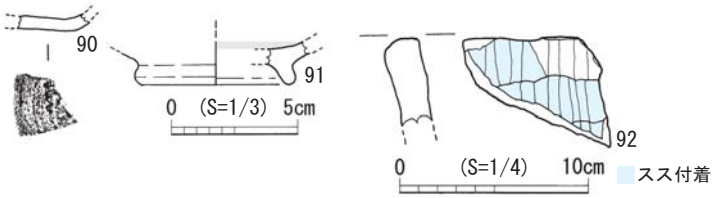
**90**は土師器杯底部である。回転ヘラ切り痕が残る。小片のために底径は計測できなかった。**91**は黒色土器A類椀の底部片である。わずかに外に張り出す高台はていねいに貼り付けられている。**92**は縦耳付き石鍋の口縁部片である。外面には煤が付く。これらの遺物からSS2は11世紀代の遺構と思われる。




第64図　SS2平・断面図(S＝1/30)

図版57　SS2　検出状況(東から)

図版58　SS2　半截状況(北から)




第65図　SS2出土遺物(S＝1/3、石鍋1/4)

図版59　SS2出土遺物

第32表　SS2出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 90 | 土師器　杯 | 底部 | — | (0.7) | — | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 回転ヘラ切り |
| 91 | 黒色土器Ａ類　椀 | 底部 | | (1.7) | (5.8) | — | — | 浅黄橙色 | オリーブ黒色 | 良好 | 石英　角閃石 | |

第33表　SS2出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 92 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | — | (5.8) | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | スス付着 |

(9)墓(ST)

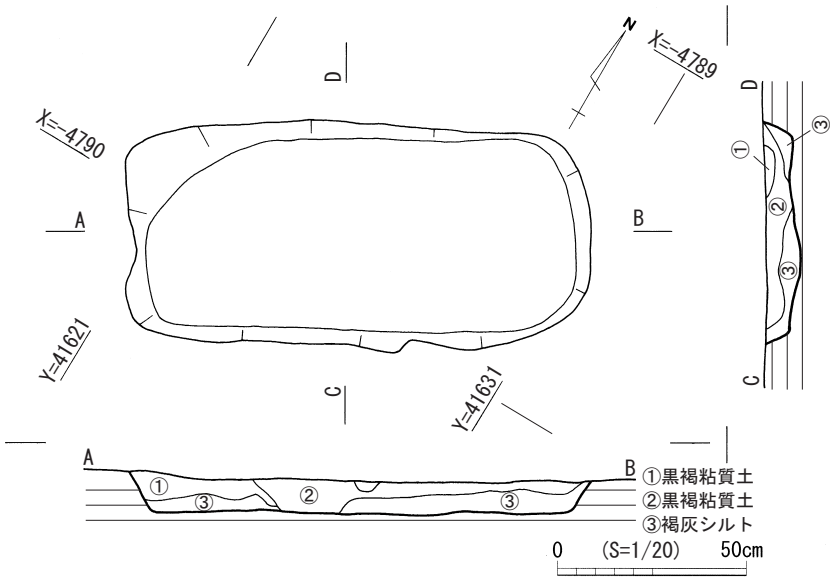
今回報告する墓は1基である。

①TAK201405調査区④区　ST5(第66図、図版60・61)

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド3層から検出した。長軸1.2m、短軸0.6mを測る隅丸方形で深さは9cmである。主軸はN61°Eである。遺物の出土はなかったため、古代よりも新しい可能性もある。

図版60　ST5　半截状況
(南から)

図版61　ST5　完掘状況
(北から)



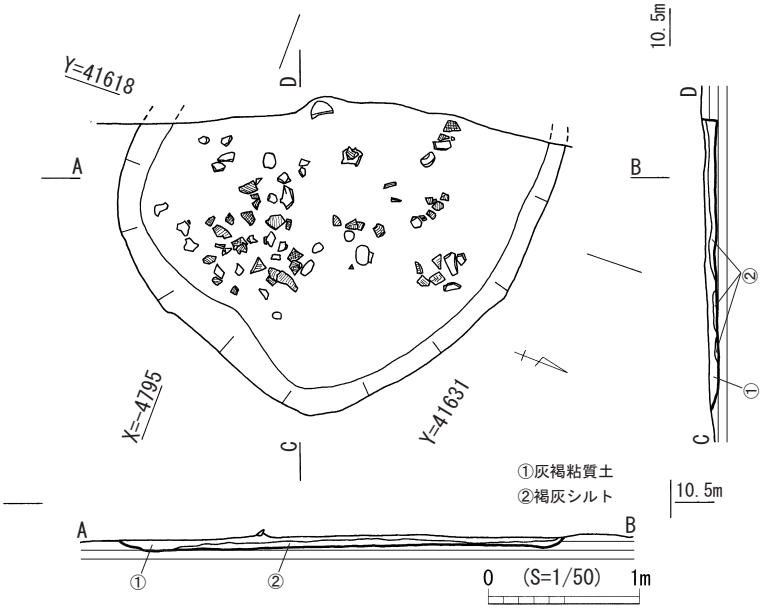

第66図　ST5平・断面図(S＝1/20)

(10)遺物集積(SU)

今回報告する遺物集積は1基である。

① TAK201405調査区④区　SU11(第67図、図版62・63)

大調査区201405の小調査区④区7860グリッド3層から検出した。確認長軸(2.5m)、確認短軸(2.4m)、深さ8cmの楕円形と思われる浅い窪みに須恵器片が集積していた。西側は2012年度に調査を行った201202調査区⑤区であるが、この時には本遺構を確認できていない。遺構が浅いことと、須恵器の集積が西側に向かうにしたがい希薄になっていることから、遺構を確認できなかったと思われる。



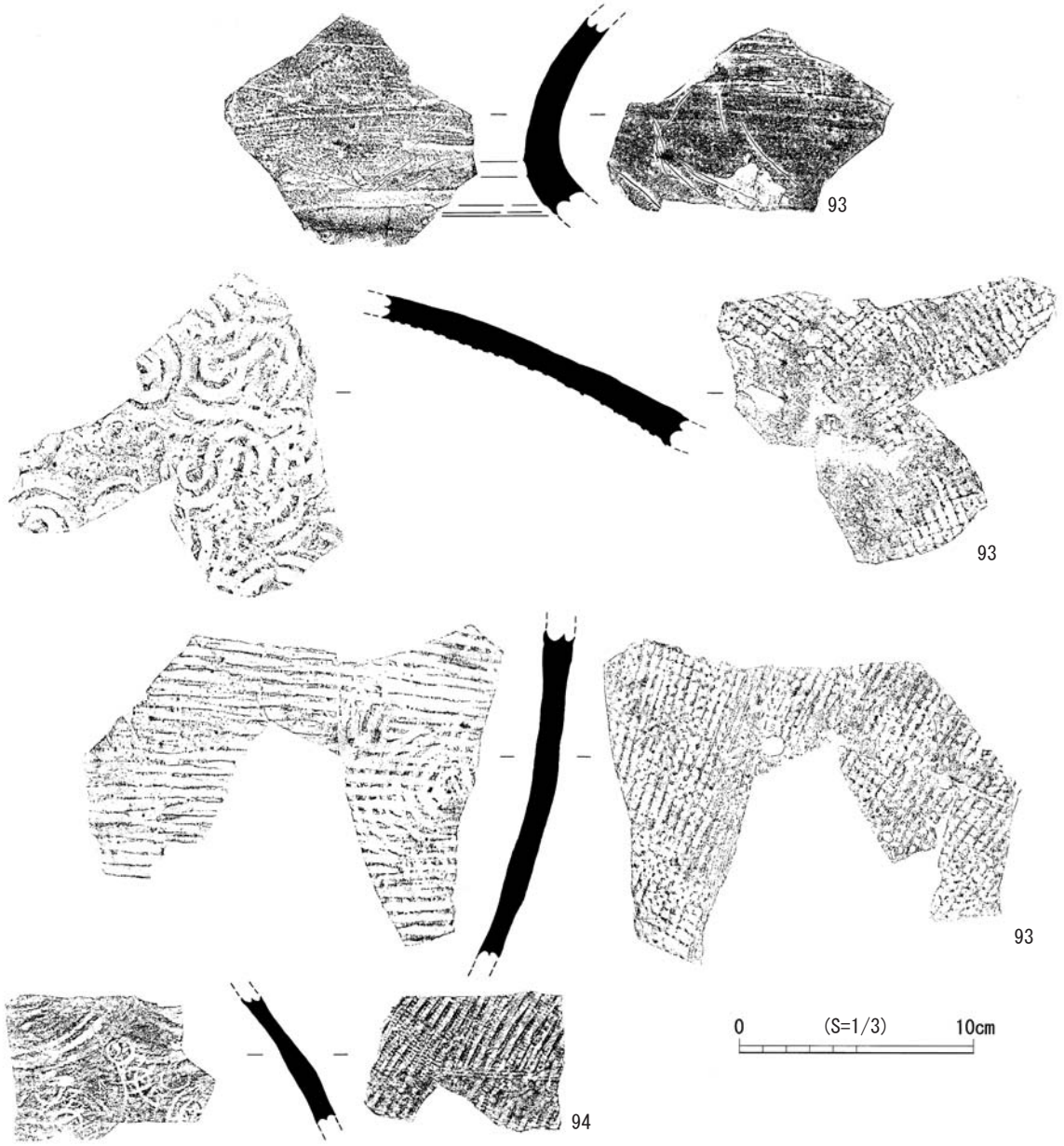

第67図　SU11平・断面図(S＝1/50)

図版62　SU11　遺物出土状況(東から)

図版63　SU11　完掘状況(東から)

TAK201405調査区④区　SU11出土遺物(第68図、図版64、第34表)

**93**は硬質に焼成された須恵器大甕の同一個体である。頸部片には内面に強いヨコナデ痕が残る。肩部片の外面には格子目のタタキ痕が、内面には同心円の当て具痕が残る。胴部片の外面には格子目のタタキ痕が、内面には同心円の当て具痕の上から施された並行の当て具痕が残る。**94**も大甕の体部片であるが、軟質である。外面には並行タタキ痕が、内面にはナデの下に同心円の当て具痕が残る。




第68図　SU11出土遺物(S＝1/3)

第34表　SU11出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 93 | 須恵器　甕 | 頸部 | — | (8.4) | — | — | 強い ヨコナデ痕 | オリーブ黒色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| | | 肩部 | — | (4.4) | — | 格子目の タタキ痕 | 同心円の 当て具痕 | 灰オリーブ色 | 褐灰色 | | |
| | | 胴部 | — | (14) | — | 格子目の タタキ痕 | 同心円の当て 具痕、並行の 当て具痕 | 褐色 | 灰褐色 | | |
| 94 | 須恵器　甕 | 体部 | — | (5.5) | — | 並行タタキ痕 | 同心円の当て 具痕、ナデ | 灰色 | にぶい褐色 | やや不良 | 長石　黒色粒子 |

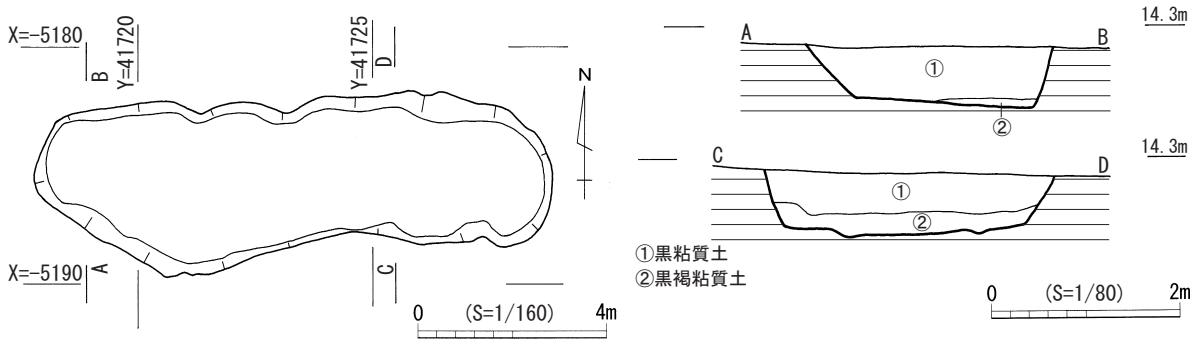
図版64　SU11出土遺物

(11)不明遺構(SX)

今回報告する不明遺構は2基である。

① TAK201403調査区③区　SX4(第69図、図版65・66)

大調査区201403の小調査区③区1870・1872グリッド4層からプランを検出した。長軸11.0m、短軸3.1m を測る楕円形で深さは0.6m である。埋土は黒色粘質土の単層で土師器高台付大杯が出土した。



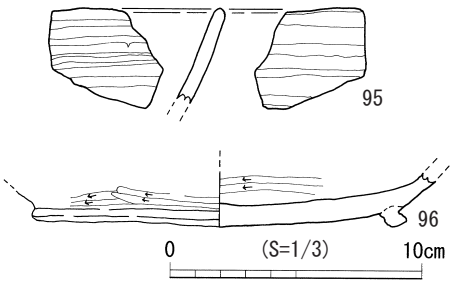

第69図　SX4平・断面図(平面 S＝1/160、断面 S＝1/80)

図版65　SX4　完掘状況(南から)

図版66　SX4　完掘状況(東から)

TAK201403調査区③区　SX4出土遺物(第70図、図版67、第35表)

**95**は内外面に幅4～5mm の横位のミガキが施される土師器口縁部である。内面は密に外面は粗く施される。**96**は土師器高台付大杯底部である。高台内には右回転のヘラケズリが施され、外方に伸びる




第70図　SX4出土遺物(S＝1/3)

図版67　SX4出土遺物

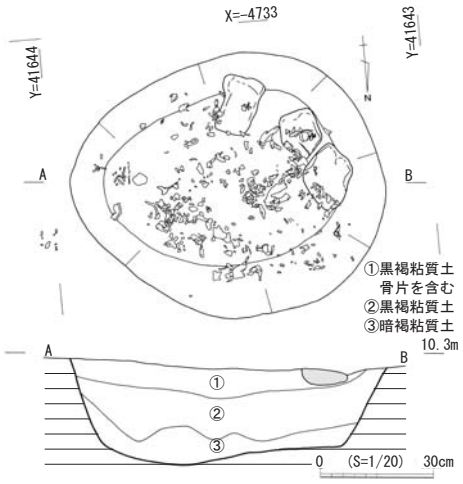
短い高台が貼り付けられる。体部内外面に横位のヘラミガキが施される。
胎土や調整方法から95と同一個体であろう。いずれも8世紀代のものと思われる。

第35表　SX4出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 95 | 皿か杯 | 口縁 | — | (3.8) | — | ミガキ | ミガキ | 明褐色 | 明褐色 | 良好 | 精良　微細な長石 | 大型。279と同一個体の可能性あり |
| 96 | 高台付き大杯 | 底部 | — | (2.2) | 13.6 | ミガキ | ミガキ | 橙色 | 橙色 | 良好 | 雲母　赤色粒子 | 大型。273と同一個体の可能性あり |

② TAK201405調査区⑥区　SX4(第71図、図版68・69)

大調査区201405の小調査区⑥区7264グリッド4層から検出した。長軸83cm、短軸70cm を測る楕円形で深さは25cm である。埋土は3層に分層ができ、人頭大の扁平な礫が3個上面に見られた。焼骨片を多く含む。出土した遺物の年代から10世紀代のものと思われる。



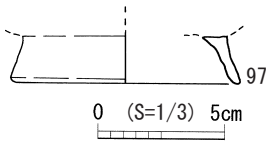

第71図　SX4平・断面図(S＝1/20)

図版68　SX4　検出状況(北から)

図版69　SX4　半截状況(北から)

TAK201405調査区⑥区　SX4出土遺物(第72図、図版70、第36表)

97は底部との接合箇所ではがれた土師器椀の高台部分である。細く高い高台で作りはていねいである。




第72図　SX4出土遺物(S＝1/3)

図版70　SX4出土遺物

第36表　SX4出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 97 | 土師器　椀 | 高台部分 | — | (1.8) | (8.8) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 精良 |

(12)自然流路(NR)

今回報告する自然流路は1条である。

**① TAK201407調査区④区　NR1(第5図、図版71・72)**

大調査区201407の小調査区④区6654・6656・6856グリッド3層からプランを検出した。確認長(南‐北)21m、最大幅5mを測る。右岸は調査区外に位置する。南から北へ流れる流路で、途中で西へ大きく曲がる。伏せた土師器椀の高台の上に伏せた椀底部が乗っていた。

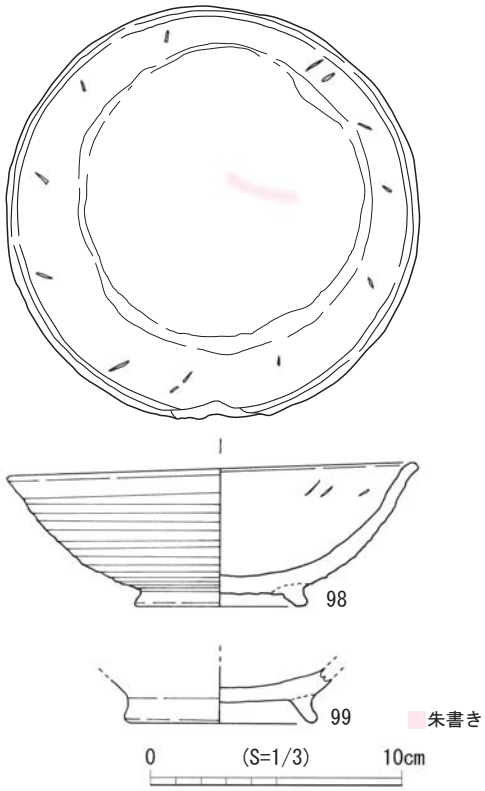
図版71　NR1　完掘状況(北から)

図版72　NR1　遺物出土状況

**TAK201407調査区④区　NR1出土遺物(第73図、図版73、第37表)**

**98**は土師器椀である。高台は中央寄りに位置し、体部は丸みを持って立ち上がり口縁部で外反する。体部内面にはコテあて痕が残り、体部外面は口縁部下まで回転ヘラケズリが施される。見込みには朱書きと思われる「一」字が描かれ、皿等を被せたような円形の痕が残る。11世紀初頭の所産である。**99**は98の上に乗って出土した土師器椀底部である。ていねいに作られた高めの高台が外方へ向かって広がる。11世紀初頭の所産である。これらの遺物からNR1の埋没は11世紀初頭と思われる。

図版73　NR1出土遺物




第73図　NR1出土遺物(S＝1/3)

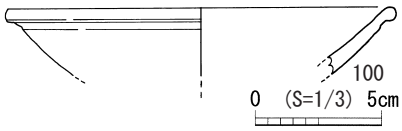
第37表　NR1出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 98 | 土師器　椀 | 完形 | 15.9 | 5.7 | 6.4 | 回転ヘラケズリ | コテあて | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　角閃石 | ④区 | 見込みに朱書き「一」の字 |
| 99 | 土師器　椀 | 底部 | — | (2.2) | 7.2 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石 | ④区 | ていねいな作りの高台 |

(13)包含層(2層)出土の遺物

① TAK201202調査区2層　出土遺物(第74図、図版74、第38表)

**100**は体部が口縁部へ向けて大きく広がり小さな玉縁が付く白磁椀Ⅰ類である。




第74図　TAK 201202調査区2層出土遺物(S＝1/3)

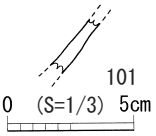
図版74　TAK201202調査区2層出土遺物

第38表　TAK201202調査区2層出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 100 | 白磁椀Ⅰ類 | 口縁部～体部 | (15) | | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 |

② TAK201403調査区2層　出土遺物(第75図、図版75、第39表)

**101**は越州窯系青磁椀Ⅰ類体部片である。




第75図　TAK201403調査区2層出土遺物(S＝1/3)

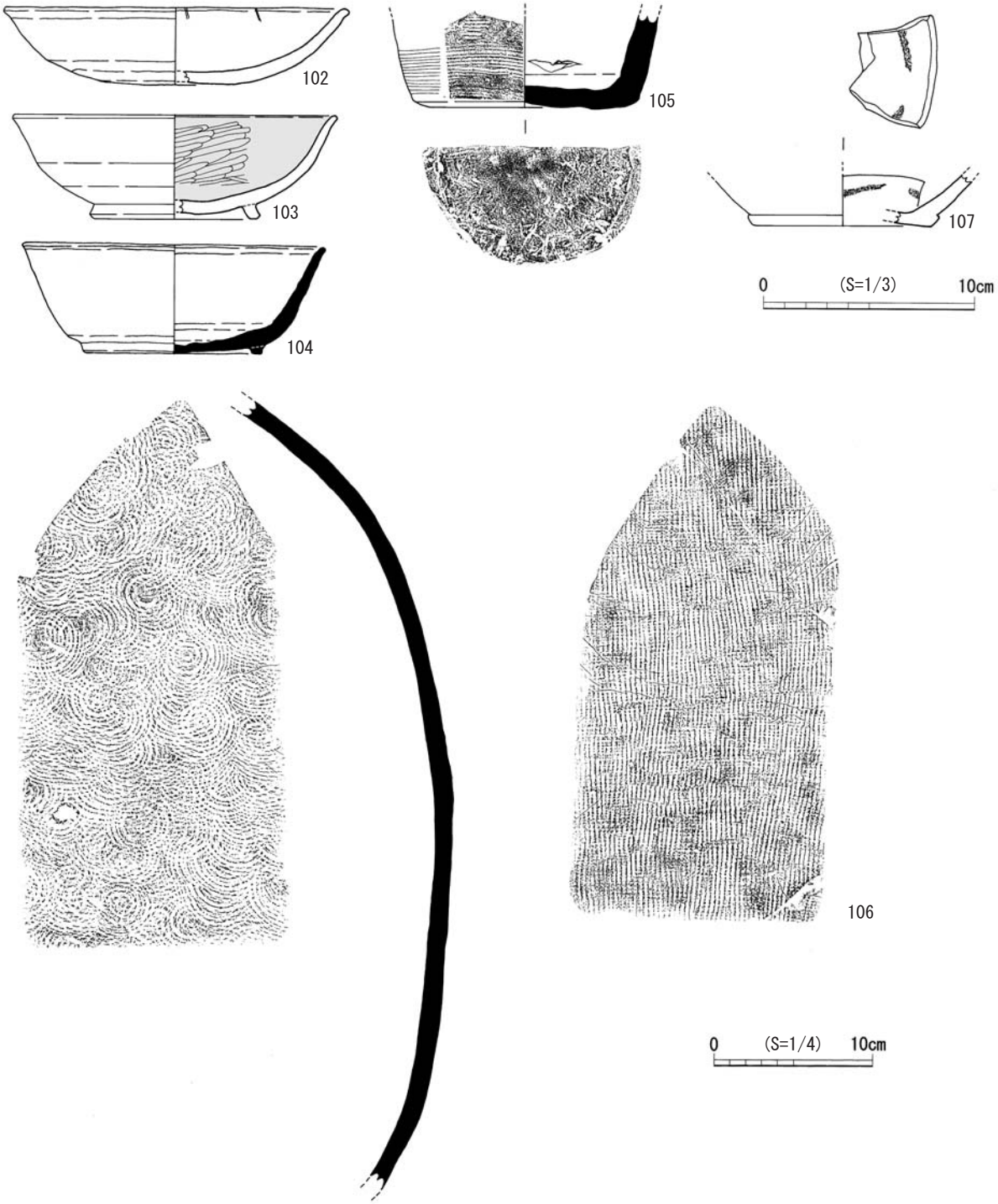
図版75　TAK201403調査区2層出土遺物

第39表　TAK201403調査区2層出土　磁器観察表

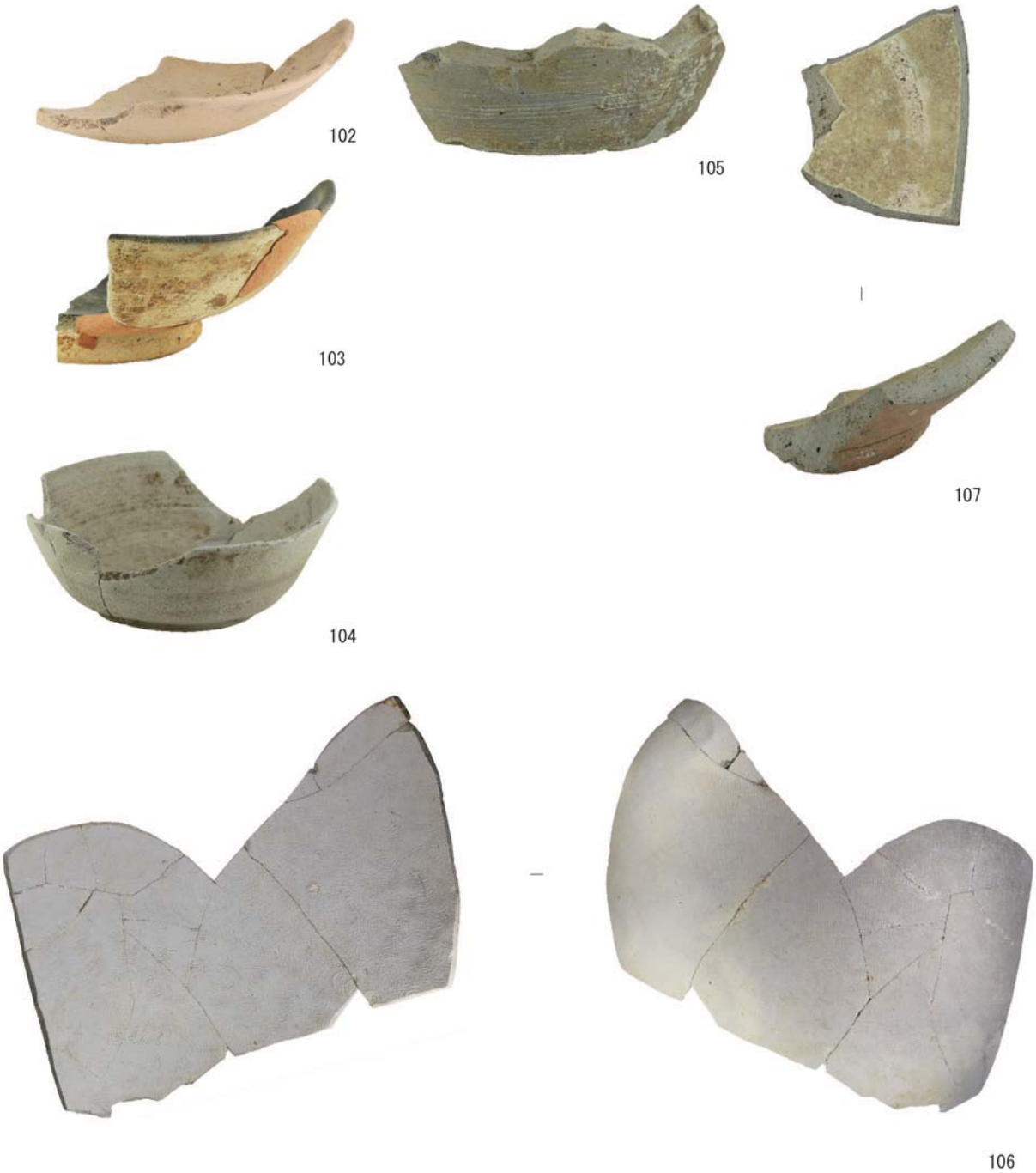
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 101 | 越州窯系青磁 | 体部 | — | (2.2) | — | — | — | 暗オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 精良 | 0870 |

③ TAK201404調査区2層　出土遺物(第76図、図版76、第40表)

**102**は丸底の杯である。切り離しは回転ヘラ切りで、外面体部下半には押し出しによる指頭痕が残る。体部内面にはコテあて痕も見られる。11世紀代のものと思われる。**103**は黒色土器A類椀である。体部は膨らみながら立ち上がり口縁部は外反する。わずかに外に張り出す高台は丁寧に貼り付けられている。内面には横位のミガキが見られる。11世紀代のものと思われる。**104**は高台付の須恵器杯である。体部は直線的に開き、断面四角形の高台は底部端に付けられる。8世紀後半のものと思われる。**105**は須恵器壺底部片である。底部には焼成の際に下に敷いた植物と思われる圧痕が残る。体部外面には粗いカキメが施される。**106**は須恵器大甕の体部片である。外面には格子目のタタキ痕が、内面には同心円の当て具痕が残る。薄く作られており焼成も良好である。**107**は越州窯系青磁椀Ⅱ類底部である。円盤状の底部で体部下半は露胎である。内面に目跡が残る。




第76図　TAK201404調査区2層　出土遺物(S＝1/3)

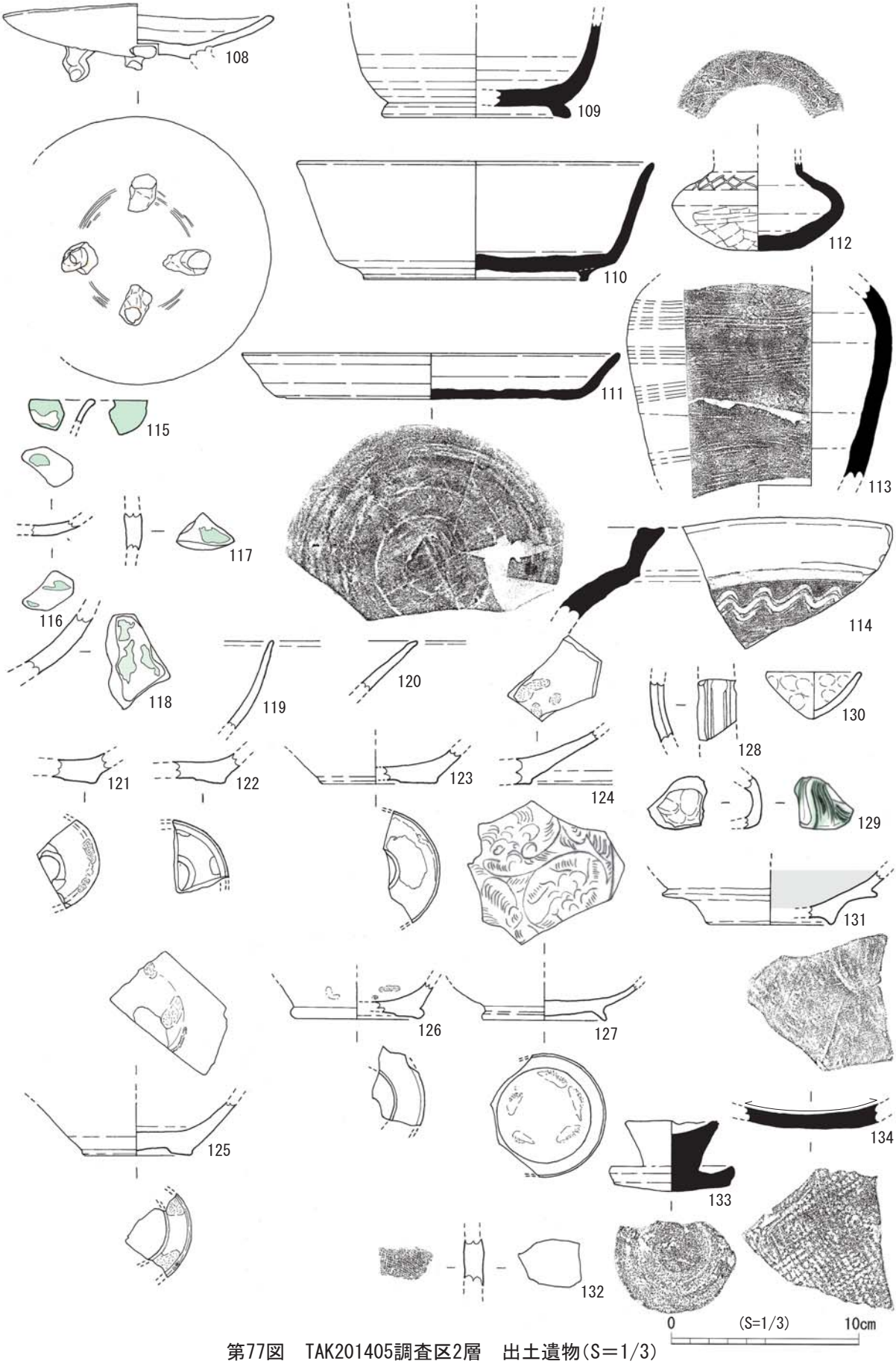



図版76　TAK201404調査区2層出土遺物

## 第40表　TAK201404調査区2層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 102 | 土師器　丸底杯 | 底部～口縁部 | (16) | 3.6 | (6) | 指オサエ | コテ当て痕 | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | A6東　8672 | |
| 103 | 黒色土器Ａ類　椀 | 底部～口縁部 | (15) | 4.9 | (6.6) | — | 横位のミガキ | 明黄褐色 | 黒色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 | A6東　8670 | |
| 104 | 須恵器　高台付杯 | 底部～口縁部 | 14 | 5.1 | 7.8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | | |
| 105 | 須恵器　壺 | 底部～口縁部 | — | (4.4) | 8.4 | カキメ | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | A6東　8672 | 底部の圧痕．植物か |
| 106 | 須恵器　大甕 | 体部 | — | (49.6) | — | 格子目のタタキ | 同心円の当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | A6東　8672 | |
| 107 | 越州窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 底部～口縁部 | (8.2) | (2.4) | — | — | — | にぶい黄色 | 灰褐色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B7西　9472 | |

④ TAK201405調査区2層　出土遺物(第77図、図版77、第41・42表)




第77図　TAK201405調査区2層　出土遺物(S＝1/3)

図版77　TAK201405調査区2層出土遺物

108は脚付きの皿である。「く」の字に曲がる足が4箇所に付く。109〜114は須恵器である。109は高台付きの杯である。高台は外に張り出し畳付は幅が最大になる。体部は丸みを持って立ち上がる。8世紀後半の荒尾産と思われる。110は大振りの高台付杯である。高台は端部に近い位置に配置され端部がわずかに張り出す。体部は直線的に立ち上がり口縁部でわずかに外反する。8世紀中頃の所産と思われる。111は皿である。回転ヘラ切り後回転ヘラケズリが行われる。生焼けで、重ね焼き部分は酸化炎焼成のままで赤褐色を呈する。112は扁平長頸壺である。そろばん型の体部の肩には線刻による連続×文が巡り、体部下半は手持ちヘラケズリで調整を行う。時期等詳細は不明である。113は壺体部片である。外面には粗いカキメが施される。軟質の焼成である。114は二重口縁大甕の頸部〜口縁部である。頸部には二条の波状沈線が施され、屈曲部の上下には凹線が巡る。口縁部は直立し、端部は広がり状面が凹む。8世紀後半の荒尾産と思われる。115〜118は緑釉陶器である。115はくすんだ褐色の胎土に深緑の釉薬が掛かる椀口縁部である。防長産か。116もくすんだ褐色の胎土に深緑の釉薬が掛かる。皿の底部片と思われる。117・118は胎土も釉調も同じで同一固体と思われる。胎土は黄褐色の軟質で、明るい緑色の釉が外面のみ掛かる。内面は無釉で成形時の凹凸が残ることから瓶等の袋物と考えられる。119〜127は越州窯系青磁椀である。119・120は椀Ⅰ類口縁部片である。121〜125は椀Ⅰ類底部片である。いずれも畳付の釉を掻き取り重ね焼きの目跡が残る。125は輪状高台でそれ以外は蛇ノ目高台である。126は椀Ⅱ類底部片である。円盤状高台で、体部下半は露胎である。127は浅椀Ⅲ類である。高台は外方に開く撥型で体部は丸みを持って立ち上がる。見込みに花文であろうか毛彫りが施される。胎土は精良で全面に施釉される。高台内には5個の目跡がある。128は越州窯系青磁水注の把手である。外面に二条の沈線が入る。胎土は緻密で深いオリーブ色の釉が掛かる。129は細工物と思われる製品の部分である。襞状の沈線を持ち型押しにより作り出されている。外面には緑と褐色の釉が施され内面は露胎である。長沙窯か。130は杯状の土製品である。外面に指頭痕が残る。131は黒色土器A類の托上椀である。高台部分は内向きに付き、受け部に当たる突起部分は水平に付く。10世紀後半〜11世紀前半のものと思われる。132は製塩土器である。内面に布目痕が残る。133は須恵器の灯火具である。皿状の底部に受け皿が付けられる。類例を(15)小結に掲載した。焼成は甘く軟質である。右回転ヘラケズリが施された底部外面に墨痕と思われる変色が見られるが、判読できない。134は転用硯である。外面に格子目のタタキ痕と内面に青海波の当て具痕が残る須恵器甕の胴部片を利用している。内面の青海波文は使用のために磨り減り平滑となっている。

第41表　TAK201405調査区2層出土　土器・陶磁器観察表

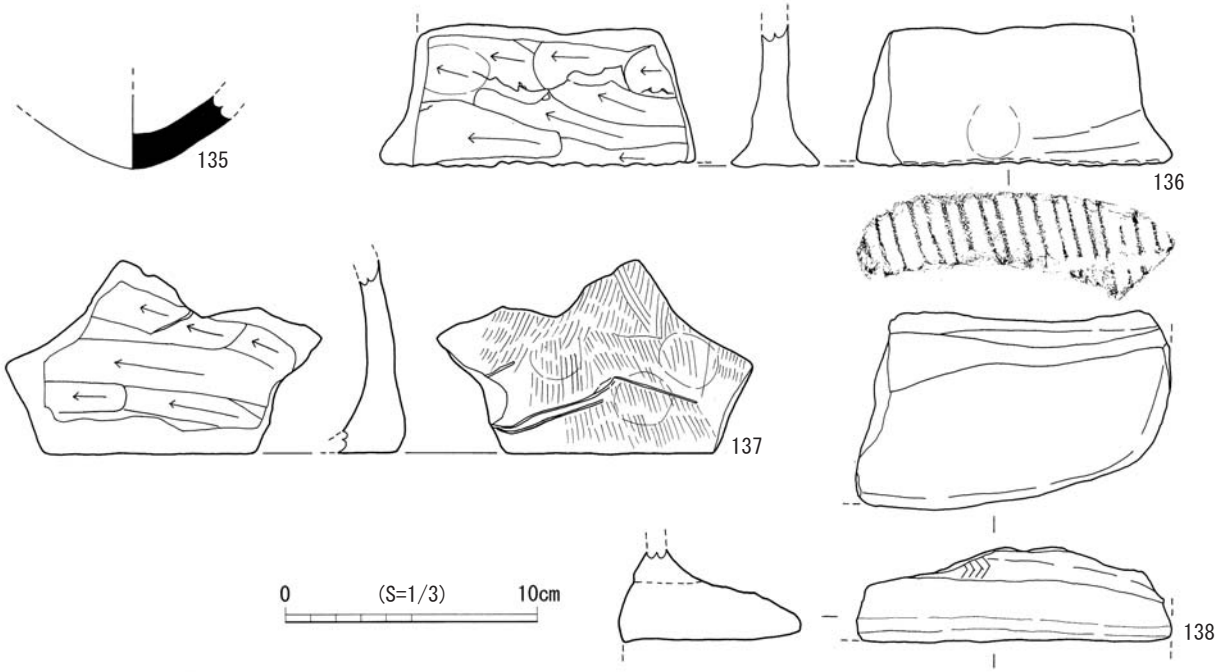
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 108 | 土師器　脚付皿 | 底部 | 14.3 | 4.1 | — | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石 | ①7870 | 「く」の字に曲がる脚が4箇所につく |
| 109 | 須恵器　高台付杯 | 底部～体部 | — | (5.1) | (9.7) | — | — | 灰黄色 | 暗灰黄色 | 良好 | 長石<br>黒色粒子 | ③8066 | 荒尾産 |
| 110 | 須恵器　高台付杯 | 底部～口縁部 | (18.2) | 6.2 | 11.3 | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石<br>黒色粒子 | ①7870 | |
| 111 | 須恵器　皿 | 底部～口縁部 | (19.7) | 2.4 | (15) | — | — | 灰白色 | にぶい橙色 | 不良 | 長石 | ⑥ | 回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ |
| 112 | 須恵器　偏平長頸壺 | 底部～頸部 | — | (4.6) | — | 手持ち<br>ヘラケズリ | — | 明オリーブ<br>灰色 | オリーブ<br>灰色 | 良好 | 長石　石英 | ④8064 | 時期等詳細不明<br>肩に連続×文の線刻 |
| 113 | 須恵器　壺 | 体部 | — | (10.2) | — | 粗いカキメ | — | 灰白色 | 灰白色 | 不良 | 長石 | ①8272 | |
| 114 | 須恵器　大甕 | 口縁部～頸部 | — | (4.9) | — | — | — | 褐灰色 | 褐灰色 | 良好 | 長石<br>黒色粒子 | ①8070 | 頸部に2条の波状沈線　屈曲部に凹線が巡る　荒尾産 |
| 115 | 緑釉陶器　椀 | 口縁部 | (15.6) | (1.2) | — | — | — | 鶯色 | 抹茶色 | 良好 | 精良<br>微細な石英 | ⑤7464 | 防長産か |
| 116 | 緑釉陶器　皿か | 底部か | — | (0.7) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 土師質<br>精良 | ②7868 | |
| 117 | 緑釉陶器　瓶等の袋物 | 体部 | — | (1.9) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ③7866 | 118と同一個体か |
| 118 | 緑釉陶器　瓶等の袋物 | 体部 | — | (3.1) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ③7666 | 117と同一個体か |
| 119 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (4.7) | — | — | — | 暗オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 精良 | ① | |
| 120 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (2.7) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ④7862 | |
| 121 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.6) | — | — | — | オリーブ色 | オリーブ色 | 良好 | 精良 | ②7486 | 蛇ノ目高台 |
| 122 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.6) | — | — | — | オリーブ黄色 | オリーブ黄色 | 良好 | 精良 | ②8068　7868 | 蛇ノ目高台 |
| 123 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.8) | (5.8) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ④7862 | 蛇ノ目高台 |
| 124 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (2.8) | — | — | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | 精良 | ⑤7462 | 蛇ノ目高台 |
| 125 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (3.8) | (5.6) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 精良 | ④7862 | 輪状高台 |
| 126 | 越州窯系青磁 椀 Ⅱ類 | 底部 | — | (2.1) | (6.6) | — | — | 浅黄橙色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石 | ②7868 | 円盤状高台 |
| 127 | 越州窯系青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (1.9) | (6.6) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ④7864 | 見込みに毛彫りあり花文か |
| 128 | 越州窯系青磁　水注 | 把手 | — | — | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ②8066 | 外面に二条の沈線 |
| 129 | 長沙窯系？細工物 | | — | — | — | — | — | 緑灰色　黄褐 | 灰白色 | 良好 | 精良 | ⑤9664 | 型押し成形　二彩 |
| 131 | 黒色土器 A類 托上椀 | 底部 | — | (2.9) | (5.6) | — | — | 浅黄橙色 | 黒 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石 | ⑤7262 | |
| 132 | 土師器　製塩土器 | 体部 | — | (2.5) | — | — | 布目痕 | 明褐色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石 | ① | |
| 133 | 須恵器　灯火具 | ほぼ完形 | — | (3.7) | 6.1 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 不良 | 長石 | ②7868 | 右回転ヘラケズリの底部外面に墨痕 |
| 134 | 須恵器　(甕)転用硯 | 胴部 | — | (1.3) | — | 格子目の<br>タタキ痕 | 青海波の<br>当て具痕 | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石<br>黒色粒子 | ②7848 | 内面は平滑 |

第42表　TAK201405調査区2層出土　ミニチュア土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 130 | 杯状 | ほぼ完形 | 4.9 | 2.5 | — | 指頭痕 | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | ②8068 | 手づくね |

### ⑤ TAK201406調査区2層　出土遺物(第78図、図版78、第43・44表)

**135**は鉄鉢形須恵器底部である。底部は尖底で左回転のヘラケズリにより調整を行う。焼成は軟質である。県内出土の例を(15)小結に掲載した。**136**・**137**・**138**は移動式カマドである。胎土に雲母を多く含む。**136**は設置面が「ハ」の字に広がる焚口部の底部片である。接地面には型押しによる凹凸が刻まれ、内面には横位の強いナデ痕が残る。**137**も底部片である。接地面は内側に広がり安定させている。外面には縦位のハケメが、内面には横位のヘラケズリ痕が残る。**138**は庇部である。ぼってりとした作りで端部は緩く曲線を描く。




第78図　TAK201406調査区2層　出土遺物(S＝1/3)

図版78　TAK201406調査区2層出土遺物

第43表　TAK201406調査区2層出土　土器観察表

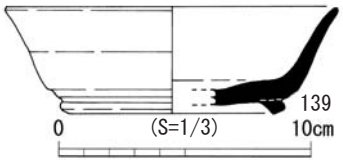
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 135 | 鉢鉢形須恵器 | 底部 | — | (2.9) | — | 左回転ヘラケズリ | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石 | ②8068 | 軟質 |

第44表　TAK201406調査区2層出土　土製品観察表

| 遺物番号 | 種類 | 部位 | 最大高(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 136 | 移動式カマド | 底部 | 5.2 | 12.2 | 3.2 | にぶい橙 | 良好 | 長石　石英　雲母　赤色粒子 | ②　7252 |
| 137 | 移動式カマド | 底部 | 7.6 | 12.0 | 1.4 | 灰白 | 良好 | 長石　石英 | ②　7050 |
| 138 | 移動式カマド | 庇部 | 3.7 | 12.4 | 3.7 | 灰黄褐 | 良好 | 長石 | ②　7252 |

⑥ TAK201407調査区2層出土遺物(第79図、図版79、第45表)

**139**は須恵器高台付杯である。断面四角形の高台は底部端近くに位置し、体部直線的に立ち上がった後口縁部で外反する。8世紀後半の所産と思われる。




第79図　TAK201407調査区2層　出土遺物(1/3)

図版79　TAK201407調査区2層出土遺物

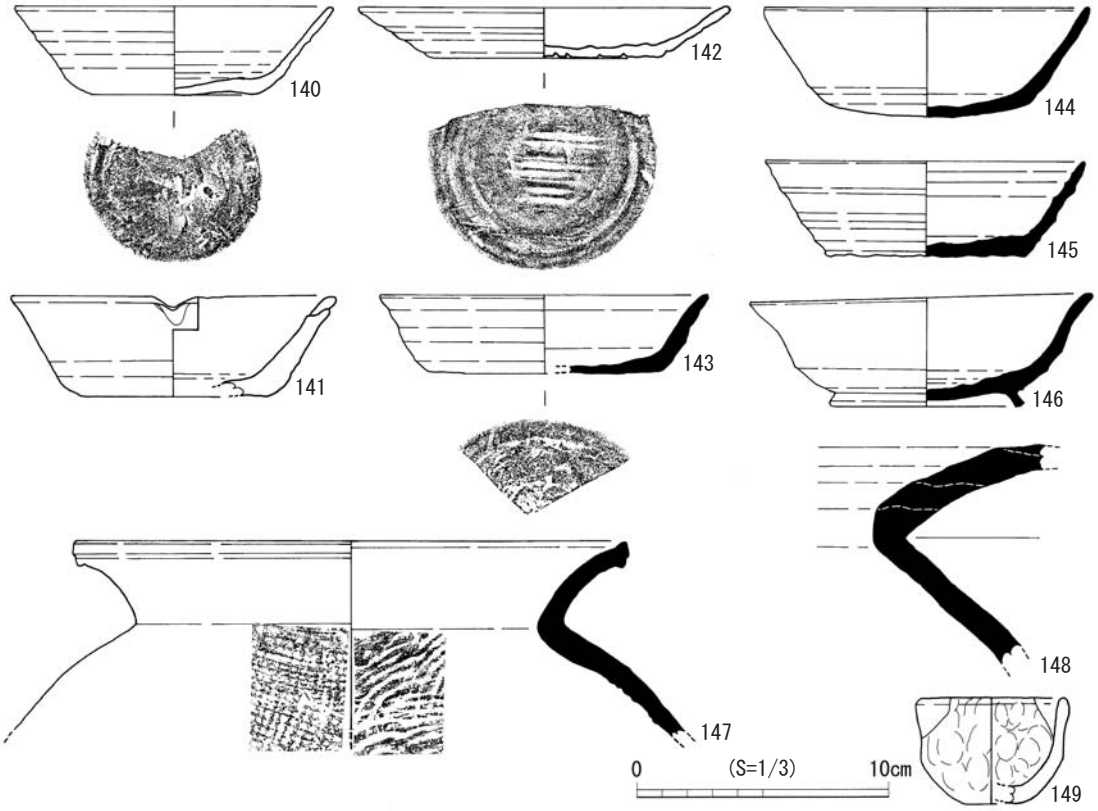
第45表　TAK201407調査区2層出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 139 | 須恵器　高台付杯 | 底部～口縁部 | (12.8) | 4.2 | (8) | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ③7652 |

(14)包含層(3層)出土の遺物

① TAK201202調査区3層　出土遺物(第80図、図版80、第46・47表)

**140・141**は土師器杯である。どちらも底部は、回転ヘラ切りのままでヘラケズリは行わない。**141**は注ぎ口が作り出されている。**140**は9世紀前半で**141**は9世紀中頃のものと思われる。**142**は浅い杯である。切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。12世紀前半のものと思われる。**143～148**は須恵器である。**143・144・145**は高台が付かない杯である。いずれも、底部は回転ヘラ切り後のヘラケズリは行っていない。8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。**146**は高台が付く杯である。高台は外に開き、体部は中位で外反する。底部から体部下半まで回転ヘラケズリが施されている。7世紀後半のものと思われる。**147**は甕の体部～口縁部である。頸部はわずかに外反しながら口縁部に至る。口縁部は肥厚した断面三角形で、1条の沈線が巡る。体部の外面には格子のタタキ痕が内面には青海波の当て具痕が残る。8世紀後半のものと思われる。**148**は大型の甕と思われる頸部片である。胴部から鋭角で曲がる頸部である。粘土紐積み成形後、体部内面はナデで頸部内面はヨコナデで調整を行う。断面および外面には成形時の粘土紐接合痕が残る。時期は不明である。**149**は手づくね土器である。内外面に指頭痕が残る。




第80図　TAK1202調査区3層　出土遺物(S＝1/3)

## 第46表　TAK201202調査区3層出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 140 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.5) | 3.5 | 6.6 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 雲母　石英　長石 | ⑥8466 | 回転ヘラ切り |
| 141 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.6) | 3.9 | (7.3) | — | — | にぶい黄橙色 | 褐色 | 良好 | 長石　石英 | ⑥8466 | 回転ヘラ切り |
| 142 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.5) | 2 | 9 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母<br>赤色粒子　角閃石 | ⑥8466 | 回転ヘラ切り　板状圧痕 |
| 143 | 須恵器　杯 | 底部～口縁部 | (12.9) | 3.1 | (9.1) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ⑥8467 | 回転ヘラ切り |
| 144 | 須恵器　杯 | 底部～口縁部 | (12.7) | 4.3 | (8) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 | ⑥8666 | 回転ヘラ切り |
| 145 | 須恵器　杯 | 底部～口縁部 | (12.5) | 3.8 | 7.6 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子　長石<br>角閃石 | ⑥8468 | 回転ヘラ切り |
| 146 | 須恵器　高台付杯 | ほぼ完形 | 13.4 | 4.5 | 7.4 | 回転ヘラケズリ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 石英　長石 | ⑥8466 | |
| 147 | 須恵器　甕 | 口縁部～体部 | (21.4) | (7.7) | — | 格子のタタキ痕 | 青海波の当て具痕 | オリーブ黒色 | 灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ⑥8466 | 1条の沈線が巡る |
| 148 | 須恵器　大型甕 | 頸部～体部 | — | (8.7) | — | — | 頸部・横ナデ<br>体部・ナデ | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 石英　長石 | ⑥8266 | 粘土紐接合痕有 |

## 第47表　TAK201202調査区3層出土　ミニチュア土器観察表

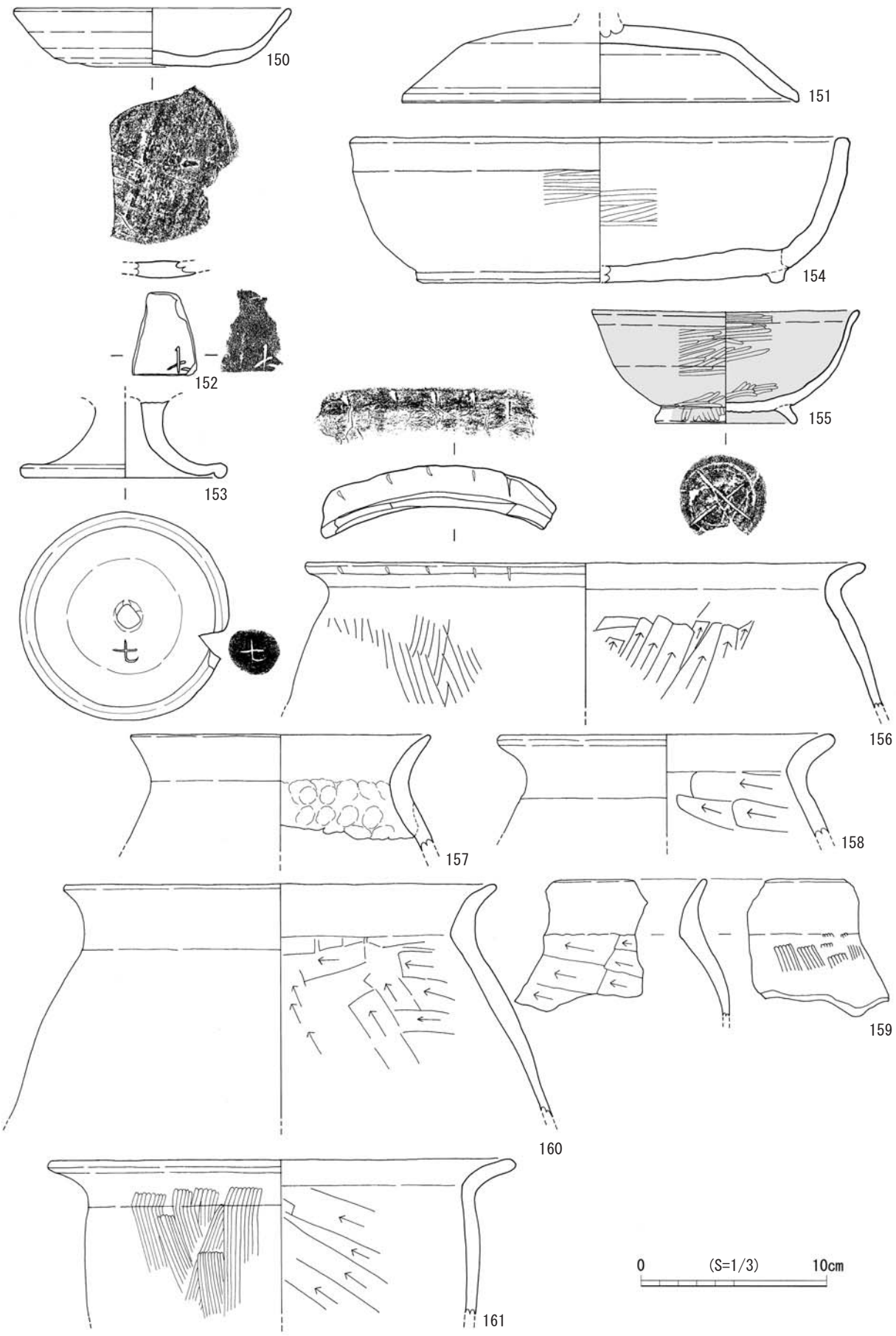
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 149 | 土師器　ミニチュア甕 | 底部～口縁部 | (5.7) | 4.2 | (2.2) | 指オサエ | 指オサエ | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 雲母　長石　角閃石 | ⑥8466 | 手づくね |

図版80　TAK201202調査区3層出土遺物

② TAK201404調査区3層　出土遺物（第81～83図、図版81～83、第48～50表）

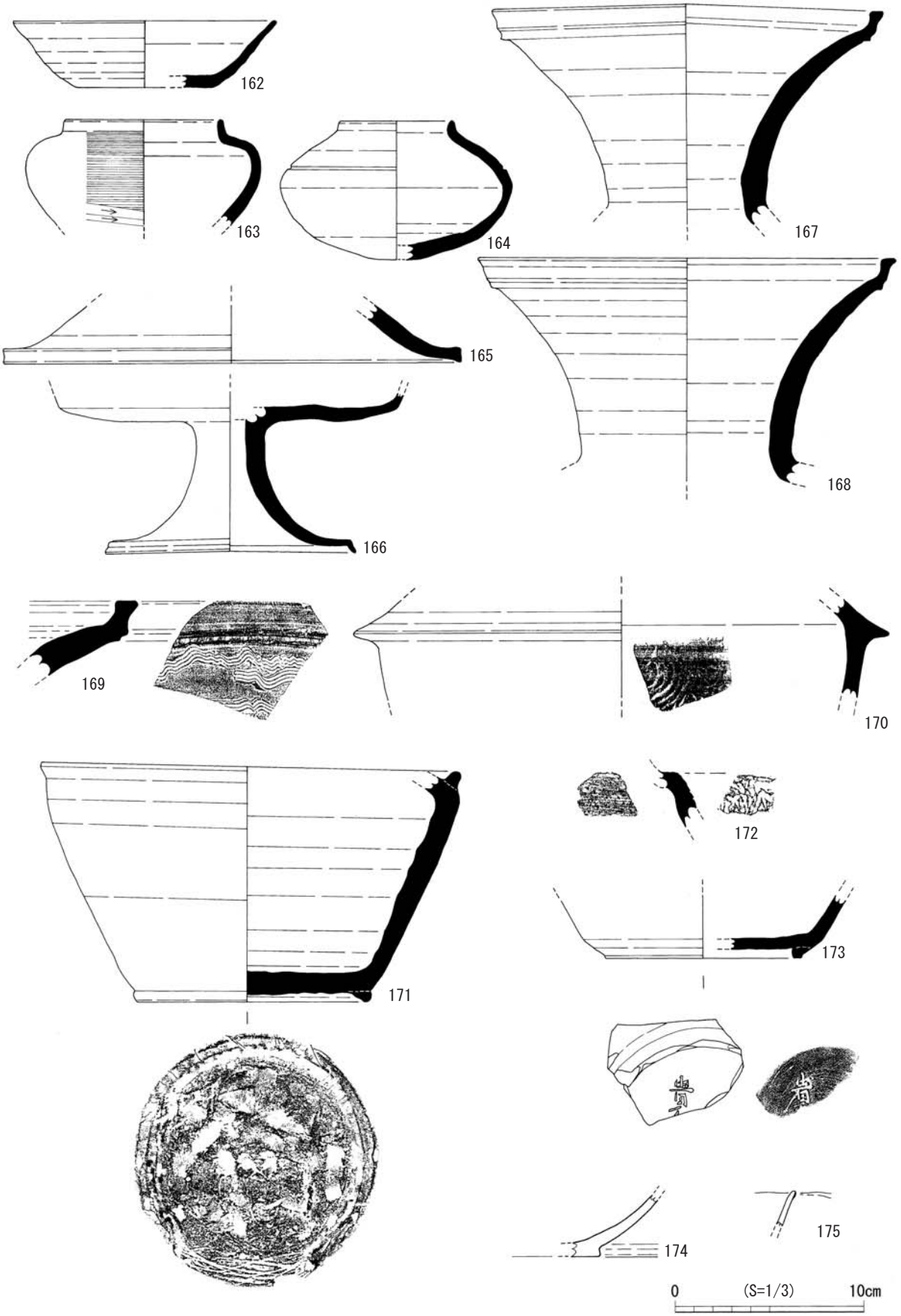
**150**は土師器杯である。板状圧痕が残る回転ヘラ切りの底部から体部が直線状に外へ伸び口縁部に至る。11世紀中頃のものと思われる。**151**は土師器杯蓋である。わずかに膨らみを持つ天井部は、ほぼ直線的に口縁部に至る。外面の天井部と口縁部の境には浅い沈線が巡り、口縁の端部断面は丸みを持った三角形で下方へわずかに突出する。外面は口縁部を除き回転ヘラケズリが施され、内外面ともにミガキのために平滑であるが、摩滅のためにミガキの単位や方向等は不明である。8世紀前半～8世紀中頃のものと思われる。**152**は土師器皿底部と思われる。外底部分に焼成前の線刻が入れられる。文字と思われるが判読できない。**153**は裾部から外反し杯部に至る低脚の高杯脚部である。杯部との接合部で破損をしている。裾部端部は丸みを持って突出し、胎土は非常に精良である。裾部内面には焼成前に刻まれた「七」の刻書文字がある。胎土や形から搬入品と思われる。8世紀前半のものであろうか。**154**は土師器大杯である。精良な胎土で、高台内は回転ヘラケズリで平らに仕上がる。摩滅しているが内外面ともに横位のミガキが残る。ミガキは全面に施されていたと思われる。8世紀前半の所産である。**155**は黒色土器B類椀である。丸みを持って立ち上がる体部で口縁部は外反する。高台は外方へ開きていねいな作りである。高台内に×印のヘラ記号が入れられている。内外面ともに横位のミガキが施される。10世紀代のものと思われる。**156～161**は土師器甕である。**156**は口縁部が大きく外反し最大径は胴部中位にあると思われる。口唇部には等間隔に刻みが入る。7世紀後半のものと思われる。**157**は頸部内面には指頭痕が見られ、内面および断面には成形の際の粘土紐接合痕が残る。7世紀後半のものか。**158～160**は口縁部が肥厚し、頸部内面にヘラケズリによる角が明瞭な稜が

残る。8世紀前半～8世紀中頃のものと思われる。**161**は最大径が口縁部にあり、胴部から同じ厚さで口縁部に至る。9世紀初頭～9世紀前半のものである。**162～173**は須恵器である。**162**は軟質の杯である。体部はほぼ直線的に口縁部向けて伸びる。9世紀初頭のものと思われる。**163・164**は短頸の小壺である。**163**は肩が張り口縁部はほぼ直立する。体部下半には回転ヘラケズリが、上半にはカキメが施される。7世紀後半～8世紀前半のものと思われる。**164**は最大径が胴部にあり算盤玉型である。丸底に近いわずかな平底と思われる。体部下半は回転ヘラケズリで、肩部下に沈線が一条巡る。7世紀前半のものと思われる。**165**は大蓋の口縁部である。天井部までは高く、端部を下方にわずかに折り曲げる。外面は端部近くまで回転ヘラケズリが施される。焼成は酸化炎気味で赤褐色を呈する。8世紀後半のものと思われる。荒尾産か。**166**は小型の高杯脚部である。裾部は水平に伸び端部を強く折り曲げる。杯部体部はほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。8世紀後半の所産である。**167・168**は長頸壺の頸部～口縁部片である。9世紀初頭の所産である。**169**は二重口縁大甕の口縁部である。頸部は外反し、外面に沈線が巡る屈曲部へ至った後端部へ向かい直立する。頸部の波状沈線は4条で大雑把に描かれる。確認できる範囲では3段である。8世紀後半～9世紀初頭のものであろう。**170**は長頸壺の肩部である。断面三角形のつまみ出したような凸帯が巡る。8世紀後半～8世紀末のものと思われる。類例は八女市片平窯出土品がある。**171**は高台付の鉢である。体部は直線的に伸び、端部は内側へ屈曲する。屈曲部分には断面三角形の貼付けによる蓋受けが作られる。高台は断面四角形で短く、底部端に付き外方へ張り出す。高台の貼付け後の調整は粗く、高台内は指頭痕による凹凸が処理されていない。高台貼付けの際には接合面を多く取るために貼付け部分に刻みを入れている。体部外面には回転ヘラケズリが施されているが、成形の際に外へ張り出した粘土を削っているだけで、器表の凹凸は残っている。全体の作りが粗雑である。9世紀初頭を中心とした前後のものと思われる。**172**は壺の肩部片と思われる。最大径がある胴部から緩やかに内湾しながら肩部で屈曲し短い水平部分を作り出した後、ほぼ直角に頸部が立ち上がる。肩部には鋸歯文に似た線刻文が施され内面には回転によるナデ痕が残る。器表が青灰色で、それに挟まれた器肉の芯が赤褐色であることから須恵器に分類したが、文様や器形から須恵器以外の可能性も考えられる。**173**は高台付きの杯である。底部の端部に細い高台が貼り付けられる。8世紀後半のものと思われる。高台内に焼成前に記された「貴□」の刻書が見られる。**174**は白磁椀Ⅰ類の底部～体部片である。底部は蛇ノ目高台で畳付は露胎である。胎土は精良で、釉は光沢があり滑らかである。8世紀末～10世紀中頃の所産である。**175**は越州窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部片である。口唇部の厚さや高さが緩やかに変化することから輪花と思われる。8世紀末～10世紀中頃の所産である。**176～180**は玄界灘式製塩土器である。いずれも外面には木目に直行する平行刻み目文が、内面には粗い平行刻み目文が残る。**181**は移動式カマドの庇部分である。外面にはハケメが内面には横位のヘラケズリが施される。**182**は穿孔のある土製品である。手捏ねで作られ外面には指頭痕が残る。紡錘形の縦方向に孔が通る。



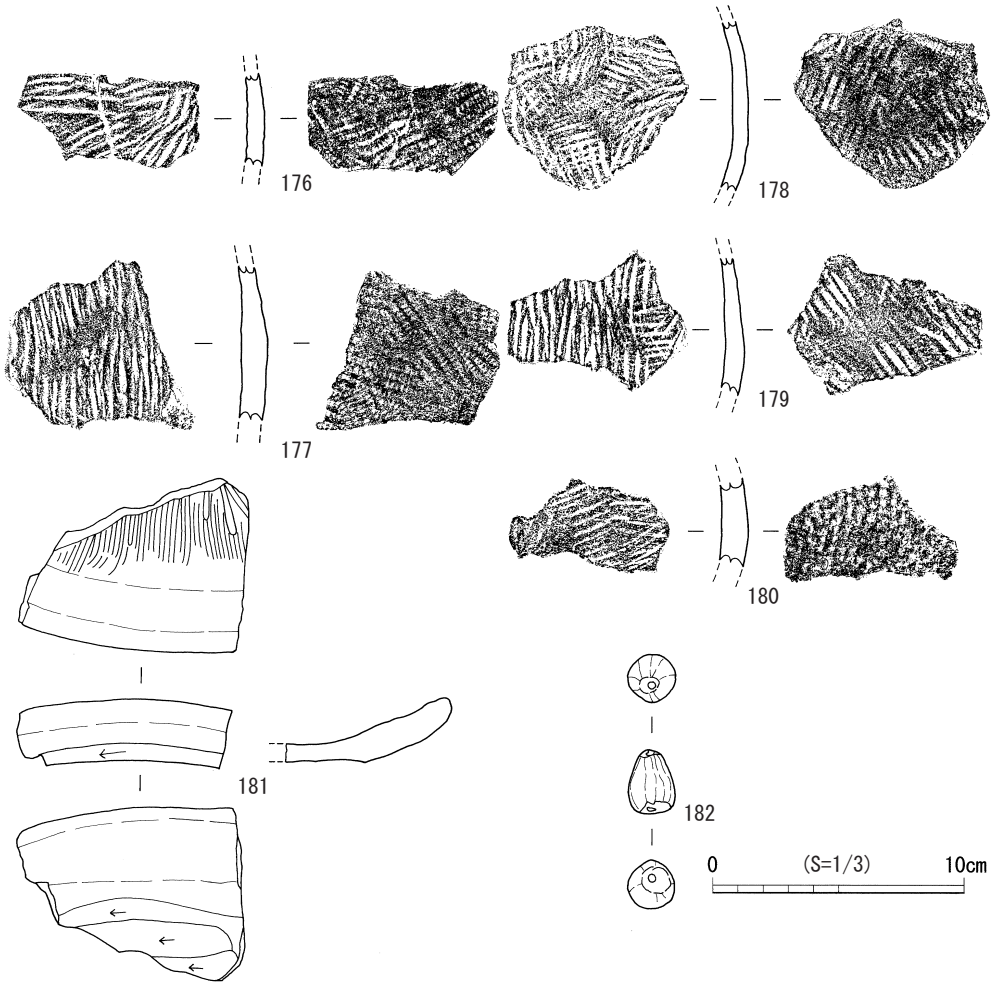

第81図　TAK201404調査区3層　出土遺物－1(S＝1/3)

図版81　TAK201404調査区3層出土遺物－1

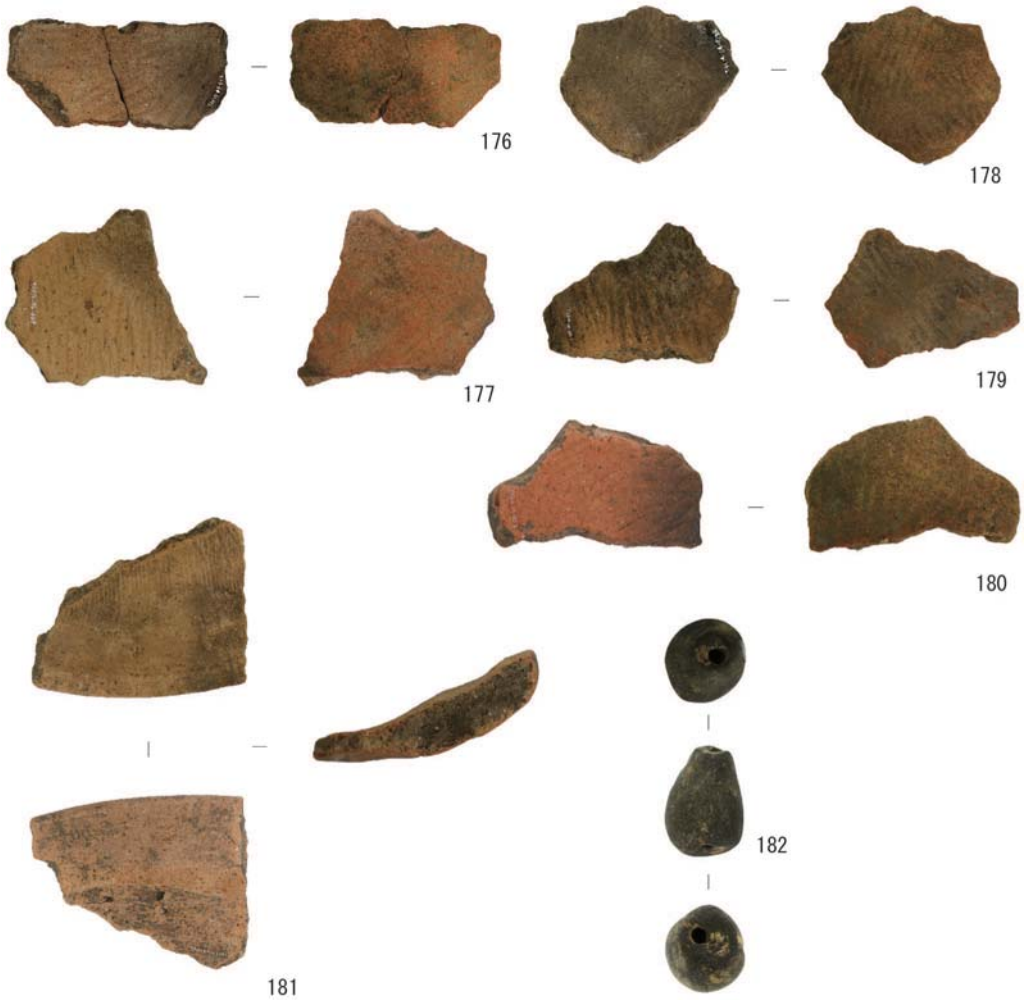



第82図　TAK201404調査区3層　出土遺物－2(S＝1/3)

図版82　TAK201404調査区3層出土遺物－2




第83図　TAK201404調査区3層　出土遺物－3(S＝1/3)




図版83　TAK201404調査区3層出土遺物－3

## 第48表　TAK201404調査区3層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 150 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.6) | 3.15 | 9 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 精良　石英 | B7東　9874 | 回転ヘラ切り |
| 151 | 土師器　杯蓋 | 天井部～口縁部 | (21) | (4.2) | — | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石 石英 赤色粒子 | B6東　9274 | |
| 152 | 土師器　皿 | 底部 | — | — | — | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | B6東　9274・9274 | 線刻有 |
| 153 | 土師器　高杯 | 脚部 | — | (4.1) | 11.1 | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 精良　石英 | A6東　8672 | 刻書「七」 |
| 154 | 土師器　大杯 | 底部～口縁部 | (26) | (7.8) | (18.8) | ミガキ | ミガキ | 橙色 | 橙色 | 良好 | 精良　角閃石　雲母 | B6西　9270 | |
| 155 | 黒色土器<br>B類　椀 | 底部～口縁部 | (14.2) | 6.1 | 7 | ミガキ | ミガキ | 黒色 | 黒色 | 良好 | 角閃石　石英　長石 | B7東　9874 | ヘラ記号有 |
| 156 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (28.9) | (7.7) | — | ハケメ | ケズリ | にぶい褐色 | にぶい橙色 | 良好 | 角閃石　石英　長石 | B6東　9274 | |
| 157 | 土師器　壺 | 口縁部～頸部 | (7.9) | (5.4) | — | — | 指オサエ | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 角閃石　長石　雲母 | B6東　9272 | |
| 158 | 土師器　甕 | 口縁部～頸部 | (17.6) | (5.5) | | — | ケズリ | 浅黄橙色 | 灰白色 | 良好 | 角閃石　長石　石英<br>雲母 | B6東　9272 | |
| 159 | 土師器　甕 | 口縁部～頸部 | — | 7.3 | — | ハケメ | ケズリ | 橙色 | にぶい赤褐色 | 良好 | 長石　石英 | B6東　9272 | |
| 160 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (22.4) | (12.5) | — | — | ケズリ | 橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石<br>雲母 | B6東　9272 | |
| 161 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (23.8) | (8.3) | — | ハケメ | ケズリ | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | B7東　9474 | |
| 162 | 須恵器　椀 | 底部～口縁部 | (13.6) | (3.5) | (7) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 不良 | 長石　黒色粒子 | B6東　9272 | |
| 163 | 須恵器　短頸壺 | 口縁部～体部 | (8) | (5.6) | — | 上半カキメ<br>下半回転<br>ヘラケズリ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | B6東　9072 | |
| 164 | 須恵器　短頸壺 | 口縁部～低部 | (5.7) | 7.3 | (2) | 下半回転<br>ヘラケズリ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | B6東　9272 | |
| 165 | 須恵器　大蓋 | 口縁部～天井部 | (23.9) | (3.1) | — | 端部まで回転<br>ヘラケズリ | — | にぶい褐色 | にぶい褐色 | 良好 | 長石　石英 | B7東　9474 | 荒尾産か |
| 166 | 須恵器<br>小型の高杯 | 脚部 | 12.9 | (8.5) | — | — | — | 黄灰色 | 灰黄色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B6西　9070 | |
| 167 | 須恵器　長頸壺 | 口縁部～頸部 | (20.1) | (11.6) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | B6東　9274 | |
| 168 | 須恵器　長頸壺 | 口縁部～頸部 | (20.7) | (11.8) | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B6東　9274 | |
| 169 | 須恵器　大甕 | 口縁部～頸部 | (38) | (3.9) | — | 波状沈線 | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B6東　9072 | 二重口縁 |
| 170 | 須恵器　長頸壺 | 肩部 | — | (5.2) | — | — | — | 灰色 | 灰黄色 | 良好 | 長石　精良 | B6西　9272 | |
| 171 | 須恵器　高台付<br>鉢 | 受み部～高台 | — | (12.1) | 11.9 | 回転<br>ヘラケズリ | ナデ | 灰色 | 灰色 | 良好 | 砂流多 | B6東　9272 | |
| 172 | 須恵器　壺 | 肩部 | — | (3.1) | — | — | ナデ | 青灰色 | 青灰色 | 良好 | 長石　石英 | B7東　9670 | 線刻文有 |
| 173 | 須恵器<br>高台付杯 | 底部 | (10) | (3.3) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B6東　9274 | 刻書「貴□」 |
| 174 | 白磁　椀　Ⅰ類 | 底部～体部 | — | (3.3) | — | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 精良 | B7西 | |
| 175 | 越州窯系青磁<br>椀　Ⅰ類 | 口縁部 | — | (1.8) | — | — | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | B6西　9070 | |
| 176 | 玄界灘式<br>製塩土器 | 体部 | — | (6.5) | — | 並行<br>刻み目文 | 並行<br>刻み目文 | にぶい褐色 | 灰褐色 | 良好 | 石英　長石 | B6東　9272 | |
| 177 | 玄界灘式<br>製塩土器 | 体部 | — | (3.6) | — | 並行<br>刻み目文 | 並行<br>刻み目文 | 明赤褐色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　長石 | B6東　9272 | |
| 178 | 玄界灘式<br>製塩土器 | 体部 | — | (6.1) | — | 並行<br>刻み目文 | 並行<br>刻み目文 | 橙色 | 橙色 | 良好 | 石英　長石 | B6東　9272 | |
| 179 | 玄界灘式<br>製塩土器 | 体部 | — | (5.5) | — | 並行<br>刻み目文 | 並行<br>刻み目文 | にぶい赤褐色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　長石 | B6東　9272 | |
| 180 | 玄界灘式<br>製塩土器 | 体部 | — | (3.5) | — | 並行<br>刻み目文 | 並行<br>刻み目文 | にぶい褐色 | 橙色 | 良好 | 石英　長石 | B6東　9272 | |

## 第49表　TAK201404調査区3層出土　土製品観察表－1

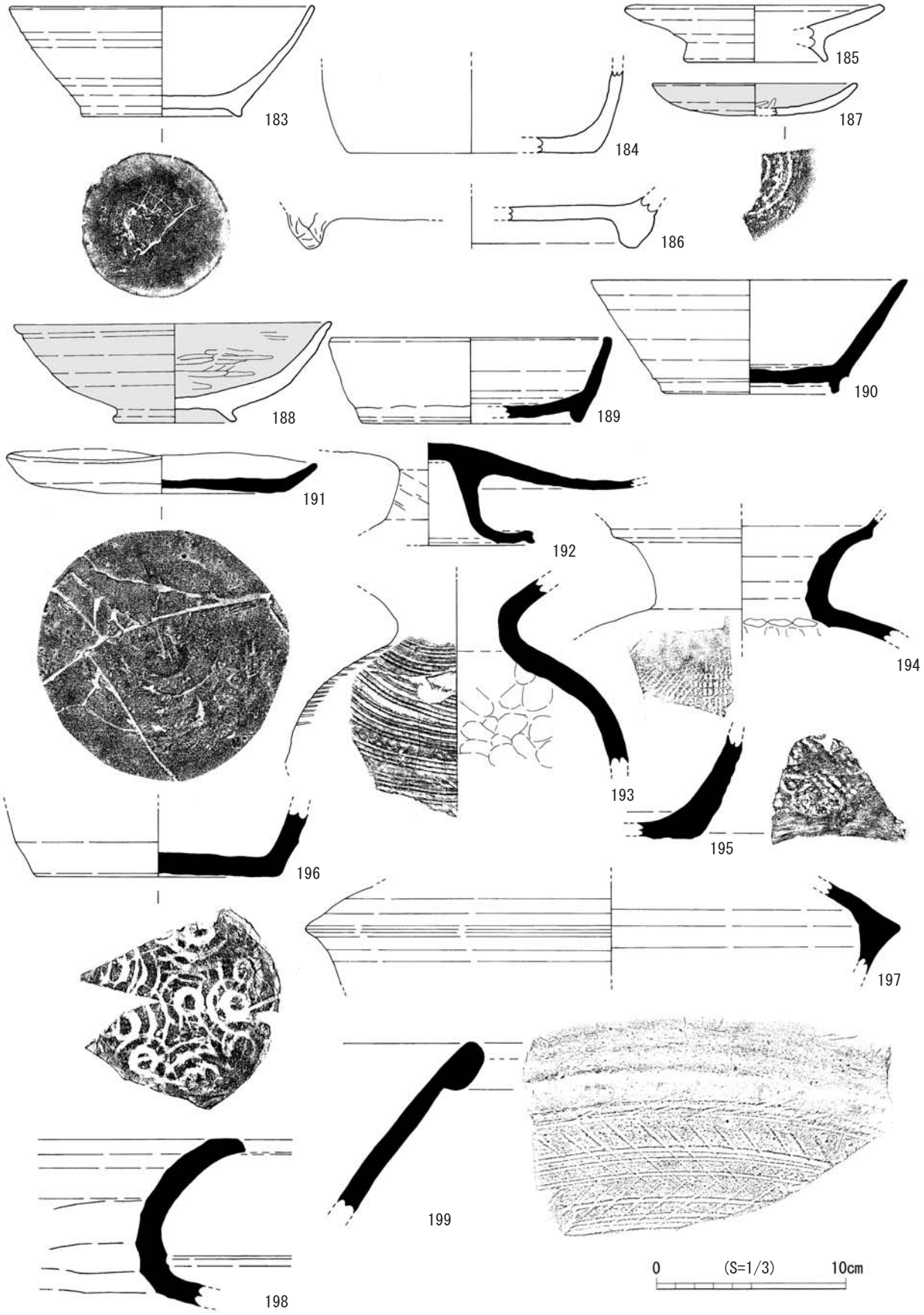
| 遺物番号 | 種類 | 部位 | 最大高(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 181 | 移動式カマド | 庇部 | 19.0 | 2.5 | 0.6 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | B6東　9274 | |

## 第50表　TAK201404調査区3層出土　土製品観察表－2

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 182 | 土錘か | 25 | 18 | 18 | 5 | 褐灰色 | 良好 | 石英　長石 | A6東　8672 | 縦方向に穿孔有 |

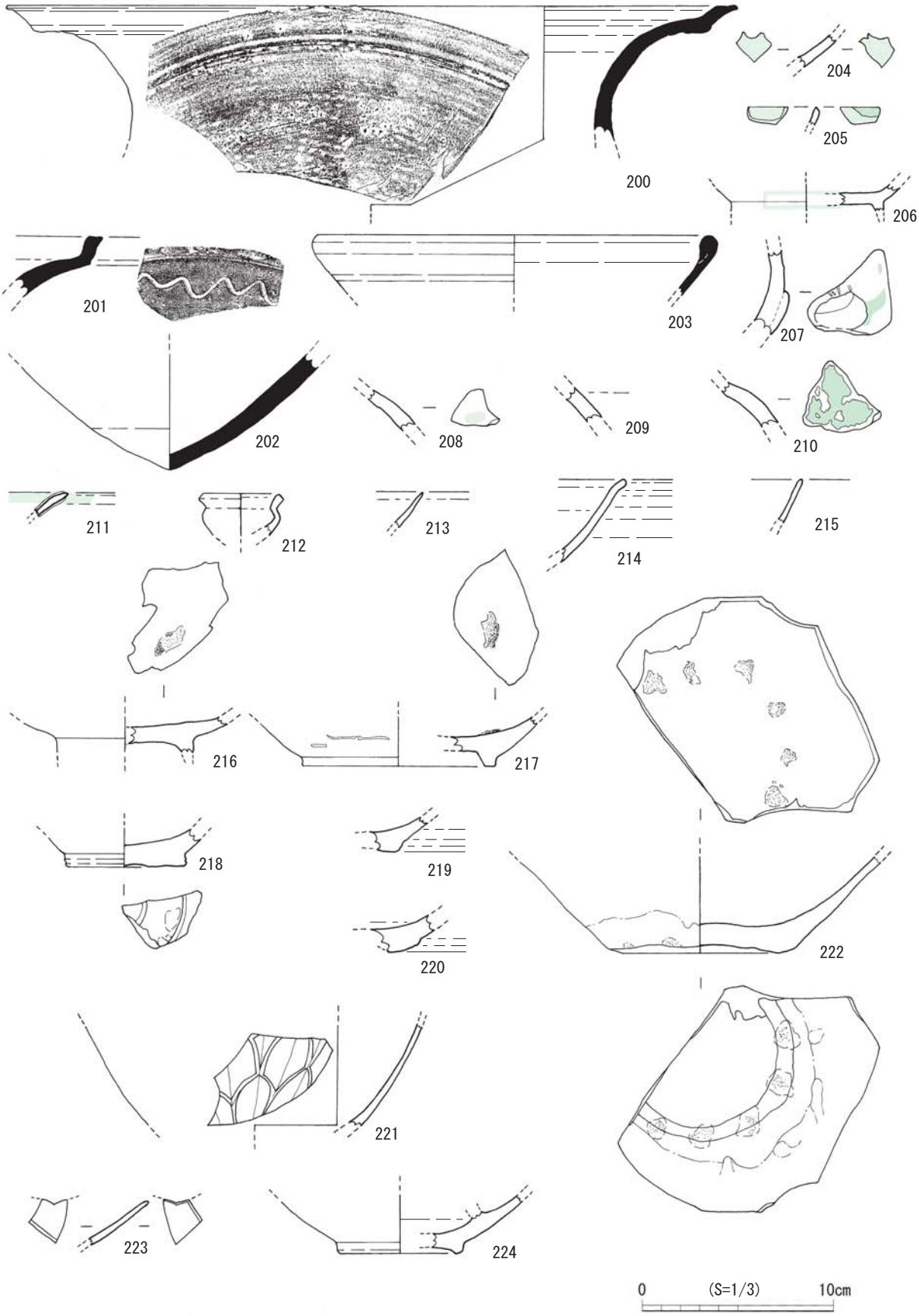
③ TAK201405調査区3層　出土遺物（第84・85図、図版84・85、第51表）

**183**は土師器椀である。底部端に短い高台が付き、体部はわずかに内湾しながら直線的に口縁部に至る。高台内には焼成後に記された「井」の文字もしくは記号が刻まれる。9世紀前半のものである。**184**は土師器の鉢と思われる底部片である。平底で体部は内湾しながらほぼ垂直に立ち上がる。詳細な時期については不明である。**185**は土師器の高台付き皿である。高台は外方へ張り出す。還元炎で焼成されており、灰白色を呈し軟質の須恵器に似る。11世紀前半のものである。**186**は土師器の脚付き皿である。脚は「く」字状に内側へ曲がる。10世紀代のものか。**187**は黒色土器B類小皿である。切り離しは回転ヘラ切りで、底部外周のみを回転ヘラケズリで調整している。内面にはミガキ痕がわずかに残る。11世紀前半のものと思われる。**188**は黒色土器B類椀である。体部下半まで回転ヘラケズリが施されている。体部は、径が小さい高台から内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。内面に横位のミガキ痕が残る。11世紀前半のものと思われる。**189～203**は須恵器である。**189**は底部端部に高台が付き、直線的に体部は立ち上がり口縁部に至る。器高は低い。酸化炎焼成をされており赤褐色を呈する。8世紀前半の荒尾産か。**190**は底部端部に高台が付き、体部は斜め方向に直線的に伸び口縁部に至る。9世紀前半のものである。**191**は皿である。切り離しは右回転のヘラ切りで、焼成は甘く軟質である。8世紀後半代のものと思われる。**192**は小型の高杯である。裾部端部は断面三角形で下方へ突出する。杯部は焼成の際の歪みで端が垂れている。8世紀前半～中頃のものと思われる。**193**は二重口縁の壺である。丸みを持った肩部から頸部は大きく外反し屈曲部に至ると思われる。体部内面は指頭痕による凹凸が見られ、外面には斜位の平行タタキ痕を消すようにカキメが施される。分厚い作りである。9世紀前半のものと思われる。**194**も二重口縁の壺である。頸部は外反しながら屈曲部へ至り、わずかに垂直に立ち上がった後外反する口縁部へ続く。体部外面には格子目のタタキ痕が残り、内面の頸部との接合部には指頭痕が残る。9世紀前半のものと思われる。**195**は壺底部片である。外面には格子目のタタキ痕が残る。内面は非常に平滑で、捏鉢等に再利用されたものと思われる。**196**は長胴壺の底部片である。底部外面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。8世紀後半～9世紀前半にかけての荒尾産と思われる。**197**は長頸壺の肩部である。断面三角形のつまみ出したような凸帯が巡る。8世紀後半～8世紀末のものと思われる。**198～201**は大甕頸部～口縁部である。**198**は肩部から外反して口縁部に至る。口縁端部は屈曲部を作りさらに外反する。頸部下半から肩部にかけて横位の強いナデ痕が残る。6世紀後半で古墳時代のものか。**199**は直線的に頸部が伸び玉縁状の肥厚する口縁部に至る。頸部外面には数条の浅い沈線が巡り、それを切るように斜位の連続沈線が段毎に向きを変え施される。7世紀前半のものか。**200**は二重口縁である。頸部は大きく外反しながら屈曲部へ至る。屈曲部では大きく立ち上がり口縁部となる。口縁端部は中央がわずかに凹む水平部分を作り出している。9世紀前半のものである。頸部外面には格子目のタタキ痕がナデの下にわずかに残る。**201**は二重口縁で200とよく似る形である。頸部外面には1条の粗い波状文が巡る。焼成が甘く軟質である。9世紀初頭のものと思われる。

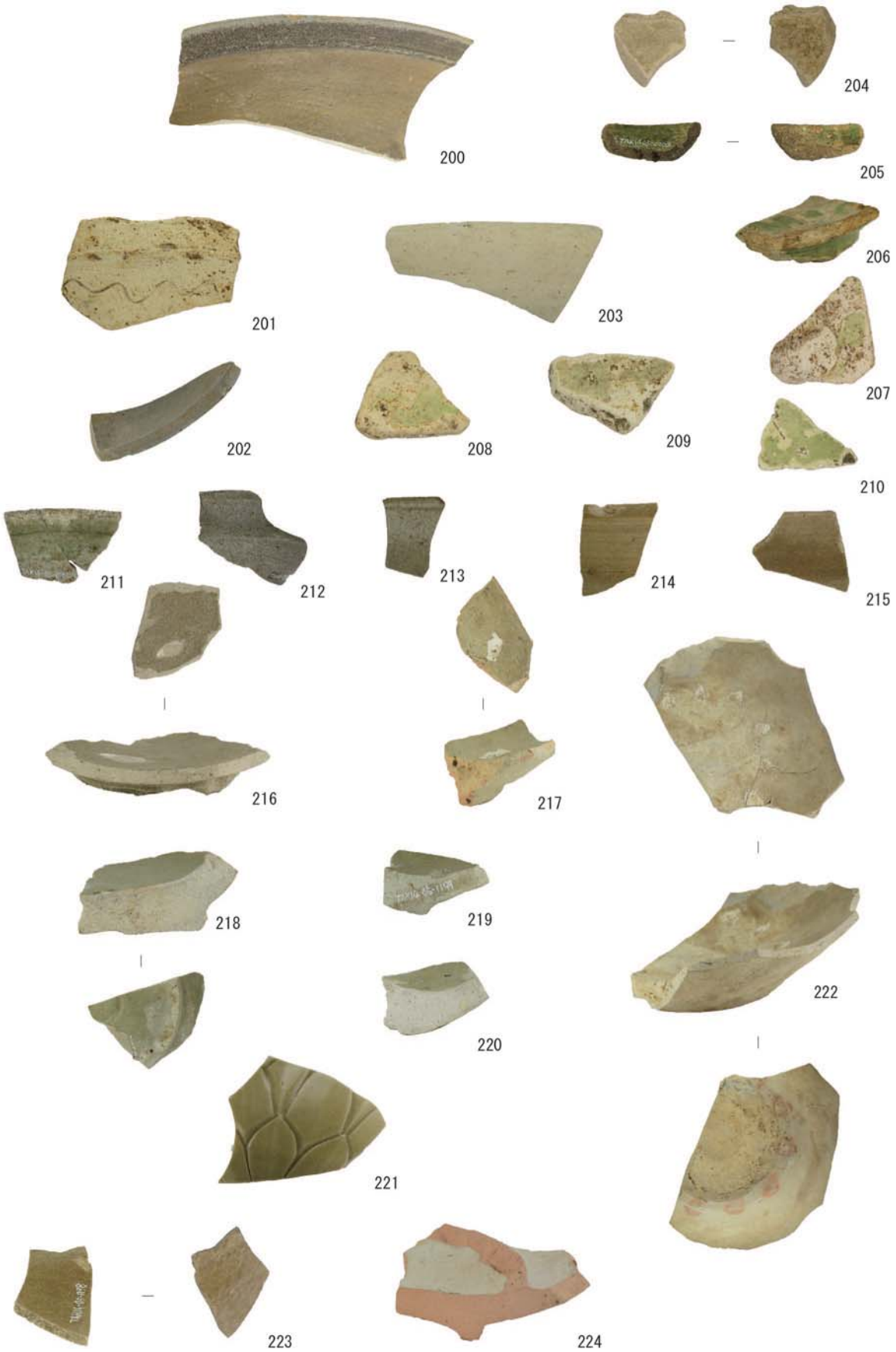



第84図　TAK201405調査区3層　出土遺物－1(S＝1/3)

図版84　TAK201405調査区3層出土遺物－1




第85図　TAK201405調査区3層　出土遺物－2(S＝1/3)




図版85　TAK201405調査区3層出土遺物－2

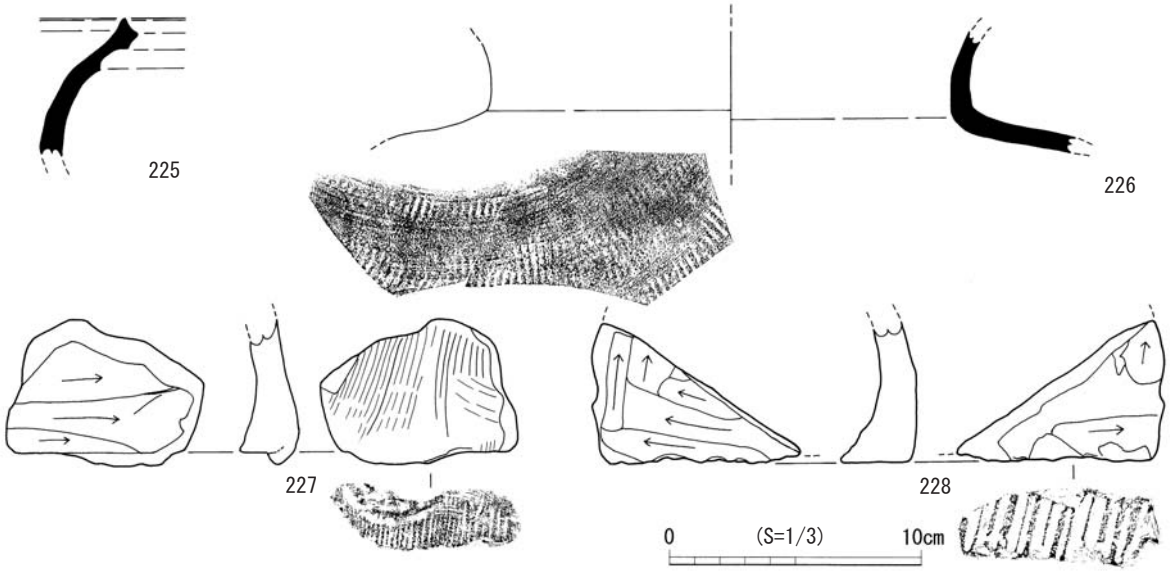
## 第51表　TAK201405調査区3層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 183 | 土師器　椀 | 底部～口縁部 | (15.8) | (5.8) | (8.2) | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石 角閃石 雲母 | ③8066 | 高台内に「井」の文字又は記号 |
| 184 | 土師器　鉢 | 底部～体部 | — | (4.3) | (13) | — | — | 灰黄色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石 雲母 褐色粒子 | ③7866 | 詳細な時期は不明 |
| 185 | 土師器　高台付皿 | 底部～口縁部 | (13) | 3 | (7.3) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | ③7464 | 還元炎での焼成 |
| 186 | 土師器　脚付皿 | 底部 | — | (17.1) | (2.7) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 | ④8062 | 脚は「く」の字状に内湾 |
| 187 | 黒色土器Ｂ類　小皿 | 底部～口縁部 | (10.6) | 1.7 | (3.4) | 底部周辺回転ヘラケズリ | ミガキ痕 | 黒褐色 | 黄灰色 | 良好 | 長石 雲母 角閃石 石英 | ③7866 | 回転ヘラ切り |
| 188 | 黒色土器Ｂ類　椀 | 底部～口縁部 | (15.4) | 5.3 | 6.2 | 回転ヘラケズリ | 横位のミガキ | 黒褐色 | 黒褐色 | 良好 | 長石 石英 | ④8062 | |
| 189 | 須恵器　高台付杯 | 底部～口縁部 | (14.5) | 4.5 | (11.3) | — | — | にぶい赤褐色 | にぶい褐色 | 良好 | 長石 | ③8066 | 酸化炎焼成荒尾産か |
| 190 | 須恵器　高台付杯 | 底部～口縁部 | (16.5) | 6 | 8.8 | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 長石 石英 黒色粒子 | ⑤ | |
| 191 | 須恵器　皿 | ほぼ完形 | 16 | 2.1 | 12.4 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 不良 | 長石 石英 | ⑥7262 | 回転ヘラ切り |
| 192 | 須恵器　小型高杯 | 脚部～底部 | — | 5.4 | — | — | — | 灰色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | ②8068 | 杯部に焼成時の歪み有 |
| 193 | 須恵器　壺 | 頸部～体部 | — | (9.8) | — | 斜位の並行タタキ後カキメ | 指オサエ | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 黒色粒子 | ④7864 | |
| 194 | 須恵器　壺 | 口縁部～体部 | — | (6.4) | — | 格子目のタタキ痕 | 頸部接合部に指オサエ | 暗灰黄色 | 暗灰黄色 | 良好 | 長石 | ④7860 | |
| 195 | 須恵器　壺 | 底部 | — | (5.4) | — | 格子目のタタキ痕 | 非常に平滑 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 黒色粒子 | ②7868 | 捏鉢等に再利用された |
| 196 | 須恵器　長胴壺 | 底部 | — | (3.6) | (12.6) | 底部に同心円の当て具痕 | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 黒色粒子 | ③8066 | 荒尾産 |
| 197 | 須恵器　長頸壺 | 肩部 | — | (4.8) | — | — | — | 灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 長石 黒色粒子 | ③7866 | 三角形の凸帯が巡る |
| 198 | 須恵器　大甕 | 口縁部～頸部 | — | (7.7) | — | — | 横位の強いナデ痕 | 黄灰色 | 灰白色 | 良好 | 長石 石英 黒色粒子 | ③7866 | 古墳時代のものか |
| 199 | 須恵器　大甕 | 口縁部～頸部 | — | (9) | — | — | — | 黒色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ②7666 | |
| 200 | 須恵器　大甕 | 口縁部 | (38) | (7.1) | — | 格子目タタキ痕の上にナデ | — | 灰黄褐色 | にぶい赤褐色 | 良好 | 長石 石英 | ⑤7460 | |
| 201 | 須恵器　大甕 | 口縁部 | — | (3.2) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 不良 | 長石 角閃石 | ③7868 | 頸部外面に一条の粗い波状文 |
| 202 | 鉄鉢形須恵器 | 体部～体部 | — | (6) | — | 尖底部分回転ヘラケズリ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 角閃石 | ③8066 | |
| 203 | 須恵器　捏鉢 | 口縁部 | (20.4) | (3.1) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 不良 | 精良 | ③7866 | 亀岡市篠窯 |
| 204 | 緑釉陶器　椀 | 体部 | — | (1.7) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 土師質 | ③7866 | 釉の緑色は抜けるも内外面に光沢残る |
| 205 | 緑釉陶器　椀 | 口縁部 | — | (1) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 暗褐色 土師質 | ①8470 | 防長産か |
| 206 | 緑釉陶器　椀 | 底部 | — | (1.4) | — | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 暗褐色 土師質 | ③ | 防長産か |
| 207 | 緑釉陶器　把手付瓶 | 体部 | — | (4.4) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 灰黄色 精良 | ③7866 | 1174・1178・1173は同一個体か |
| 208 | 緑釉陶器　把手付瓶 | 体部 | — | (2.3) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 灰黄色 精良 | ③7866 | 2・1178・1173は同一個体か |
| 209 | 緑釉陶器　把手付瓶 | 体部 | — | (1.8) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 灰黄色 精良 | ③ | 2・1174・1173は同一個体か |
| 210 | 緑釉陶器　把手付瓶 | 体部 | — | (2.4) | — | — | — | 明緑灰色 | 灰白色 | 良好 | 灰黄色 精良 | ③7866 | 2・1178・1174は同一個体か |
| 211 | 灰釉陶器　椀 | 口縁部 | — | (2.1) | — | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 須恵質 | ①8470 | 口唇部の釉は剥落 |
| 212 | 灰釉陶器　小壺 | 口縁部～体部 | (4) | (2.2) | — | — | — | 黄灰色 | 灰色 | 良好 | 黒色粒子 | ①8470 | |
| 213 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (1.8) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ④7862 | |
| 214 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (4.3) | — | — | — | 黄褐色 | 黄褐色 | 良好 | 精良 | ③7866 | |
| 215 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (2.3) | — | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 精良 | ③7866 | |
| 216 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.8) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ③7866 | 輪状高台 |
| 217 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (2.6) | (9.8) | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 精良 | ②8486 | 輪状高台 |
| 218 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (2) | (5.9) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ②8068 | 蛇ノ目高台 |
| 219 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.8) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | 8066　8068 | 蛇ノ目高台 |
| 220 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (2) | — | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 精良 | ③7866 | 上げ底気味の平底 |
| 221 | 越州窯系青磁 椀 Ⅲ類 | 体部 | — | (5.2) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8470 | 3重の鎬蓮弁文 他に9点同一個体片有 |
| 222 | 越州窯系青磁 鉢 Ⅱ類 | 底部 | — | (5) | (8) | 手持ちヘラケズリ | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石 石英 | ③8066 | 底部は上げ底状 |
| 223 | 越州窯系青磁 杯 Ⅰ類 | 口縁部 | — | (2.3) | — | — | — | オリーブ褐色 | オリーブ褐色 | 良好 | 精良 | ③8066 | 花弁様の切り込み |
| 224 | 越州窯系青磁　托　類 | 底部 | — | (3) | — | — | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 不良 | 黒色粒子 | ②7868 | |

**202**は鉄鉢形須恵器である。尖底部分は回転ヘラケズリにより調整を行っている。**203**は亀岡市篠窯の捏鉢である。口縁は折り返され内側に肥厚している。胎土は精良で軟質である。10世紀後半から11世紀前半のものと思われる。**204**～**210**は緑釉陶器である。**204**は椀の体部片である。釉の緑色は完全に抜けているが、内外面に釉の光沢が残っていたため緑釉陶器と判断した。胎土は土師質である。**205**は椀の口縁部片である。胎土は暗褐色で土師質である。釉は薄く掛かる。防長産か。外面の釉は剥げ、部分的に残る。**206**は椀の底部片である。胎土は土師質で暗褐色を呈する。高台内にも釉が掛かる。防長産か。**207**・**208**・**209**・**210**は胎土や釉調から同一固体と思われる。胎土は灰黄色で緻密である。釉は黄緑色で内面は露胎である。**207**の外面にはこぶ状の突起が残ることから、これら4点は把手付の瓶と思われる。**211**は灰釉陶器の皿口縁部である。胎土は須恵質で緑色を帯びた透明釉が薄く掛かる。口唇部の釉は剥落している。**212**は灰釉陶器の小壺である。球胴で頸部がすぼまり口縁部は外反する。内面に薄く釉が掛かる。**213**～**224**は越州窯系青磁である。**213**・**214**・**215**は椀Ⅰ類の口縁部である。**216**～**220**は椀Ⅰ類の底部である。**216**・**217**は輪状高台で**218**・**219**は蛇ノ目高台である。220は上げ底気味の平底である。**221**は椀Ⅲ類の体部片である。薄く作られ外面には3重の鎬蓮弁文が施される。精緻な作りである。同一固体と思われる外面に多重の蓮弁を施す個体が他に9点出土した。**222**は口径が20cmを超える鉢Ⅱ類である。底部は上げ底状を呈し体部との境を手持ちヘラケズリで斜めに削り出す。この部分に目跡が連続する。体部はほぼ直線的に開く。見込みには白色土による目跡が並ぶ。体部下半は露胎で釉は溶けきっておらず光沢がない。**223**は杯Ⅰ類の口縁部である。花弁様の切込みが入れられる。**224**は托である。胎土は精良で高台の作りも丁寧である。胎土が赤褐色を呈し釉も溶けきっていないことから焼成不良と思われる。

**④ TAK201406調査区3層　出土遺物（第86・87図、図版86・87、第52・53表）**

**225**は須恵器壺の頸部～口縁部である。頸部は外反しながら断面が四角形の肥厚した口縁部に至る。口縁端部内面は引き出され断面が三角形を呈する。また、口縁部下には断面が三角形の低い凸帯が巡る。**226**は須恵器壺の肩部～頸部である。頸部はほぼ直立した後、外反しながら口縁部に至る。肩部外面には格子目のタタキ痕が残る。**227**～**229**は移動式カマドである。胎土に金雲母を多く含む。**227**は接地面が内側にわずかに広がる。外面と接地面にはハケメが施され、内面には横位のケズリ痕が残る。**228**は、接地面を内側に広がり安定させている。接地面には型押しによる凹凸が刻まれ、内面には横位の強いナデ痕が残る。**229**は上半を欠いている。平面形は横長の楕円形で焚口の最大幅は28cmである。接地面を広げ安定した座りとなっている。内面は横位の粗いケズリ痕が残る。




第86図　TAK201406調査区3層　出土遺物－1(S＝1/3)

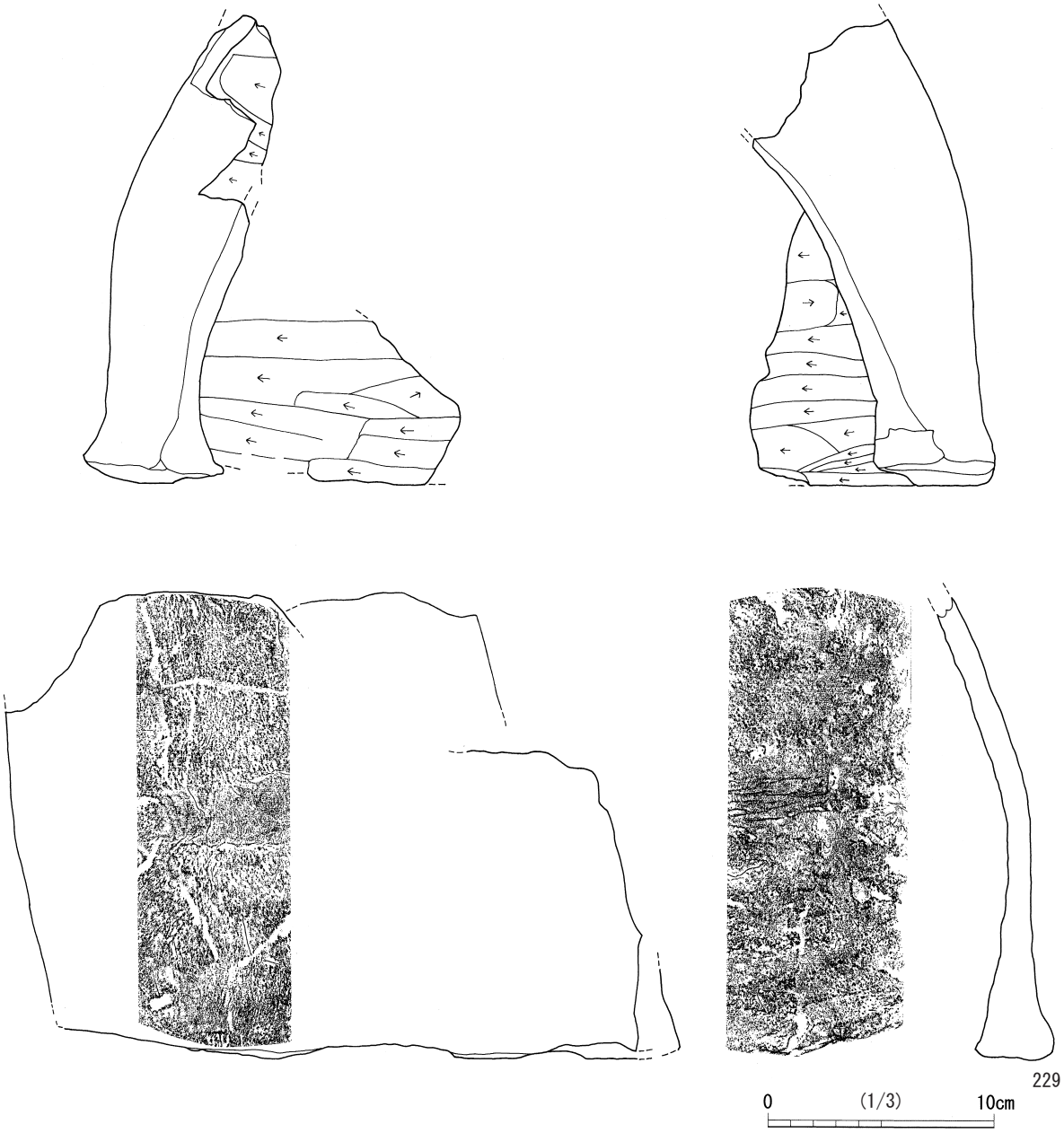
図版86　TAK201406調査区3層出土遺物－1

第52表　TAK201406調査区3層出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 225 | 須恵器　甕 | 口縁部 | — | (5.5) | — | 回転ナデ | 回転ナデ | 緑灰色 | 緑灰色 | 良好 | 長石 | ②7050 | 三角凸帯 |
| 226 | 須恵器　壺 | 肩部～頸部 | — | (5.4) | (13) | 格子目タタキ | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ③6450 | |

第53表　TAK201406調査区3層出土　土製品観察表

| 遺物番号 | 種類 | 部位 | 最大高(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 227 | 移動式カマド | 底部 | 3.2 | 7.8 | 2.4 | 淡赤橙色 | 良好 | 長石 石英 雲母 | ②　7052 | 外面と接地部にハケメ |
| 228 | 移動式カマド | 底部 | 6.4 | 7.7 | 2.8 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 | ②　7250 | 接地部に刻み目 |
| 229 | 移動式カマド | 焚口部 | 20.5 | 40.2 | 3.4 | 灰黄褐色 | 良好 | 長石 | ②　7252 | 奥行き(29.6)cm |



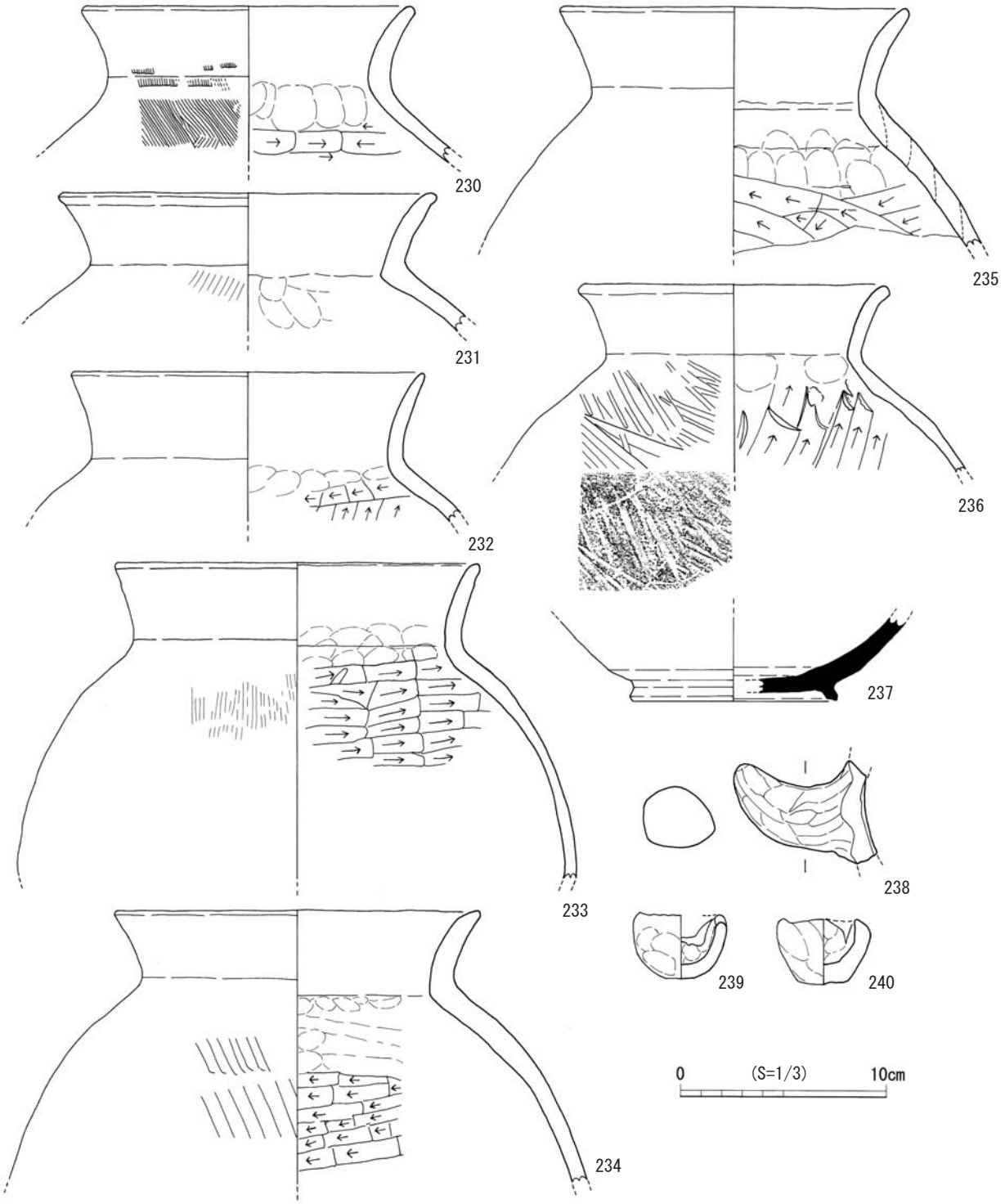

第87図　TAK201406調査区3層　出土遺物－2(S＝1/3)

229

図版87　TAK201406調査区3層出土遺物－2

⑤ TAK201407調査区3層　出土遺物（第88図、図版88、第54～56表）

**230～236**は土師器甕である。**230・231・232・233・234・235**は胴部中位に最大径を持ち、胴部中位には横位のケズリが、肩部には指頭痕が見られる。**235**の内面には成形時の粘土紐の接合痕が残る。これらは7世紀前半のものと思われる。**236**も胴部中位に最大径を持つが、内面は粗い削りで外面にはタタキが行われる。**237**は須恵器杯である。底部短部に付く高台は細いがしっかりとした作りで外方へ張り出す。体部は丸みを持って立ち上がる。8世紀後半の所産か。**238**は土師器の把手である。**239・240**は手づくねのミニチュア土器である。外面の指頭痕はナデによりわずかに残る。




第88図　TAK201407調査区3層　出土遺物（S＝1/3）

図版88　TAK201407調査区3層出土遺物

## 第54表　TAK201407調査区3層出土　土器観察表－1

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 230 | 土師器　甕 | 口縁部～肩部 | (15.5) | (7.6) | — | — | 横行のケズリ | 橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 極粗粒砂<br>赤色粒子 | ③7652 | |
| 231 | 土師器　甕 | 口縁部～肩部 | (17.8) | (6.7) | — | — | 横行のケズリ | 浅黄橙色 | にぶい<br>黄橙色 | 良好 | 石英　長石<br>角閃石 | ③7652 | |
| 232 | 土師器　甕 | 口縁部～頸部 | (16.8) | (7.2) | — | — | 横行のケズリ | にぶい橙色 | 灰白色 | 良好 | 長石　雲母 | ③7852 | |
| 233 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (17.4) | (15.3) | — | — | 横行のケズリ | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | ③7652 | |
| 234 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (17.4) | (13.2) | — | — | 横行のケズリ | 浅黄橙色 | にぶい<br>黄橙色 | 良好 | 長石　石英<br>角閃石　雲母 | ③7652 | |
| 235 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (16.3) | (11.6) | — | — | 成形時の粘<br>土紐接合痕 | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 極粗粒砂<br>雲母 | ③ | |
| 236 | 土師器　甕 | 口縁部～体部 | (14.4) | (9.1) | — | タタキ | 粗いケズリ | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　雲母 | ③7652 | |
| 237 | 須恵器　杯 | 底部～体部 | — | 4 | (9.8) | — | — | 暗灰黄色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ③7652 | |

## 第55表　TAK201407調査区3層出土　土器観察表－2

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 最大長 | 最大厚 | 最大幅 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 238 | 土師器 | 把手 | 6 | 3 | 3.5 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 極粗粒砂 | ③ | |

## 第56表　TAK201407調査区3層出土　ミニチュア土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 239 | 土師器　鉢 | ほぼ完形 | 3.9 | 3.2 | — | 指オサエナデ | — | 明褐灰色 | 明褐灰色 | 良好 | 石英　雲母 | ③ | 手づくね |
| 240 | 土師器　鉢 | ほぼ完形 | 3.7 | 2.7 | — | 指オサエナデ | — | 黒褐色 | 暗灰黄色 | 良好 | 雲母　石英<br>角閃石　長石 | ③ | 手づくね |

(15)小結

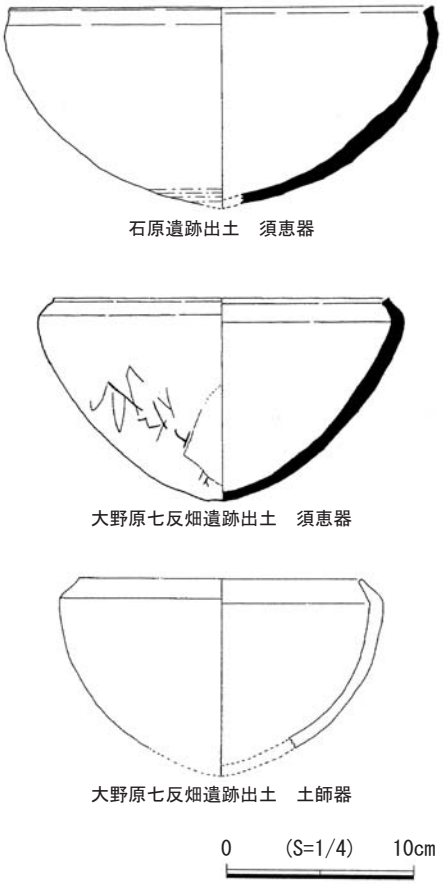
**①鉄鉢形土器について**

鉄鉢は、僧が所有を許された持ち物の一つで食器である。後に食器以外にも托鉢や仏前の供養具として使われるようになり、金属製や陶製の物がある。

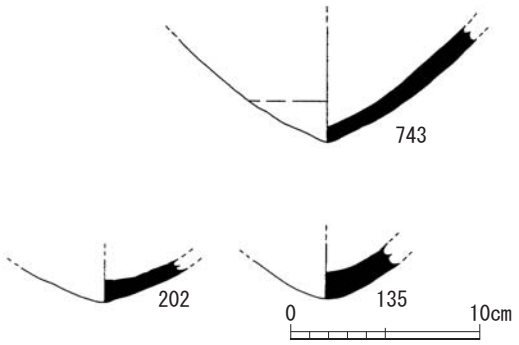
今回は、本遺跡から出土した鉄鉢形須恵器2点を報告した。鉄鉢形須恵器は『竹松遺跡Ⅱ』の「③共通土層第2・第3層より出土した土器・土製品」でも報告しており(262頁第319図、写真289、遺物番号743)、竹松遺跡からの出土は全部で3点となる。県内での出土例は雲仙市国見町石原遺跡、島原市有明町大野原七反畑遺跡、西海市串島遺跡がある。

石原遺跡は圃場整備に係る範囲確認調査により新規に発見された遺跡で、1998年から断続的に本調査が行われている。周辺の遺跡からは墨書土器や陶硯、石帯や瓦、大型の掘立柱建物跡等が確認されており、高来郡の郡衙が近くに存在することが想起されている。

大野原七反畑遺跡は、七反畑を含む大野原遺跡が遺物の散布地として周知されていた。大野原七反畑遺跡は大野原遺跡の南端に位置し、1991年に町営プール建設のための範囲確認調査が行われた。古代の遺物がまとまって出土しており当時の拠点集落と考えられている。鉄鉢形須恵器は廃棄土坑から須恵器杯・杯蓋・甕、土師器杯甕などの大量の遺物と共に出土しており、これらの遺物の中には鉄鉢形土師器も見られる。




第1図　県内出土鉄鉢形土器(S＝1/4)




743 『竹松Ⅱ』掲載　共通土層第2・第3層より出土
135 『竹松Ⅳ』掲載　TAK201406 調査区2層出土
202 『竹松Ⅳ』掲載　TAK201405 調査区3層出土

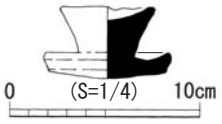
第2図　竹松遺跡出土鉄鉢形土器(S＝1/4)

図版1　竹松遺跡出土鉄鉢形土器

**②灯火具について**(註1)

**133**はTAK201405調査区第2層から出土した灯火具である(遺物の観察報告は62頁)。九州で類似の灯

火具が出土した遺跡は、福岡県朝倉市宮原遺跡、同市大迫遺跡、福岡県筑前町松崎遺跡、福岡県久留米市神道遺跡、鹿児島県姶良市小倉畑遺跡がある。




第3図　竹松遺跡出土　灯火具

宮原遺跡は九州横断自動車の建設に係る調査で、1981年～1984年に調査が行われた。6世紀～8世紀代のおよそ260軒の竪穴建物と130軒の掘立柱建物が検出された。円面硯や権、土馬の出土から郡司層が起居した拠点的集落と考えられている。

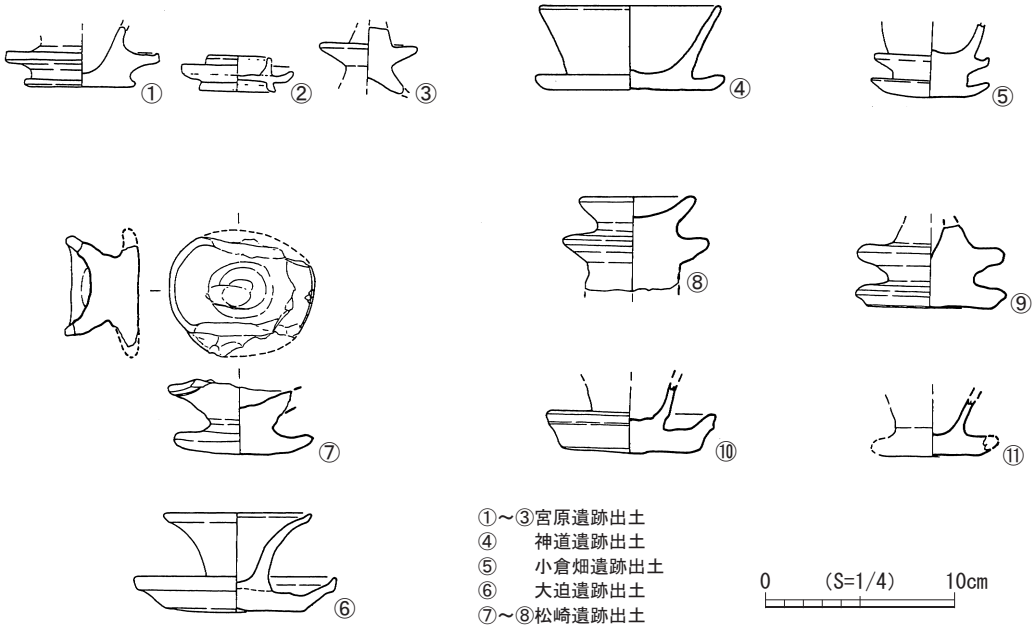
図版2　竹松遺跡出土灯火具

大迫遺跡は、九州横断自動車道路の建設に係る調査で、1987年・1989年に調査が行われ、8世紀中頃～9世紀前半にかけての火葬墓群と、7世紀中～後半代の建物群が検出された。火葬墓群は、有力者階層の氏族墓と考えられている。

今回掲載した遺物は火葬墓から出土した骨蔵器の蓋に転用されていたものである。

松崎遺跡は、県営圃場整備事業と県道改良事業に伴い1993年度に調査が行われた。多量の墨書土器や硯、銅製鉈尾、石帯、緑釉陶器、越州窯系青磁などが出土したことから、一般的な集落とは異なる集落である。

神道遺跡は、土地区画整理事業に伴う調査で、1982年、1984年、1986年に調査が行われた。




第4図　灯火具の例(S＝1/4)

小倉畑遺跡は一般国道10号線姶良バイパス建設に係る調査で、1994年～1995年、1997年に調査が行われた。遺跡は上位と下位の2段の段丘上に位置し、古代の遺物が多く出土した。下位の段丘から香炉、鉄鉢形土師器、灯明皿が出土している。これらの遺物は流れ込みによるもので、上流部に寺院があったと考えられている。図示した土師質の灯火具も下位の段丘から出土したものである。

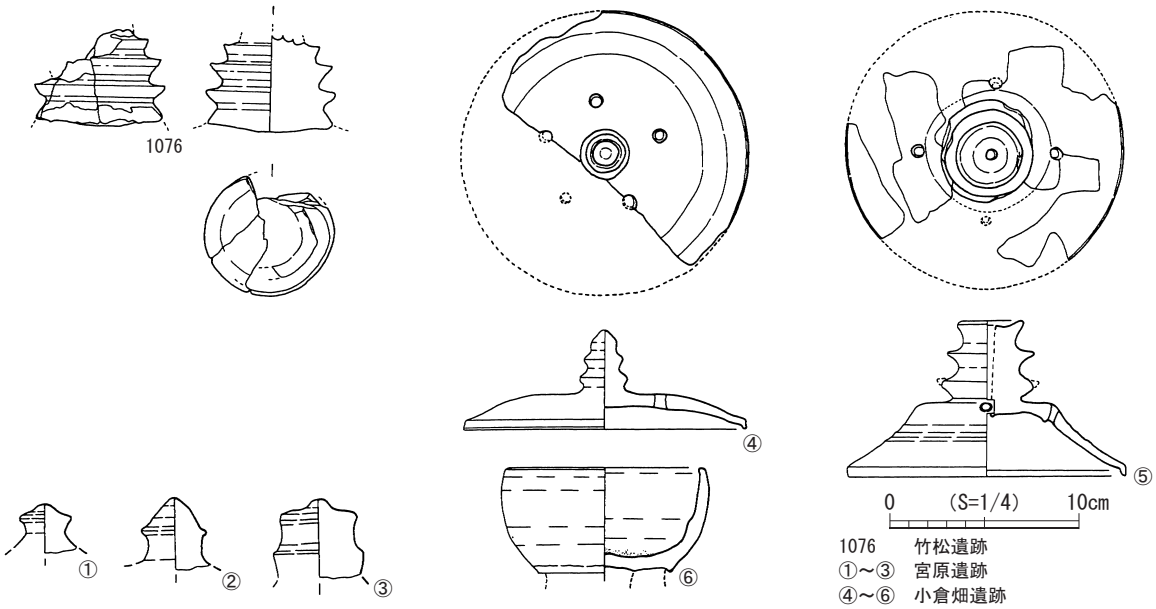
これら灯火具の特徴として、皿の上に凹んだ受け部を持つことである。形は灯明皿と同じであるが煤の付着が見られないという報告が多い。また、灯火具に類した名前を使用していない報告書もある。今後、他地域も含め類例を集め検討する必要がある。

| 遺跡名 | ススの付着の有無 | 名称 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 宮原遺跡 | 記載無し | 灯明皿 | |
| 松崎遺跡 | 不明 | 托 | 「燭台として使用されたと思われるものもある」との記載有 |
| 神道遺跡 | 無し | 灯火具 | |
| 小倉畑遺跡 | 無し | 用途不明品 | |
| 大迫遺跡 | | 灯明皿 | 「使用痕はみられない」との記載有 |

**第1表　各報告書の記載内容**

竹松遺跡では仏教儀式に関連すると考えられている土製香炉の蓋の摘み部分が出土している(註1)。灯火具が出土した遺跡の中に、土製香炉本体や香炉蓋が出土している遺跡があるので資料を紹介したい。**1076**は竹松遺跡出土の香炉摘みである。①～③は灯火具が3点出土した宮原遺跡の香炉蓋摘みである。④～⑥は小倉畑遺跡出土の香炉蓋と香炉身である。香炉蓋の摘みはいずれも相輪状を呈している。

竹松遺跡では遺構そのものを確定することはできなかったが、鉄鉢形土器、灯火具、香炉蓋摘みの出土から古代において寺に係る施設があったと思われる。




**第5図　土製香炉・香炉蓋の例**

註1　竹松遺跡出土の灯火具は、九州歴史資料館の小田和利氏に実見していただき、出土例などの御教示をいただいた。また、第4図③と⑨は油を受ける皿の部分が先細りであること、⑧は、下に台がつくか不明であることから、灯火具ではない可能性があるとのご指摘をいただいた。

註2　『竹松遺跡Ⅲ』(2017長崎県教委)に掲載している(287頁、遺物番号1076)

## 参考文献


久留米市教育委員会　1987「Ⅱ神道遺跡の調査(1)」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第6集』久留米市文化財調査報告書第50集

福岡県教育委員会　1992『朝倉郡朝倉町所在大迫遺跡の調査』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告24

有明町教育委員会　1993『大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書第10集

夜須町教育委員会　1996『松崎遺跡Ⅱ』夜須町文化財調査報告書33集

小林　信一　1997「仏器・瓦塔・墨書土器」『古代仏教遺跡の諸問題』千葉県文化財センター研究紀要18　財団法人千葉県文化財センター

福岡県教育委員会　1998『甘木市所在宮原遺跡Ⅴ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告52

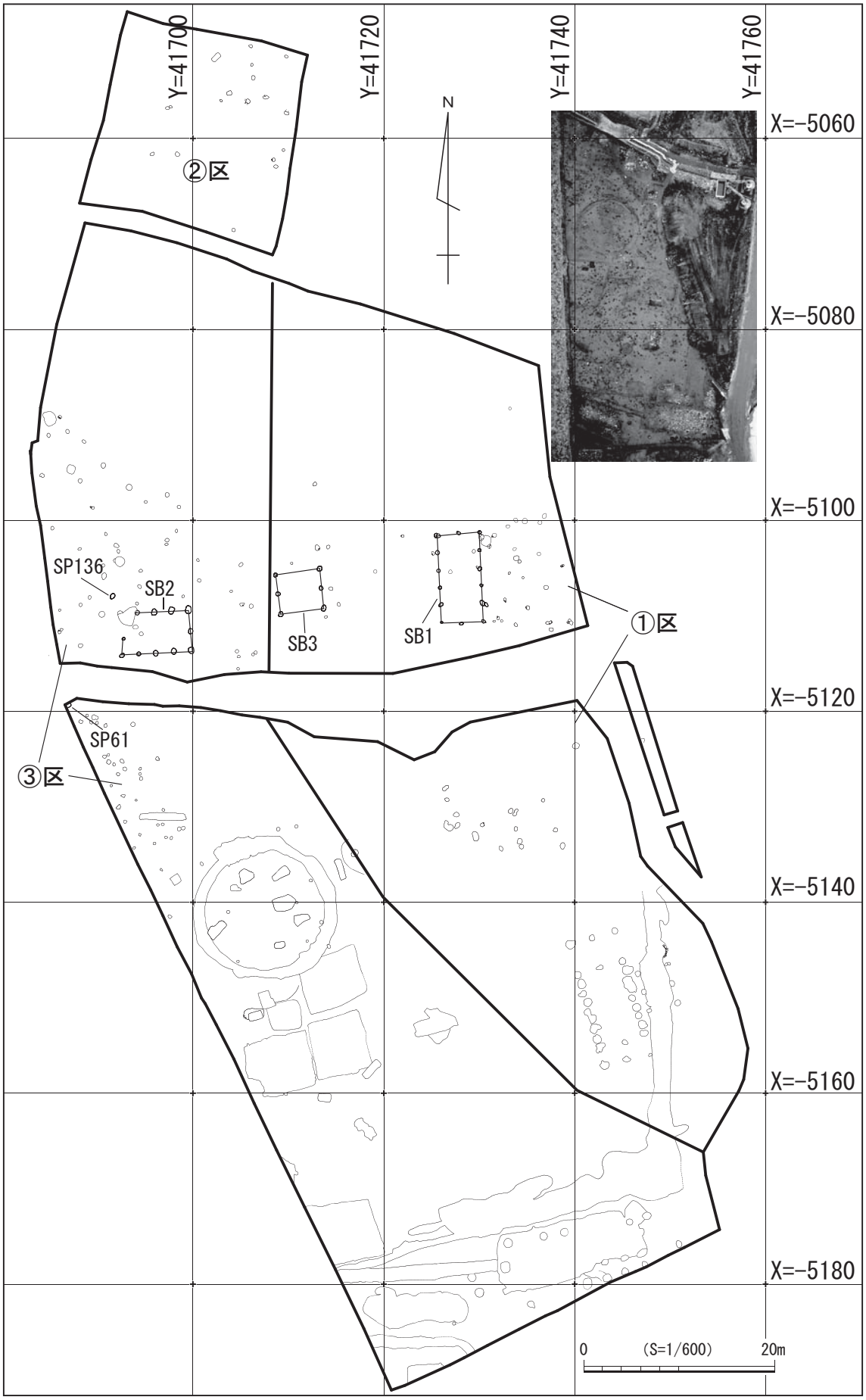
鹿児島県埋蔵文化財センター　2002『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書34

国見町教育委員会　2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第3集

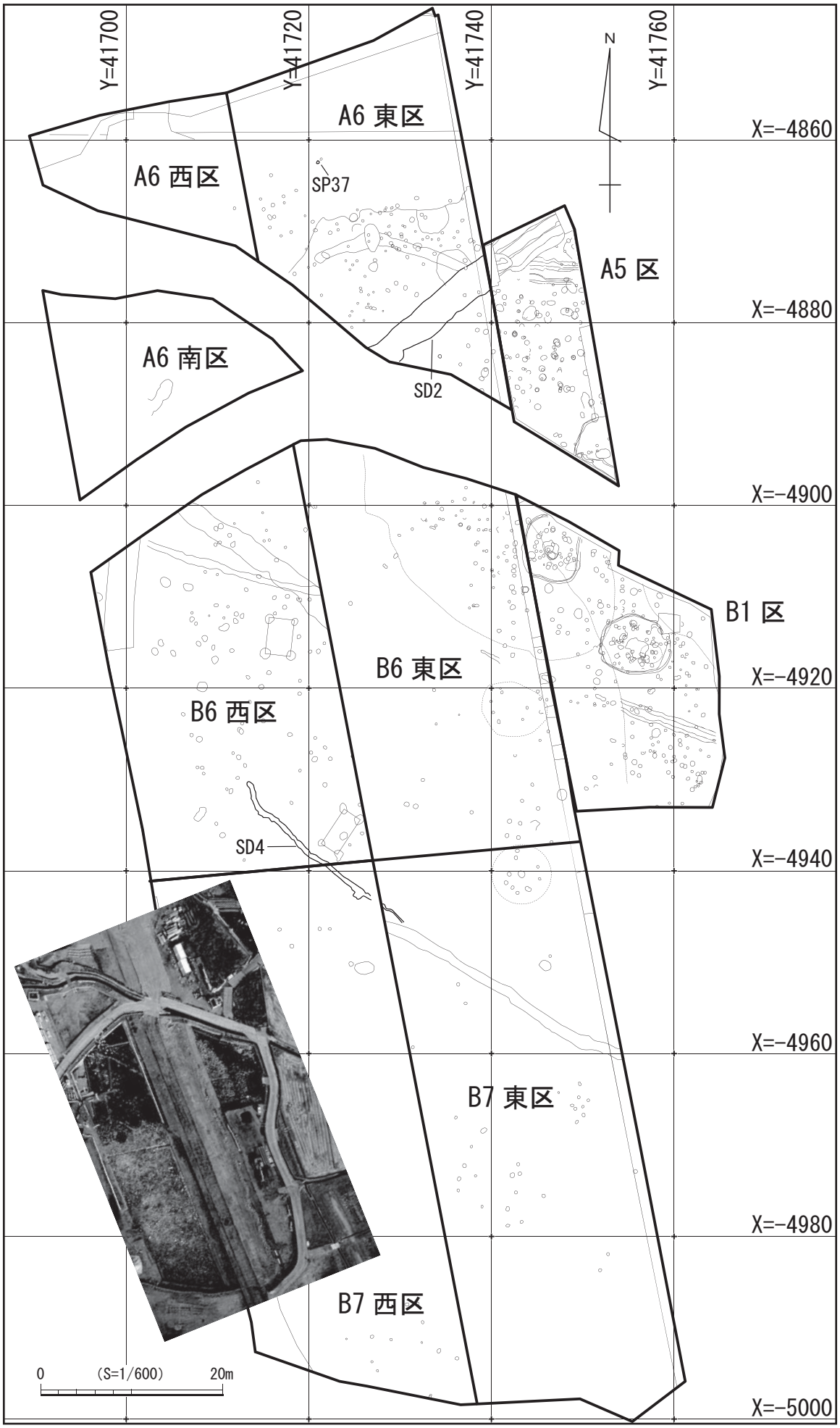
宮田　浩之　2006「西国における在地社会と仏教の需要」奈良文化財研究所

長崎県教育委員会　2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集

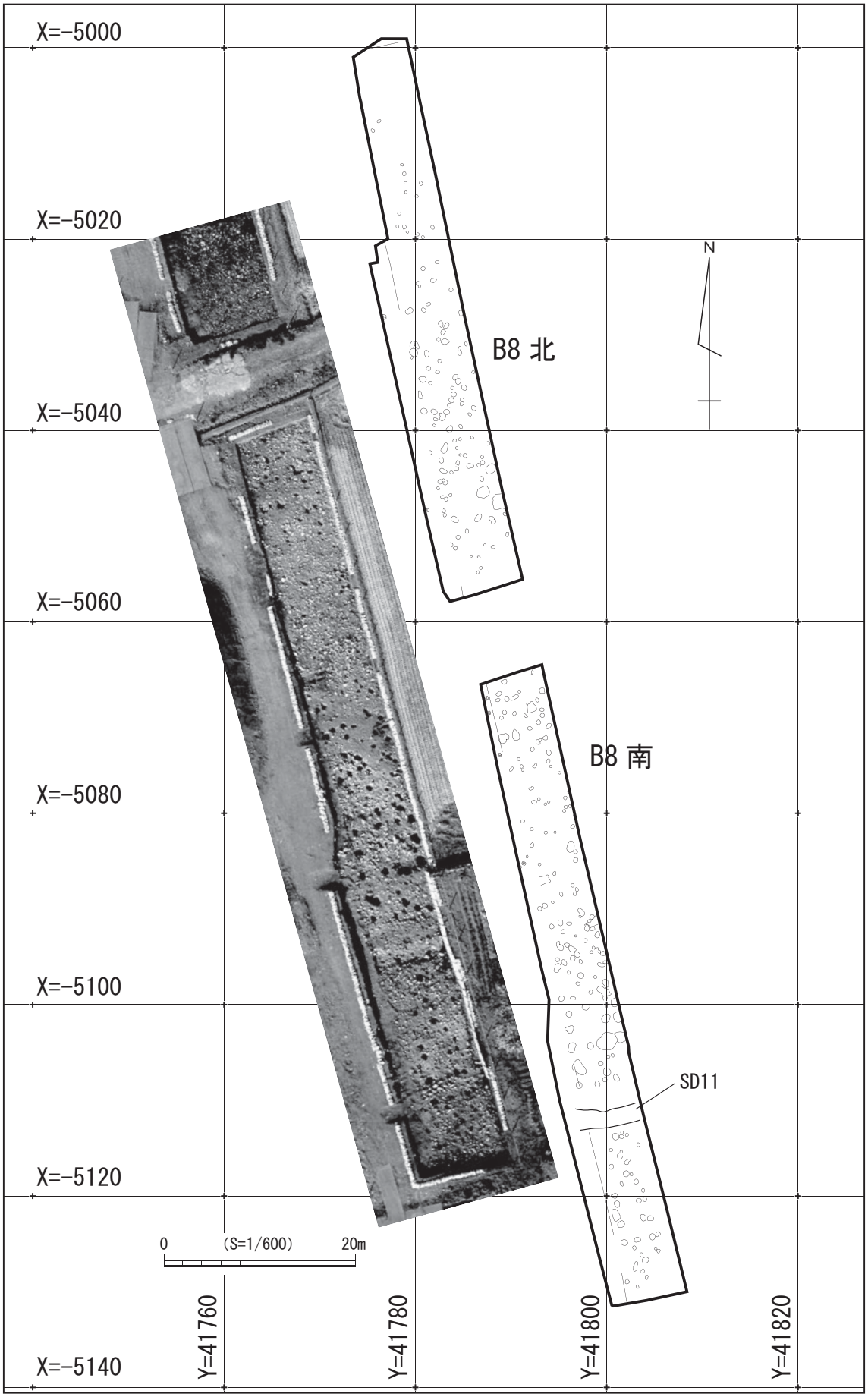
長崎県教育委員会　2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集



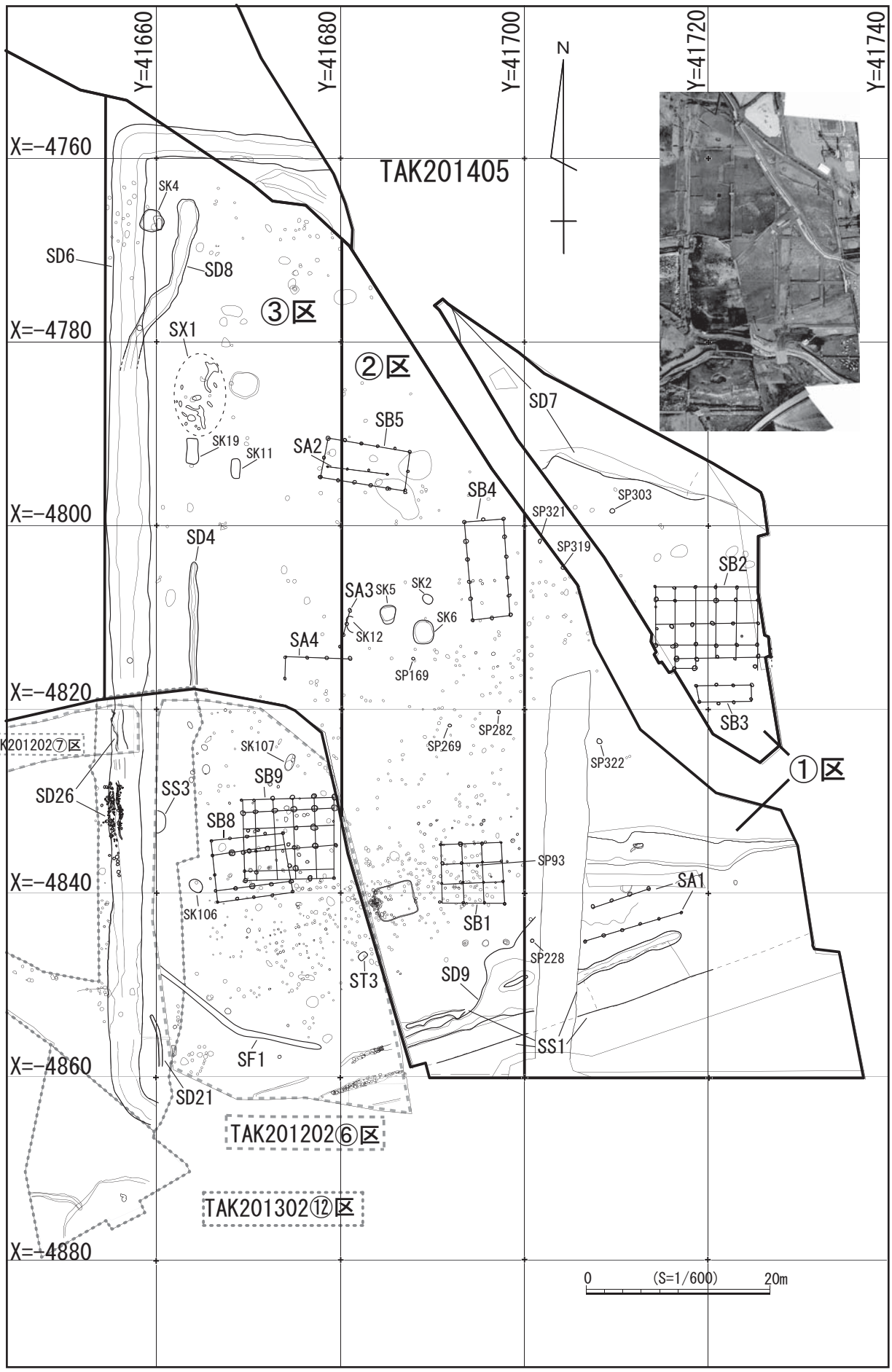

第89図　TAK201403調査区①・②・③区中世遺構配置図(S=1/600)



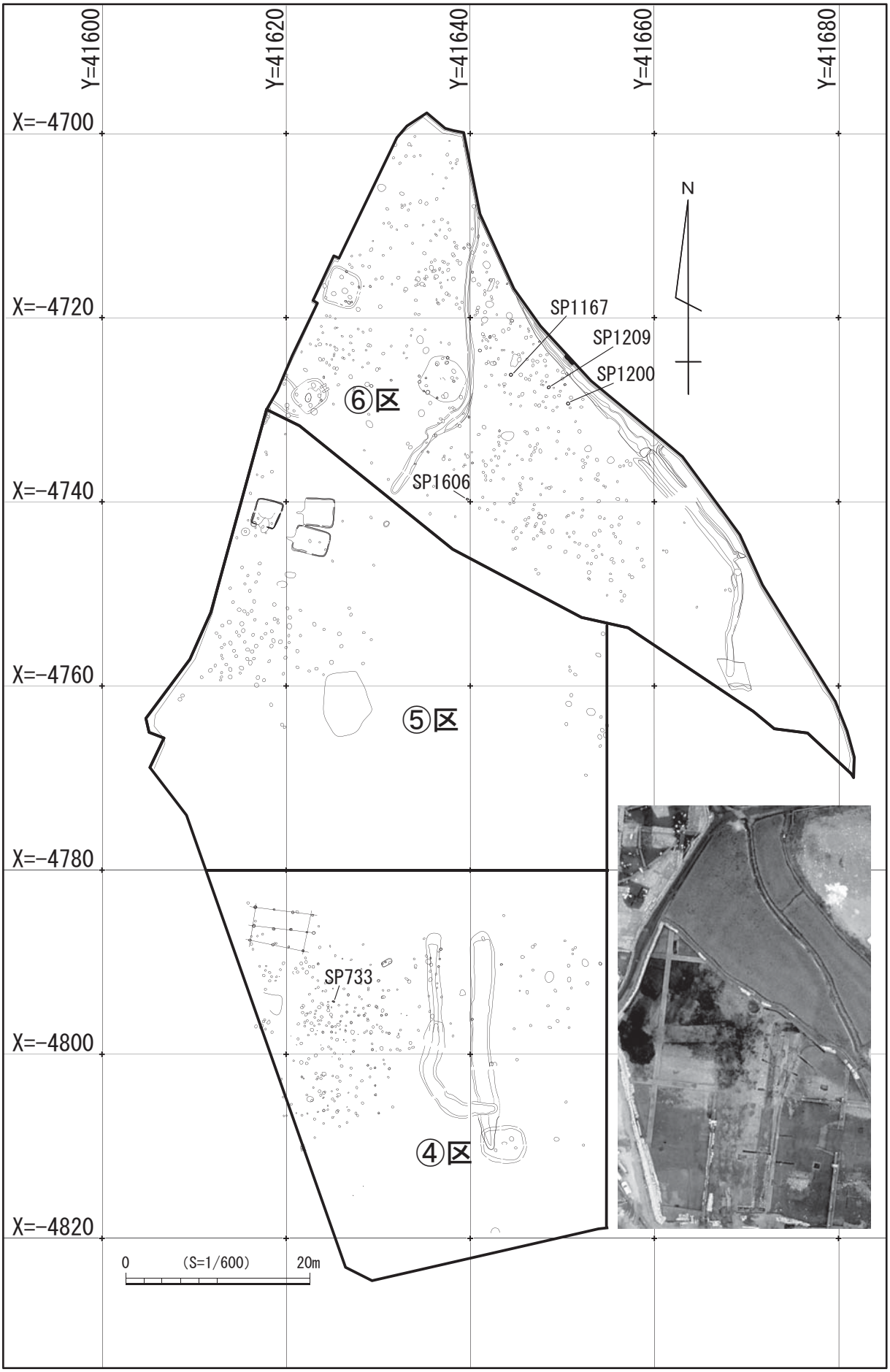

第90図　TAK201404調査区中世遺構配置図-1(S=1/600)



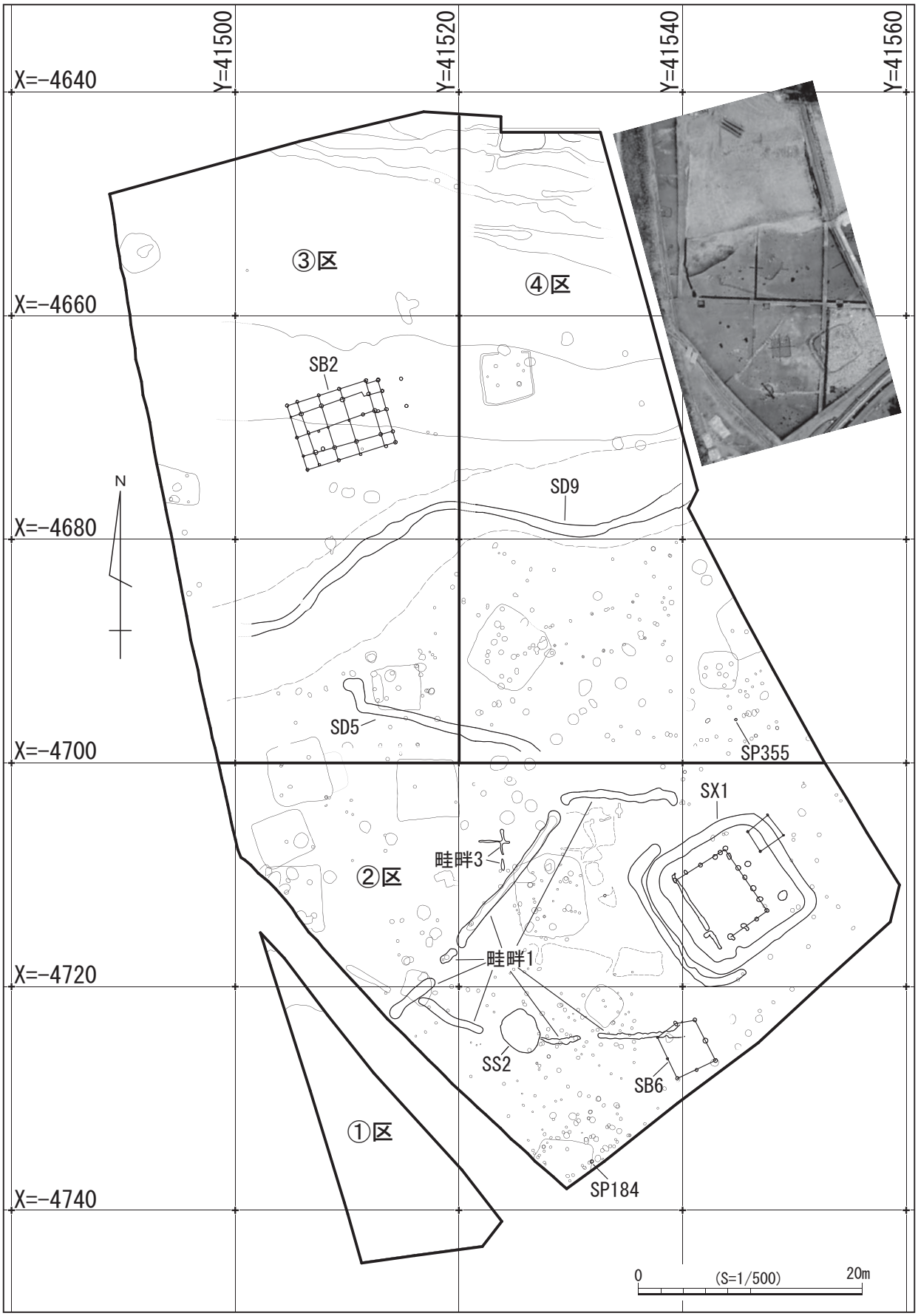

第91図　TAK201404調査区B8北区、B8南区中世遺構配置図-2(S=1/600)



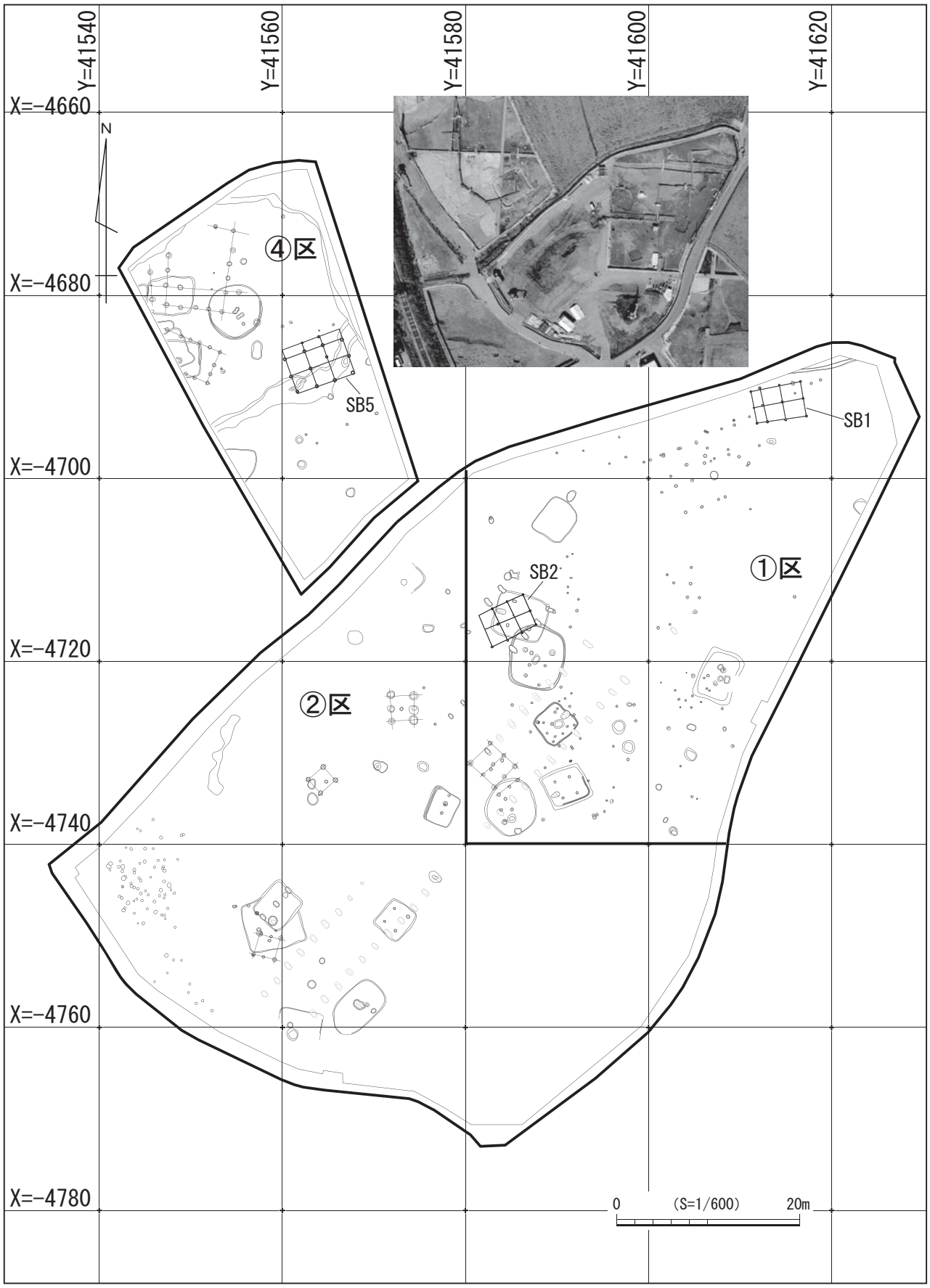

第92図　TAK201202(⑥･⑦区)･TAK201302(⑫区)･TAK201405調査区①･②･③区中世遺構配置図-1(S=1/600)




第93図　TAK201405調査区④・⑤・⑥区中世遺構配置図-2(S=1/600)




第94図　TAK201406調査区①・②・③・④区中世遺構配置図(S=1/500)




第95図　TAK201407調査区①・②・④区中世遺構配置図(S=1/600)

## 6　中世

今回報告する中世の遺構は柵列、掘立柱建物跡、溝、土坑、土坑墓などである。以下順に説明をしたい。なお、今回報告をする大調査区TAK201405から検出した区画溝(SD6)と区画内の遺構群は、大調査区TAK201202(2012年度調査)と大調査区TAK201302(2013年度調査)で一部を検出していたために、今回まとめて報告を行う。

### (1)柵列(SA)

今回報告する柵列は4基である。

**① TAK201405調査区①区　SA1(第96図、図版89、第57表)**

大調査区201405の小調査区①区8470・8270グリッド4層からプランを検出した。5間分の柱穴が10.9mの長さで列をなし、その3.4m北には6.4mの長さで3間分の柱穴が平行に並ぶ。南に位置する柵列の柱間は2.1m～2.4m、柱穴径は30cm～40cmの楕円形で深さは25cm～45cmである。北に位置する柵列の柱間は2.1m、柱穴径は40cm～50cmの楕円形で深さは15cm～30cmである。

どちらも主軸はN73°Eである。遺物の出土はなかった。梁行きにあたる柱穴の検出を試みたが、確認することはできなかった。しかし、側柱の建物の可能性もある。

図版89　SA1完掘状況　北から

**② TAK201405調査区②区　SA2(第97図、図版90、第57表)**

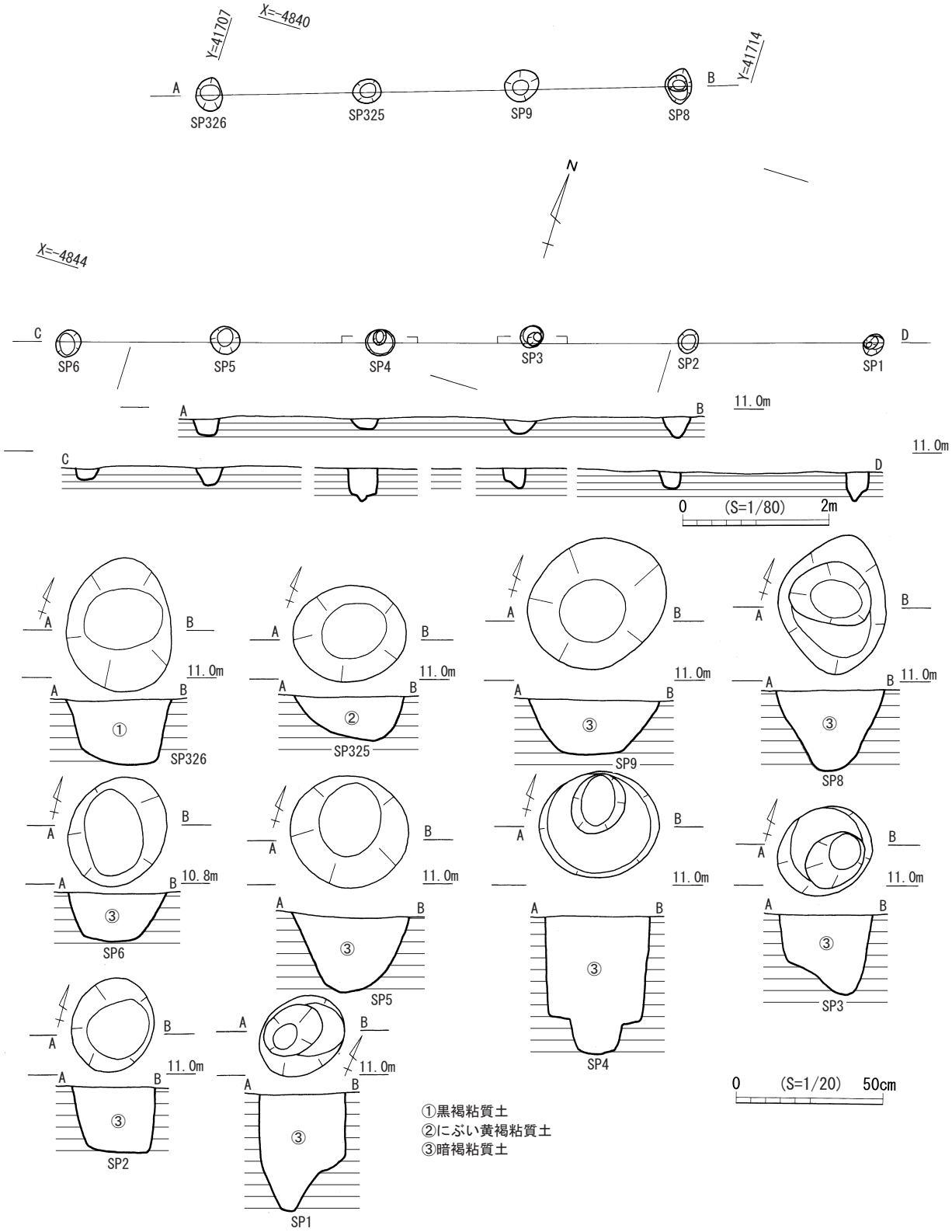
大調査区201405の小調査区②区7868・③区7866グリッド層からプランを検出した。3間分の柱穴が6.5mの長さで列をなす。柱間は2.0m～2.4m、柱穴径は27cm～30cmの楕円形で深さは30cm～50cmである。柱痕が多く残る。遺物の出土はないが、主軸がN82°Wで、SB5の桁行と向きがほぼ同じであることから、切り合ってはいるが時期差は大きくは開かず12世紀後半の中に含まれると考える。

図版90　SA2完掘状況
東から

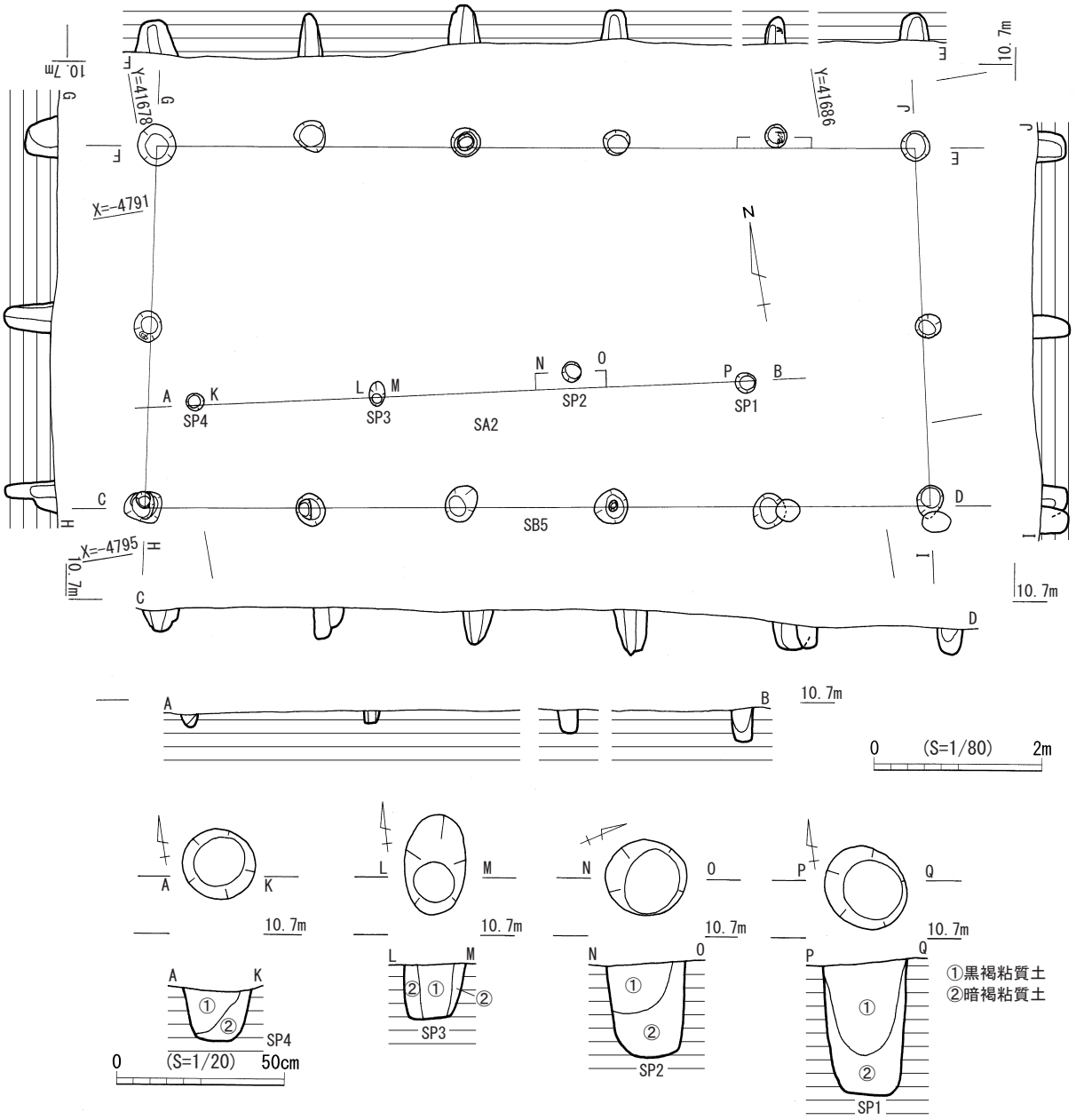
**③ TAK201405調査区②区　SA3(第98図、図版91、第57表)**

大調査区201405の小調査区②区8068・③区8066グリッド3層からプランを検出した。3間分の柱穴が4.1mの長さで列をなす。柱間は1.2m～1.5m、柱穴径は30cm～38cmの円形で深さは16cm～26cmである。主軸はN17°Eである。遺物の出土はなかった。

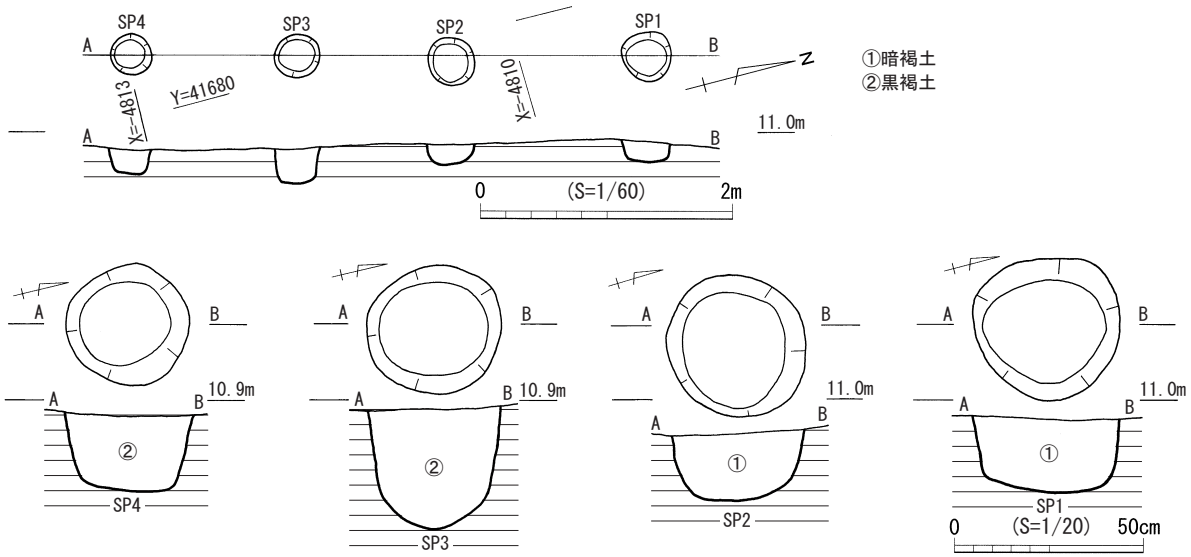
図版91　SA3検出状況
北から




第96図　SA1平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)




第97図　SA2平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)



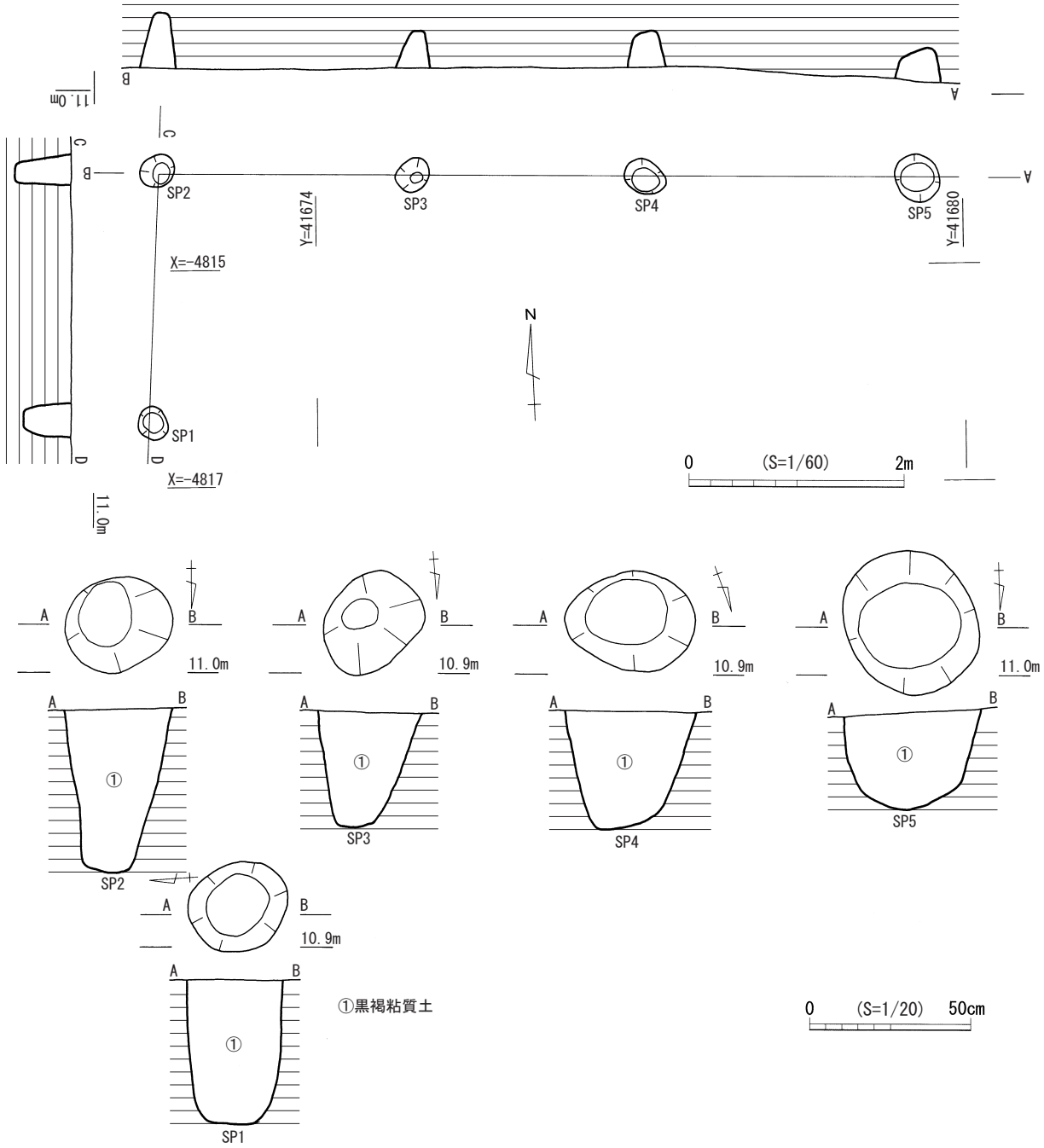

第98図　SA3平・断面図(S＝1/60)、柱穴平・断面図(S＝1/20)

④ TAK201405調査区③区　SA4（第99図、第57表）

大調査区201405の小調査区③区8066・③区8068グリッド3層からプランを検出した。3間分の柱穴が東西方向に7.0mの長さで列をなし、西端で直角に南へ1間分曲がる。柱間は2.1m～2.5m、柱穴径は32cm～46cmの楕円形で深さは30cm～52cmである。遺物の出土はないが、主軸がN88°Wで区画内の建物であるTAK201202調査区のSB9、TAK201405調査区のSB1・SB2と並びが同じであることから一連の遺構群ととらえ、時期は12世紀中頃～後半と思われる。

第57表　柵列(SA)計測表

| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 主軸方向 | 柱間数 | 全長(m) |
|---|---|---|---|---|---|
| TAK201405　SA1 | 96 | 89 | N73°E | 5 | 10.9 |
| | | | | 3 | 6.4 |
| TAK201405　SA2 | 97 | 90 | N78°W | 3 | 6.5 |
| TAK201405　SA3 | 98 | 91 | N17°E | 3 | 4.1 |
| TAK201405　SA4 | 99 | 92 | N88°W | 3 | 7 |
| | | | N2°E | 1 | 2.5 |




第99図　SA4平・断面図(S＝1/60)、柱穴平・断面図(S＝1/20)

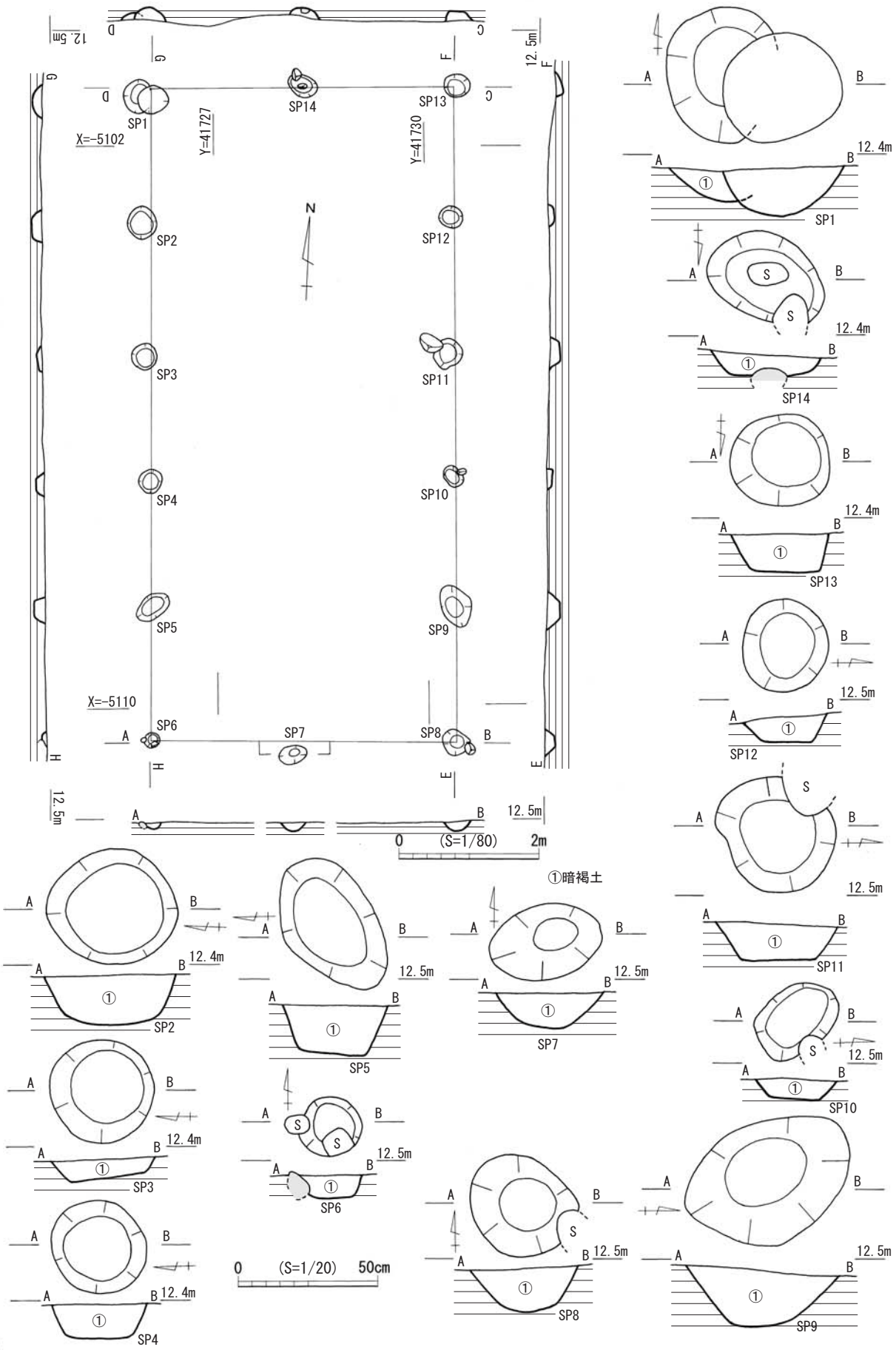
## (2)掘立柱建物(SB)

今回報告する掘立柱建物は15棟である。

### ① TAK201403調査区①区　SB1(第100図、図版92、第70表)

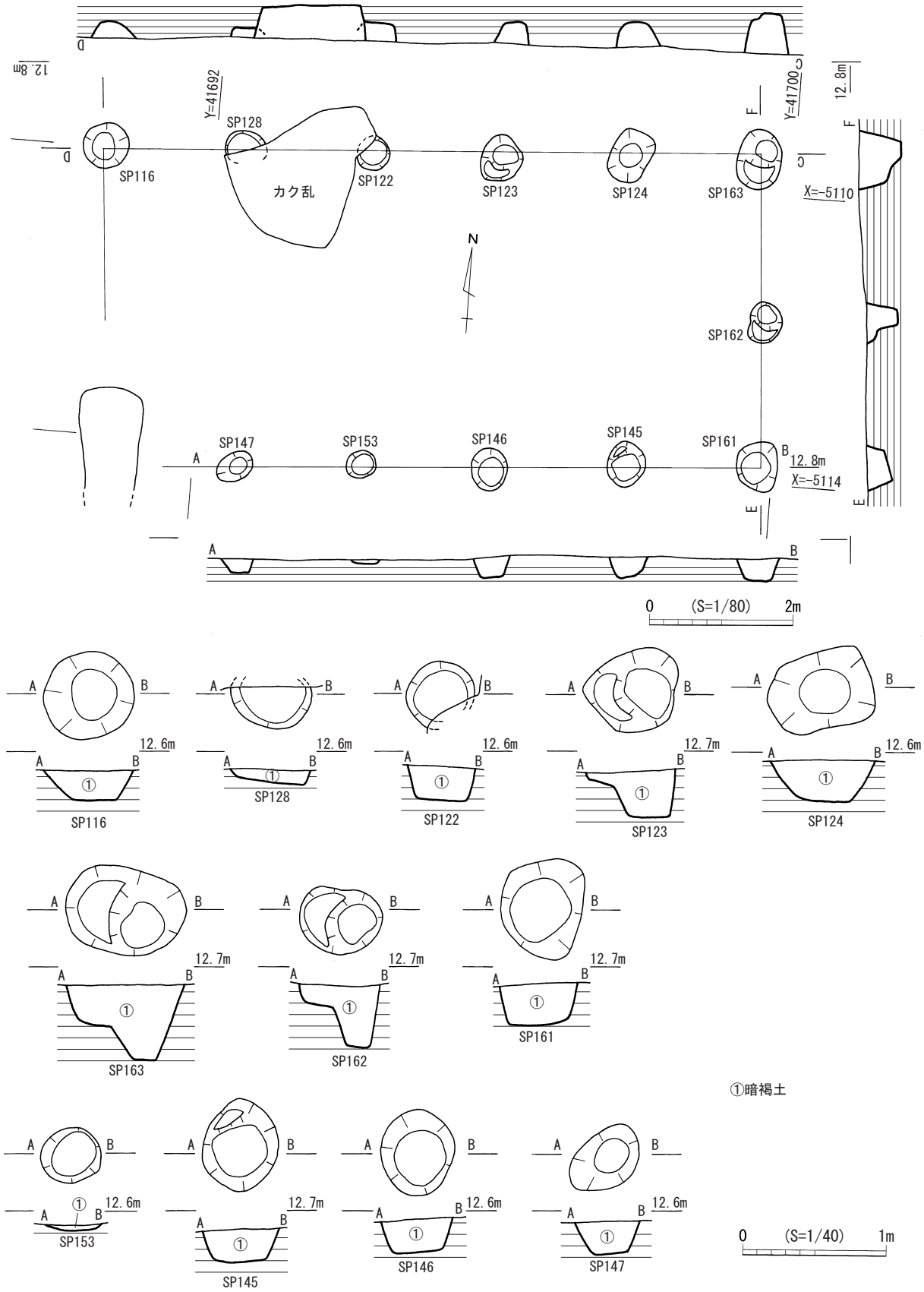
大調査区201403の小調査区①区1072グリッド4層からプランを検出した。梁行2間、桁行5間の側柱建物で主軸はN3°WでSB3とほぼ同じである。柱穴径は0.5～0.2mのほぼ円形で覆土は単層である。出土遺物は無かったがSB3と主軸が同じで、南側の梁筋が通ることからSB3と同時期の建物と考えられ12世紀後半～13世紀前半の建物と思われる。

図版92　SB1検出状況　北から




第100図　SB1平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)

② TAK201403調査区③区　SB2（第101図、図版93、第70表）



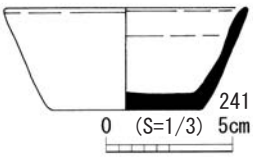

第101図　SB2平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図（S＝1/40）

大調査区201403の小調査区③区1068グリッド4層からプランを検出した。梁行2間、桁行5間の側柱建物で主軸はN87°EでSB1、SB3とほぼ90°ずれる。柱穴径は80cm～40cmのほぼ円形で覆土は単層である。柱穴の残存深度は4～60cmである。SP163より須恵器杯が出土した。遺構の年代であるが、須恵器杯は8世紀後半～9世紀初頭のものであるがSB1、SB3と軸がほぼ同じであることからSB2も一連の建物と考え12世紀後半～13世紀前半の年代をあてたい。

図版93　SB2完掘状況　東から

TAK201403調査区③区　SB2出土遺物（第102図、図版94、第58表）

**241**は小ぶりの須恵器杯である。底部から直線的に口縁部に至る。切り離しは右回転のヘラ切りである。




第102図　SB2出土遺物（S＝1/20）

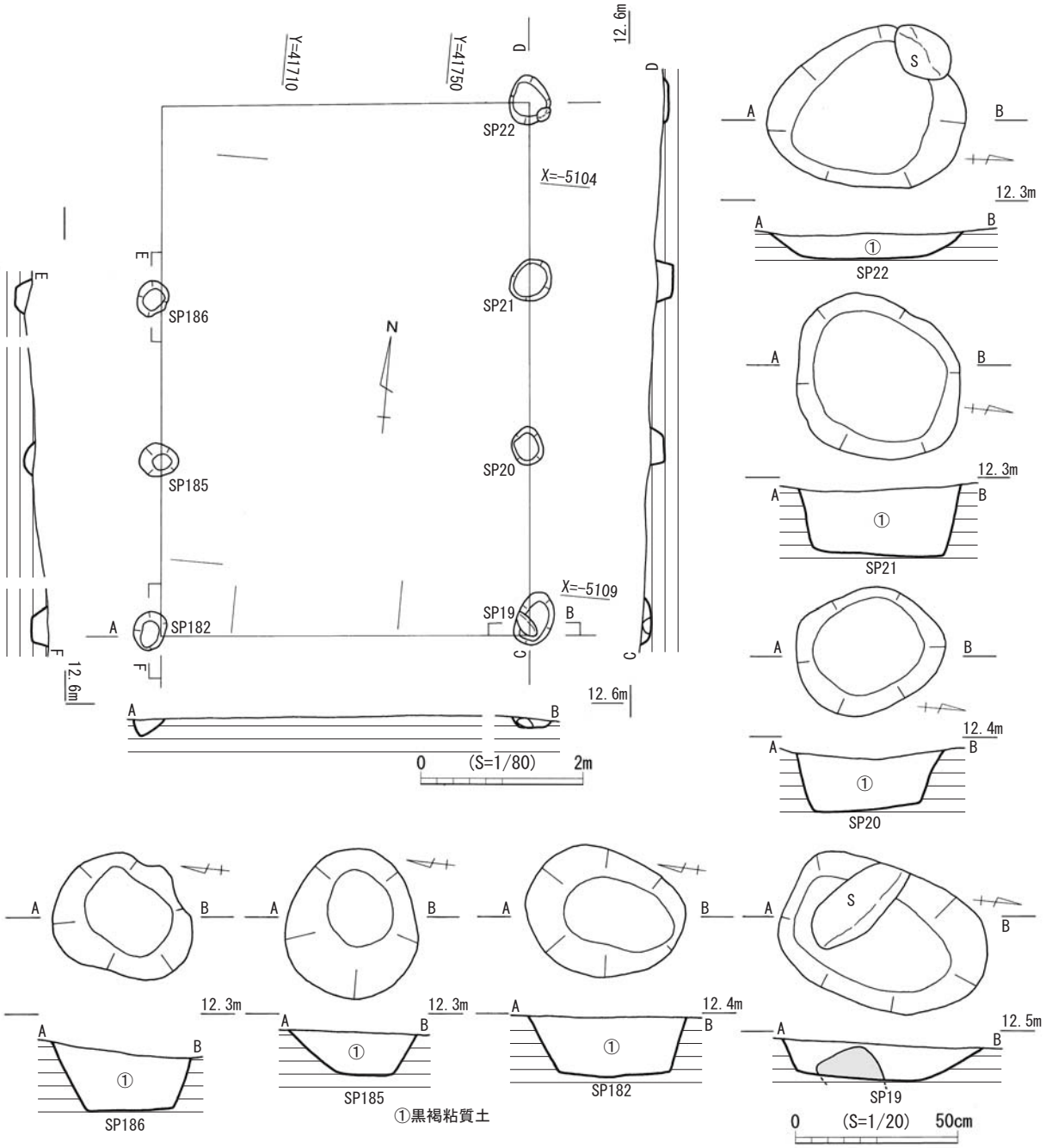
図版94　SB2出土遺物

第58表　SB2出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 241 | 須恵器　杯 | 底部～口縁部 | (9.4) | 4 | 6 | — | — | 灰黄色 | 黄灰色 | 良好 | 長石　石英 |

③ TAK201403調査区①区　SB3（第103図、第70表）

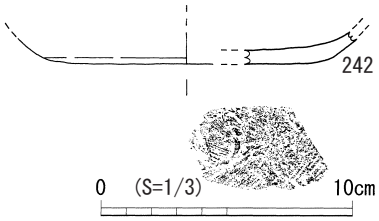
大調査区201403の小調査区①区1070グリッド4層からプランを検出した。梁行1間、桁行5間の側柱建物で主軸はN4°WでSB1とほぼ同じである。柱穴径は0.6～0.4mのほぼ円形で覆土は単層である。削平により柱穴の残存深度は8～20cmと非常に浅かった。そのためにプランを確認できなかった柱穴もある。12世紀後半～13世紀前半と思われる土師器杯がSP182より出土した。調査後の整理作業の段階で遺構と認定したために、調査時の写真は撮影していない。




第103図　SB3平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)

TAK201403調査区①区　SB3出土遺物(第104図、図版95、第59表)

242は右回転の糸切り痕が残る土師器杯底部である。精良な胎土である。




第104図　SB3出土遺物(S＝1/3)

図版95　SB3出土遺物

第59表　SB3出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 242 | 土師器　皿 | 底部 | — | (1.3) | (11.4) | — | — | にぶい橙色 | 黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 右回転糸切り |

④ TAK201202調査区⑥区　SB8(第105・106図、図版96・97、第70表)

大調査区201202の⑥区8266・8466グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行4間の側柱建物で南と北に廂を持つ。主軸はN9°Wである。柱穴径は30cm～60cmのほぼ円形で、覆土は単層であるが柱痕が残るものもある。

図版96　SB8検出状況　南から

図版97　SB8完掘状況　南から

TAK201202調査区⑥区　SB8出土遺物(第107図、図版98、第60・61表)

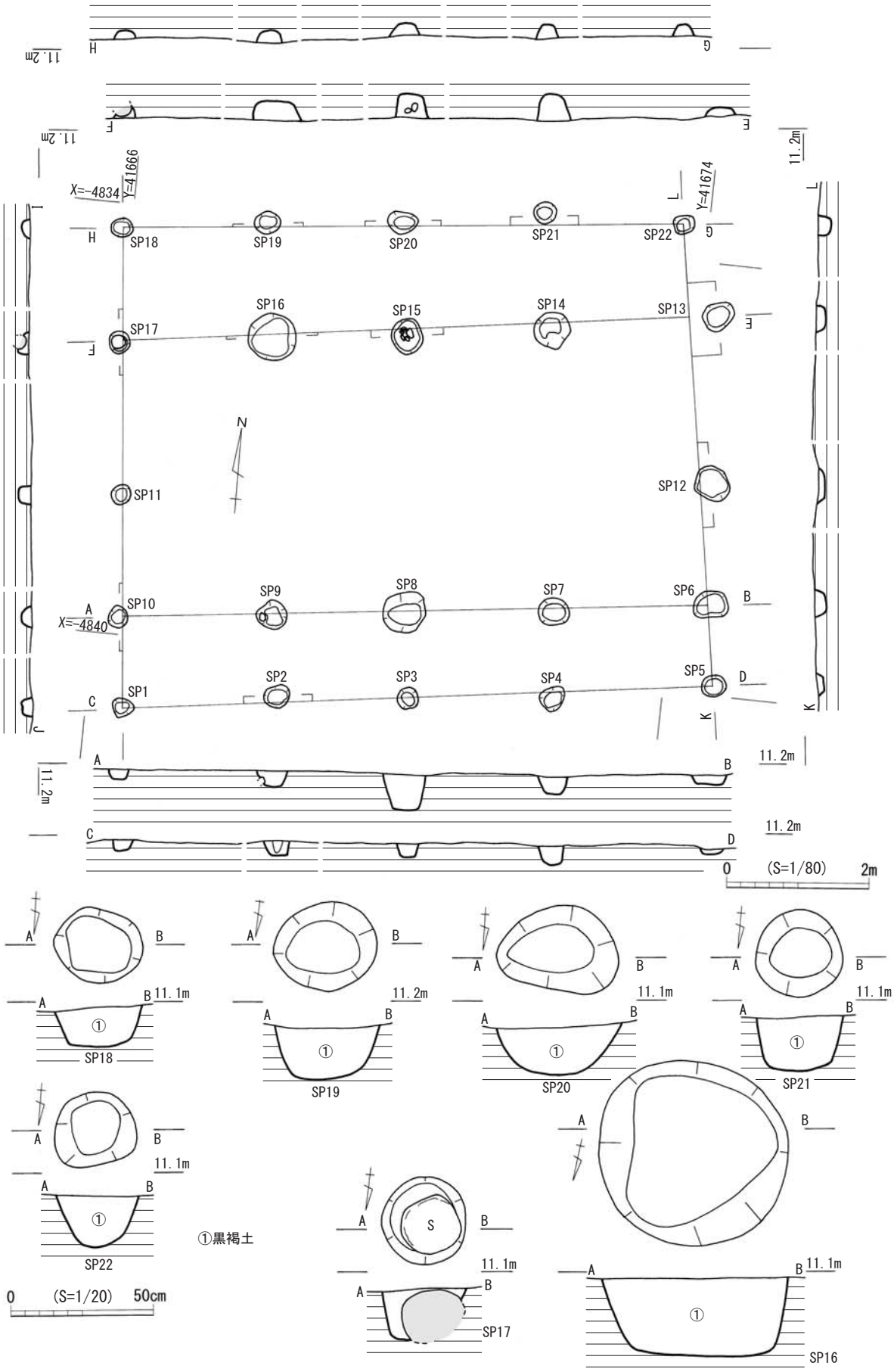
**243**は右回転の糸切り痕が残る土師器小皿底部である。切り離しの糸が浮き上がったために、極端な上げ底になっている。SP12から出土。**244**は白磁皿Ⅶ類である。SP18より出土。**245**は滑石製の温石である。穿孔が1箇所見られる。摩滅のために表面、裏面ともに加工痕は残っていない。SP16出土。これらの遺物からSB8は13世紀初頭の建物と思われる。

第60表　SB8出土　土器・磁器観察表

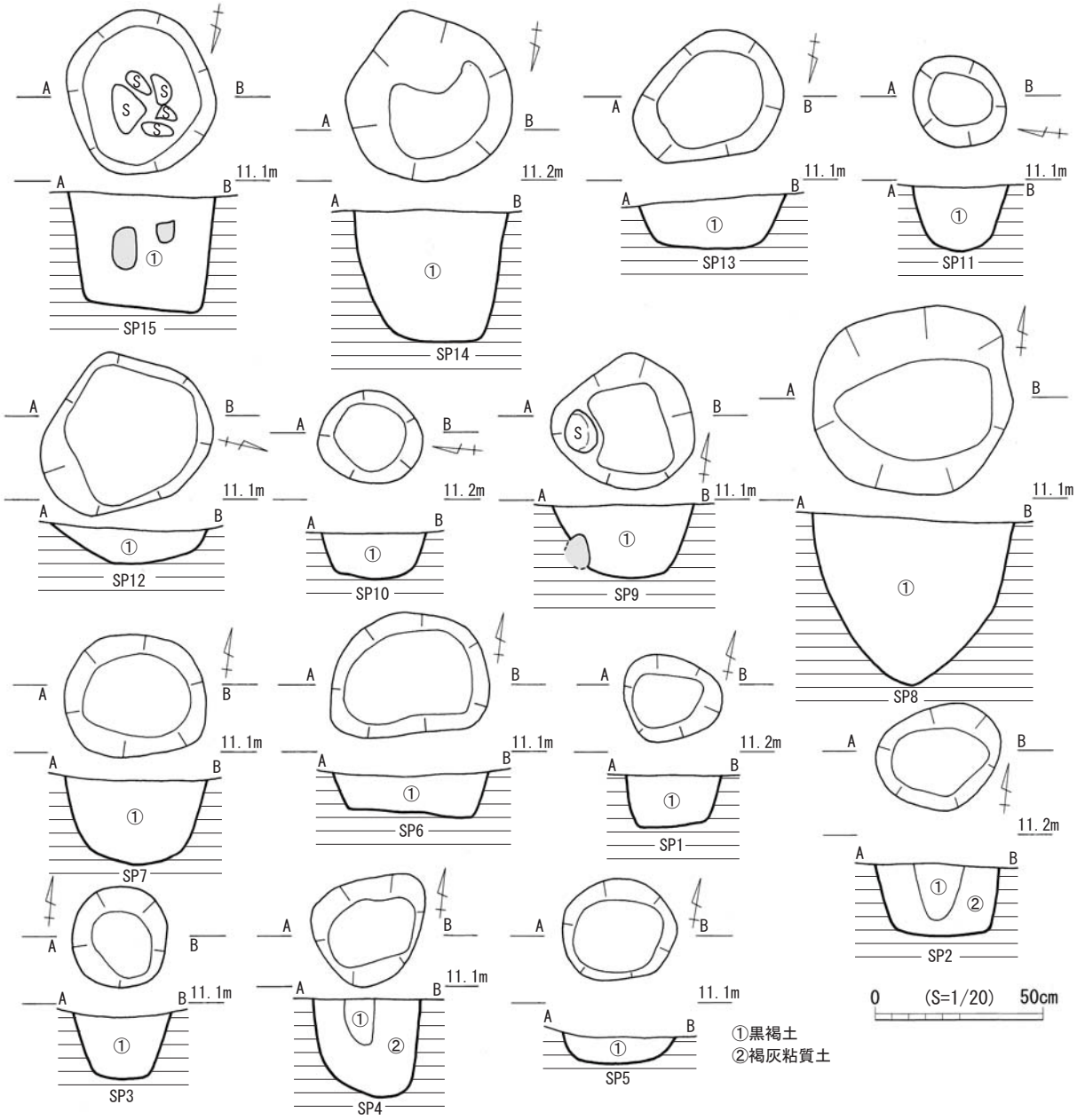
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 243 | 土師器　皿 | 底部～口縁部 | (9.5) | 1.1 | (7.4) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 右回転糸切り |
| 244 | 白磁　皿　Ⅶ類 | 底部～口縁部 | — | 1.7 | — | — | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | — | |

第61表　SB8出土　滑石製品観察表

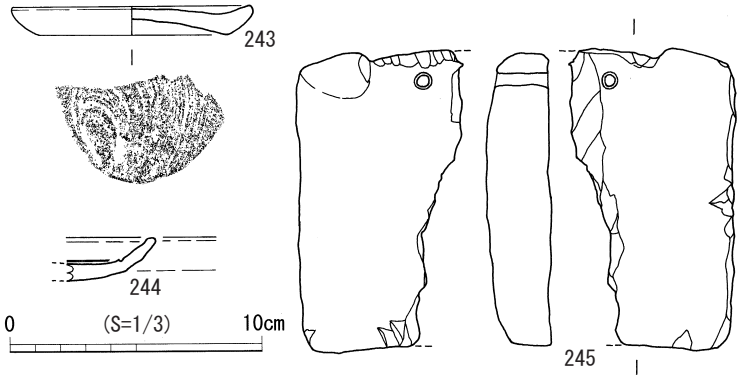
| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 245 | 温石 | 119 | 66 | 25 | 330 | 黒色 | 穿孔1箇所 |




第105図　SB8平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図－1(S＝1/20)



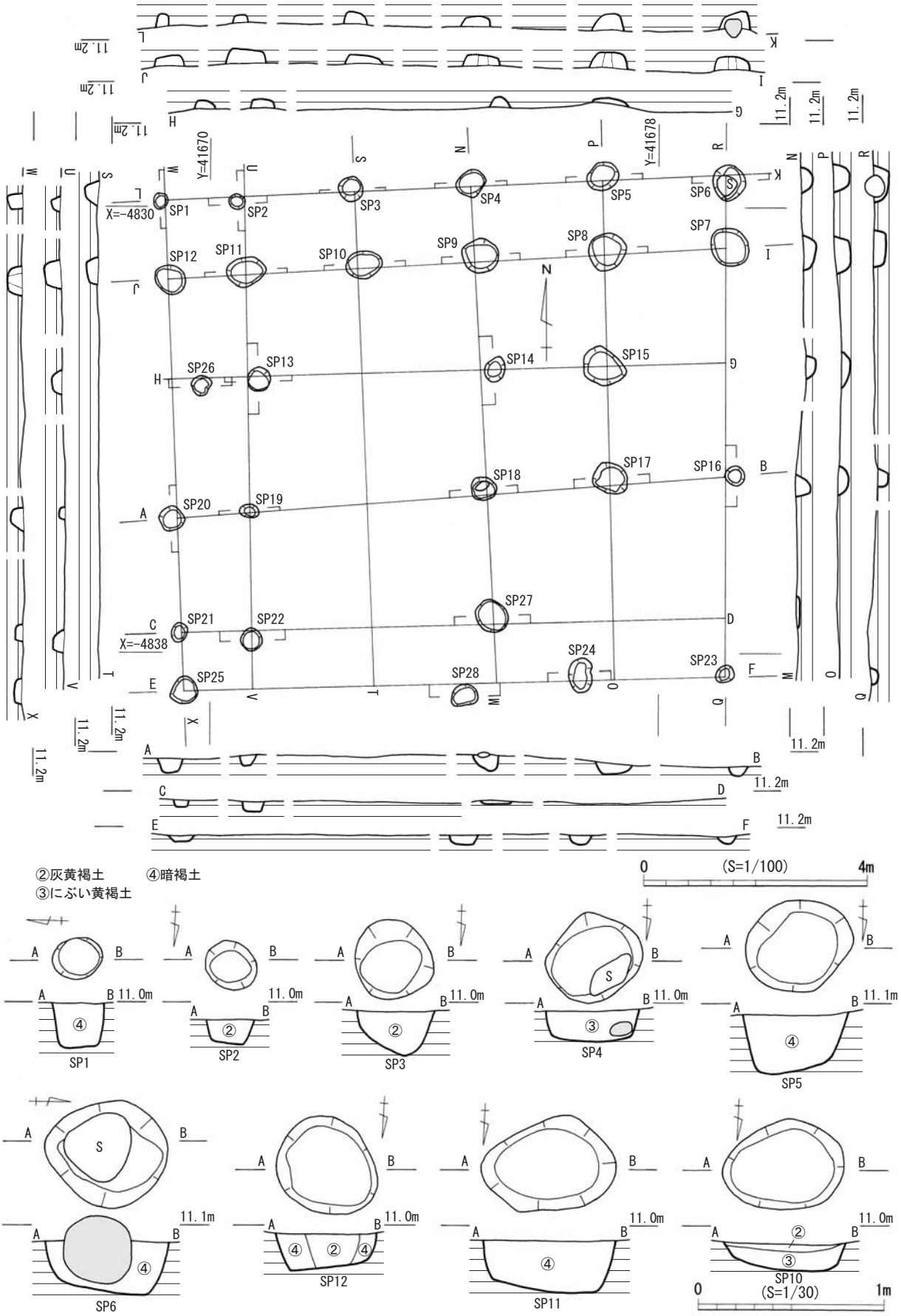

第106図　SB8柱穴平・断面図－2(S＝1/20)



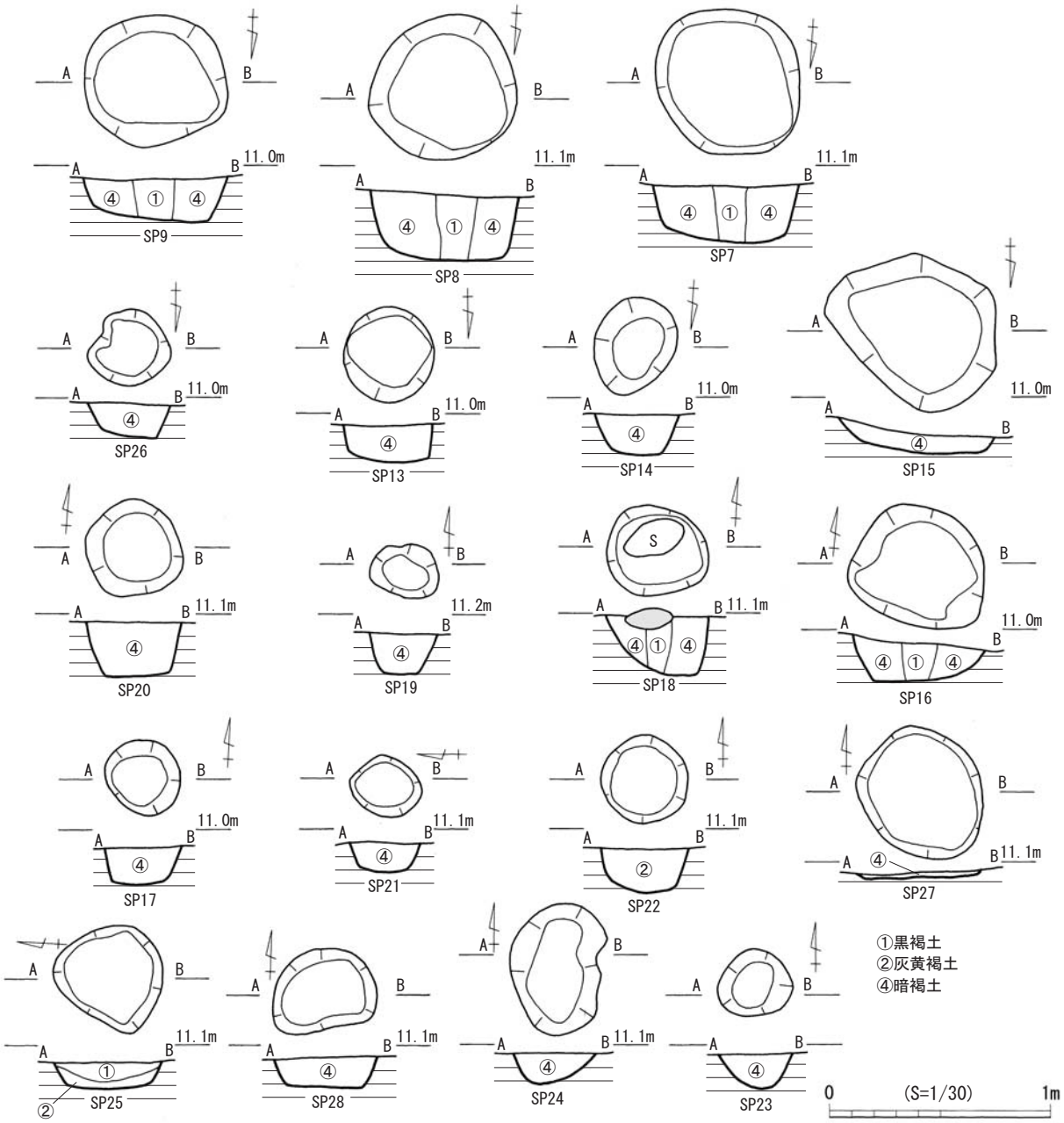

第107図　SB8出土遺物(S＝1/3)

図版98　SB8出土遺物

⑤ TAK201202調査区⑥区　SB9（第108・109図、図版99・100、第70表）




第108図　SB9平・断面図（S＝1/100）、柱穴平・断面図－1（S＝1/30）




第109図　SB9柱穴平・断面図－2(S＝1/30)

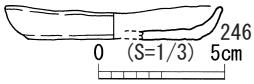
大調査区201202の⑥区8266グリッド3層からプランを検出した。梁行3間、桁行4間の総柱建物で南と北と西に廂を持つ。主軸はN90°Wである。柱穴径は50cm～20cmのほぼ円形で覆土は単層である。

図版99　SB9検出状況　西から

図版100　SB9完掘状況　南から

TAK201202調査区⑥区　SB9出土遺物(第110図、図版101、第62表)

**246**は右回転の糸切り痕が残る土師器小皿底部である。精良な胎土である。SP17から出土。この遺物からSB9は12世紀後半の建物と思われる。




第110図　SB9出土遺物(S＝1/3)

図版101　SB9出土遺物

第62表　SB9出土　土器観察表

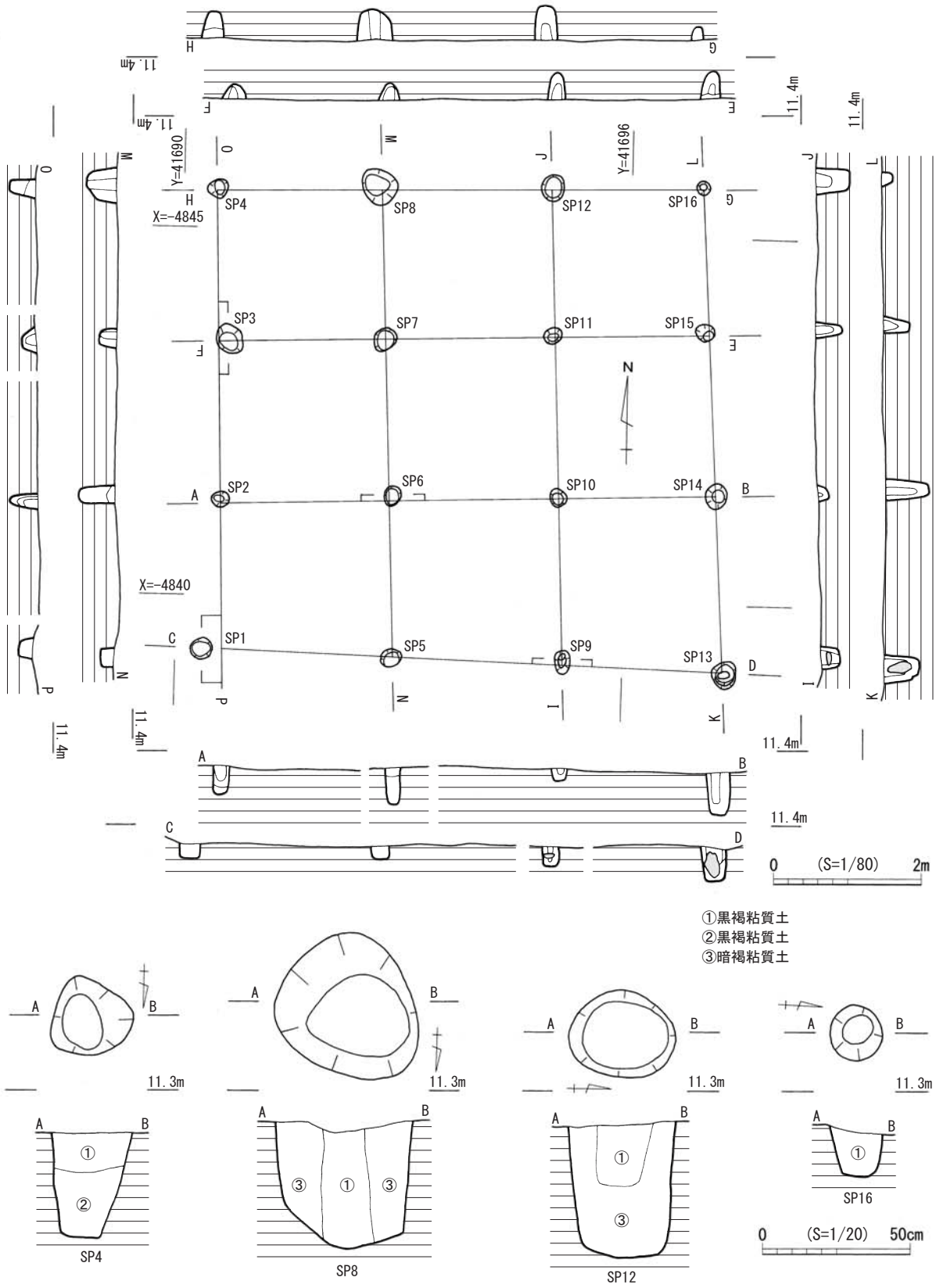
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 246 | 土師器　皿 | 底部～口縁部 | (8.4) | 1.3 | (6.6) | — | — | 灰褐色 | 灰褐色 | 良好 | 雲母 長石 石英 | 右回転糸切り |

⑥ TAK201405調査区②区　SB1(第111・112図、図版102・103、第70表)

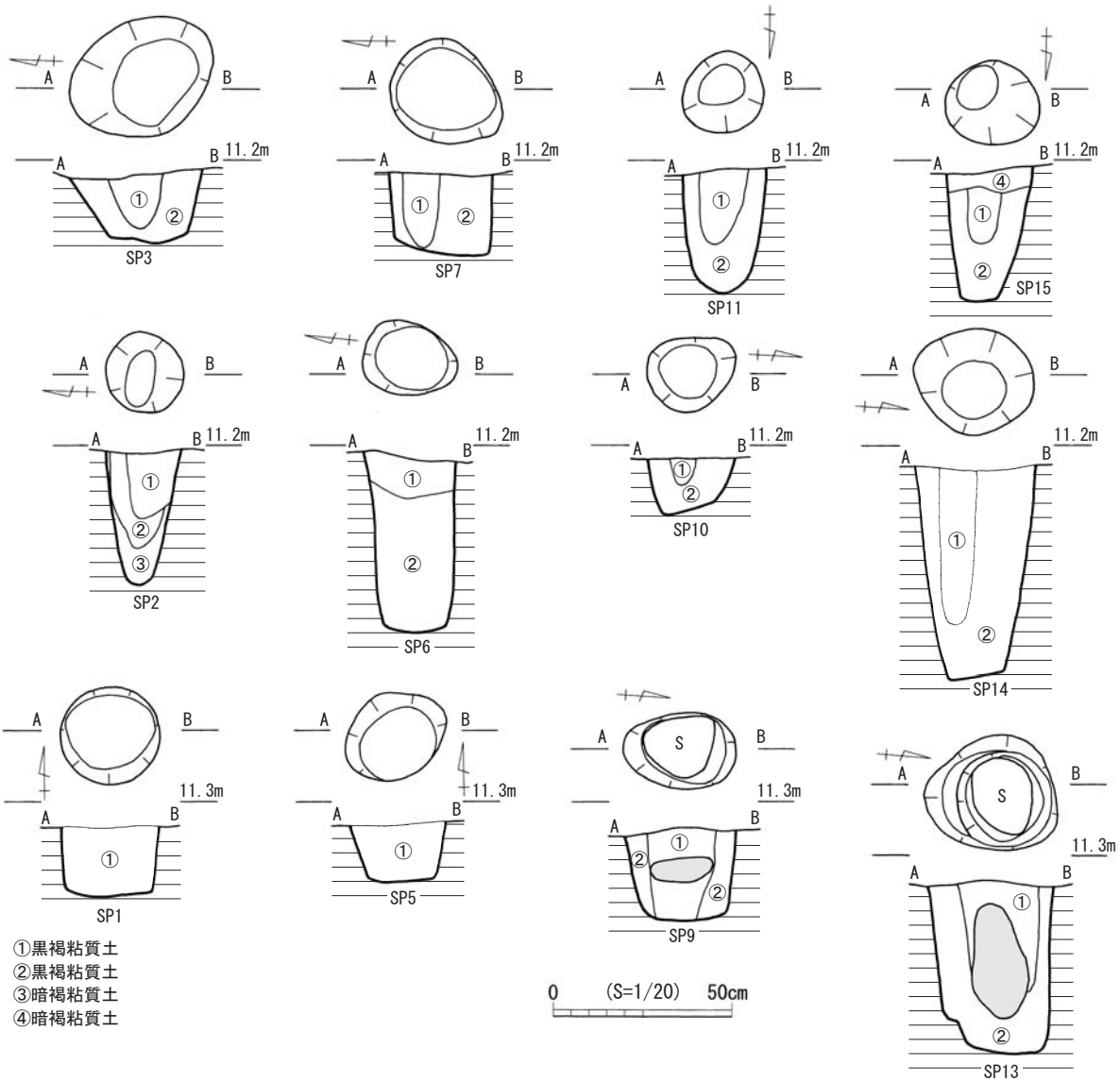
大調査区201405の②区8268・8468グリッド3層からプランを検出した。梁行3間、桁行3間の総柱建物で主軸はN90°Wである。柱穴径は50cm～20cmのほぼ円形で覆土は単層である。

図版102　SB1検出状況　東から

図版103　SB1完掘状況　東から




第111図　SB1平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図－1(S＝1/20)




第112図　SB1柱穴平・断面図－2(S＝1/20)

TAK201405調査区②区　SB1出土遺物(第113図、図版104、第63・64表)

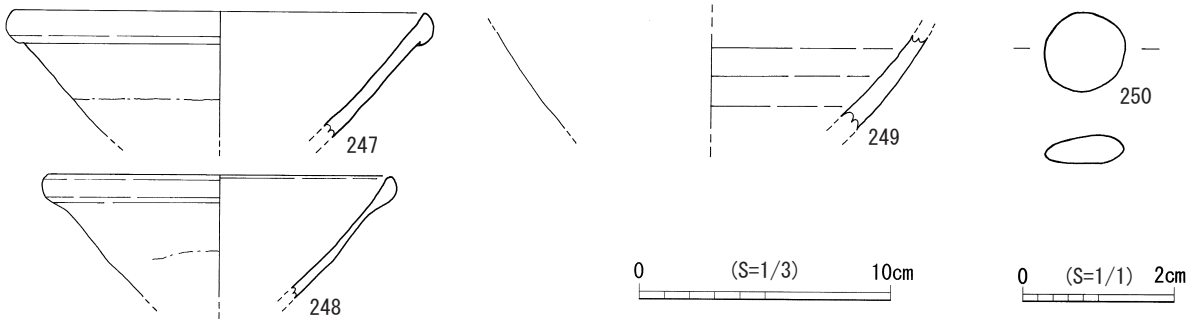
**247・248**は白磁椀Ⅳ類である。SP1より出土した。**249**は白磁四耳壺もしくは水注の体部片である。内面にも施釉される。SP12より出土。**250**は蛇紋岩の扁平な円礫である。人為的な加工は見られないが大きさや形から碁石等遊具の可能性があると考え掲載した。蛇紋岩は、大村周辺では見られず滑石を産する西彼杵半島で見られる。建物の時期であるが、区画内の同じ主軸方向を持つ建物の時期に近いものと考え、出土した遺物よりも若干新しく想定して12世紀半頃としたい。

第63表　SB1出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 247 | 白磁 椀 Ⅳ類 | 口縁部～体部 | (16) | (5.3) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — |
| 248 | 白磁 椀 Ⅳ類 | 口縁部～体部 | (13.5) | (4.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| 249 | 白磁　四耳壺もしくは水注 | 体部 | — | (3.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 |

第64表　SB1出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 250 | 碁石等遊具か | 蛇紋岩 | 11 | 10.5 | 3 | 0.55 | 円礫　碁石状　完形 |



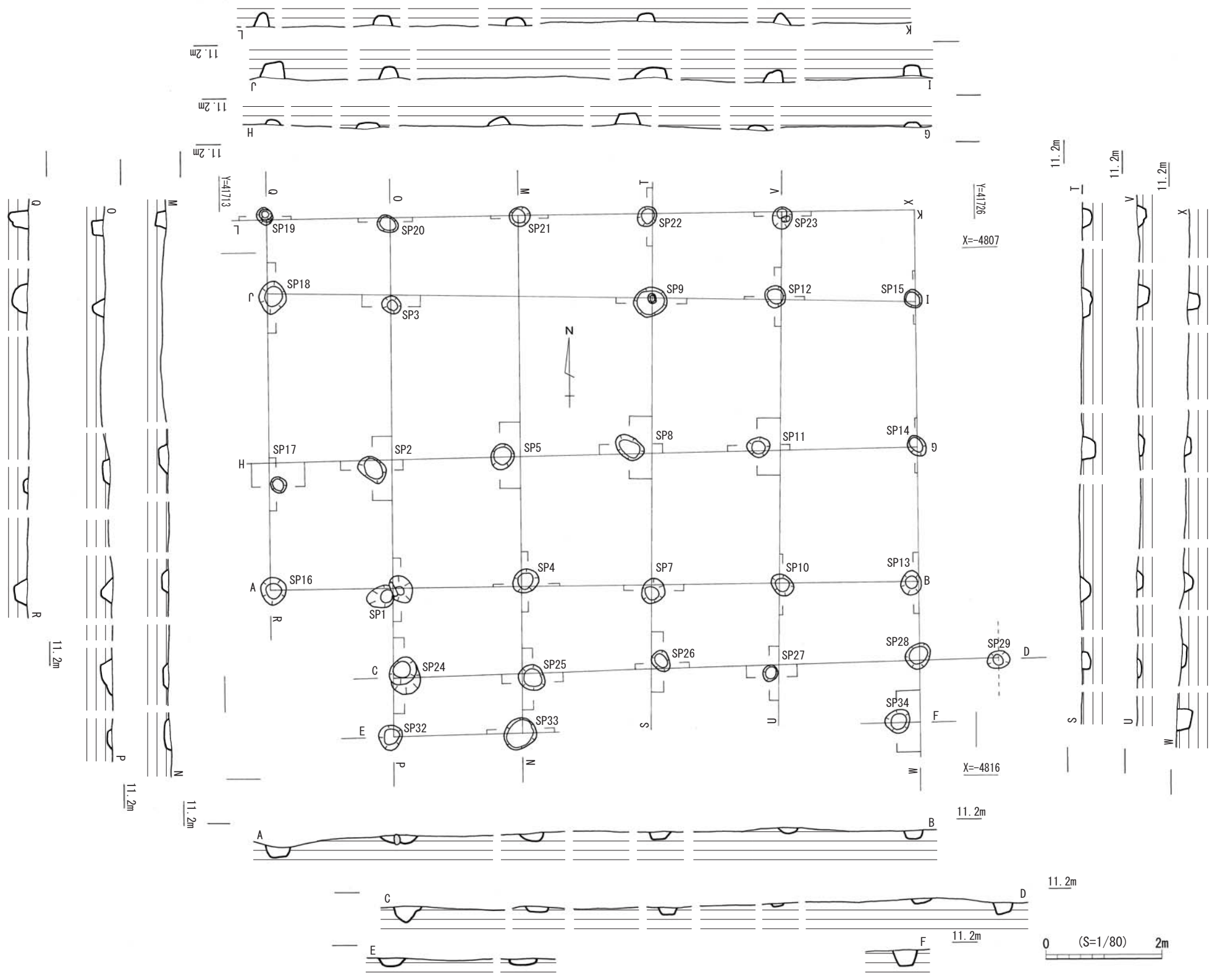

第113図　SB1出土遺物(S＝1/3、S＝1/1)

図版104　SB1出土遺物

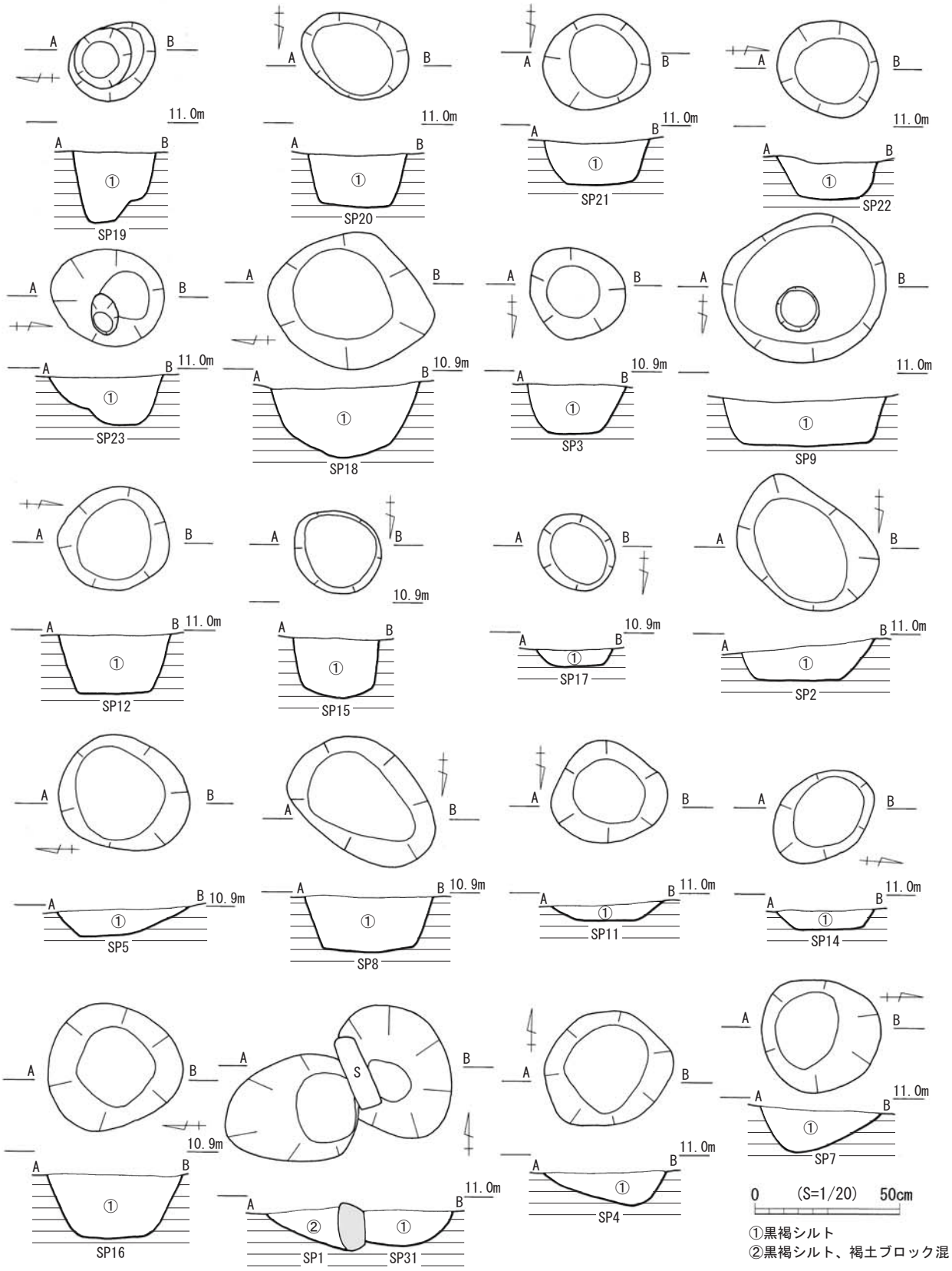
⑦ TAK201405調査区①区　SB2(第114・115・116図、図版105、第70表)

大調査区201405の①区8070・8072グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行5間の総柱建物で主軸はN90°Wである。北と南に廂を持つ。柱穴径は18cm～60cmのほぼ円形で覆土は単層である。南側の廂の先にさらに柱穴が2基並んでいることからこの場所が建物の入り口と考える。最も新しい遺物は252の白磁皿で、この年代が12世紀中頃であることから、遺構の年代もこの頃と思われる。

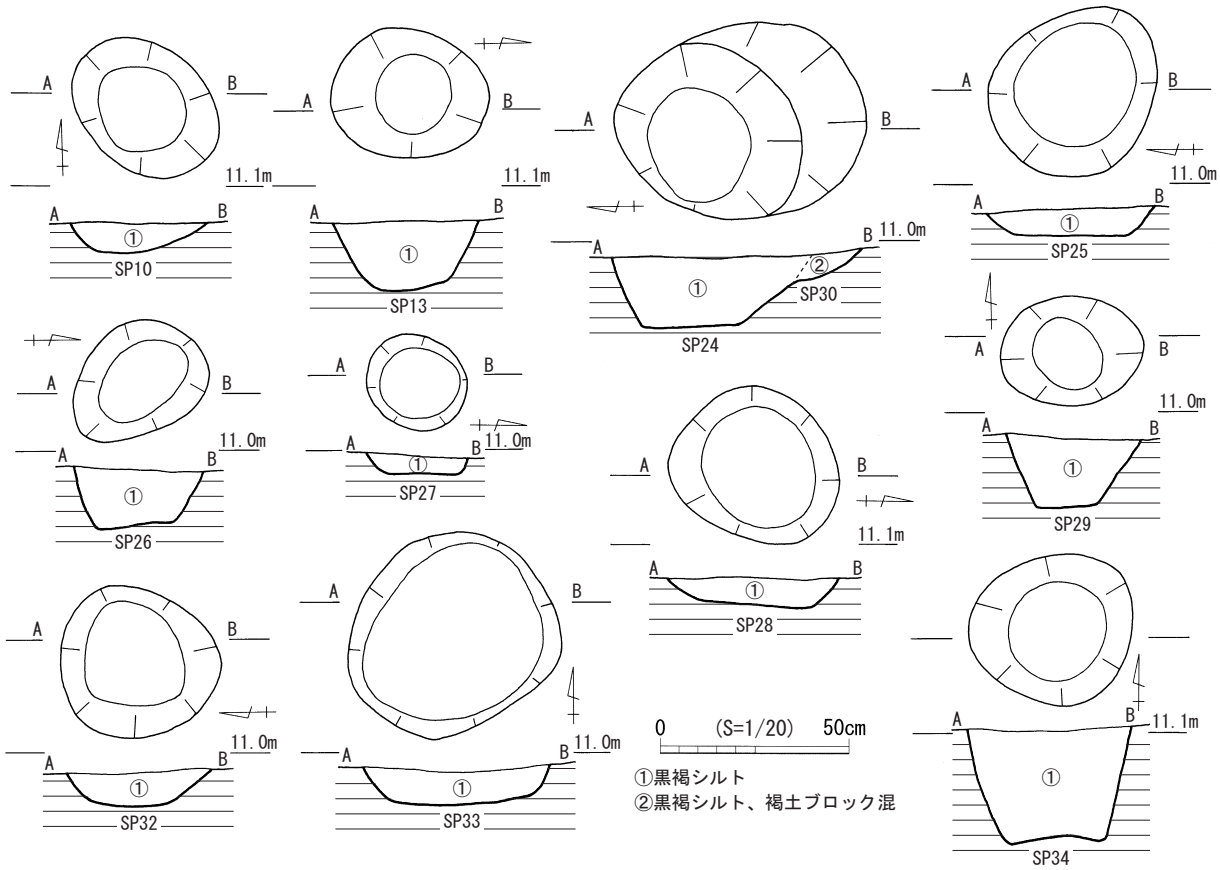
図版105　SB2検出状況　西から




第114図　SB2平・断面図(S＝1/80)




第115図　SB2柱穴　平・断面図－1(S＝1/20)



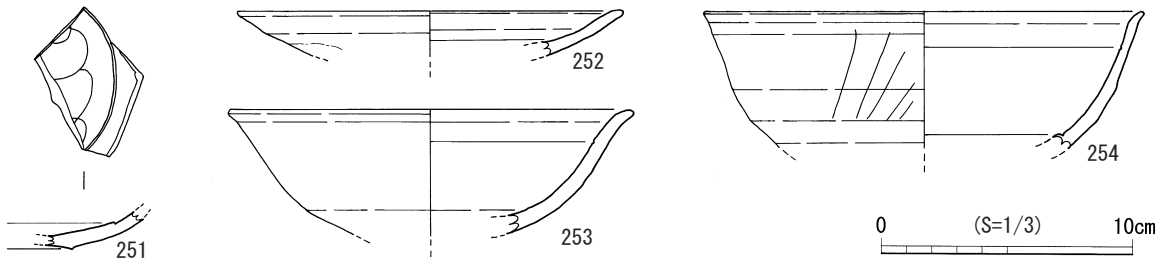

第116図　SB2柱穴　平・断面図－2(S＝1/20)

TAK201405調査区①区　SB2出土遺物(第117図、図版106、第65表)

**251**は白磁皿Ⅵ類の底部片である。見込みに線描きの花文が施される。SP13出土。**252**は白磁皿Ⅲ類体部片である。見込みの釉を輪状に掻き取る。SP24出土。**253**は白磁椀Ⅴ類口縁部である。口縁部はわずかに外反し、内面口縁部下に一条の沈線が巡る。SP18出土。**254**は白磁椀Ⅴ類口縁部である。外面に縦櫛花弁文を施す。SP13出土。

第65表　SB2出土　磁器観察表

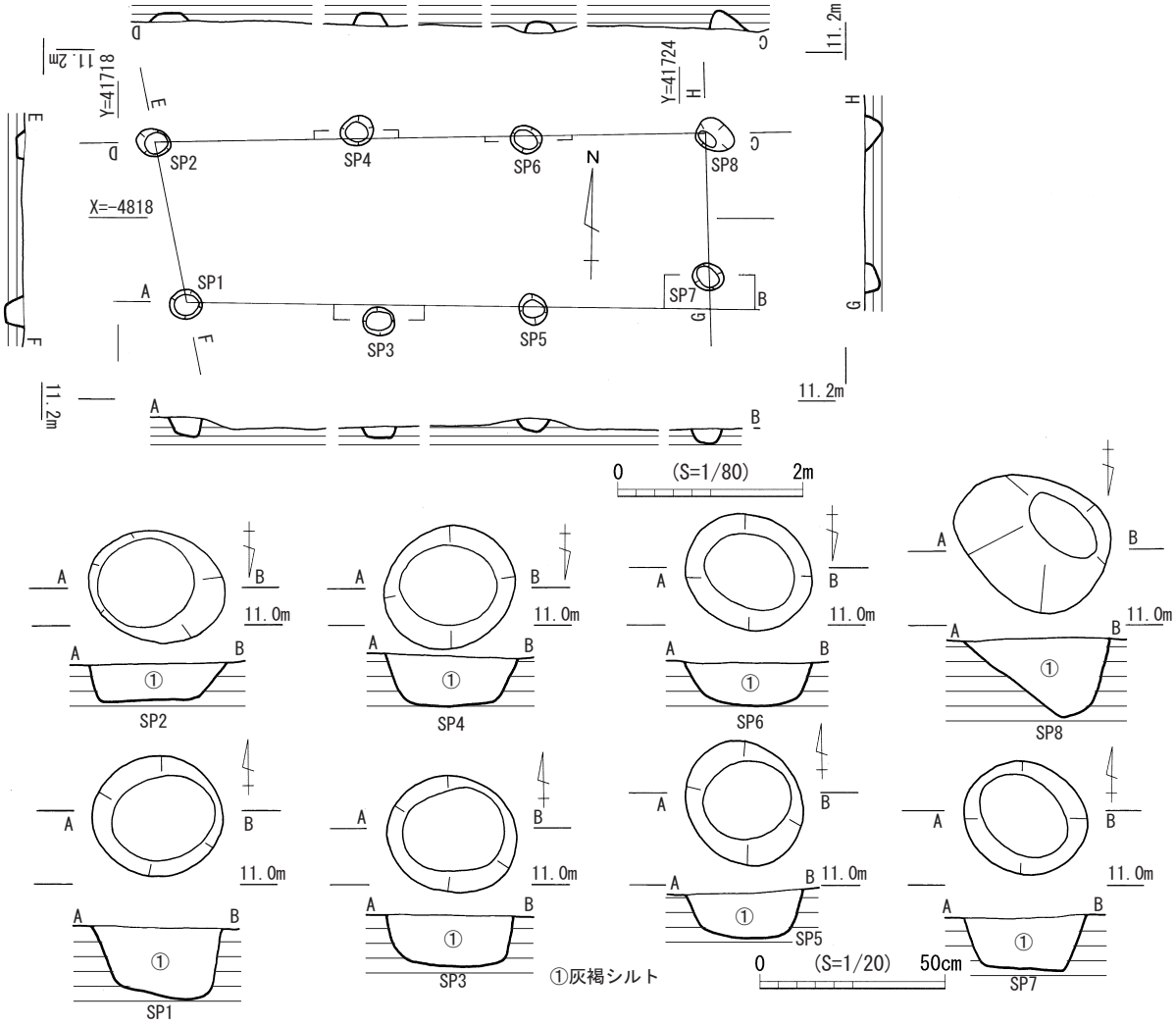
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 251 | 白磁 皿 Ⅵ類 | 底部 | — | (1.4) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| 252 | 白磁 皿 Ⅲ類 | 体部 | (14.9) | (1.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| 253 | 白磁 椀 Ⅴ類 | 口縁部 | (15.6) | (5) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |
| 254 | 白磁 椀 Ⅴ類 | 口縁部 | (17.1) | (5.4) | — | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石　黒色粒子 |




第117図　SB2出土遺物(S＝1/3)

図版106　SB2出土遺物

⑧ TAK201405調査区①区　SB3（第118図、図版107、第70表）



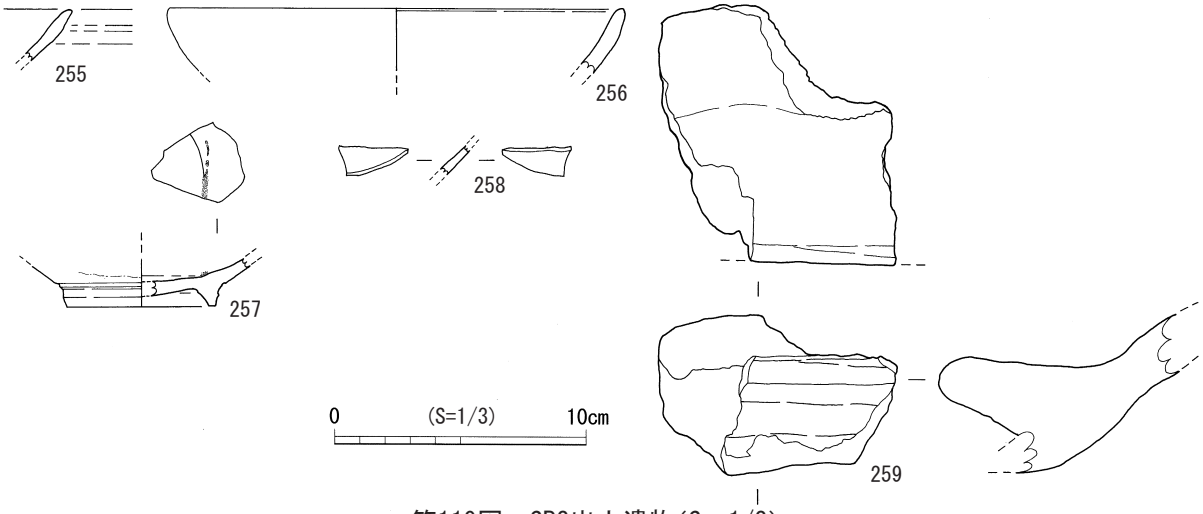

第118図　SB3平・断面図 S＝1/80、柱穴平・断面図(S＝1/20)

大調査区201405の①区8070・8072グリッド3層からプランを検出した。梁行1間、桁行3間の側柱建物で主軸はN90°Wである。柱穴径は40cm～35cmのほぼ円形で覆土は単層である。SP1より瓦器椀片が出土していることから、SB3の年代は12世紀代と思われる。

図版107　SB3完掘状況
西から

**TAK201405調査区①区　SB3出土遺物(第119図、図版108、第66・67表)**

**255**は土師器杯口縁部である。わずかに内湾している。SP1より出土。**256**は瓦器椀口縁部である。器厚が大である。SP1より出土。**257**は越州窯系青磁椀Ⅰ類底部片である。輪状高台で体部下半は露胎である。見込みに目跡が残る。SP8出土。**258**は越州窯系青磁椀体部片である。褐色の緻密な胎土にオリーブ色の釉が掛かる。257と同じSP8出土であるが、釉調や胎土が異なることから別個体である。**259**は移動式カマドの庇部分である。分厚い作りである。SP8出土。




第119図　SB3出土遺物(S＝1/3)

図版108　SB3出土遺物

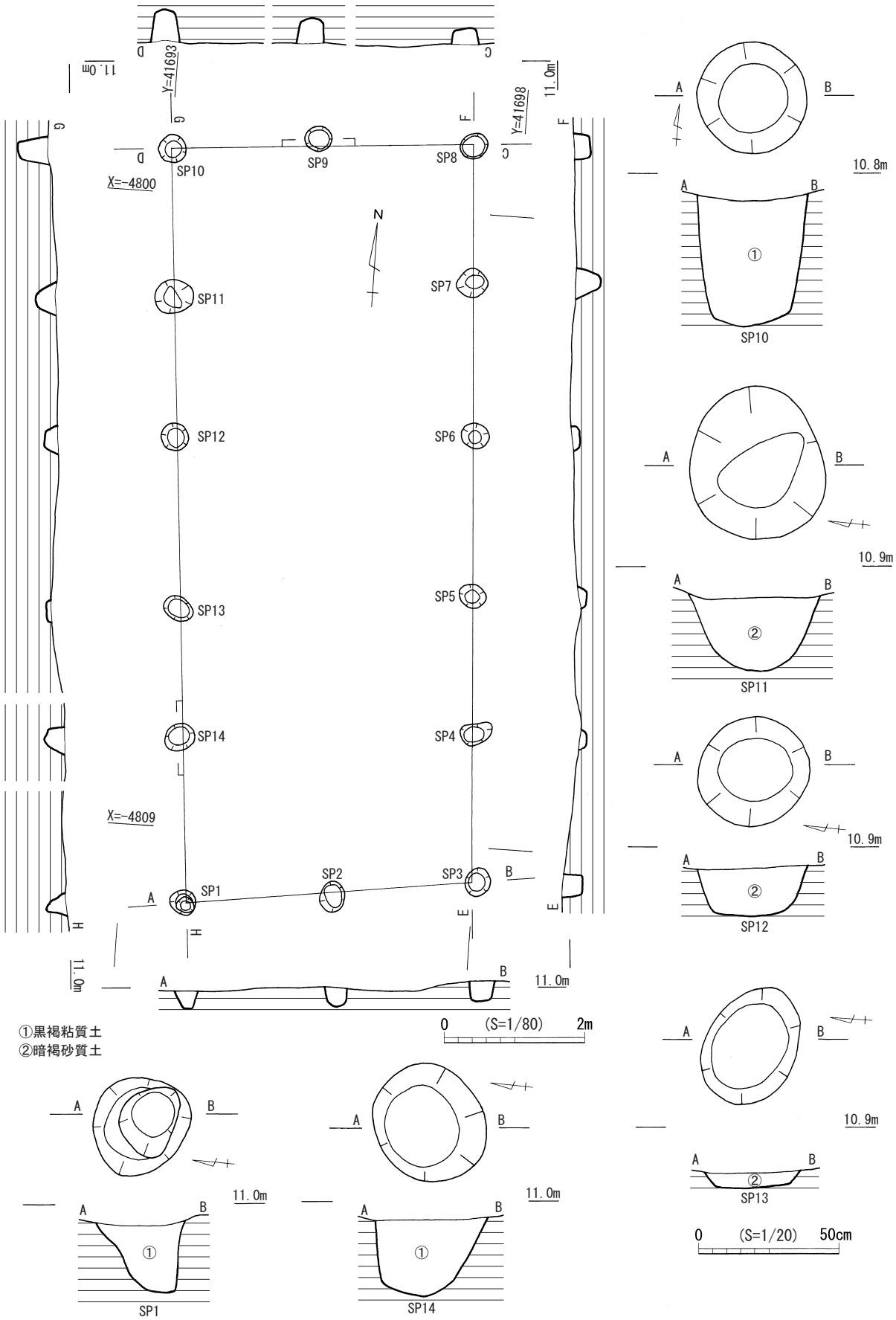
**第66表　SB3出土　土器・磁器観察表**

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 255 | 土師器　杯 | 口縁部 | — | 2 | — | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石 雲母 角閃石 | |
| 256 | 瓦器　椀 | 口縁部 | (17.7) | (2.5) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 精良 | |
| 257 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | (1.9) | (1.9) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | 輪状高台 |
| 258 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 体部 | — | (1.1) | — | — | — | 暗オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 精良 | |

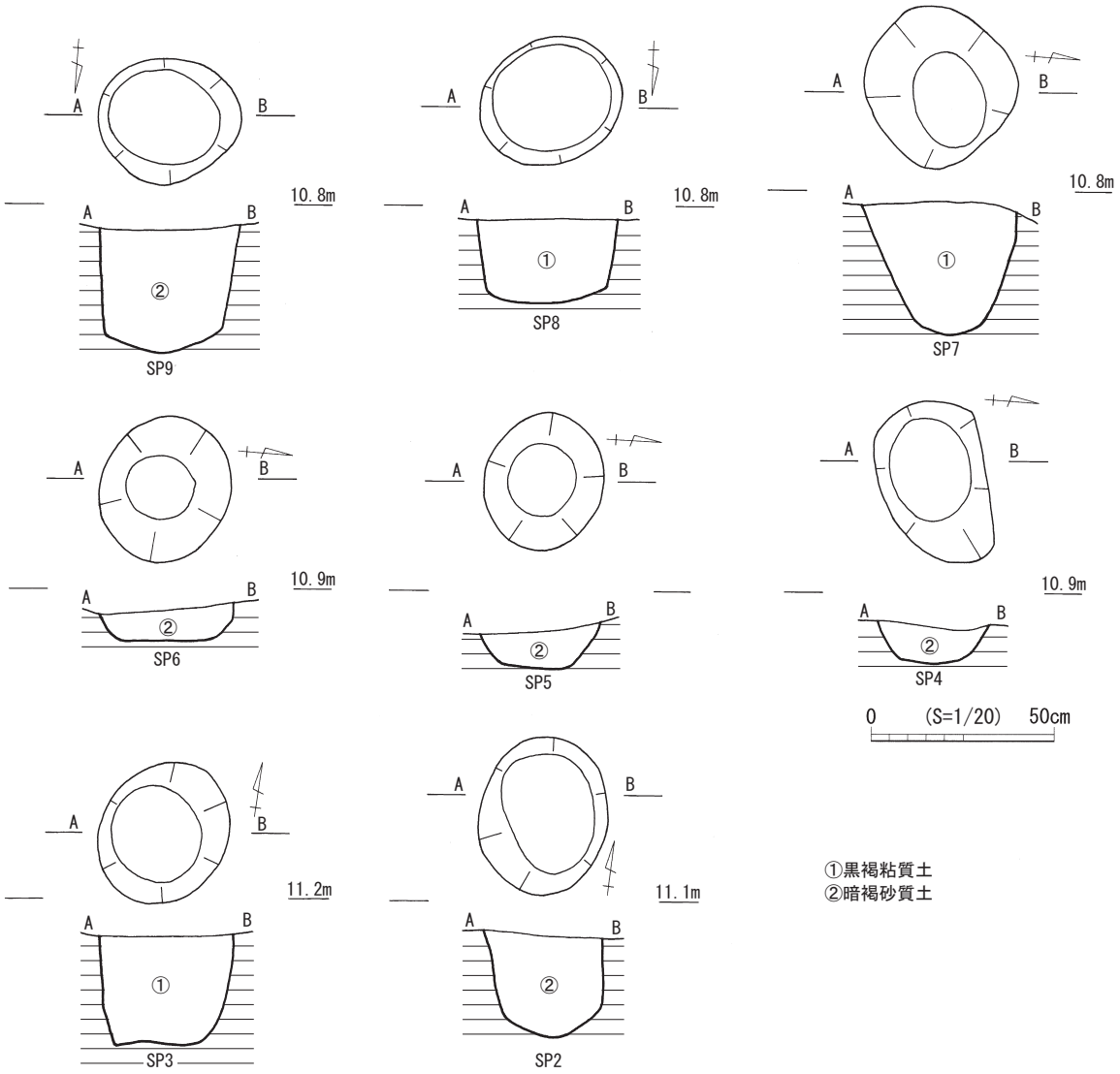
**第67表　SB3出土　土製品観察表**

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 259 | 移動式竈　庇部 | 102 | 94 | 44 | 317 | にぶい橙色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 雲母 |

⑨ TAK201405調査区②区　SB4（第120・121図、図版109、第70表）




第120図　SB4平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図－1（S＝1/20）

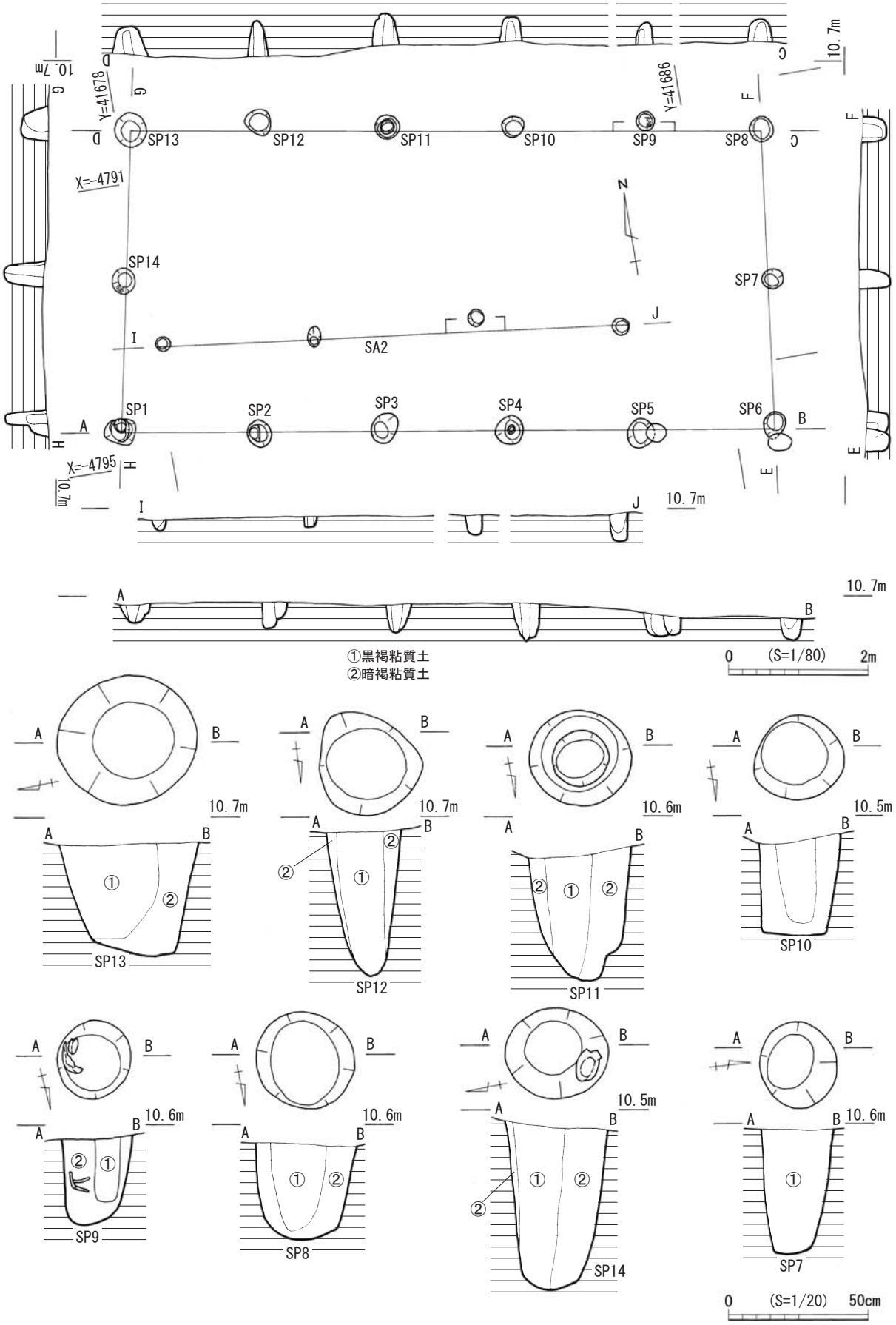



第121図　SB4柱穴　平・断面図－2(S＝1/20)

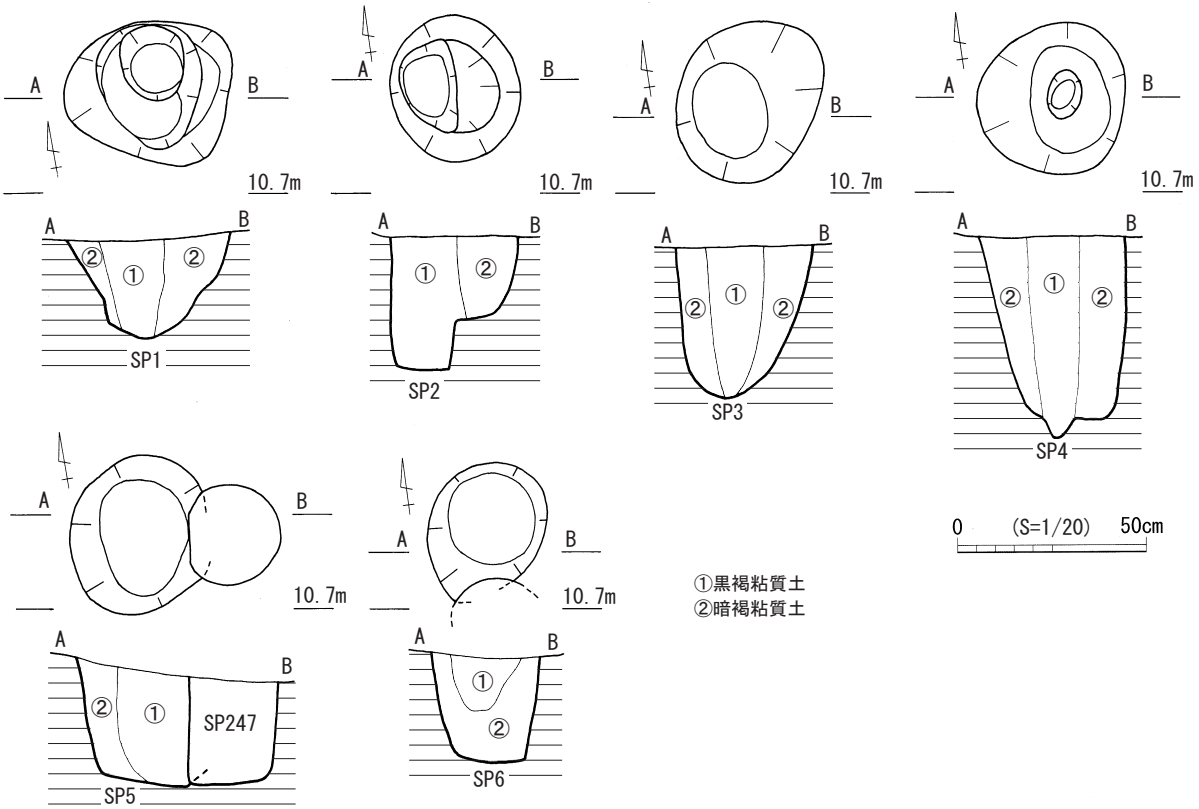
大調査区201405の②区7868・8068グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行5間の側柱建物で主軸はN5°Wである。柱穴径は40cm～60cmのほぼ円形で覆土は単層である。遺物の出土は無かった。

図版109　SB4完掘状況　北から

⑩ TAK201405調査区②区　SB5（第122・123図、図版110、第70表）




第122図　SB5平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図－1（S＝1/20）



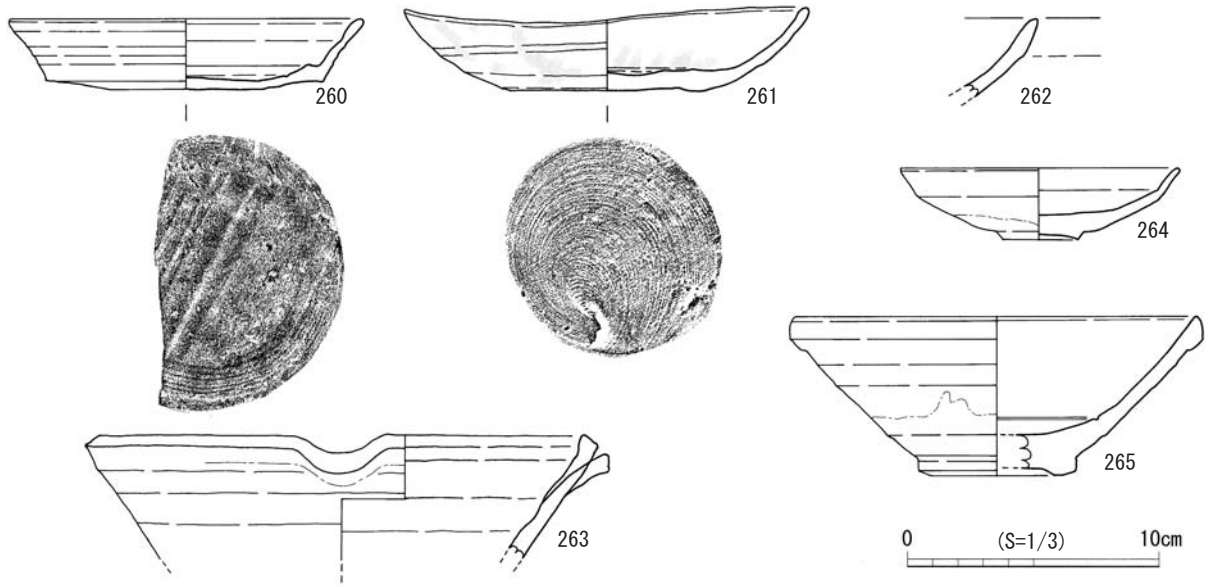

第123図　SB5柱穴平・断面図－2(S＝1/20)

大調査区201405の②区7868・③区7866グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行5間の側柱建物で主軸はN80°Wである。柱穴径は48cm～21cmのほぼ円形で覆土には柱痕が残るものが多い。SA2と切り合うが、前後関係は不明である。出土した遺物は12世紀代でまとまっており、土師器杯の年代から遺構は12世紀後半の年代をあてたい。

図版110　SB5検出状況　東から

TAK201405調査区②区　SB5出土遺物(第124図、図版111、第68表)

**260**は土師器杯である。切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。体部は中位から外方へ大きく引き伸ばされる。SP5から出土。**261**は豊前系土師器杯である。切り離しは右回転の糸切りで胎土は精良である。内外面に煤が付く。SP14から出土。**262**は瓦器椀口縁部である。器肉は厚く口縁部でさらに肥厚する。SP11から出土。**263**は東播系捏鉢の片口部分である。口縁部に焼成時の重ね焼き痕が残る。SP8から出土。**264**は白磁皿Ⅵ類である。SP9から出土。**265**は白磁椀Ⅳ類である。SP1から出土。



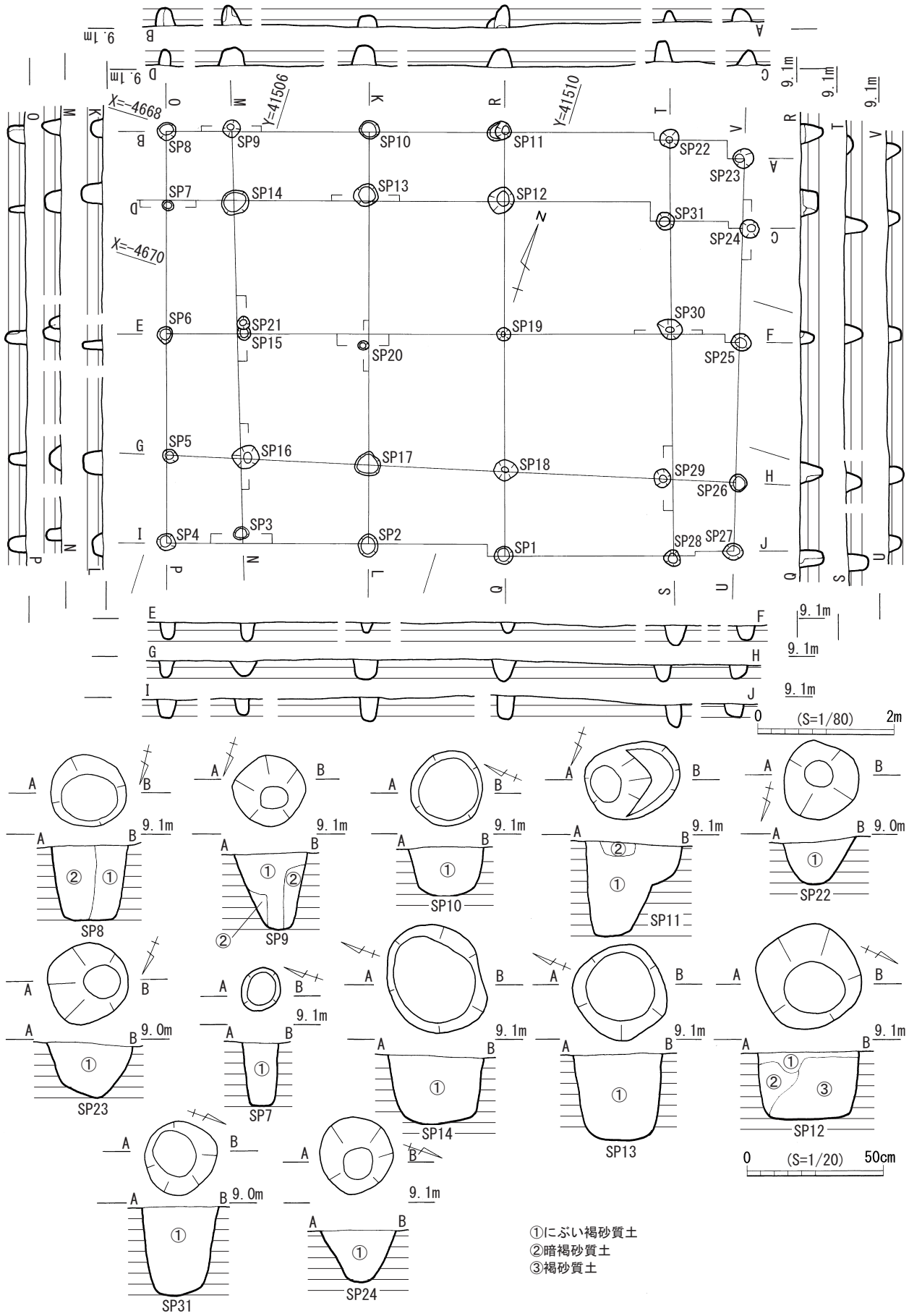

第124図　SB5出土遺物(S＝1/3)

図版111　SB5出土遺物

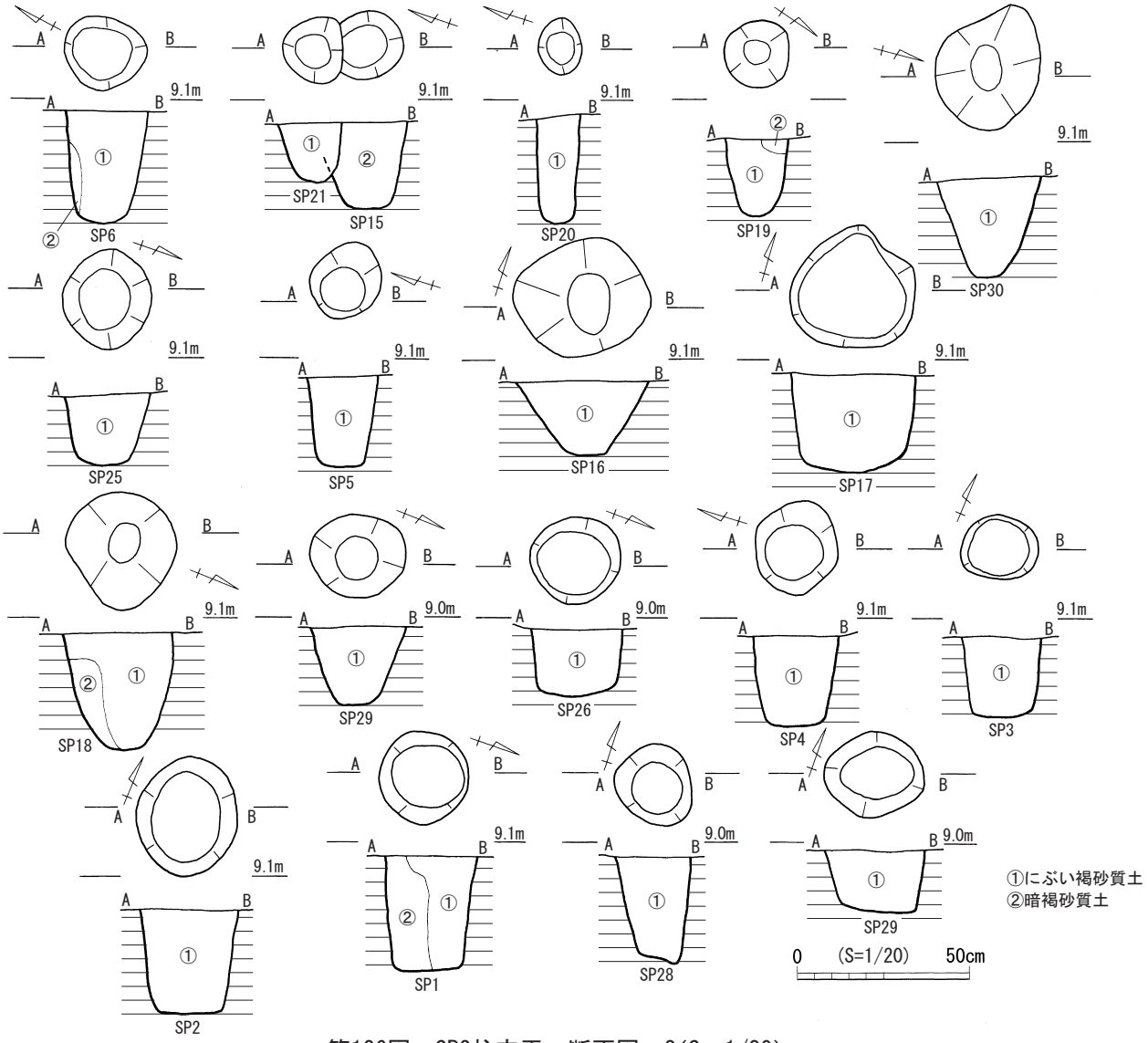
第68表　SB5出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 260 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (13.6) | 2.8 | 10.8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英<br>金雲母　赤色粒子 | 回転糸切り・板状圧痕 |
| 261 | 豊前系土師器杯 | 底部～口縁部 | 15.5 | 3.3 | 7.5 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石　雲母<br>精良 | 右回転糸切り |
| 262 | 瓦器　椀 | 口縁部 | — | (3.1) | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 石英　精良 | |
| 263 | 東播系　捏鉢 | (片口)<br>口縁部 | (19) | (4.9) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 264 | 白磁　皿　Ⅵ類 | 底部～口縁部 | 10.9 | 2.9 | 3 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 265 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 底部～口縁部 | (15.8) | 6.3 | (4.8) | — | — | 白灰色 | 白灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |

⑪ TAK201406調査区③区　SB2（第125・126図、図版112・113、第70表）

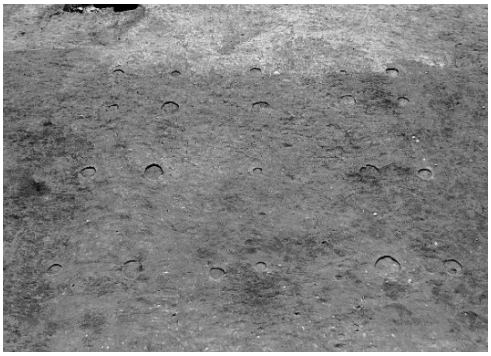



第125図　SB2平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図－1（S＝1/20）

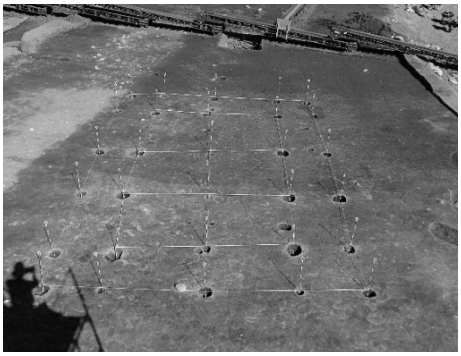



第126図　SB2柱穴平・断面図－2(S＝1/20)

大調査区201406の小調査区③区6650グリッド2層からプランを検出した。梁行2間、桁行3間の総柱四面廂建物である。主軸はN75°Eである。柱間は1.7m～2.4mで、柱穴径は母屋部分が20cm～42cmで廂部分が14cm～30cmである。遺物の出土はなかったが、南東50mには堀を持つ14世紀の宗教施設と思われる建物SX1があり、この四面廂建物との関係が考えられる。



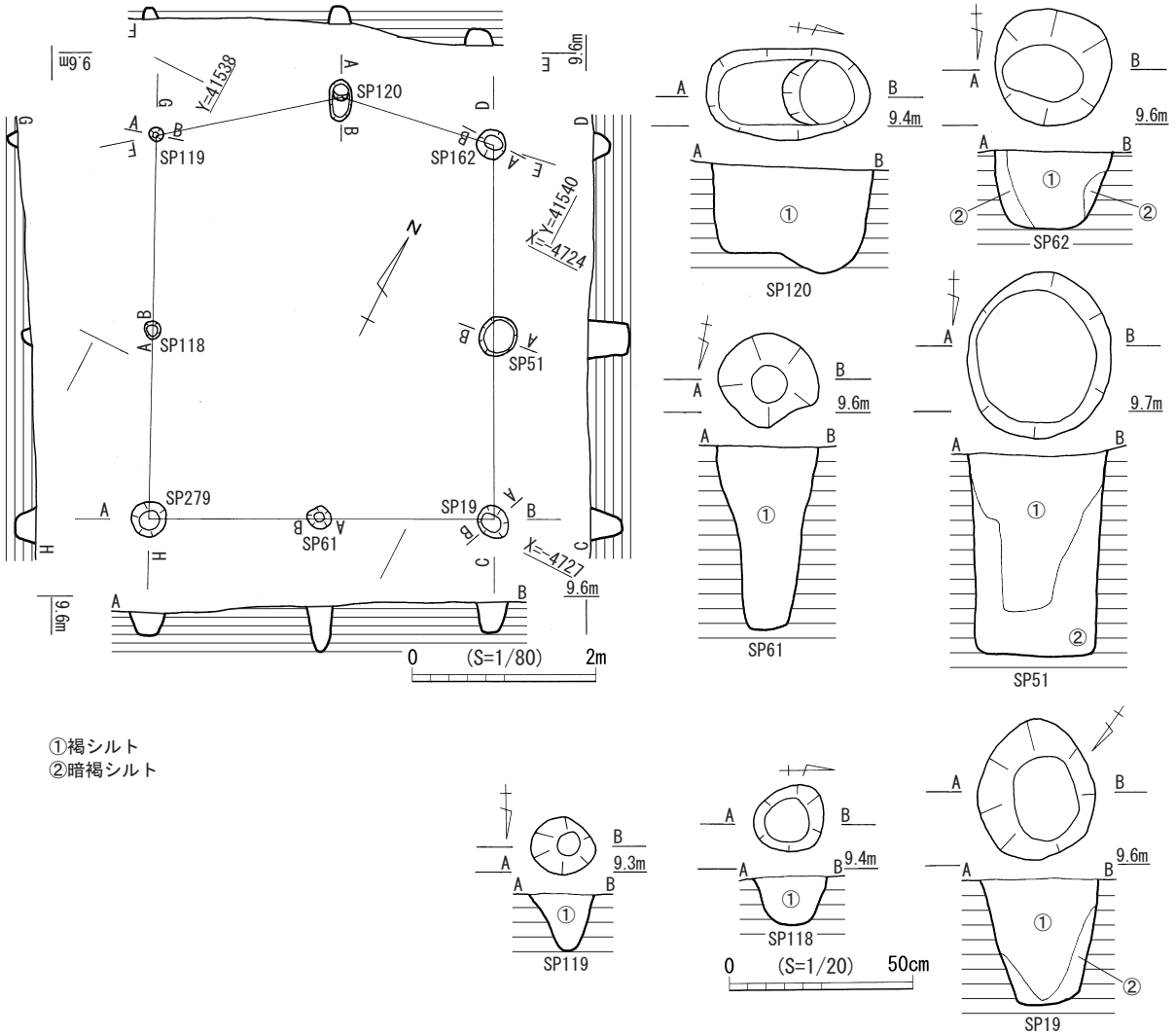
図版112　SB2検出状況　東から



図版113　SB2完掘状況　西から

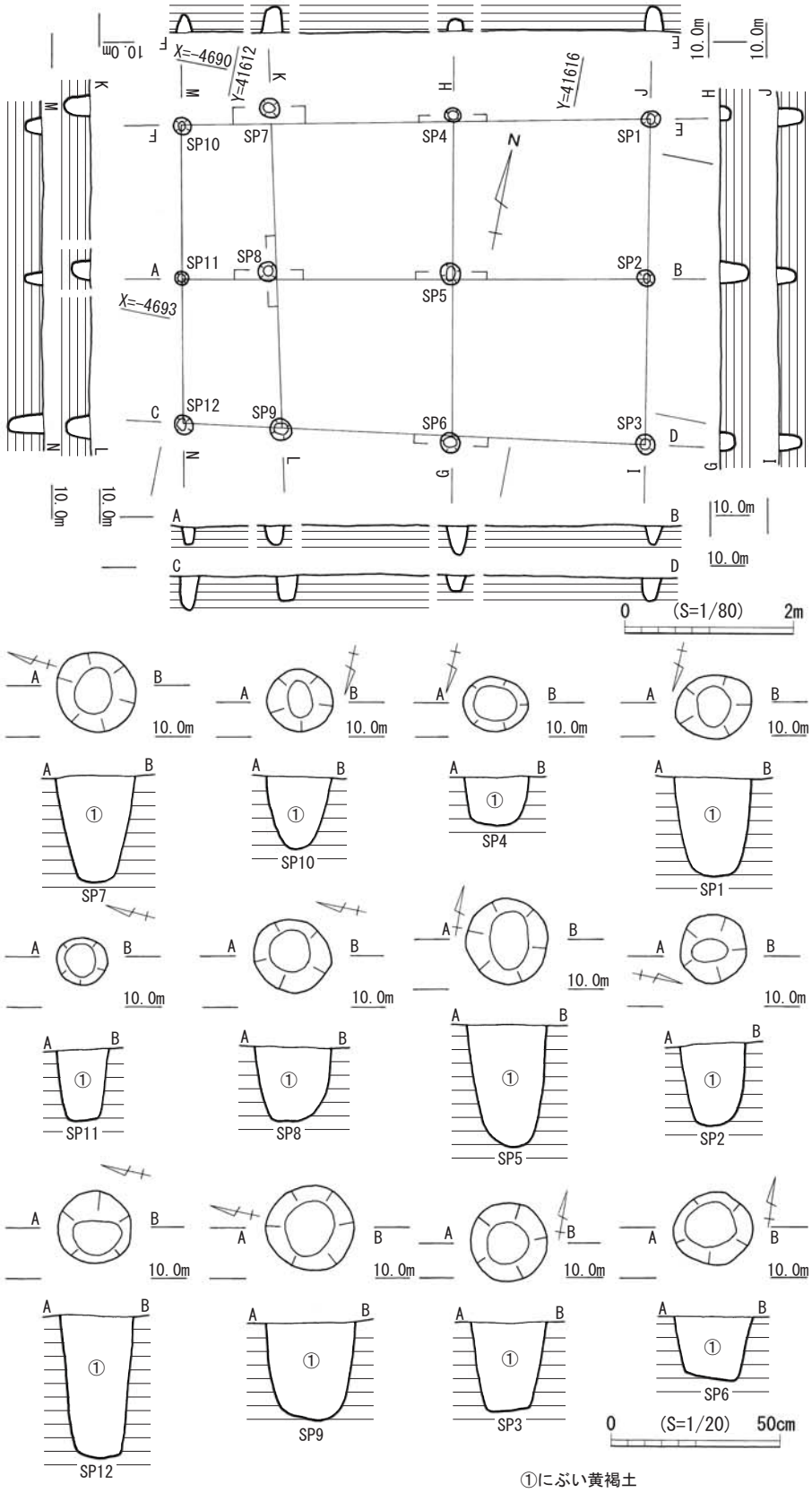
⑫ TAK201406調査区②区　SB6（第127図、第70表）

大調査区201406の小調査区②区7252・7254グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行2間の側柱建物である。主軸はN26°Wである。柱間は1.2m～2.0mで柱穴径は、18cm～41cmである。柱穴径が小さいことから、簡易の建物であったと思われる。調査後掘立柱建物跡と認定したために写真撮影は行っていない。遺物の出土はなかった




第127図　SB6平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図（S＝1/20）

⑬ TAK201407調査区①区　SB1（第128図、図版114・115、第70表）



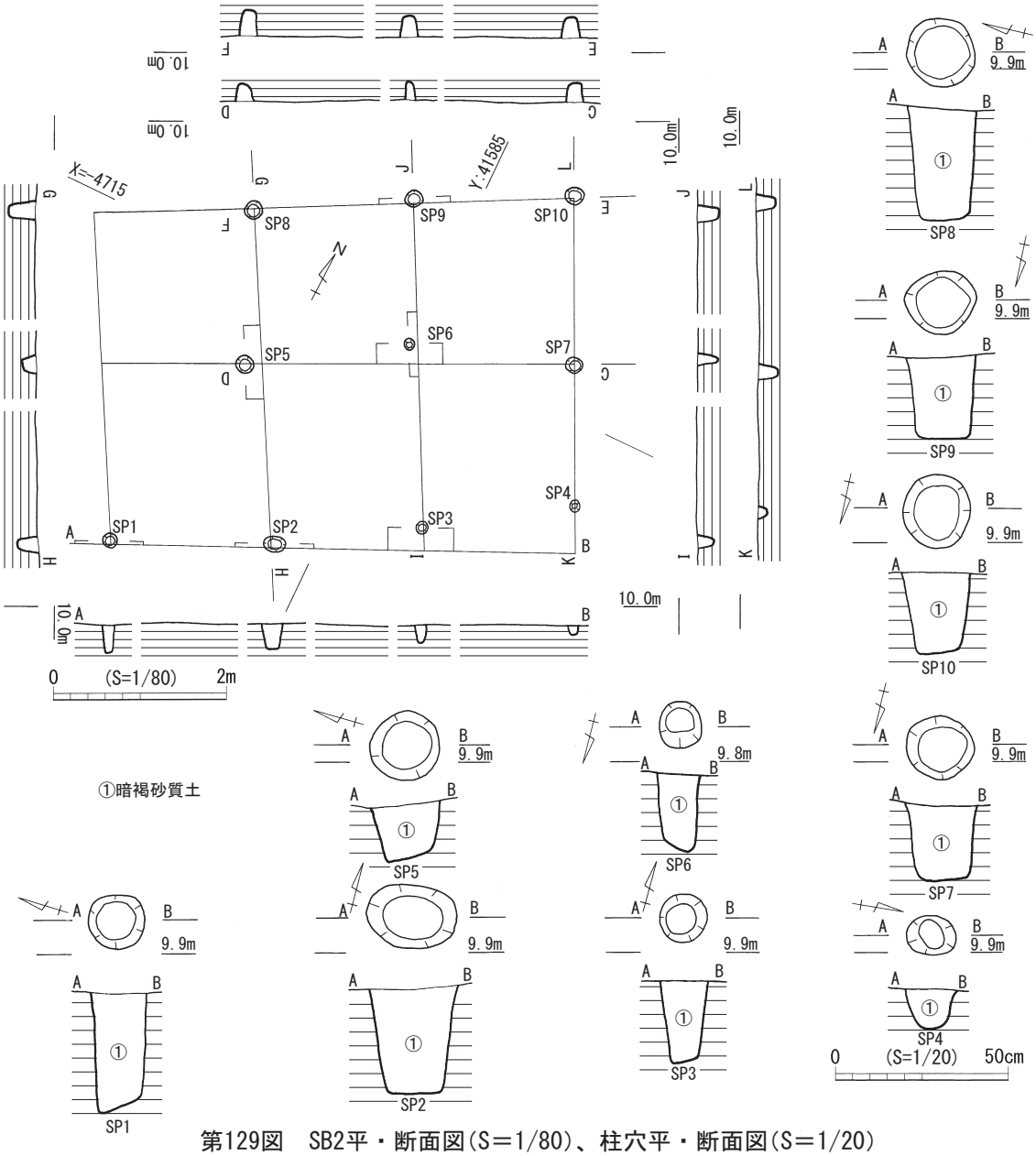

第128図　SB1平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図（S＝1/20）

大調査区201407の小調査区①区6860グリッド2層からプランを検出した。梁行2間、桁行2間の総柱建物である。主軸はN82°Eである。西側に廂を持つ。柱穴径は40cm～60cmのほぼ円形で覆土は単層である。出土遺物は無し。

図版114　SB1検出状況　西から

図版115　SB1完掘状況　西から

⑭ TAK201407調査区①区　SB2（第129図、図版116・117、第70表）




第129図　SB2平・断面図（S＝1/80）、柱穴平・断面図（S＝1/20）

大調査区201407の小調査区①区7058グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行3間の総柱建物であるが、確認できなかった柱痕もある。主軸はN24°Wである。柱間は1.9m～2.0mで柱穴径は13cm～25cmである。柱径が小さいことから簡易な建物であったと思われる。出土遺物なし。

図版116　SB2検出状況　北から

図版117　SB2完掘状況　北から

⑮ TAK201407④区　SB5（第130－1図、図版118、第70表）

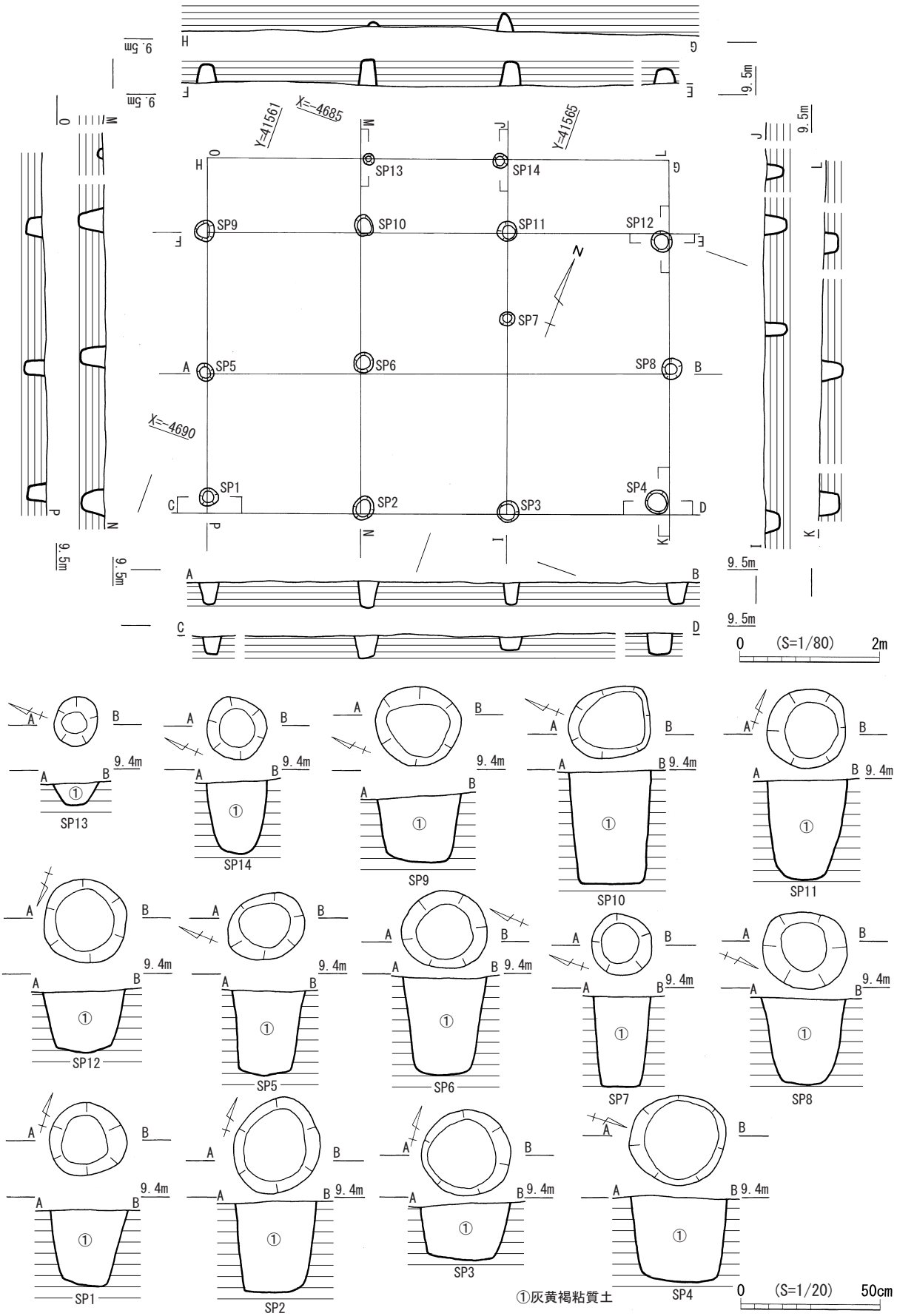
大調査区201407の小調査区④区6856グリッド3層からプランを検出した。梁行2間、桁行3間の総柱建物である。主軸はN70°Eである。

平面図では北に廂が付く図を示したが、建物入り口等の施設の可能性もある。柱穴径は、母屋部分が30cm～35cmで廂部分が18cm～20cmである。土師器小皿の年代が建物の年代に相当すると思われる。

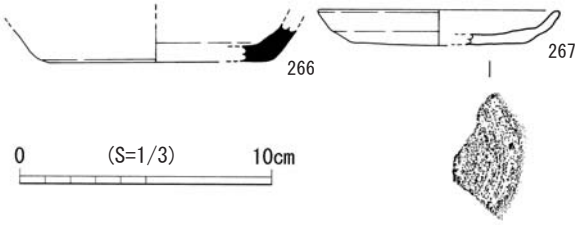
図版118　SB5完掘状況　北から

TAK201407調査区④区　SB5出土遺物（第130－2図、図版119、第69表）

取り上げの際にピット番号を付しておらず、どのピットから出土したか不明であるが、当遺構からの出土遺物は少ないために掲載した。**266**は須恵器杯底部である回転ヘラ切りによる切り離しで、体部は直線的に開くと思われる。9世紀前半の所産である。**267**は土師器小皿である。切り離しは回転糸切りである。体部はわずかに内湾しながら口縁部に至る。12世紀後半の所産と思われる。




第130-1図　SB5平・断面図(S＝1/80)、柱穴平・断面図(S＝1/20)




第130-2図　SB5出土遺物(S＝1/3)

図版119　SB5出土遺物

第69表　SB5出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 266 | 須恵器　杯 | 底部 | — | (1.5) | (8.5) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | 回転ヘラ切り |
| 267 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.4) | 1.4 | (6.8) | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 回転糸切り |

第70表　掘立柱建物跡(SB)計測表

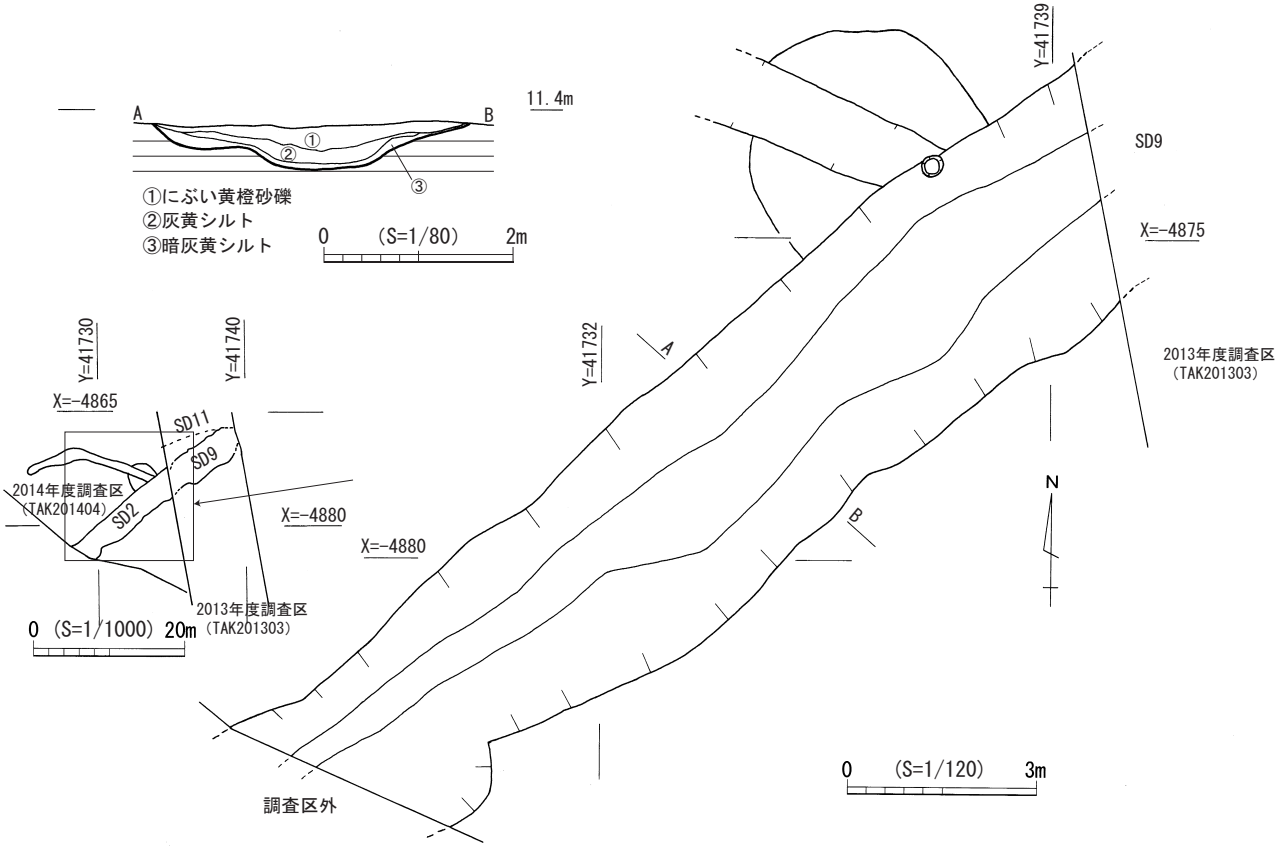
| 遺構番号 | 挿図番号 | 図版番号 | 主軸方向 | 柱間間数 | 規模(m、㎡) | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 梁間 | 桁間 | 梁行 | 桁行 | 身舎面積 | |
| TAK201403　SB1 | 100 | 92 | N3°W | 2×5 | 2.0～.3 | 1.8～2.0 | 4.4 | 5.4 | 23.8 | 側柱 |
| TAK201403　SB2 | 101 | 93 | N87°E | 2×5 | 2.1～2.2 | 1.8～2.0 | 4.4 | 9.1 | 40.0 | 側柱 |
| TAK201403　SB3 | 103 | - | N4°W | 1×3 | 4.6 | 2.4 | 4.6 | 6.3 | 30.0 | 側柱 |
| TAK201202　SB8 | 105・106 | 96・97 | N9°W | 2×4 | 1.7～2.6 | 1.9～2.2 | 3.8 | 8.3 | 31.5 | 側柱　北と南に廂 |
| TAK201202　SB9 | 108・109 | 99・100 | N90°W | 3×4 | 2.0～2.5 | 2.0～2.1 | 6.3 | 9.7 | 61.1 | 総柱　西と南に廂 |
| TAK201405　SB1 | 111・112 | 102・103 | N90°W | 3×3 | 2.0～2.4 | 2.0～2.6 | 6.3 | 6.7 | 42.2 | 総柱 |
| TAK201405　SB2 | 114・115・116 | 105 | N90°W | 2×5 | 2.3～2.8 | 2.2～2.4 | 5.0 | 8.8 | 44.0 | 総柱　北と南と東に廂 |
| TAK201405　SB3 | 118 | 107 | N90°W | 1×3 | 1.4～1.8 | 1.8～2.2 | 1.4～1.8 | 6.0 | 10.8 | 側柱 |
| TAK201405　SB4 | 120・121 | 109 | N5°W | 2×5 | 2.0～2.4 | 1.8～2.4 | 4.3 | 10.8 | 46.4 | 側柱 |
| TAK201405　SB5 | 122・123 | 110 | N80°W | 2×5 | 2.0～2.2 | 1.8～2.0 | 4.2 | 9.3 | 39.0 | 側柱 |
| TAK201406　SB2 | 125・126 | 112・113 | N75°E | 2×3 | 1.9～2.1 | 1.8～2.3 | 3.6 | 6.1 | 30.0 | 総柱　四面廂 |
| TAK201406　SB6 | 127 | - | N80°W | 2×2 | 1.8～2.0 | 2.1～2.2 | 3.8 | 4.2 | 16.0 | 側柱 |
| TAK201407　SB1 | 128 | 114・115 | N82°E | 2×2 | 1.9～2.0 | 2.0～2.3 | 3.9 | 4.2 | 16.4 | 総柱　西に廂 |
| TAK201407　SB2 | 129 | 116・117 | N27°E | 2×3 | 1.8～2.1 | 1.8 | 3.6 | 5.3 | 19.0 | 総柱 |
| TAK201407　SB5 | 130-1 | 118 | N70°E | 2×3 | 1.8～2.0 | 2.0～2.2 | 3.8 | 6.4 | 24.3 | 総柱　北に廂 |

(3)溝状遺構(SD)

今回報告する溝状遺構は12条である。

① TAK201404調査区 A6東区　SD2(第131図、図版120・121)

大調査区201404の小調査区 A6東区8672・8872グリッド3層から検出した。長軸(北東－南西)15m、最大幅3.7m、深さ70cmを測る。北東端は2013年度調査区へ延び、TAK201303A 区 SD9に繋がり長さは26m となる。南西端は調査区外へと伸びる。



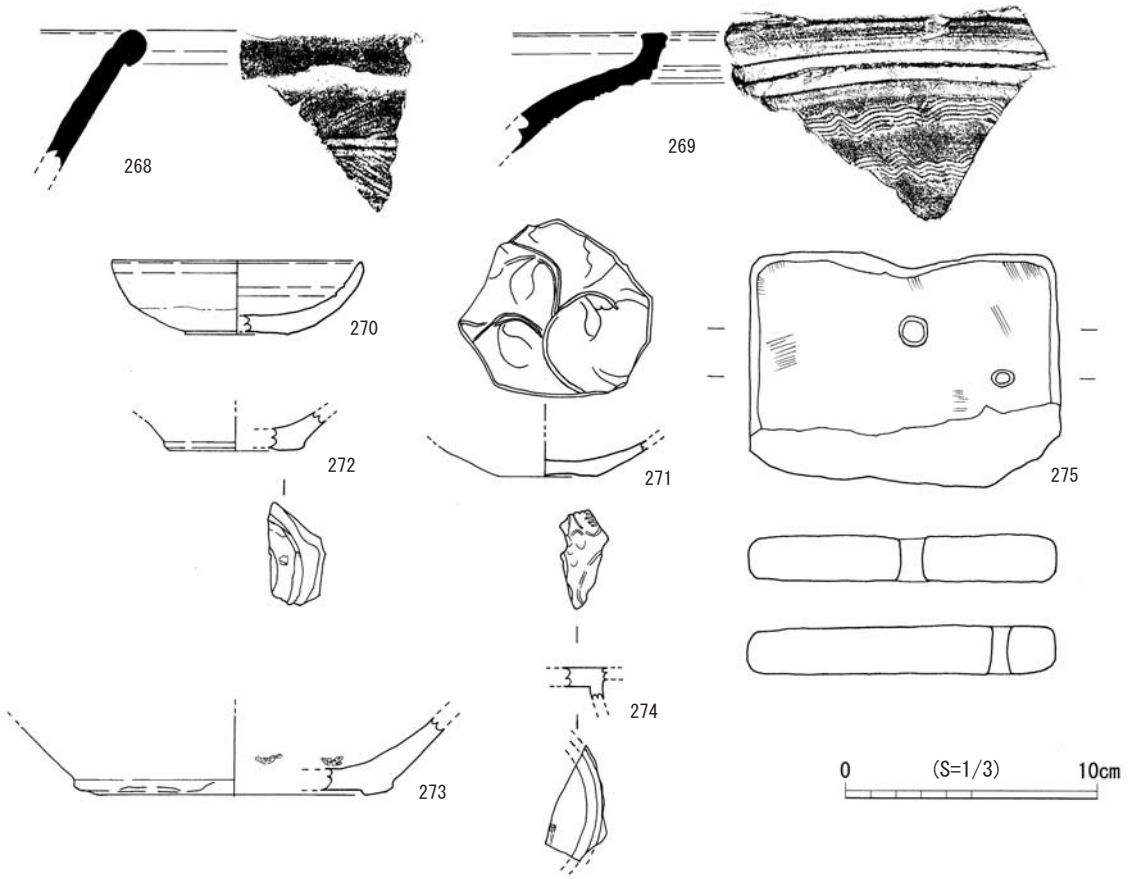

第131図　SD2平・断面図(平面図 S＝1/120、断面図 S＝1/80、S＝1/1,000)

図版120　SD2完掘状況　東から

図版121　SD2断面　東から

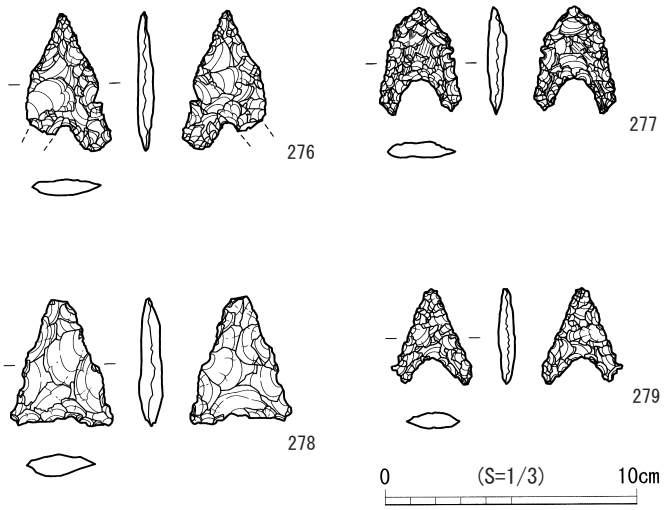
TAK201404調査区 A6東区　SD2出土遺物(第132・133図、図版122・123、第71・72表)

**268**は須恵器甕口縁部である。口縁端部は折り返しにより玉縁状を呈する。口縁下には横位の浅い沈線が1条巡り、沈線の上下には板材の小口の押圧によると思われる向きの異なる斜位文が施される。詳細な時期は不明である。**269**は須恵器二重口縁大甕口縁部片である。頸部は外反し屈曲部へ至る。屈曲部は2条の沈線に挟まれた断面三角形の凸帯が巡り、端部へ向かい直立する。頸部の波状文は5条で荒く描かれ2段に施される。8世紀後半のものと思われる。**270**は白磁皿Ⅵ類である。体部内面に2条の沈線が巡るが上位の沈線は途中で切れている。**271**は白磁皿Ⅷ類である見込みに片彫りの草花文が描かれる。**272～274**は越州窯系青磁椀片である。**273**は大椀Ⅰ類である。全面施釉後畳付の釉を掻き取る。見込みと高台畳付に重ね焼きの目跡が残る。**272**はⅠ類底部である。高台畳付に目跡が残る。**274**はⅢ類である。内面に毛彫り文が描かれる。目跡は高台内に付く。**275**は全体が摩滅している滑石製の温石である。下半を欠損しているが2箇所の穿孔が見られる。これらの出土遺物よりSD2の埋没は12世紀中頃～後半と思われる。**276～278**は凹基鏃である。**276**は薄手で精巧な作りである。角状の加工はみられないが屈曲部が明瞭であり五角形鏃に近い。**277**は先端近くに屈曲点をもつ。表裏面を研磨しており、局部磨製石鏃である。**276～278**は、良質な腰岳系黒曜石を素材とする。**279**は、安山岩を素材とする平基に近い浅い凹基の石鏃である。風化が激しい。




第132図　SD2出土遺物－1(S＝1/3)

図版122　SD2出土遺物－1




第133図　SD2出土遺物－2

図版123　SD2出土遺物－2

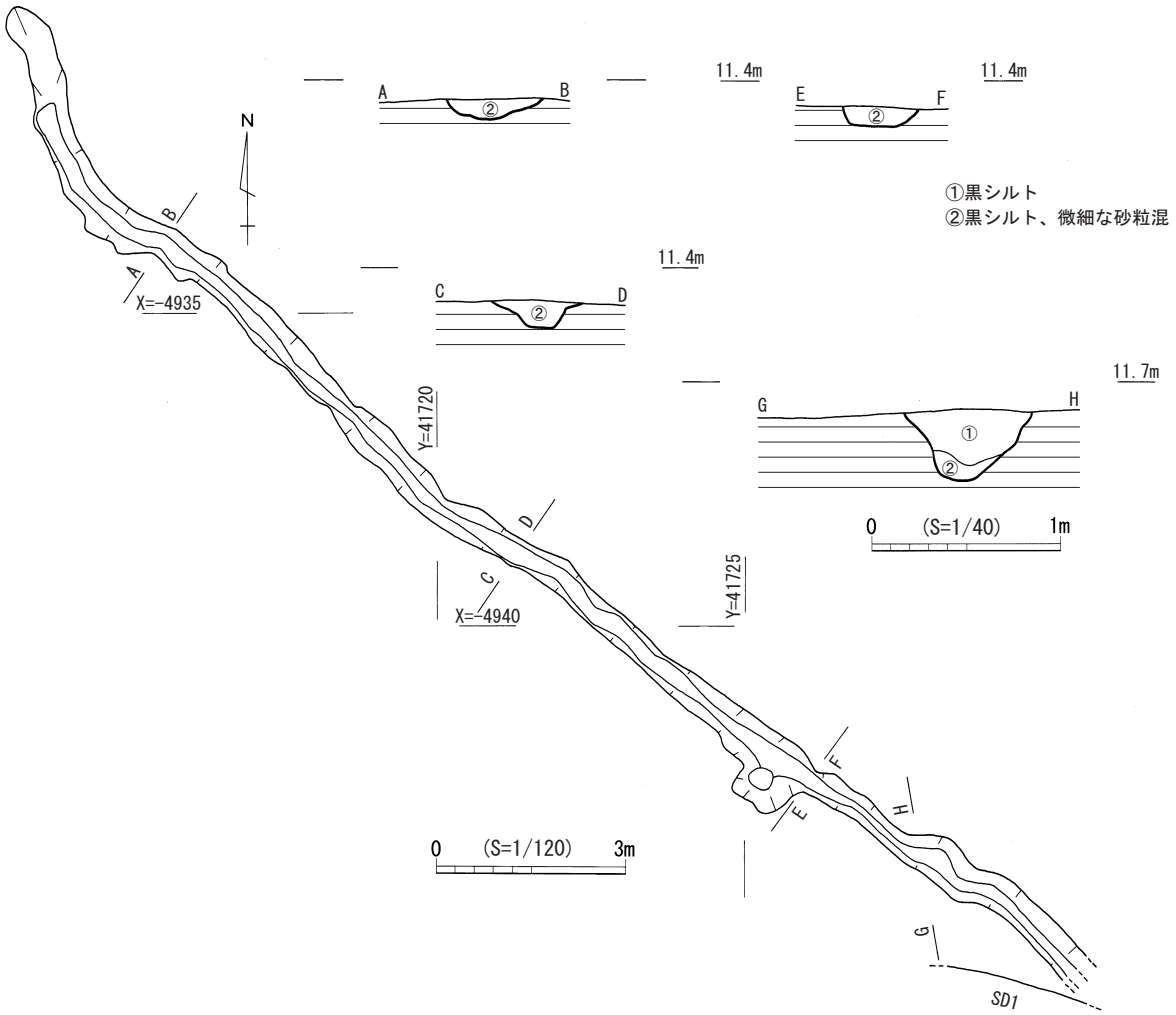
第71表　SD2出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 268 | 須恵器　甕 | 口縁部 | — | (5.7) | — | — | — | 暗灰色 | 黄灰色 | 良好 | 石英　白色粒子 | |
| 269 | 須恵器　甕 | 口縁部 | — | (4.7) | — | — | — | 褐灰色 | 褐灰色 | 良好 | 石英　白色粒子 | |
| 270 | 白磁　皿　Ⅵ類 | 底部～口縁部 | (9.8) | 2.9 | (4) | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | — | |
| 271 | 白磁　皿　Ⅷ類 | 底部 | — | (1.4) | 3.8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | |
| 272 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (3.1) | 10.4 | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石　精良 | |
| 273 | 越州窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.5) | (5) | — | — | オリーブ黄色 | オリーブ黄色 | 良好 | 長石　精良 | 蛇ノ目高台の畳目に目跡 |
| 274 | 越州窯系青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (1.4) | — | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 精良 | 見込みに毛彫り文 |

第72表　SD2出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 275 | 温石 | 93 | 122 | 19.5 | 445 | 灰色 | 穿孔2箇所 |
| 276 | 石鏃 | 25 | 15 | 3 | 0.81 | 黒色 | |
| 277 | 石鏃 | 1.9 | 15 | 3 | 0.78 | 黒色 | 局部磨製 |
| 278 | 石鏃 | 18 | 14 | 3 | 0.46 | 黒色 | |
| 279 | 石鏃 | 23 | 19 | 4 | 1.44 | 暗緑灰色 | |

② TAK201404調査区 B6西区　SD4(第134図、図版124・125)




第134図　SD4平・断面図(平面 S＝1/120、断面 S＝1/40)

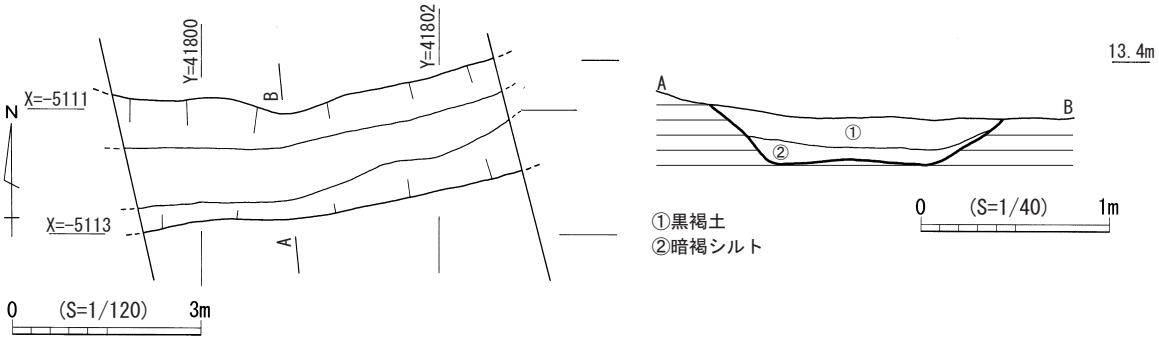
大調査区201404の小調査区 B6西区9270・9272グリッド、B7西区9472グリッド、B7東区9472グリッド3層から検出した。長軸(北西－南東)23m、最大幅0.4m、深さ10cm～40cm を測る。出土遺物は小片のために図示していないが、土師器杯の底部には回転糸切り痕が見られることから、12世紀後半以降の埋没と考える。

図版124　SD4検出状況　東から

図版125　SD4断面　東から

③ TAK201404調査区 B8南区　SD11(第135図、図版126・127)

大調査区201404の小調査区 B8南区1078・1080グリッド3層から検出した。長軸(東－西)6.0m、最大幅2.0m、深さ25cmを測る。両端は調査区外へ延びていく。



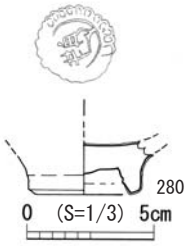

第135図　SD11平・断面図(平面図 S＝1/120、断面図 S＝1/40)

図版126　SD11検出状況　西から

図版127　SD11完掘状況　西から

TAK201404調査区 B8南区　SD11出土遺物(第136図、図版128、第73表)

**280**は青磁椀底部片である。高台は径が小さく、中位に節状の稜を持つ。見込にはスタンプ文が施されている。体部に細蓮弁が描かれるタイプの椀で、SD11の埋没は15世紀中頃と思われる。




第136図　SD11出土遺物(S＝1/3)

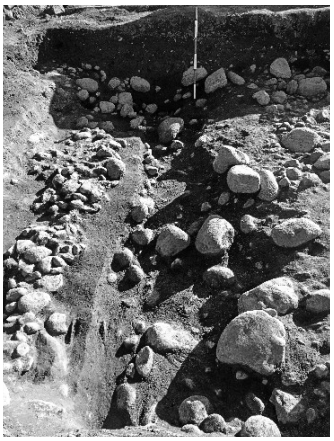
図版128　SD11出土遺物

第73表　SD11出土　磁器観察表

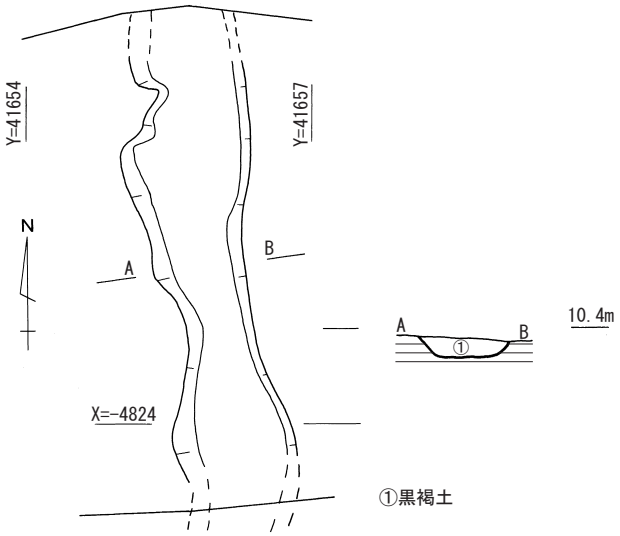
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 280 | 青磁　椀 | 底部 | — | (2.1) | 3.8 | — | — | 明緑灰色 | 明緑灰色 | 良好 | — |

④ TAK201202調査区⑥⑦区　SD26(第137図、図版129・130)

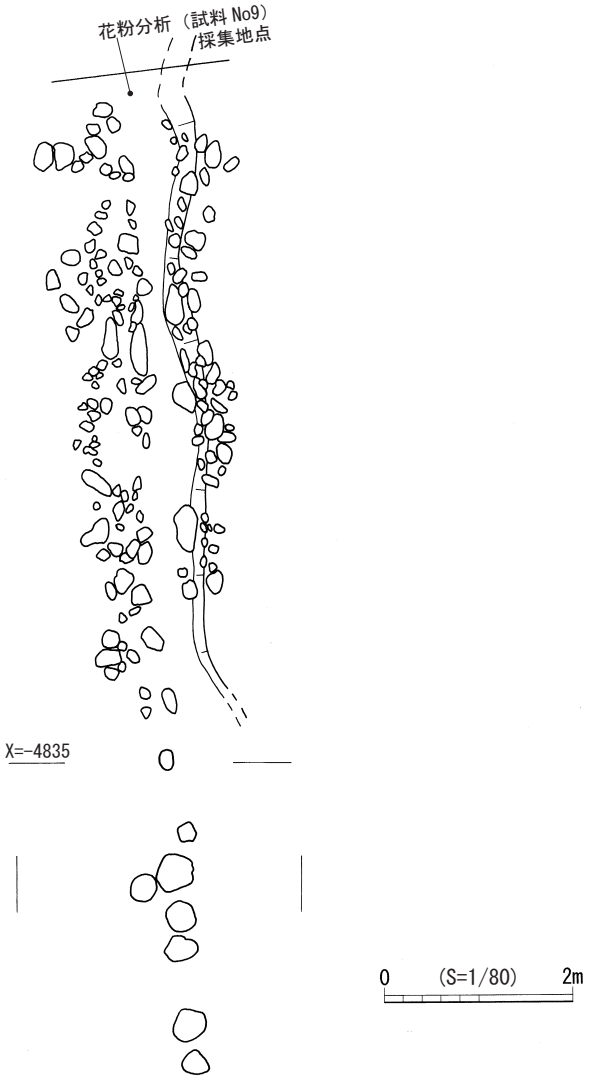
大調査区201202の小調査区⑥・⑦区8264グリッド3層から検出した。長軸(北－南)18m、最大幅1.6m、深さ15cmを測り、TAK201405調査区のSD6(区画溝)を切っている。南側には両肩に配石が見られた。南側の続きは2013年度に、北側の続きは2015年度に調査を行ったが、両端ともしだいに浅くなっていたために続きを確認することはできなかった。出土した遺物にはSD6の遺物がかなり混在していると思われる。遺物の中では新しいと思われる瓦器椀や土師器小皿からSD26の時期は13世紀前半と思われる。



図版129　SD26完掘状況　北から

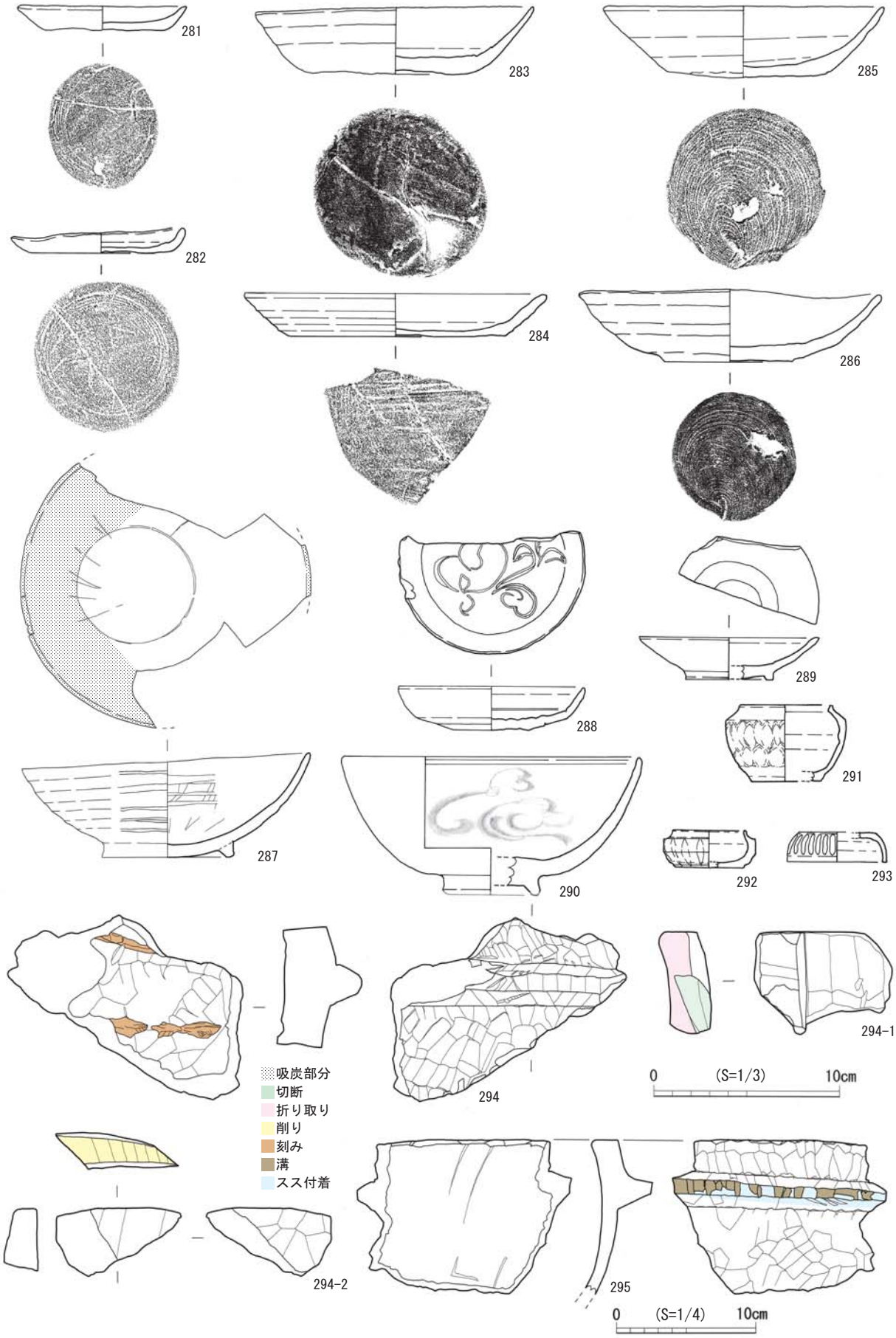


図版130　SD26断面　北から



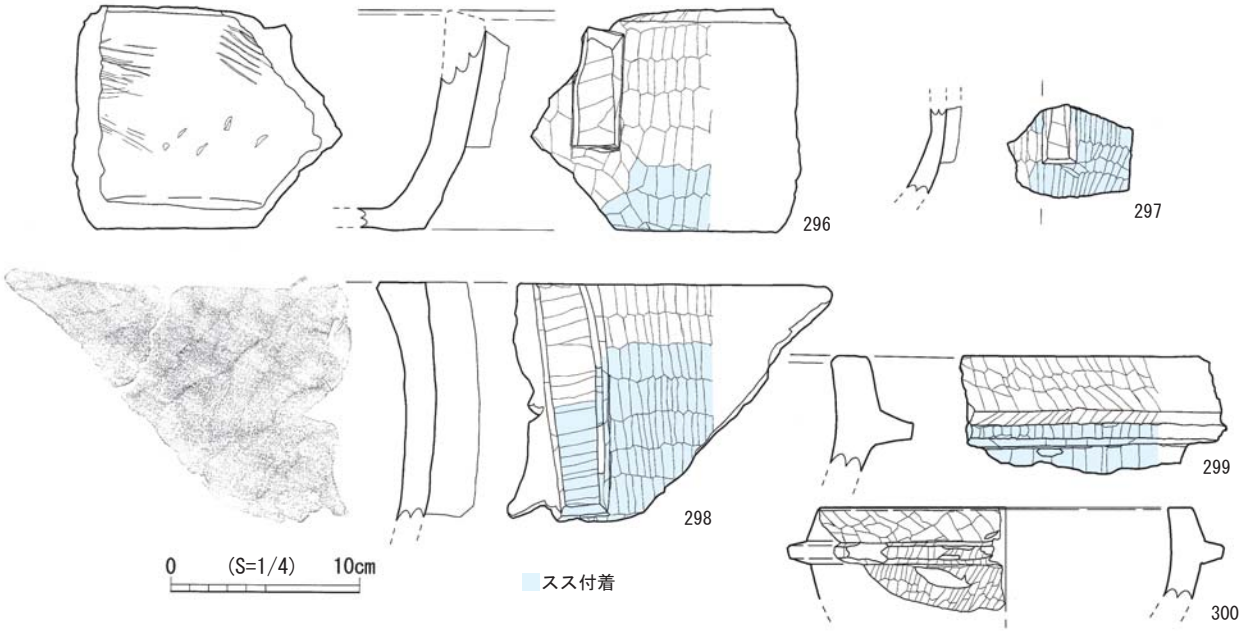

第137図　SD26平・断面図(S＝1/80)

TAK201202調査区⑥⑦区　SD26出土遺物（第138・139図、図版131・132、第74・75・76表）

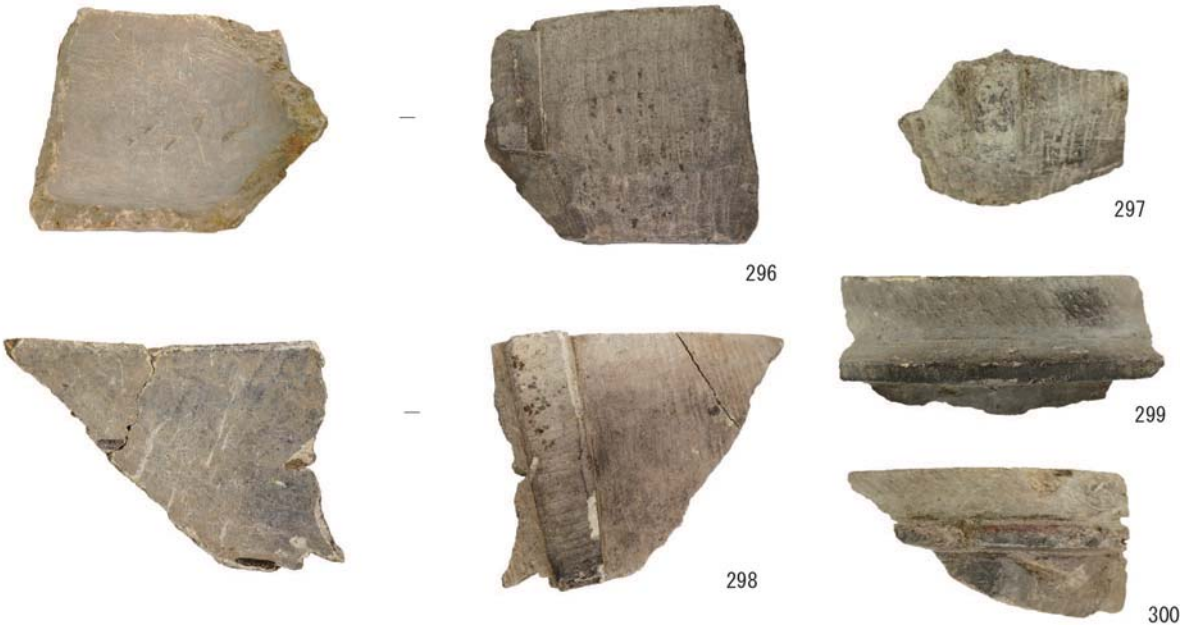



第138図　SD26出土遺物－1（S＝1/3、No295のみ S＝1/4）

図版131　SD26出土遺物－1




第139図　SD26出土遺物－2(S＝1/4)




図版132　SD26出土遺物－2

**281・282**は土師器小皿である。**281**の体部は直線的に斜めに伸びて口縁部に至る。切り離しは右回転の糸切りで中央をナデる。**282**の体部は短く斜めに伸びて口縁部に至る。切り離しは右回転の糸切りで中央をナデる。内面の体部と底部の境に段ができる。**283**は体部がほぼ直線的に斜めに伸び口縁部に至る。切り離しは回転ヘラ切りである。板状圧痕はつかない。**284**は器高の低い杯で体部は斜めに引き伸ばす。切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。**285・286**は豊前系土師器杯である。外面には回転ナデ痕が凹凸を作り、切り離しは右回転の糸切りである。**285**の体部はほぼ直線状で斜めに伸び口縁部に至る。胎土は微細な砂粒を含むが精良である。**286**の体部はわずかに内湾しながら口縁部に至る。胎土は砂粒を含まず精良である。**287**は肥前南部型の瓦器椀である。体部はわずかに内湾しながら口縁部に至るが、体部中位で厚さを減じる。高台は断面三角形で低く、高台内底部は畳付と同じ位置まで大きく下がる。体部内面にはコテ当て痕が残る。外面のミガキは引き上げによってできた稜線の上から横位に施され、内面のミガキは間隔を持って縦位の後横位に施される。内面には、中心よりずれて重ね焼きの際にできた高台痕が残る。**288**は白磁皿Ⅵ類である。底部は平底で施釉後釉を掻き取る。見込みにはヘラによる草花文が描かれる。**289**は白磁皿Ⅲ類である。見込みの釉を手持ちで輪状に掻き取る。**290**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面に片彫りの文様が施される。**291・292・293**は合子である。**291**は白磁の身である。外面に2段の蓮弁が浮き彫りになっている。**292**は青白磁の身である。外面には蓮弁が浮き彫りされ、白色の胎土に水色の釉が掛かる。**293**は青白磁の蓋である。外面には蓮弁が浮き彫りされる。胎土は灰色を帯び292と比べると釉もくすんだ色となっている。**294～295**は石鍋加工素材である。**294**は鍔付き石鍋の体部を利用し、内面に工具で削り出した2条の横位の「溝」が見られる。**294－1**は耳部を利用したものである。左側縁に「切断」と「折り取り」が見られる。全体が摩滅している。**294－2**は体部を利用したものである。上縁に「削り」が見られる。**295**は鍔付き石鍋の体部を利用し、内外の口縁端と鍔先端部に小さな「刻み」を入れている。**296～300**は石鍋片である**296**は縦耳付きの石鍋の口縁部～底部片である。外面には規則正しい削り痕が巡り、内面には横位と斜位の浅い傷が見られる。**297**は縦耳付きの石鍋の耳部である。小型の石鍋である。**298**は縦耳付きの石鍋の耳部である。大型の石鍋で、耳もがっしりとしている。**299・300**は鍔付き石鍋の鍔部である。**299**の鍔は角を持ちがっしりとしている。口縁部は体部よりも肥厚し内傾する。**300**の鍔は張り出しが小さく口縁端部に近づく。口縁部は内傾するが体部と同じ厚さを保つ。

**第74表　SD26出土　土器・磁器観察表**

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 281 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.3 | 6.6 | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 282 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.3 | 1.2 | 7.6 | — | — | 灰黄褐 | 灰黄褐 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 右回転糸切り |
| 283 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.8 | 3.7 | 8.8 | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 精良　長石　雲母 | 回転ヘラ切り |
| 284 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 16.1 | 2.3 | 11.5 | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 石英　赤色粒子 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 285 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.8 | 3.7 | 8.0 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 286 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 16.1 | 3.9 | 6.8 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 287 | 瓦器　椀 | 底部～口縁部 | 15.4 | 5.6 | 7.0 | ミガキ | ミガキ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 肥前南部型　重ね焼き痕 |
| 288 | 白磁皿　Ⅵ類 | 底部～口縁部 | 10.0 | 2.3 | 4.0 | — | — | 明オリーブ | 明オリーブ | 良好 | — | 見込みに花文 |
| 289 | 白磁皿　Ⅲ類 | 底部～口縁部 | 906 | 2.3 | 4.6 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 見込みに輪状の釉剥ぎ |
| 290 | 龍泉窯系青磁椀　Ⅰ類 | 底部～口縁部 | 16.0 | 7.4 | 5.2 | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 内面に雲文 |
| 291 | 白磁　合子身 | 底部～口縁部 | 5.0 | 4.1 | 3.7 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 黒色粒子 | 外面に型押しの2段暖の蓮弁 |
| 292 | 青白磁　合子身 | 底部～口縁部 | 3.9 | 2.0 | 3.8 | — | — | 明緑灰 | 明緑灰 | 良好 | 精良 | 外面に型押しの蓮弁 |
| 293 | 青白磁　合子蓋 | 天井～口縁部 | 5.4 | 1.6 | 4.24 | — | — | 緑灰 | 明緑灰 | 良好 | やや粗い | 外面に型押しの蓮弁 |

第75表　SD26出土　石鍋加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 294 | 11 | 15.5 | 2 | 580 | 鍔付き石鍋を利用　内面に2条の「溝」 |
| 294－1 | 5.6 | 7.1 | 2.2 | 135 | 耳部を利用　「切断」「折り取り」 |
| 294－2 | 3.7 | 6.8 | 1.9 | 35 | 体部を利用　「削り」 |
| 295 | 9.8 | 12.6 | 2.7 | 430 | 鍔付き石鍋を利用　口縁と鍔に「刻み」 |

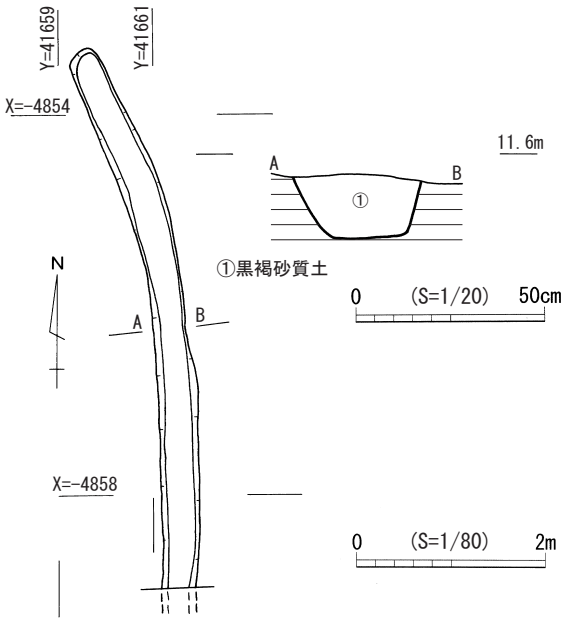
第76表　SD26出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 296 | 縦耳付石鍋 | 底部～口縁部 | (27.4) | 11.6 | (24.0) | — | — | 灰白 | 灰白 | 内面に浅い傷　煤付着 |
| 297 | 縦耳付石鍋 | 耳部 | — | (4.8) | — | — | — | 明褐灰 | 明褐灰 | 小型　煤付着 |
| 298 | 縦耳付石鍋 | 耳部 | (38.6) | (12.6) | — | — | — | 明褐灰 | 灰白 | 大型　煤付着 |
| 299 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (31.6) | (6.2) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 300 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (19.8) | (4.8) | — | — | — | 明褐灰 | 明褐灰 | |

### ⑤ TAK201302調査区⑫区　SD21(第140図、図版133)

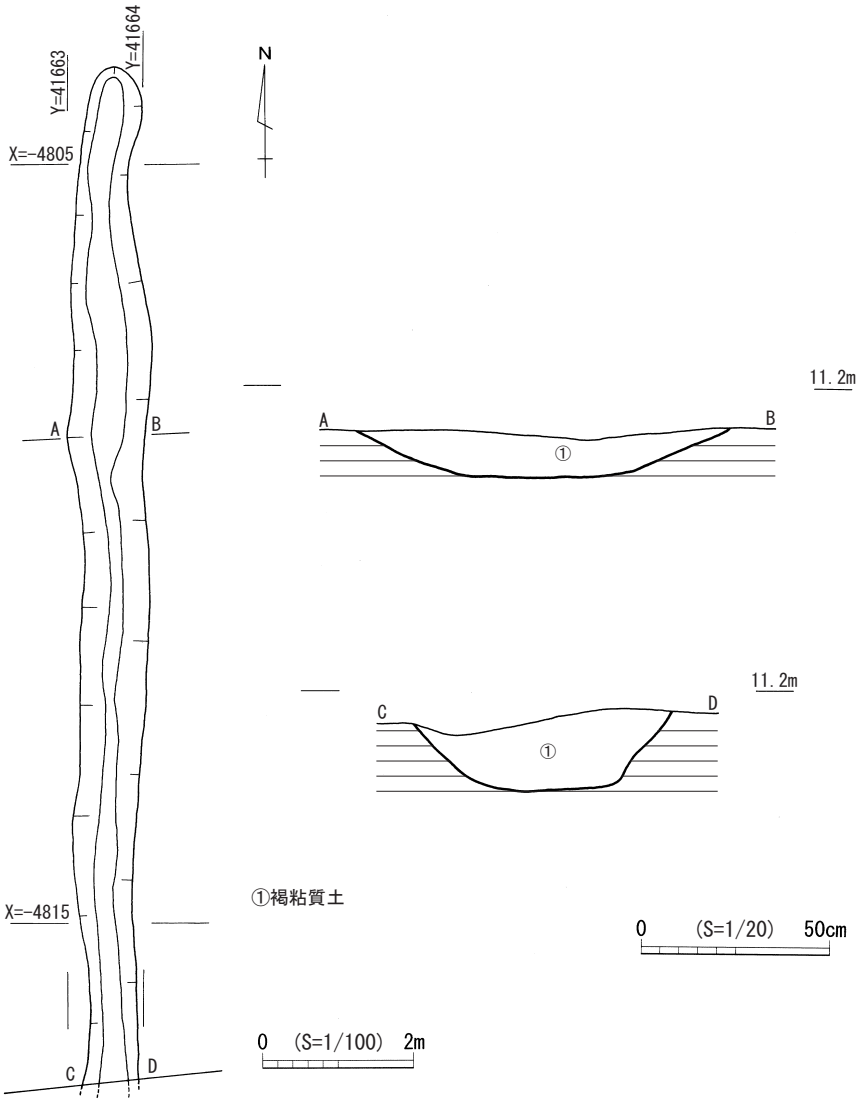
大調査区201302の小調査区⑫区8464・8466グリッド3層から検出した。長軸(北－南)5.9m、最大幅0.4m、深さ15cmを測る。南端は調査区外へ延びていくために全長は確認長よりもさらに伸びる。出土遺物はなかった。

図版133　SD21完掘状況　東から




第140図　SD21平・断面図(平面図 S＝1/80、断面図 S＝1/20)

⑥ TAK201405調査区③区　SD4（第141図、図版134）



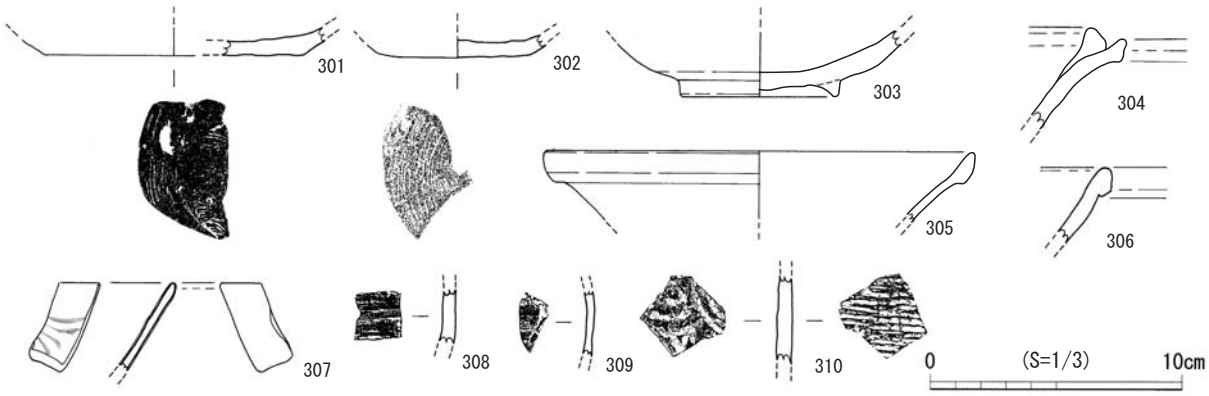

第141図　SD4平・断面図（平面図 S＝1/100、断面図 S＝1/20）

大調査区201405の小調査区③区8066グリッド3層から検出した。長軸(北－南)13.5m、最大幅1.0m、深さ21cmを測る。南端は2012年度調査区へ延びていくが、2012年度調査時には確認ができていなかった。出土した遺物の年代よりSD4の埋没は12世紀後半と思われる。

図版134　SD4完掘状況　南から

TAK201405調査区③区　SD4出土遺物(第142図、図版135、第77表)

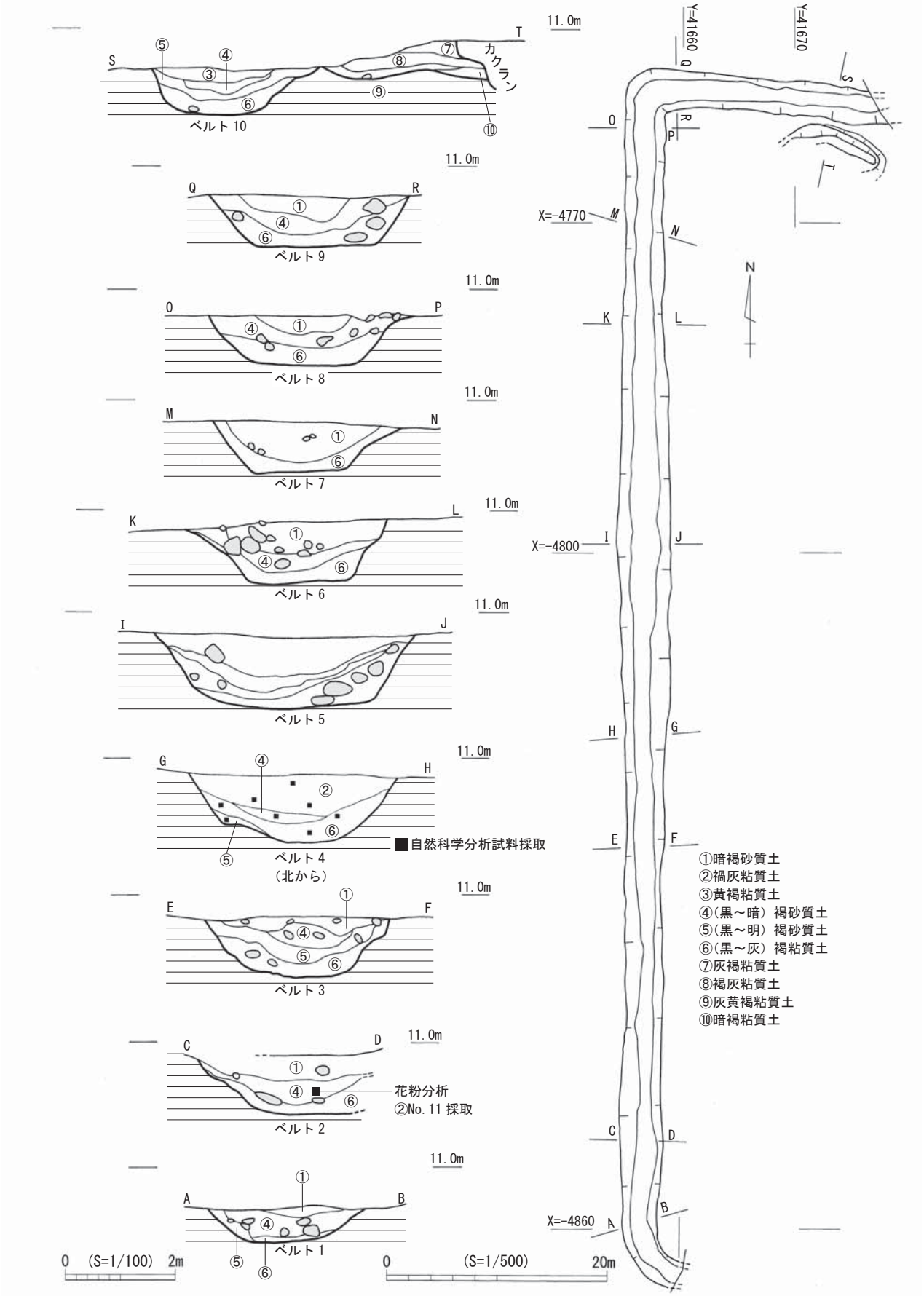
**301・302**は土師器杯底部片である。右回転の糸切り痕が底部に残る。**303**は土師器椀底部片である。体部は内湾しながら立ち上がり、底部には断面三角形の低い高台が付く。**304**は東播系の捏鉢口縁部片である。片口部分に当たる。**305・306**は白磁椀Ⅳ類口縁部である。**307**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面に片彫りの蓮華文が描かれる。**308・309・310**は高麗無釉陶器の体部片である。**308・309**は内面に強い水引痕が残る。**310**は外面には並行のタタキ目が、内面には当て具痕が残る。いずれも、器表は青灰色で胎土の中心部は小豆色を呈する。




第142図　SD4出土遺物(S＝1/3)

図版135　SD4出土遺物

⑦ TAK201405調査区③区　SD6（第143・144図、図版136～145）平面写真は300頁に掲載

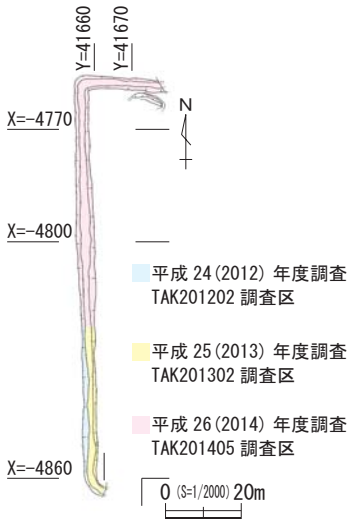



第143図　SD6平・断面図（平面図 S＝1/500、断面図 S＝1/100）

第77表　SD4出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 301 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.1) | (10) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英 長石 雲母 | 右回転糸切り |
| 302 | 土師器　杯 | 底部 | — | (0.9) | (5.7) | — | — | 灰黄褐色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | 右回転糸切り |
| 303 | 土師器　椀 | 底部 | — | (5.9) | (5.9) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　雲母<br>角閃石　長石 | |
| 304 | 東播系捏鉢 | (片口)口縁部 | (14) | (4) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 305 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 口縁部 | (16.7) | (2.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 306 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 口縁部 | — | (3) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 307 | 龍泉窯系青磁 椀 Ⅰ類 | 口縁部～体部 | — | (4) | — | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 308 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.9) | — | — | — | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良好 | 長石 | |
| 309 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.6) | — | — | — | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良好 | 長石 | |
| 310 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (3.4) | — | 並行タタキ | 当て具痕 | 青灰色 | 青灰色 | 良好 | 長石 | |

遺構の掘削は2012年度調査、2013年度調査、2014年度調査で行った。遺構は、全長(北－南)108m、幅2.8m～4.7m、深さは0.5m～1.2mで北西と南西にほぼ直角に曲がる大規模な区画溝である。断面は逆台形の形状を呈する。2012年度調査は遺構の南側1/3の西側の立ち上がりを調査し、2013年度の調査では南側1/3の東側の立ち上がりと南西角を調査した。2014年度の調査では北側2/3と北西角を調査した。堀底のレベルは9.5m前後を保つが、南西角周辺は10cm程度浅くなる。また、南側は削平が大きく堀底から確認面までは50cm～60cmと浅い。北側部分では堀の内側に複数の土層の堆積が見られたことから、土塁の可能性を考えている。堀の覆土からは多くの遺物の出土をみたが、南側にあたる2012年度調査区からは豊前系土師器を中心に大量の遺物が出土した。遺物の取り上げは座標での取り上げの他に、出土地点を上層、中層、下層に分けて取り上げた。遺物観察の報告は年度ごと出土層位ごとに分けて行う。




第144図　SD6の年度ごとの調査区

図版136　SD6ベルト1　南から

図版137　SD6ベルト4　サンプル採取状況
北から

図版138　SD6ベルト5　南から

図版139　SD6ベルト6　南から

図版140　SD6ベルト8　南から

図版141　SD6ベルト9　西から

図版142　SD6ベルト北西コーナー　西から

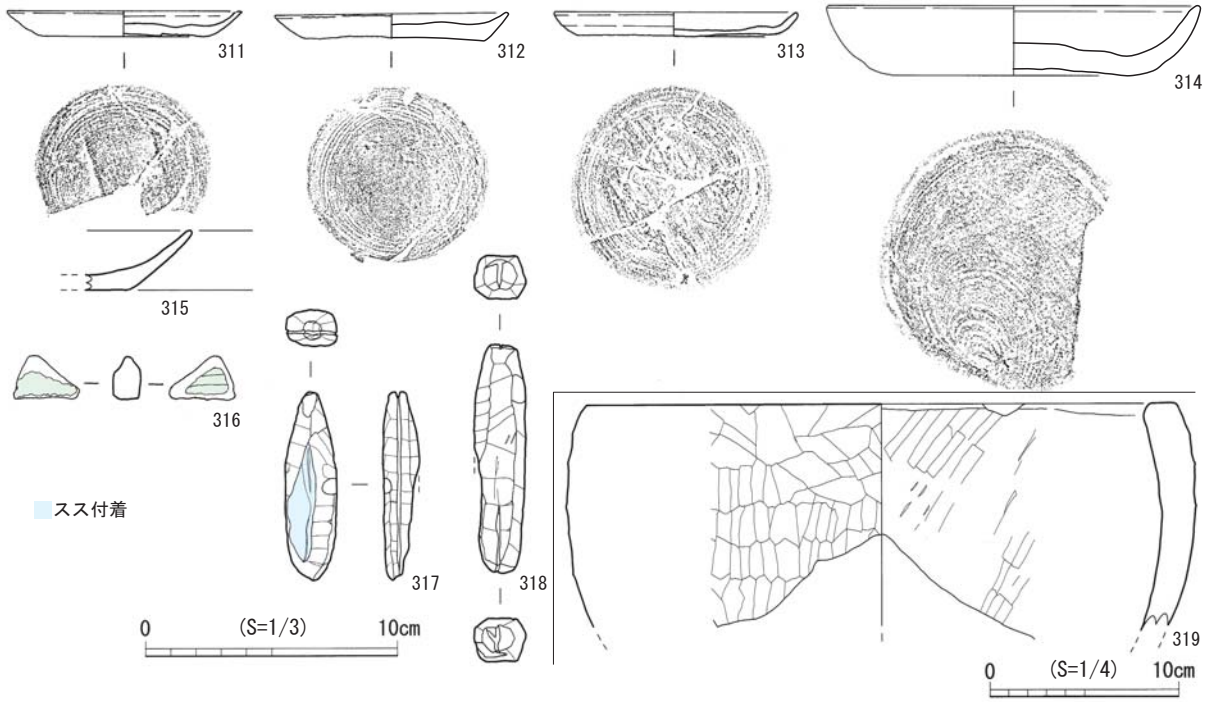
図版143　SD6南西コーナー(2013年度調査)　北から
TAK201302調査区

図版144　SD6完掘状況　南から

図版145　SD6遺物出土状況(2012年度調査)
TAK201202調査区

ア　平成24(2012)年度調査時の出土遺物(SD6の当時の調査区はTAK201202調査区)上層出土遺物(第145図、図版146、第78・79・80表)

**311・312・313**は土師器小皿である。どちらも右回りの回転糸切り後、外底部の中心と内底部をナデる。**311**には板状圧痕が残る。**314・315**は土師器杯である。いずれも右回転の糸切りである。**314**は微細な砂粒を多く含み、体部は丸みを持って口縁部に至る。**315**は精良な灰白の胎土で、体部は直線的に外方へ伸びて口縁部に至る。**316**はイスラム陶器と思われる陶片である。灰白の胎土は精良で軟質である。外面には光沢のある明るい灰みの緑色の釉薬が、内面には光沢のある明るい灰みの緑色の釉が掛かる(註1)。424・425と同一固体と思われる。附編に科学分析の結果を記している。**317・318**は滑石製の石錘である。**317**は長軸方向に一条の沈線が巡る。一部に煤の付着が見られることから石鍋を加工した製品であると思われる。**318**も長軸方向に沈線が刻まれるが全周はしていない。両端部の刻みはしっかりしている。**319**は縦耳が付く石鍋と思われる。体部の外面には規則正しいケズリ痕が、内面には斜位の工具痕が見られる。




第145図　SD6上層出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

第78表　SD6上層出土　土器・陶器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 311 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.2 | 1.0 | 6.8 | ナデ | ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　石英　赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 312 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 6.0 | 1.1 | 7.1 | ナデ | ナデ | 淡黄 | 淡黄 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 313 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.6 | 1.0 | 7.8 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良　長石 | 右回転糸切り |
| 314 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 2.8 | 9.6 | — | — | 褐灰 | にぶい黄橙 | 良好 | 微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 315 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | — | — | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　長石　石英 | 回転糸切り |
| 316 | イスラム陶器か | 体部 | — | — | — | — | — | 明るい灰みの緑 | 明るい灰みの緑 | 良好 | 精良 | 大型の個体　科学分析掲載 |

第79表　SD6上層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 317 | 石錘 | 7.4 | 2.1 | 1.5 | 30 | 灰 | ⑦8464 | 煤付着　石鍋加工製品 |
| 318 | 石錘 | 9 | 2 | 1.7 | 50 | 灰白 | ⑦8464 | |

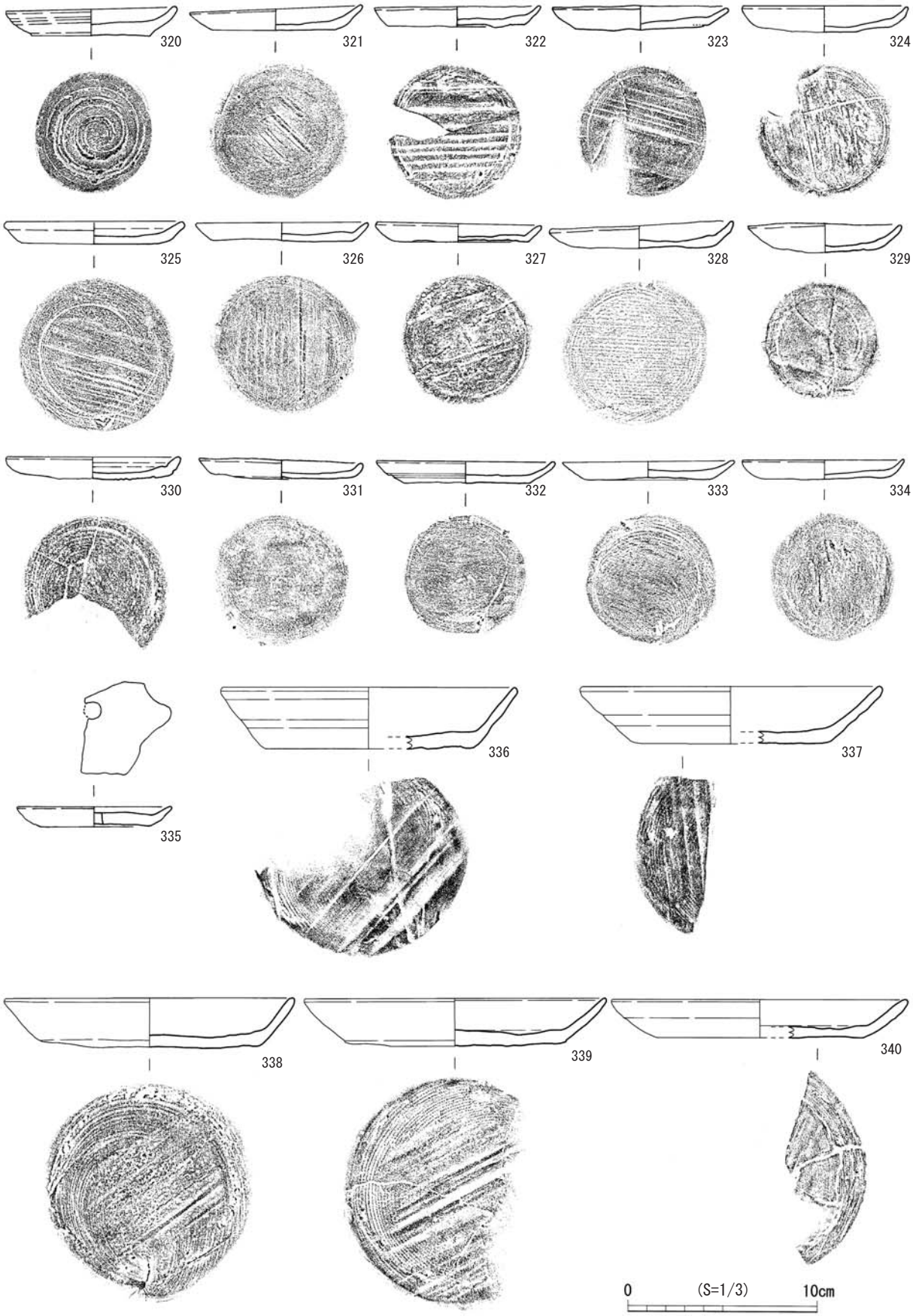
第80表　SD6上層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 319 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (31.0) | (12.0) | — | — | — | 灰 | 灰 | |

図版146　SD6上層出土遺物

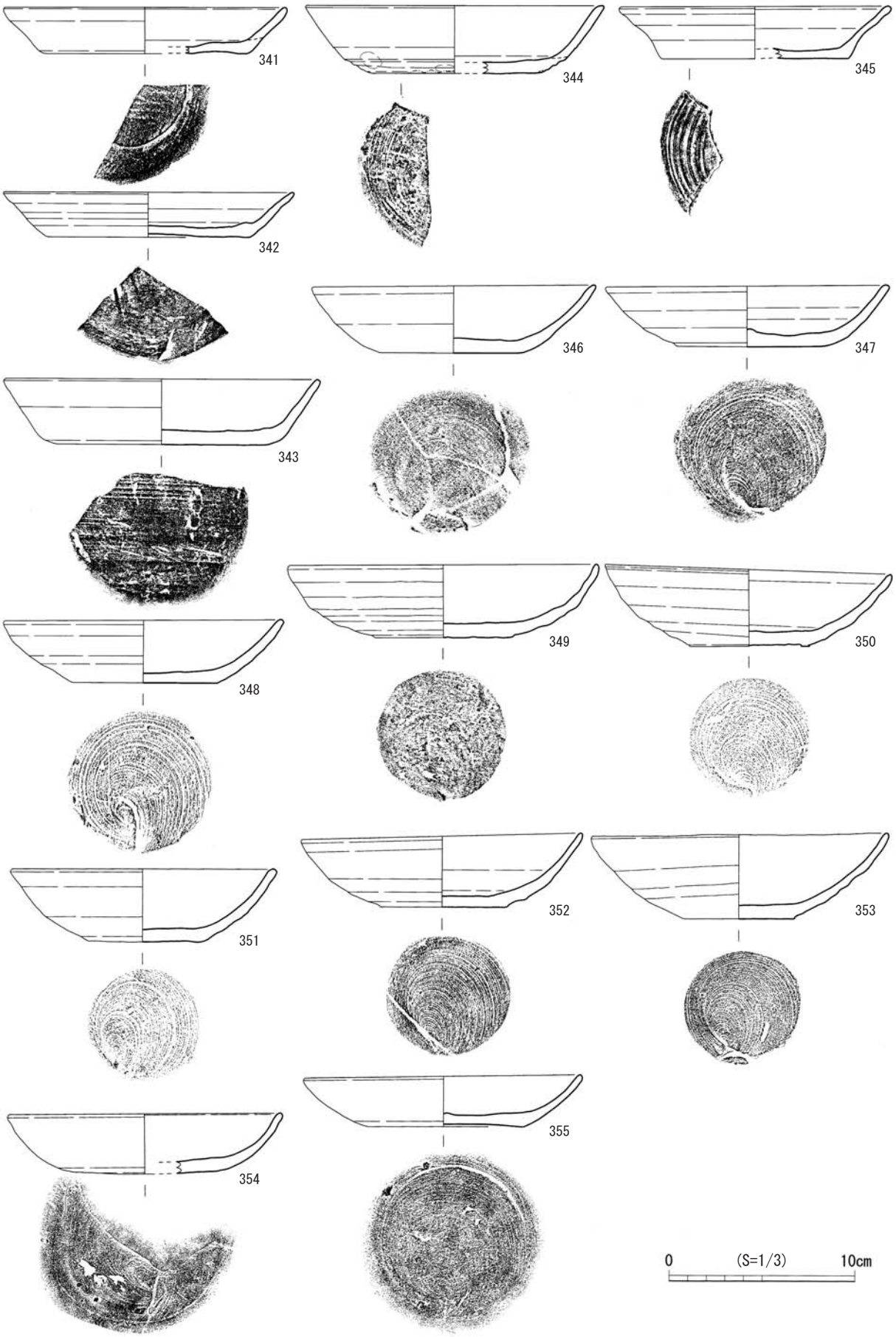
**中層出土遺物（第146～149図、図版147～150、第81～85表）**

**320～335**は土師器小皿である。切り離しと板状圧痕やナデの有無で大きく分けられる。内底部に見られる不定方向の指によるナデは320を除きすべてに見られる。**320**は体部が内湾しボッテリとした作りで他の小皿とは様相が異なる。切り離しは右回転のヘラ切りである。**321**は回転ヘラ切り痕の上に板状圧痕が残る。**322～329**は右回転糸切り痕の上に板状圧痕が残るものである。体部はいずれも外方に直線的に伸びる。**322**は右回転の糸切りで、凹部と凸部の幅が広い圧痕が残る。**323・324・325**は右回転の糸切り痕で、凸部の幅が広い圧痕が残る。**326・327**は右回転の糸切り痕で、凹部の幅が広い圧痕が残る。**328**は右回転の糸切り痕で、凹部の幅が狭い圧痕が残る。**329**は幅広の凹部が1箇所残る。押し出しにより丸底気味の底部を作り出している。**330～334**は右回転の糸切り痕の中央をナデているものである。**330**は体部が厚く口縁部に至る。**331**も体部が厚く口縁部に至る。小ぶりである。**331**の体部は外方に直線的に伸びる。**333**の体部は外方に直線的に伸びる。**334**の体部は外方に直線的に伸びる。小ぶりである。**325・329・333**の底部には、回転糸切り痕に加え回転ヘラ切り痕に似た傷が見られるが、回転糸切りと同じ動きをしていることから、これらの傷は回転糸切りに伴うものと思われる。**335**は中央に径9㎜の穿孔が施されている。この孔は焼成前に開けられている。**336～343**は底径が大きい土師器杯である。



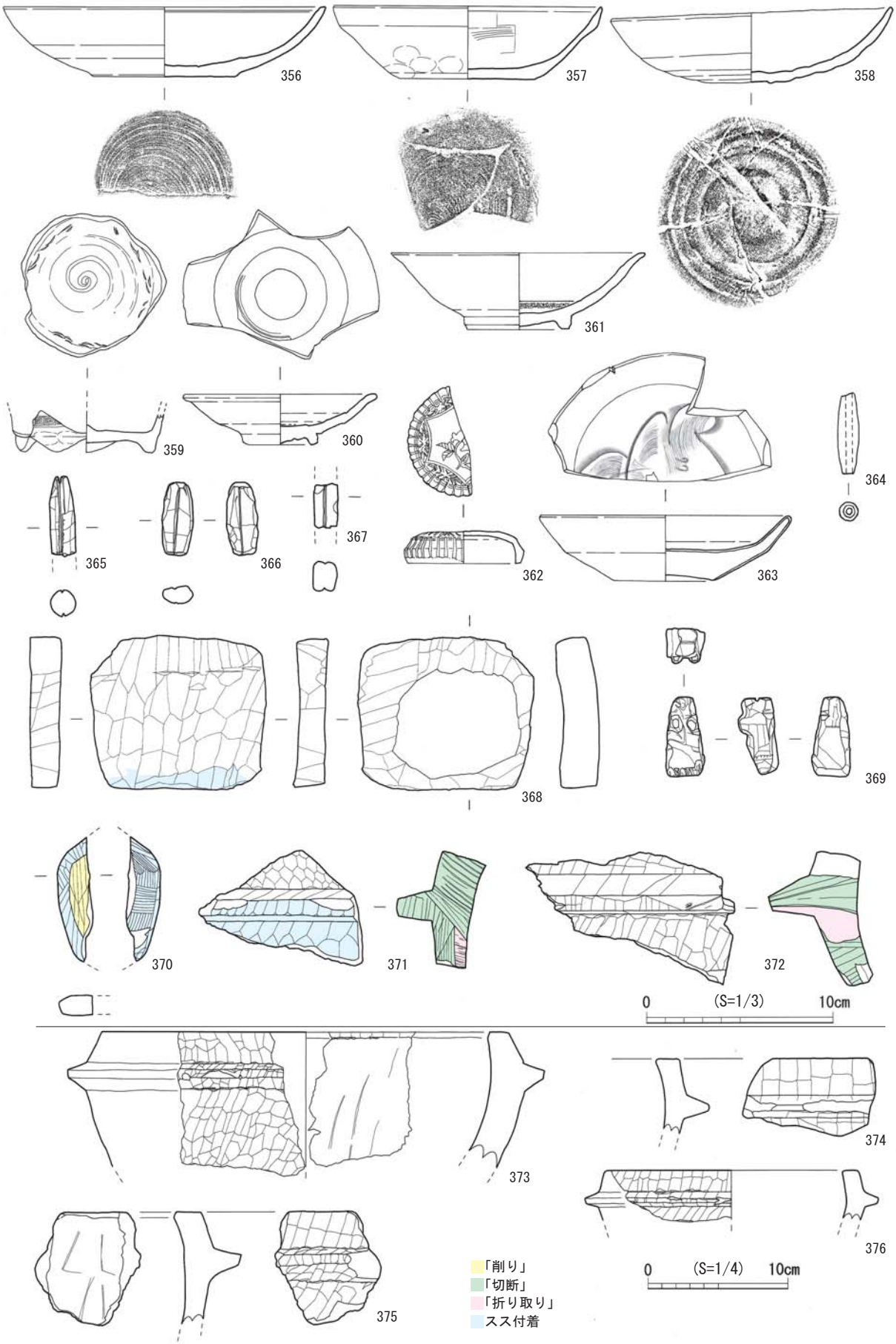

第146図　SD6中層出土遺物－1(S＝1/3)

図版147　SD6中層出土遺物－1



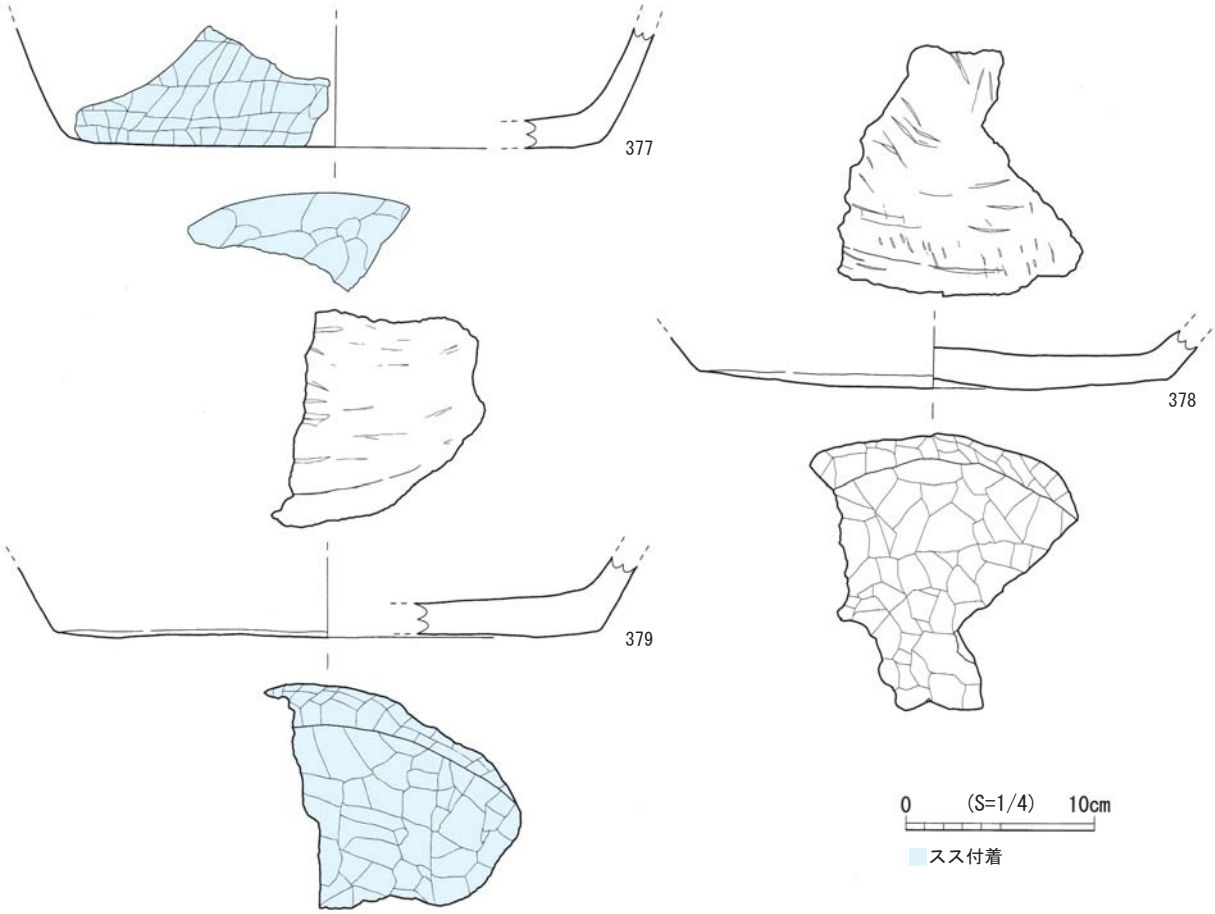

第147図　SD6中層出土遺物－2(S＝1/3)

図版148　SD6中層出土遺物－2




第148図　SD6中層出土遺物－3(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

図版149　SD6中層出土遺物－3




第149図　SD6中層出土遺物－4(S＝1/4)

切り離しは右回転の糸切りで、外底部には板状圧痕が残る。**344・345**は、切り離しは回転糸切りであるが、小片のために板状圧痕の有無が不明のものである。**344**の体部はほぼ直線的に口縁部に至る。**342・345**の体部は外反して口縁部に至る。**346～355**は豊前系土師器の杯である。底径が小さく右回転糸切り痕が明瞭に残る。また、体部は内湾しながら口縁部に至り、外面は成形時の回転引き上げ痕が凹凸となる。板状圧痕は見られない。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず緻密であるが、**353・354・355**は胎土に金雲母が混ざる砂粒を多く含みざらつく。**356**も胎土に金雲母が混ざる砂粒を多く含みざらつく。豊前系土師器杯と思われるが、口縁端部内面に段状の浅い沈線が一条巡る。切り離しは右回転の糸切りである。**357**は、胎土は豊前系土師器杯の胎土によく似るが、体部下半に指頭痕が残りいびつな形である。底部押し出し技法を行っている可能性がある。切り離しは右回転の糸切りである。**358**は、右回転のヘラ切り後押し出し技法により成形された丸底杯である。底部には板状圧痕も残る。**359**は土師質香炉の底部である。平面形は円形で三箇所に舌状の足が付く。体部下端には型押しによる雷文が巡る。胎土は精良で砂粒を含まない。短く張り出した三本の足はていねいに貼り付けられているが、内面には貼り付けの際に付いた爪痕が残る。精緻な作りである。**360**は内面見込み部分の釉を掻き取る白磁皿Ⅲ類である。**361**は内面見込み部分の釉を掻き取る白磁椀Ⅷ類である。**362**は青白磁合子蓋である。型押しにより周囲には花弁文が巡り、天井部には花文が施される。**363**は龍泉窯系青

図版150　SD6中層出土遺物－4

磁皿Ⅰ類である。見込みに片彫りの花文と櫛目が施されている。**364**は土錘である。**365**～**380**は素材を滑石とするものである。**365**・**366**・**367**は錘である。**365**は紡錘形で、長軸方向に刻みが一条巡る。**366**はつぶれた紡錘形で、表裏それぞれに長軸方向に一条の溝が刻まれる。**367**は上下を欠いている。表裏それぞれに長軸方向に一条の溝が刻まれる。**368**は石鍋の加工製品で体部を利用し板状に仕上げている。外周は3辺を「削り」により整えている。裏面には石鍋時の調整痕がそのまま残るが、表面は石鍋時の曲線を削り平らにしている中央に石鍋時の体部内面が残る。温石として使われたものか。**369**も体部を利用した石鍋加工製品である。動物を模したものか足状の突起と頭部と思われる削りだしが見られる。稚拙な作りである。**370**は補修具を再加工したものと思われる。補修具時の器壁部上面に「削り」を入れている。裏面には煤が付着する。**371**・**372**は鍔付石鍋の鍔部分を利用した石鍋加工素材である。**371**は「切断」と「折り取り」が見られる。**372**は右側面に上下からの「切断」と「折り取り」が見られる。鍔部には「削り」が残る。**373**・**374**・**375**・**376**は鍔付き石鍋の鍔部である。いずれも、内湾する体部に角がしっかりした鍔が付く。**377**・**378**・**379**は大型の石鍋の底部である。

第81表　SD6中層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 320 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.5 | 6.1 | — | ナデ | 灰白 | 浅黄色 | 良好 | 赤色粒子 | 右回転ヘラ切り |
| 321 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.3 | 7.4 | — | ナデ | にぶい黄 | にぶい黄 | 良好 | 長石 | 右回転ヘラ切り　板状圧痕 |
| 322 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.7 | 1.1 | 7.2 | — | ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 良好 | 長石　石英 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 323 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.1 | 1.3 | 6.6 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 324 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.2 | 7.2 | — | ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 325 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.2 | 1.2 | 8.0 | — | ナデ | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 微細な砂粒 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 326 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.0 | 7.2 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 327 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.7 | 1.0 | 7.0 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 328 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.7 | 1.2 | 7.5 | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 329 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.2 | 1.5 | 5.8 | — | ナデ | 明黄褐 | 明黄褐 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕　押し出し |
| 330 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.2 | 1.2 | 7.5 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り |
| 331 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.6 | 0.9 | 6.7 | ナデ | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り |
| 332 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.2 | 1.2 | 6.4 | ナデ | ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 雲母 | 右回転糸切り |
| 333 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.0 | 6.7 | ナデ | ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り |
| 334 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.5 | 1.0 | 6.6 | ナデ | ナデ | 横褐 | 横褐 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り |
| 335 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.2) | 1.0 | (6.1) | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 底部中央に穿孔 |
| 336 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.6 | 3.2 | 11.0 | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 337 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 3.0 | (10.0) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 338 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.2 | 2.6 | 11.4 | — | — | 灰白 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 339 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.8 | 2.5 | 11.5 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 340 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 2.0 | (11.2) | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 341 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.2) | 2.5 | (10.8) | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 雲母　赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 342 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 2.4 | (10.9) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石 石英 赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 343 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.9) | 3.5 | (11.4) | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 石英 雲母 赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 344 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.0) | 3.6 | (9.6) | — | — | 淡赤橙 | 橙 | 良好 | 石英 雲母 赤色粒子 | 回転糸切り　指オサエ |
| 345 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.5) | 2.8 | (10.0) | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 石英 雲母 赤色粒子 | 回転糸切り |
| 346 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.0 | 3.7 | 6.8 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り |
| 347 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.0 | 3.3 | 7.7 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り |
| 348 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.8 | 3.4 | 7.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り |
| 349 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.7) | 3.9 | 7.2 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 350 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.3 | 4.1 | 6.4 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 351 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.2 | 6.2 | 3.9 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 352 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.1 | 4.0 | 6.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 353 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.9 | 4.6 | 6.0 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 354 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.7) | 3.2 | 8.4 | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 355 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.9 | 2.8 | 8.4 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 356 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (17.2) | 3.7 | 7.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り　口縁部内面に1条の沈線 |
| 357 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.1) | 4.9 | (7.2) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り　指オサエ |
| 358 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.0 | 4.1 | — | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転ヘラ切り後押し出し |
| 359 | 土師質　香炉 | 底部 | — | (2.2) | 7.4 | ナデ | ナデ | 灰黄 | 灰黄 | 良好 | 精良 | 雷文　三足 |
| 360 | 白磁皿　Ⅲ | 底部～口縁部 | 10.4 | 2.7 | 4.0 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 黒色粒子 | 見込みの釉を輪状に掻き取り |
| 361 | 白磁椀　Ⅷ | 底部～口縁部 | 13.6 | 4.0 | 5.4 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 見込みの釉を輪状に掻き取り |
| 362 | 青白磁　合子 | 蓋 | (6.0) | 1.7 | — | — | — | 水色 | 灰白 | 良好 | — | 型押し |
| 363 | 龍泉窯系青磁皿　Ⅲ | 底部～口縁部 | (13.2) | 3.5 | (5.3) | — | — | オリーブ灰 | オリーブ灰 | 良好 | — | 見込みに花文 |

第82表　SD6中層出土　土製品・滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 364 | 土錘 | 44 | 11 | 11 | 4 | にぶい赤褐 | — |
| 365 | 石錘 | (42) | 15 | 15 | 15 | 灰 | 半欠 |
| 366 | 石錘 | 39 | 13 | 10 | 10 | 灰 | 完形 |
| 367 | 石錘 | (23) | 13 | 15 | 10 | 灰白 | 上下欠 |
| 368 | 温石か | 82 | 96 | 18 | 340 | 褐灰 | 石鍋加工製品 |
| 369 | ミニチュア動物か | 43 | 21 | 30 | 20 | 灰白 | 石鍋加工製品 |

第83表　SD6中層出土　滑石製石鍋補修具観察表

| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | | |
| 370 | 66 | 12 | 11 | — | — | — | 20 | 煤付着　補修具に再加工を行う |

第84表　SD6中層出土　石鍋加工素材観察表

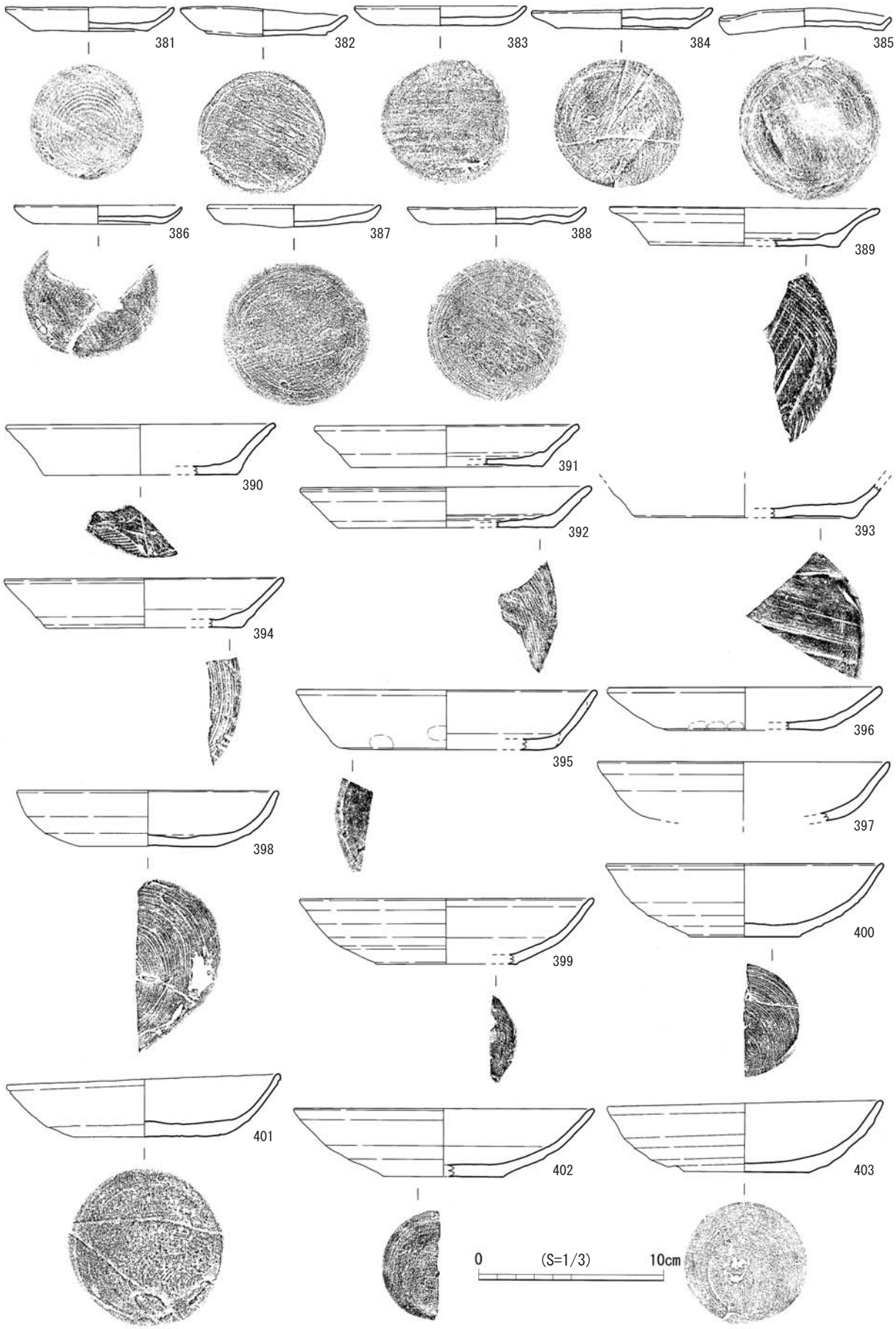
| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 371 | 62 | 90 | 24 | 210 | 鍔部を利用「切断」「折り取り」 |
| 372 | 71 | 12 | 25 | 345 | 鍔部を利用「切断」「折り取り」 |

第85表　SD6中層出土　滑石製石鍋観察表

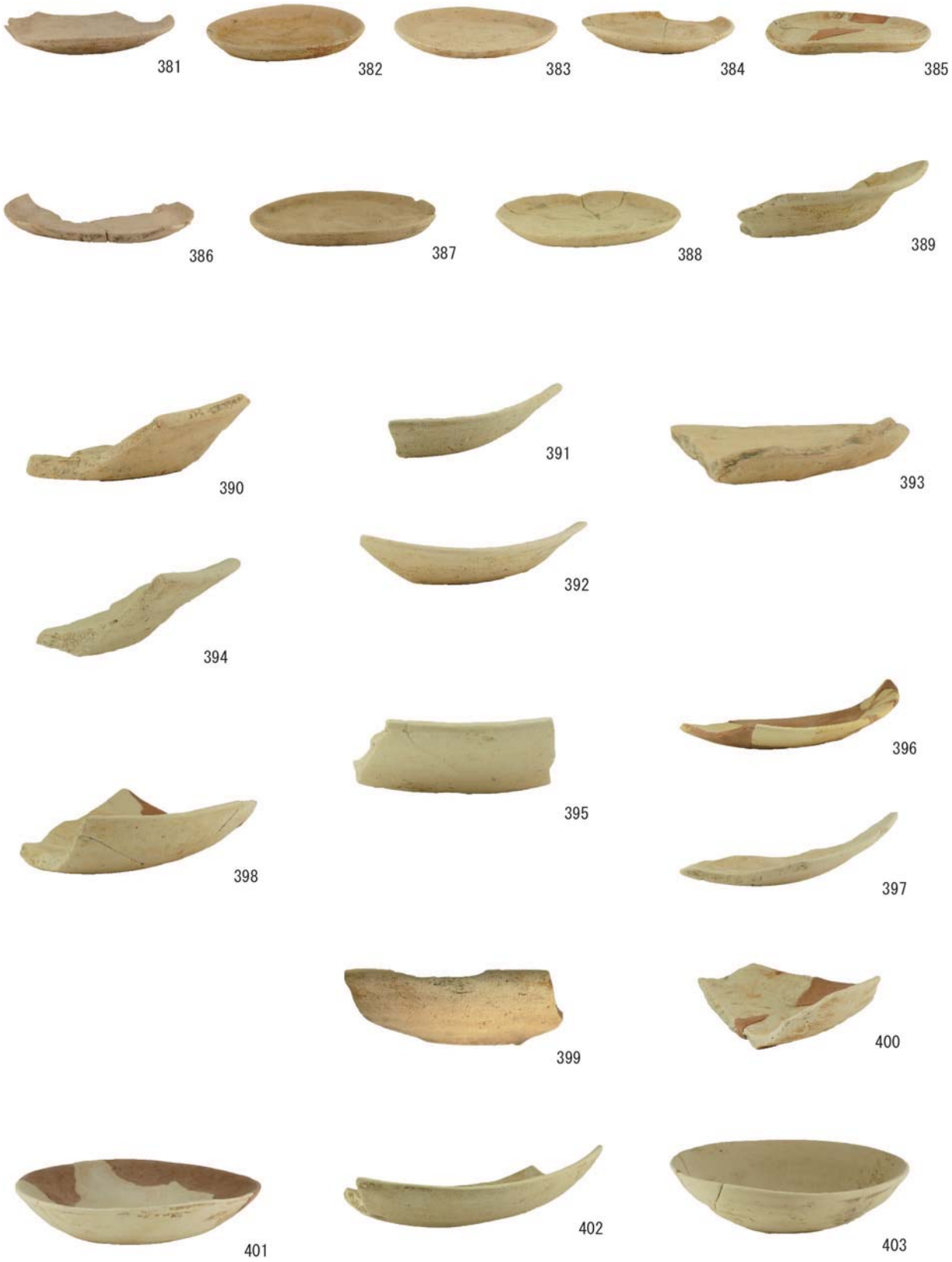
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 373 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (29.0) | (9.6) | — | — | — | 灰黄 | 灰黄 | |
| 374 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | — | (5.3) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | |
| 375 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (23.6) | (6.0) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | |
| 376 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (18.0) | (3.5) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | |
| 377 | 石鍋 | 底部 | — | (6.4) | (28.0) | — | — | 灰 | 灰 | 煤附付着 |
| 378 | 石鍋 | 底部 | — | (3.2) | (24.5) | — | — | 灰 | 灰 | |
| 379 | 石鍋 | 底部 | — | (4.2) | (29.0) | — | — | 灰 | 灰 | 煤附付着 |

## 下層出土遺物(第150～154図、図版151～155、第86～92表)

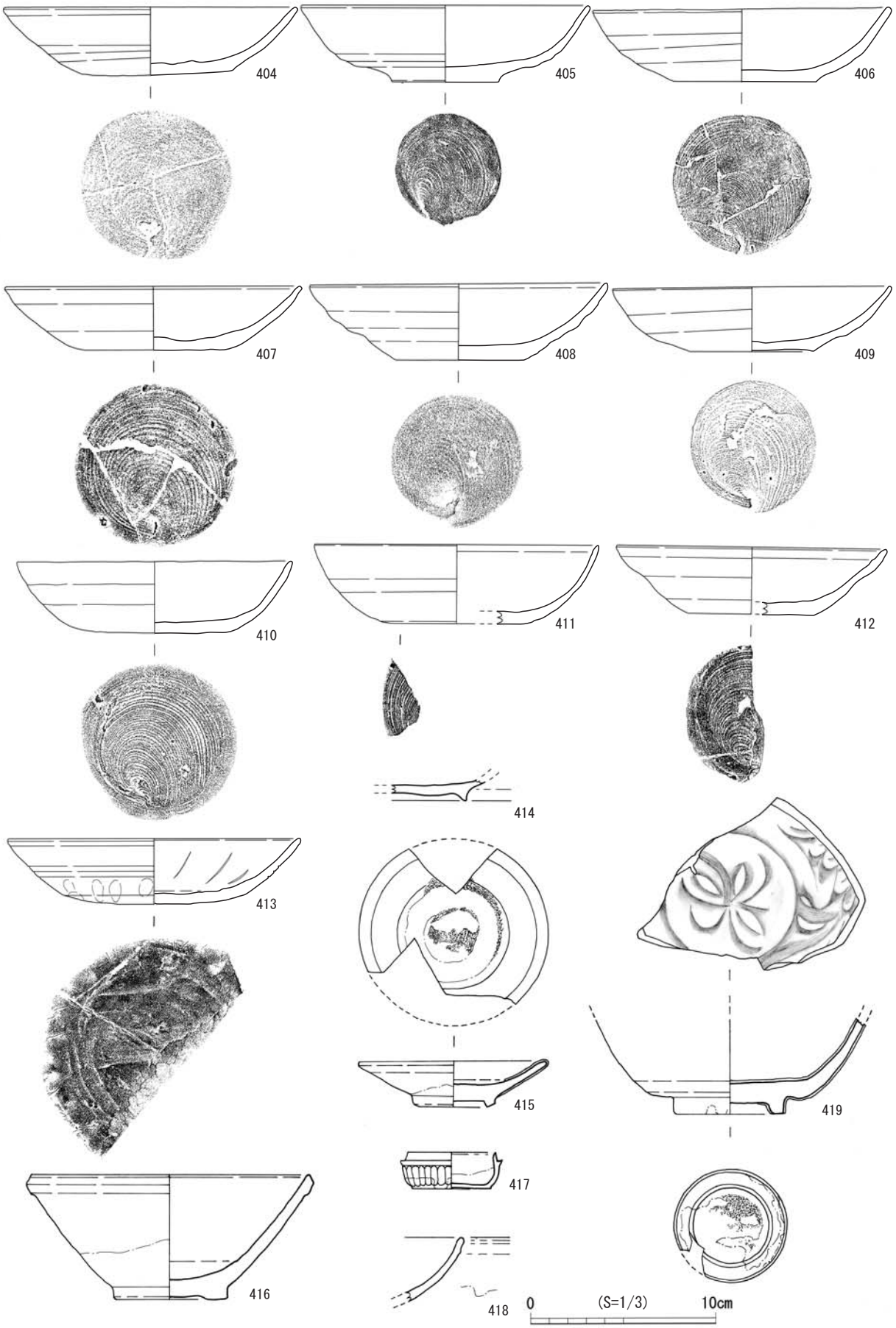
**381～388**は土師器小皿である。いずれも内面を指でナデており、切り離しは右回転の糸切りである。**381・382**は板状圧痕がそのまま残るものである。**381**は体部が直線的に伸び口縁部に至る。**382**は体部




第150図　SD6下層出土遺物－1(S＝1/3)

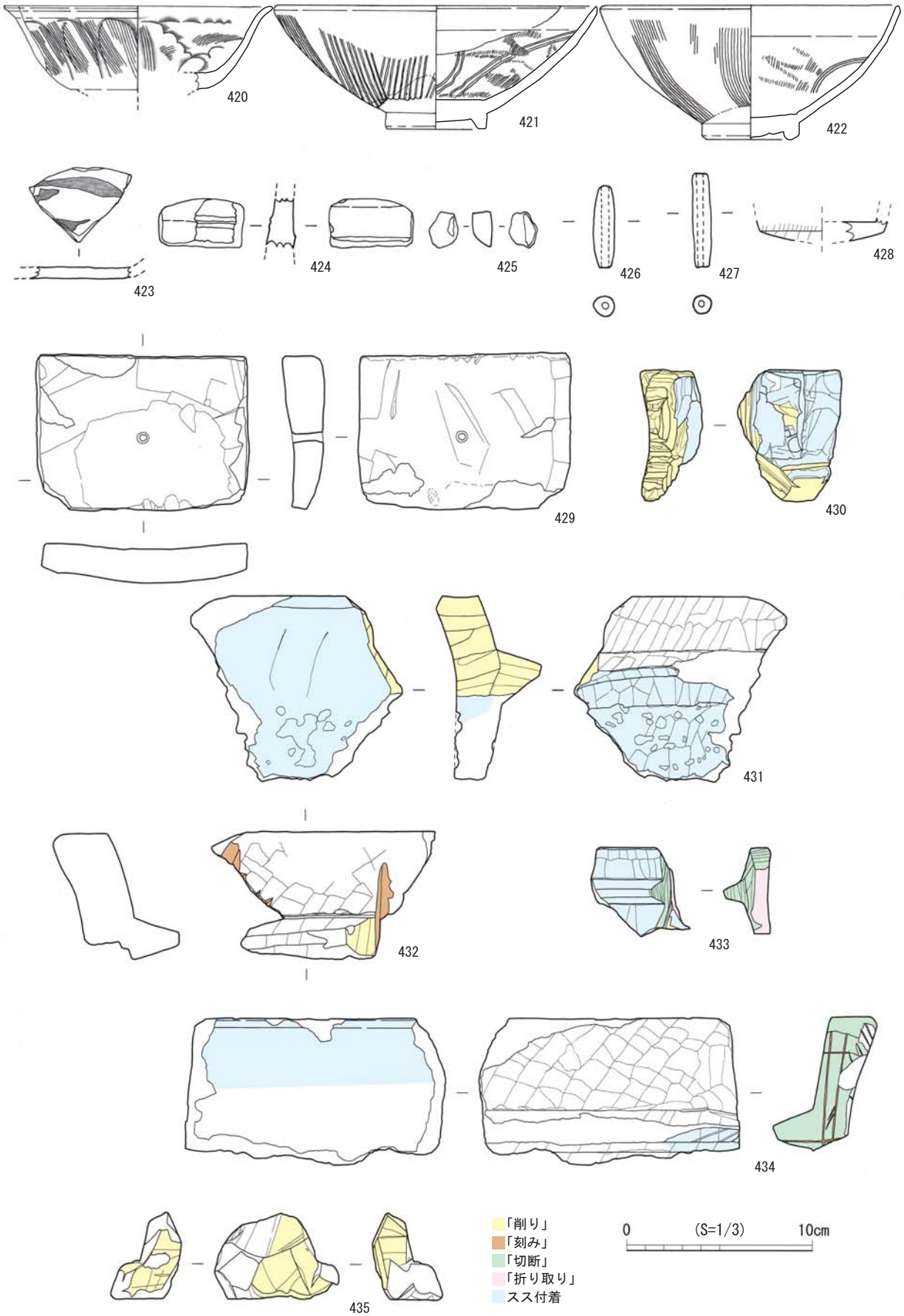



図版151　SD6下層出土遺物－1



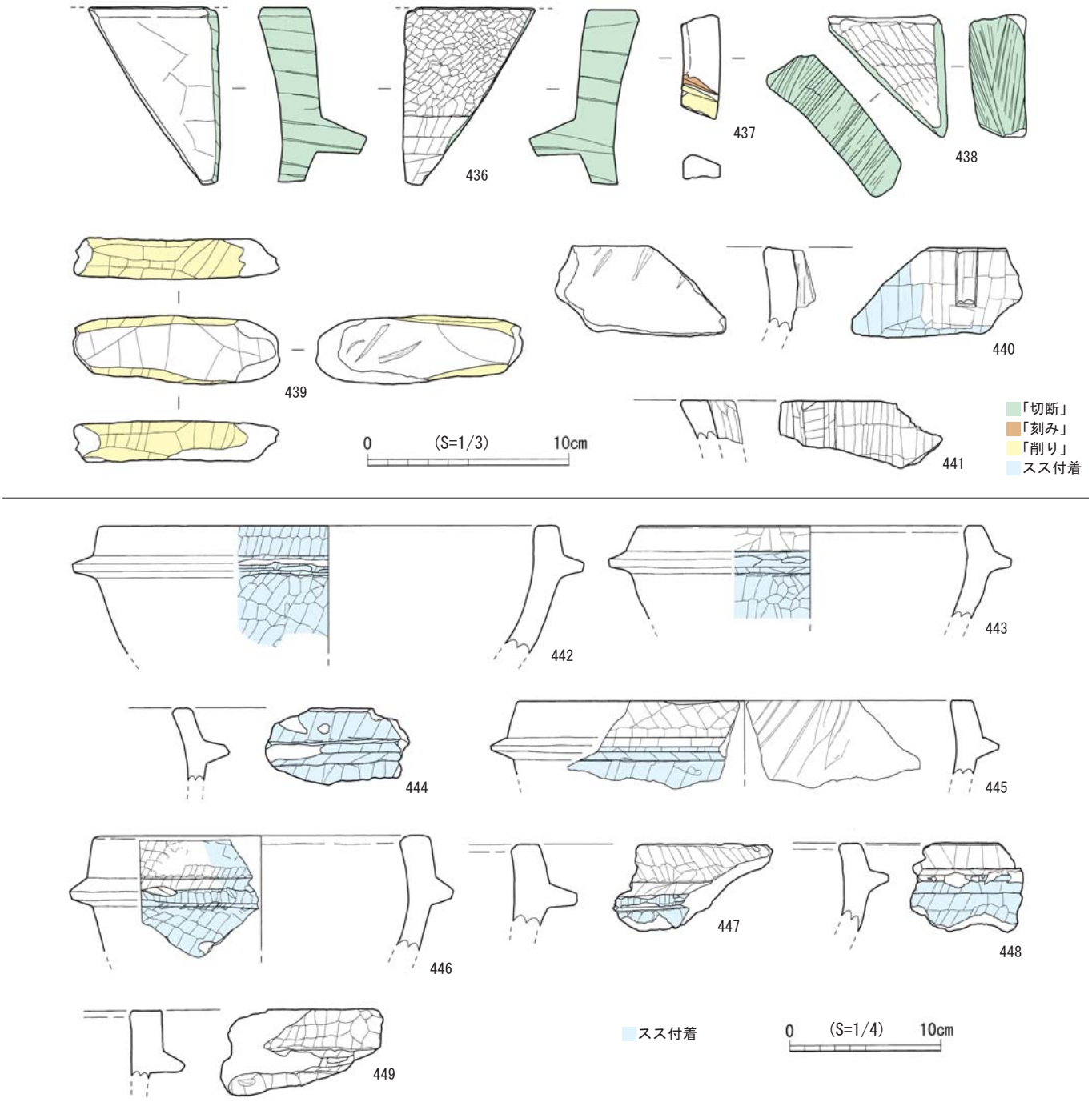

第151図　SD6下層出土遺物－2(S＝1/3)

図版152　SD6下層出土遺物－2




第152図　SD6下層出土遺物－3(S＝1/3)

図版153　SD6下層出土遺物－3

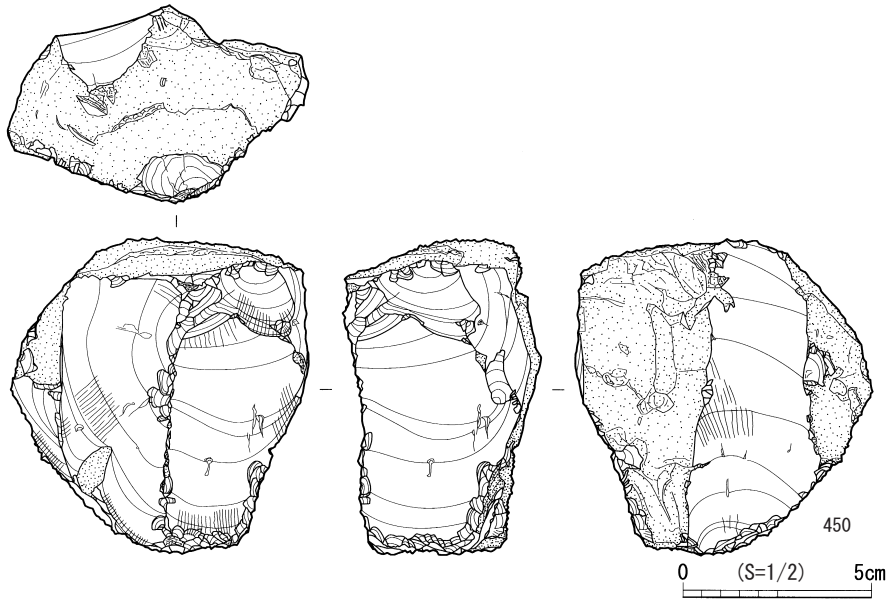



第153図　SD6下層出土遺物－4(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

が内湾気味に伸び口縁部に至る。**383**～**387**は板状圧痕の上からナデているものである。**383**の体部は内湾しながらほぼ同じ厚さで口縁部に至る。**384**の体部はほぼ同じ厚さで直線的に伸び口縁部に至る。**385**の体部は短く摘み出す。**386**の体部は内湾しながら薄く摘み出す。**387**は底部から続く厚い体部が短く摘み出される。**388**は板状圧痕が付かず糸切り痕の上をナデている。体部は同じ厚さで外方へ開く。**389**～**413**は土師器杯である。回転方向が分かるものについては、切り離しはすべて右回転の糸切りである。**389**～**397**は底径が大きい土師器杯である。そのうち、**389**～**393**は底部外面に板状圧痕が認

図版154　SD6下層出土遺物－4

められるものである。**389・390・391**は体部が外反する。**392**の体部は直線的に外方へ伸びる。**393**の体部の形状は不明である。**394～397**は小片や摩滅のために板状圧痕の有無が不明のものである。**394**は体部が外反する。**395**は体部が直線的に外方へ伸びる。断面に粘土紐の接合痕が残る。**396**も体部が直線的に外方へ伸びる。外面体部下半には指頭痕が残るが底部の押し出しは行っていない。摩滅が激しい。**397**の体部は丸みを持って立ち上がる。**398～412**は豊前系土師器杯である。底部の径は小さく体部は内湾しながら口縁部に至る。体部外面には強い回転ナデによる凹凸が見られる。板状圧痕は認められない。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず緻密であるが、**407**は胎土に金雲母が混ざる砂粒を多く含みざらつく。**410・411**は底部から丸みを持って体部が立ち上がるために体部と底部の境が不明




第154図　SD6下層出土遺物－5(S＝1/2)

図版155　SD6下層出土遺物－5

瞭である。**412**は体部が直線的に外方へ伸びる。外形が他の豊前系土師器杯とやや異なるが他の要素が同じであることから、豊前系土師器の範疇に含まれると思う。**413**は底部押し出し技法による丸底の杯である。体部外面の底部際には指頭痕が残り、体部内面にはコテ当て痕が見られる。切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が付く。**414**は瓦器椀底部である。低く小さな断面三角形の高台が付く。搬入品か。**415**は白磁Ⅲ類である。見込みは輪状に釉が掻き取られ重ね焼きの跡が残る。**416**は玉縁の口縁を持つ白磁椀Ⅳ類である。**417**は型押しで成形された青白磁の合子身である。**418**は越州窯系青磁椀Ⅱ類口縁部である。内外面に暗緑色のムラのある釉が掛かる。**419**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面には片彫りの蓮華文が施される。高台内には焼台の痕が残る。**420**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－⑥ａ類である。体部は内湾し口縁部は外反する浅めの椀である。体部外面には縦の櫛目を入れ片彫りの蓮弁が全周する。内面には片彫りの草花文と櫛文が描かれる。体部下半は露胎である。**421**・**422**は同安窯

系青磁椀Ⅰ類である。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり口縁部下で内側へわずかに屈曲する。屈曲する位置の内面には沈線が巡り、見込みに巡る段状の沈線との間に櫛状工具による線彫りの文様と点描文を施す。外面には縦の櫛目文が施される。体部下半は露胎である。**423**は鉄絵が描かれた陶器盤底部である。黄釉がかかり外底は露胎である。**424・425**はイスラム陶器と思われる陶片である。**424**は外面に浅い沈線が一条巡る。内面には浅い沈線を持つ低い隆帯が巡る。大型の容器でこの部位での図上での復元径は36cmを測る。灰白の胎土は精良で軟質である。外面には光沢のある明るい灰みの緑色の釉が、内面には光沢のある明るい灰みの緑色の釉が掛かる(註1)。**425**は胎土や釉調が**424**と同じ小片である。**424・425**と上層から出土した316は同一固体と思われる。附編に科学分析の結果を掲載している。**426・427**は完形の土師質土錘である。**427**の端部は面取りを行っている。**428～449**は素材を滑石とするものである。**428**はミニチュアの石鍋である。摩滅のために加工痕はあまり残らない。容器の蓋の可能性もある。**429**は中央に穿孔がある方形の温石である。長軸の断面が緩く弧を描くことから石鍋加工製品と思われる。側面にはすべて削り痕が見られる。**430～439**は石鍋加工素材である。**430**は縦耳付き石鍋の耳部を利用したもので、「削り」と「刻み」が見られ左側面の「削り」は全面に行われている。**431～436**は鍔付き石鍋の鍔部を利用したものである。**431**は左側面に「削り」が見られる。鍔部より下にはスが多く入っている。**432**は「削り」と「刻み」が見られる。**433**は右側面に「切断」と「折り取り」が見られる。**434**は右側に「切断」と「刻み」が見られる。**435**は全面に「削り」が見られる。**436**は左右の側面に「切断」が見られる。被熱をしていない(註2)。**437・438**は口縁部を利用したものである。**437**には「刻み」と「削り」が見られる。**438**には「切断」が見られる。**439**は長軸方向の断面がわずかに湾曲することから体部を利用したものと思われる。「削り」が見られる。**440・441**は縦耳が付く石鍋である。**440**の内面には成形時の粗い削り痕が残る。**442～449**は鍔付きの石鍋の鍔部である。いずれも、内湾する体部に角がしっかりした鍔が付く。**449**は鍔付き石鍋の鍔部であるが口縁部は鍔部からほぼ直立する。鍔は他の鍔付きの石鍋と同じように角がしっかりとしている。**450**は黒曜石の石核である。上下から剥離を行っている。原石で搬入された腰岳系腰岳産の亜角礫を素材としており大型である。剥片剥離は硬質ハンマーによると思われ、強い加撃により大型剥片を剥離している。自然面を広く残しており、自然面を打面とし、打点を90度、180度転移する。

**第86表　SD6下層出土　土製品観察表**

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 426 | 土錘 | 44 | 11 | 11 | 5 | にぶい橙 | にぶい橙 | 長石 | |
| 427 | 土錘 | 50 | 10 | 11 | 5 | 橙 | 橙 | 長石 | |

**第87表　SD6下層出土　滑石製ミニチュア石鍋観察表**

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 重量(g) | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 428 | 石鍋 | 底部 | — | (1.2) | (3.5) | 15 | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 容器蓋の可能性あり |

**第88表　SD6下層出土　滑石製品観察表**

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 429 | 温石 | 8.3 | 11.5 | 2.3 | 390 | 灰 | 中央に穿孔　石鍋加工製品 |

**第89表　SD6下層出土　石製品観察表**

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 450 | 石核 | 黒曜石 | 83 | 79 | 52 | 320 | 腰岳産 |

## 第90表　SD6下層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 381 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.3 | 6.2 | — | ナデ | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 382 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.9 | 1.5 | 6.5 | — | ナデ | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 383 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.1 | 6.6 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 384 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.8 | 1.1 | 7.1 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 385 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.3 | 1.0 | 8.4 | — | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 386 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.0 | 7.0 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 387 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.1 | 1.1 | 7.2 | — | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 微細な砂粒 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 388 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.6 | 0.9 | 8.2 | — | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切りの上からナデ |
| 389 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.5) | 2.1 | (10.1) | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 390 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.4) | 2.7 | (10.4) | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 391 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.2) | 2.2 | (10.3) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 392 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.7) | 2.2 | (11.6) | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 393 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.8) | (11.6) | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 394 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.0) | 2.7 | (10.4) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り |
| 395 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.2) | 3.2 | (11.5) | 指オサエ | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　長石　石英 | 回転糸切り　断面に接合痕 |
| 396 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 2.3 | (8.8) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 回転糸切り |
| 397 | 土師器　杯 | 口縁部 | (15.7) | (3.0) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 回転糸切り |
| 398 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.0) | 3.0 | (7.6) | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 399 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.8) | 3.5 | (7.6) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 回転糸切り |
| 400 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.9) | 3.9 | (6.0) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 401 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.7 | 3.1 | 7.9 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 402 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 3.7 | (6.4) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 403 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.8 | 3.9 | 6.6 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 404 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.6 | 4.1 | 5.9 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 405 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 4.1 | 5.9 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 406 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.8 | 4.0 | 7.4 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 407 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.0) | 3.4 | 7.4 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 408 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 16.0 | 4.2 | 6.8 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 409 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.8 | 3.5 | 6.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 410 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 14.6 | 3.9 | 7.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 411 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.3) | 4.3 | (8.0) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 回転糸切り |
| 412 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.6) | 3.6 | (6.8) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 413 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.7) | 3.6 | 4.0 | 指オサエ | コテ当て | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 回転ヘラ切り　板状圧痕　押し出し |
| 414 | 瓦器　椀 | 底部 | — | (1.0) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 搬入品か |
| 415 | 白磁皿　Ⅲ | 底部～口縁部 | 10.2 | 2.5 | 3.5 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 見込みの釉を輪状に掻き取り |
| 416 | 白磁椀　Ⅳ | 底部～口縁部 | (15.4) | 6.7 | 6.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 417 | 青白磁　合子 | 底部～口縁部 | 4.6 | 2.0 | 4.2 | — | — | 水色 | 灰白 | 良好 | — | |
| 418 | 越州窯系青磁椀Ⅱ | 口縁部 | — | (3.5) | — | — | — | 灰オリーブ | 黄オリーブ | 良好 | 粗い | |
| 419 | 龍泉窯系青磁椀Ⅰ | 底部～口縁部 | — | (5.1) | 5.7 | — | — | オリーブ黄 | オリーブ灰 | 良好 | — | 内面に片彫りの蓮華文 |
| 420 | 龍泉窯系青磁椀Ⅰ | 体部～口縁部 | 14.3 | 4.5 | — | — | — | オリーブ灰 | オリーブ灰 | 良好 | — | 外面：片彫り蓮弁 内面片彫りの草花文、櫛文 |
| 421 | 同安窯系青磁椀Ⅰ | 底部～口縁部 | (17.4) | 6.6 | 5.4 | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 外面：櫛文縦の櫛目 内面：線彫り文、点猫文 |
| 422 | 同安窯系青磁椀Ⅰ | 底部～口縁部 | (16.1) | 7.2 | 4.6 | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 外面：櫛文縦の櫛目 内面：線彫り文、点猫文 |
| 423 | 陶器盤 | 底部 | — | — | — | — | — | 浅黄橙 | 浅黄褐 | 良好 | 粗い | 内面に鉄絵　外底露胎 |
| 424 | イスラム陶器か | 体部 | — | — | — | — | — | 明るい灰みの緑 | 明るい灰みの緑 | 良好 | きめが細かい | 内面に2条の沈線　外面に凸状の線 |
| 425 | イスラム陶器か | 体部 | — | — | — | — | — | 明るい灰みの緑 | 明るい灰みの緑 | 良好 | きめが細かい | 自然科学分析掲載 |

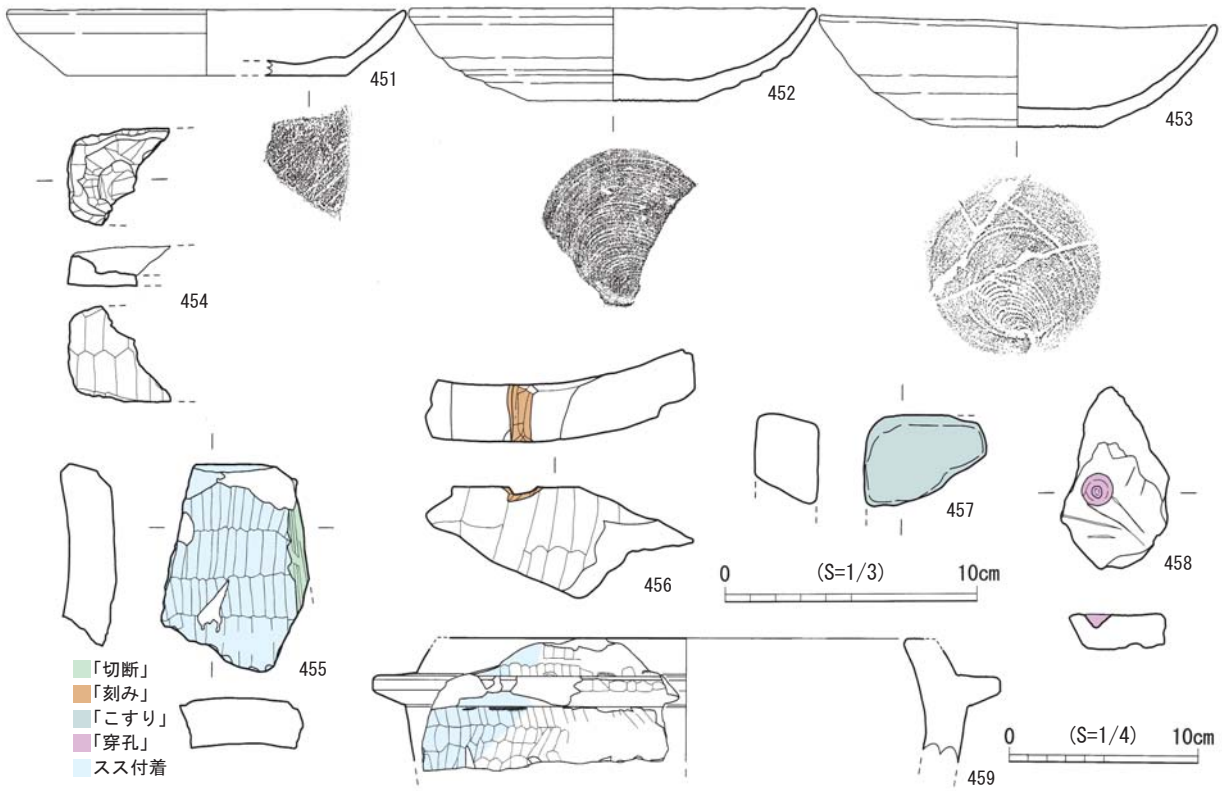
## 第91表　SD6下層出土　石鍋加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 430 | 70 | 56 | 29 | 150 | 耳部利用　「削り」「刻み」 |
| 431 | 98 | 95 | 24 | 465 | 鍔部利用　「削り」 |
| 432 | 68 | 120 | 28 | 430 | 耳部利用　「削り」「刻み」 |
| 433 | 48 | 44 | 23 | 65 | 鍔部利用　「切断」「折り取り」 |
| 434 | 78 | 140 | 22 | 680 | 鍔部利用　「切断」「刻み」 |
| 435 | 47 | 67 | 39 | 105 | 鍔部利用　「削り」 |
| 436 | 88 | 64 | 22 | 210 | 鍔部利用　「切断」被熱していない |
| 437 | 51 | 18 | 12 | 17 | 口縁部利用　「刻み」「削り」 |
| 438 | 60 | 58 | 28 | 120 | 口縁部利用　「切断」 |
| 439 | 11 | 33 | 19 | 115 | 体部利用　「削り」 |

## 第92表　SD6下層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 440 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (20.8) | (5.9) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 煤付着 |
| 441 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (14.0) | (4.4) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | |
| 442 | 縦耳付石鍋 | 鍔部 | (30.) | (8.3) | — | — | — | 灰 | 灰 | 煤付着 |
| 443 | 縦耳付石鍋 | 鍔部 | (31) | (5.0) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 444 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (22) | (6.1) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 445 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (30.0) | (4.8) | — | — | — | 褐灰 | 明褐灰 | 煤付着 |
| 446 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (22) | (7.5) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 447 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (16) | (5.4) | — | — | — | 灰 | 灰白 | 煤付着 |
| 448 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (28) | (5.8) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 449 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (34) | (5.6) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | |

一括取り上げ遺物(第155図、図版156、第93～96表)




第155図　SD6一括取り上げ遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

**451～459**は出土位置を記録せずに取り上げたものである。**451**は底部径が大きい土師器杯である。体部は直線的に伸び口縁部でわずかに内湾する。切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。**452・453**は豊前系土師器杯である。**454**は容器状の石鍋加工製品である。体部を利用しており底面には石鍋時の加工痕が残る。作りは雑である。**455～458**は石鍋加工素材である。**455**は縦耳付き石鍋の口縁部を利用したもので右側縁に「切断」が見られる。**456**は口縁部を利用したものである。「刻み」が見られる。**457**は体部を利用したものである。全面に「こすり」が見られる。**458**は底部を利用したものである。表面と裏面それぞれに浅い「穿孔」が見られる。**459**は鍔付きの石鍋である。口縁部は内湾し、角ばった大きな鍔が付く。

第93表　SD6一括取り上げ　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 451 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 2.6 | (11.0) | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 微細な砂粒 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 452 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (17.0) | 3.7 | (6.8) | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良　雲母 | 回転糸切り |
| 453 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.6 | 4.1 | 6.8 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良 | 回転糸切り |

第94表　SD6一括取り上げ　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 454 | 容器状 | (39) | (40) | 12 | 20 | 灰白 | 石鍋加工製品　体部利用 |

第95表　SD6一括取り上げ　石鍋加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 455 | 82 | 56 | 18 | 140 | 縦耳付石鍋口縁部利用　「切断」 |
| 456 | 44 | 107 | 24 | 160 | 口縁部利用　「刻み」 |
| 457 | 36 | 48 | 26 | 73 | 体部利用　「こすり」 |
| 458 | 72 | 42 | 14 | 55 | 底部利用　「穿孔」 |

第96表　SD6一括取り上げ　滑石製石鍋観察表

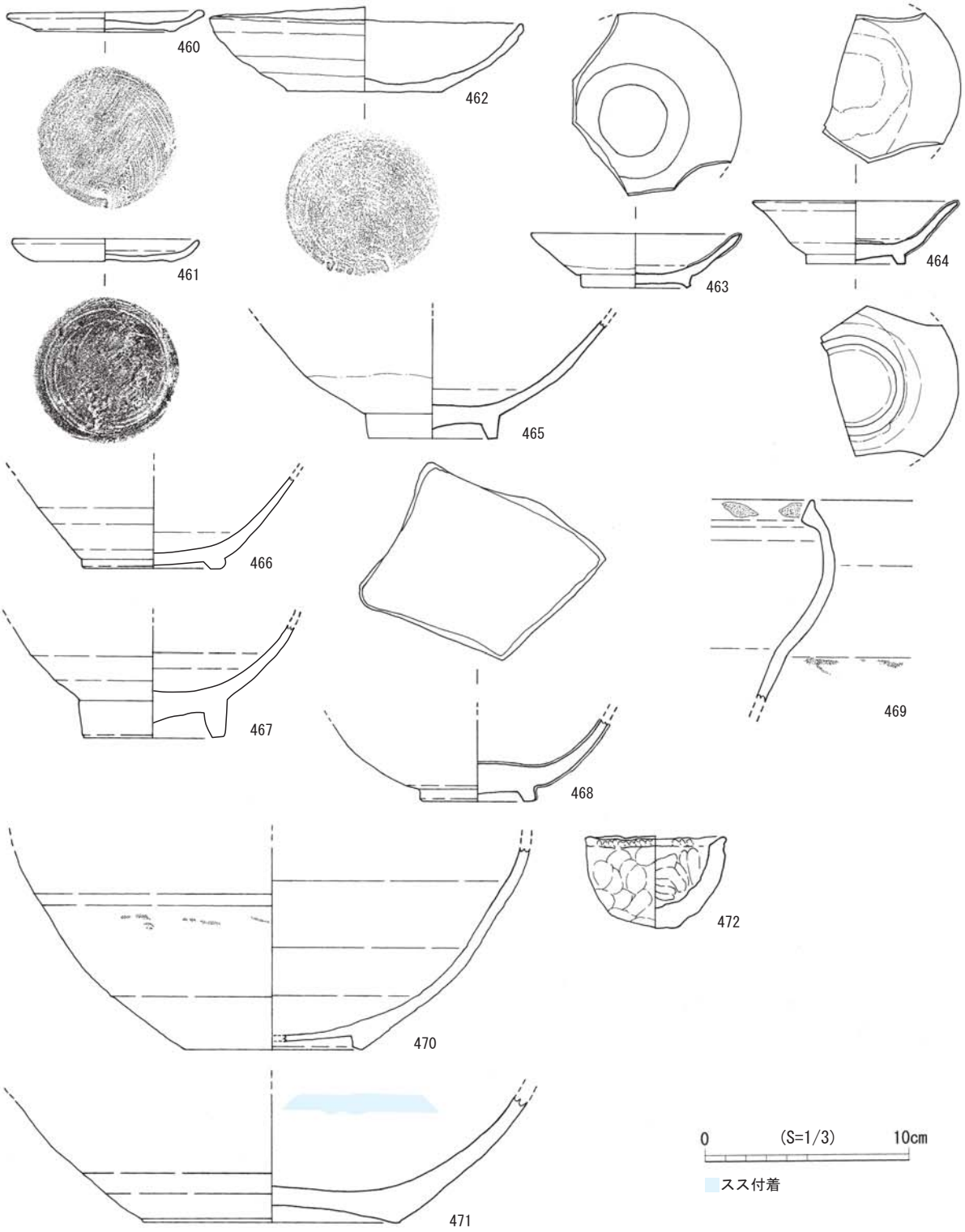
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 459 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (25) | (6.5) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |

イ　平成25(2013)年度調査時の出土遺物(SD6の当時の調査区はTAK201302調査区)

上層取り上げ遺物(第156図、図版156、第97・98表)

**460・461**は土師器小皿である。**460**の体部は外方に直線的に伸びる。切り離しは右回転の糸切りで、板状圧痕が付く。**461**は体部が内湾する。切り離しは右回転の糸切りで、中央部分をナデている。**462**は豊前系土師器の杯である。切り離しは右回転の糸切りである。**463～467**は白磁である。**463・464**は皿Ⅲ類である。見込みの釉を輪状に掻き取っているが、**463**はロクロの回転を利用し、**464**は手持ちで行っている。**465**は椀Ⅱ類である。焼成が甘く軟質である。**466**は椀Ⅳ類である。**467**は椀Ⅴ類である。**468**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面に片彫りの花文が描かれる。**469**は陶器鉢Ⅲ類口縁部である。外反する体部が内側に膨らみながら「く」の字形に外反する口縁部に至る。灰白の胎土は砂粒を含まず、灰オリーブの釉が薄く掛かる。口縁部内面と体部外面には目跡が残る。**470**は陶器鉢Ⅲ類底部～体部である。碁笥底風の底部で、体部は内湾しながら立ち上がる。灰黄の胎土は砂粒を含まず、外面には灰オリーブの内面にはにぶい黄色の釉が掛かる。体部外面下位に目跡が付く。釉調と胎土が異なることから469とは別個体である。**471**は陶器鉢Ⅰ類の底部～体部である。上げ底気味の底部から内湾しながら体部は立ち上がる。橙色を呈する胎土は砂粒を多く含み露胎である。内面は研磨されていることから捏鉢として使われたと思われる。内面体部に横位に煤痕が見られる。**472**はミニチュア土器である。径の小さな底部から膨らみを持って体部は立ち上がり、外反する口縁部に至る。手づくねのため内外面に指頭痕が残る。

図版156　SD6一括取り上げ遺物




第156図　SD6上層出土遺物(S＝1/3)

図版157　SD6上層出土遺物

第97表　SD6上層出土　土器・陶磁器観察表

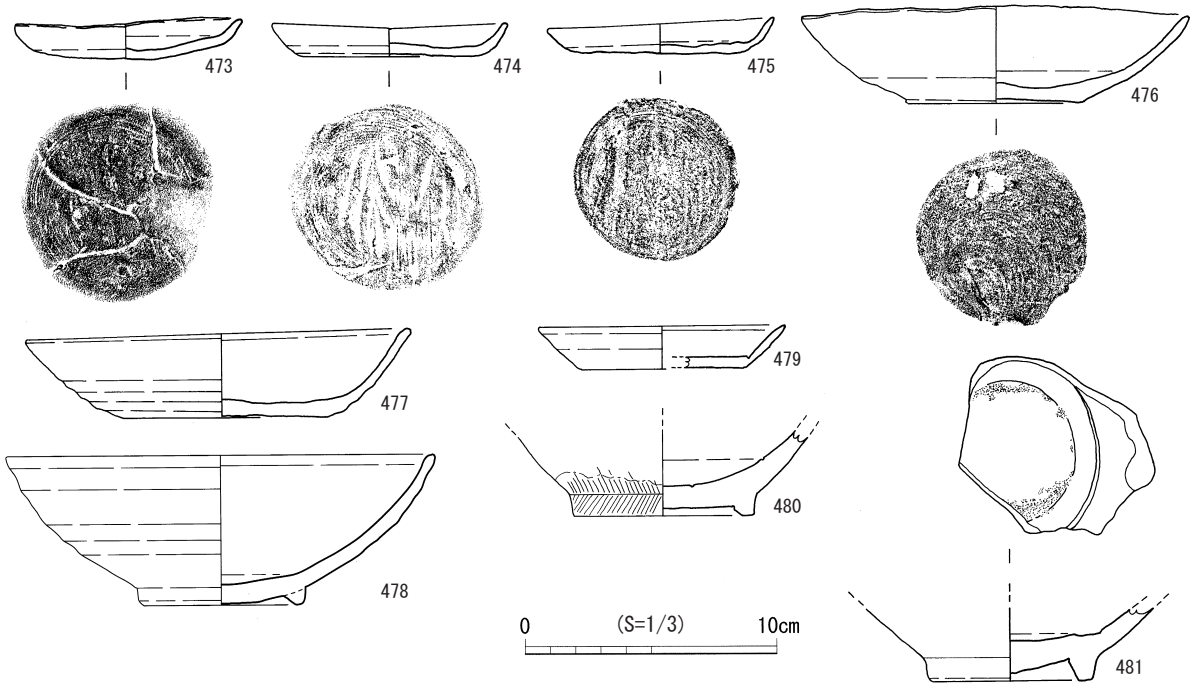
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 460 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.1 | 6.6 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 461 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.6) | 1.1 | 6.8 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り後ナデ |
| 462 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.4 | 4.1 | 7.6 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良　雲母 | 右回転糸切り |
| 463 | 白磁皿　Ⅲ | 底部～口縁部 | (10.2) | 2.6 | 5.4 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 回転による見込み輪状釉剥ぎ |
| 464 | 白磁皿　Ⅲ | 底部～口縁部 | (10.0) | 3.1 | 4.8 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 手持ちによる見込み輪状釉剥ぎ |
| 465 | 白磁椀　Ⅱ | 底部～体部 | — | (5.6) | 7.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 不良 | — | |
| 466 | 白磁椀　Ⅳ | 底部～体部 | — | (4.5) | 7.0 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 467 | 白磁椀　Ⅴ | 底部～体部 | — | (5..5) | 7.1 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 468 | 龍泉窯系青磁椀　Ⅰ | 底部～体部 | — | (4.0) | 5.7 | — | — | オリーブ灰 | オリーブ灰 | 良好 | — | 内面に片彫りの花文 |
| 469 | 陶器鉢　Ⅲ | 口縁部 | — | (9.9) | — | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 口縁部内面と体部外面に目跡 |
| 470 | 陶器鉢　Ⅲ | 底部～体部 | — | (9.8) | (8.6) | — | — | 灰オリーブ | にぶい黄 | 良好 | 精良 | 体部外面下位に目跡 |
| 471 | 陶器鉢　Ⅰ | 底部～体部 | — | (6.3) | (12.4) | — | — | 橙 | 橙 | 良好 | 砂粒を多く含む | 捏鉢として利用　内面に煤痕 |

第98表　SD6上層出土　ミニチュア土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 472 | 土師器　甕 | 底部～体部 | 6.8 | 4.5 | — | 指オサエ | 指オサエ | 橙色 | 明赤褐 | 良好 | 長石　石英 | |

## 中層取り上げ遺物(第157図、図版158、第99表)

**473・473・475**は土師器小皿である。いずれも体部は直線的に外方へ伸びる。切り離しは右回転の糸切りで、板状圧痕が残る。**476・477**は豊前系土師器杯である。**476**の切り離しは右回転の糸切りである。**477**は摩滅が激しく切り離しは不明である。**478**は瓦器椀である。外面にはあばた状の小さな凹凸が、体部下半には押し出しによる凹凸が見られる。高台は粘土紐の貼付けによるが、接合部のナデつけが雑で底部からきれいに剥落する部分がある。**479**は口禿げの白磁皿Ⅸ類である。**480**は白磁椀Ⅳ類底部である。**481**は白磁椀Ⅷ類である。見込みの釉が輪状に掻き取られ重ね焼きの痕が残る。




第157図　SD6中層出土遺物(S＝1/3)

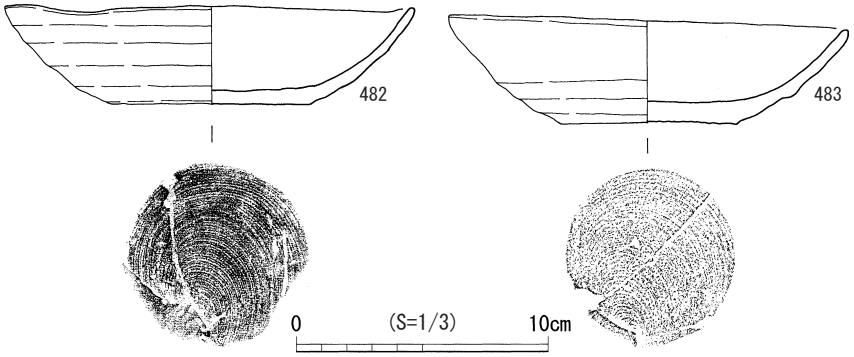
図版158　SD6中層出土遺物

第99表　SD6中層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 473 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.6 | 7.4 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良　長石 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 474 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9 | 1.2 | 7.2 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 475 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.4 | 6.4 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良　長石 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 476 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.4 | 3.8 | 7.0 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 477 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.2 | 3.3 | 8.0 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |
| 478 | 瓦器　椀 | 底部～口縁部 | 17.0 | 5.7 | 6.6 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 摩滅大 |
| 479 | 白磁皿　Ⅸ | 底部～口縁部 | (9.8) | 1.8 | 6.6 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 480 | 白磁椀　Ⅳ | 底部～体部 | — | (3.4) | 7.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 481 | 白磁椀　Ⅷ | 底部～体部 | — | (2.7) | 6.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 重ね焼きの痕 |

## 下層出土遺物(第158図、図版159、第100表)

**482・483**は豊前系土師器杯である。いずれも、外面には回転による強い引き上げでできた凹凸が見られ、胎土は精良である。切り離しは右回転の糸切りである。




第158図　SD6下層出土遺物(S＝1/3)

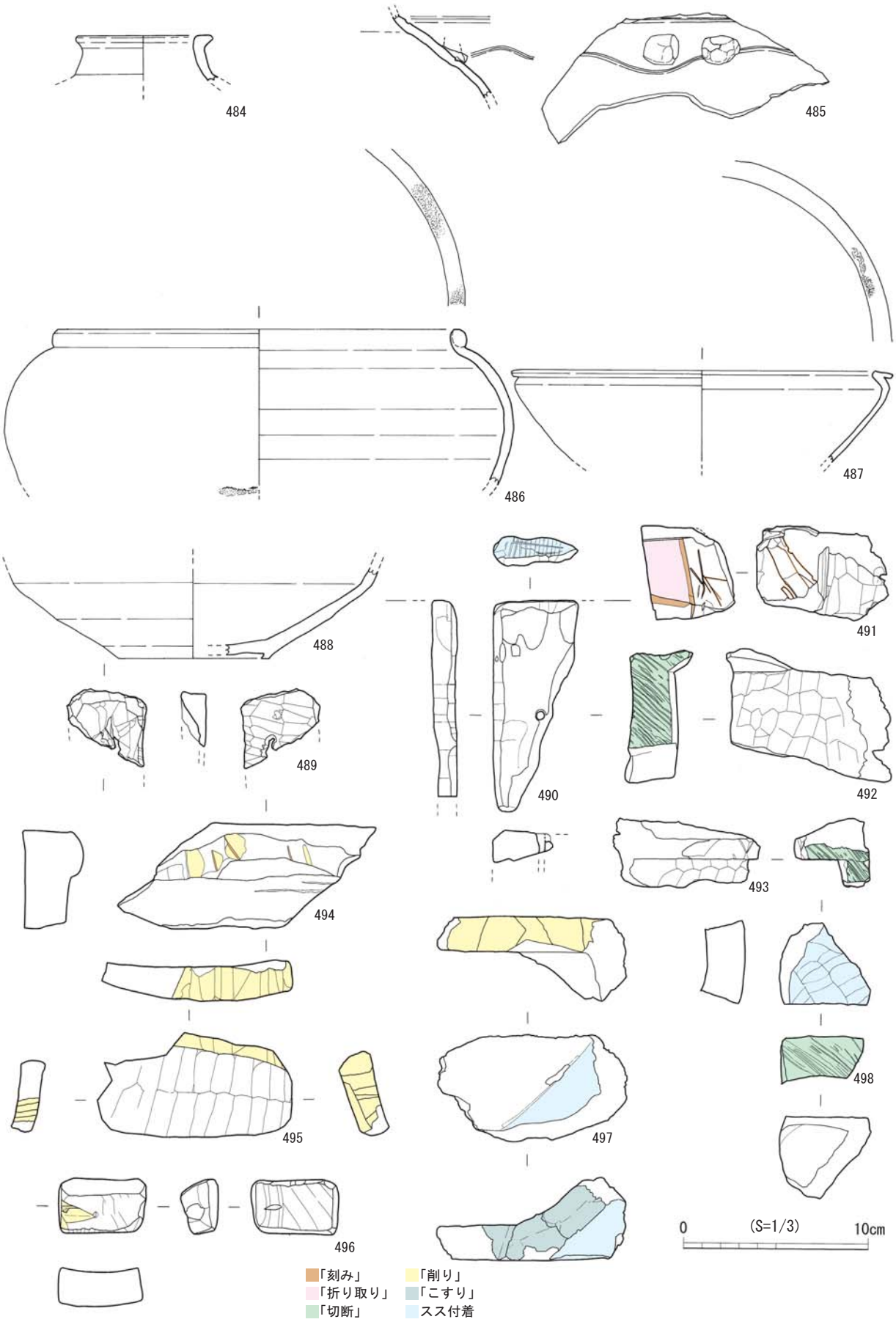
図版159　SD6下層出土遺物

第100表　SD6下層出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 482 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.9 | 3.9 | 7.8 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 |
| 483 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.5 | 4.3 | 6.9 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 精良 |

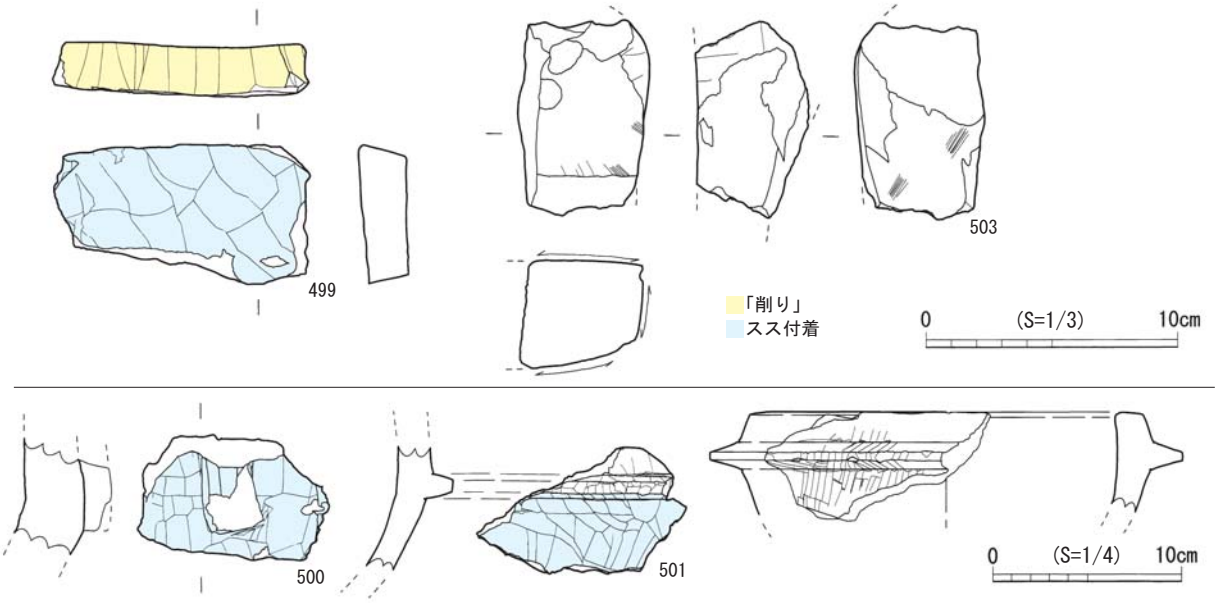
一括取り上げ遺物(第159・160図、図版160・161、第101～105表)

484～453は出土位置を記録せずに取り上げたものである。484・485・486は陶器壺である。484は頸部～口縁部である。頸部はほぼ直立し、断面三角形で肥厚した口縁部は外に曲がる。灰白の胎土に濃淡のある灰オリーブの釉が掛かる。485は四耳壺肩部である。精選された灰色の胎土で、体部は薄き引き上げ作り出されている。頸部との境には低い凸帯が巡り耳の下には浅い波状沈線が巡る。外面には灰オリーブの釉が掛かるが風化のために剥離が激しい。486は焼き締めの短頸壺である。丸みを持った胴部から直立する口縁部は玉縁状を呈し目跡が残る。胎土には極細粒砂までの砂をまばらに含む。487は小鉢Ⅵ類である。体部は薄く大きく外に開く。口縁部は端部が水平になるように折り返される。胎土は精良で、艶のない黄褐の釉が薄く掛かる。口縁部には目跡が残る。488は露胎の小鉢底部である。胎土は極細粒砂をわずかに含み精良である。体部は碁笥底の底部から直線的に外傾した後に直立気味に立ち上がる。489～452は滑石を素材とするものである。489は容器状の製品である。底面に規則正しい削り痕があり、断面が緩やかに曲線を描くことから石鍋を加工した製品であろう。490は穿孔のある板状の製品で、温石と思われる。上面には切断痕が残る。491～499は石鍋を廃棄後加工を行った石鍋加工素材である。491は縦耳部を利用している。「刻み」、「折り取り」が見られる。492～494は鍔部を利用したものである。492は左側面に「切断」痕が残る。493は右側面に「切断」痕が残る。494は、鍔部に横位の「削り」を入れて鍔を削り取っているが鍔の基部は残る。495は石鍋の体部を利用したものである。「削り」が見られる。496は表面が摩滅しており「削り」痕が背面にわずかに残る。断面が緩やかに曲線を描くことから、体部を利用していると思われる。497～499は底部を利用したものである。497は上面に「削り」が、下面に「切断」後の「こすり」痕が見られる。498は体部が立ち上がる際の底部を利用している。「切断」痕が残る。499は長軸の上縁に「削り」を行っている。500～502は石鍋である。500は縦耳付き石鍋の縦耳部分であるが、耳は斜めに作り出されている。501・502は鍔付き石鍋の鍔部分である。どちらも角が付いたしっかりとした鍔が付き、体部より肥厚する口縁部は内湾する。503は砂岩製の砥石である。長軸方向の3面を使用している。黒変した面が多く見られ使用後に被熱をしていると思われるが、側面は黒変していない面が研ぎ面となっており被熱後の再使用が考えられる。




第159図　SD6一括取り上げ遺物－1(S＝1/3)

図版160　SD6一括取り上げ遺物－1




第160図　SD6一括取り上げ遺物－2(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

図版161　SD6一括取り上げ遺物－2

第101表　SD6一括取り上げ　陶器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 484 | 陶器壷 | 口縁部 | (7.1) | (2.5) | — | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | |
| 485 | 陶器四耳壷 | 肩部 | — | 4.0 | — | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | 精良 | 耳部の下に波状沈線 |
| 486 | 陶器短頸壷 | 口縁部 | (21.4) | (9.4) | — | — | — | にぶい橙 | 橙 | 良好 | 砂粒を含む | 焼き締め　口縁部に目跡 |
| 487 | 陶器小鉢　Ⅳ | 口縁部 | (18.4) | (4.9) | — | — | — | 黄褐 | 黄褐 | 良好 | 精良 | 口縁部に目跡 |
| 488 | 陶器小鉢 | 底部 | — | (4.8) | (8.0) | — | — | にぶい橙 | 橙 | 良好 | 精良 | 露胎 |

第102表　SD6一括取り上げ　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 489 | 容器状 | 43 | 34 | 19 | 30 | 灰白 | 石鍋加工製品か |
| 490 | 温石 | 113 | 43 | 16 | 105 | にぶい橙 | 上縁部に切断痕 |

第103表　SD6一括取り上げ　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 491 | 71 | 42 | 44 | 190 | 縦耳部を利用　「刻み」「折り取り」 |
| 492 | 55 | 86 | 23 | 215 | 鍔部を利用　「切断」 |
| 493 | 35 | 79 | 16 | 110 | 鍔部を利用　「切断」 |
| 494 | 99 | 53 | 36 | 340 | 鍔部を利用　「削り」 |
| 495 | 105 | 56 | 19 | 160 | 体部を利用　「削り」 |
| 496 | 295 | 47 | 20 | 52 | 体部を利用か　「削り」 |
| 497 | 102 | 57 | 19 | 195 | 底部を利用　「削り」「切断」「こすり」 |
| 498 | 46 | 43 | 23 | 65 | 底部を利用　「切断」 |
| 499 | 55 | 100 | 20 | 160 | 底部を利用　「削り」 |

第104表　SD6一括取り上げ　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 500 | 縦耳付石鍋 | 耳部 | — | (6.2) | — | — | — | 黄灰 | 黄灰 | 耳は斜めに付く　煤付着 |
| 501 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | — | (6.6) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 煤付着 |
| 502 | 鍔付石鍋 | 鍔部～口縁部 | (18.6) | (5.2) | — | — | — | 灰 | 灰 | |

第105表　SD6一括取り上げ　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 503 | 砥石 | 不明 | 74 | 49 | 42 | 215 | 3面を使用　被熱 |

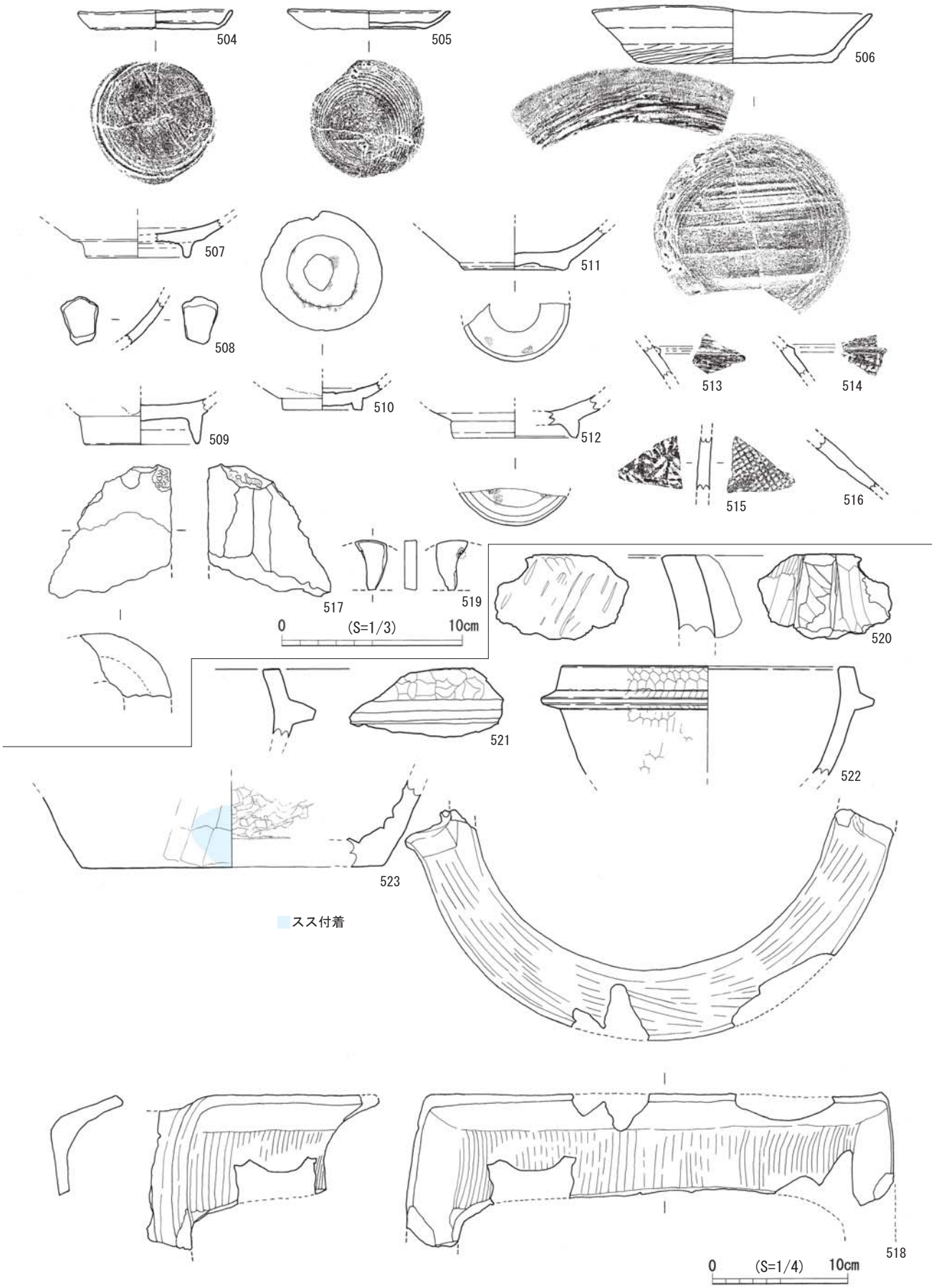
## ウ　平成26(2014)年度調査時の出土遺物(SD6の当時の調査区はTAK201405調査区)

### 上層出土遺物(第161図、図版162、第106～110表)

**504・505**は土師器小皿である。いずれも切り離しは右回転の糸切りである。**504**の体部は内湾気味につまみ出す。板状圧痕が残る。**505**の体部は斜め方向に直線的に引き伸ばす。**506**は土師器杯である。体部は直線的に立ち上がった後外反して口縁部に至る。切り離しは回転糸切りで板状圧痕が残る。体部下半に斜めに連続して走る糸切り痕状の筋が全周するが、これは底部の糸切り痕とは幅が異なることから、成形時に回転力で体部を引き伸ばした際に粘土が捻れて付いた痕と考える。**507**は瓦器椀底部である。内面はミガキが施され平滑になっている。**508**は緑釉陶器椀体部である。胎土は土師質でさえた黄緑の釉が薄く掛かる(註1)。**509**は白磁椀Ⅴ類底部である。**510**は白磁椀Ⅷ類である。見込みの釉は手持ちで掻き取り、重ね焼きの痕が残る。**511**は越州窯系青磁椀Ⅰ類である。蛇の目高台の底部には目跡が残る。**512**は海南産の初期高麗青磁椀である。逆台形のずんぐりとした高台が付き、全面施釉される。高台内に白色の目跡が付く(註3)。**513～516**は高麗無釉陶器壷の体部である。**513・514**は外面に格子目のタタキ痕が残り断面三角形の低い凸帯が巡る。いずれも軟質の焼成である。**515**は外面に格子目のタタキ痕が、内面には樹枝状の当て具痕が残る。**516**は外面に自然釉が掛かり内面には水引痕が見られる。**517**は土製の鞴の羽口である。先端部分にあたりガラス質の融着物が見られる。板状の粘土を2枚巻き付けて作られたことが断面で観察できる。**518**は移動式カマドの焚口～掛口部分である。残存部は焚口の上端にあたり、幅は28cmである。裾のほうへ向かって少しずつ広がっていくと思われる。掛口の復元径は27cmである。焚口と掛口の間には幅5cmの庇がつく。内外面にはハケメが見られる。**519**は石製丸鞆で裏面にくぐり孔がある。にぶい黄橙色を呈する。**520～523**は滑石製石鍋である。**520**は耳部片である。内外面に粗い削り痕が残る。耳はわずかに斜めに付く。**521・522**は鍔部片である。**521**は角があるしっかりした鍔が付く。**522**は張り出しが小さな鍔が付く。**523**は底部片である。内面には粗い削り痕が残る。

第106表　SD6上層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 504 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.4 | 1.1 | 6.5 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕後ナデ |
| 505 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.8 | 1.1 | 6.0 | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り |
| 506 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | 15.4 | 3.2 | 10.9 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 赤色粒子 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 507 | 瓦器　椀 | 底部～体部 | | (2.0) | (6.0) | — | ミガキ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石 | |
| 508 | 緑釉陶器　椀 | 体部 | — | — | — | — | — | さえた緑色 | さえた緑色 | 良好 | 精良 | |
| 509 | 白磁椀　Ⅴ | 底部 | — | (2.5) | 6.3 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 510 | 白磁椀　Ⅷ | 底部 | — | (1.6) | 4.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 釉の掻き取りは手持ち　重ね焼き痕 |
| 511 | 越州窯系青磁椀　Ⅰ | 底部 | — | (2.4) | (5.4) | — | — | オリーブ黄 | オリーブ黄 | 良好 | 精良 | 高台に目跡 |
| 512 | 初期高麗青磁椀 | 底部 | — | (2.5) | (6.8) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 粗い | 高台内に目跡　海南産 |
| 513 | 高麗無釉陶器壷 | 体部 | — | (2.2) | — | 格子タタキ | 回転ナデ | 灰白 | 灰白 | 良好 | マーブル状 | 軟質　断面三角形の低い凸帯 |
| 514 | 高麗無釉陶器壷 | 体部 | — | (1.8) | — | 格子タタキ | 回転ナデ | 灰 | 灰 | 良好 | 白色粒子 | 軟質　断面三角形の低い凸帯 |
| 515 | 高麗無釉陶器壷 | 体部 | — | (2.9) | — | 格子タタキ | 回転ナデ | 黄灰 | 灰黄 | 良好 | マーブル状 | 軟質 |
| 516 | 高麗無釉陶器壷 | 体部 | — | (3.0) | — | — | 回転ナデ | 灰 | 灰 | 良好 | 白色粒子　マーブル状 | 自然釉 |




第161図　SD6上層出土遺物(S＝1/3、石鍋・カマドS＝1/4)

図版162　SD6上層出土遺物

第107表　SD6上層出土　土製品観察表－1

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 517 | フイゴ　羽口 | (6.9) | (6.8) | (2.2) | — | 浅黄 | 良好 | 長石 | 先端が被熱により変色 |

第108表　SD6上層出土　土製品観察表－2

| 遺物番号 | 種類 | 部位 | 最大高(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 518 | 移動式カマド | 庇部 | (11.4) | (36) | (2.1) | にぶい橙 | 良好 | 砂粒を含む | 内外にハケメ |

第109表　SD6上層出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 519 | 丸鞆 | 不明 | 27 | －18 | 65 | 4.8 | 裏面にくぐり穴 |

第110表　SD6上層出土　滑石製石鍋観察表

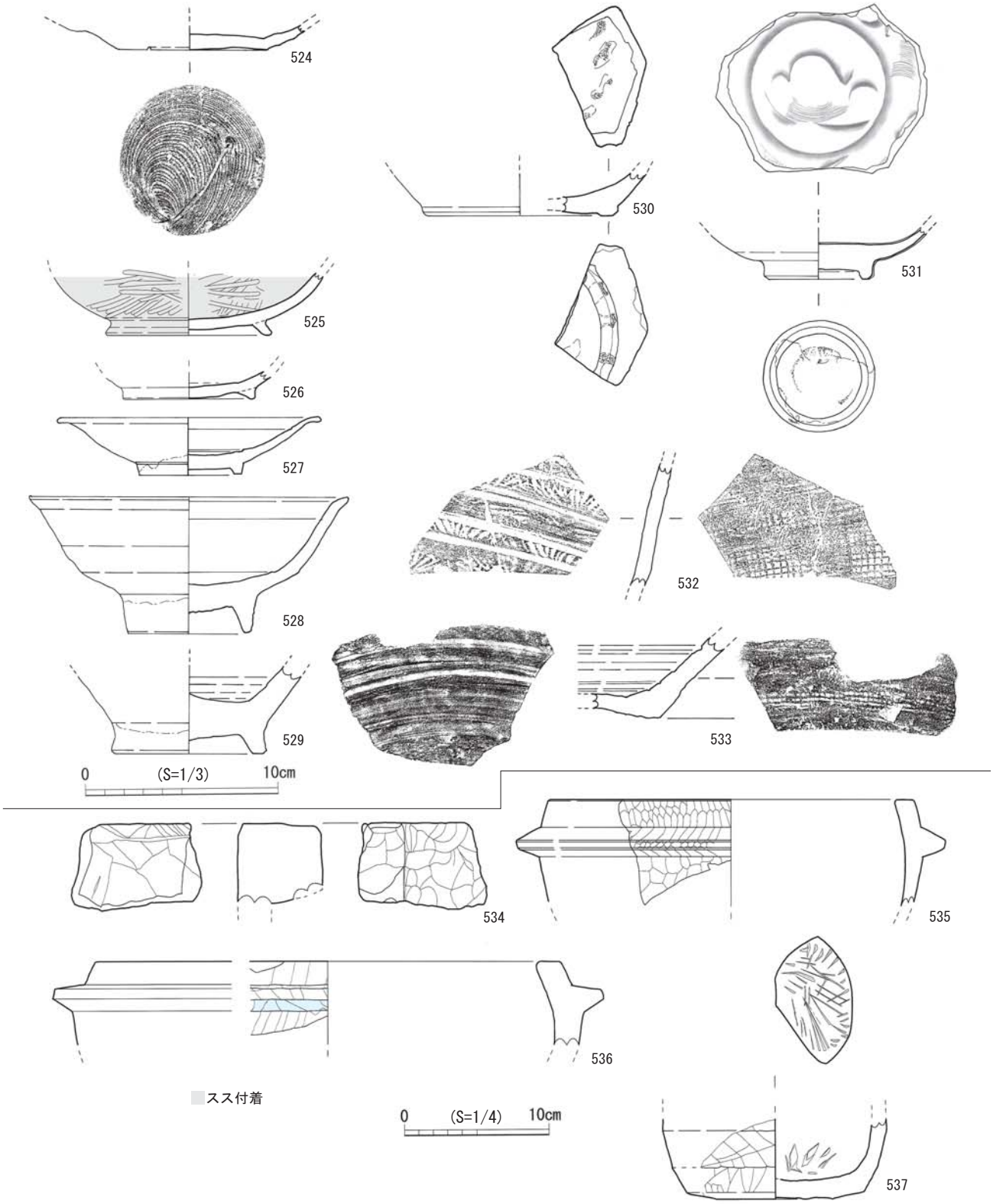
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 520 | 耳付石鍋 | 耳部 | (21) | (6.2) | — | — | — | 褐灰 | 褐灰 | 粗い削り痕が残る |
| 521 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (44) | (5.0) | — | — | — | 灰黄 | 灰黄 | |
| 522 | 鍔付石鍋 | 体部～口縁部 | (21) | (7.9) | — | — | — | 灰黄褐 | 灰黄褐 | |
| 523 | 石鍋 | 底部 | — | (6.3) | (22) | — | — | 灰黄褐 | オリーブ黒 | 煤付着 |

## 中層出土遺物(第162図、図版163、第111・112表)

**524**は土師器杯底部である。底径が8cmで小さいことと胎土から豊前系の土師器杯と思われる。切り離しは右回転の糸切りである。**525**は黒色土器B類椀である。外面は、全面黒化はしていないがミガキが見られることから黒色土器B類と判断した。内外面ともに斜位の密なミガキの後に横位の間隔が空く粗いミガキが施される。**526**は瓦器椀底部である。断面三角形の低い高台が付く。内面はミガキにより平滑になる。**527～529**は白磁である。**527**は皿である。体部は輪状高台からわずかに内湾しながら斜めに伸びる。口縁部は大きく外反し平坦面を作る。見込みに一条の浅い沈線が巡る。釉は高台際まで掛かる。Ⅵ類に含まれるか。**528**は椀Ⅴ類である。**529**は四耳壺の底部である。太い角高台が付き高台は露胎である。**530**は越州窯系青磁椀Ⅰ類の底部である。見込みと高台畳付に目跡が付く。**531**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面には片彫りと櫛による花文が描かれる。**532・533**は高麗無釉陶器である。**532**は硬質の体部片である。外面には格子目のタタキ痕が、内面には樹枝文の上に強い回転ヨコナデ痕が残る。**533**は軟質の底部片である。外面にはヨコナデ痕の下に格子目のタタキ痕が残る。内面は強い回転ヨコナデ痕が残る。**534～537**は滑石製石鍋である。**534**は縦耳付き石鍋の耳部である。大きくがっしりとした耳が付く。**535・536**は鍔付きの石鍋である。**535**は角のある鍔が張り出し、口縁部は内湾し肥厚する。**536**は角のある鍔が張り出し口縁部は体部と同じ厚さで内湾する。**537**は底部片である。内面に粗い削り痕が残る。

第111表　SD6中層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 524 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.2) | 8.0 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 雲母 | 右回転糸切り　豊前系か |
| 525 | 黒色土器　椀 | 底部 | — | (3.1) | (8.4) | ミガキ | ミガキ | 灰白 | 黒褐 | 良好 | 精良 | 斜位のミガキ後横位のミガキ |
| 526 | 瓦器　椀 | 底部 | — | (1.4) | (8.6) | — | ミガキ | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | |
| 527 | 白磁皿　Ⅵか | 底部～口縁部 | (12.8) | 3.0 | 5.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 528 | 白磁椀　Ⅴ | 底部～口縁部 | (16.4) | 7.1 | 6.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 529 | 白磁四耳壺 | 底部 | — | (4.6) | 8.0 | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 530 | 越州窯系青磁椀　Ⅰ | 底部 | — | (2.1) | (9.6) | — | — | 暗オリーブ | 暗オリーブ | 良好 | 精良 | 畳付に目跡 |
| 531 | 龍泉窯系青磁椀　Ⅰ | 底部 | — | (2.7) | 5.1 | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 見込みに花文　高台内に焼台痕 |
| 532 | 高麗無釉陶器壺 | 体部 | — | (4.8) | — | 格子タタキ | 回転ナデ | 暗青灰 | 灰 | 良好 | 白色粒子 | 硬質　内面ナデの下に樹枝文 |
| 533 | 高麗無釉陶器壺 | 底部 | — | (4.2) | — | 格子タタキ | 回転ナデ | 灰白 | 灰 | 良好 | マーブル状 | 軟質 |




第162図　SD6中層出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

図版163　SD6中層出土遺物

第112表　SD6中層出土　滑石製石鍋観察表

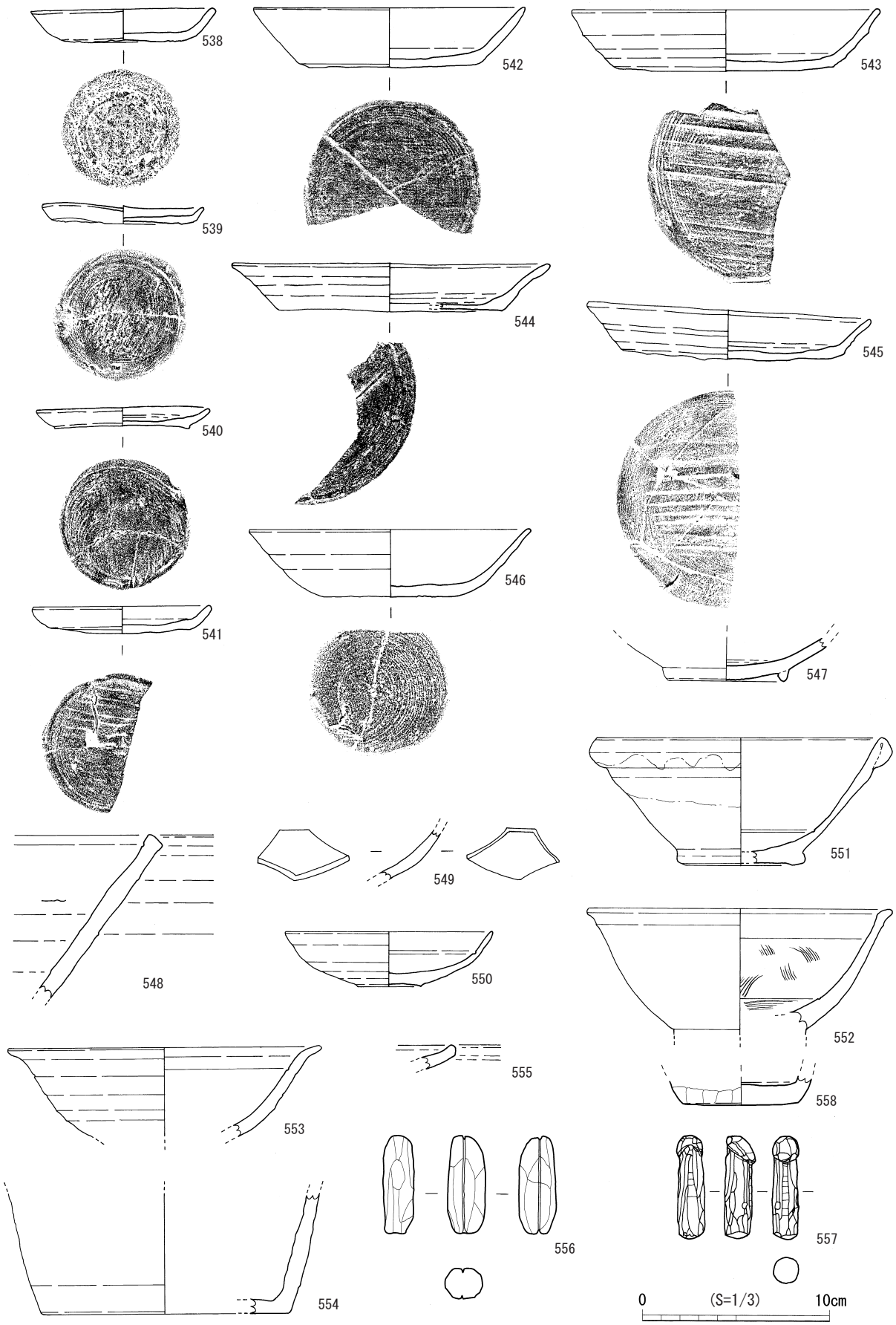
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 534 | 耳付石鍋 | 耳部 | — | (5.4) | — | — | — | 灰褐 | 灰褐 | |
| 535 | 鍔付石鍋 | 鍔部～口縁部 | (25) | (7.3) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | |
| 536 | 鍔付石鍋 | 体部～口縁部 | (32) | (5.7) | — | — | — | にぶい褐 | にぶい褐 | |
| 537 | 石鍋 | 底部 | — | (5.5) | 12.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 内面に粗い削り痕 |

下層出土遺物(第163・164図、図版164・165、第113～116表)

**538・539・540・541**は土師器小皿である。**538**は深さがあり体部は内湾しながら口縁部に至る。切り離しは右回転のヘラ切りである。**539**は形がいびつで上げ底気味になる。体部は小さく外へつまみ出す。切り離しは右回転の糸切りで板状圧痕が残りその上をナデる。**540**は体部を斜め方向へ引き出す。切り離しは右回転の糸切りで中央をナデる。**541**は丸底風である。体部は斜め方向へ引き出す。切り離しは右回転の糸切りで板状圧痕の上をナデる。**542～546**は土師器杯である。**542・543**の体部は直線的に斜めに伸び口縁部に至る。切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。**544・545**の体部は斜めに伸びた後口縁部が外反する。切り離しは回転糸切りで、板状圧痕が残る。**546**は豊前系土師器である。切り離しは右回転の糸切りである。**547**は瓦器椀である。底部は高台内では畳付に近い高さまで下る。外面にあばた状の剥離が見られる体部は丸みを持って立ち上がる。摩滅のために調整は不明である。**548**は東播系須恵器の捏鉢である。斜めに直線的に伸びる体部はそのまま口縁部に至る。口縁部は斜めに面取りをする。12世紀前半のものと思われる。**549**は緑釉陶器椀の体部である。胎土は土師質で、釉は銀化し緑色がわずかに残る。**550**は白磁皿Ⅵ類である。**551・552・553**は白磁椀である。**551**は椀Ⅳ類である。**552・553**は椀Ⅴ類である。**552**の内面には櫛文が描かれる。**554**は陶器壺底部である。露胎で、底部は平底である。**555**は鉢と思われる口縁部である。斜めに伸びた体部から直立して立ち上がる。灰色の硬質に焼成された胎土に光沢のある緑色の釉が掛かる。**556～560**は滑石を素材とするものである。**556**は紡錘形の錘である。長軸方向に浅い溝が全周する。**557**は陽物である。**558**はミニチュア石鍋の底部である。体部外面には通常の石鍋と同じ調整痕が見られる。**559**は縦耳付き石鍋の耳部である。**560**は復元径13cmの小型の鍔付きの石鍋である。摩滅をしているが鍔はしっかりと作り出されている。

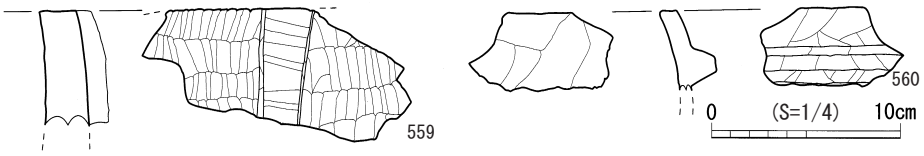
第113表　SD6下層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 538 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.8 | 1.8 | 6.0 | — | ナデ | 橙 | にぶい橙 | 良好 | 長石 | 右回転ヘラ切り |
| 539 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.4 | 1.1 | 7.0 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 雲母　赤色粒子 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 540 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.0 | 1.0 | 6.9 | ナデ | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 長石　雲母 | 右回転糸切り　上からナデ |
| 541 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 9.4 | 1.5 | 7.6 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　微細な砂粒 | 右回転糸切り　板状圧痕の上からナデ |
| 542 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.4) | 3.2 | (9.5) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　雲母 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 543 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.3) | 3.3 | (11.5 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　雲母 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 544 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.6) | 2.5 | (11.8) | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 545 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.0) | 2.5 | (11.5) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石 | 回転糸切り　板状圧痕 |
| 546 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 3.6 | 6.9 | — | — | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | 雲母　微細な砂粒 | 右回転糸切り |
| 547 | 瓦器　椀 | 底部 | — | (2.3) | 6.2 | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 精良 | 摩滅大 |
| 548 | 東播系　捏鉢 | 口縁部 | (26) | (8.7) | — | — | — | 灰 | 灰 | 良好 | 長石　石英 | |
| 549 | 緑釉陶器　椀 | 体部 | — | (2.7) | — | — | — | オリーブ灰 | オリーブ灰 | 良好 | 土師質 | 銀化が進む |
| 550 | 白磁皿　Ⅵ | 底部～口縁部 | (11) | 3.9 | (3.4) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 551 | 白磁椀　Ⅳ | 底部～口縁部 | (15.0) | 6.8 | (5.6) | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 552 | 白磁椀　Ⅴ | 体部～口縁部 | (16.2) | (6.4) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 内面に櫛文 |
| 553 | 白磁椀　Ⅴ | 体部～口縁部 | (16.4) | (4.8) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | |
| 554 | 陶器壺 | 底部 | — | (6.5) | (13.2) | 回転ヘラケズリ | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | — | 露胎 |
| 555 | 陶器　鉢 | 口縁部 | — | (1.3) | — | — | — | 暗緑灰 | 暗緑灰 | 良好 | 灰色の硬質 | 光沢のある緑の釉 |




第163図　SD6下層出土遺物－1(S＝1/3)

図版164　SD6下層出土遺物－1




第164図　SD6下層出土遺物－2(S＝1/4)

図版165　SD6下層出土遺物－2

第114表　SD6下層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 556 | 石錘 | 53 | 20 | 16 | 30 | 灰白 | |
| 557 | 陽物 | 54 | 13 | 14 | 15 | 灰白 | 完形 |

第115表　SD6下層出土　ミニチュア石鍋観察表

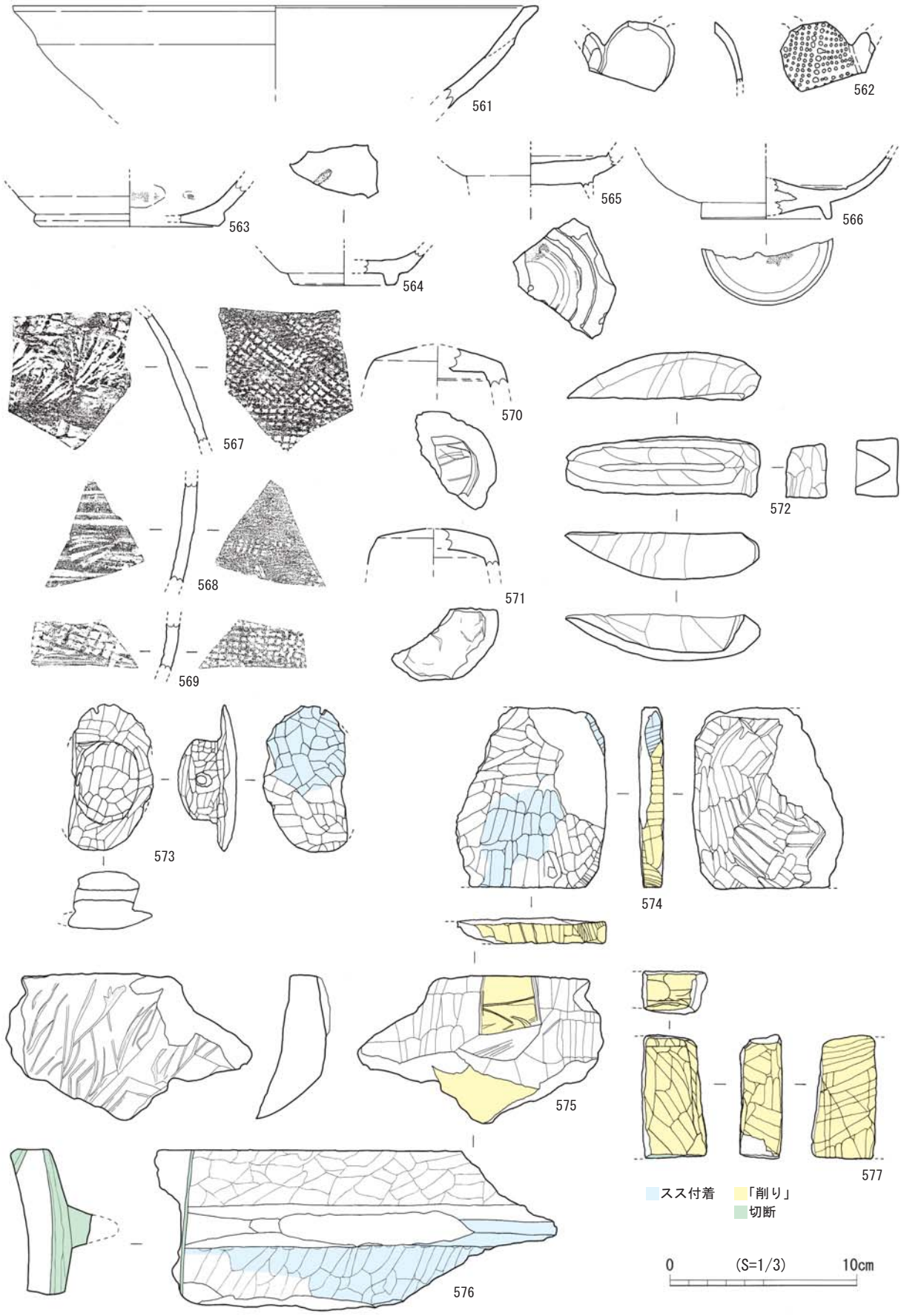
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 重量(g) | 調整 | | 色調 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 |
| 558 | 石鍋 | 底部 | — | 1.4 | 6.2 | 65 | — | — | 灰白 | 灰白 |

第116表　SD6下層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 559 | 耳付石鍋 | 耳部 | (30) | (7.0) | — | — | — | 灰 | 灰 | |
| 560 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | (13) | (3.0) | — | — | — | 灰黄褐 | 灰黄褐 | 小型 |

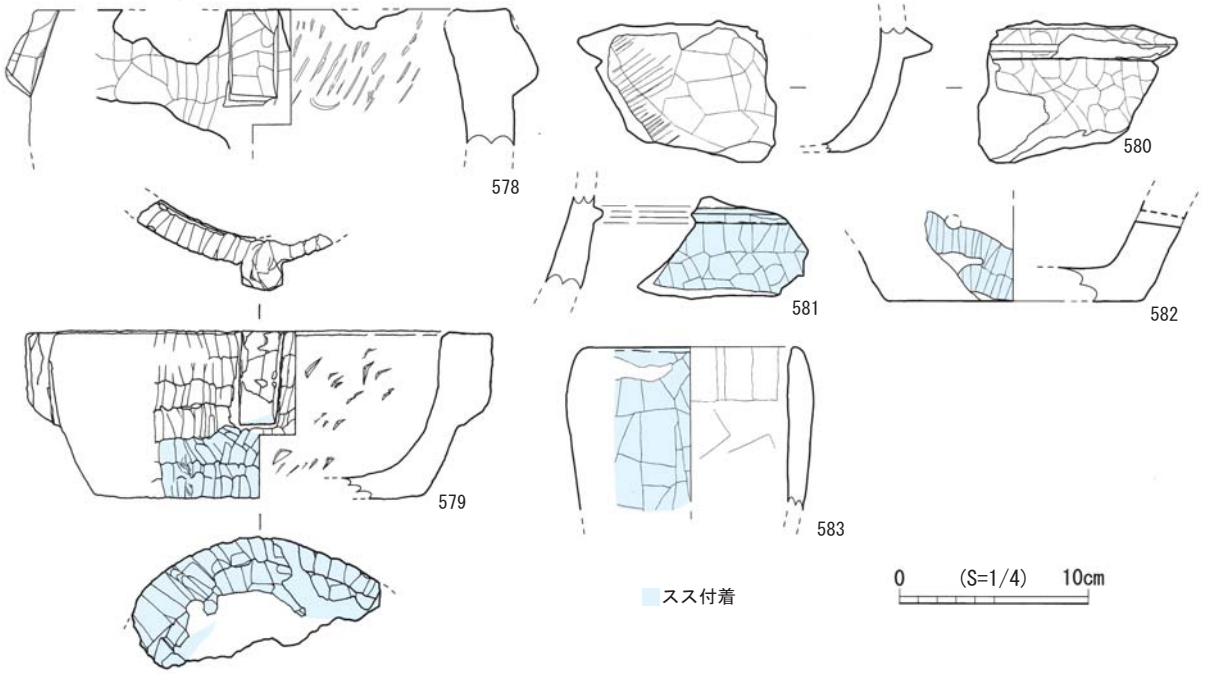
**一括取り上げ遺物（第165・166図、図版166・167、第117～121表）**

**561～583**は出土層位を記録せずに取り上げたものである。**561**は瓦質の鉢である。外方に大きく開く体部で口縁部は一旦すぼまり外反する。口縁端部は面取りをされ、平坦な面を作り出す。生産地は不明である。**562**は青白磁の水注である。粟粒文が覆う球形に近い体部の上面には復元径0.8cmの入水口が作られ、その横には把手が、側面には注口が貼り付けられる。**563**は越州窯系青磁椀Ⅱ類底部である。円盤状の高台で体部下半は露胎である。内面に目跡が残る。**564・565・566**は初期高麗青磁椀底部である。**564**は海南産で、白色粒子が混ざる粗い胎土に白濁した釉が畳付より内側を除いて掛かる。底部内面と畳付には目跡が残る。**565**は康津産で、内面の底部と体部の境には沈線が巡る。精良な胎土は灰渇色で、灰オリーブの釉が高台内にも掛かる。高台内には目跡が残る。**566**も康津産で、体部は丸みを持って立ち上がり、内面の底部と体部の境には沈線が巡る。精良な胎土はにぶい黄橙で、オリーブ黄の釉が全面に薄く掛かる。焼成の際に空気が膨らんだために底部断面には空間が見られる。高台内には目跡が残る。**567・568・569**は軟質の高麗無釉陶器で大型壺の体部である。**567・568**は、外面に格子目のタタキ痕の上から回転ナデ痕が施され、内面は樹枝文の上から回転ナデ痕が施される。**569**は内外面ともに格子目のタタキ痕の上から回転ナデ痕が施される。**570～583**は素材が滑石である。**570・571**は口径が6cmほどの容器の蓋と思われる製品である。どちらも天井部が丸みを持っていることから蓋と判断したが、ミニチュア石鍋の底部の可能性もある。**572**は舟形である。舳先を長く作り出している。**573**は補修具である。挿入部は大きく器壁部は薄く作っている。器壁部の上面が水平であることと器壁部上面に煤が多く付着していることから、石鍋の破損した底部に外側から挿入部を差し込んだものと思われる。**574**は板状の製品である。裏面には弧を描くような削り痕が残る。周囲は削りにより形を整えている。石鍋底部片の加工製品で温石と思われる。**575・576・577**は石鍋を加工しているが製品にはなっていない石鍋加工素材である。**575**は縦耳の石鍋の耳部を削り破断面に「削り」を入れたものである。内面には製作時「削り」痕が残る。**576**は鍔付石鍋の体部～口縁部が残る破損品に「切断」を行ったものである。左側面に切断痕が残る。**577**は断面が緩やかな曲線を描く体部片を利用したものである。下面は「切断」を行い左側の破損部分以外は「削り」を行っている。**578・579**は縦耳が付く石鍋である。**578**は内面に斜位の工具痕が残る。体部下半は雲母と思われる鉱物の結晶が全面に見られ脆弱な感じを受ける。**579**は口径が20cmで器高が8.9cmと小ぶりな製品である。体部内面に斜位の工具痕が残り、体部下半～底部にかけて煤が全面に付着する。**580**は鍔付きの石鍋の鍔部である。底から鍔下までの高さが5cmで浅い石鍋である。**581**は断面三角形の小さな鍔が付く石鍋である。口縁部は体部の厚さと変わらず、内湾せずに体部からそのまま伸びる。**582**は底部～体部片である。体部には使用時のものと思われる穿孔が見られる。**583**は長胴の石鍋である。体部はほぼ直立し口縁下でわずかに膨らんだ後口縁部はすぼまりながら丸みを持って納まる。特異な形状である。




第165図　SD6一括取り上げ遺物－1(S＝1/3)

図版166　SD6一括取り上げ遺物－1




第166図　SD6一括取り上げ遺物－2(S＝1/4)

図版167　SD6一括取り上げ遺物－2

## 第117表　SD6一括取り上げ　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 561 | 瓦質　鉢 | 体部～口縁部 | (28) | (5.5) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | 長石 | 生産地不明 |
| 562 | 青白磁　水注 | 体部 | — | (3.5) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 良好 | — | 粟粒文 |
| 563 | 越州窯系青磁椀　Ⅱ | 底部 | — | (2.4) | (9.5) | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | — | 内面に目跡 |
| 564 | 初期高麗青磁椀 | 底部 | — | (1.9) | (5.4) | — | — | 灰黄 | 灰黄 | 良好 | 白色粒子 | 海南産　底部内面と畳付に目跡 |
| 565 | 初期高麗青磁椀 | 底部 | — | (1.6) | — | — | — | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | 精良 | 康津産　高台内に目跡 |
| 566 | 初期高麗青磁椀 | 底部 | — | (3.4 | (7.0) | — | — | オリーブ | オリーブ | 良好 | 精良 | 康津産　底部断面に空間 |
| 567 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部～口縁部 | — | (5.8) | — | 格子タタキ　ナデ | 樹枝文　ナデ | 灰 | 灰 | 良好 | マーブル状 | 軟質 |
| 568 | 高麗無釉陶器　壺 | | — | (4.4) | — | 格子タタキ　ナデ | 樹枝文　ナデ | 灰 | にぶい褐 | 良好 | マーブル状 | 軟質 |
| 569 | 高麗無釉陶器　壺 | | — | (2.5) | — | 格子タタキ　ナデ | 格子タタキ　ナデ | 灰 | 灰黄褐 | 良好 | マーブル状 | 軟質 |

## 第118表　SD6一括取り上げ　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 570 | 容器　蓋 | (51) | (43) | (12) | 30 | 黄褐 | ミニチュア石鍋の可能性もあり |
| 571 | 容器　蓋 | (49) | (56) | (11) | 35 | にぶい黄橙 | ミニチュア石鍋の可能性もあり |
| 572 | 船形 | 104 | 31 | 24 | 95 | 灰黄褐 | |
| 574 | 温石 | 96 | 80 | 12 | 170 | 灰黄褐 | 石鍋底部片を利用 |

## 第119表　SD6一括取り上げ　滑石製石鍋補修具観察表

| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | | |
| 573 | 76 | 44 | 1.0 | 45 | 35 | 20 | 100 | 底部に外から差し込む　煤付着 |

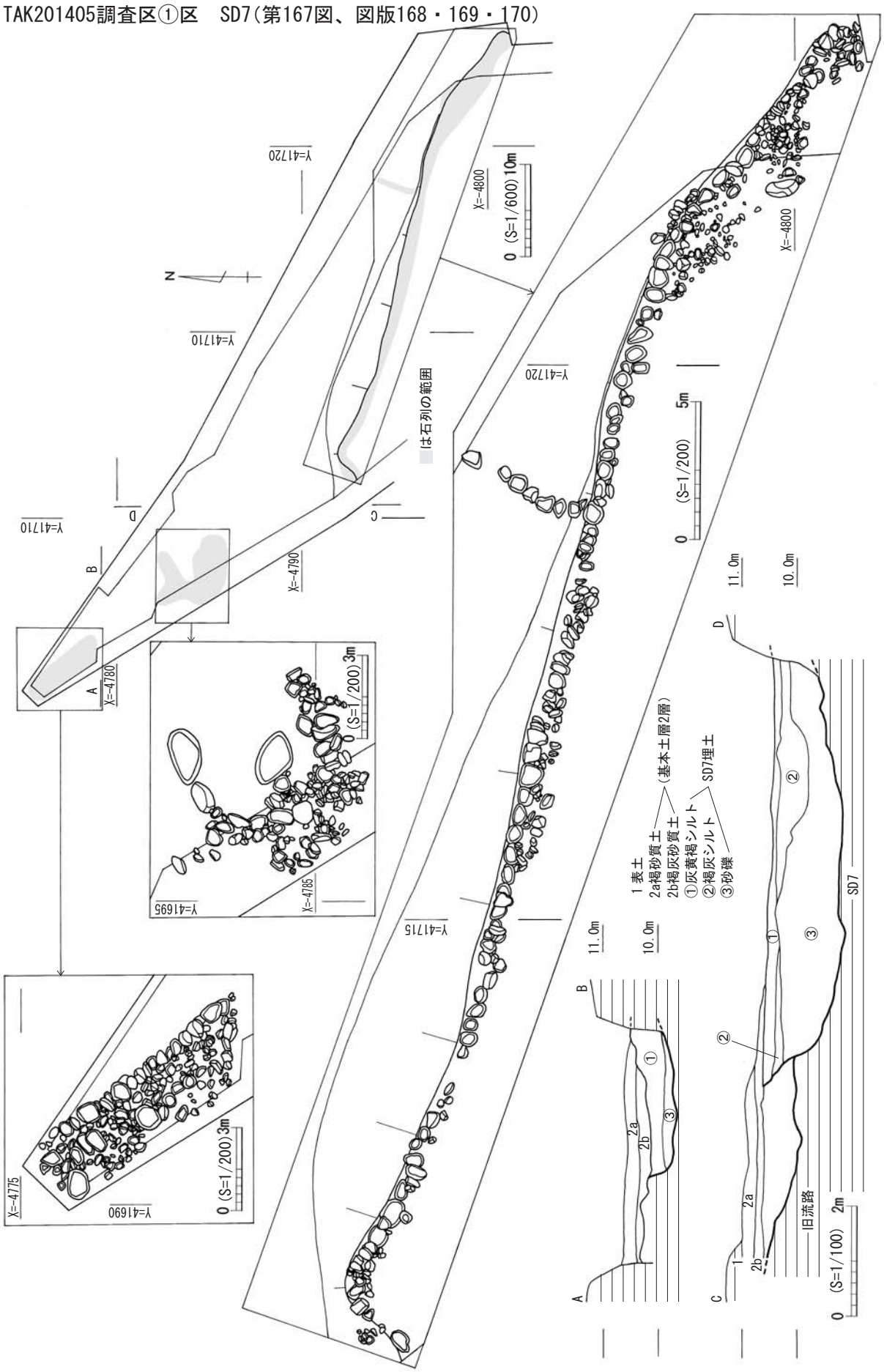
## 第120表　SD6一括取り上げ　石鍋加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 575 | 78 | 128 | 24 | 325 | 耳付石鍋の耳部を利用　「削り」 |
| 576 | 215 | 85 | 24 | 885 | 鍔付石鍋の鍔部を利用　「切断」 |
| 577 | 65 | 34 | 23 | 100 | 体部片を利用　「切断」「削り」 |

## 第121表　SD6一括取り上げ　滑石製石鍋察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 578 | 縦耳付石鍋 | 耳部 | (24.8) | (7.1) | — | — | — | 灰白 | 黄橙 | 内面に斜位の工具痕　脆弱 |
| 579 | 縦耳付石鍋 | 底部～口縁部 | (20) | 8.9 | (14) | — | — | にぶい橙 | にぶい橙 | 小型　内面に斜位の工具痕　煤付着 |
| 580 | 鍔付石鍋 | 底部～鍔部 | — | (6.5) | — | — | — | 灰白 | 灰白 | 浅い |
| 581 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | — | (5.0) | — | — | — | 黒褐 | 浅黄 | 断面三角形の小さな鍔　煤付着 |
| 582 | 石鍋 | 底部～体部 | — | (3.2) | (13) | — | — | オリーブ黒 | 灰 | 穿孔　煤付着 |
| 583 | 石鍋 | 体部～口縁部 | (11) | (8.3) | — | — | — | 黒褐 | 灰黄褐 | 径が小さい　特異な形 |

⑧ TAK201405調査区①区　SD7（第167図、図版168・169・170）




第167図　SD7平・断面図（平面図 S＝1/600、拡大図 S＝1/200、断面図 S＝1/100）

大調査区201405の小調査区①区7668・7868・7870・7872グリッド2層から検出した。長軸(南東－北西)43m、最大幅9m、深さ1.3mを測る。両端は調査区外へ延びていくために全長は確認長よりもさらに伸びる。また、北の肩も調査区外にあるために、最大幅はさらに広がる。南の肩には石が並び、石列となる。最も新しいと思われる染付け皿からこの溝の埋没は15世紀後半～16世紀中頃と思われる。

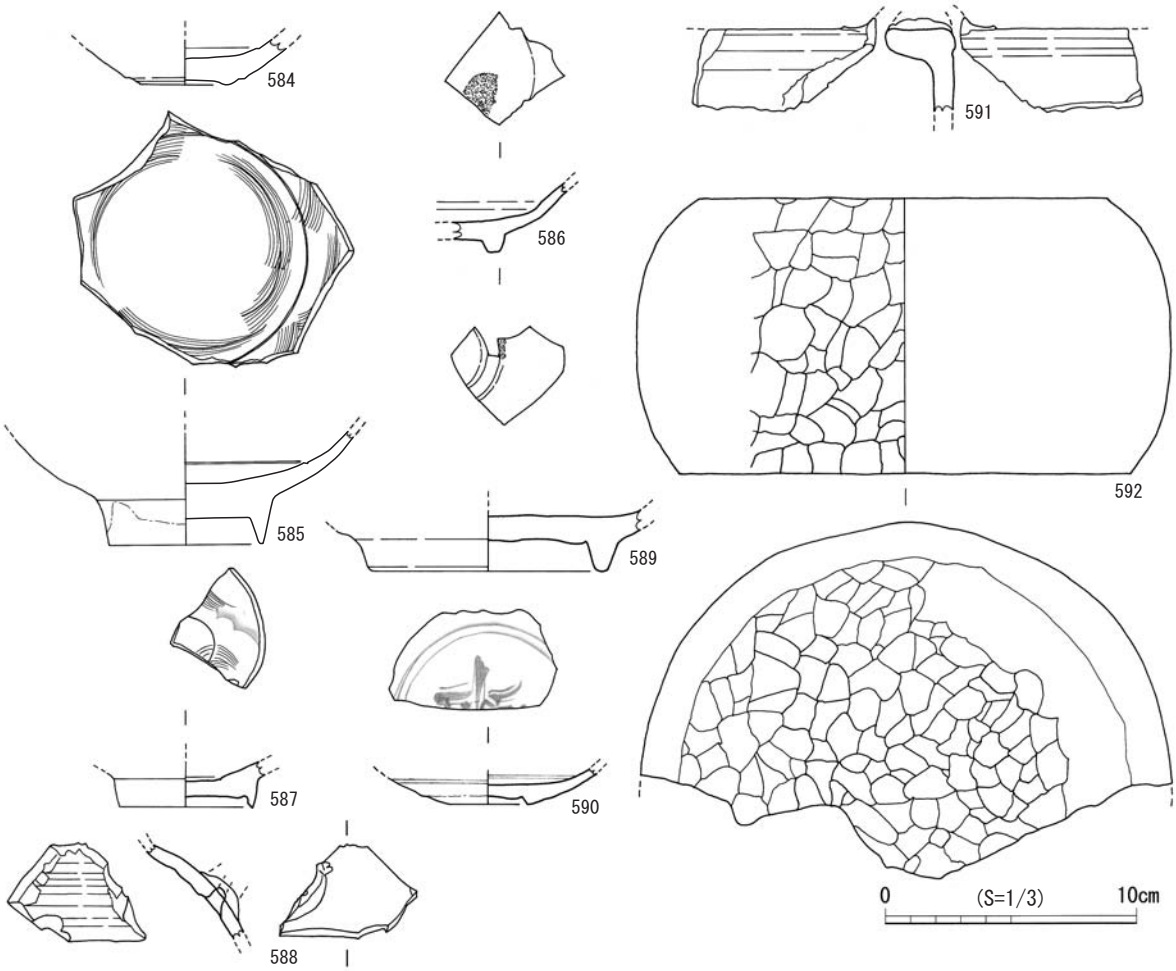
図版168　SD7検出状況　東から

**TAK201405調査区①区　SD7出土遺物(第168図、図版171、第122・123表)**

**584**は碁笥底の白磁小椀もしくは皿である。底部外面は露胎である。**585**は白磁椀Ⅴ類底部である。見込みと体部内面には櫛目文が施される。**586**は李朝の白磁椀で内面および高台に目跡が残る。**587**は青白磁椀底部である。高台内の削り込みは浅く

図版169　SD7完掘状況　西から

図版170　SD7完掘状況　西から




第168図　SD7出土遺物(S＝1/3)

露胎である。見込みは狭く体部内面に櫛目文が施される。**588**は越州窯系水注である。注口の基部で内面には強い水引痕が残る。精良で緻密な胎土にオリーブ色の釉が薄く掛かる。**589**は龍泉窯系青磁大皿の底部である。高台内に輪状の釉剥ぎが見られる。**590**は碁笥底の青花皿である。見込みには吉祥文字が描かれる。**591**は土師質の火鉢の口縁部である。口縁端部が内側に直角に折れ曲がる。**592**は緑泥片岩製で小型の五輪塔水輪である。種子はない。胴の表面は研磨が十分ではなく加工痕が残る。上面および下面は加工痕をそのまま残す。市内の大村館墓地から出土した室町後期と報告されている同型の水輪と、石材や調整等同じ状況を呈する(註4)。

図版171　SD7出土遺物

第122表　SD7出土　土器・磁器観察表

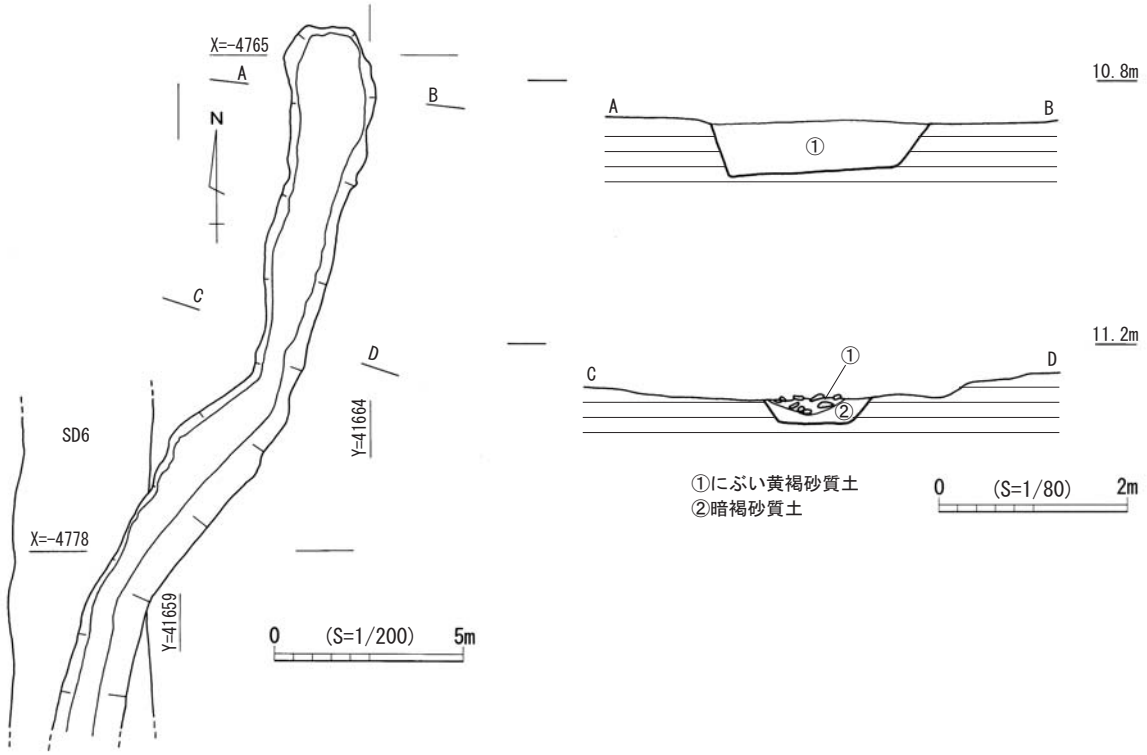
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 584 | 白磁　小椀もしくは皿 | 底部 | — | (1.7) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | 碁笥底 |
| 585 | 白磁　椀　V類 | 底部 | | (4.4) | 6.1 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 586 | 李朝白磁　椀 | 底部 | — | (2.8) | — | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 587 | 青白磁　椀 | 底部 | — | (1.7) | (5.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | |
| 588 | 越州窯系青磁　水注 | 基部 | — | (3.8) | — | — | — | オリーブ色 | オリーブ色 | 良好 | 精良 | |
| 589 | 龍泉窯系青磁　大皿 | 底部 | — | (2.4) | (9.1) | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 590 | 青花　皿 | 底部 | — | (2.4) | (3) | — | | 明青灰色 | 明青灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | 碁笥底 |
| 591 | 土師質　火鉢 | 口縁部 | (24.4) | (3.7) | — | — | — | 浅黄橙色 | 灰黄褐色 | 良好 | 長石　石英 | |

第123表　SD7出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 592 | 五輪塔　水輪 | 緑泥片岩 | 109 | 210 | 141 | 4880 | |

⑨ TAK201405調査区③区　SD 8(第169図、図版172)

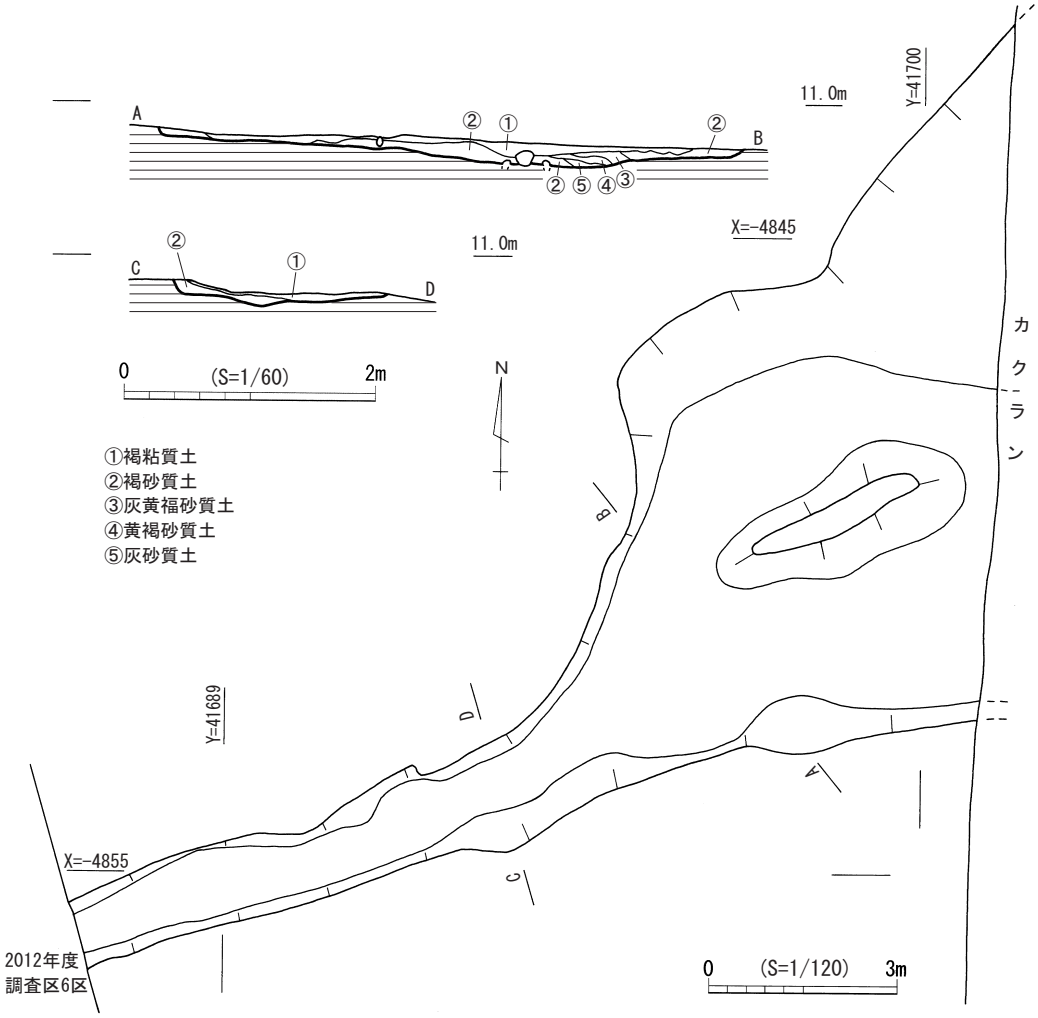
大調査区201405の小調査区③区7666グリッド・7664グリッド3層から検出した。長軸(北－南)20m、最大幅2.4m、深さ1.3m を測る。南側は SD6を切るがしだいに浅くなり、端部を確認することはできなかった。出土遺物無し。




第169図　SD8平・断面図(平面図 S＝1/200、断面図 S＝1/80)

図版172　SD8完掘状況　南から

⑩ TAK201405調査区②区　SD9（第170図、図版173）



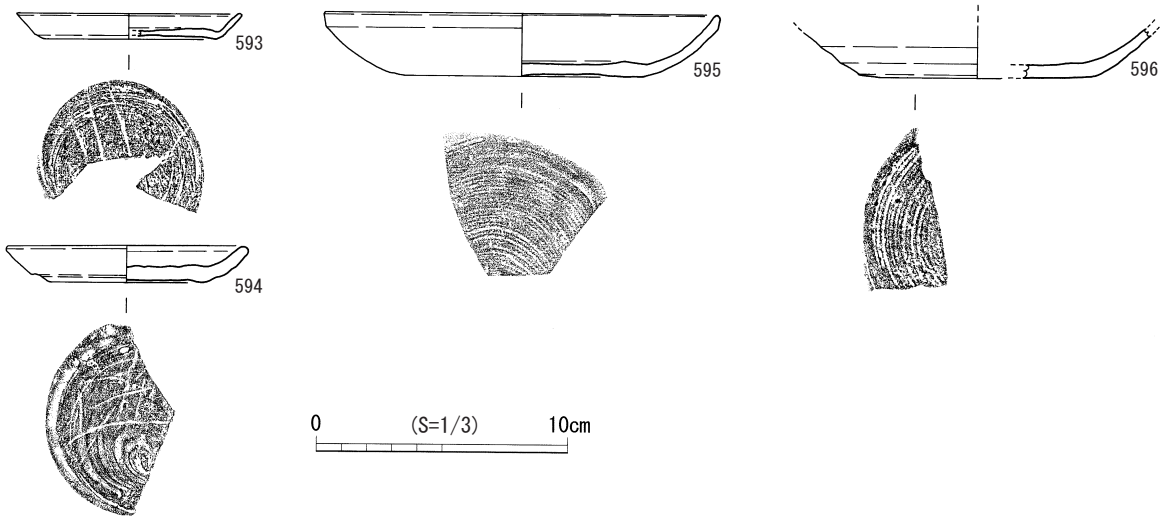

第170図　SD9平・断面図（平面図 S＝1/120、断面図 S＝1/60）

図版173　SD9完掘状況　西から

大調査区201405の小調査区②区8468グリッド2層から検出した。確認長(東－西)20.5m、確認幅7.5m～1.0m、深さ40cmを測る。東は幅が広く西は幅が狭い。また、西側へ行くほど浅くなる。東側は攪乱により消滅し、西側は2012年度調査区⑥区に続くが2018年度の調査では確認できていなかった。出土した遺物から遺構の年代は13世紀初頭と思われる。

### TAK201405調査区②区　SD9出土遺物(第171図、図版174、第124表)

**593・594**は土師器小皿である。いずれも切り離しは回転糸切りである。**595・596**は土師器杯である。いずれも切り離しは回転糸切りで、体部は内湾しながら立ち上がる。




第171図　SD9出土遺物(S＝1/3)

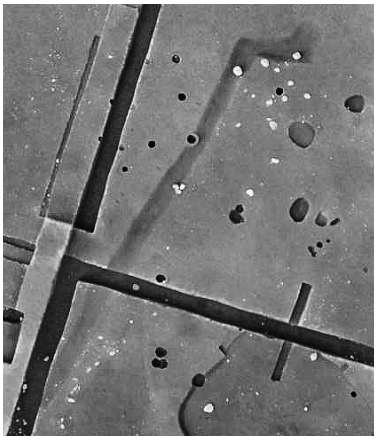
図版174　SD9出土遺物

第124表　SD9出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 593 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.7 | 1 | 6.8 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り |
| 594 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.2) | 1.4 | (6.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英　赤色粒子 | 回転糸切り |
| 595 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.4) | 2.5 | (9.2) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 雲母　角閃石 | 回転糸切り |
| 596 | 土師器　杯 | 底部～体部 | — | 2 | (9.3) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 雲母　石英　角閃石 | 回転糸切り |

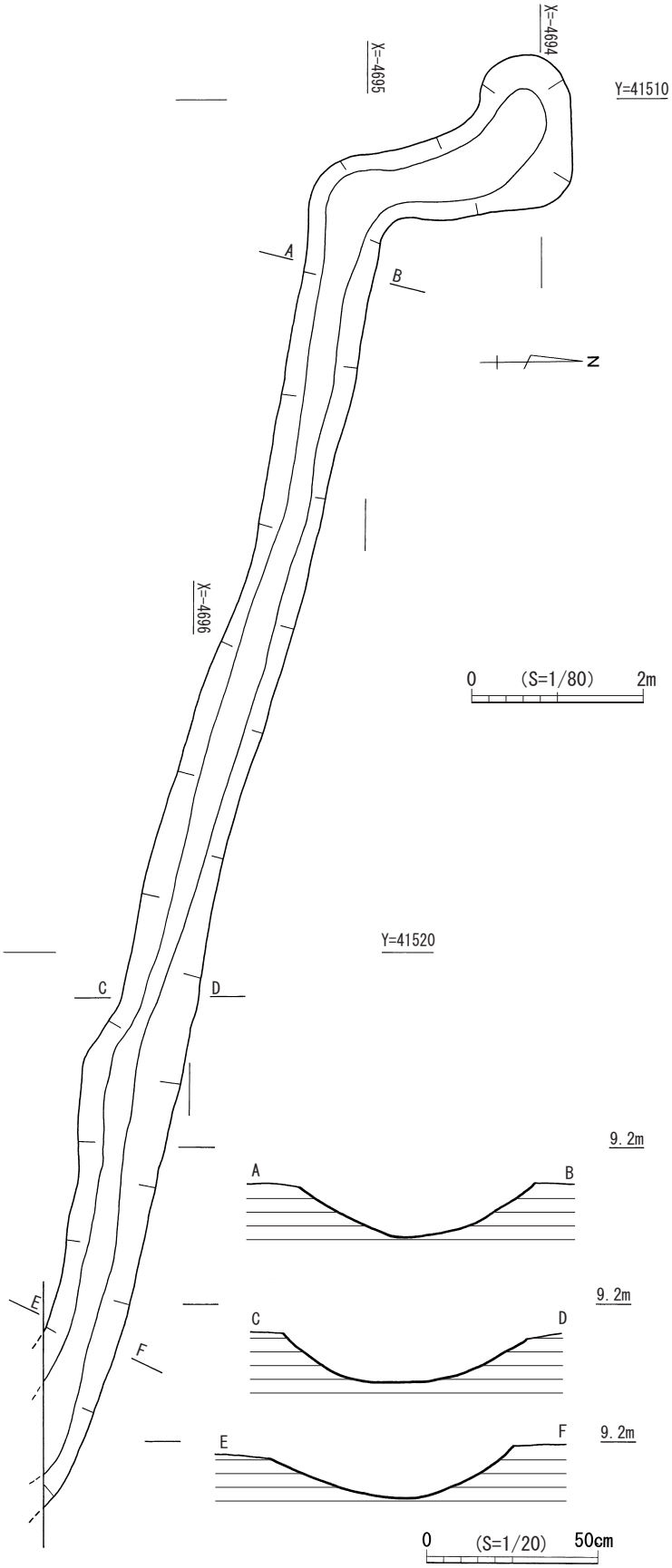
⑪ TAK201406調査区③区　SD5（第172図、図版175・176）

大調査区201406の小調査区③区6850グリッド・④区6852グリッド3層からプランを検出した。全長（北西－南東、北－南）31.2m、最大幅（北－南）1.1m、最深15cmで断面は皿状を呈する。北西から南東へ伸びた後、鍵型に北へ曲がる。出土した土器には時代幅が見られるが、国産の土器に混じり高麗無釉陶器も出土した。



図版175　SD5完掘状況　右が北

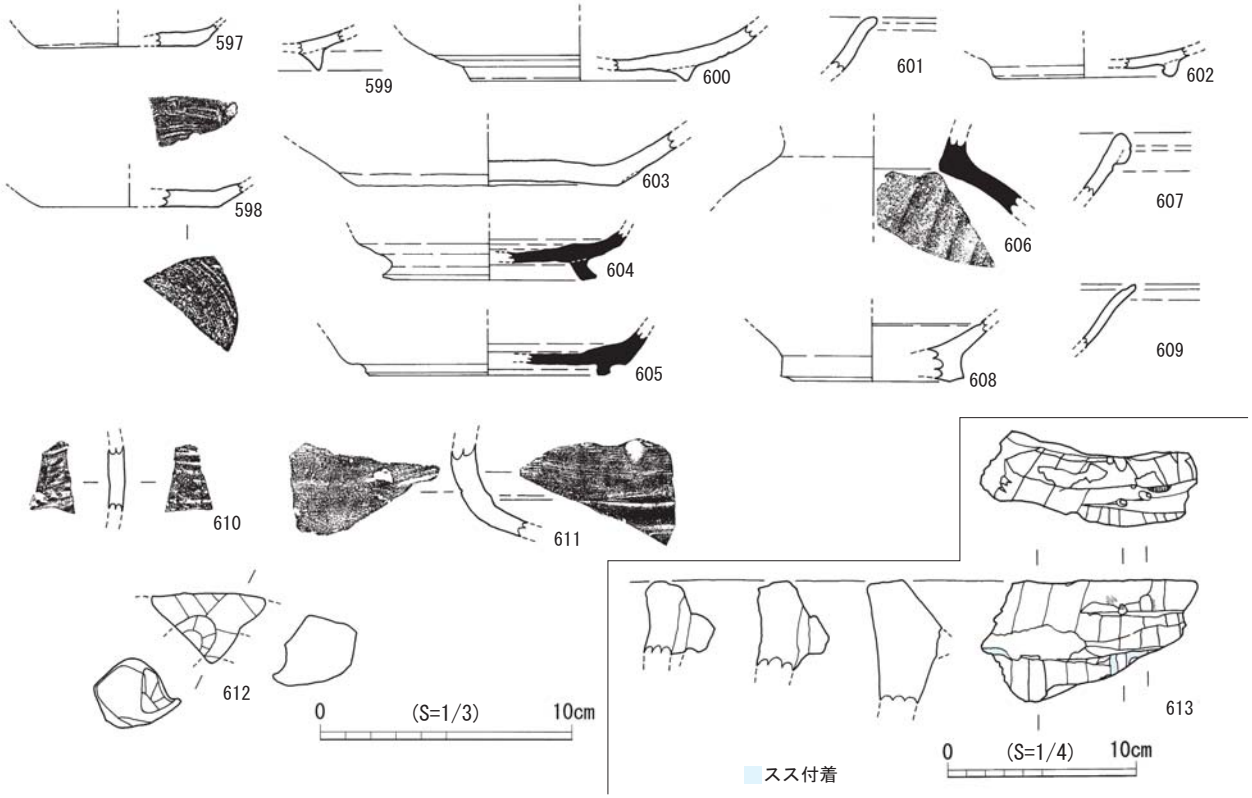
図版176　SD5土層堆積状況




第172図　SD5平・断面図（平面図 S＝1/80、断面図 S＝1/20）

TAK201406調査区③区　SD5出土遺物（第173図、図版177、第125～127表）

**597**は土師器小皿の底部片である。底径6cmと小ぶりである。**598**は土師器杯底部である。この杯も小ぶりで底径が7cmである。**599・600**は黒色土器A類底部である。**599**は短めの高台が、**600**は小さな三角形の高台が付く。**601**は外反する口縁部の黒色土器B類である。**602**は天草型瓦器椀の底部片である。高台端部が内側に折り込まれる。**603**は東播系の捏鉢底部片である。摩滅が激しい。**604・605**は須恵器杯底部である。**604**の高台は外方へ張り出し**605**の高台は断面四角形で底部端部よりもやや内側に貼り付けられる。**606**は須恵器胴壺の肩～頸部である。頸から肩への内面の変換点がほぼ直角に曲がり稜を成す。頸部内面には斜位の指ナデ痕が残る。武雄市北方町牧古窯産と思われる。**607**は白磁椀Ⅳ類口縁部、**608**は白磁椀Ⅳ類底部である。**609**は白磁皿Ⅸ類である。**610・611**は高麗無釉陶器壺である。**610**は硬質のもので体部片である。外面にはタタキの上からヨコナデが、内面には当て具痕を消す強いヨコナデが施される。**611**は軟質のもので頸部片である。外面は強いヨコナデで沈線状の段ができる。**612**は石鍋加工製品である。欠損のために全形は不明であるが、凹部分を作り出していることから容器状の製品であったと思われる。**613**は鍔が巡る石鍋の口縁部片である。左半分は鍔の上辺の段が削り出しておらず、そのまま鍔先端に至る。また、鍔が作り出されている右半分には、鍔の上辺から下辺へ穿孔が見られる。この遺構から出土した遺物は時代幅があるが、**597**と**598**の遺物の年代からSD5は13世紀後半には埋没したものと思われる。




第173図　SD5出土遺物（S＝1/3、石鍋S＝1/4）

図版177　SD5　出土遺物

第125表　SD5出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 597 | 土師器　小皿 | 底部 | — | (0.9) | (6.1) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 石英　長石 | 回転糸切り |
| 598 | 土師器　杯 | 底部 | — | (0.9) | (7) | — | — | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 回転糸切り |
| 599 | 黒色土器　A類　椀 | 底部 | — | (1.6) | — | — | — | 橙色 | 黒色 | 良好 | 長石　雲母 | |
| 600 | 黒色土器　A類　椀 | 底部～体部 | — | (2.2) | (8.4) | — | — | 橙色 | 黒色 | 良好 | 赤色粒子　雲母 | 回転ヘラケズリ |
| 601 | 黒色土器　B類　椀 | 口縁部 | — | (2.2) | — | — | — | 黒褐色 | 黒褐色 | 良好 | 石英　角閃石 | |
| 602 | 天草型瓦器　椀 | 底部 | — | (1.1) | (6.8) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　長石 | |
| 603 | 東播系　捏鉢 | 底部 | — | (2.1) | (10.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | やや不良 | 長石　角閃石 | 回転糸切り |
| 604 | 須恵器　杯 | 底部 | — | (1.9) | (7.4) | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 605 | 須恵器　杯 | 底部 | — | (1.8) | (9.2) | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 606 | 須恵器　長胴壺 | 肩～頸部 | — | (3.1) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 赤色粒子　長石 | 牧古窯産 |
| 607 | 白磁椀　Ⅳ類 | 口縁部 | — | (2.4) | — | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | — | |
| 608 | 白磁　碗　Ⅳ類 | 底部 | — | (2.5) | (6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | |
| 609 | 白磁　皿　Ⅸ類 | 口縁部 | — | (2.5) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | |
| 610 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.6) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | |
| 611 | 高麗無釉陶器　壺 | 頸部 | — | (3.6) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | |

第126表　SD5出土　滑石製品観察表

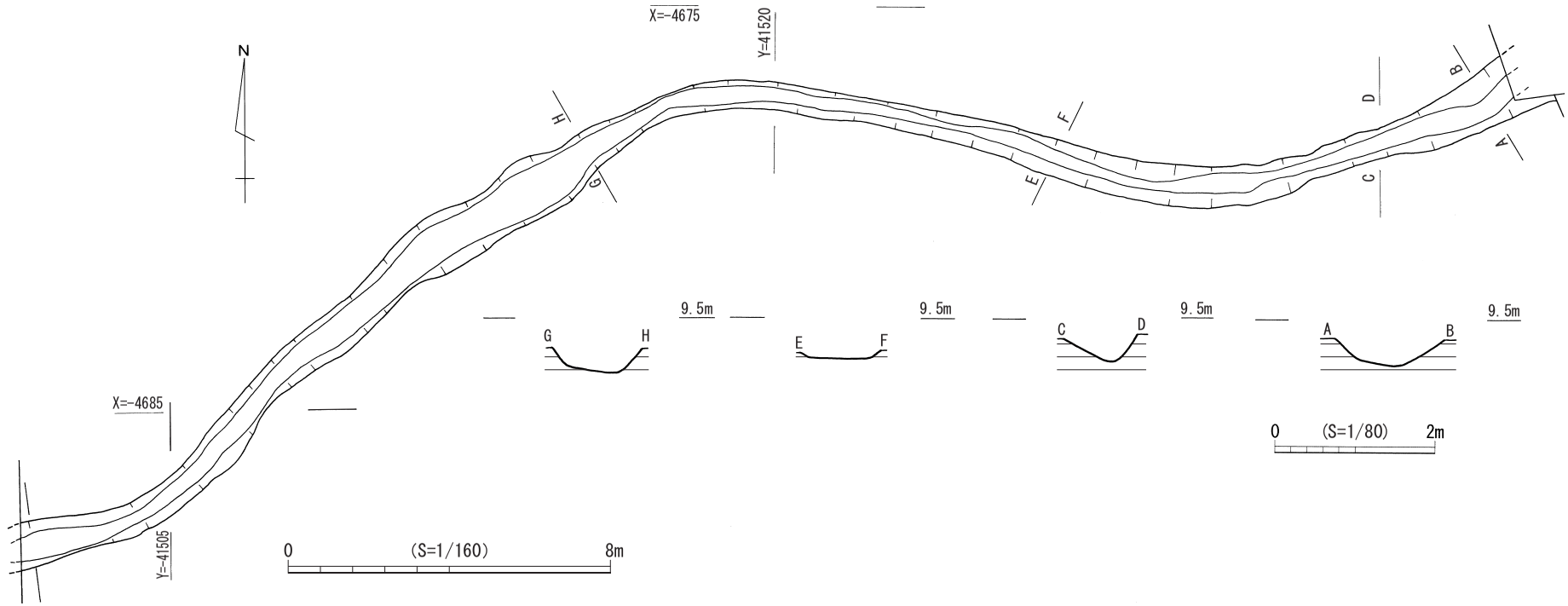
| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 612 | 容器状 | 44 | 28 | 26.5 | 177 | 灰白色 | |

第127表　SD5出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 613 | 鍔付石鍋 | 鍔部～口縁部 | — | (6.5) | — | — | — | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 鍔が一部削り出されていない　鍔部に2ヶ所の穿孔 |

### ⑫ TAK201406調査区③区　SD9(第174図、図版178・179)

大調査区201406の小調査区③区6850・6650グリッド・④区6652グリッド3層からプランを検出した。全長(北東 - 南西)31.2m、最大幅1.1m、最深15cmで断面は皿状を呈する。北東から南西へ緩やかに蛇行しながらほぼ同じ幅で流れる。北東隅部分は調査区外へ延び、南西隅部分は浅くなり遺構を確認できなかった。



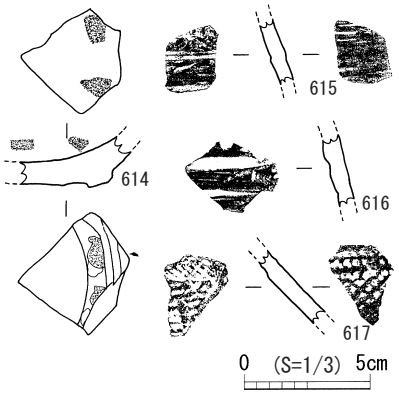

第174図　SD9平・断面図(平面図 S＝1/160、断面図 S＝1/80)

図版178　SD9　検出状況　東から

図版179　SD9　完掘状況　東から

TAK201406調査区③区　SD9出土遺物(第175図、図版180、第128表)

**614**は越州窯系青磁椀Ⅱ類底部片で、体部下半は露胎である。輪状高台の畳付と見込みに目跡が付く。**615**～**617**は高麗無釉陶器壺の胴部片である。**615**は内外面ともに製作の最終段階で回転ナデが施される。外面には格子目のタタキ文が内面には当て具痕がナデの下にわずかに残っている。**616**は外面のタタキ痕は残らない。内面は強い回転ナデ痕のために凹凸を作り出している。**617**は前の2点と比べるとやや軟質である。外面には格子目のタタキ文が、内面には当て具痕が残る。回転ナデは弱い。




第175図　SD9出土遺物(S＝1/3)

図版180　SD9　出土遺物

第128表　SD9出土　陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 614 | 越州窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 底部 | — | (2.1) | — | — | — | 灰黄色 | オリーブ黄色 | 良好 | 長石 | 見込みに砂目 |
| 615 | 高麗無釉陶器　壺 | 胴部 | — | (2.6) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | |
| 616 | 高麗無釉陶器　壺 | 胴部 | — | (2.8) | — | — | — | オリーブ黒色 | オリーブ黒色 | 良好 | 長石 | |
| 617 | 高麗無釉陶器　壺 | 胴部 | — | (2.5) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | |

註1　色調は日本色研事業株式会社『新配色カード1996』による

註2　佐世保市教委の松尾秀昭氏による教示である

註3　今回掲載した初期高麗青磁は(財)民俗文化遺産研究院　院長　韓盛旭氏に実見していただき生産地の教示を得た

註4　大野安生・安部憲毅　1998「第4章大村館墓地」『富の原遺跡　大村館墓地　下荒瀬山下墓地』大村市文化財調査報告第21集　大村市教育委員会

小型の水輪は、緑泥片岩製が多く種子を有するものが少ない。表面の研磨が少ない。という統計結果が出ている。

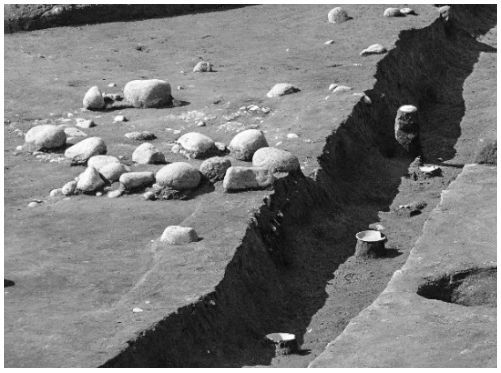
(4)道路状遺構(SF)

今回報告する道路状遺構は1基である。

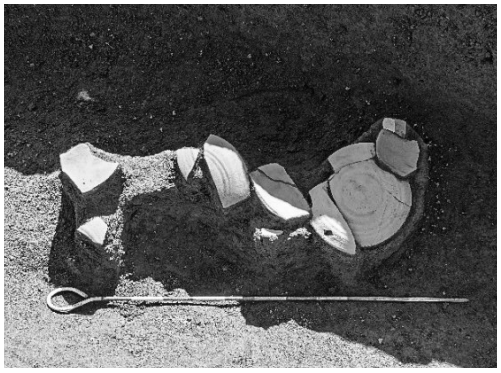
① TAK201202調査区⑥区　SF1(第176図、図版181～184)

大調査区201202の小調査区⑥区8466グリッド3層から、3～8cm大の小礫にわずかに土が混ざる硬化したプランを検出した。長軸(21m)、最大幅1.1mを測る。東へ伸びた後北西に曲がり調査区外へ伸びていくために、全長は確認長よりもさらに伸びる。構築は3層を断面U字状に掘削した後、礫が混ざらない砂質土を入れ、上面に混礫土を乗せたものと思われる。埋土中より豊前系土師器杯、滑石製容器状製品が配置された状況で出土した。出土した遺物から遺構の年代は12世紀後半と思われる。

図版181　SF1　検出状況　東から



図版182　SF1　遺物出土状況1　東から

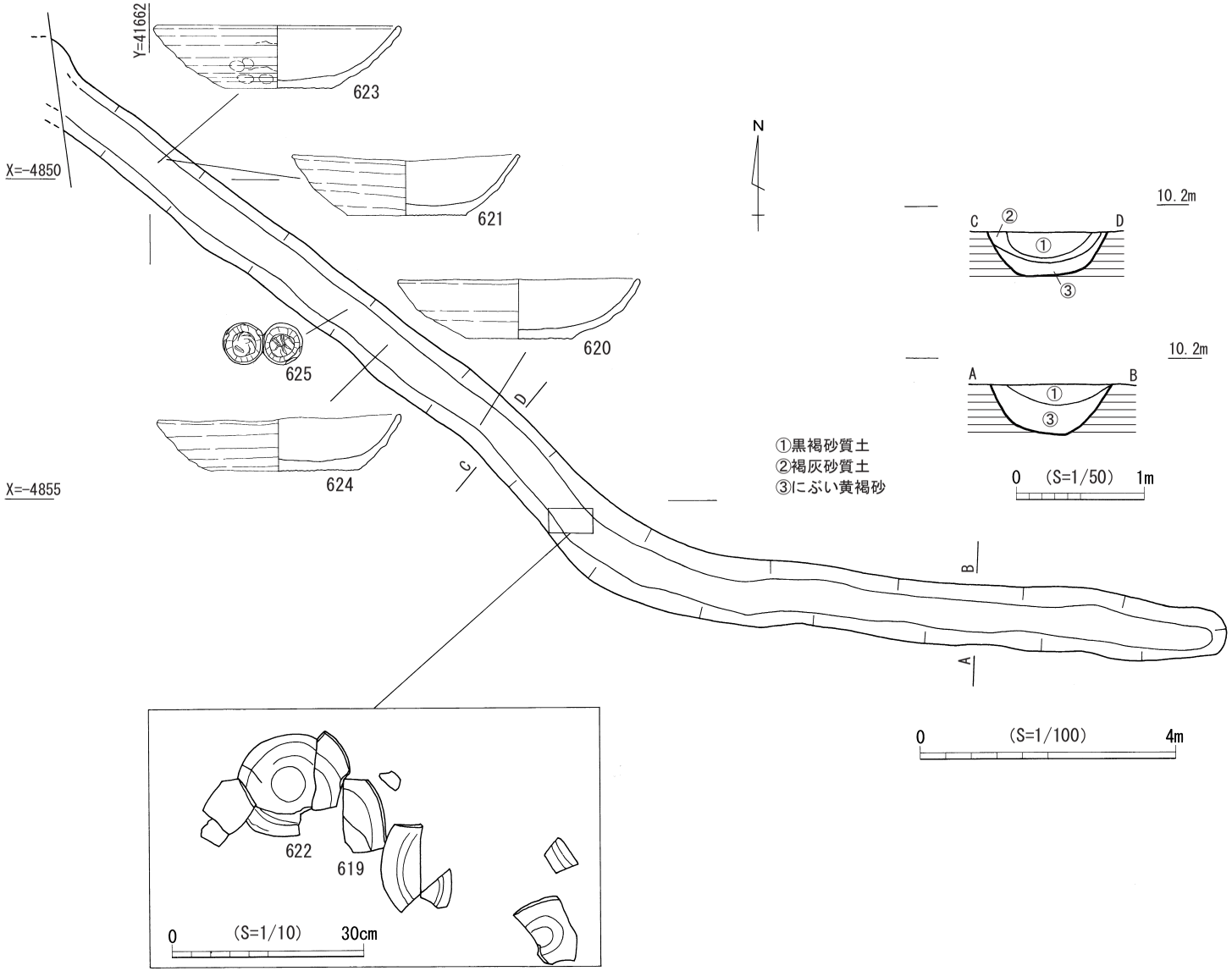


図版183　SF1　遺物出土状況2　北から

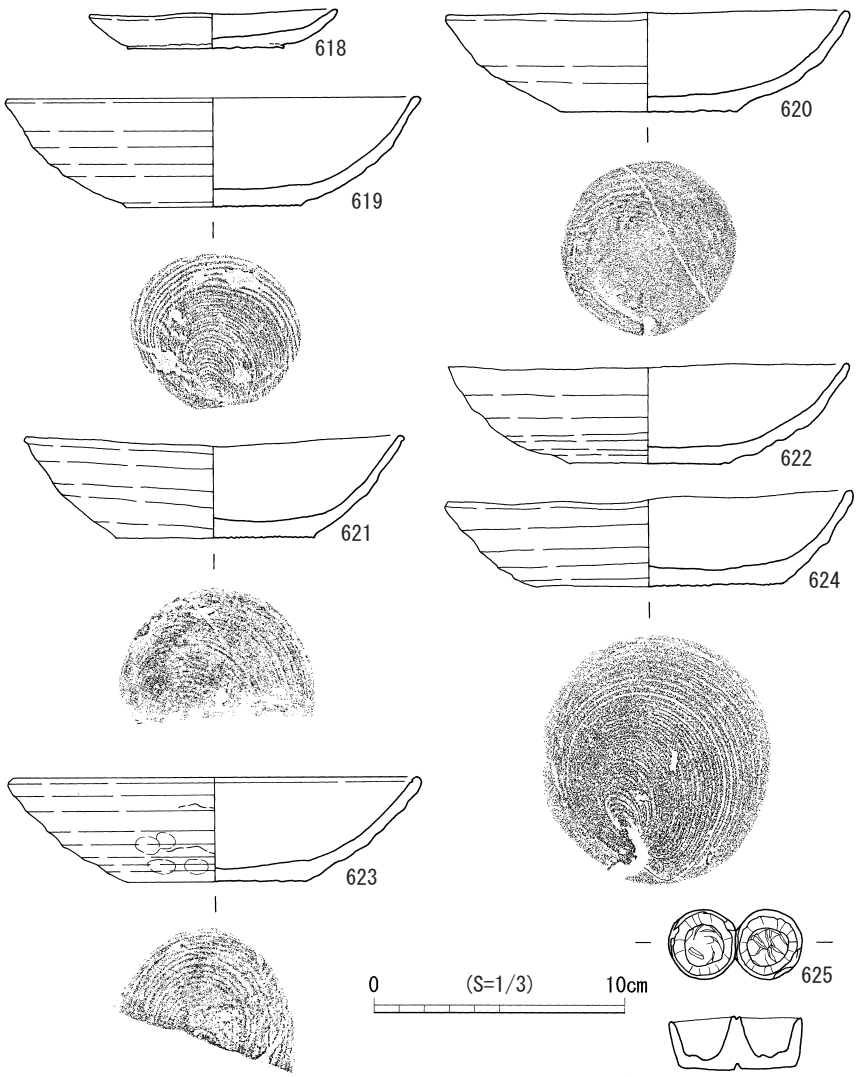
図版184　SF1　完掘状況東から

TAK201202調査区⑥区　SF1出土遺物(第177図、図版185、第129・130表)

**618**は豊前系の土師器小皿である。体部は緩やかに内湾しながら口縁部に至る。**619～624**はすべて豊前系土師器杯である。底径は6cm～7cm大で納まるが、**624**は9.6cmとかなり大きい。いずれも、切り離しは右回転の糸切りである。**625**は円筒状の小容器が連結した滑石製品である。内面底には削り痕が残るが、体部内面および外面は平滑に仕上がる。類例は博多遺跡群、大宰府史跡、箱崎遺跡等にある。




第176図　SF1平・断面図(平面図 S＝1/100、断面図 S＝1/50・拡大図 S＝1/10)




第177図　SF1出土遺物(S＝1/3)

第129表　SF1出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 618 | 豊前系土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9.8 | 1.5 | 6 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英 長石 角閃石 | 右回転糸切り |
| 619 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16.2) | 4.3 | (6.8) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 金雲母　石英 | 右回転糸切り |
| 620 | 豊前系土師器　杯 | ほぼ完形 | 15.6 | 3.8 | 7 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英 | 右回転糸切り |
| 621 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.7) | 4 | (7.8) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 雲母　石英 | 右回転糸切り |
| 622 | 豊前系土師器　杯 | ほぼ完形 | 15.6 | 3.7 | 6.2 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 雲母　石英 | 右回転糸切り |
| 623 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.8) | 4.1 | (7) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 雲母　石英　長石 | 右回転糸切り |
| 624 | 豊前系土師器　杯 | ほぼ完形 | 16 | 3.7 | 9.6 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英 | 右回転糸切り |

第130表　SF1出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 625 | 用途不明 | 52 | 27 | 4 | 31.8 | 灰白色 | 小型容器　内外面は平滑な仕上がり |

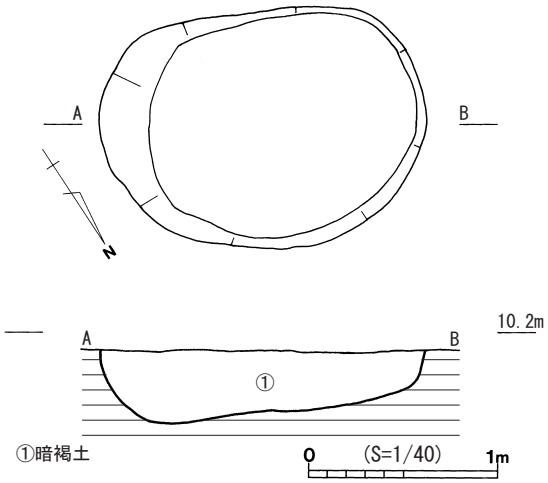
図版185　SF1　出土遺物

(5) 土坑(SK)

今回報告する土坑は9基である。

① TAK201202調査区⑥区　SK 106(第178図、図版186)

図版186　SK106　半截状況　南から

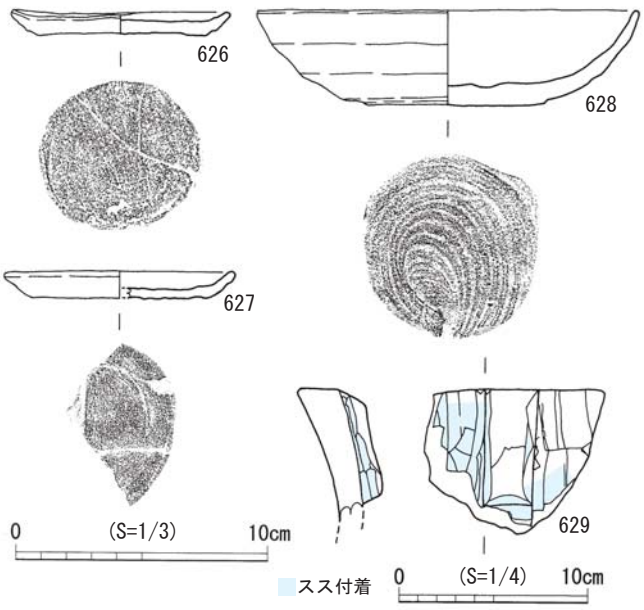



第178図　SK106平・断面図(S＝1/40)

大調査区201202の小調査区⑥区8226グリッド3層からプランを検出した。長軸1.7m、短軸1.3mの楕円形で深さは40cmである。土師器杯と小皿が出土した。

**TAK201202調査区⑥区　SK106出土遺物(第179図、図版187、第131・132表)**

**626・627**は土師器小皿である。いずれも切り離しは回転糸切りである。**628**は豊前系土師器杯である。体部は、小さな径の底部から内湾しながら口縁部に至る。切り離しは右回転糸切りである。これらの遺物から遺構の年代は12世紀後半～13世紀初頭と思われる。**629**は縦耳付石鍋の耳部である。外面に煤が付着する。




第179図　SK106出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

図版187　SK106　出土遺物

第131表　SK106出土　土器観察表

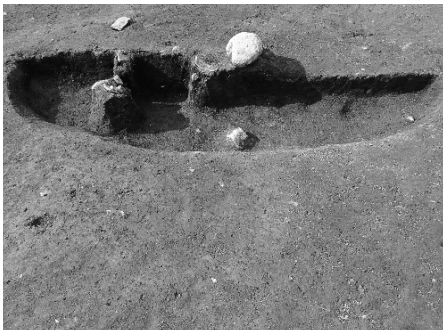
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 626 | 土師器　皿 | ほぼ完形 | 8.6 | 0.8 | 6.6 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 雲母 石英 角閃石 | 右回転糸切り　全体に歪み |
| 627 | 土師器　皿 | 底部～口縁部 | (9.0) | 1.1 | (6.2) | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 雲母 角閃石 長石 石英 精良 | 回転糸切り |
| 628 | 土師器　皿 | ほぼ完形 | 14.9 | 3.8 | 7.0 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 雲母 石英 角閃石 | 右回転糸切り |

第132表　SK106出土　滑石製石鍋観察表

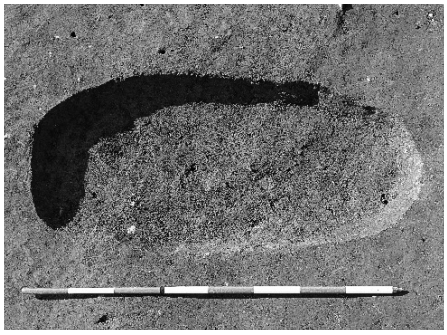
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 |
| 629 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | — | (7.7) | — | — | — | 灰黄褐色 | 灰白色 |

② TAK201202調査区⑥区　SK 107(第180図、図版188・189)

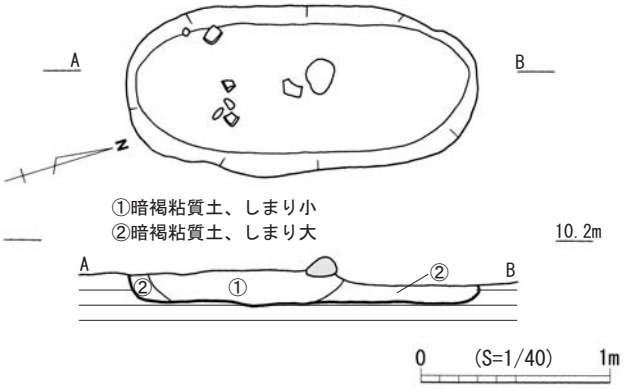
大調査区201202の小調査区⑥区8266グリッド3層からプランを検出した。長軸1.8m、短軸0.9m を測る楕円形で深さは15cmである。土師器杯と小皿が出土した。



図版188　SK107　半截状況　東から



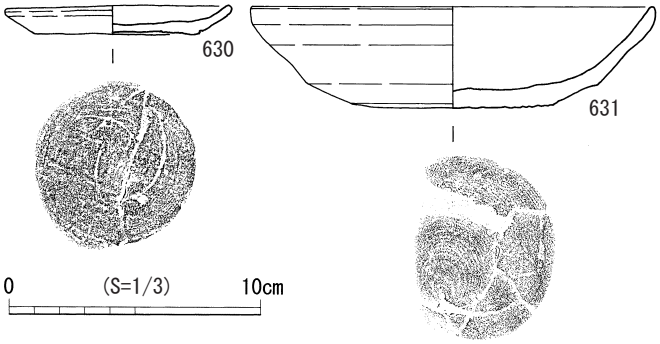
図版189　SK107　完掘状況　東から



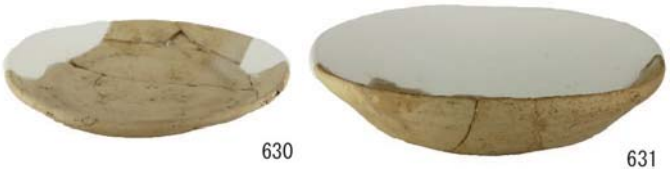

第180図　SK107平・断面図(S＝1/40)

TAK201202調査区⑥区　SK107出土遺物(第181図、図版190・第133表)

**630**は土師器小皿である。切り離しは右回転糸切りである。**631**は豊前系土師器杯である。体部は、底部から内湾しながら立ち上がった後外反し口縁部下で直立する。出土している他の豊前系土師器と比べるとやや形が異なる。切り離しは右回転糸切りである。これらの遺物から遺構の年代は12世紀後半～13世紀初頭と思われる。




第181図　SK107出土遺物(S＝1/3)




図版190　SK107　出土遺物

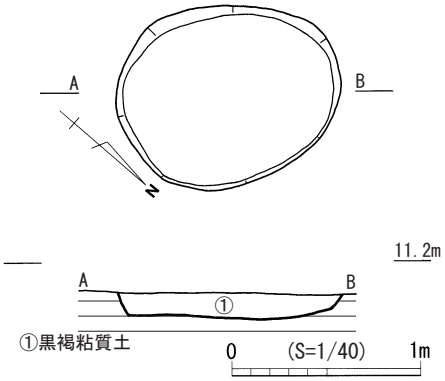
第133表　SK107出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 630 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 8.7 | 1.1 | 6.4 | — | — | 浅黄色 | 浅黄色 | 良好 | 石英　雲母　角閃石 |
| 631 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | 16 | 4 | 8.1 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　雲母 |

③ TAK201405調査区②区　SK2(第182図、図版191)

大調査区201405の小調査区②区8068グリッド2層からプランを検出した。長軸1.2m、短軸1.0mを測る楕円形で深さは12cmである。

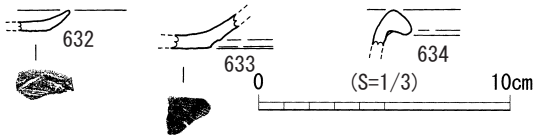
図版191　SK2　半截状況　北東から




第182図　SK2平・断面図(S＝1/40)

TAK201405調査区②区　SK2出土遺物(第183図、図版192、第134表)

**632**は土師器小皿である。底部には回転糸切り痕が残る。小片のために口径は出せなかった。**633**は土師器杯底部である。底部には回転糸切り痕が残る。小片のために口径は出せなかった。**634**は白磁四耳壺もしくは水注の口縁部である。口縁端部は鋭く屈曲する。これらの遺物からこの遺構の年代は12世紀後半～13世紀代に求められる。




第183図　SK2出土遺物(S＝1/3)

図版192　SK2　出土遺物

第134表　SK2出土　土器・磁器観察表

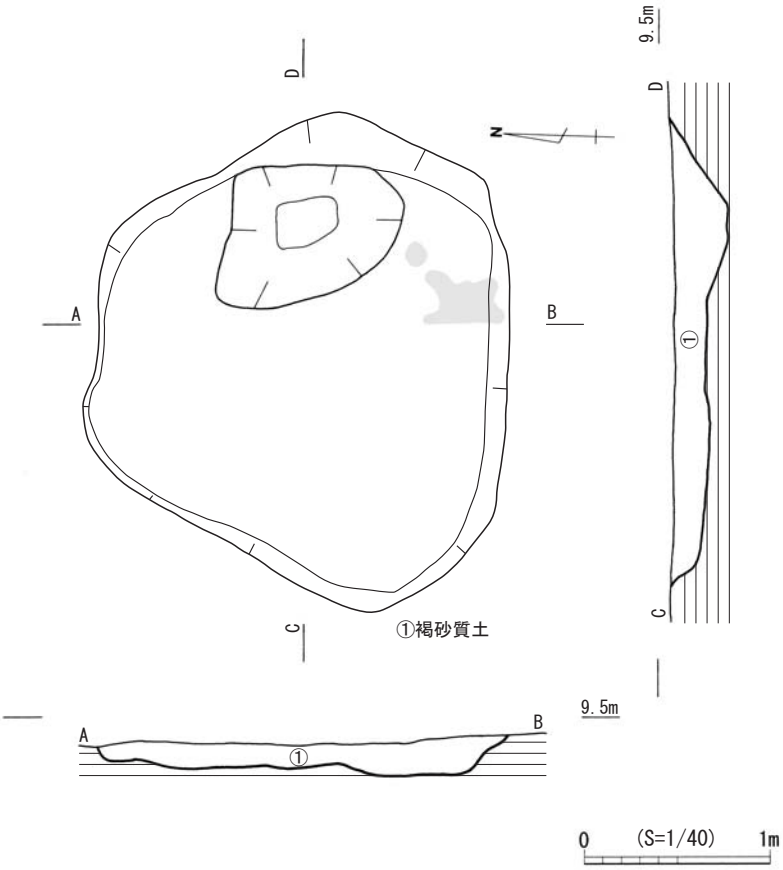
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 632 | 土師器　小皿 | 底部 | — | (0.8) | — | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 回転糸切り |
| 633 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.3) | — | — | — | にぶい黄褐色 | にぶい黄褐色 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り |
| 634 | 白磁　四耳壺もしくは水注 | 口縁部 | (12) | (1.4) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |

④ TAK201405調査区③区　SK4(第184図、図版193・194)

大調査区201405の小調査区③区7664・7666グリッド2層から検出した。長軸2.7m、短軸2.2mの不整形で深さ17cmを測る。埋土は褐色土の単層である。SD6(区画溝)を切っていることから、区画溝が埋没後掘削されている。

図版193　SK4　半截状況　北東から

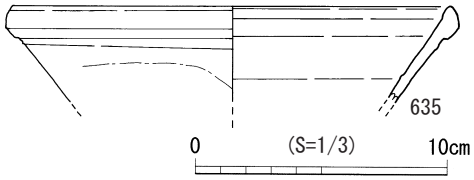
図版194　SK4　完掘状況　北東から




第184図　SK4平・断面図(S＝1/40)

TAK201405調査区③区　SK4出土遺物(第185図、図版195、第135表)

**635**は白磁椀Ⅳ類である。この遺物は遺構の年代よりも古い時代のものである。




第185図　SK4出土遺物(S＝1/3)

図版195　SK4　出土遺物

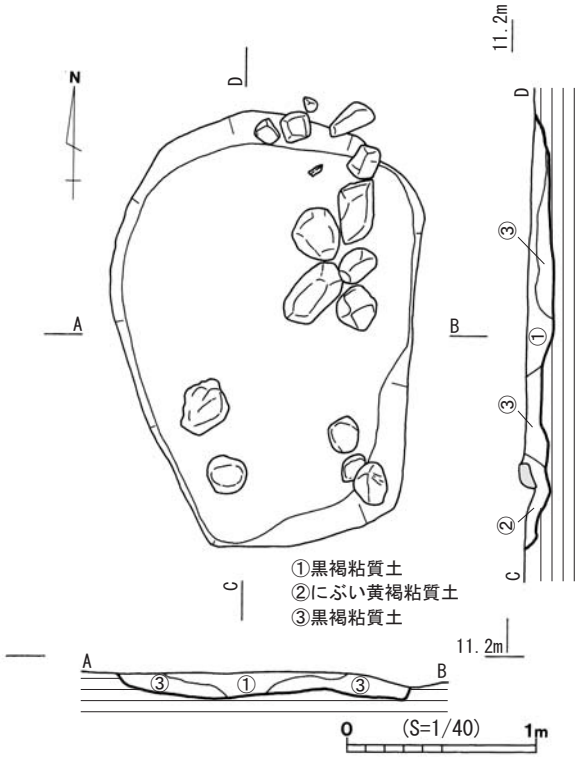
第135表　SK4出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 635 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 口縁部 | (17.2) | (3.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — |

⑤ TAK201405調査区②区　SK5(第186図、図版196)

大調査区201405の小調査区②区8068グリッド2層から検出した。長軸2.3m、短軸1.6mの楕円形で深さ12cmを測る。拳～人頭大の礫が混ざる。出土した遺物には時代の幅があり、最も新しいと思われる摺鉢から遺構の年代は14世紀代と思われる。

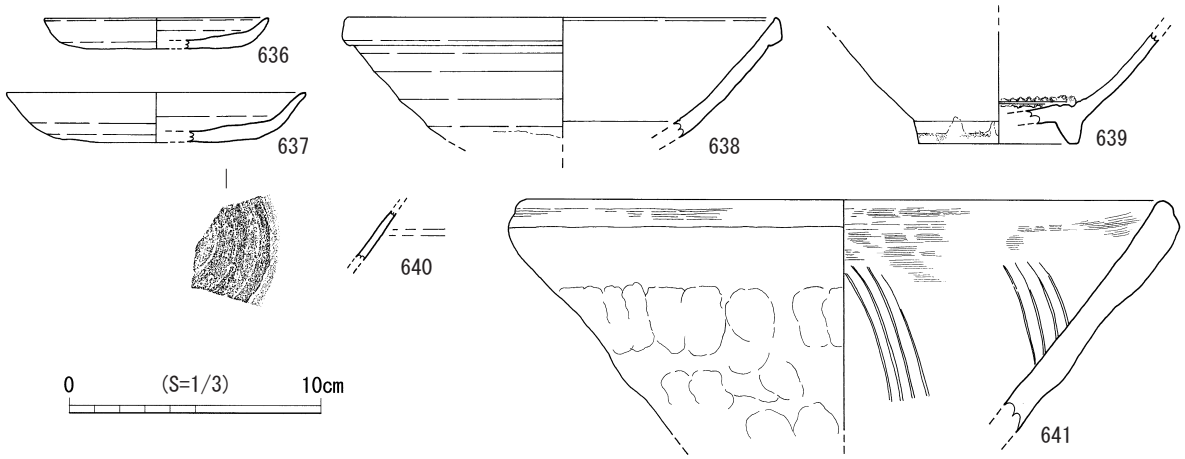
図版196　SK5　土層観察状況　南東から



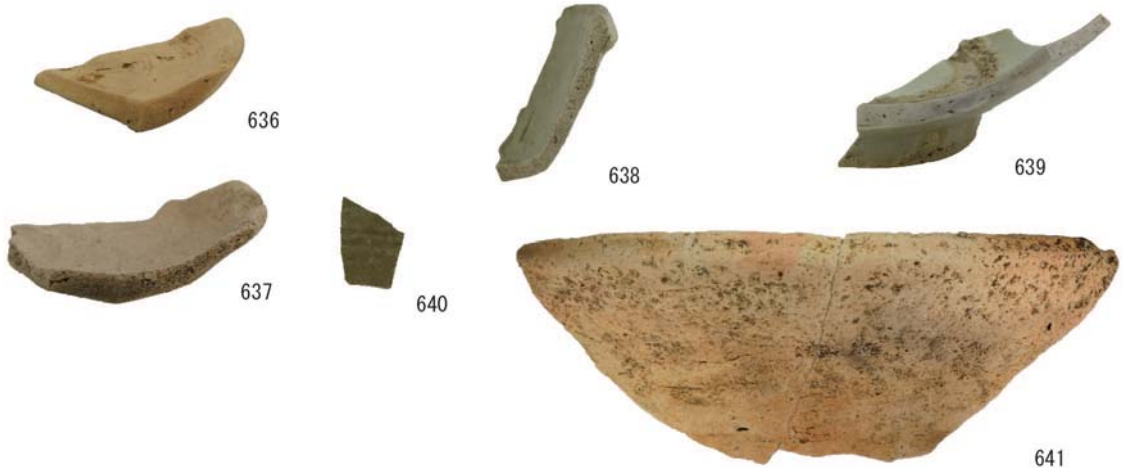

第186図　SK5平・断面図(S＝1/40)

TAK201405調査区②区　SK5出土遺物(第187図、図版197、第136表)

**636**は土師器小皿である。切り離しは回転ヘラ切りで、体部はわずかに内湾しながら口縁部に至る。11世紀代のものであろう。**637**は土師器杯である。丸みを持って立ち上がり、体部中位に変換点から直線的に口縁部に至る。切り離しは回転ヘラ切りである。11世紀前半のものと思われる。**638**は玉縁の口縁を持つ白磁椀Ⅳ類である。**639**は見込みの釉を輪状に掻き取る白磁椀Ⅷ類である。**640**は越州窯系青磁椀Ⅰ類の体部片である。**641**は土師質の摺鉢である。口唇部が上下二段に分かれ下部はナデられて段を持つもので、楠瀬氏のB類に属する(楠瀬2009)。内面には4条の摺目が入り、外面は指頭痕が見られる。




第187図　SK5出土遺物(S＝1/3)




図版197　SK5　出土遺物

第136表　SK5出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 636 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.8) | 1.2 | (5.6) | ― | ― | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 回転ヘラ切り |
| 637 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (11.8) | 2 | (7.9) | ― | ― | 白灰色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 回転ヘラ切り |
| 638 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 口縁部～体部 | (16.8) | (4.8) | ― | ― | ― | 白灰色 | 白灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 639 | 白磁　椀　Ⅶ類 | 底部～体部 | ― | (4.4) | (6.3) | ― | ― | 白灰色 | 白灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | |
| 640 | 越州窯系青磁　椀　Ⅰ類 | 体部 | ― | 1.9 | ― | ― | ― | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石　精良 | |
| 641 | 土師質　摺鉢 | 口縁部～体部 | (20.5) | (9.2) | ― | 指オサエ | 4条の摺目 | 浅黄橙色 | 淡橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | |

### ⑥ TAK201405調査区③区　SK6(第188図、図版198・199)

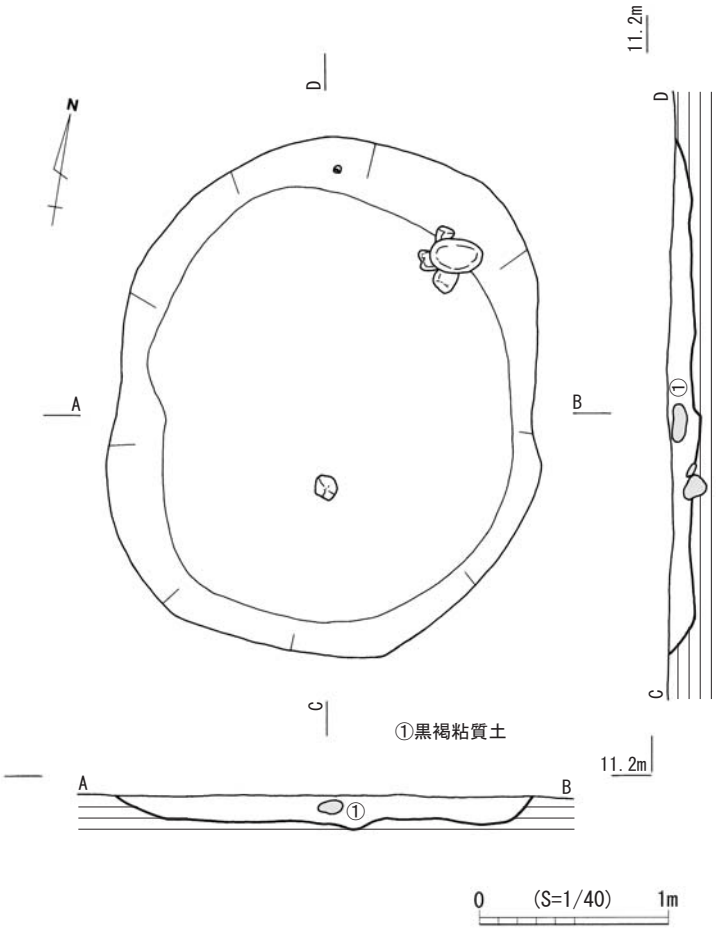
大調査区201405の小調査区③区8068グリッド2層から検出した。長軸2.7m、短軸2.2m の不整形で深さ17cm を測る。出土した遺物の年代からこの土坑は13世紀初頭と思われる。

図版198　SK6　土層観察状況　南東から

図版199　SK6　完掘状況　北から

TAK201405調査区③区　SK6出土遺物（第189図、図版200、第137表）

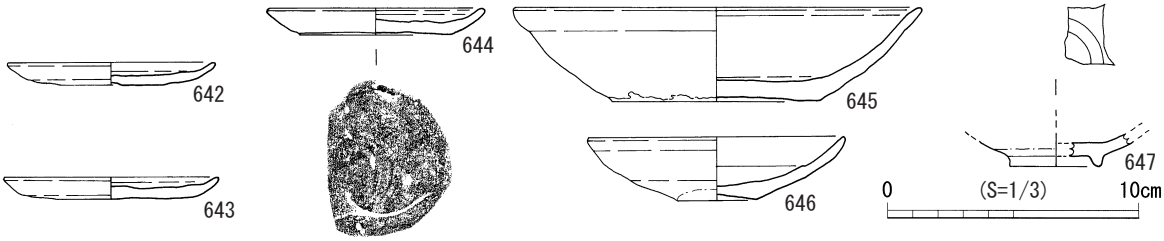
**642～644**は土師器小皿である。切り離しは回転糸切りで、器高が低く扁平である。13世紀初頭のものと思われる。**645**は土師器杯である。口径に比べ底径が小さく体部が開く形をしている。豊前系の土師器杯に似るが、竹松遺跡から出土する豊前系土師器杯の胎土は緻密で粉っぽいのに対し、当遺物の胎土は粗く赤色粒子が多く入る点や、体部に見られる強い引き上げによる凹凸が無い点で異なる。切り離しは回転糸切りで、切り離しの際の余分な粘土を撫で付けている。**646**は白磁皿Ⅵ類である。**647**は白磁皿Ⅲ類である。




第188図　SK6平・断面図（S＝1/40）

第137表　SK6出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 642 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.1) | 0.9 | 4 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 雲母　長石 | 回転糸切り |
| 643 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.4) | 0.9 | (4.4) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 回転糸切り |
| 644 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | 8.3 | 1.1 | 6 | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　赤色粒子 | 回転糸切り |
| 645 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.9) | 3.7 | (8.2) | — | — | 灰白色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石　赤色粒子 | 回転糸切り |
| 646 | 白磁　皿　Ⅵ類 | 底部～口縁部 | 10 | 2.5 | 3 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 647 | 白磁　皿　Ⅲ類 | 底部 | — | (1.3) | (3.6) | — | — | 明オリーブ色 | 明オリーブ色 | 良好 | — | |

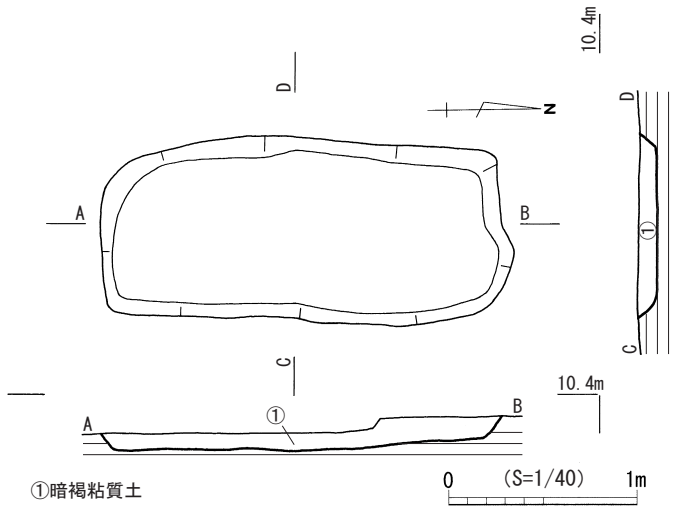



第189図　SK6出土遺物（S＝1/3）

図版200　SK6　出土遺物

⑦ TAK201405調査区③区　SK11（第190図、図版201）

大調査区201405の小調査区③区7866グリッド4層からプランを検出した。長軸1.1m、短軸0.5mの方形で深さは5cmを測る。遺物の出土はなかったが、区画溝と平行に並ぶことから同時代の遺構と思われる。北西5mには長軸の向きを同じにするSK19がある。

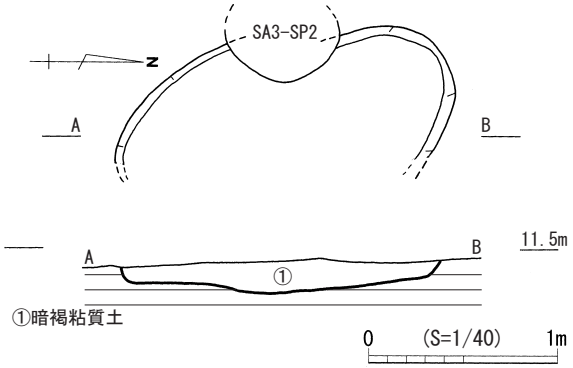



第190図　SK11平・断面図（S＝1/40）

図版201　SK11　完掘状況　東から

⑧ TAK201405調査区②区　SK12(第191図、図版202)

図版202　SK12　半截状況　東から

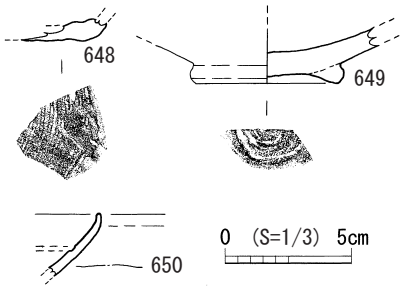



第191図　SK12平・断面図(S＝1/40)

大調査区201405の小調査区②区8068グリッド4層からプランを検出した。長軸1.8m、短軸(1.0m)の楕円形で深さは18cmを測る。土層観察用の畦から検出したが、東半分は遺構と気付かずに掘削を済ませていた。出土した遺物から遺構の年代は12世紀以降のものと考える。

TAK201405調査区②区　SK12出土遺物(第192図、図版203、第138表)

**648**は土師器杯である。切り離しは回転糸切りである。**649**は黒色土器B類椀底部である。分厚い高台が付く。**650**は白磁皿Ⅵ類である。




第192図　SK12出土遺物(S＝1/3)

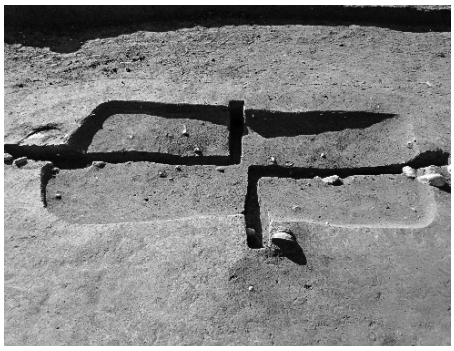
図版203　SK12　出土遺物

第138表　SK12出土　土器・磁器観察表

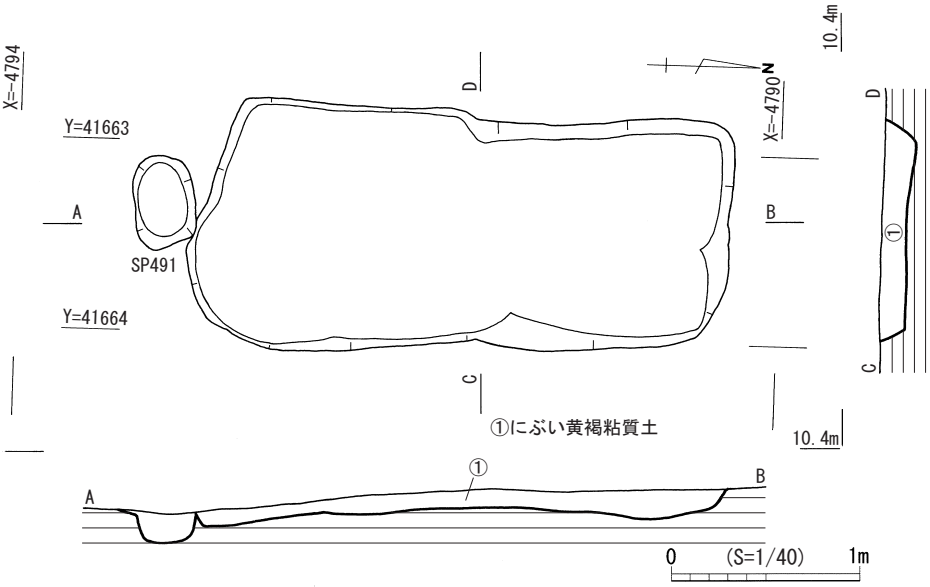
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 648 | 土師器　杯 | 底部 | — | (0.9) | — | — | — | にぶい灰黄褐色 | 灰黄褐色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 回転糸切り |
| 649 | 黒色土器B類　椀 | 底部 | — | (2.2) | (5.6) | — | — | 黒色 | 黒色 | 良好 | 長石　雲母 | |
| 650 | 白磁　皿　Ⅵ類 | 口縁部 | — | (2.5) | — | — | — | 灰黄色 | 灰黄色 | 良好 | 長石 | |

⑨ TAK201405調査区③区　SK19（第193図、図版204）

大調査区201405の小調査区③区7866グリッド3層からプランを検出した。長軸2.8m、短軸1.2mの方形で、深さは15cmを測る。遺物の出土はなかったが、区画溝と平行に並ぶことから同時代の遺構と思われる。南東5mには長軸の向きを同じくするSK11がある。



図版204　SK19　完掘状況　東から




第193図　SK19、SP491平・断面図（S＝1/40）

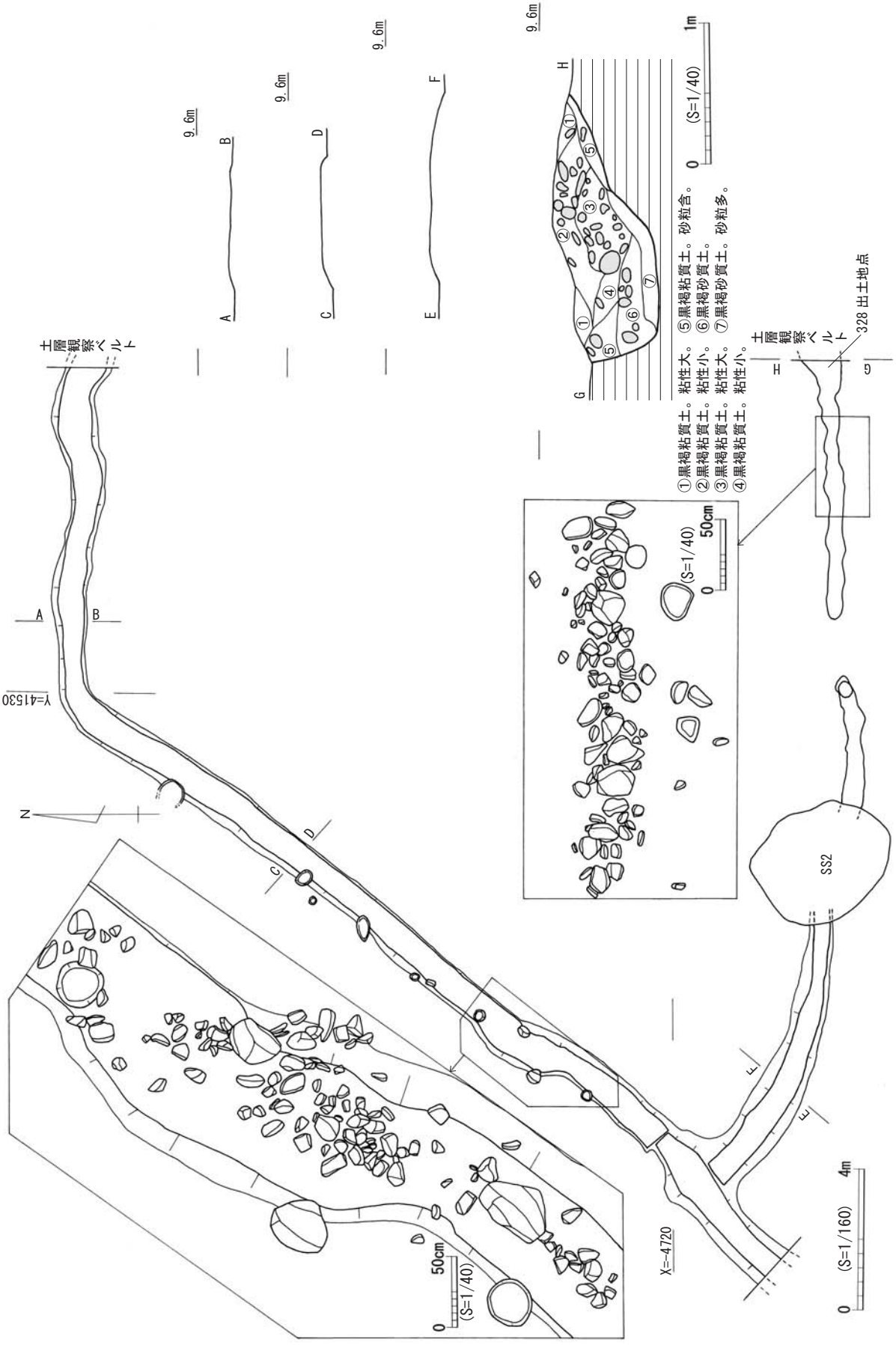

参考文献

楠瀬慶太　2009　「日用雑器類から見た中世博多の土器様相 - 調理具を中心として - 」『中近世土器の基礎研究22』日本中世土器研究会

(6)畦畔

今回報告する畦畔は2基である。

① TAK201406調査区②区　畦畔1(第194図、図版205～208)




第194図　畦畔1平・断面図(平面図S=1/160、断面図S=1/40、拡大部分S=1/40)

大調査区201406の小調査区②区7052・7050・7250・7252グリッド2層からプランを検出した。北東から南西に伸びる畦畔に、東から西へ伸びる畦畔2条が交わる。全長(北東－南西)25m、(東－西)9m、24m、最大幅1.2m、最大高25cm、深さ50cm を測る。壁際の断面の状況から、畦畔は溝を掘った後に拳～人頭大の礫が混ざる土を埋め込み構築したと考えられる。また、削平のため上部が削られており、本来は確認高よりも高い位置に畦畔の上端があったと思われる。壁際の断面図以外は現地での断面図の作成を行っておらず、図示したエレベーション図は記録したレベル及び写真から復元したものである。土師器杯片、青磁椀片が畦畔中より出土した。

図版205　畦畔1　北側部分検出状況　西から

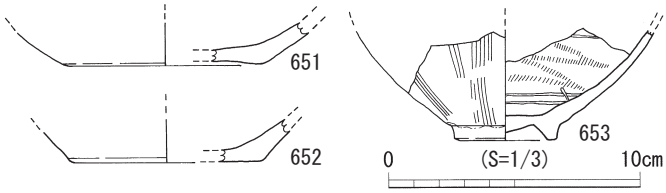
図版206　畦畔1　南側部分検出状況　西から

図版207　畦畔1　全景　左が北

図版208　畦畔1　遺物出土状況　西から

TAK201406調査区②区　畦畔1出土遺物(第195図、図版209、第139表)

**651・652**は土師器杯底部である。摩滅が激しく切り離しや調整は不明である。**653**は同安窯系青磁椀である。外面には縦の細かい櫛文を、内面には櫛による点描文が施される。この遺物から畦畔1は12世紀中頃～12世紀後半に構築されたと思われる。




第195図　畦畔1出土遺物(S＝1/3)

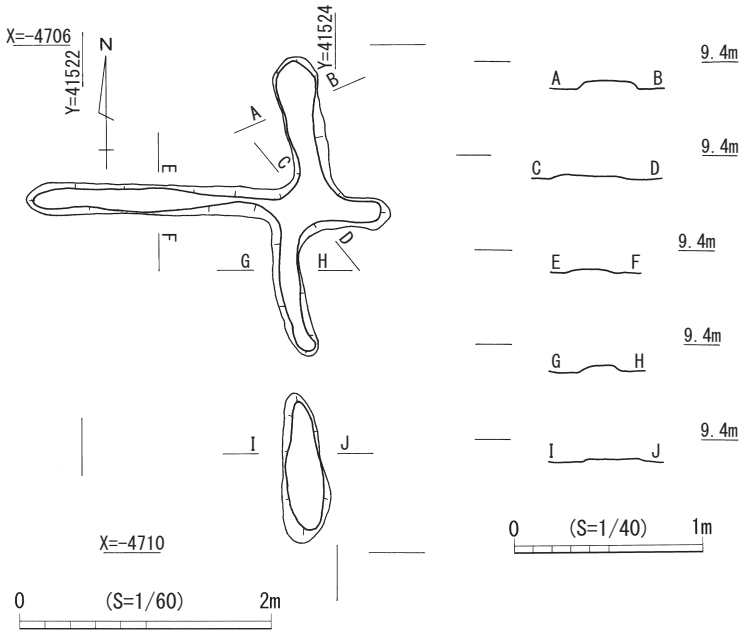
図版209　畦畔1　出土遺物

第139表　畦畔1出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 651 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.7) | (7.6) | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石 | |
| 652 | 土師器　杯 | 底部 | — | (1.6) | (7.4) | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 雲母 角閃石 褐色粒子 | 摩滅大 |
| 653 | 同安窯系青磁　椀　Ⅰ類 | 底部～胴部 | — | (4.4) | (3.8) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | — | |

② TAK201406調査区②区　畦畔3(第196図)

大調査区201406の小調査区②区7052グリッド2層中からプランを確認した。全長(北－南)2.2m、(東－西)2.9m、最大幅25cm、高さ8cmを測る。畦畔1に見られるような円礫の混ぜ込みはなかったが、硬化面が残っていたことで検出することができた。畦畔1と同じように削平のために上面が消失している。下部構造については断ち割りを行っておらず不明である。出土遺物は無いが、畦畔1と確認面が同じであることから畦畔1が構築された12世紀中頃～12世紀後半から大きく隔たることはないと思われる。



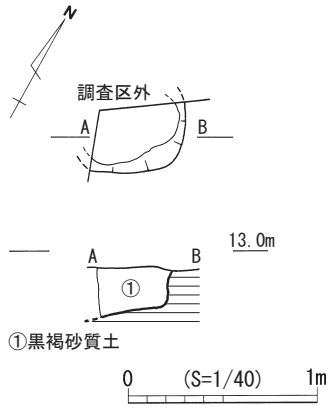

第196図　畦畔3平・断面図(S＝1/60、S＝1/40)

(7)柱穴(SP)

今回報告する柱穴は19基である。

① TAK201403調査区③区　SP61(第197図)

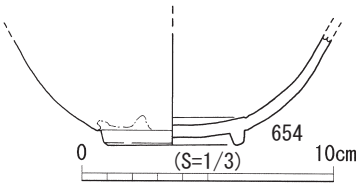
大調査区201403の小調査区③区1068グリッド2層からプランを検出した。西半分が調査区外へ延びる。確認長は、長径(45)m、短径65cm で、深さは30cm である。白磁椀が出土した。




第197図　SP61平・断面図
(S＝1/40)

TAK201403調査区③区　SP61出土遺物(第198図、図版210、第140表)

**654**は、白磁椀Ⅱ類底部である。全体が薄く仕上がる。11世紀後半～12世紀前半の所産である。




第198図　SP61出土遺物(S＝1/3)

図版210　SP61　出土遺物

第140表　SP61出土　磁器観察表

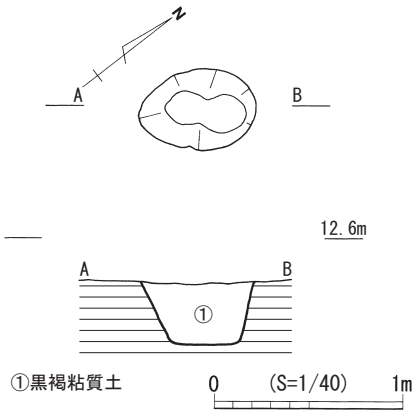
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 654 | 白磁　椀　Ⅱ類 | 底部～胴部 | — | (4.4) | (5) | — | — | 明オリーブ灰色 | 明オリーブ灰色 | 良好 | — |

② TAK201403調査区③区　SP136(第199図)

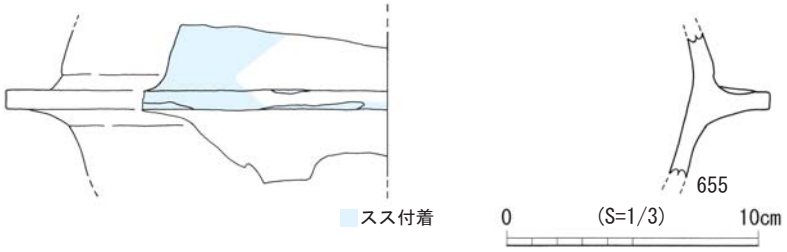
大調査区201403の小調査区③区1068グリッド2層からプランを検出した。長径60m、短径44cm で、深さは30cm である。土製羽釜が出土した。

TAK201403調査区③区　SP136出土遺物(第200図、図版211、第141表)

**655**は、土製羽釜の鍔部分である。精良な胎土で、鍔部は斜め上方に突出し、端部の調整はシャープである。鍔部より下には煤が付着する。




第199図　SP136平・断面図(S＝1/40)




第200図　SP136出土遺物(S＝1/3)

図版211　SP136　出土遺物

第141表　SP136出土　土器観察表

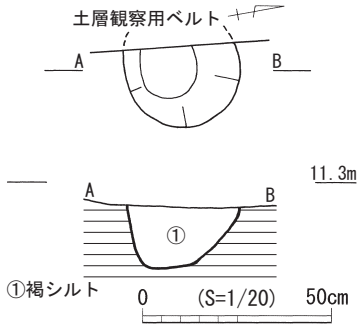
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 655 | 土師質羽釜 | 胴部 | — | (5.7) | — | — | — | にぶい黄橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | 外面に煤付着 |

③ TAK201404調査区A6東区　SP37(第201図)

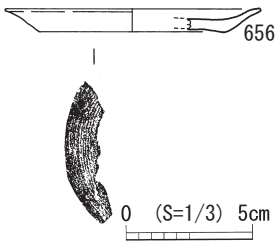
大調査区201404の小調査区 A6東区8672グリッド3層からプランを検出した。長径(22)cm、短径30cm の円形で、深さは15cm である。土師器小皿が出土した。西側部分がセクションベルトにかかっている。出土した遺物から12世紀後半の遺構と思われる。

TAK201404調査区A6東区　SP37出土遺物(第202図、図版212、第142表)

656は口縁部が外反する土師器小皿である。切り離しは右回転の糸切りである。




第201図　SP37平・断面図(S＝1/20)




第202図　SP37出土遺物(S＝1/3)

図版212　SP37　出土遺物

第142表　SP37出土　土器観察表

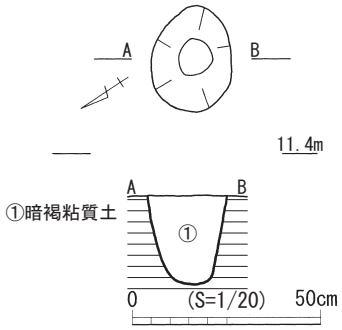
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 656 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.8) | 0.9 | (7.3) | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 回転糸切り |

④ TAK201405調査区②区　SP93(第203図)

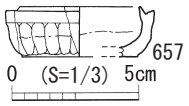
大調査区201405の小調査区②区8268グリッド2層からプランを検出した。長径28cm、短径20cm の楕円形で、深さは20m である。出土した土師器杯からこの遺構の年代は12世紀後半と思われる。

TAK201405調査区②区　SP93出土遺物(第204図、図版213、第143表)

**657**は青白磁合子の身である。型押しにより体部には蓮華文が施される。外面体部下半と内面体部上半は露胎である。焼成温度が低く胎土は軟質で発色もよくない。




第203図　SP93平・断面図(S＝1/20)




第204図　SP93出土遺物(S＝1/3)

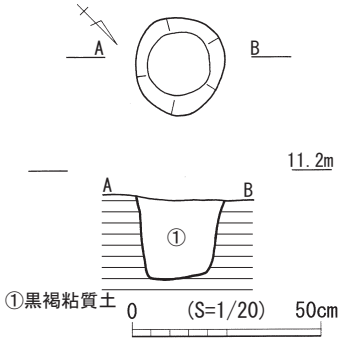
図版213　SP93　出土遺物

第143表　SP93出土　磁器観察表

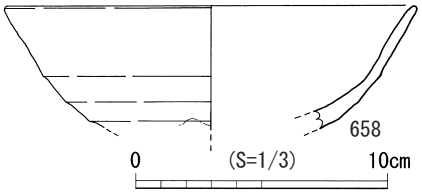
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 657 | 青白磁　合子(身) | 底部～口縁部 | (4.7) | 2 | (4.4) | ― | ― | 灰白色 | 灰白色 | やや不良 | 粗い |

⑤ TAK201405調査区②区　SP169(第205図)

大調査区201405の小調査区②区8068グリッド3層から検出した。長径26cm、短径24cmの円形で深さ20cmを測る。出土した白磁椀からこの遺構の年代は11世紀後半～12世紀中頃と思われる。




第205図　SP169平・断面図(S＝1/20)




第206図　SP169出土遺物

図版214　SP169出土遺物

TAK201405調査区②区　SP169出土遺物(第206図、図版214、第144表)

**658**は白磁椀Ⅱ類である。丸みを持って立ち上がった体部は直線的に口縁部に至る。体部下半は露胎である。

第144表　SP169出土　磁器観察表

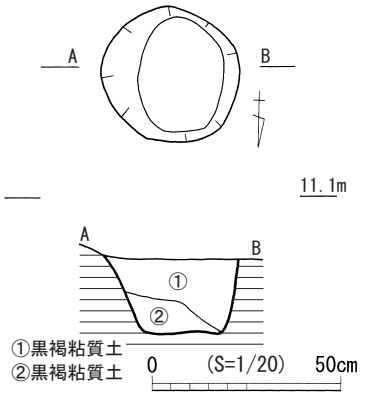
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 658 | 白磁　椀　Ⅱ類 | 口縁部～底部 | (16) | (4.8) | ― | ― | ― | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 |

⑥ TAK201405調査区①区　SP228(第207図)

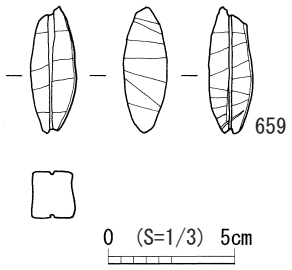
大調査区201405の小調査区①区8470グリッド4層から検出した。径36cmの円形で深さ19cmを測る。

TAK201405調査区①区　SP228出土遺物（第208図、図版215、第145表）

**659**は滑石製の錘である。断面は方形で上下端部はすぼまる。長軸方向に溝が1条巡る。赤変していることから、石鍋の加工製品と思われる。




第207図　SP228平・断面図（S＝1/20）




第208図　SP228出土遺物（S＝1/3）

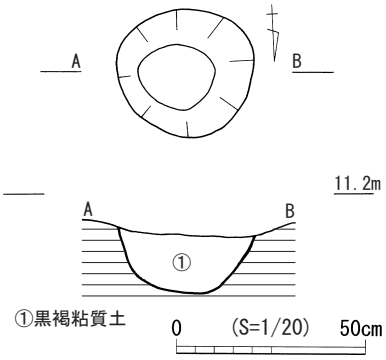
図版215　SP228　出土遺物

第145表　SP228出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 659 | 錘 | 70 | 17 | 18 | 25 | 黄灰褐色 | 完形 |

⑦ TAK201405調査区②区　SP269（第209図）

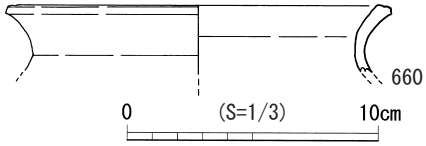
大調査区201405の小調査区②区8268グリッド3層から検出した。長径36cm、短径34cm の円形で深さ15cm を測る。




第209図　SP269平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区②区　SP269出土遺物（第210図、図版216、第146表）

**660**は高麗無釉陶器の小壺口縁部である。胎土の表裏外面は青灰色で、それに挟まれた器肉中心部は小豆色でマーブル状を呈する。硬質に焼きあがっている。




第210図　SP269出土遺物（S＝1/3）

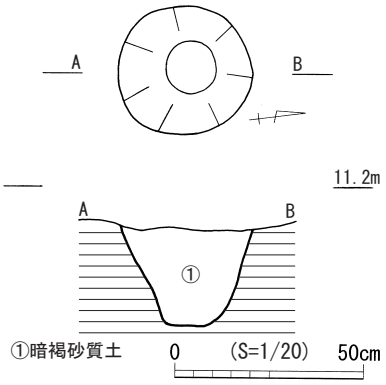
図版216　SP269　出土遺物

第146表　SP269出土　陶器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 660 | 高麗無釉陶器　小壺 | 口縁部 | (13.9) | (2.6) | — | — | — | 青灰色 | 青灰色 | 良好 | 精良 |

⑧ TAK201405調査区②区　SP282（第211図）

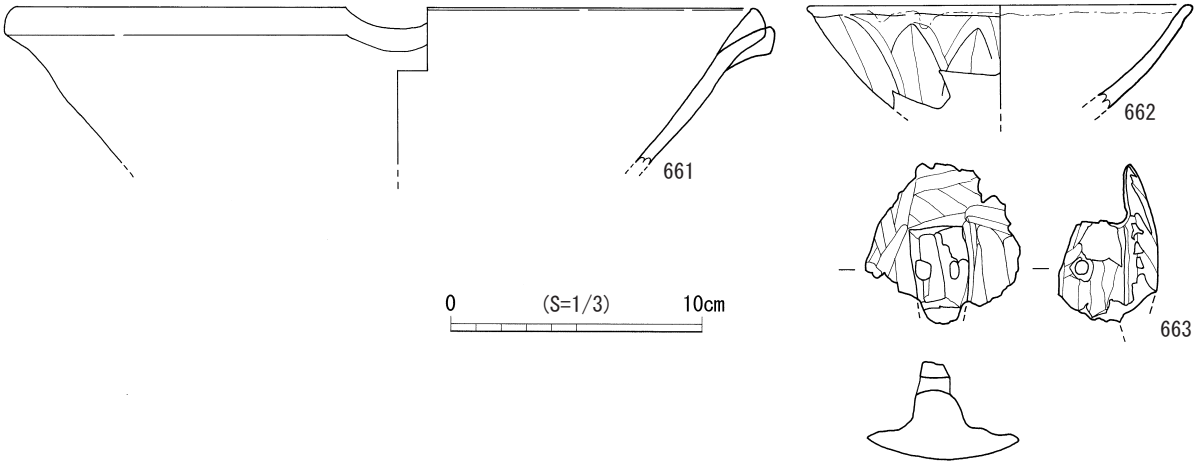
大調査区201405の小調査区②区8268グリッド2層から検出した。径35cmの円形で深さ25cmを測る。出土した遺物からこの遺構の年代は13世紀前半から中頃と思われる。




第211図　SP282平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区②区　SP282出土遺物（第212図、図版217、第147・148表）

**661**は鉢の片口部分である。口縁部は外方に引き上げられ断面三角形で肥厚する。13世紀前半～中頃のものと思われる。**662**は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。外面に鎬蓮弁文が施される。釉が溶けきっていない。**663**は滑石製の石鍋補修具である。下半が欠損している。前面に「す」が入り脆弱である。器壁部上面が凹んでいることから体部外面から挿入したものと思われる。




第212図　SP282出土遺物（S＝1/3）

図版217　SP282　出土遺物

第147表　SP282出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 661 | 東播系　捏鉢 | (片口)口縁部 | (29) | (6.2) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | やや不良 | 長石　石英 | |
| 662 | 龍泉窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 口縁部～体部 | (14.8) | (4.1) | — | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | やや不良 | — | 鎬蓮弁文 |

第148表　SP282出土　滑石製石鍋補修具観察表

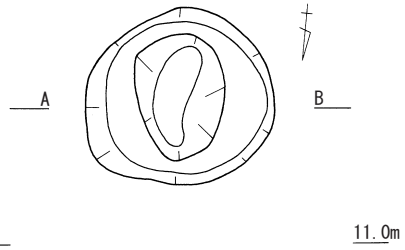
| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | | |
| 663 | 63 | 61 | 13 | 40 | 25 | 26 | 60 | 穿孔有 |

⑨ TAK201405調査区①区　SP303(第213図)

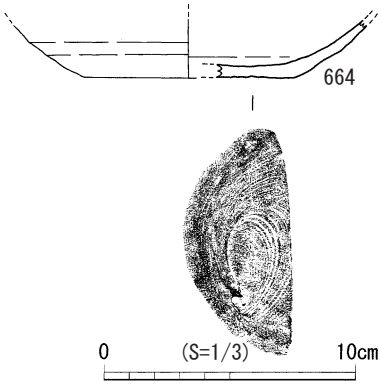
大調査区201405の小調査区①区7870グリッド2層から検出した。長径50cm、短径46cm の円形で深さ42cm を測る。段をもち柱痕が残る。出土した遺物から12世紀後半の遺構と思われる。

TAK201405調査区①区　SP303出土遺物(第214図、図版218、第149表)

664は豊前系土師器杯の底部である。切り離しは右回転の糸切りで胎土は精良である。内面に煤が残る。




第213図　SP303平・断面図(S＝1/20)




第214図　SP303出土遺物(S＝1/3)

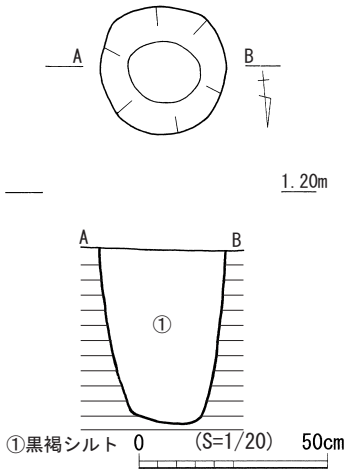
図版218　SP303　出土遺物

第149表　SP303出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 664 | 豊前系土師器　椀 | 底部～体部 | — | (2.3) | (8.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | 右回転糸切り |

⑩ TAK201405調査区①区　SP319（第215図）

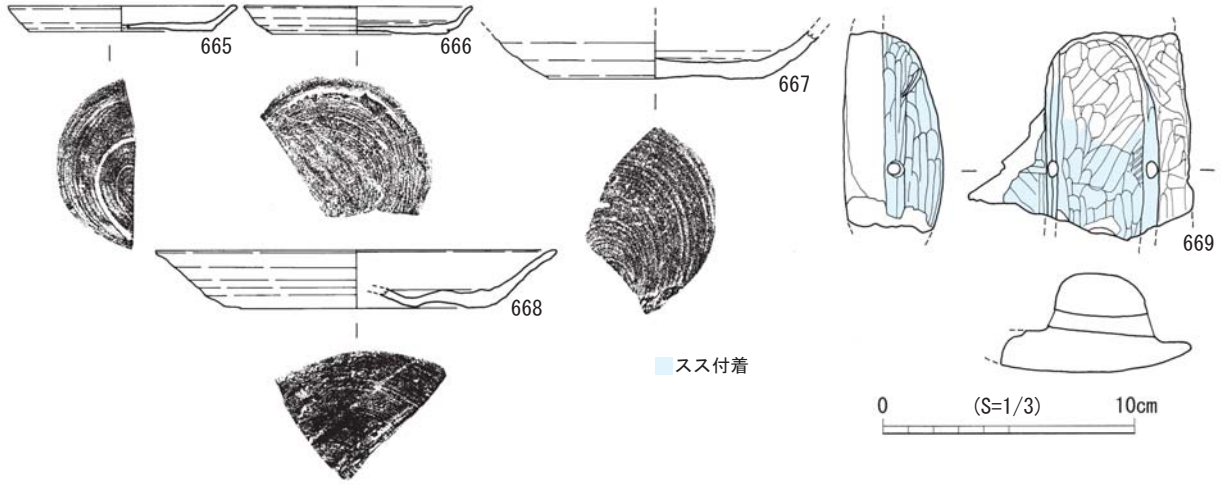
大調査区201405の小調査区①区8070グリッド4層から検出した。径34cmの円形で深さ45cmを測る。出土した土師器杯からこの遺構の年代は12世紀後半と思われる。




第215図　SP319平・断面図（S＝1/20）

TAK201405①区　SP319出土遺物（第216図、図版219、第150・151表）

**665・666**は土師器小皿である。切り離しは右回転の糸切りである。**665**の体部は直線的に口縁部に至る。**666**の体部は口縁部下でわずかに外反する。板状圧痕が底部に残る。**667・668**は土師器杯である。切り離しは右回転の糸切りである。**668**は板状圧痕が強く付き底部断面が波打つ。**669**は縦耳付き石鍋の耳部分を利用した大型の補修具である。右側縁は製作時の端部が残る。耳部に横位の穿孔を行う。器壁面上部が凸状を呈することから、この補修具は内側から挿入されたものと思われる。挿入部に煤が付着する。




第216図　SP 319出土遺物（S＝1/3）

図版219　SP319　出土遺物

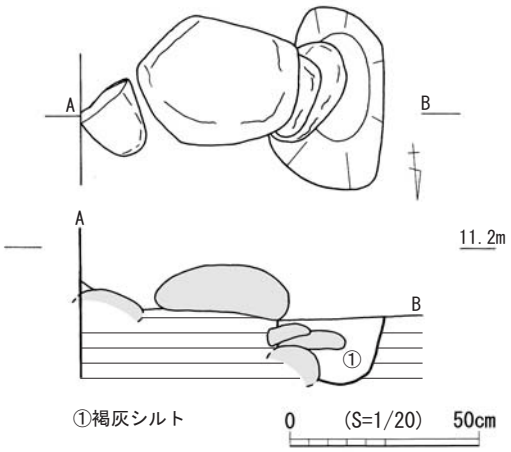
第150表　SP319出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 665 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.8) | 1 | (7.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　雲母　赤色粒子 | 右回転糸切り |
| 666 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.8) | 1.1 | (6.8) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |
| 667 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | — | (1.8) | (8.4) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り |
| 668 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (15.6) | 2.3 | (9.6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り　板状圧痕 |

第151表　SP319出土　滑石製石鍋補修具観察表

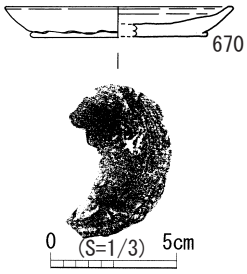
| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | | |
| 669 | 82 | 83 | 17 | 82 | 46 | 22 | 280 | 穿孔有 |

## ⑪ TAK201405調査区①区　SP321(第217図)




第217図　SP321平・断面図(S＝1/20)

大調査区201405の小調査区①区8070グリッド4層から検出した。長径49cm、短径25cm の楕円形で深さ17cm を測る。人頭大の礫が接する。出土した遺物から13世紀後半の遺構と思われる。




第218図　SP321出土遺物(S＝1/3)

図版220　SP321　出土遺物

TAK201405調査区①区　SP321出土遺物(第218図、図版220、第152表)

**670**は土師器小皿である。切り離しは右回転の糸切りである。切り離し後の調整が行われずに、底部と体部の境には余分な粘土による段がそのままになっている。

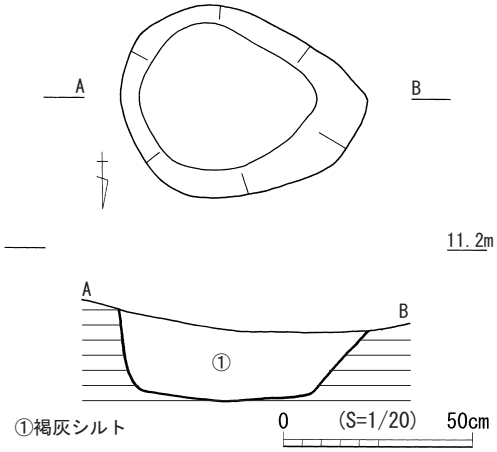
第152表　SP321出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 670 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.8) | 1.2 | (6.8) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英　雲母 | 右回転糸切り |

⑫ TAK201405調査区①区　SP322（第219図）

大調査区201405の小調査区①区8270グリッド4層から検出した。長径62cm、短径50cmの楕円形で深さ20cmを測る。

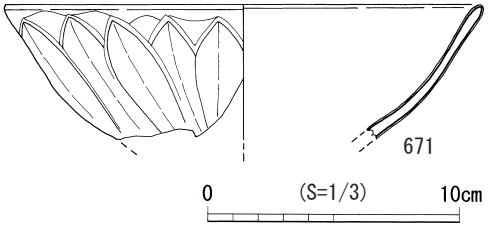
出土した遺物から13世紀前半の遺構と思われる。




第219図　SP322平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区①区　SP322出土遺物（第220図、図版221、第153表）

**671**は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。体部外面に鎬蓮弁文が施される。




第220図　SP322出土遺物（S＝1/3）

図版221　SP322　出土遺物

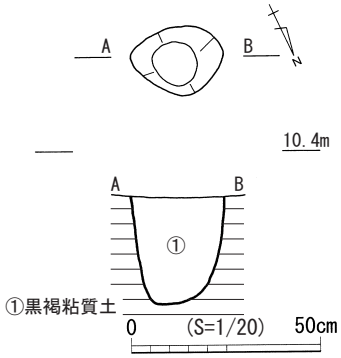
第153表　SP322出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 671 | 龍泉窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 口縁部～体部 | (18.6) | (5.3) | — | — | — | 明オリーブ灰色 | 明オリーブ灰色 | 良好 | 黒色粒子 | 鎬蓮弁文 |

⑬ TAK201405調査区④区　SP733（第221図、図版222）

大調査区201405の小調査区④区7862グリッド3層から検出した。長径25cm、短径20cmの楕円形で深さ30cmを測る。鉄製品が出土した。

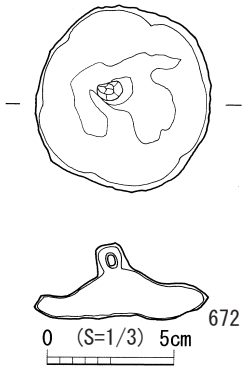
図版222　SP733　遺物出土状況　東から




第221図　SP733平・断面図（S＝1/20）

TAK201405調査区④区　SP733出土遺物(第222図、図版223、第154表)

**672**は鉄製の蓋である。中央が盛り上がり摘みを持つ。外形は花弁状を呈する。




第222図　SP733出土遺物(S＝1/3)

図版223　SP733　出土遺物

第154表　SP733出土　金属製品観察表

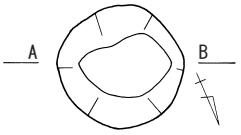
| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 672 | 蓋 | 鉄 | 73 | 69 | 3.1 | 88.46 | 花弁状の外形　摘み有 |

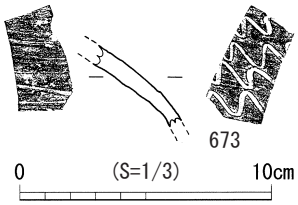
⑭ TAK201405調査区⑥区　SP1167(第223図)

大調査区201405区の小調査区⑥区7264グリッド4層から検出した。

長径32cm、短径31cm の円形で深さ23cm を測る。

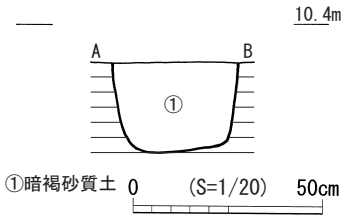
TAK201405調査区⑥区　SP1167出土遺物(第224図、図版224、第155表)




第224図　SP1167出土遺物(S＝1/3)

図版224　SP1167　出土遺物




第223図　SP1167平・断面図(S＝1/20)

**673**はカムィヤキの壺の肩部片である。外面には波状沈線が4条巡り内面は強い回転によるナデ痕が見られる。内外面は艶消しの青黒色であるが器肉断面は小豆色の芯がある。胎土には微細な白色粒子を多く含む。

第155表　SP1167出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 673 | カムイヤキ | 肩部 | — | (3.2) | — | — | 強いナデ痕 | 青黒色 | 青黒色 | 良好 | 微細な白色粒子 | 波状沈線が4条巡る　器肉断面に小豆色の芯がある |

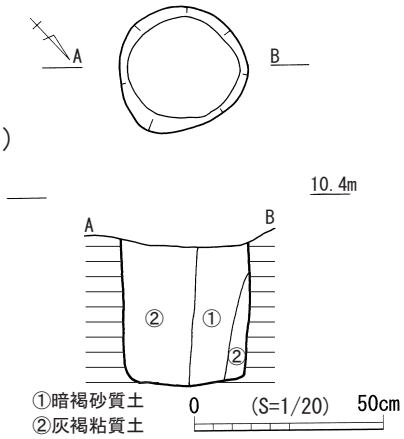
⑮ TAK201405調査区⑥区　SP1200（第225図、図版225）

大調査区201405の小調査区⑥区7264グリッド4層から検出した。長径35cm、短径33cmの円形で深さ37cmを測る。出土した遺物から遺構の年代は13世紀代と思われる。

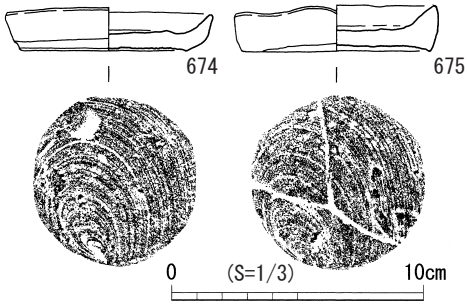
TAK201405調査区⑥区　SP1200出土遺物（第226図、図版226、第156表）

**674・675**は土師器の小皿である。いずれも胎土に微細な砂粒を多く含み、切り離しは右回転の糸切りである。**674**は短い体部が丸みを持って立ち上がる。**675**は短い体部が直に立ち上がる。

図版225　SP1200遺物出土状況　東から




第225図　SP1200平・断面図（S＝1/20）




第226図　SP1200出土遺物（S＝1/3）

図版226　SP1200出土遺物

第156表　SP1200出土　土器観察表

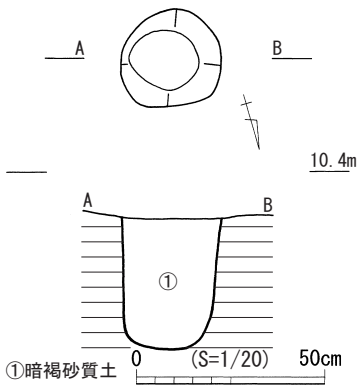
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 674 | 土師器　小皿 | 完形 | 7.9 | 1.8 | 7.4 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 微細な砂粒を多く含む | 右回転糸切り |
| 675 | 土師器　小皿 | 完形 | 8 | 1.7 | 6.4 | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 微細な砂粒を多く含む | 右回転糸切り |

⑯ TAK201405調査区⑥区　SP1209（第227図）

大調査区201405の小調査区⑥区7264グリッド4層から検出した。長径27cm、短径26cmの円形で深さ34cmを測る。

TAK201405調査区⑥区　SP1209出土遺物（第228図、図版227、第157表）

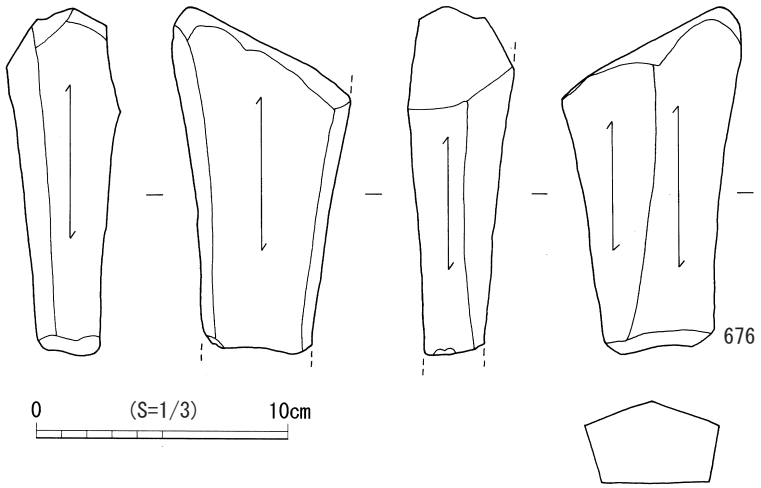
**676**は砂岩製の砥石である。使用面を5面残す。




第227図　SP1209平・断面図（S＝1/20）

第157表　SP1209出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長（mm） | 最大幅（mm） | 最大厚（mm） | 重量（g） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 676 | 砥石 | 砂岩 | 134 | 71 | 43 | 390 | 5面を使用 |




第228図　SP1209出土遺物(S＝1/3)

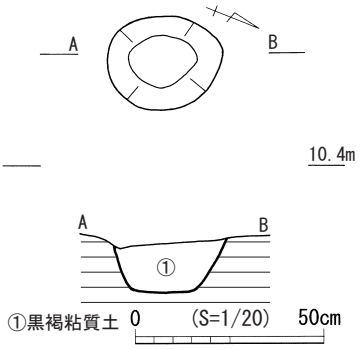
図版227　SP1209出土遺物

⑰ TAK201405調査区⑥区　SP1606(第229図)

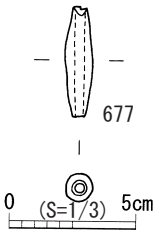
大調査区201405の小調査区⑥区7262グリッド4層から検出した。長径30cm、短径25cm の楕円形で深さ13cm を測る。

TAK201405調査区⑥区SP1606出土遺物(第230図、図版228、第158表)

677は土師質の土錘である。赤褐色を呈する。




第229図
SP1606平・断面図(S＝1/20)




第230図
SP1606出土遺物
(S＝1/3)

図版228
SP1606出土遺物

第158表　SP1606出土　土製品観察表

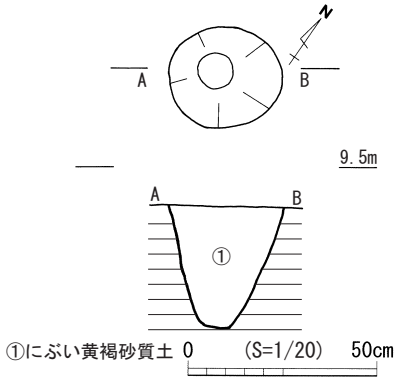
| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 677 | 土錘 | 42 | 11 | 10 | 3 | 橙色 | 良好 | 黒色粒子 | 土師質　完形 |

⑱ TAK201406調査区②区　SP184（第231図）

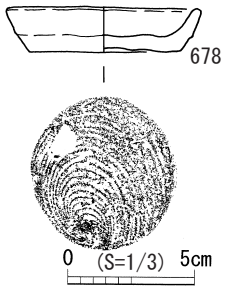
大調査区201406の小調査区②区7252グリッド3層から検出した。長径30cm、短径25cm の楕円形で深さ32cm を測る。

TAK201406調査区②区　SP184出土遺物（第232図、図版229、第159表）

**678**は土師器小皿である。右回転の糸切りの底部から急な角度で立ち上がる。13世紀末のものと思われる。




第231図　SP184平・断面図（S＝1/20）




第232図　SP184出土遺物（S＝1/3）

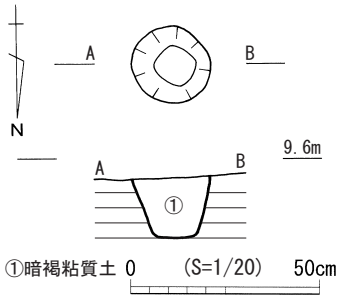
図版229　SP184出土遺物

第159表　SP184出土　土器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 678 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 7.4 | 1.8 | 5.8 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 角閃石　石英　雲母 | 右回転糸切り |

⑲ TAK201406調査区④区　SP355（第233図）

大調査区201406の小調査区④区6854グリッド2層からプランを検出した。長径42cm、短径40cm の円形で、深さは30cm である。貿易陶磁が出土した。



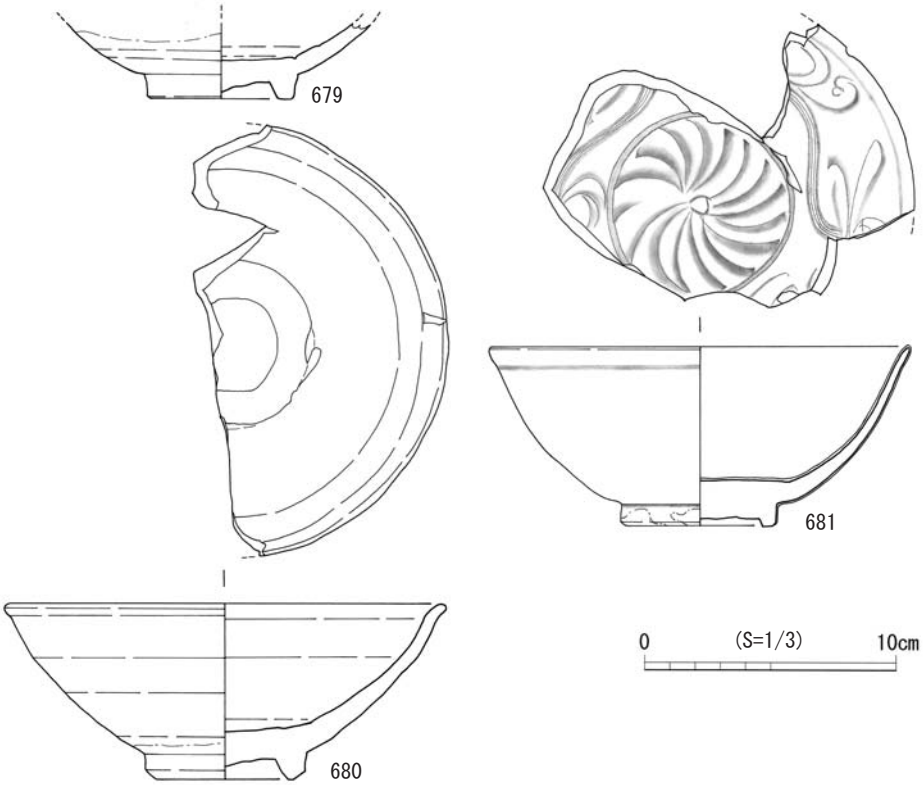

第233図　SP355平・断面図（S＝1/20）

TAK201406④区　SP355出土遺物（第234図、図版230、第160表）

**679**は白磁椀Ⅳ類底部片である。**680**は見込みの釉薬を輪状に掻き取る白磁椀Ⅷ類である。**681**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。体部内面に片彫の蓮華文を、見込には花文が施される。SD1から出土した個体（底部部分）と接合した。**679**、**680**からこの遺構の年代は12世紀中～後半と思われる。

第160表　SP355出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量（cm） | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 679 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 底部 | — | (3) | 5.6 | — | — | 灰白色 | 灰オリーブ色 | 良好 | — | 見込みに目跡 |
| 680 | 白磁　椀　Ⅷ類 | 底部～口縁部 | (17) | 6.9 | (5.5) | — | — | 灰白色 | 淡黄色 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 681 | 龍泉窯系青磁　椀　Ⅰ類 | 底部～口縁部 | (16.4) | 7.1 | (5.7) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | — | |




第234図　SP355出土遺物(S＝1/3)

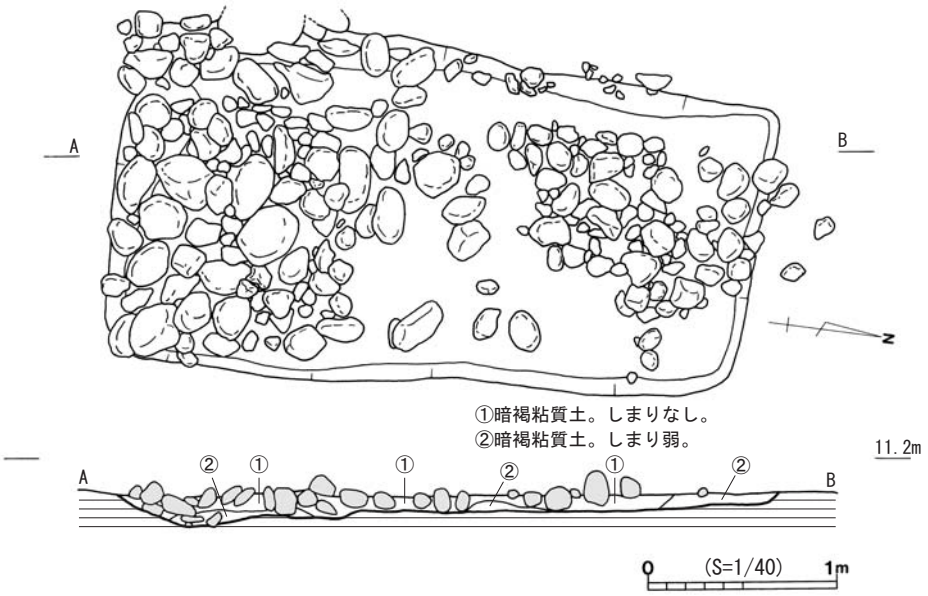
図版230　SP355出土遺物

(8)集石(SS)

今回報告する集石は3基である。

① TAK201202調査区⑥区　SS3(第235図、図版231・232)

大調査区201202の小調査区⑥区8266グリッド2層からプランを検出した。長辺3.4m、短辺1.7m、深さ15cmを測る長方形の土坑に拳～人頭大の礫が全面に詰まる。出土した遺物から遺構の年代は15世紀代と思われる。



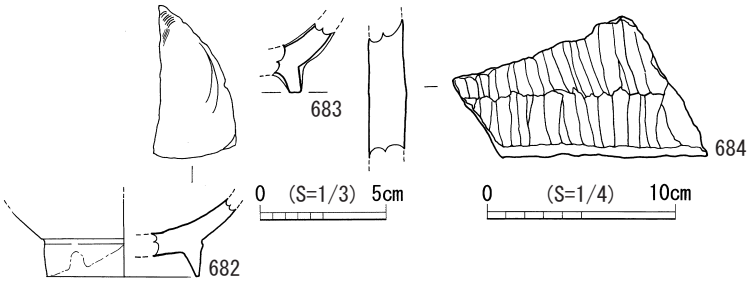

第235図　SS3平・断面図(S＝1/40)

図版231　SS3　検出状況　東から

図版232　SS3　完掘状況　東から

TAK201202調査区⑥区　SS3出土遺物(第236図、図版233、第161・162表)

**682**は白磁椀Ⅴ類底部である。**683**は15世紀代の龍泉窯系青磁椀底部である。釉薬が厚く掛かる。**684**は石鍋体部片である。器壁が厚い大型の石鍋である。外面には工具痕が巡る。




第236図　SS3出土遺物(S＝1/3、石鍋S＝1/4)

図版233　SS3出土遺物

第161表　SS3出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 682 | 白磁　椀　Ⅴ類 | 底部 | — | (3.1) | (6.2) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — |
| 683 | 龍泉窯系青磁椀Ⅰ類 | 底部 | — | (2.7) | — | — | — | 緑灰色 | 緑灰色 | 良好 | — |

第162表　SS3出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 |
| 684 | 石鍋 | 胴部 | ― | (8.1) | ― | ― | ― | 灰白色 | 褐灰色 |

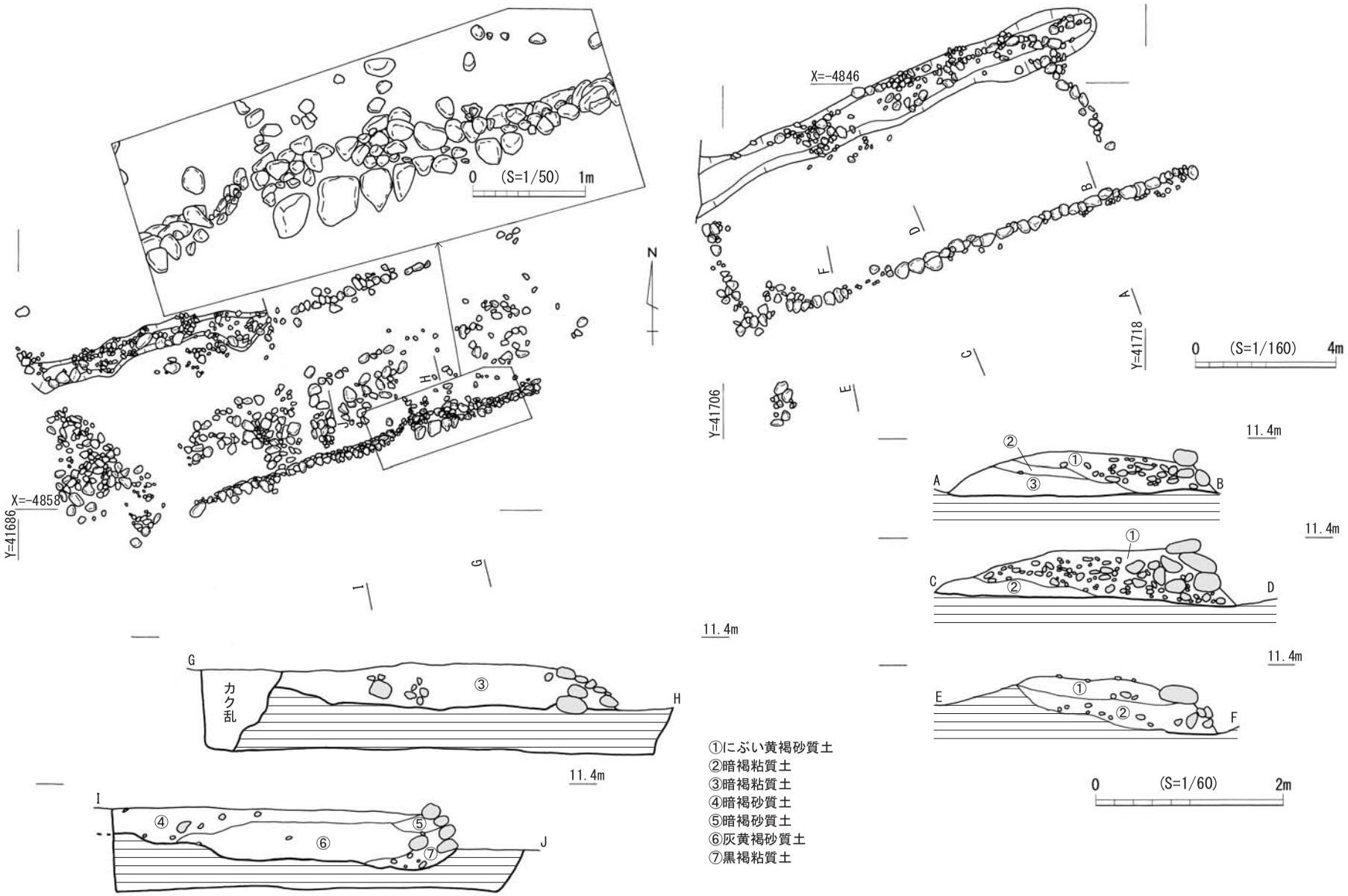
② TAK201405調査区①区　SS1(第237図、図版234～236)

大調査区201405の小調査区①区8470グリッド、②区8468グリッド2層から検出した。最大3段まで積み上げ東西に走る石列が北と南に4mの間隔を保ちほぼ平行に並ぶ。北に位置する石列は長さ32m、南の石列は長さ30mを測る。石列の性格は不明であるが、出土した遺物からこの遺構は12世紀中頃～13世紀前半の年代が考えられる。

図版234　SS1　検出状況　北から

図版235　SS1　石組み　北から

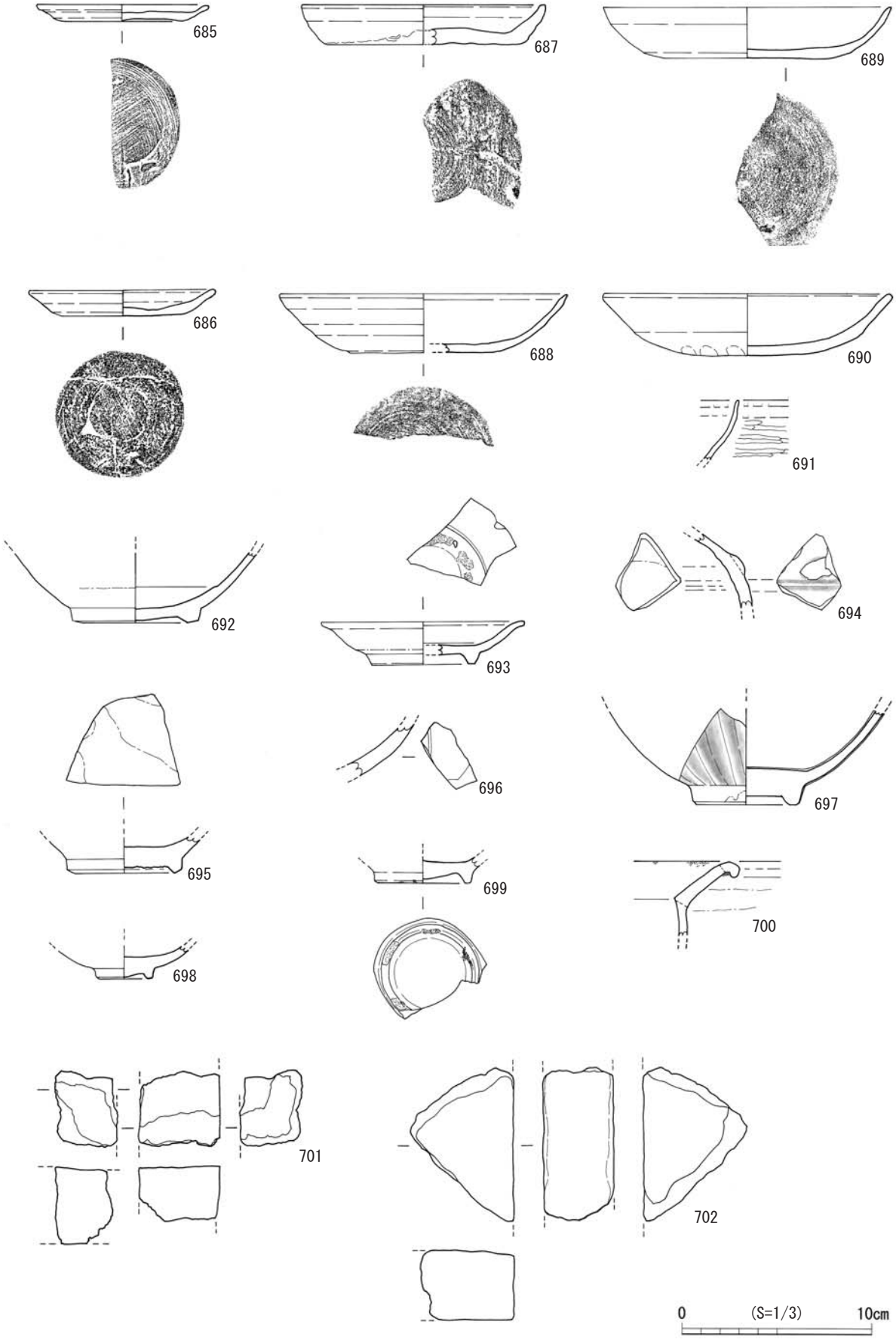
図版236　SS1　石組み部分　北から



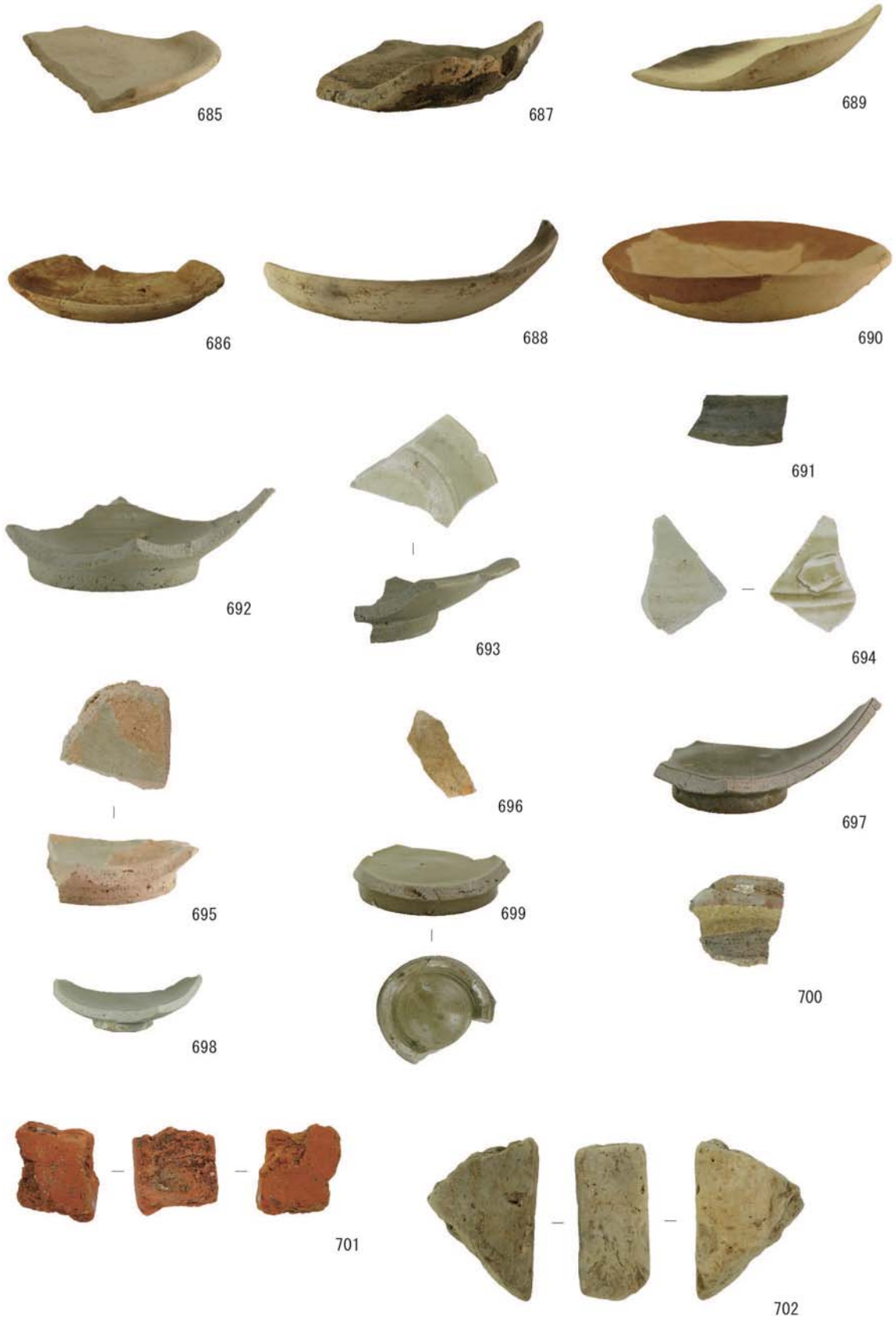

第237図　SS1平・断面図(平面図S＝1/160、断面図S＝1/60、拡大部S＝1/50)

TAK201405調査区①区　SS1出土遺物（第238・239図、図版237・238、第163～167表）

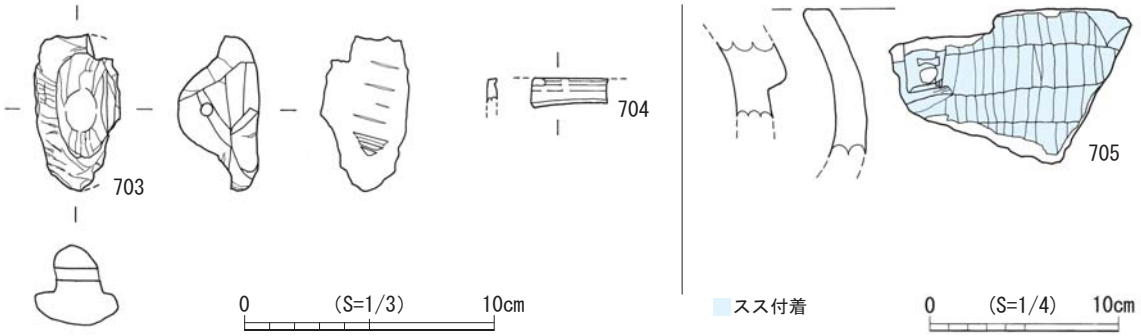
685・686は土師器小皿である。685の体部はほぼわずかに外反しながらで口縁部に至る。686の体部はほぼ直線で口縁部に至る。切り離しは右回転ヘラ切りで、切り離し後外面中央部をナデている。687～690は土師器杯である。687は底部から短い体部が急な角度で立ち上がる。切り離しは回転糸切りである。摩滅が激しい。688の胎土は精良で底径が7.2cmと小さな径である。切り離しは右回転の糸切りである。豊前系の土師器と思われる。689は、底径が9cmあるが胎土は精良で688とよく似ており、同じ豊前系土師器の範疇に入る可能性もある。切り離しは右回転の糸切りである。690は押し出しにより丸底が作られている。体部下半外面には指頭痕が残る。切り離しは回転ヘラ切りである。691は肥前南部型瓦器椀である。体部は直線的に伸び、口縁部下で内へ屈曲する。外面のミガキは稜の上に横位で施される。内面もミガキが施されているが不明瞭である。692は白磁椀Ⅳ類である。693は白磁皿Ⅲ類である。見込みの釉は回転により掻き取られ、重ね焼きの痕が残る。694は白磁壺Ⅱ類肩部である。耳の下には沈線が1条巡る。内面の下位は露胎である。685は磁器底部片である。釉は見込みの半分に掛かるのみである。焼成は強い酸化炎焼成で行われており胎土が赤変している。白磁椀Ⅳ類に含まれるか。696は越州窯系青磁椀Ⅰ類体部である。精良な胎土ににぶい黄色の釉が掛かる。697は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。外面に鎬蓮弁文が施される。698は龍泉窯系青磁小椀Ⅰ類である。底部は厚く、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。高台内と畳付は露胎である。699は康津産の初期高麗青磁椀底部片である。高台内の断面は兜巾状を呈する。畳付の釉は掻き取られ露胎である。白い目跡が残る。胎土は精良である。700は陶器盤Ⅰ類口縁部である。ほぼ垂直に立ち上がる体部から口縁部は大きく外反し端部はさらに下へ折れ曲がる。胎土は粗く白色粒を多く含む。黄褐色の釉は、内面は全面施釉後口縁下を掻き取り、外面は口縁に横位の流しがけ風に掛かる。口縁部の内外面には重ね焼きの目跡が残る。701・702は土製品である。701は直方体でレンガ様の赤褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。用途は不明である。702は板状の製品で、還元炎で軟質に焼成されている。胎土は精良で砂粒は含まない。一見瓦風にも見えるが、断面が曲線を描かない点が異なる。用途は不明である。703は滑石製の石鍋の補修具である。右半分が欠損している。器壁部上面が平らであることから、底部の補修に使用されたものと思われる。704は溝を持つ薄い板状の石製品である。頁岩製で砥石の可能性もある。705は小さな縦耳が付く石鍋である。幅の狭い削り痕が横位に並ぶ。外面全面に煤が付着する。




第238図　SS1出土遺物－1(S＝1/3)




図版237　SS1　出土遺物－1




第239図　SS1出土遺物－2（石鍋 S＝1/4、その他 S＝1/3）

図版238　SS1　出土遺物-2

## 第163表　SS1出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 685 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (8.7) | 0.9 | (6.2) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | |
| 686 | 土師器　小皿 | ほぼ完形 | 9.4 | 1.3 | 6.4 | — | — | 浅黄橙色 | 明赤褐色 | 良好 | 長石　雲母　角閃石 | 右回転ヘラ切り |
| 687 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (12.6) | 2.1 | (10.2) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　石英 | 回転糸切り |
| 688 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 3.1 | (7.6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 金雲母　石英 | 右回転糸切り |
| 689 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 2.8 | (9) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 石英　精良 | 右回転糸切り　豊前系か |
| 690 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.8) | 3.3 | － | 体部下半に指オサエ | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 石英　雲母　角閃石 | 回転ヘラ切り<br>押し出し |
| 691 | 肥前南部型瓦器　深椀 | 口縁部～体部 | － | 3.1 | － | 稜の上に横位のミガキ | ミガキ | 灰色 | 灰色 | 良好 | 石英　長石 | |
| 692 | 白磁　椀　Ⅳ類 | 底部～体部 | － | (3.6) | 6.6 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 693 | 白磁　皿　Ⅲ類 | 底部～口縁部 | (10.5) | 2.4 | (6.5) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 694 | 白磁　壺　Ⅱ類 | 肩部 | － | (3.9) | － | — | — | 灰オリーブ色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | 沈線が一条巡る |
| 695 | 磁器　椀　Ⅳ類 | 底部 | － | (1.9) | 6 | — | — | 淡赤橙色 | 灰白色 | やや不良 | 黒色粒子 | 見込みは半分露胎 |
| 696 | 越州窯系青磁　椀　Ⅰ類 | 体部 | － | (2.7) | － | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 精良 | |
| 697 | 龍泉窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 底部～体部 | － | (5) | 5.3 | | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | 鎬蓮弁 |
| 698 | 龍泉窯系青磁　小椀　Ⅱ類 | 底部～体部 | － | (1.7) | 3 | — | — | オリーブ灰色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | |
| 699 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | － | (1.4 | 5.1 | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | 康津産 |
| 700 | 陶器　盤　Ⅰ類 | 口縁部 | － | (3.9) | － | — | — | 灰白色 | 浅黄色 | 良好 | 長石　黒色粒子　赤色粒子 | |

## 第164表　SS1出土　土製品観察表

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 701 | 不明 | 40 | 43 | 33 | 60 | 橙色 | 良好 | 石英　長石　角閃石 | 直方体でレンガ様 |
| 702 | 不明 | 81 | 54 | 37 | 130 | 灰白色 | やや不良 | 精良 | 板状製品 |

第165表　SS1出土　滑石製石鍋補修具観察表

| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | |
| 703 | 62 | 35 | 12 | 38 | 19 | 18 | 60 |

第166表　SS1出土　滑石製石鍋観察表

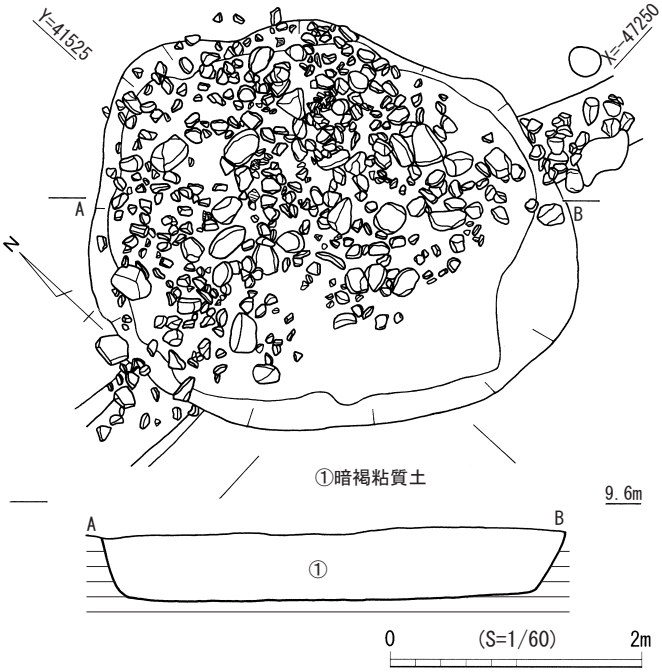
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 705 | 縦耳付石鍋 | 口縁部～体部 | — | (7.9) | — | — | — | オリーブ黒色 | 灰色 | スス付着 |

第167表　SS1出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 704 | 有溝石製品 | 頁岩 | 299 | 12 | 4.4 | 2.66 | 砥石の可能性有 |

③ TAK 201406調査区②区　SS2(第240図、図版239)

大調査区201406の小調査区②区7252グリッド2層からプランを検出した。長軸4.0m、短軸3.2m、深さ50cmを測る楕円形の土坑に拳～人頭大の礫がびっしりと詰まる。畦畔1を切っている。捏鉢、貿易陶磁が出土した。断面図は現地で作成をしていなかったため、レベルと写真で復元した。

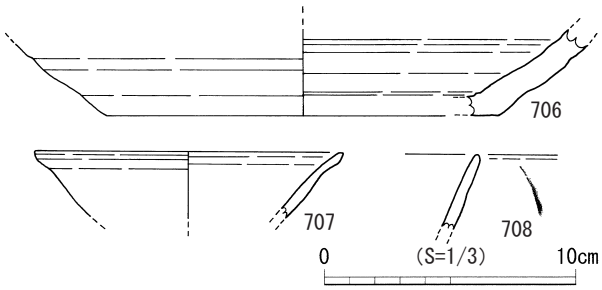


第240図　SS2平・断面図(S＝1/60)

TAK 201406調査区②区　SS2出土遺物(第241･242図、図版240・241、第168・169表)

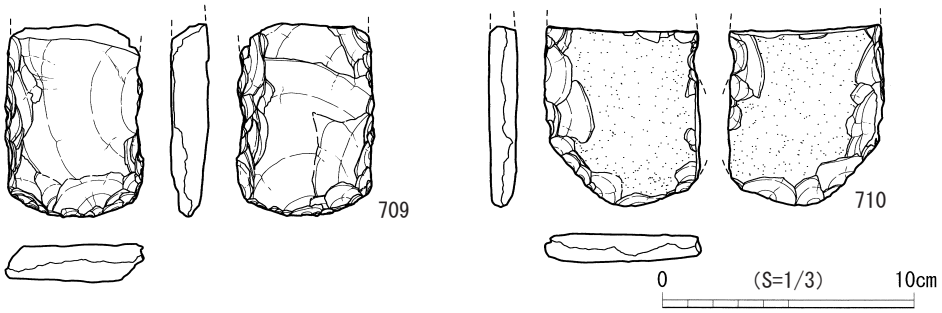
**706**は東播系の捏鉢底部片である。摩滅が激しい。**707**は口禿げの白磁Ⅸ類皿である。**708**は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。外面に片彫りの蓮弁文が施されるが鎬は無い。**709・710**は扁平打製石斧の刃部である。**709**は、側縁が平行しており、緩やかな弧を描く刃部が施される。側縁の調整は急傾斜の片面加工である。**710**は右側縁を欠損する。刃部は円刃である。いずれも節理面で割れた安山岩を素材とする。706よりこの遺構は13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。

図版239　SS2半截状況　西から




第241図　SS2出土遺物－1(S＝1/3)

図版240　SS2出土遺物－1




第242図　SS2出土遺物－2(S＝1/3)

図版241　SS2出土遺物－2

第168表　SS2出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 706 | 東播系　捏鉢 | 底部 | － | (3.4) | (15.4) | ― | ― | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 |
| 707 | 白磁　Ⅲ　Ⅸ類 | 口縁部 | (12) | (2.6) | － | ― | ― | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | ― |
| 708 | 龍泉系青磁　椀　Ⅱ類 | 口縁部 | － | (3) | － | ― | ― | 暗オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | ― |

第169表　SS2出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 709 | 扁平打製石斧 | 安山岩 | 68 | 48 | 13 | 72 |
| 710 | 扁平打製石斧 | 安山岩 | 62 | 53 | 6 | 64 |

(9)墓(ST)

今回報告する墓は1基である。

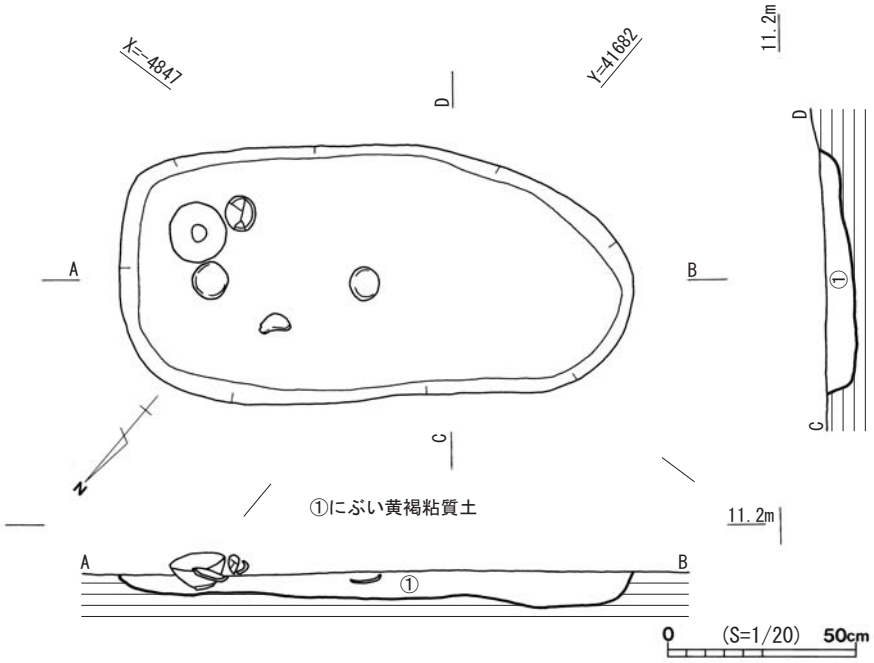
① TAK201202調査区⑥区　ST3(第243図、図版242)

大調査区201202の小調査区⑥区8468グリッド2層からプランを検出した。長軸1.35m、短軸0.3mを測る隅丸方形で深さは10cmである。主軸はN53°Eである。北側から青磁椀1点と土師器皿4点が出土した。出土した遺物から13世紀前半のものと思われる。

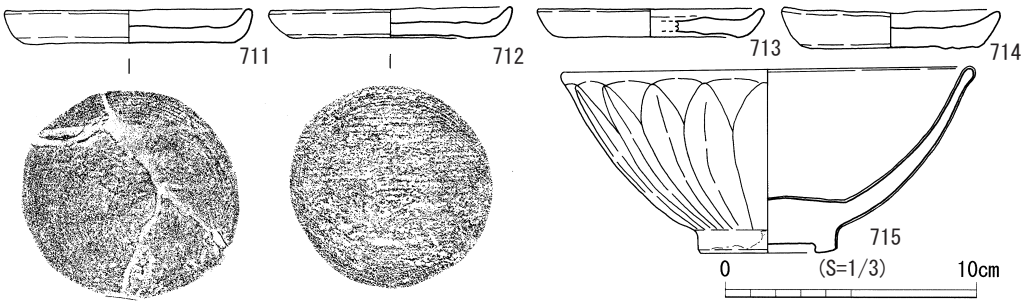
図版242　ST3　完掘状況東から

TAK201202調査区⑥区　ST3出土遺物(第244図、図版243、第170表)

**711～714**は土師器の浅い小皿である。いずれも切り離しは回転糸切りである。**714**は他と比べると小ぶりである。**715**は完形の龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。外面に鎬蓮弁文が施される。




第243図　ST3平・断面図(S＝1/20)




第244図　ST3出土遺物(S＝1/3)

図版243　ST3出土遺物

第170表　ST3出土　土器・磁器観察表

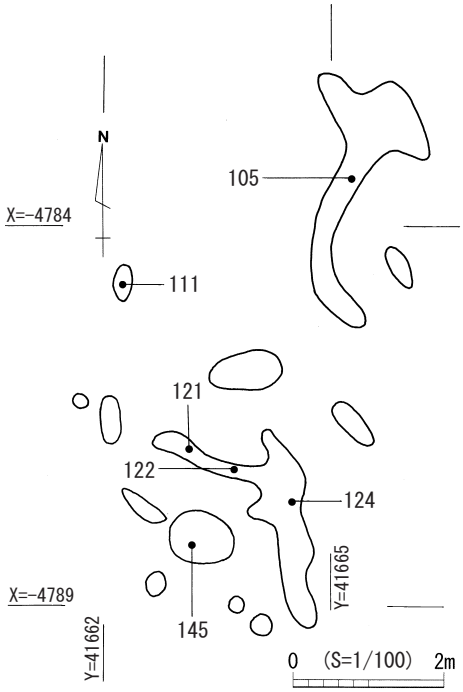
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 711 | 土師器　皿 | 完形 | 9.7 | 1.3 | 8.2 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 右回転糸切り |
| 712 | 土師器　皿 | 完形 | 9.6 | 1.1 | 8.2 | — | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | 右回転糸切り |
| 713 | 土師器　皿 | 底部～口縁部 | (9) | 1.1 | (7.2) | — | — | にぶい褐色 | にぶい褐色 | 良好 | 長石　角閃石 | 右回転糸切り |
| 714 | 土師器　皿 | 完形 | 8.6 | 1.6 | 7.2 | — | — | にぶい黄橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　角閃石 | 回転糸切り |
| 715 | 龍泉窯系青磁　椀　Ⅱ類 | 完形 | 15.3 | 7.3 | 5.4 | — | — | オリーブ黄色 | オリーブ黄色 | 良好 | — | 鎬蓮弁文 |

(10)不明遺構(SX)

今回報告する不明遺構は2基である。

① TAK201405調査区③区　SX1(第245図、図版244)

図版244　SX1検出状況　東から

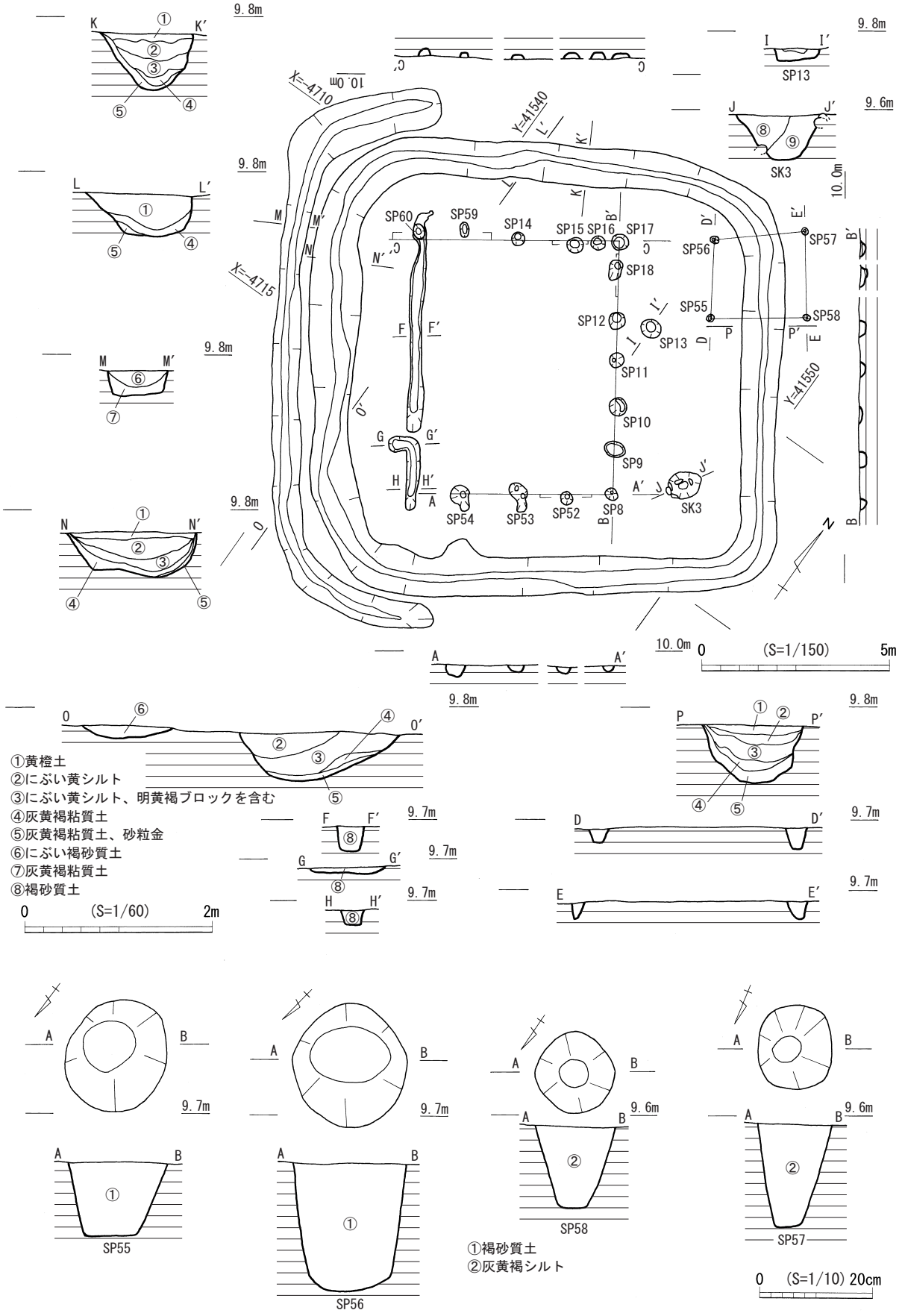



・番号は科学分析の試料番号

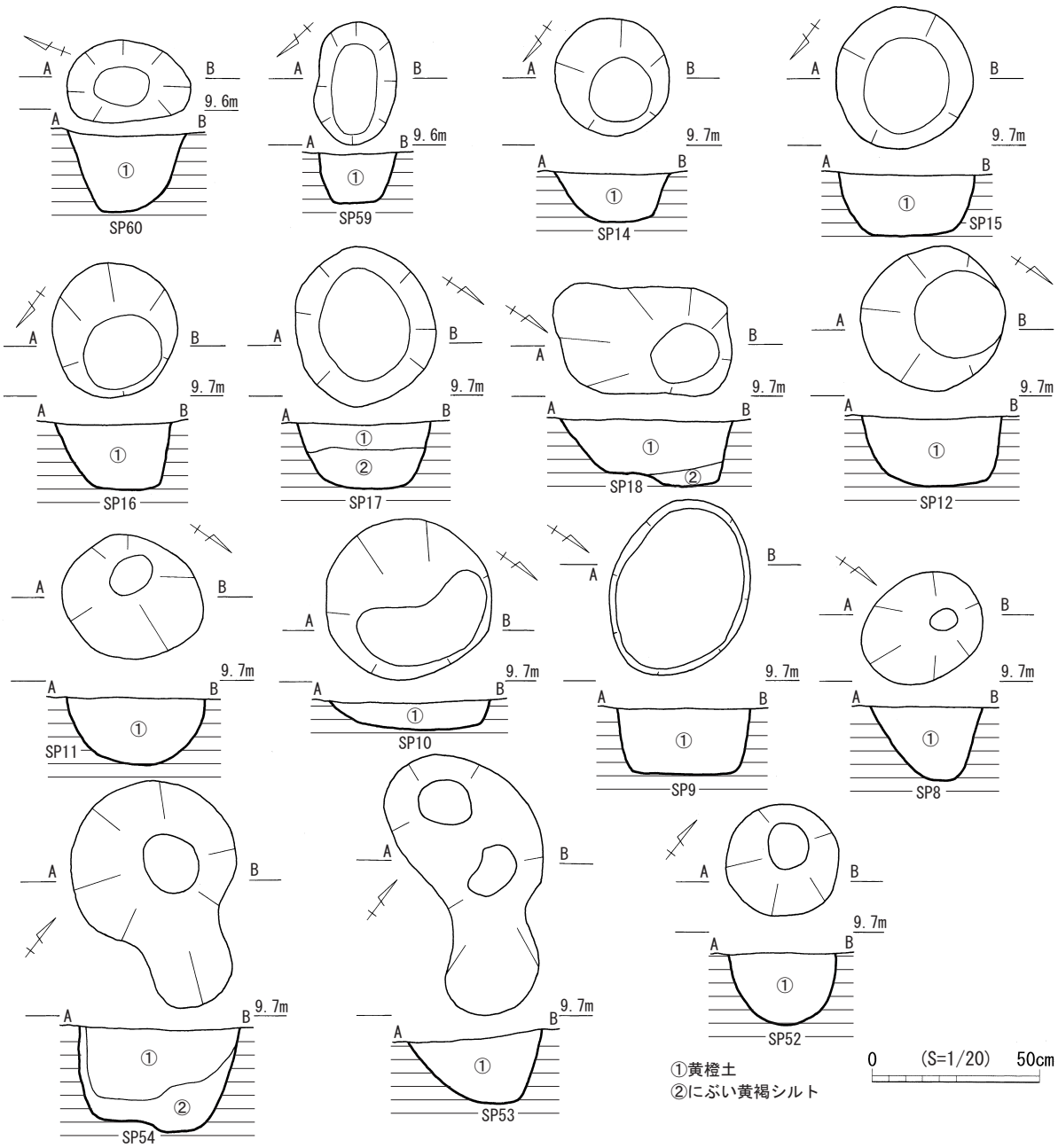
第245図　SX1骨の分布状況平面図
(S＝1/100)

大調査区201405の小調査区③区7866グリッド3層から検出した。南北8m、東西4.4mの範囲に大きく2箇所のまとまりで骨の集中が見られたが、掘り方は見られず据え置かれたような状態であった。出土の状況から獣骨と予想し歯を探したが見つけることはできなかったので、同定を依頼することとした。その結果人骨であることが分かった(結果については自然科学分析の頁に掲載)。残りが良いはずの歯がまったく見られなかったことから、頭部がない状態で放置されたことも考えられる。また、骨が広い範囲で見られることから、区画内の整地が行われた際に、それ以前にあった墳墓が破壊され人骨が散らばったことも可能性としてあげられる。

② TAK201406調査区②区　SX1（第246・247図、図版245・246、第171表）



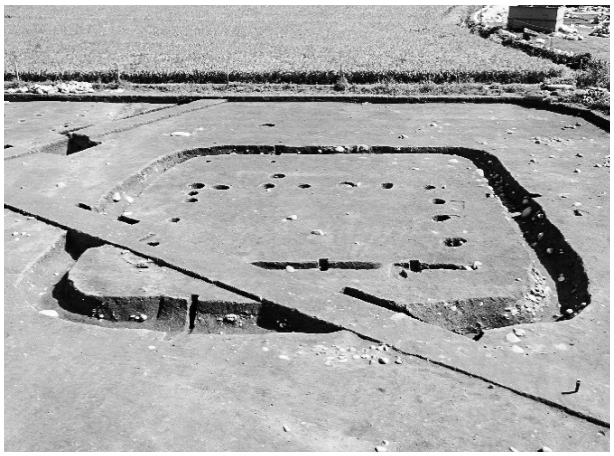

第246図　SX1平・断面図（平面図 S＝1/150、断面図 S＝1/60、柱穴平・断面図 S＝1/10）



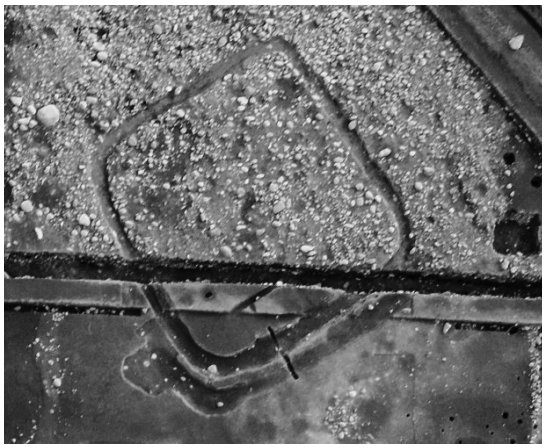

第247図　SX1内柱穴平・断面図(S＝1/20)

大調査区201406の小調査区②区7052・7054グリッド3層から検出した。一辺10m の隅丸方形の区画を、幅1.0m～1.4m、深さ1.1m～1.4m の断面が「U」字形の周溝が囲む。南西部にあたる周溝の外には1条の溝が南西部分を囲むように配置されている。外側の溝の長軸は25m で、上端・下端ともに3.7m 東へ張り出し「コ」の字形を作る。幅は0.7m～1.4m、深さは0.4m～0.7m である。区画内には梁行4間、桁行6間の側柱建物が区画の南西側にやや寄った状態で建つ。主軸は N60°W である。この建物の西の桁には柱穴が無く主軸に沿って溝が掘られている。底のレベルが柱穴の底のレベルとほぼ同じであることから、布掘り柱であったと思われる。また、周溝北東部より溝を挟むように直径20cm、深さ50cm の小穴を検出した。規則的な配置であることから橋の柱穴と思われる。周溝内より捏鉢や青磁椀、石

鍋片が出土した。これらの遺物からSX1の時期は14世紀と思われる。遺構の性格であるが、佐賀市の類例から宗教関係の施設と考える。



図版245　SX1完掘状況　西から



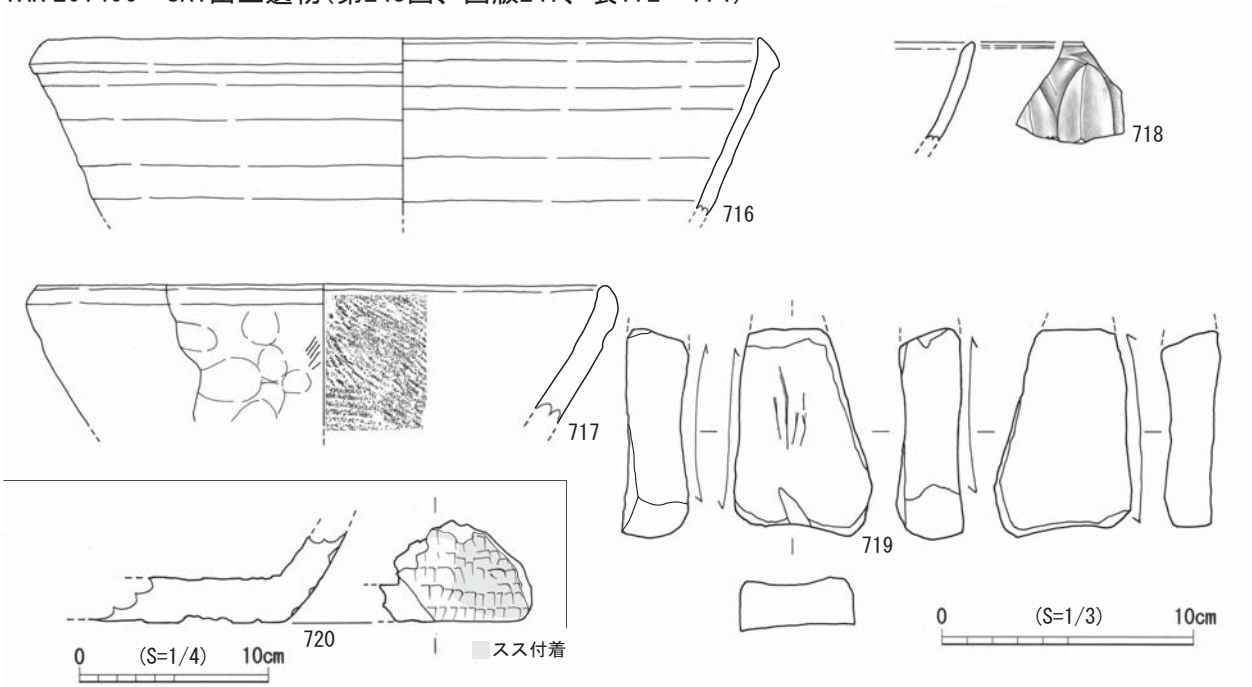
図版246　SX1完掘状況　左が北

下層の遺構確認のために土層観察ベルトより東は掘削を進めている

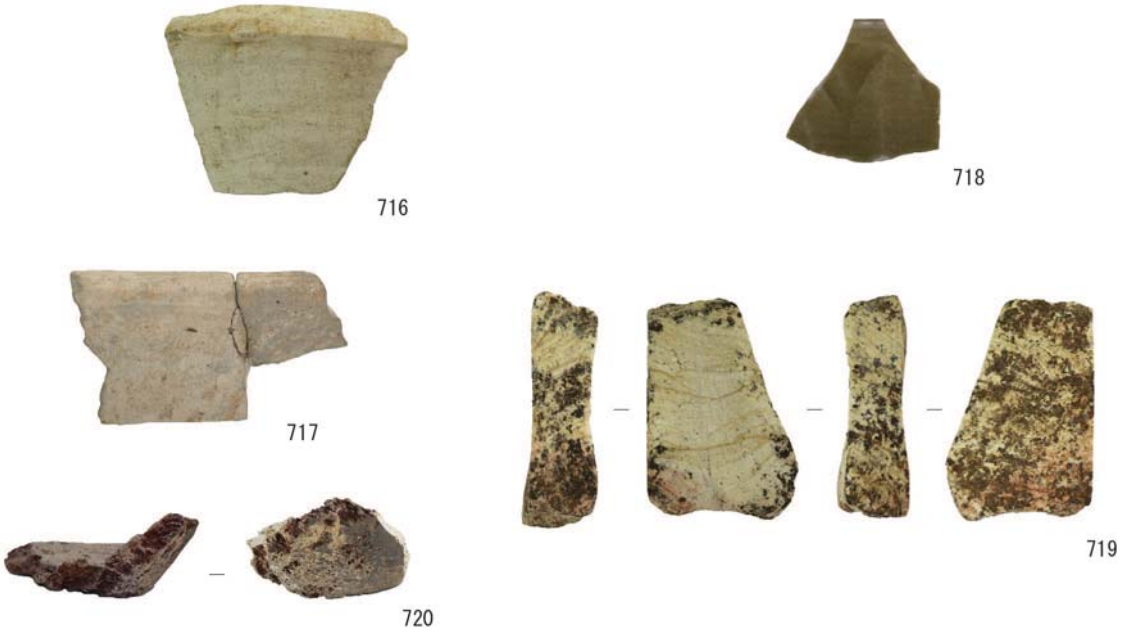
第171表　SX1内　掘立柱建物跡計測表

| 挿図番号 | 図版番号 | 主軸方向 | 柱間間数 | 規模(m、㎡) | | | | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 梁間 | 桁間 | 梁行 | 桁行 | 身舎面積 | |
| 251 | 246・247 | N60°W | 4×6 | 1.2～1.5 | 0.8～1.2 | 5.3 | 6.6 | 35.0 | 西の桁は布掘り |

TAK 201406　SX1出土遺物(第248図、図版247、表172～174)




第248図　SX1出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)




図版247　SX1出土遺物

**716**は東播系の捏鉢口縁部である。口縁部は肥厚し、端部は内方へ伸び断面三角形を呈する。13世紀後半～14世紀前半のものと思われる。**717**は瓦質の捏鉢である。外面には成形時の指頭痕が、内面にはハケメが残る。体部から均一な厚さで口縁部に至る。口縁部は斜めに面取りが行われる。14世紀代のものと思われる。**718**は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類の口縁部である。外面には鎬蓮弁文が施される。**720**は4面に使用痕が残る泥岩製と思われる砥石である。正面は使用により中央が凹む。使用後に付けられた鋭利な道具による縦位の削痕がある。**719**は滑石製石鍋の底部片である。外面には煤が付着している。

第172表　SX1出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 716 | 東播系　捏ね鉢 | 口縁部 | (28) | (6.9) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 717 | 瓦質土器　捏ね鉢 | 口縁部 | (22.4) | (5.4) | — | 指オサエ | ハケメ | 浅黄橙色 | 灰白色 | 良好 | 長石　石英 | |
| 718 | 龍泉窯系　椀　Ⅱ類 | 口縁部 | - | (4) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石 | 鎬蓮弁文 |

第173表　SX1出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | |
| 719 | 石鍋 | 底部 | — | 4.9 | — | — | — | 灰色 | 灰白色 | スス付着 |

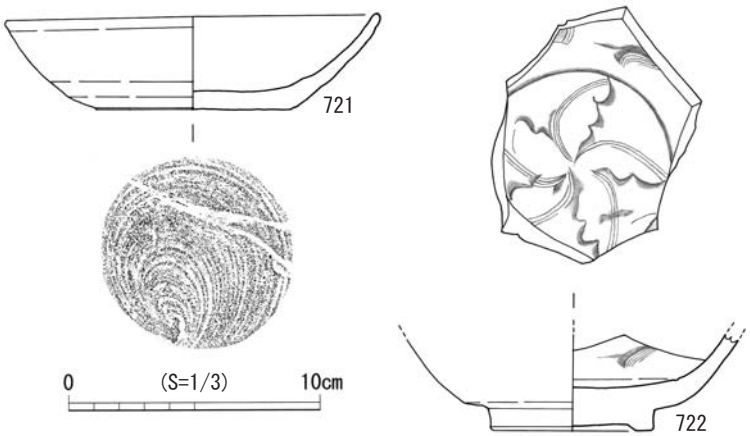
第174表　SX1出土　石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 石材 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 720 | 砥石 | 泥岩 | 82 | 54 | 26 | 140 | 4面に使用痕 |

(11)包含層(2層)出土の遺物

① TAK201202調査区2層　出土遺物(第249図、図版248、第175表)

**721**は豊前系土師器杯である。体部はわずかに内湾しながら口縁部に至る。切り離しは右回転の糸切りである。12世紀後半の所産である。**722**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面には箆による花文が施される。




第249図　TAK201202調査区2層出土遺物(S＝1/3)

図版248　TAK201202調査区2層出土遺物

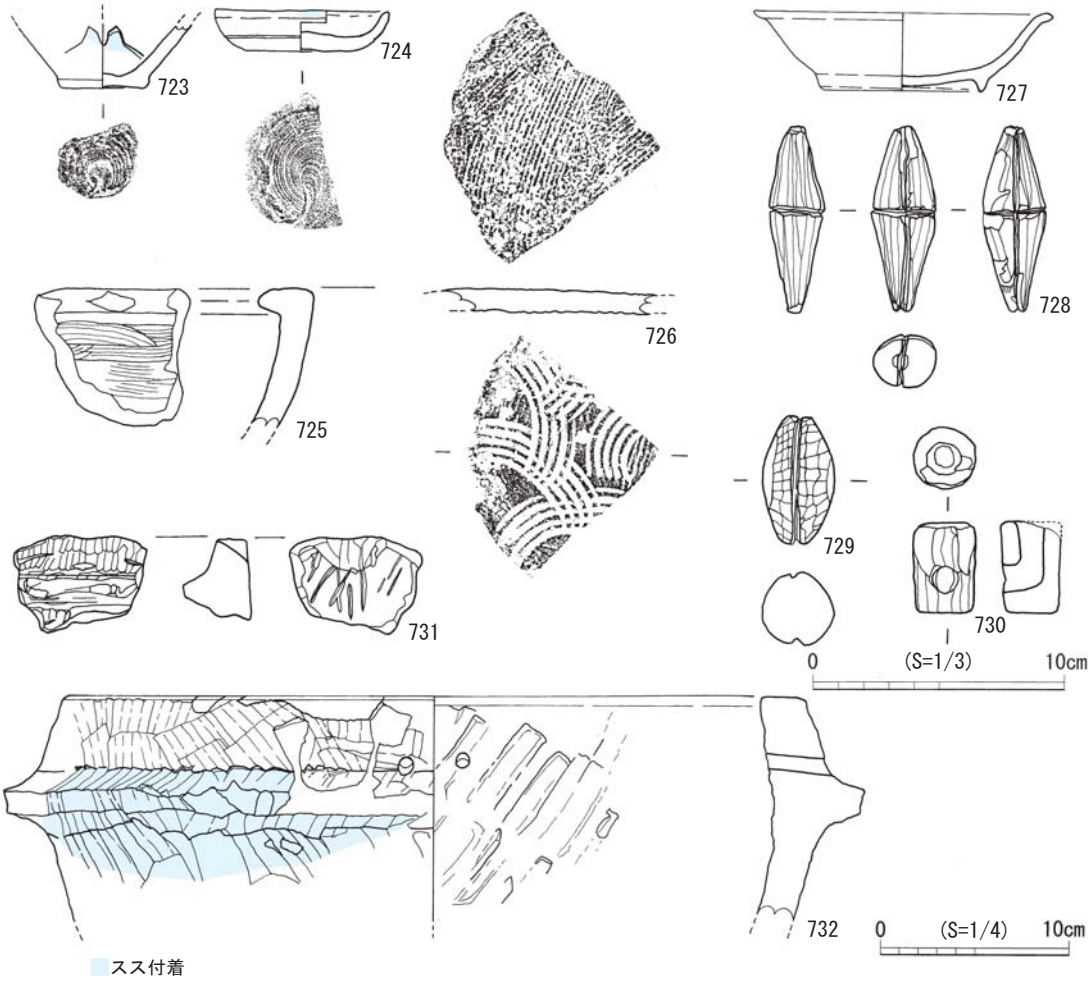
第175表　TAK201202調査区2層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 721 | 豊前系土師器　杯 | 底部～口縁部 | (14.5) | 3.8 | 7.6 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 角閃石　石英　金雲母 | ⑥8466 |
| 722 | 龍泉窯系　椀　1類 | 底部～体部 | - | (3.8) | 6.2 | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ⑥8266 |

② TAK201403調査区2層　出土遺物(第250図、図版249、第176～178表)

**723**は土師器小杯である。体部はわずかに内湾する。内外面に煤が残る。切り離しは右回転の糸切りである。時期は不明。搬入品か。**724**は体部がわずかに内湾しながら口縁部に至る小皿である。口縁部に煤が付着することから灯明皿として使われていたと思われる。切り離しは右回転の糸切りである。16世紀後半～17世紀のものと思われる。**725**は周防型の摺鉢である。口唇部が内側に大きく突出し上面には水平面を持つ。15世紀～17世紀初頭のものと思われる。**726**は瓦質の不明製品である。部位は底部と思われる。外面にはハケメが、内面には同心円のスタンプ文が施される。**727**は端反りの白磁皿C群である(小野1982)。15世紀後半～16世紀後半のものである。**728**は滑石製の石錘である。縦長の紡錘形で長軸と短軸に各1条の刻みが巡る。**729**も石錘である。ずんぐりとした紡錘形で、長軸

に1条の刻みが巡る。**730**は滑石製煙管火皿である(註1)。火皿は側面の穿孔が丁寧である。外面を平滑に磨く。**731**は鍔付き石鍋の口縁部である。口縁部内面を片口状に削り出している。**732**は鍔付き石鍋の体部上位片である。鍔の直上には穿孔が1箇所ある。通常見られる石鍋は、外面には均一の幅で規則正しく削り痕が並び、内面は使用により削り痕が摩滅しているが、この石鍋は内外面ともに粗い削り痕のままで、外面の削り痕は幅もばらばらである。鍔の周辺に煤が見られることから、最終調整前の製作途中の石鍋を煮炊きに使った可能性がある。




第250図　TAK201403調査区2層出土遺物(S＝1/3、石鍋 S＝1/4)

第176表　TAK201403調査区2層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 723 | 土師器　小杯 | 底部 | — | (2.5) | 3.2 | — | — | にぶい橙色 | にぶい黄褐色 | 良好 | 長石 | 0670 | 右回転糸切り |
| 724 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (6.8) | 1.7 | (4.4) | — | — | にぶい橙色 | にぶい橙色 | 良好 | 長石　石英 | 1272 | 右回転糸切り 灯明皿 |
| 725 | 土師器　摺鉢 | 口縁部 | — | (5.6) | — | — | — | にぶい黄橙色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石　赤色粒子 | 1274 | 周防型 |
| 726 | 瓦質土器　不明製品 | 不明 | — | 0.9 | — | ハケメ | 同心円のスタンプ文 | 灰色 | 黄灰色 | 良好 | 黒色粒子 | 1672 | |
| 727 | 白磁　皿　C群 | 完形 | 11.6 | 3.1 | 6.1 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | 0670 | |

図版249　TAK201403調査区2層出土遺物

第177表　TAK201403調査区2層出土　滑石製品観察表

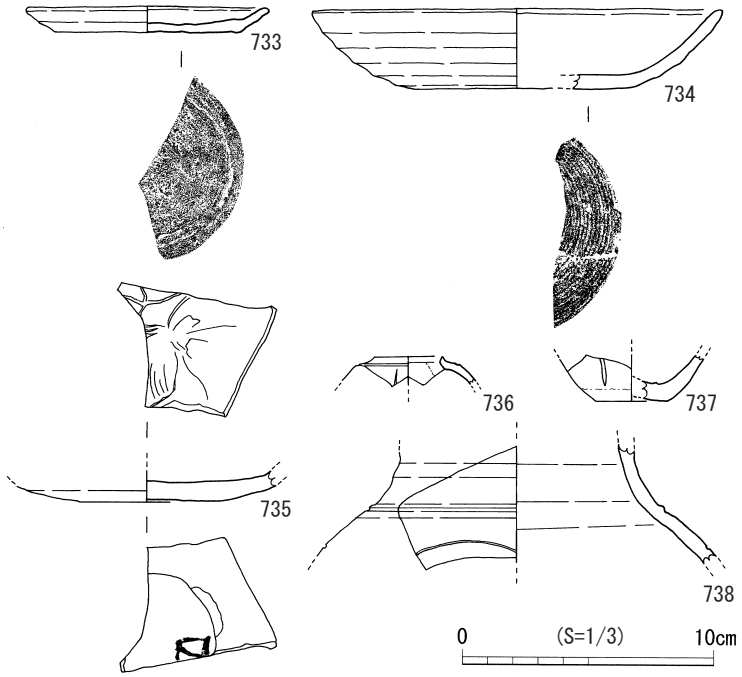
| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 728 | 石錘 | 73 | 25 | 21 | 40.19 | 灰白色 | 1072 | 長軸と短軸に刻み |
| 729 | 石錘 | 51 | 28.5 | 29 | 58 | 灰色 | 1072 | 長軸に刻み |
| 730 | 煙管　火皿 | 36 | 24 | 24 | 33.4 | 暗オリーブ色 | ① | |

第178表　TAK201403調査区2層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 731 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | — | (5.1) | — | — | 片口状 | 明緑灰色 | 明緑灰色 | 1274 | |
| 732 | 鍔付石鍋 | 体部 | (38.4) | (11.9) | — | — | — | にぶい黄橙色 | 灰黄褐色 | 1272 | 鍔の直上に穿孔　製作途中の石鍋か |

③ TAK201404調査区2層　出土遺物（第251図、図版250、第179表）

**733**は土師器小皿である。体部は外に大きく開く。切り離しは回転ヘラ切りである。11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。**734**は土師器杯である。体部は内湾しながら口縁部に至る。外面には成形時の引き上げ痕が見られる。12世紀代のものと思われる。**735**は白磁皿Ⅷ類である。内面に箆描き文が描かれる。露胎の底部には墨書が残る。**736・737**は白磁小壺で瓜割型の球形胴である。**736**は口縁部片、**737**は底部片である。胎土や釉色から、両者は別の個体である。11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。**738**は陶器の瓶もしくは水注の肩～頸部片である。肩と頸部の境には低い断面三角形の隆帯が巡り、肩部には緩やかな波状沈線が描かれる。釉薬はオリーブ色で薄く掛かり内面は露胎である。




第251図　TAK201404調査区2層出土遺物（S＝1/3）

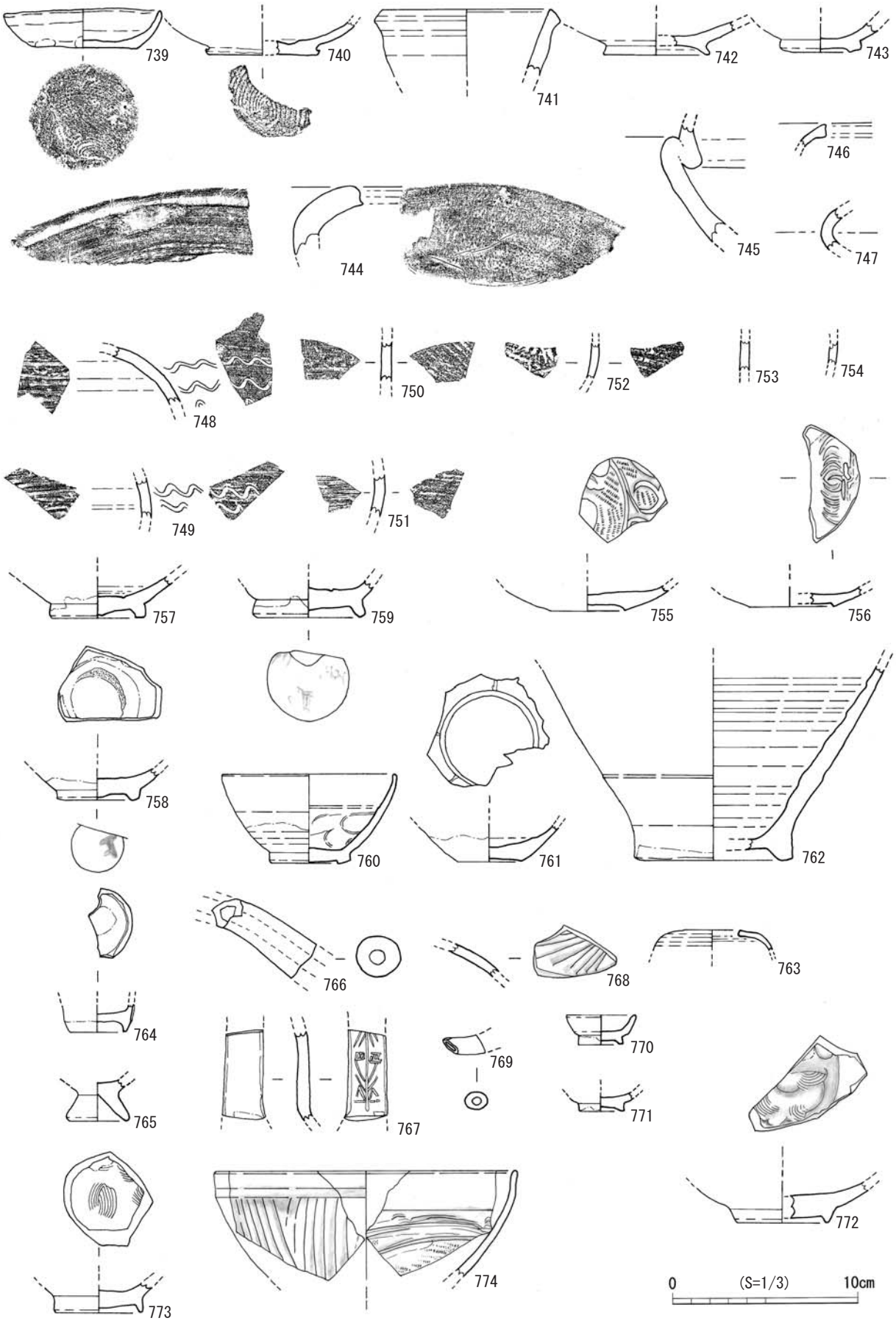
図版250　TAK201404調査区2層出土遺物

第179表　TAK201404調査区2層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 733 | 土師器　小皿 | 底部～口縁部 | (9.5) | 1 | (7.2) | — | — | 浅黄橙色 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　褐色粒子 | A6東　8672 | |
| 734 | 土師器　杯 | 底部～口縁部 | (16) | 3.1 | (8.4) | — | — | 明褐灰色 | 明褐灰色 | 良好 | 長石　雲母 | A6東　8670 | |
| 735 | 白磁　皿　Ⅷ類 | 底部 | — | (1.2) | (5.4) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | A6東　8472 | 墨書有 |
| 736 | 白磁　小壺 | 口縁部 | (2.7) | (1.2) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | A6東　9472 | |
| 737 | 白磁　小壺 | 底部 | — | (1.8) | (2.8) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | B7西　9472 | |
| 738 | 貿易陶器 | 肩～頸部 | — | (4.7) | — | — | — | 暗灰黄色 | 灰黄褐色 | 良好 | — | A6東　8672 | |

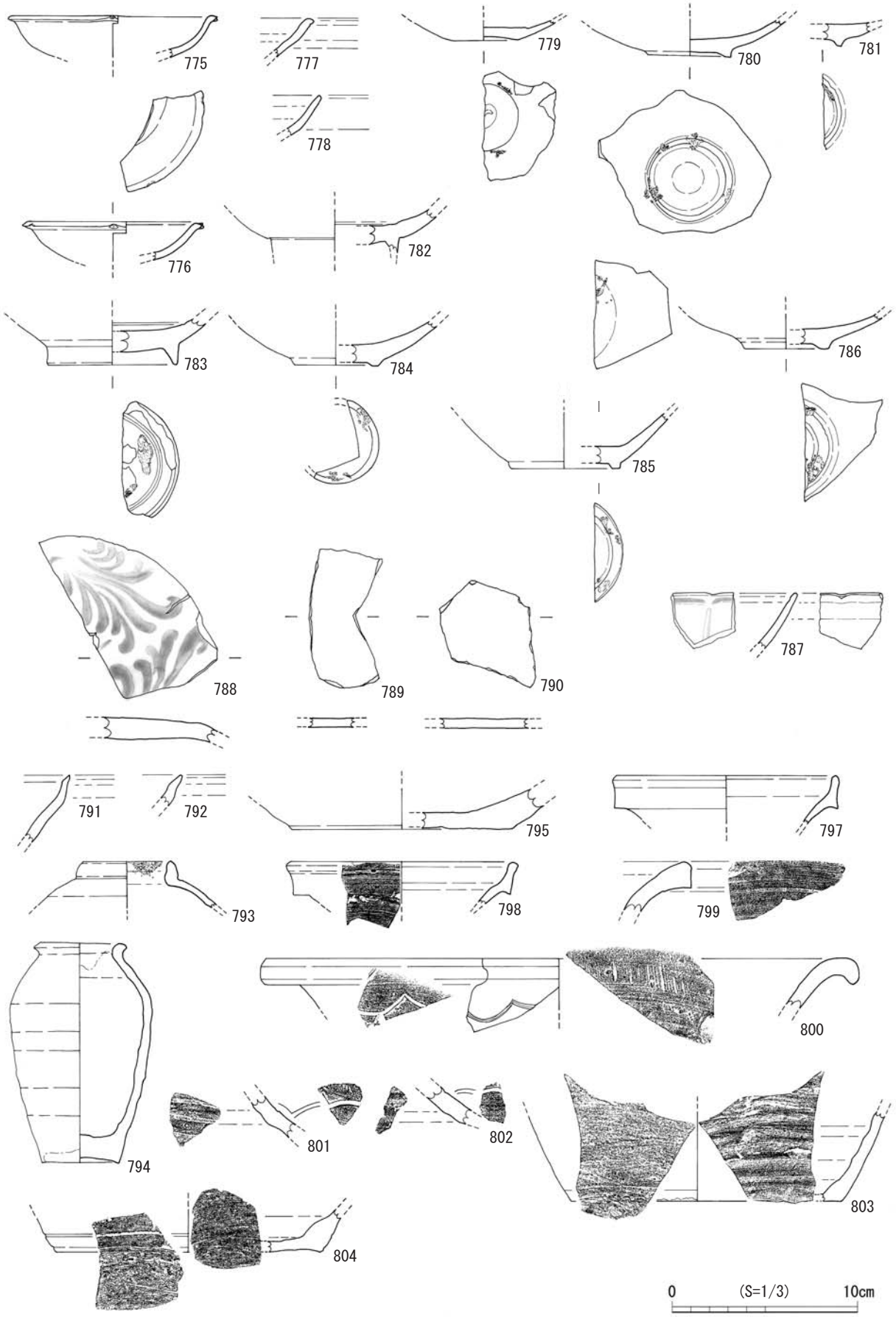
④ TAK201405調査区2層　出土遺物(第252～255図、図版251～254、第180～187表)

**739**は瓦器皿である。体部は指頭痕が巡る底部境から直線的に伸びた後口縁部はほぼ直立する。切り離しは右回転の糸切りである。12世紀後半の所産か。**740**は東播系椀の底部である。右回転の切り離しでその後の調整は行われていない。**741**は東播系の捏鉢と胎土や焼成の状態が同じであることから同地区の製品と思われるが、口径が小さく器種は不明である。**742**は瓦器椀の底部である。細く短い高台が外へ張り出す。シャープな作りである。また、体部には指頭痕が残り回転台を使わない成形であることから搬入品と思われる。ミガキは確認できない。**743**は天目茶碗底部である。にぶい橙の胎土に黒釉が厚く掛かる。古瀬戸と思われる。**744**は瓦質の甕の口縁部である。口縁部は頸部から大きく外反し端部には沈線状の段ができる。頸部外面にはナデの下に格子目のタタキ痕が残る。樺万丈窯の製品と思われる。**745**は常滑焼の大甕口縁部である。口縁部は折り返され「N」字状を呈する。13世紀代のものと思われる。**746～754**はカムィヤキである。断面の色調は、表裏の外面が暗灰色で中心が小豆色を呈する。胎土には微細な白色粒子を含む。**746**は壺口縁部である。口縁部は肥厚し、端部には沈線状の段が巡り下端が突出する。安里氏による口縁形式のⅡ式(安里2006) に相当する。11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。**747**は頸部片である。**748・749**は波状沈線が施された肩部片である。いずれも内面は強い回転ナデ痕が残る。**750～754**は胴部片である。**750・751**は外面の回転ナデ痕の下にタタキ痕が残る。内面には強い回転ナデ痕が残る。**752**は、回転ナデ痕の下に外面は格子目のタタキ痕が、内面には樹枝状の当て具痕が残る。**753・754**は回転ナデ痕が内外面に見られる。**755～771**は白磁である。**755**は皿Ⅳ類である。碁笥底で内面には点掻文と片彫りによる文様が描かれる。**756**も碁笥底の皿である。見込みには片彫りの花文が描かれる。**757**は椀Ⅱ類底部である。高台内は兜巾状を呈する。体部下半は露胎である。見込みは小さく一段凹む。**758**は椀Ⅷ類の底部である。見込みの釉を輪状に掻き取る。高台内に墨で「上」字が書かれる。**759**は椀の底部である。高台は撥形に広がる。内面が露胎である。高台内に3文字の墨書が残る。対称に書かれていることから、四隅に各一字書かれたものと思われる。文字の詳細は不明である。**760**は小椀である。高台断面は四角形で高台内は浅い削り出しである。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。見込みは中央が盛り上がり小さく一段凹む。体部内面の中位に浅い沈線状の段を設け、その下に箆描き文が施される。体部下半は露胎である。**761**は杯である。底部は上げ底で、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。見込みには段状の圏線が巡り、そこから口縁に向かい白堆線が描かれ内面を分割する。体部下半は露胎である。**762**は壺Ⅱ類の体部下半である。削り出しによる高台はわずかに外方へ開く。外面は畳付際まで施釉され内面は露胎である。**763**は最大径が肩部にある無頸の小壺である。内面は露胎である。**764**は小杯である。削り出しによる高台で体部は直線的に立ち上がる。見込みの釉を輪状に掻き取る。**765**は高台付きの小杯であろうか。高台は高く外方に広がる。高台内は露胎である。**766**は水注の注口である。**767**は水注の把手である。浮文が施される。**768**は水注もしくは壺の肩部である。浮文が施さ



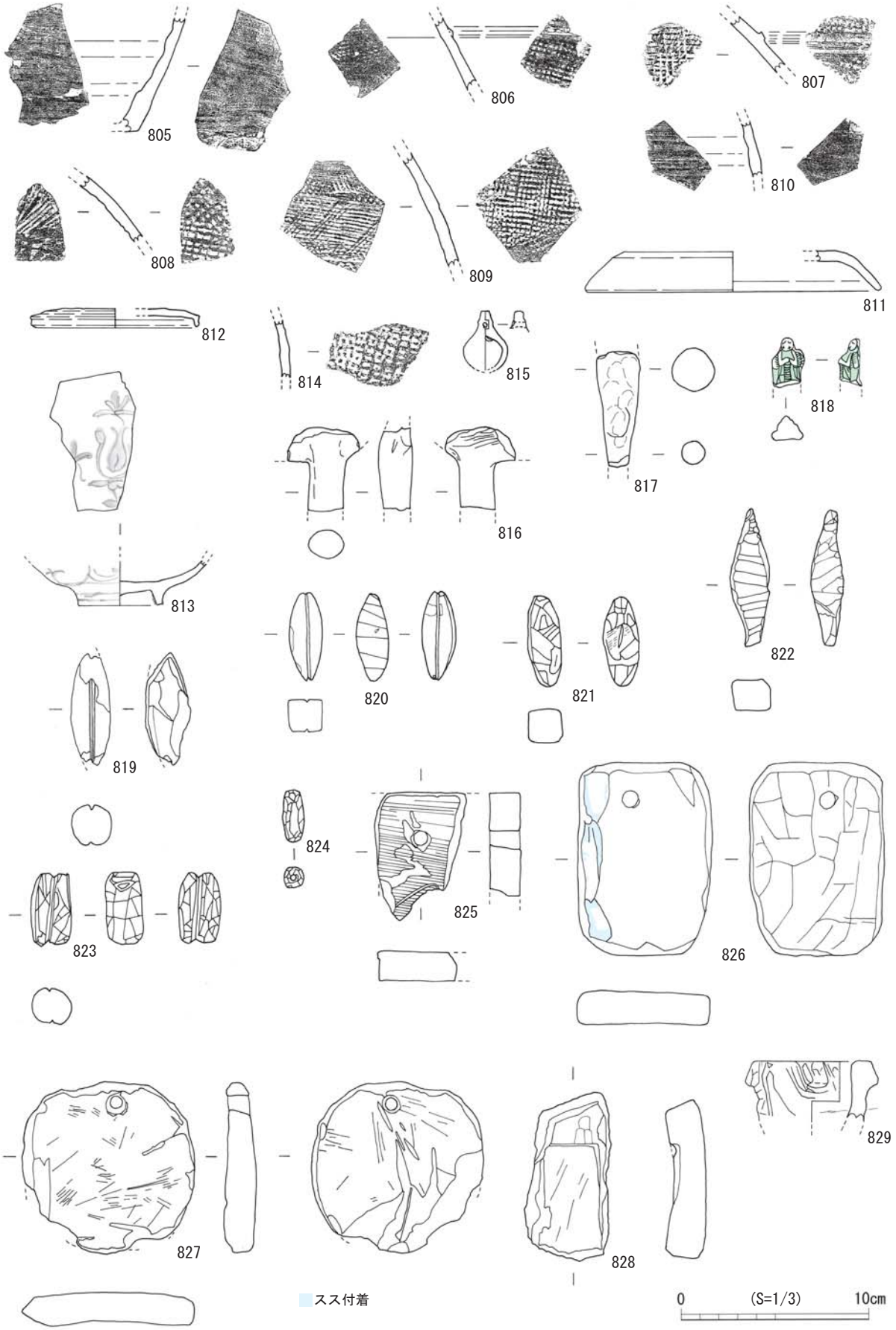

第252図　TAK201405調査区2層出土遺物－1(S＝1/3)

図版251　TAK201405調査区2層出土遺物－1



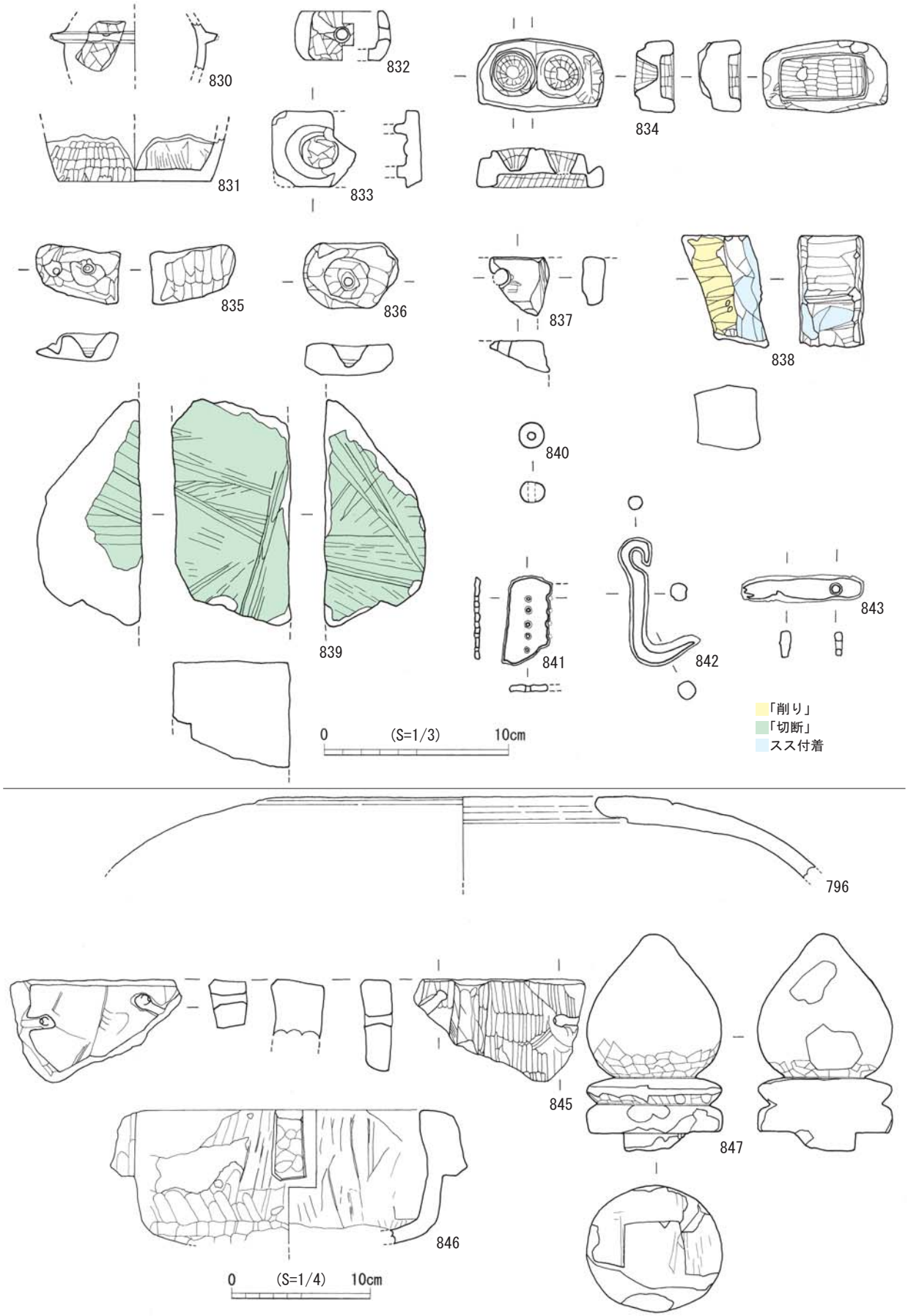

第253図　TAK201405調査区2層出土遺物－2(S＝1/3)

図版252　TAK201405調査区2層出土遺物－2




第254図　TAK201405調査区2層出土遺物－3(S＝1/3)

図版253　TAK201405調査区2層出土遺物－3




第255図　TAK201405調査区2層出土遺物－4(S＝1/3、陶器甕・石鍋・宝珠 S＝1/4)

図版254　TAK201405調査区2層出土遺物－4

## 第180表　TAK201405調査区2層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 739 | 瓦器　皿 | 完形 | 8.3 | 2.1 | 5.7 | 指オサエ | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | 8064 | 右回転糸切り |
| 740 | 東播系　椀 | 底部 | — | (1.8) | (5.8) | — | — | 灰色 | 灰白色 | 良好 | 微細な砂粒 | ②8068 | 外面に粘土紐接合痕有 |
| 741 | 不明 | 口縁部 | (9) | (3.5) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ②8468 | 東播系か |
| 742 | 瓦器　椀 | 底部 | — | (1.8) | (5.7) | 指オサエ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ①8272 | 回転台不使用　輸入品か |
| 743 | 古瀬戸　天目茶碗 | 底部 | — | (1.5) | 3 | — | — | にぶい橙色 | 黒色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8272 | 黒釉 |
| 744 | 瓦器　甕 | 口縁部～頸部 | — | (3.7) | — | 頸部に格子目タタキ後ナデ | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | ②8068 | 樺万丈窯　口縁端部に沈線状の段有 |
| 745 | 常滑焼　大甕 | 口縁部 | — | (6.3) | — | — | — | 灰黄色 | 黄褐色 | 良好 | 長石 | ④7862 | 折り返され「N」字状 |
| 746 | カムイヤキ　壺 | 口縁部 | — | (1.3) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | ⑤7460 | 安里Ⅱ式　器肉断面に小豆色の芯がある |
| 747 | カムイヤキ　壺 | 頸部 | — | (2.2) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | ⑤7460 | 器肉断面に小豆色の芯がある |
| 748 | カムイヤキ　壺 | 肩部 | — | (3.2) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石　雲母 | ⑤7462 | 器肉断面に小豆色の芯有 波状沈線 |
| 749 | カムイヤキ　壺 | 肩部 | — | (2.2) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石　雲母 | ⑤7462 | 器肉断面に小豆色の芯有 波状沈線 |
| 750 | カムイヤキ　壺 又は　甕 | 胴部 | — | (2.1) | — | 格子目タタキ後回転ナデ痕 | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | ⑤7492 | 器肉断面に小豆色の芯有 波状沈線 |
| 751 | カムイヤキ　壺 又は　甕 | 胴部 | — | (2.4) | — | タタキ後回転ナデ | 強い回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | ⑤7460　7600 | 器肉断面に小豆色の芯有 |
| 752 | カムイヤキ　壺 又は　甕 | 胴部 | — | | — | 格子目タタキ後回転ナデ痕 | 樹枝状の当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ④7862 | 器肉断面に小豆色の芯有 |
| 753 | カムイヤキ　壺 又は　甕 | 胴部 | — | (1.6) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | 210 | 器肉断面に小豆色の芯がある |
| 754 | カムイヤキ　壺 又は　甕 | 胴部 | — | (1.3) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | 良好 | 長石 | ⑤7460 | 器肉断面に小豆色の芯がある |
| 755 | 白磁　皿　Ⅳ類 | 底部 | — | (1.3) | (3.9) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8407 | 内面に点掻き文　片彫りによる文様　碁笥底 |
| 756 | 白磁　皿 | 底部 | — | (1.1) | (4.4) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ②. ③8066 | 見込みに方彫り花文　碁笥底 |
| 757 | 白磁　椀　Ⅱ類 | 底部 | — | 5 | (2.2) | — | — | 明オリーブ灰色 | 明オリーブ灰色 | 良好 | 長石 | ④7864 | 高台内は兜巾状 |
| 758 | 白磁　椀　Ⅶ類 | 底部 | — | (1.8) | (3.6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ③8066 | 高台内に「上」の墨書 |
| 759 | 白磁　椀 | 底部 | — | (2) | (4.9) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ②7868 | 高台内に墨書 |
| 760 | 白磁　小椀　Ⅰ類 | 底部～口縁部 | (9.1) | 4.8 | (3.5) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ③8266 | 内面に箆描き文 |
| 761 | 白磁　杯 | 底部～体部 | — | (1.9) | (3.4) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ①8470　8472 | 内面に白推線 |
| 762 | 白磁　壺　Ⅱ類 | 底部～体部 | — | (10.4) | 7 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8472 | |
| 763 | 白磁　無頸小壺 | 口縁部～肩部 | (3) | (1.2) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ②7868 | |
| 764 | 白磁　小杯 | 底部 | — | (1.5) | (3) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ④7862 | |
| 765 | 白磁　高台付小杯 | 底部 | — | (2.2) | (3) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ①8272 | |
| 766 | 白磁　水注 | 注口 | — | (4.2) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8470 | |
| 767 | 白磁　水注 | 把手 | — | (4.9) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8472 | 浮文 |
| 768 | 白磁　水注又は壺 | 肩部 | — | (1.8) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ③8066 | 浮文 |
| 769 | 白磁　水注 | 注口 | — | (1) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ②7868 | |
| 770 | 白磁ミニチュア椀 | 底部～口縁部 | 3.7 | 1.6 | 2.4 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ②8068 | |
| 771 | 白磁ミニチュア椀 | 底部 | — | (1.1) | 2.3 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | | ②8066 | |
| 772 | 青白磁　椀 | 底部 | — | (2.2) | (4.8) | — | — | 明緑灰色 | 明緑灰色 | 良好 | 精良 | ③8066 | 櫛描文　片彫り |
| 773 | 青白磁　椀 | 底部 | — | (1.6) | (4.6) | — | — | 明緑灰色 | 明緑灰色 | 良好 | 精良 | ③8066 | 櫛描文 |
| 774 | 初期龍泉・同安窯系　青磁　0類　椀 | 口縁部～体部 | — | (5.7) | (16) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ③7866 | 外面に片彫りの縦線 内面に片彫りと点掻文 |
| 775 | 初期高麗青磁　輪花皿 | 口縁部 | (10.4) | (2.2) | — | — | — | 灰色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8472 | 康津産 |
| 776 | 初期高麗青磁　輪花皿 | 口縁部～体部 | (8.8) | (2.1) | — | — | — | 灰色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8472 | 康津産 |
| 777 | 初期高麗青磁　小皿 | 口縁部 | — | (2.1) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 白色粒子　粗い | ①8072 | 海南産 |
| 778 | 初期高麗青磁　小皿 | 口縁部 | — | (2.1) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 白色粒子　粗い | ①7870 | 海南産 |
| 779 | 初期高麗青磁　皿 | 底部 | — | (1.1) | (3.7) | — | — | オリーブ黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石 | ①8470 | 康津産　上げ底 |
| 780 | 初期高麗青磁　皿 | 底部 | — | (2) | 4.5 | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 良好 | 黒色粒子 | ① | 康津産低い輪状高台 |
| 781 | 初期高麗青磁　皿 | 底部 | — | (1.3) | — | — | — | オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ⑤7664 | 康津産低い輪状高台 |
| 782 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | — | (2.3) | — | — | — | オリーブ黄色 | オリーブ黄色 | 良好 | 長石 | ④7860 | 康津産輪状高台　見込みに一条の沈線が巡る |
| 783 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | — | (2.4) | (6.9) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ① | 康津産輪状高台　見込みに一条の沈線が巡る |
| 784 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | — | (2.4) | 4.5 | — | — | 灰オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8470 | 康津産　低い輪状高台 畳付に砂目 |
| 785 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | — | (2.9) | (5.8) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8072 | 康津産　低い輪状高台 見込み・畳付に砂目 |
| 786 | 初期高麗青磁　椀 | 底部 | — | (1.9) | (4.1) | — | — | 暗オリーブ色 | オリーブ色 | 良好 | 精良 | ①8272 | 康津産　低い輪状高台 畳付に砂目 |
| 787 | 龍泉窯系青磁　輪花椀 | 口縁部～体部 | — | (3) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ④7862 | 内面に白推線 |
| 788 | 鉄絵緑青磁　蓋 | 天井部 | — | (1.3) | — | | | オリーブ色 | オリーブ色 | 良好 | 長石 | ①8272　8470 | 外面に鉄絵　海南群珍山里窯産か |
| 789 | 陶器　盤Ⅰ類 | 底部 | — | — | — | — | — | 黄褐色 | 黄褐色 | 良好 | 白色粒子　粗い | ②8068 | 鉄絵　福建省泉州産 21と同一個体 |
| 790 | 陶器　盤Ⅰ類 | 底部 | — | — | — | — | — | 黄褐色 | 黄褐色 | 良好 | 白色粒子　粗い | ②8068 | 鉄絵　福建省泉州産 20と同一個体 |
| 791 | 陶器　天目椀 | 口縁部(鼈口) | — | (3.6) | — | — | — | 黒色 | 黒色 | 良好 | 精良 | ④7862 | |
| 792 | 陶器　天目椀 | 口縁部(鼈口) | — | (1.8) | — | — | — | オリーブ黒色 | オリーブ黒色 | 良好 | 精良 | ②8468 | |
| 793 | 陶器　壺 | 口縁部 | (4.7) | (2.5) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ①8270 | 口縁部に目跡 |
| 794 | 陶器　壺 | 完形 | 4.8 | 11.8 | 4.2 | — | — | 灰オリーブ色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 白色粒を含む | ②8068 | |
| 795 | 陶器　鉢 | 底部 | — | (2.2) | (11.9) | — | — | にぶい赤褐色 | にぶい赤褐色 | 良好 | 砂粒を多く含む | 8468　8470 | 捏鉢に使用か |
| 796 | 陶器　甕 | 口縁部～肩部 | (19.3) | (6) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 赤褐色 | 良好 | 長石　石英　砂粒を多く含む　粗い | ①8270 | |
| 797 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部(二重口縁) | (11.6) | (2.6) | — | — | — | 黒色 | 褐灰色 | 良好 | 精良 | ⑤8062 | |
| 798 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部(二重口縁) | (11.8) | (2.2) | — | — | — | 暗青灰色 | 青灰色 | 良好 | 精良 | ④8062 | |
| 799 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 口縁部 | — | (2.7) | — | — | — | オリーブ灰色 | オリーブ灰色 | 不良 | 長石 | ④8762 | |
| 800 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 口縁部～頸部 | (31.2) | (2.6) | — | 口縁外反部に板状工具の押圧痕 | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ①847　8472 | 頸部外面に　波状沈線 |
| 801 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 頸部 | — | (2.3) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ①8470　8472 | 波状文 |
| 802 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 頸部 | — | (2) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ①8470　8472 | 波状文 |
| 803 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (4.8) | (14.5) | — | 強い回転ナデ痕 | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良好 | 長石 | ④7862 | |
| 804 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (2.3) | (14.2) | — | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ④7862 | |
| 805 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (6) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 褐色粒子　長石 | ④7862 | |
| 806 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 胴部 | — | (3.9) | — | 格子目のタタキ痕 | 回転ナデの下に当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ④7862 | |
| 807 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 胴部 | — | (3) | — | 格子目タタキ後当て具痕 | 格子目タタキ後当て具痕 | 緑灰色 | 緑灰色 | 不良 | 長石 | ⑥7264 | |
| 808 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 胴部 | — | (3.5) | — | 格子目のタタキ痕 | 回転ナデの下に樹枝文 | 青灰色 | 灰色 | 不良 | 長石 | ③8066 | |
| 809 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 胴部 | — | (6.1) | — | 格子目のタタキ痕 | 並行の当て具痕 | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良好 | 長石 | ① | |
| 810 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 胴部 | — | (3) | — | 回転ナデ | 強い　回転ナデ | 灰色 | 灰色 | 良好 | 赤色粒子　長石 | ④7862 | |
| 811 | 高麗無釉陶器　壺の蓋 | 口縁部～天井部 | (15.4) | (2.1) | — | — | — | 黄灰色 | 黒褐色 | 良好 | 長石 | ⑤7462 | |
| 812 | 高麗無釉陶器　蓋(小型品) | 口縁部～天井部 | (8.6) | (1) | — | 天井部に回転ヘラ削り | — | 暗青灰色 | 暗青灰色 | 良好 | 長石 | ②7868 | |
| 813 | 青花椀 | 底部 | — | (2.4) | (4.3) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | — | ①1542 | 外面に唐草文 内面に花文 |
| 814 | 玄海灘式製塩土器　甕 | 胴部 | — | (3.2) | — | 格子目のタタキ痕 | — | 橙色 | 橙色 | 良好 | 長石　石英　角閃石 | ④7862 | |

## 第181表　TAK201405調査区2層出土　土製品観察表

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 815 | 土師質　土鈴 | 24 | 31 | — | 3 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ④7862 | |
| 816 | 土師質　不明 | 48 | 38 | 18 | 21 | 浅黄橙色 | 良好 | 長石　角閃石<br>赤色粒子 | ④7862 | |
| 817 | 土師質　不明 | 61 | 22 | 23 | 24 | にぶい橙色 | 良好 | 長石　角閃石<br>赤色粒子 | ④7464 | 人形の足か　鍋足か |
| 818 | 華南三彩エンジェル型人形 | 26 | 18 | 11 | 3 | こい緑色 | 良好 | 精良 | ②8468 | 単品又は蓋等の飾りか |

## 第182表　TAK201405調査区2層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 819 | 石錘 | 59 | 21 | 22 | 35 | 灰黄褐色 | ②8468 | 石鍋加工製品　紡錘形 |
| 820 | 石錘 | 47 | 18 | 22 | 19 | 灰色 | ①8470 | 紡錘形 |
| 821 | 石錘 | 48 | 18 | 18 | 27 | 灰黄色 | 不明 | 紡錘形 |
| 822 | 石錘 | 73 | 20 | 17 | 34 | 灰白色 | ②8068 | くびれ部を持つ紡錘形 |
| 823 | 石錘 | 38 | 21 | 19 | 28 | 灰白色 | ①8470 | 円柱状 |
| 824 | 石錘 | 27 | 11 | 12 | 4 | 灰白色 | ④8062 | 長軸方向に穿孔 |
| 825 | 温石 | 67 | 49 | 16 | 90 | にぶい黄橙色 | ②8068 | 石鍋加工製品　「切断」「折取り」「削り」 |
| 826 | 温石 | 102 | 71 | 18 | 305 | 灰白色 | ①8270 | 石鍋底部の加工製品「こすり」 |
| 827 | 温石 | 90 | 91 | 17 | 238 | 黄灰色 | ①8072 | 石鍋底部の加工品か「「削り」 |
| 828 | 硯 | 90 | 44 | 20 | 140 | オリーブ灰色 | ⑤7462 | 石鍋体部の加工製品 |
| 833 | 容器状 | 41 | 45 | 13 | 30 | 浅黄橙色 | ① | |
| 834 | 容器状 | 39 | 68 | 22 | 68 | にぶい黄橙色 | ②8468 | 穴が2個連結 |
| 835 | 容器状 | 28 | 46 | 15 | 30 | 灰白色 | ③7666 | 穴が3個連結　石鍋体部の加工製品 |
| 836 | 容器状 | 35 | 50 | 17 | 55 | 灰白色 | ①8272 | 石鍋体部の加工製品　中央凹部 |
| 837 | 不明 | 31 | 32 | 17 | 17 | 黄灰色 | ①8472 | 「削り」「こすり」「穿孔」 |
| 847 | 宝塔の宝珠 | 157 | 97 | 92 | 1820 | 褐灰色 | ⑤7660 | 良質の滑石 |

## 第183表　TAK201405調査区2層出土　ミニチュア石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 重量(g) | 調整 | | 色調 | | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 829 | 縦耳付石鍋 | 耳部 | (6.2) | (3.2) | — | 29 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ②7868 | |
| 830 | 鍔付石鍋 | 鍔部 | — | (2.6) | — | 10 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ②7868 | |
| 831 | 石鍋 | 底部 | — | (24) | (81) | 25 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8272 | 煤の付着なし |
| 832 | 縦耳付石鍋 | 底部～口縁部 | (4.5) | (2.6) | (4.0) | 20 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8470 | 縦耳の痕跡有　穿孔 |

## 第184表　TAK201405調査区2層出土　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 838 | 60 | 34 | 34 | 144 | ①8470 | 縦耳部分を加工「削り」煤付着 |
| 839 | 122 | 62 | 56 | 520 | ②8078 | 原石から切り出された素材か「切断」 |

## 第185表　TAK201405調査区2層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 845 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (11.5) | (7.4) | — | — | — | にぶい黄橙色 | 黄灰色 | ①8472 | 補修孔2箇所　結束用の溝 |
| 846 | 縦耳付石鍋 | 口縁部～底部 | (20.3) | (9.7) | (19.4) | 粗い削り | 粗い削り | 灰白色 | 灰白色 | ④8062 | |

## 第186表　TAK201405調査区2層出土　ガラス製品観察表

| 遺物番号 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 色調 | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 840 | ガラス | 13.45 | 13.65 | 10.83 | さえた青色 | 3.57 | ④8064 | |

## 第187表　TAK201405調査区2層出土　金属製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 841 | 小札 | 鉄 | 45 | 24 | 5 | 11 | ①8470 | |
| 842 | 鉤 | 鉄 | 69 | 10 | 10 | 18 | ②8468 | |
| 843 | 刀子　茎 | 鉄 | 66 | 15 | 7 | 13 | ①8270 | |
| 844 | 銅銭 | 銅 | 24 | 24 | | | ④7862 | 「聖宋元宝」写真のみ |

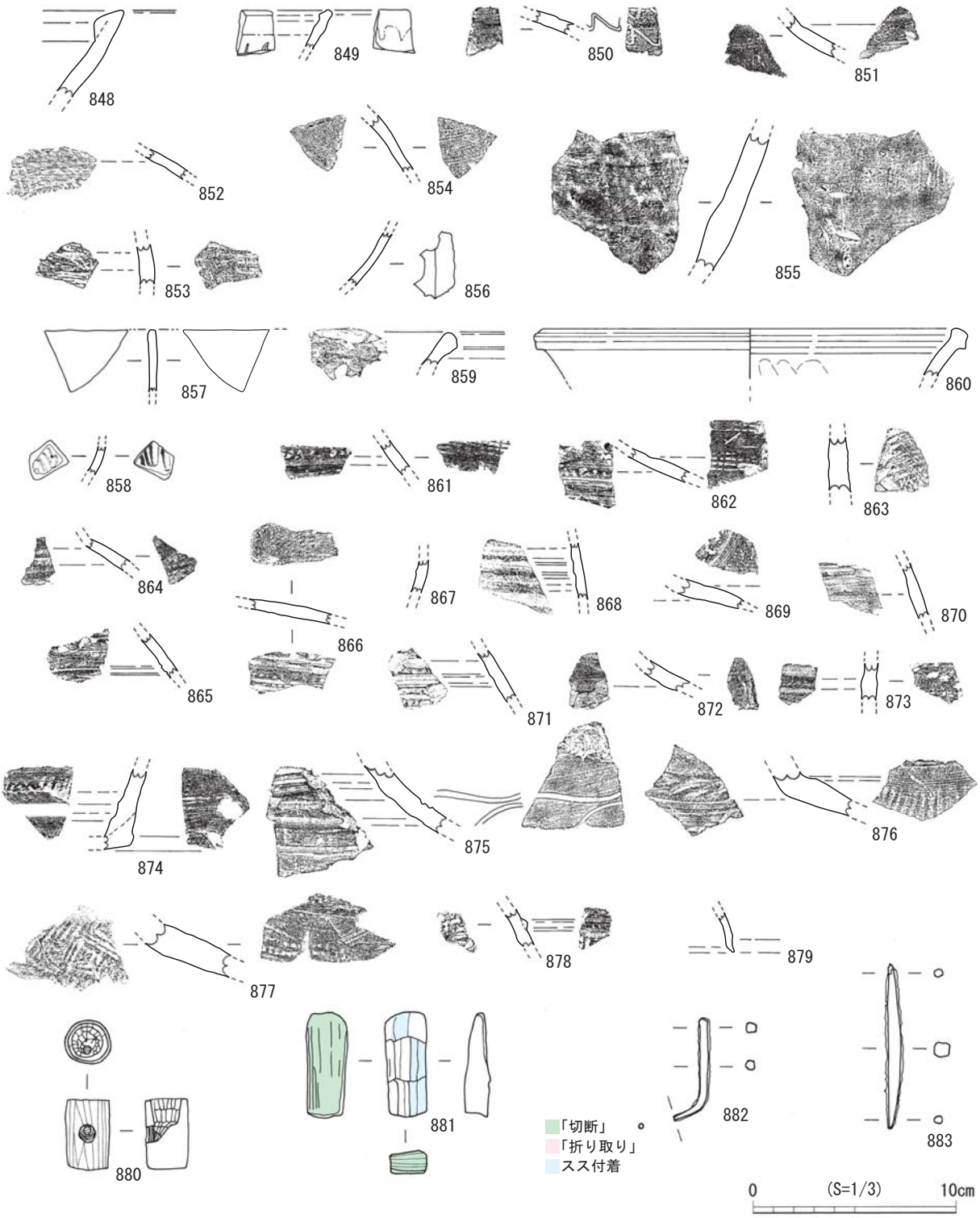
れている。769は水滴の注口である。770はミニチュアの椀である。高台内は露胎である。771はミニチュアの椀底部である。772・773は青白磁の椀底部である。いずれも高台内だけが露胎で、焼台の痕が残る。772は見込みに櫛描文と片彫り文が施される。773は見込みが小さく、内面に櫛描文が施される。774は初期龍泉・同安窯系青磁0類椀である。外面は片彫りの縦線を内面は片彫りと点掻文を施す。775〜786は初期高麗青磁である。775・776は康津産の輪花皿である。胎土は精良である。777・778は海南産の小皿口縁部である。胎土は粗く白色粒を含む。779・780・781は康津産の皿底部である。779は上げ底で体部との境に白い目跡が付く。780は低い輪状高台で畳付に白い目跡が付く。781も低い高台で釉が縮れる。782・783は康津産でしっかりとした輪状高台の椀底部である。見込みに1条の沈線が巡る。784・785・786は康津産の低い輪状高台を持つ椀である。いずれも畳付に重ね焼きの目跡が残る。785は見込みにも目跡が残る。787は龍泉窯系青磁椀の口縁部である。輪花で内面に白堆線が施される。788は鉄絵青磁の蓋である。胎土は灰色で粗く白色粒子を含む。釉は光沢のないオリーブ色で内面にも掛かる。外面には花と思われる鉄絵による文様が描かれる。小結に詳細を記した。789・790は陶器の盤Ⅰ類である。胎土は粗く白色粒子を多く含む。鉄絵の上から緑がかった褐色の釉が掛かり底部は露胎である。同一個体である。福建省泉州産と思われる。791・792は天目椀口縁部である。いずれも鼈口であるが胎土や釉調が異なることから別個体である。793は壺口縁部である。肩から直立する口縁部には重ね焼きの目跡が残る。794は完形の小壺である。長胴で最大径を肩部に持ち、口縁は「く」字状に外反する。白色粒を含む胎土に艶のないオリーブ色の釉が掛かる。795は陶器鉢底部である。砂粒を多く含む赤褐色の胎土である。内面は使用により平滑になっていることから捏鉢として使われたと思われる。796は陶器甕の口縁部である。肩部から緩やかな曲線を描き口縁部に至る。口縁部と肩部の境には沈線状の段ができる。口縁部には内面にも段がある。赤褐色の胎土は粗く砂粒を多く含み、オリーブ色の釉が掛かる。797〜814は高麗無釉陶器である。焼成の違いで硬質と軟質に分けられる。797・798は二重口縁の壺口縁部である。いずれも硬質で作りはシャープである。799は端部が肥厚する大型壺口縁部である。軟質である。800は口縁部が外反する大型壺の頸部〜口縁部である。頸部外面には波状沈線が描かれ、外反する口縁部には板状工具を押し当てたような押圧痕が残る。硬質である。801・802は波状文が施された大型壺頸部片である。いずれも硬質である。803・804・805は壺底部である。内面には強い回転ナデ痕が残る。いずれも硬質である。806・807は断面三角形の小さな凸帯を持つ大型壺の胴部片である。806は硬質で、外面には格子目のタタキ痕が、内面には回転ナデの下に当て具痕が残る。807は軟質で内外面に格子目のタタキ痕と当て具痕が残る。808・809・810は胴部片である。808は軟質で、外面には格子目のタタキ痕が内面には回転ナデの下に樹枝文が残る。809は硬質で、格子目のタタキ痕が内面には平行の当て具痕が残る。810は内外面ともに回転ナデが施される。内面の回転ナデは強い。811は壺の蓋と思われる。812は小型品の蓋と思われる製品である。端部は、天井部から直角に曲がる。天井部外面には回転ヘラケズリが施される。胎土や焼成が二重口縁壺の口縁部と似たシャープな作りであることから高麗無釉陶器と判断した。硬質である。813は青花椀である。外面には唐草文が、内面には花文が描かれる。814は玄界灘式製塩土器である。外面には格子目のタタキ痕が見られる。815〜818は土製品である。815は土師質の土鈴と思われる製品である。上部には吊り下げ用の穿孔が見られる。816は棒状の不明品である。土師質で砂粒を多く含む。上下両端が欠損している。817も棒状の不明品である。上下両端が欠損しているが、片方がす

ぼまっている。**818**は華南三彩の人形である。精選された胎土で素焼きの上に濃い緑色の釉が掛かる。両手を前に組み、背中には翼を表現したと思われる突起があることからエンジェル型の土製品と思われる。背面にも施釉され下端は欠損していることから単品もしくは蓋等の飾りであったと思われる。**819**～**839**、**845**～**847**は滑石製品である。**819**～**822**は長軸の両端がすぼまる石錘である。**819**は長軸上に一条の刻みが周る。熱を受けていることから石鍋の加工製品と思われる。**820**は面取りがされており、長軸上に一条の刻みが周る。**821**は面取りをされているが、溝が刻まれていない。**822**は面取りがされており、溝は刻まれていないが両端にくびれ部を持つ。**823**は円柱状の石錘で、長軸上に一条の刻みが周る。**824**は長軸方向に穿孔される。**825**・**826**は方形の温石と思われる。**825**は表面には切断痕が、左側縁には切断痕と折り取り痕が、上縁には削り痕が残る。背面には石鍋に見られる削り痕があることから石鍋加工製品と思われる。**826**は全体が研磨されている。断面が緩やかな曲線を描き煤が付着した面が残ることから石鍋体部の加工製品と思われる。**827**は円形の温石と思われる。周りを削りで調整している。被熱をしていることから石鍋の底部の加工製品と思われる。**828**は硯と思われる。海と陸を削り出し、形を作っている。長軸方向の断面が緩やかな曲線を描くことから石鍋体部の加工製品と思われる。**829**～**831**はミニチュアの石鍋である。**829**は縦耳付きの石鍋である。全体の作りが稚拙で耳の形も整っていない。**830**は鍔付きの石鍋である。ていねいな作りで、内面は平滑に仕上がる。**831**は外面の調整は通常の石鍋と同じである。煤は付着していない。**832**はミニチュア石鍋を加工した製品と思われる。体部には削られた縦耳の痕跡と穿孔がある。ていねいな作りである。833～836は容器状の製品である**833**は、平らな底を持ち一回り小さい円柱状の容器部分が付く。**834**は、円形の穴が2個連結している。底面には方形の抉りがあり1個の穴の底が抜けている。稚拙な作りである。**835**も円形の穴が2個連結している。断面が緩やかな曲線を描くことから石鍋体部の加工製品と思われる。稚拙な作りである。**836**は中央に凹部を作り出している。断面が緩やかな曲線を描くことから石鍋体部の加工製品と思われる。**837**は平面形が方形で、角に「穿孔」のある滑石製品である。元の形状については不明である。「削り」、「こすり」の調整が見られる。**838**は石鍋の縦耳部分を加工したものである。耳の幅に合うように胴部に「削り」を入れている。石鍋を加工した素材である。**839**は良質の滑石で、方柱状を呈していたと思われる。全面に鋸と思われる工具による「切断」痕が残る。宝塔の一部の可能性も考えたが、研ぎ出しが行われていないことから宝塔ではないと判断した(註2)。原石から切り出された滑石製品を作り出す素材と思われる。**840**はガラス製の玉である。さえた青色(註3)を呈し、わずかに扁平である。**841**は鉄製の小札である。穿孔は縦方向に2列、5段確認できる。**842**は鉄製の鉤である。**843**は刀子の茎である。目釘穴が見られる。**844**は「聖宋元宝」である。脆弱なために図化は行っていない。**845**は縦耳付きの石鍋である。2箇所の補修用と思われる穿孔があり、結束を強めるための溝が刻まれている。**846**も縦耳付きの石鍋である。外面は、通常の石鍋に見られる規則正しいノミ痕が体部と底部の境に見られるのみで、粗い削り痕が前面に残る。内面の削り痕も粗い。**847**は宝塔の宝珠である。良質の滑石で作られる。類例は諫早市平松神社、波佐見町クルス碑発見地がある。(註4)

**⑤ TAK201406調査区2層　出土遺物(第256図、図版255、第188～191表)**

**848**は周防型の擂鉢である。口唇部が内側に大きく突出する。15世紀～17世紀初頭のものと思われ

る。**849**は古瀬戸のおろし皿口縁部である。口縁部内面には低い段状の凸線が巡り、その下に摺目が施される。胎土はざっくりとしており、口縁部にくすんだ緑色の釉が掛かる。**850**〜**855**はカムィヤキの壺である。**850**は波状沈線が施された肩部片である。内面には回転ナデ痕が残る。**851**は頸部と接する肩部片である。内外面に回転ナデ痕が残る。**852**・**853**は体部片である。内面の回転ナデ痕の下に当て具痕が残る。**854**は内外面に回転ナデ痕が残る体部片である。**855**は底部に近い体部片である。内面には、焼成の際の胎土中に含まれた空気の膨張による凹凸が見られる。**856**・**857**は白磁である。**856**は椀体部である。鎬に似た面取りが見られる。白色の胎土は精良で、光沢のある釉薬が掛かる。白磁椀類と思われる。**857**は体部〜口縁部と思われるが、横方向には、曲線を描かず直線で伸びることから椀や鉢などロクロにより作られたものではなく、箱物の一部ではないかと思われる。11世紀後半〜12世紀中頃の白磁製品と胎土や釉の調子が似ていることから同時代のものと思われる。**858**は華南三彩の椀と思われる体部片である。外面には浮き彫りが施される。素焼きの胎土に濃い緑色の釉薬が掛かる。内面には釉の濃淡がある。**859**〜**874**は硬質の高麗無釉陶器壺である。**859**は端部が外反し肥厚する口縁部片である。**860**はわずかに端部が肥厚し断面三角形の凸帯が巡る口縁部片である。**861**〜**864**は外面の回転ナデ痕の下に格子目のタタキ痕が残る体部片である。**865**〜**873**は内外面に回転ナデ痕のみが残る体部片である。**874**は大型壺の底部と体部の境にあたる部位片である。内面には強い回転ナデ痕が残る。**875**〜**878**は軟質の高麗無釉陶器壺である。**875**は大型壺の頸部片で波状沈線が施される。内面には強い回転ナデ痕が残る。**876**は大型壺の肩部片で、外面は回転ナデ痕の下に格子目のタタキ痕が残る。**877**は大型壺の肩部片で回転ナデ痕の下に外面は格子目のタタキ痕が、内面は樹枝文が見られる。**878**は断面三角形の凸帯が巡る体部片である。外面には格子目のタタキ痕が残る。**879**は壺等の蓋と思われる口縁部片である。端部は断面三角形に薄く引き延ばされる。薄作りで、硬質の焼成である。**880**は滑石製煙管火皿である。平面形は中央がわずかに膨らみ、底部はわずかに凸状を呈する。火皿の穿孔は奥がすぼまる形状で、側面の穿孔は斜め下を向く。火皿、側面の穿孔部分には加工痕が残るが、外面は平滑に磨く。**881**は縦耳の耳部を切り取った石鍋を加工した素材である。下面には「切断」痕が、裏面には「切断」痕と「折り取り」痕が残る。表面には石鍋時の煤が残る。**882**と**883**は鉄製品である。**882**は断面四角形で、先端が曲がるが釘と思われる。**883**は断面が四角形で両端が尖る。カエシは無いがヤスではないかと思われる。




第256図　TAK201406調査区2層出土遺物(S=1/3)

図版255　TAK201406調査区2層出土遺物

## 第188表　TAK201406調査区2層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 848 | 瓦質土器　擂鉢 | 口縁部 | — | (4.3) | — | — | — | 灰白色 | 淡黄色 | 良好 | 長石 | ④6652 | 周防型 |
| 849 | 陶器　おろし皿 | 口縁部 | — | (2) | — | — | — | オリーブ色 | オリーブ色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ④6852 | 古瀬戸 |
| 850 | カムィヤキ　壺 | 肩部 | — | (1.2) | — | — | 回転ナデ痕 | 褐灰色 | 黒褐色 | 良好 | 長石 | ②7052 | 波状沈線有 |
| 851 | カムィヤキ　壺 | 頸部～肩部 | — | (2) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 褐灰色 | 褐灰色 | 良好 | 長石 | ①7250 | |
| 852 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (1.5) | — | — | 回転ナデ痕下に当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ②7050 | |
| 853 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (2.1) | — | — | 回転ナデ痕下に当て具痕 | 青灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ③6850 | |
| 854 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (2.8) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ④6852 | |
| 855 | カムィヤキ　壺 | 底部付近の体部 | — | (6.8) | — | — | — | 暗灰黄色 | 黒褐色 | 良好 | 長石　石英 | ③ | 内面に焼成時の凸凹有 |
| 856 | 白磁　椀 | 体部 | — | (2.6) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | ④6652 | 鎬に似た面取り |
| 857 | 白磁　箱物？ | 口縁部～体部 | — | (3.1) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 精良 | ②7050 | |
| 858 | 華南三彩　椀 | 体部 | — | (1.4) | — | — | — | 暗緑灰色 | 暗緑灰色 | 良好 | — | ②7050 | 外面に浮彫り<br>内面に釉の濃淡有 |
| 859 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | — | (1.7) | — | — | — | 青黒色 | 青灰色 | — | 長石 | ③ | 硬質 |
| 860 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | (20.2) | (2.4) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ④6652 | 硬質　端部に断面三角形の凸帯が巡る |
| 861 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.7) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | — | 暗灰色 | 灰色 | — | 長石 | ④6652 | 硬質 |
| 862 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.6) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | — | 暗青灰色 | 青灰色 | — | 長石 | ④6452 | 硬質 |
| 863 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.7) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ②7252 | 硬質 |
| 864 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.6) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | — | 青灰色 | 青灰色 | — | 長石 | ③6850 | 硬質 |
| 865 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.1) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 暗灰色 | — | 長石 | ④6854 | 硬質 |
| 866 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.2) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 灰色 | 暗灰色 | — | 長石 | ④6652 | 硬質 |
| 867 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.6) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 褐灰色 | 褐灰色 | — | 長石 | ④6852 | 硬質 |
| 868 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.9) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 灰色 | — | 長石 | ③6850 | 硬質 |
| 869 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.4) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ④6852 | 硬質 |
| 870 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.8) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 灰色 | — | 長石　赤色粒子 | ③6850 | 硬質 |
| 871 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (2.6) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 褐灰色 | 黒褐色 | — | 長石 | ②7052 | 硬質 |
| 872 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.5) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ③6850 | 硬質 |
| 873 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.9) | — | 回転ナデ痕 | 回転ナデ痕 | 暗灰色 | 灰色 | — | 長石 | ④6652 | 硬質 |
| 874 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部と体部の境 | — | (3.8) | — | — | 強い回転ナデ痕 | オリーブ黒色 | 灰色 | — | 長石 | ③6850 | 硬質 |
| 875 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 頸部 | — | (3.3) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | — | 長石　赤色粒子 | ② | 軟質　波状沈線有 |
| 876 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 肩部 | — | (2.2) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | — | 灰色 | 灰白色 | — | 長石　赤色粒子 | ④6652 | 軟質 |
| 877 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 肩部 | — | (2.5) | — | 回転ナデ痕下に格子目のタタキ痕 | 樹枝文 | 明オリーブ　灰色 | 明オリーブ　灰色 | — | 長石　赤色粒子 | ②7050 | 軟質 |
| 878 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (1.8) | — | 格子目のタタキ痕 | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石　赤色粒子 | ④6852 | 軟質　断面三角形の凸帯が巡る |
| 879 | 高麗無釉陶器<br>壺等の蓋 | 口縁部 | — | (2.1) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ②7252 | 硬質 |

## 第189表　TAK201406調査区2層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 880 | 煙管　火皿 | 35 | 22 | 21 | 27.11 | 黒褐色 | ③6850 | 外面は平滑 |

## 第190表　TAK201406調査区2層出土　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 881 | 52 | 21 | 18 | 23.3 | ③6848 | 縦耳石鍋の耳部「切断」「折り取り」　表面に煤付着 |

## 第191表　TAK201406調査区2層出土　金属製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 882 | 釘 | 鉄 | 51 | 6 | 5 | 3.05 | ②7050 | 断面四角形 |
| 883 | ヤス？ | 鉄 | 81 | 8 | 7 | 5.93 | ②7252 | 両端が尖る　カエシ無し |

註1　この遺物については、『竹松遺跡Ⅱ』4古代・中世(3)文字資料と石帯(巡方)および石製キセルの火皿部分 P278、P279で図版番号②として実測図と計測表を掲載している。

註2　(株)オリエントアイエヌジー　顧問の大石一久氏より仏塔の可能性は低いとの教示をいただいた。

註3　日本色研事業株式会社『新配色カード1996』による。

註4　大石一久氏の教示による

参考文献

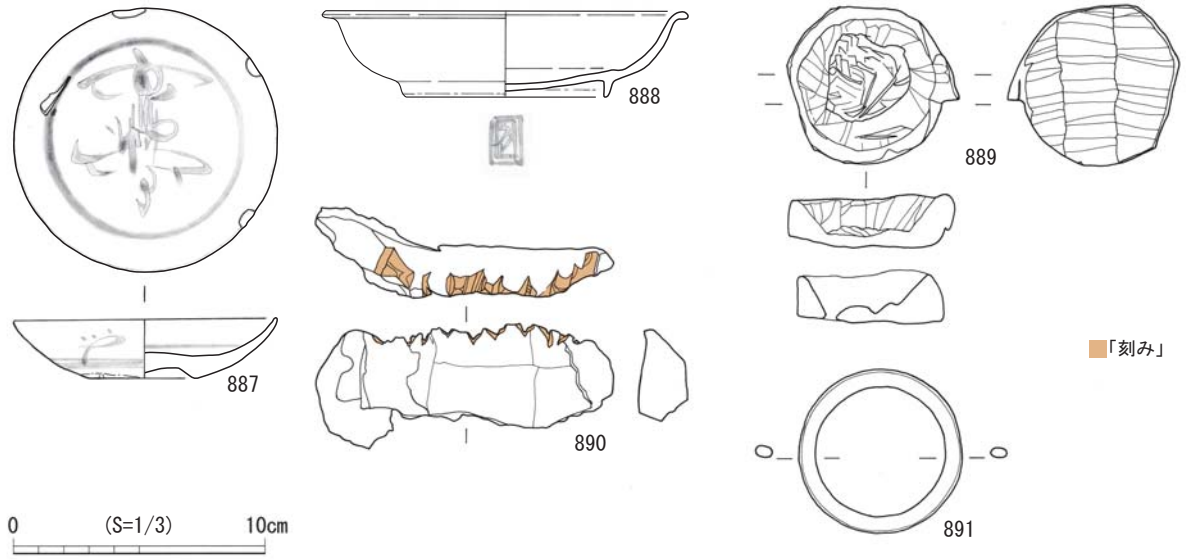
小野正敏　1982「15～16世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会による

安里　進　2006「カムィヤキ（亀焼）の器種分類と器種組成の変遷」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会による

(12)包含層(3層)出土の遺物

① TAK201403調査区3層　出土遺物(第258図、図版257、第194～197表)

**887**は障州窯産の染付皿C群(小野1982)である。碁笥底で見込には吉祥の字が、外面には略化した文字と思われる文様が3箇所描かれる。15世紀後半～16世紀中頃の所産である。**888**は白磁皿C群(小野1982)である。端反りで高台内には染付けによる銘が記される。15世紀後半～16世紀後半のものである。**889**は容器に柄がつくと思われる柄杓状の製品である。石鍋の体部を加工したもので、そのために底部は湾曲する。粗い削り出しで容器内面を作り出している。外底部に石鍋時の体部の削り痕がそのまま残る。**890**は石鍋加工素材である。上面に「刻み」痕が繋がり鋸歯状を呈する。湾曲していることから石鍋体部を利用していると思われ、被熱のために赤変している。**891**は銅製の環状製品である。




第258図　TAK201403調査区3層出土遺物(S=1/3)

図版257　TAK 201403調査区3層出土遺物

第194表　TAK201403調査区3層出土　磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 887 | 染付け皿　C群 | ほぼ完形 | 10.3 | 2.4 | 4 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | 0670 | 漳州窯系　碁笥底 |
| 888 | 白磁　皿　C群 | 完形 | 14.1 | 3.4 | 7.8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ②0670 | 銘有 |

第195表　TAK201403調査区3層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 889 | 柄杓状 | 62 | 68 | 22 | 95 | 明赤灰色 | 0870 | 石鍋加工製品 |

第196表　TAK201403調査区3層出土　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 890 | 117 | 38 | 18 | 154 | 1070 | 上端に刻み痕 |

第197表　TAK201403調査区3層出土　金属製品観察表

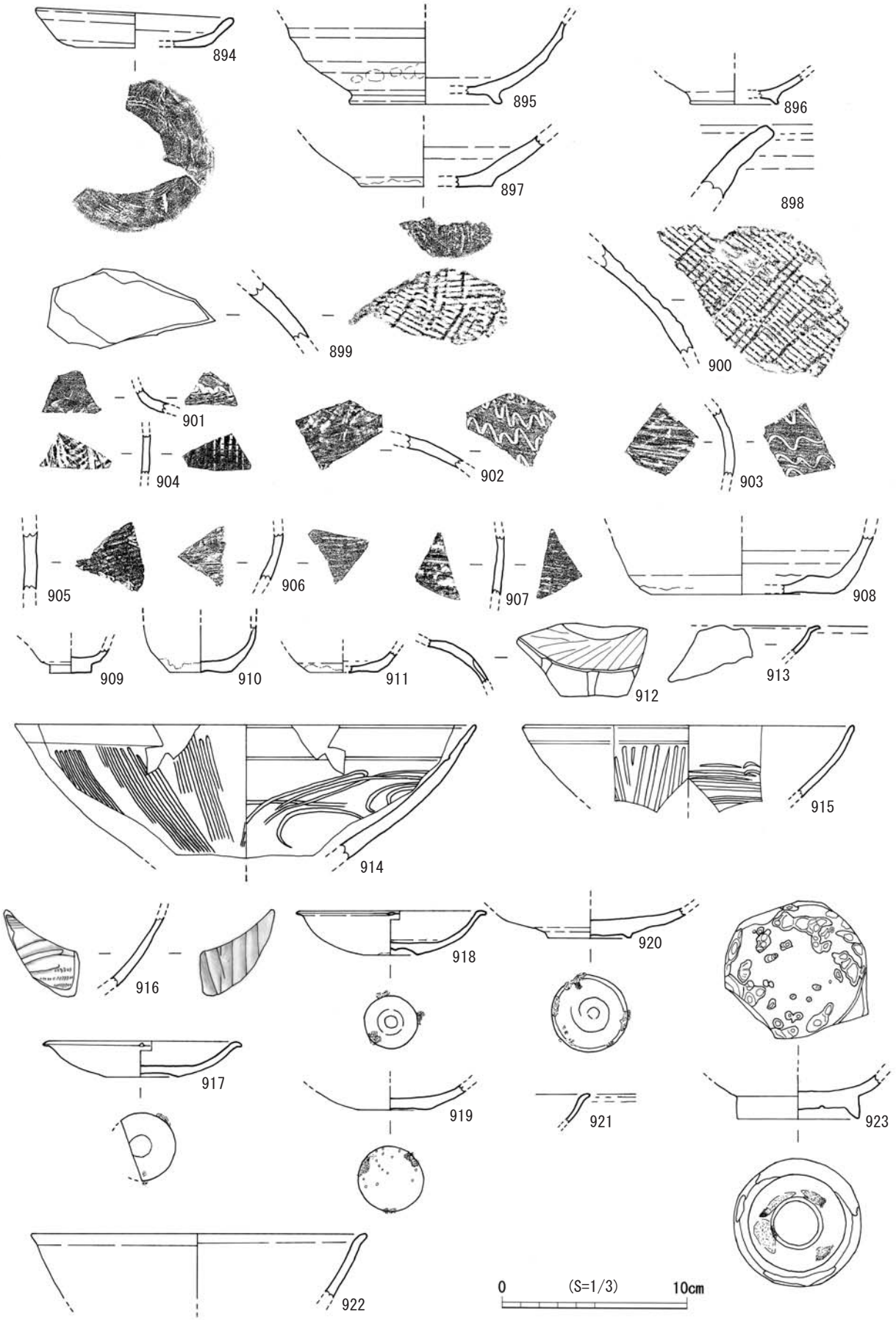
| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 891 | 環状製品 | 銅 | 65 | 7 | 5 | 39.93 | 1472 | |

### ② TAK201405調査区3層　出土遺物(第260～264図、図版259～263、第199～205表)

**894**は瓦器皿である。切り離しは左回転の糸切りである。12世紀後半のものと思われる。**895**は瓦器椀である。成形の際の指頭痕が体部外面に残る。摩滅のためにミガキが行われていたかどうかは不明である。搬入品と思われる。**896**も搬入品と思われる瓦器小椀である。細く低い高台が外向きに付く。薄い作りである。摩滅のためにミガキが行われていたかどうかは不明である。**897**は東播系須恵器の椀である。底部は右回転の糸切りで切り離したままで、はみ出した粘土を体部側に撫で付けている。11世紀後半のものと思われる。**898～900**は樺万丈窯産の須恵器甕である。外面は黒味を帯びた灰色で軟質である。**898**は口縁部片である。ほぼ同じ厚さを保ちながら外反する。**899・900**は胴部片である。外面には格子目のタタキ痕が見られる。**901～908**はカムィヤキ壺である。**901**は肩部片である。外面に波状沈線文が施される。**902～907**は体部片である。**902・903**は外面には波状沈線文が4本描かれ、内面は回転ナデの下に当て具痕がわずかに残る。**904～907**は回転ナデが施され、外面には格子目のタタキ痕が、内面には当て具痕がわずかに残る。**908**は底部片である。体部には強い回転ナデが施される。底部内面には凹凸が見られる。**909～912**は白磁である。**909**は高台風の底を持つ小壺である。高台風の底は内側が凹まずに平底である。**910**はわずかに上げ底の小壺である。底部際まで釉が掛かる。**911**は平底の小壺である。底部際まで釉が掛かる。**912**は瓶の肩部もしくは蓋である。型押しと片彫りにより文様が施される。内面は露胎である。**913**は青白磁の輪花皿である。内面には輪花の下から細い白堆線が伸びる。薄作りの優品である。**914・915・916**は初期龍泉・同安窯系青磁0類である。**914**は大振りの浅椀で、体部はわずかに内湾しながら伸び、口縁部境に低い段を持つ。外面には9～10条の幅広の櫛目が縦に施される。内面は口縁下に横位の沈線が巡り、その下に箆状工具により曲線の文様を描く。釉が溶けきらずににごったオリーブ色を呈する。**915**も浅椀である。体部は上位でわずかに内側へ曲がる。外面には片彫りで縦線が施され、内面は箆状工具により横位の文様を描く。**916**は椀の体部片である。外面には片彫りで縦線が施され、内面は箆状工具により横位の文様と櫛点猫文が

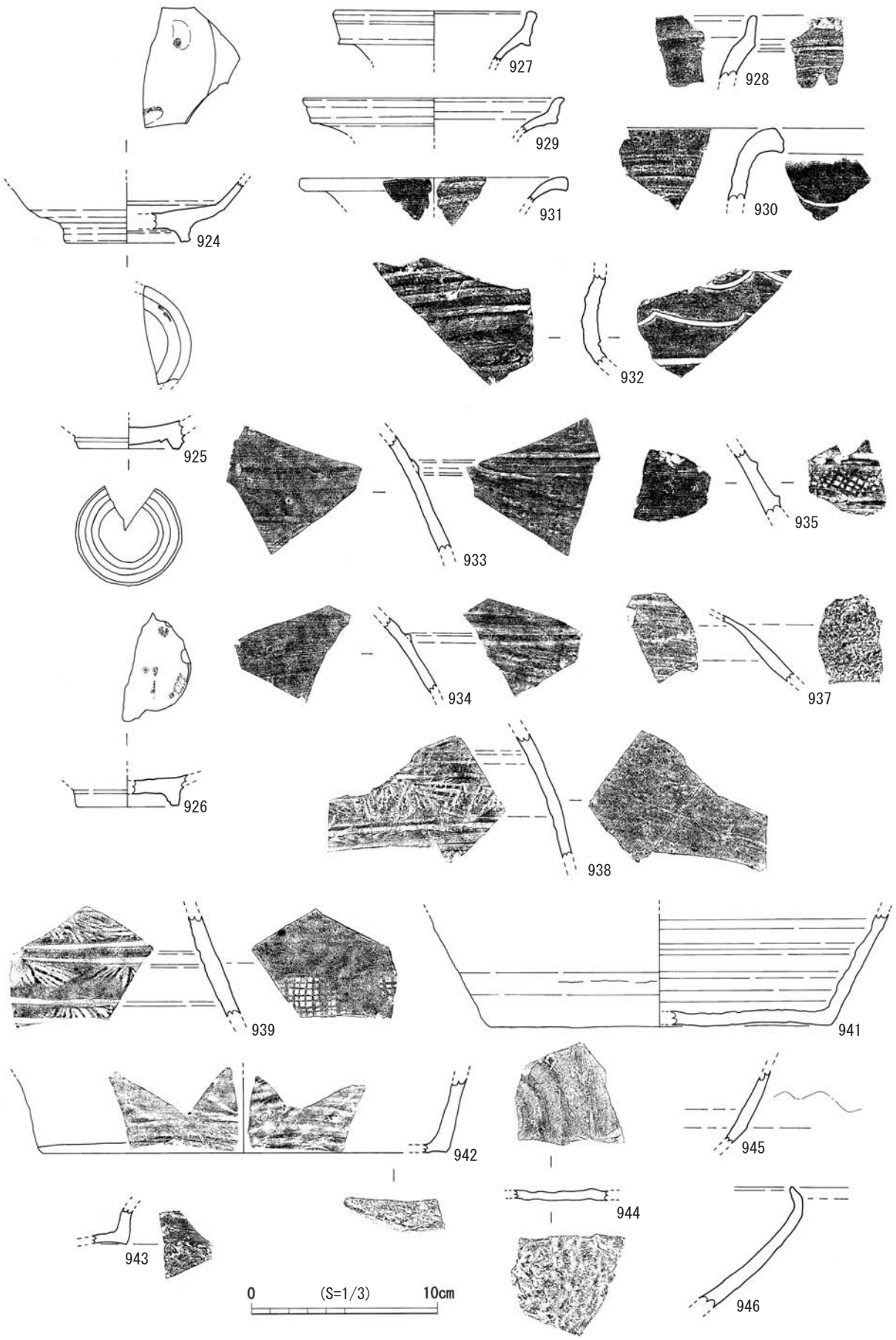
描かれる。釉調と胎土が異なることから3点は別個体である。**917**～**926**は初期高麗青磁である。**917**・**918**は皿Ⅰ類である。碁笥底の底部から体部はふくらみを持って立ち上がる。口縁端部は外方に出て嘴状を呈し小さな輪花が施される。全面施釉で底部には白色の目跡が3個残るが、内面には見られないことから、焼成の際には最上段に置かれたと思われる。康津産である。**919**・**920**は康津産の皿Ⅰ類底部片である。**919**は碁笥底である。全面施釉で底部には白色の目跡が3個残る。釉が溶けきっておらずにぶい橙色を呈するが胎土は精良である。内面には目跡はない。**920**は低い輪状高台である。全面施釉で底部には白色の目跡が3個残る。内面には目跡はない。**921**は嘴状を呈する皿Ⅲ類の口縁部である。海南産である。**922**～**926**は椀である。**922**はⅢ類の口縁部である。端部はわずかに外反する。**923**・**924**はⅠ類底部である。**923**は高い高台で、高台内に3箇所の目跡が付く。見込みには一条の沈線が巡り、敲打によるものかあばた状の剥離が全面に見られる。**924**は畳付の釉を掻き取り高台内側と見込みに目跡が残る。見込みには浅い沈線が巡る。**925**・**926**は椀Ⅲ類である。白色粒子が混ざる粗い胎土で、畳付の釉は掻き取りオリーブ色の釉が掛かる。高台の削りだしも雑である。**925**は畳付に目跡が残る。海南産である。**926**は見込みに白色の目跡が残る。海南産である。**927**～**944**は高麗無釉陶器である。**927**・**928**・**929**は硬質の二重口縁の壺口縁部である。**927**は非常にシャープな作りである。**928**は屈曲部に浅い沈線が巡る。**930**は軟質の大型壺の口縁部である。大きく外反し頸部には波状沈線が施される。**931**は硬質の壺口縁部である。大きく外反する。**932**は硬質の大型壺の頸部である。肩部との境には段状の沈線が巡り、頸部には波状沈線が施される。**933**～**940**は壺体部片である。**933**は硬質で扁平な凸帯が巡る。**934**は硬質で角の取れた断面三角形の凸帯が巡る。**935**は軟質で、外面には格子目のタタキ痕が、内面には強い回転ナデ痕が残る。断面三角形の小さな凸帯が2本巡る。**936**は軟質の大型壺である。外面には格子目のタタキ痕が見られ、断面三角形で小さな凸帯が3本巡る。内面には強い回転ナデ痕が残る。胎土はマーブル状を呈する。**937**は硬質で、外面には格子目のタタキ痕が、内面には強い回転ナデ痕が残る。**938**は硬質で、強い回転ナデの下に外面はタタキ痕が、内面は樹枝文が残る。**939**は硬質で、強い回転ナデの下に外面は格子目のタタキ痕が、内面は樹枝文が残る。**940**は軟質の大型壺である。強い回転ナデの下に外面は格子目のタタキ痕が、内面は樹枝文が残る。**941**～**944**は壺底部片である。**941**・**942**・**943**は硬質の大型壺の底部片である。内外面に強い回転ナデ痕が残る。**944**は平底部分にあたる。硬質で、内面は体部の調整で見られる強い回転ナデ痕が残る。**945**は天目茶碗である。灰色の硬質の胎土に黒釉が掛かる。**946**は焼き締めの鉢である。斜めに伸びる体部から口縁部は内側に屈曲する。外面は口縁部下まで回転ヘラケズリが施されている。灰褐色の胎土は精良であるが、長石や石英粒を含む。**947**は陶器壺の底部である。内面には強い水引き痕が残り、外面には加飾であろうか篦状工具による抉りが施されている。露胎であるが上位に施釉されていたかどうかは不明である。**948**は平瓦である。凸面には目の細かい布目がのこり、凹面には撚紐痕が付く。瓦の出土はこれまでこの1点だけである。**949**・**950**は紡錘形の滑石製石錘である。長軸上に1条の溝が巡る。**951**は上半と下半が上方へわずかに反り鰹節状を呈する。端軸方向に端部に2箇所、長軸方向に端部に2箇所溝が刻まれる。上端には横方向の溝も見られる。同じ形態の滑石製品は『竹松遺跡Ⅱ』（長崎県教委2017）で3点報告している（遺物番号**569**、**582**、**588**）。**952**は硬質の滑石で作られた砲弾型の錘である。対角線上に横方向の穿孔が行われ、中で繋がっている。外面は研磨痕が見られる。**953**は穿孔のある温石である。上質の石材でていねいに研磨されている。**954**は権状の未製品である。断面は

方柱状を呈し、上部に摘みに似た突起を作り出している。**955**〜**965**はミニチュアの石鍋である。**955**〜**958**は縦耳付きの石鍋である。**955**は推定口径10cmを測る。削り痕に見られる調整の方法は普通サイズの石鍋と同じである。**956**は低い耳が付く浅い鍋である。外面削りの方向は一定ではない。内面は平滑に仕上がる。**957**は口径3.0cmの極小サイズである。縦耳がわずかに残っていた。ていねいな作りで、削り痕に見られる調整の方法は普通サイズの石鍋と同じである。**958**は耳部が欠損している。ていねいな作りで、削り痕に見られる調整の方法は普通サイズの石鍋と同じである。**959**〜**963**は鍔付きの石鍋である。いずれもていねいな作りで、外面の削りも普通サイズの石鍋と同じである。**962**・**963**は鍔部より下に煤が付着する。**964**・**965**は底部片である。**964**は体部や底部の削りは、ノミ痕が規則正しく並び普通サイズの石鍋と同じである。**965**は研磨調整が行われており削り痕は残っていない。また、器壁が薄いことから容器蓋の可能性もある。**966**は蓋である。外周から中央に向かいわずかに盛り上がる。薄い作りである。**967**は容器である。平面形は方形を呈する。**968**・**969**・**970**は中心に穿孔のある製品である。**968**は上面の径が大きく下面の径が小さい穿孔と、側面にも下向きの小さな穿孔が見られる。粗い削りで形を整えている。**969**は上面から下面まで同じ幅の孔が通る。全体がわずかに湾曲をしていることから石鍋の加工製品と思われる。**970**はリング状の製品が半分欠損したものと思われる。粗く稚拙なつくりである。**971**・**972**は直方体に成形されている。**971**は「削り」と「こすり」により成形している。**972**は縦耳を利用したもので煤の付着が見られる。「削り」により成形を行っている。**973**は六角柱を呈する。「削り」と「こすり」により成形を行っている。**974**は石鍋の体部を再利用したもので、外面に放射状の溝を5条刻んでいる。溝は端部が浅くなることから、「折り取り」のための溝ではないと考える。



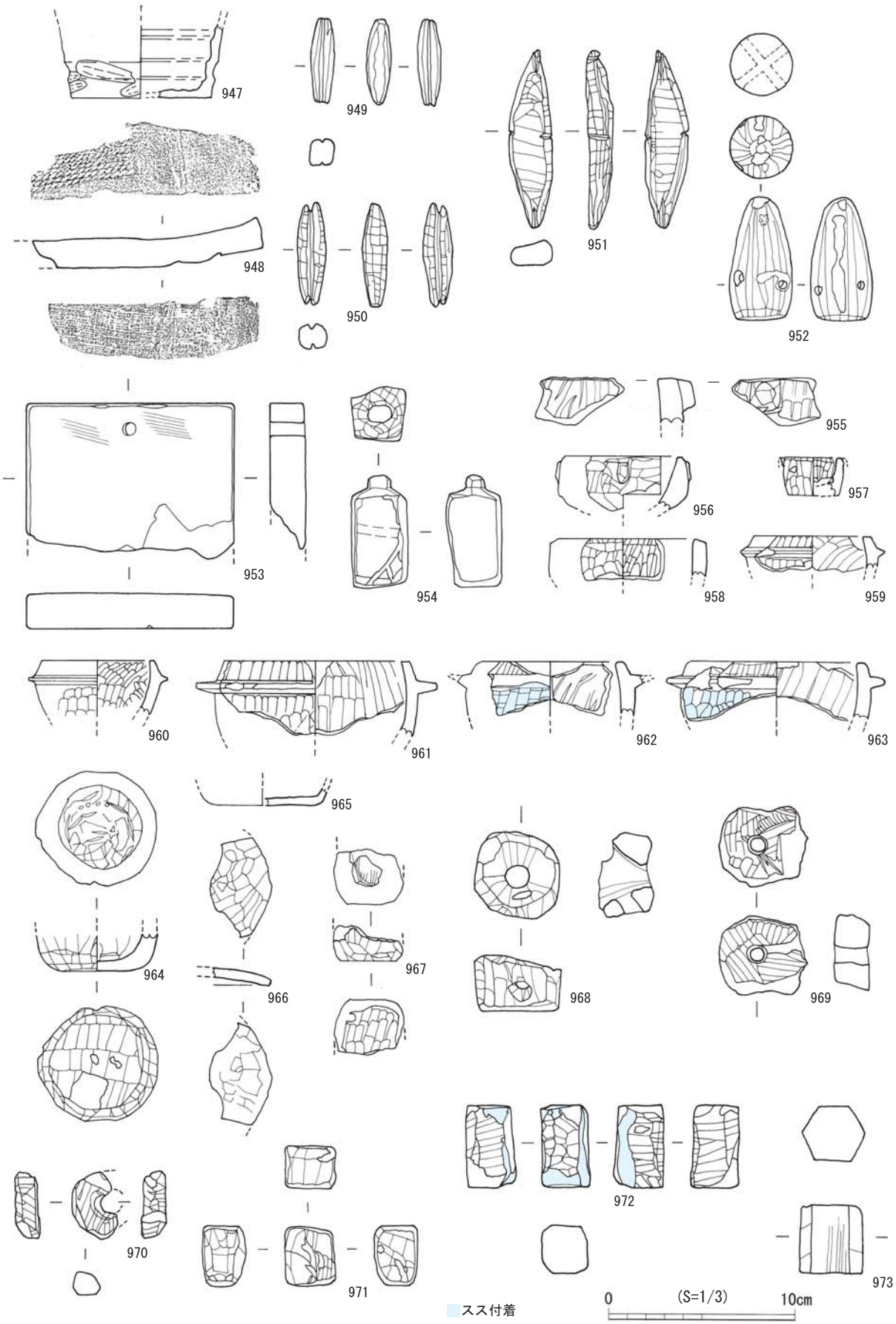

第260図　TAK201405調査区3層出土遺物-1(S=1/3)

図版259　TAK201405調査区3層出土遺物-1



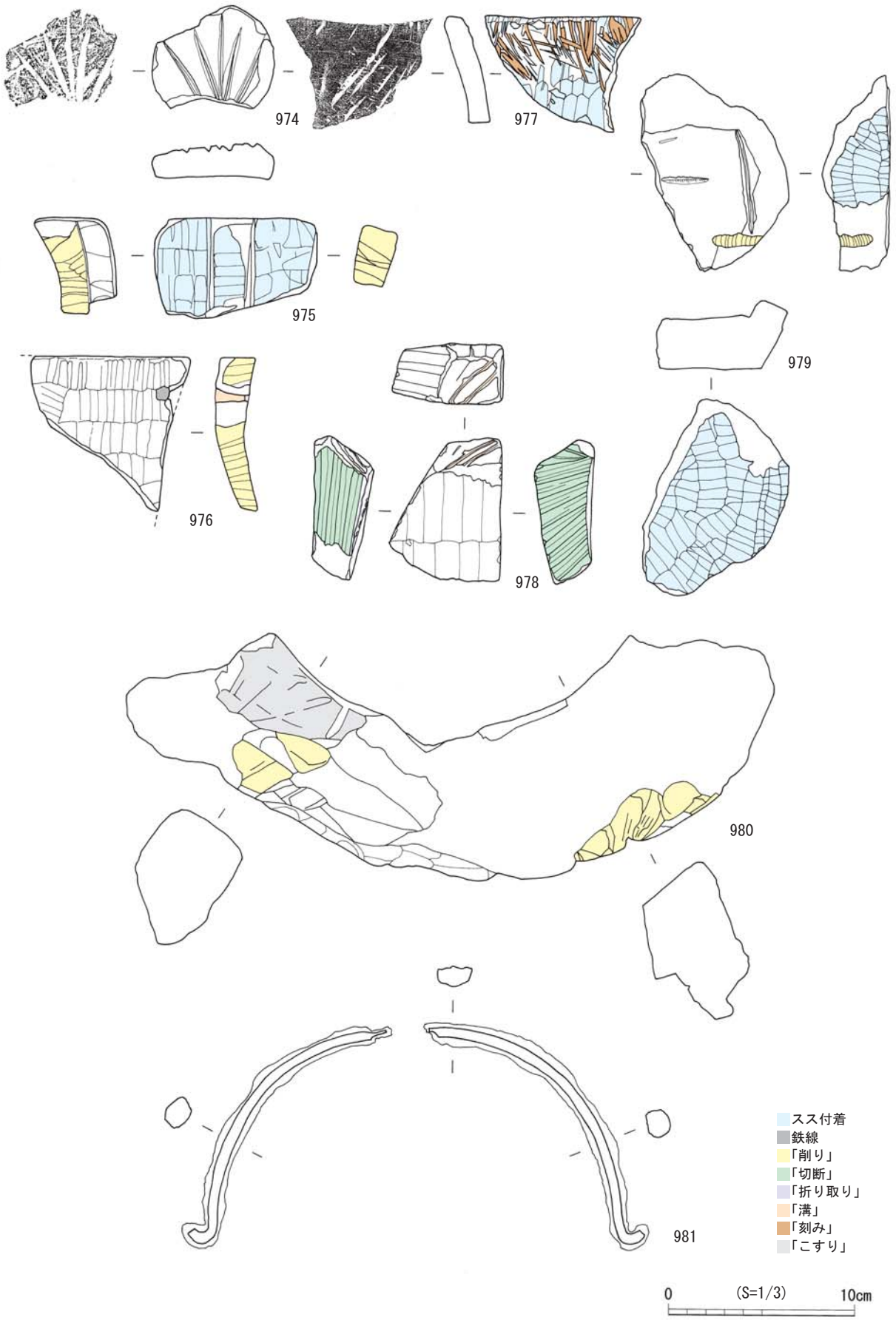

第261図　TAK201405調査区3層出土遺物-2(S=1/3)

図版260　TAK201405調査区3層出土遺物-2



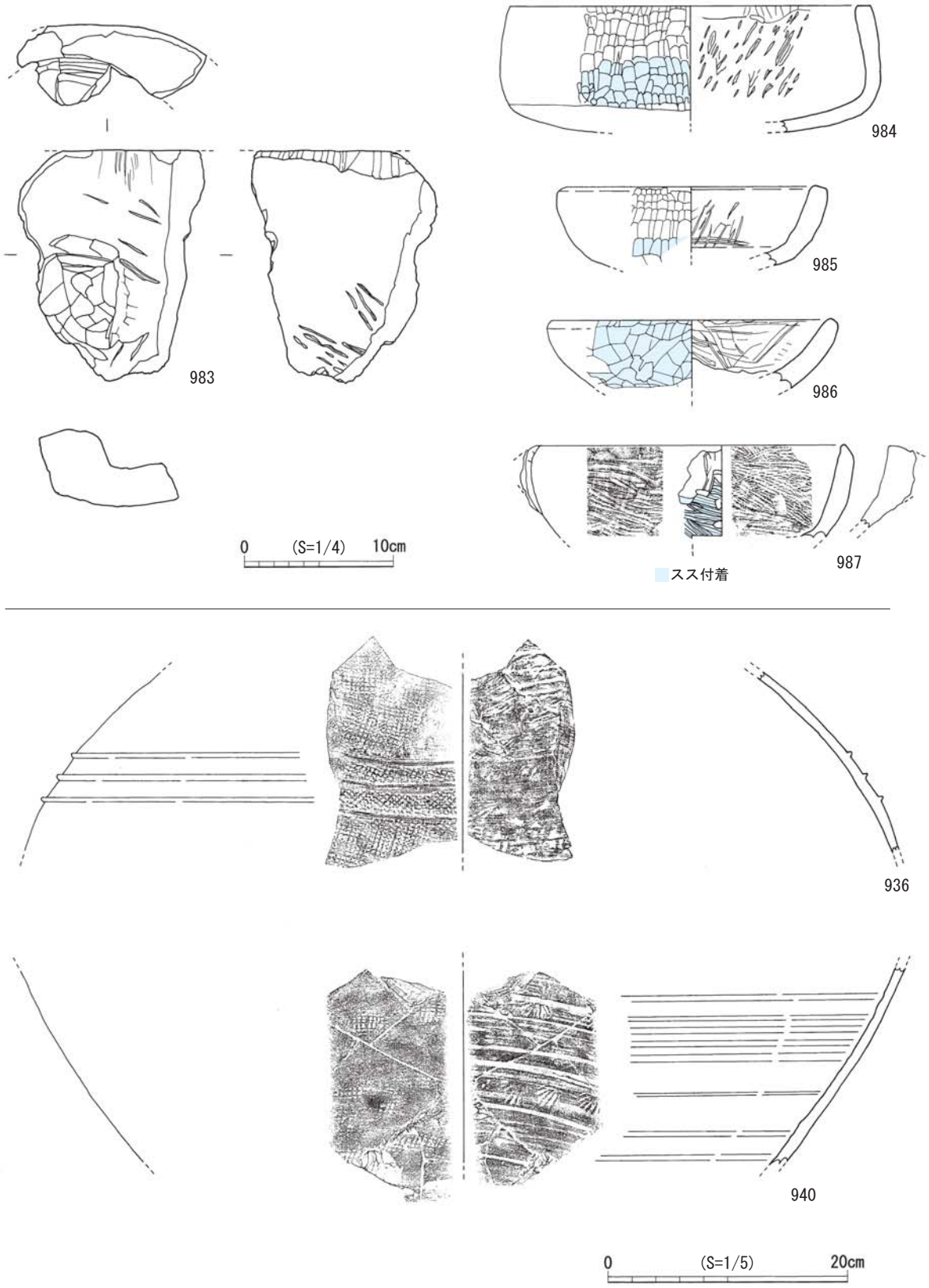

第262図　TAK201405調査区3層出土遺物-3(S=1/3)

図版261　TAK201405調査区3層出土遺物-3




第263図　TAK201405調査区3層出土遺物-4(S=1/3)

図版262　TAK201405調査区3層出土遺物-4




第264図　TAK201405調査区3層出土遺物-5(石鍋 S=1/4、高麗無釉陶器 S=1/5)

図版263　TAK201405調査区3層出土遺物-5

## 第199表　TAK201405調査区3層出土　土器・陶磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリット | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 894 | 瓦器　皿 | 底部～口縁部 | 10.3 | 2.1 | 6.8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 | ①8472 | 1159と接合　左回転糸切り |
| 895 | 瓦器　椀 | 底部～体部 | — | (4.5) | (8) | 指オサエ | 摩滅大 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ②8468 | 搬入品か |
| 896 | 瓦器　小椀 | 底部 | — | (1.6) | (4.4) | — | 摩滅大 | 灰色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石 | ②7868 | 搬入品か |
| 897 | 東播系須恵器　椀 | 底部～体部 | — | (2.7) | (6.9) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 | ③7866 | 右回転糸切り |
| 898 | 須恵器　甕 | 口縁部 | — | (4) | — | — | — | オリーブ黒色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ②8068 | 樺万丈窯産　軟質 |
| 899 | 須恵器　甕 | 胴部 | — | (3.3) | — | 格子目のタタキ痕 | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石 石英 角閃石 | ③8066 | 樺万丈窯産　軟質 |
| 900 | 須恵器　甕 | 胴部 | — | (5.8) | — | 格子目のタタキ痕 | — | 暗灰黄色 | 灰白色 | 良好 | 長石　角閃石 | ②8068 | 樺万丈窯産　軟質 |
| 901 | カムィヤキ　壺 | 肩部 | — | (1.3) | — | — | —— | 暗オリーブ灰色 | 暗オリーブ灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ⑤7460 | 外面に波状沈線文 |
| 902 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (1.8) | — | — | 回転ナデの下に当て具痕 | 暗オリーブ灰色 | 暗オリーブ灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ⑤7460 | 外面に波状沈線文 |
| 903 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (3.6) | — | — | 回転ナデの下に当て具痕 | 暗オリーブ灰色 | 暗オリーブ灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ⑤7460 | 外面に波状沈線文 |
| 904 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (1.9) | — | 格子目タタキ後回転ナデ | 回転ナデの下に当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ②8468 | |
| 905 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (3.1) | — | 格子目タタキ後回転ナデ | 回転ナデの下に当て具痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ④7862 | |
| 906 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (2.6) | — | 格子目タタキ後回転ナデ | 回転ナデの下に当て具痕 | 暗緑灰色 | 暗緑灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ⑤7460 | |
| 907 | カムィヤキ　壺 | 体部 | — | (3.1) | — | 格子目タタキ後回転ナデ | 回転ナデの下に当て具痕 | オリーブ黒色 | 灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ⑤7462 | |
| 908 | カムィヤキ　壺 | 底部 | — | (3.1) | (9.8) | — | 強い回転ナデ | 灰色 | 灰色 | 良好 | 微細な白色粒子 | ②7868 | 底部内面は凸凹 |
| 909 | 白磁　小壺 | 底部 | — | (1.3) | (2.2) | — | — | 灰白色 | 明オリーブ灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ③8066 | 高台風の底は内側が平底 |
| 910 | 白磁　小壺 | 底部 | — | (2.5) | (3.1) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ③8066 | わずかに上げ底 |
| 911 | 白磁　小壺 | 底部 | — | (1.2) | (3.6) | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | やや粗い | ①8470 | 平底 |
| 912 | 白磁　瓶又は蓋 | 肩部 | — | (2.4) | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 微細な黒色粒子 | ③7866 | 外面は型押しと片彫り文様　内面は露胎 |
| 913 | 青白磁　輪花皿 | 口縁部 | — | (1.5) | — | — | — | 明緑灰色 | 明緑灰色 | 良好 | 精良 | ③8066 | 内面に白推線 |
| 914 | 初期龍泉・同案窯系青磁 0類 大振りの浅鉢 | 口縁部～体部 | (14.5) | (7.2) | — | — | — | オリーブ褐色 | オリーブ褐色 | 良好 | 黒色粒子 | ②8068 | 外面に縦の櫛目　内面に篦状工具による横位の文様 |
| 915 | 初期龍泉・同案窯系青磁　1類　浅鉢 | 口縁部～体部 | (17.6) | (3.9) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ①8472 | 外面に片彫りの縦線　内面に篦状工具による横位の文様 |
| 916 | 初期龍泉・同案窯系青磁　0類　椀 | 体部 | — | (3.7) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 黒色粒子 | ③7866 | 外面に片彫りの縦線　内面に篦状工具による横位の文様と櫛点猫文 |
| 917 | 初期高麗青磁 皿 Ⅰ類 | 底部～口縁部 | (9.3) | 1.9 | 3.4 | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 精良 | ①8272 | 嘴状の口縁端部に輪花　碁笥底　康津産 |
| 918 | 初期高麗青磁 皿 Ⅰ類 | 底部～口縁部 | (9.8) | 2.4 | 2.9 | — | — | 灰色 | 灰色 | 良好 | 精良<br>微細な気泡 | ①8272 | 嘴状の口縁端部に輪花　碁笥底　康津産 |
| 919 | 初期高麗青磁 皿 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.4) | 3.5 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 精良 | ②8468 | 碁笥底　康津産 |
| 920 | 初期高麗青磁 皿 Ⅰ類 | 底部 | — | (1.6) | 4.5 | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 精良 | ③8066 | 低い輪状高台　康津産 |
| 921 | 初期高麗青磁 皿 Ⅲ類 | 口縁部 | — | (1.6) | — | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石 | ③7866 | 嘴状の口縁端部　海南産 |
| 922 | 初期高麗青磁 椀 Ⅲ類 | 口縁部 | (17.8) | (3.5) | — | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石　石英 | ②8468 | |
| 923 | 初期高麗青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (2.1) | 6.4 | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石 | ③7866 | 見込みの剥離は敲打の為か |
| 924 | 初期高麗青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (3.3) | (6.6) | — | — | にぶい黄色 | にぶい黄色 | 良好 | 長石 | ③7866 | |
| 925 | 初期高麗青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (1.7) | (5.5) | — | — | 灰オリーブ色 | 灰オリーブ色 | 良好 | 長石 | ③7866 | 1460と接合　海南産 |
| 926 | 初期高麗青磁 椀 Ⅲ類 | 底部 | — | (1.5) | (5.4) | — | — | 暗オリーブ色 | 暗オリーブ色 | 良好 | 長石 | ③8066 | 1464と接合　　海南産 |
| 927 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | (10.4) | (2.7) | — | — | — | 暗灰色 | 灰色 | 良好 | 精良 | ④7862 | |
| 928 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | — | (3.4) | — | — | — | 暗灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ③7866 | 屈曲部に浅い沈線が巡る |
| 929 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | (13.8) | (2.5) | — | — | — | 黒褐色 | 褐灰色 | 良好 | 精良 | ③7866 | |
| 930 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 口縁部 | — | (3.9) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ①8470　8270 | 軟質　頸部に波状沈線 |
| 931 | 高麗無釉陶器　壺 | 口縁部 | (14) | (1.4) | — | — | — | 黒褐色 | 褐灰色 | — | 長石 | ③7860 | 硬質 |
| 932 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 頸部 | — | (4.5) | — | — | — | 灰色 | 灰色 | — | 長石 | ①8470 | 硬質　沈線肩部の境に段状沈線<br>頸部に波状 |
| 933 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 体部 | — | (6.3) | — | — | — | 灰黄褐色 | 灰黄褐色 | — | 長石 | ⑤7260 | 硬質　　偏平な凸帯が巡る |
| 934 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 体部 | — | (4.2) | — | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | — | 長石　赤色粒子 | ⑤7260 | 硬質　断面三角形の凸帯が巡る |
| 935 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 体部 | — | (3.6) | — | 格子目のタタキ痕 | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 褐灰色 | — | 長石 | ③7866 | 軟質　断面三角形の小さな凸帯が2本巡る |
| 936 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 体部 | — | (16.4) | — | 格子目のタタキ痕 | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | — | 長石　マーブル状 | ③7866 | 軟質　断面三角形で小さな凸帯が3本巡る |
| 937 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (3.6) | — | 格子目のタタキ痕 | 強い回転ナデ痕 | 黄灰色 | 灰白色 | — | 長石 | ⑤7262 | 硬質 |
| 938 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (6.6) | — | 強い回転ナデ下にタタキ痕 | 樹枝文 | 灰色 | 暗灰黄色 | — | 長石 | ③7866 | 硬質 |
| 939 | 高麗無釉陶器　壺 | 体部 | — | (5.4) | — | 強い回転ナデ下に格子目のタタキ痕 | 樹枝文 | 灰色 | 灰黄褐色 | — | 長石 | ③7866 | 硬質 |
| 940 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 体部 | — | (15.2) | — | 強い回転ナデ下に格子目のタタキ痕 | 樹枝文 | 灰白色 | 灰黄褐色 | — | 長石　赤色粒子 | ③7866 | 軟質 |
| 941 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (18) | (6) | 強い回転ナデ痕 | 強い回転ナデ痕 | 暗青灰色 | 青灰色 | — | 長石 | ③7866 | 硬質 |
| 942 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (21.4) | (4) | 強い回転ナデ痕 | 強い回転ナデ痕 | 暗青灰色 | 暗青灰色 | — | 長石 | ③8066 | 硬質　1745と接合 |
| 943 | 高麗無釉陶器　大型壺 | 底部 | — | (2) | — | 強い回転ナデ痕 | 強い回転ナデ痕 | 青灰色 | 青灰色 | — | 長石 | ②8068 | 硬質 |
| 944 | 高麗無釉陶器　壺 | 底部 | — | (0.6) | — | — | 強い回転ナデ痕 | 暗青灰色 | 暗青灰色 | — | 長石 | ②8066 | 硬質 |
| 945 | 天目茶碗 | 体部 | — | (4.1) | — | — | — | 黒色 | 黒色 | 良好 | 長石 | ③8066 | |
| 946 | 陶器　鉢 | 口縁部～体部 | — | (6.5) | — | 回転ヘラケズリ | — | にぶい黄褐色 | にぶい黄橙色 | 良好 | 長石 石英粒 精良 | ②8068 | |
| 947 | 陶器　壺 | 底部 | — | (3.9) | (7.4) | 篦状工具による抉り | 強い水引痕 | 黄灰色 | 黄灰色 | 良好 | 長石　黒色粒子 | ①8270 | |

## 第200表　TAK201405調査区3層出土　土製品観察表

| 遺物番号 | 種類 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 948 | 平瓦 | 123 | 40 | 16 | 88 | 灰色 | 良好 | 長石 | 凸面　目の細かい布目が残る　凹面に撚紐痕有 |

## 第201表　TAK201405調査区3層出土　滑石製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 色調 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 949 | 石錘 | 46 | 13 | 14 | 12 | 灰白色 | ①8272 | 紡錘形で長軸に1条の溝が巡る |
| 950 | 石錘 | 55 | 15 | 14 | 14 | 灰白色 | ①8470 | 紡錘形で長軸に1条の溝が巡る |
| 951 | 石錘 | 95 | 23 | 13 | 40 | 灰白色 | ③7866 | 鰹節状で端部に2箇所の溝 |
| 952 | 石錘 | 66 | 33 | 33 | 105 | オリーブ灰色 | ③8066 | 砲弾型　対角線上の横方向に穿孔　中で繋がる |
| 953 | 温石 | 83 | 110 | 19 | 363 | 灰黄褐色 | ①8470 | 上質の石材を使用　穿孔有 |
| 954 | 権状 | 60 | 30 | 29 | 99.1 | 灰白色 | ②7868　8068 | 断面は方柱状　上部に突起　未製品 |
| 966 | 蓋 | 33 | 53 | 10 | 16 | 暗灰色 | ①8472 | 薄い作り |
| 967 | 容器 | 30 | 37 | 19 | 20.7 | 灰白色 | ③8066 | 底部 |
| 968 | 不明 | 44 | 45 | 16 | 75.6 | 黄灰色 | ①8470 | 中心と側面に穿孔有 |
| 969 | 不明 | 42 | 47 | 19 | 60.6 | 黄灰色 | ①8470 | 中心に穿孔有 |
| 970 | 不明 | 35 | 24 | 12 | 13.7 | 灰白色 | ③8066 | リング状 |
| 971 | 不明 | 32 | 27 | 22 | 40 | 灰白色 | ④7862 | 直方体　削りとこすりで成形　未製品 |
| 972 | 不明 | 24 | 26 | 26 | 63.6 | 灰白色 | ②8468 | 直方体(縦耳転用)削りで成形　煤付着　未製品 |
| 973 | 不明 | 37 | 34 | 29 | 73.6 | 灰白色 | ①8270　8470 | 六角形柱状　削りとこすりで成形　未製品 |
| 974 | 不明 | 55 | 65 | 18 | 100.6 | にぶい黄橙色 | ③8066 | 石鍋体部を再利用　外面に放射状の溝5条有 |
| 983 | 不明 | 136 | 120 | 54 | 1046 | 灰白色 | ①8272 | 円柱状の容器風　体部内側に瘤が残る |

## 第202表　TAK201405調査区3層出土　ミニチュア石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 重量 | 調整 | | 色調 | | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | (g) | 内面 | 外面 | 内面 | 外面 | | |
| 955 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (10) | (2.6) | — | 25 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8470 | |
| 956 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (6.2) | (2.9) | — | 32 | — | — | 灰白色 | 褐灰色 | ③8066 | |
| 957 | 縦耳付石鍋 | 口縁部～底部 | (3) | 2 | (2.2) | 6 | — | — | 黄灰色 | 黄灰色 | ①8472 | ていねいな作り |
| 958 | 縦耳付石鍋 | 口縁部 | (7.2) | (2.2) | — | 13 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ③8066 | ていねいな作り |
| 959 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | (5.8) | (1.9) | — | 8 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8470 | ていねいな作り |
| 960 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | (6) | (2.8) | — | 23 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8470 | ていねいな作り |
| 961 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | (7.4) | (2.7) | — | 14 | — | — | 黒褐色 | 灰色 | ③7866 | ていねいな作り　煤付着 |
| 962 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | (9) | (3) | — | 24 | — | — | 灰色 | 灰白色 | ②7868 | ていねいな作り　煤付着 |
| 963 | 鍔付石鍋 | 口縁部 | (9.8) | (4) | — | 35 | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ①8470　8270 | ていねいな作り |
| 964 | 石鍋 | 底部 | — | (2) | 3.7 | 71 | — | — | 灰白色 | 黄灰色 | ②8068 | |
| 965 | 石鍋 | 底部 | — | (2) | (5.3) | 6 | — | — | 黄灰色 | 灰白色 | ①8270　8470 | 蓋の可能性有 |

## 第203表　TAK201405調査区3層出土　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 975 | 53 | 86 | 37 | 238.5 | ①8472 | 耳部　両側縁に削り痕 |
| 976 | 83 | 85 | 18 | 168 | ①8470 | 耳付石鍋口縁部　右側縁に削り痕　穿孔と鉄線が残る |
| 977 | 83 | 112 | 17 | 244 | ⑤7462 | 縦耳付石鍋体部　線状の浅い削り痕 |
| 978 | 78 | 59 | 32 | 199 | ③8266 | 体部　左側縁に切断痕と折り取り痕　状目に刻み2本 |
| 979 | 141 | 105 | 47 | 727.5 | ①8470 | 底部　丸鑿状の工具による削り痕　煤付着 |
| 980 | 345 | 92 | 52 | 2130 | ④7862 | 鍔部　表面右下に削り痕 |

## 第204表　TAK201405調査区3層出土　滑石製石鍋観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | |
| 984 | 縦耳付又は耳なし石鍋 | 底部～口縁部 | (24) | (85) | — | — | 斜位の工具痕 | 明褐灰色 | 明褐灰色 | ④8064 | 器高が低く浅い　外面に煤付着 |
| 985 | 鉢形石鍋 | 底部～口縁部 | (16.5) | 5.3 | — | — | — | 灰白色 | 灰白色 | ④8062 | 器高が低く浅い　外面に煤付着 |
| 986 | 鉢形石鍋 | 口縁部～体部 | (18.6) | (4.6) | — | — | — | 褐灰色 | 褐灰色 | ②7868 | 器高が低く浅い　外面に煤付着 |
| 987 | 縦耳付鉢形石鍋 | 口縁部～体部 | (20.4) | (6.2) | — | 傷状の浅い削り痕有 | — | 灰白色 | 灰白色 | ⑤7262 | 器高が低く浅い　外面に煤付着 |

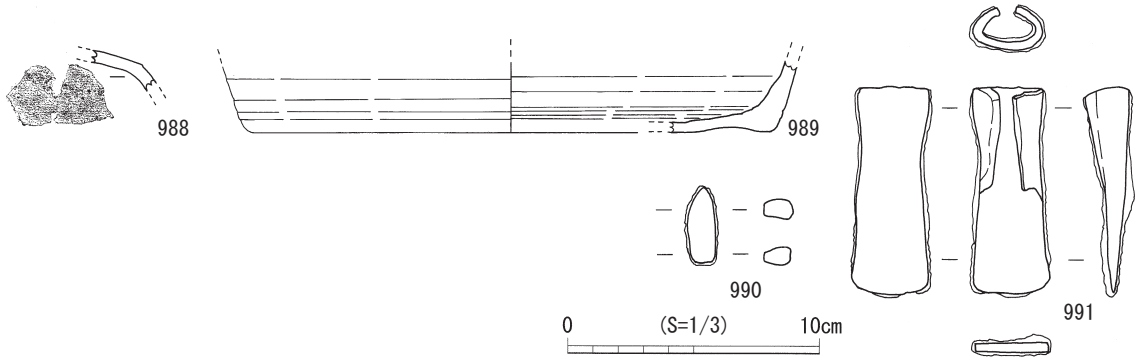
## 第205表　TAK201405調査区3層出土　金属製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 981 | 鍋の弦 | 鉄 | 243 | 113 | 18 | 129.8 | ②7868　8068 | 鍋の口径は20cm程度 |
| 982 | 渡来銭 | — | — | — | — | — | ②8068 | 細片で脆弱な為詳細不明　図無し |

スタンプ等の文様の可能性もある。**975～980**は石鍋加工素材である。**975**は耳部である。下半は欠損しているが、両側縁に「削り」が見られる。**976**は耳付石鍋の口縁部を利用している。右側縁に「削り」が見られる。口縁下には「穿孔」があり「鉄線」が残るが、石鍋時の補修孔か破損後に開けられたものか不明である。**977**は縦耳付の石鍋の体部である。内面には石鍋成形時の削り痕が残る。外面には廃棄後の線状の浅い「刻み」が全体に付く。**978**は体部片を素材としている。表面には石鍋成形時の削り痕が残る。右側縁には縦方向からの「切断」が見られ、左側縁には横方向からの「切断」とわずかに「折り取り」痕が残る。上縁には浅い線状の「溝」が2本見られる。**979**は分厚い底部片である。破断面に丸鑿状の工具で「削り」が行われている。**980**は大型の鍔付石鍋の鍔部を利用したものである。表面の右下には粗い「削り」が、左端には「こすり」により平滑にされた面の下に「削り」がわずかに残る。**981**は鍋の弦で鉄製である。鍋の口径は20cm 程度である。**982**は渡来銭であるが細片のために詳細は不明である。脆弱なために図化はしていない。**983**は円柱状の容器風の体部内側に瘤が残るものである。体部の厚さが均一でないが、内外面はノミ痕が見られず平滑に仕上がり、口縁端部も水平に作り出されていることから、製作途中の石鍋ではないように思える。瘤の部分の石質も周囲と変わらず、剥ぎ取りができずに残したものではないと考える。**984**は縦耳付、もしくは耳なしの石鍋である。器高が低く浅い。内面には斜位の工具痕が残る。外面の体部下半には煤が付着する。**985・986・987**は器高が低い鉢形の石鍋である。**985**内外面には成形時の工具痕が残り、体部下半から底部には煤が付着する。**986**は、内面に幅1～2mm の傷状の浅い削り痕が付く。器表の状態から、この傷は使用時にはすでにあったものと思われる。外面には煤が全面に付く。**987**は縦耳が付く種類である。外面には幅4mm 単位の傷状の浅い削り痕が、内面には幅1～2mm の傷状の浅い削り痕が付く。内面の削り痕は986と比べると密に入る。このような調整は竹松遺跡から出土した石鍋中には類例がない。煤が付着する。

**③ TAK201406調査区3層　出土遺物（第265図、図版264、第206・207表）**

**988**は壺の肩部である。胎土に白色粒子を含む。カムィヤキと思われる。**989**は高麗無釉陶器の大型壺底部である。底部厚は薄く、体部内面には強い回転ナデ痕が見られる。**990・991**は鉄製品である。**990**は先端がすぼまり断面は四角形を呈する。用途は不明である。**991**は袋状鉄斧である。




**第265図　TAK201406調査区3層出土遺物（S＝1/3）**

図版264　TAK201406調査区3層出土遺物

第206表　TAK201406調査区3層出土　土器・陶器観察表

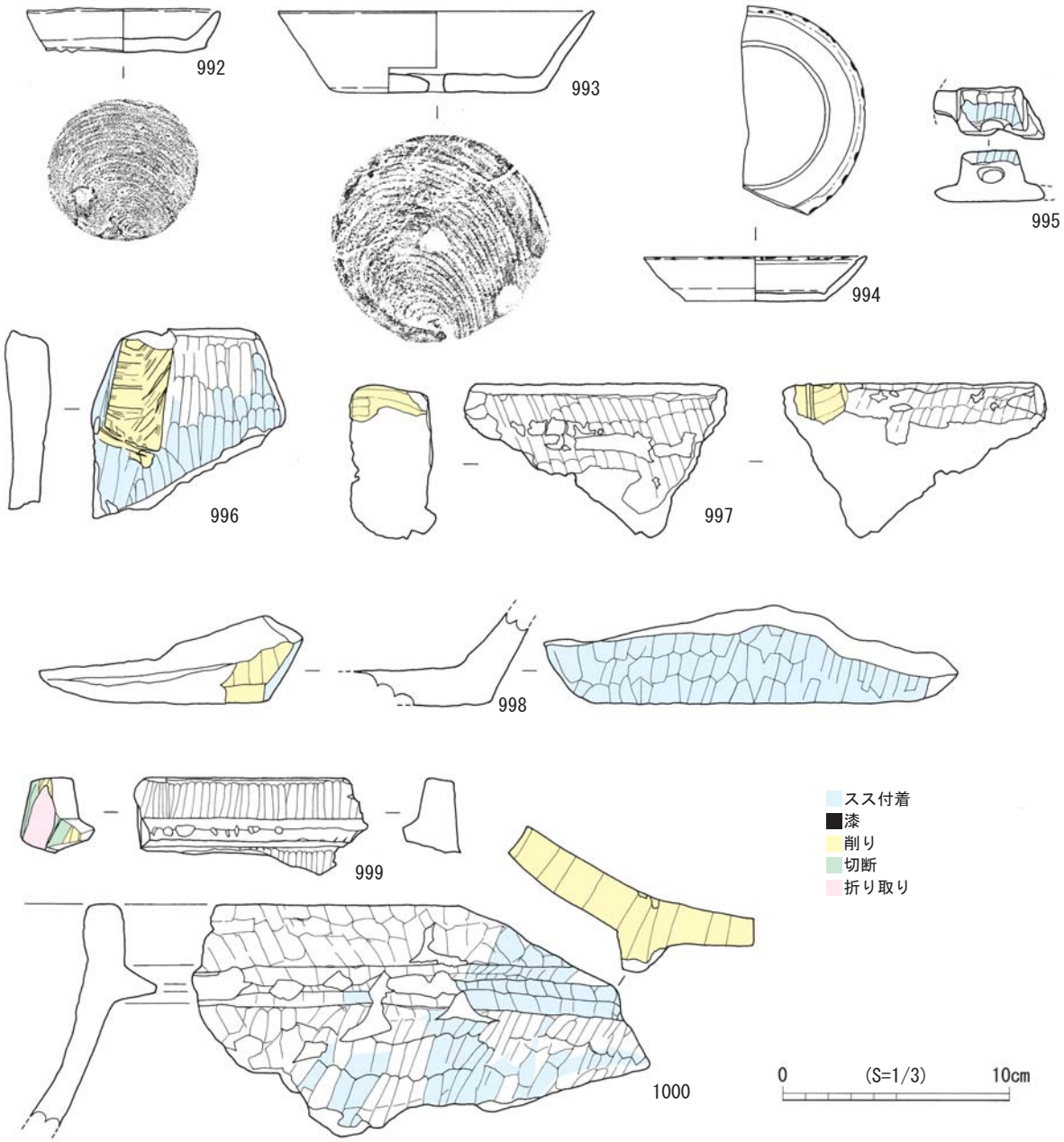
| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 988 | カムィヤキ | 肩部 | − | (1.6) | − | − | − | 灰色 | 灰色 | 良好 | 白石粒子 | ③6850 | |
| 989 | 朝鮮無釉陶器 大型壺 | 底部 | − | (2.8) | (2.5) | − | 強い回転ナデ痕 | 灰色 | 灰色 | 良好 | 長石 | ③6850 | |

第207表　TAK201406調査区3層出土　金属製品観察表

| 遺物番号 | 器種 | 材質 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 990 | 不明 | 鉄 | 30 | 11 | 8 | 4.14 | ②7052 | |
| 991 | 鉄斧 | 鉄 | 83 | 31 | 17 | 66.02 | ①7250 | 袋状 |

④ TAK201407調査区3層　出土遺物(第266図、図版265、第208～210表)

**992**は土師器小皿である。底部からさほど開かずに立ち上がる。切り離しは右回転の糸切りである。13世紀末のものと思われる。**993**は土師器杯である。体部は直線的に立ち上がった後、外反しながら口縁部に至る。切り離しは右回転の糸切りである。底部中心に外底部から内底部へ向けた穿孔が見られる。13世紀前半の所産である。**994**は白磁皿Ⅸ類で口禿げである。口縁部の露胎部分には漆と思われる黒色の塗布物が見られる。**995～1000**は素材を滑石とするものである。**995**は滑石製の石鍋補修具である。挿入部と器壁部の一部が残る。器壁部上面が凸状を呈していることから、内側からの挿入が考えられる。挿入部には煤の付着が見られる。**996～1000**は石鍋加工素材である。**996**は縦耳付きの石鍋で、耳部分を粗く「削り」落としている。**997**は大型の鍔付き石鍋の口縁部を素材としている。全面に「す」が入る。左端部に「削り」が残る。**998**は底部片を素材としている。左端部に「削り」痕が残る。**999**は鍔付き石鍋の口縁部を素材としている。左端部に「切断」と「折り取り」、「削り」が残る。**1000**は鍔付き石鍋の口縁部を素材としている。右端部に削りが残る。




第266図　TAK201407調査区3層出土遺物(S＝1/3)

第208表　TAK201407調査区3層出土　土器・磁器観察表

| 遺物番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | | |
| 992 | 土師器　小皿 | 完形 | 8.4 | 1.8 | 6.6 | － | － | 橙色 | 橙色 | 良好 | 石英 長石 角閃石 | 7454 | 右回転糸切り |
| 993 | 土師器　杯 | ほぼ完形 | 13.6 | 3.6 | 8.5 | － | － | 浅黄橙色 | 灰白色 | 良好 | 長石 角閃石 雲母 | ③7652 | 右回転糸切り　底部中央に穿孔有 |
| 994 | 白磁　皿　Ⅸ類 | 底部～口縁部 | (9.6) | 2.9 | 6 | － | － | 灰白色 | 灰白色 | 良好 | 黒色粒子 | ③7652 | 口禿げ　口縁に漆 |

第209表　TAK201407調査区3層出土　滑石製石鍋補修具観察表

| 遺物番号 | 器壁部(mm) | | | 挿入部(mm) | | | 重量(g) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚(高) | | |
| 995 | 24 | 48 | 8 | 20 | 30 | 14 | 21.3 | 穿孔有　煤付着 |

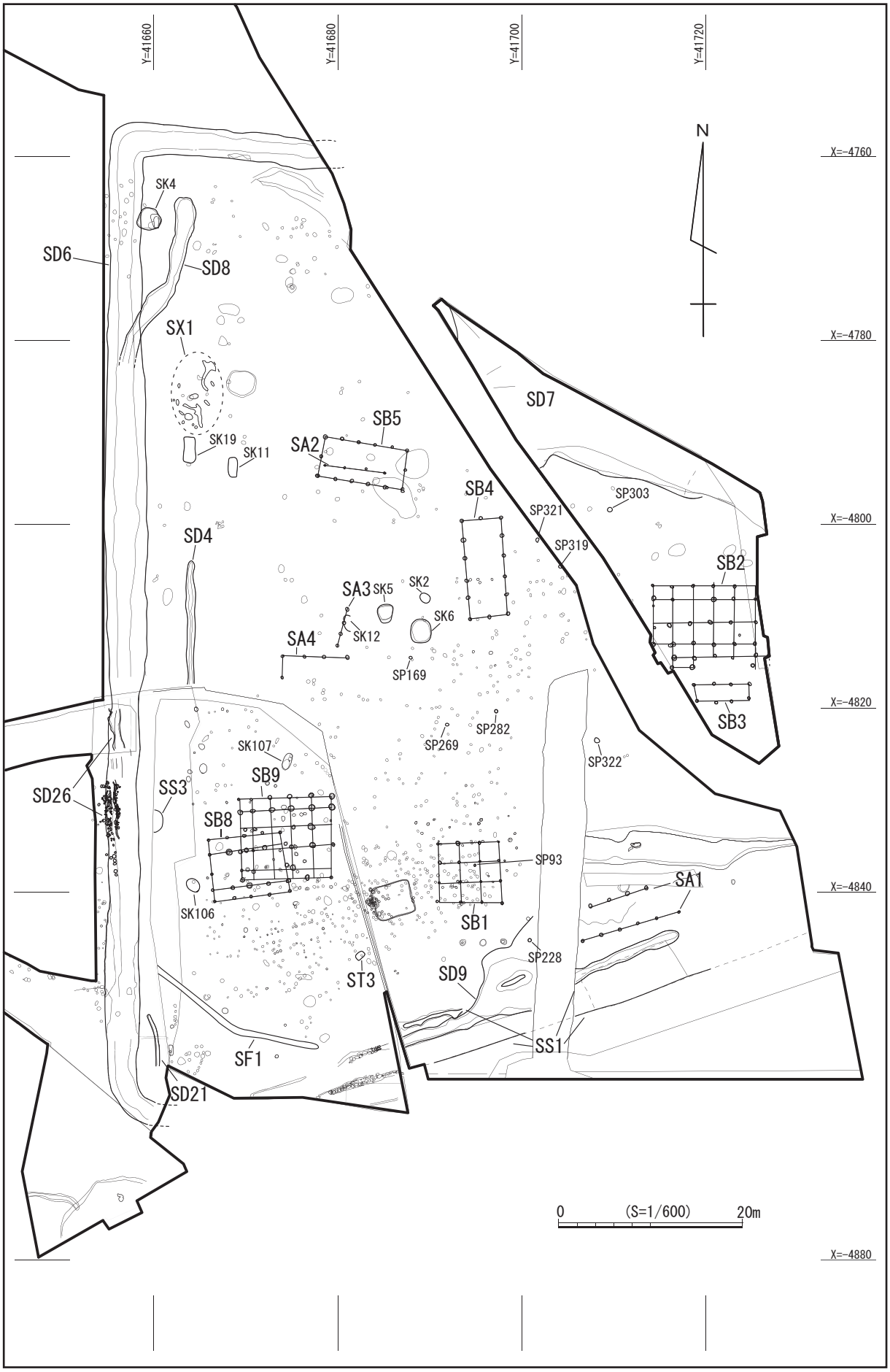
図版265　TAK201407調査区3層出土遺物

第210表　TAK201407調査区3層出土　滑石加工素材観察表

| 遺物番号 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 出土区グリッド | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 996 | 85 | 83 | 20 | 175 | ③ | 縦耳付石鍋　耳部分を削り落とし |
| 997 | 115 | 68 | 34 | 275 | ③ | 鍔付き石鍋　口縁部　削り |
| 998 | 182 | 44 | 78 | 380 | 6854 | 底部　削り |
| 999 | 102 | 43 | 26 | 140 | 7654 | 鍔付き石鍋　口縁部　　切断　折り取り |
| 1000 | 200 | 102 | 55 | 615 | 6854 | 鍔付き石鍋　口縁部　削り |

参考文献

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会




第1図　TAK201405調査区　SD6(区画溝)と SD6内遺構配置図(1/600)

図版1　SD6(区画溝)とSD6内遺構(3年分の合成写真)

(13)小結

① SD6(区画溝)について

区画溝の一辺が108mであったことは調査担当者達にとって驚きであったが、区画溝は調査区境に位置しており3年間をかけての調査であった。2012年度の調査では、区画溝の南側を25m掘削し。この時には、西の立ち上がりを確認し深さは1.0m～1.1mであることが分かったが、東側の立ち上がりが調査区外となり、区画溝の幅は分からなかった。この調査時に土師器杯や皿が集中して出土した。翌2013年度の調査では、区画溝の南側のコーナーを確認し、区画溝の南端は直角に曲がり東へ伸びていることが分かった。この時点で区画溝の全長は45mを超えた。また、東側の立ち上がりも確認することができ、幅は3.5～4mであることが分かった。次の2014年度の調査では区画溝の北側のコーナーを確認し区画溝の北端は直角に曲がり東へ伸びていることと、区画溝の一辺の長さが108mであることが分かった。

これまでに県内で確認されている中世の区画溝は雲仙市筏筏遺跡B、島原市畑中遺跡、大村市富の原遺跡の3遺跡がある。

雲仙市筏遺跡B

雲仙市東里名字筏に所在する遺跡で、縄文時代後期の遺跡として知られる。平成25年の調査では、幅2m、深さ0.45mと幅5.5m、深さ1.2mの断面形が逆台形の溝が並行して22.2mの長さで検出された。溝内の出土遺物より鎌倉時代の遺構であることが分かった。平成15年にはおよそ150m離れた地点の調査を行っているが、その際、同規模の溝を確認しており雲仙市教育委員会は同一の遺構で豪族居館を巡る堀の可能性を考えている。(註1)

図版2　筏遺跡B　区画溝　調査風景
(提供：雲仙市教育委員会。
未発表のため転載不可)

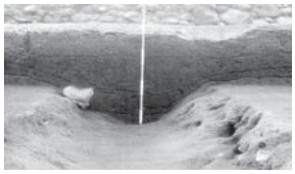
図版3　筏遺跡B　区画溝　断面
(提供：雲仙市教育委員会。
未発表のため転載不可)

図版4　筏遺跡B　区画溝　全景
(提供：雲仙市教育委員会。未発表のため転載不可)

## 畑中遺跡

島原市下宮町甲に所在する遺跡である。平成3年に島原市教育委員会によって調査が行われた。

図版 5　完掘状況　西から



図版 6　土層断面　東から

図版 7　検出状況　北西から

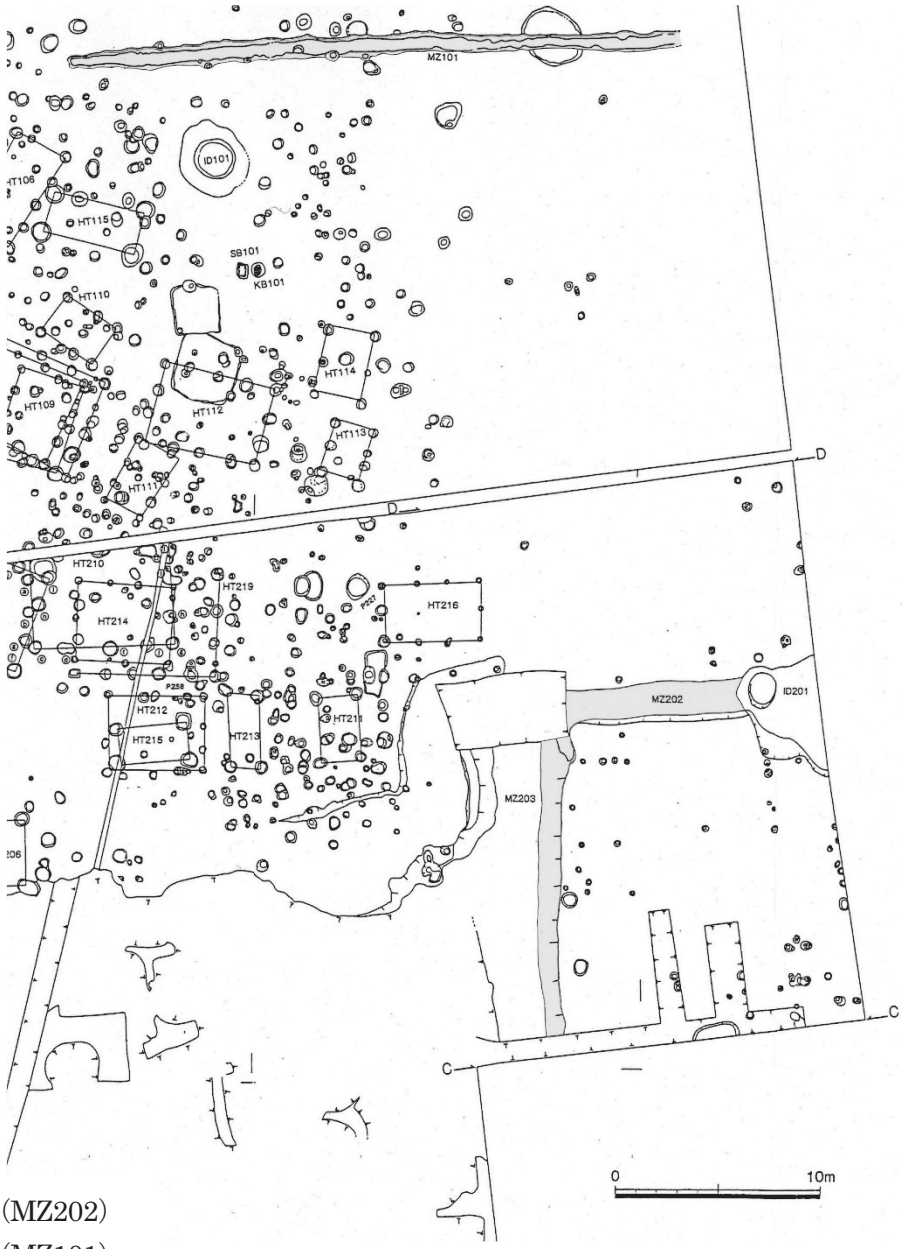
□　区画溝

調査の結果、南と東に直角に曲がる2条の溝を検出した。確認長(東 - 西)20m、(南 - 北)19m、幅1.5m～3mで深さ0.3m～1.0mを測る。西側は調査区外に延び北側は別の溝に切られる。この方形の区画溝の中には掘立柱建物跡を2棟検出している。報告書によると鎌倉時代の遺構である。

第2図　畑中遺跡　区画溝と建物跡
（「畑中遺跡」から転載・加筆）

**富の原遺跡**

大村市富の原2丁目に所在する遺跡である。弥生時代中期～後期前半の集落として知られる。2014年の調査では南北方向に伸びる幅1.8mの溝(MZ202)を検出した。この溝の北端は幅5mの近代以降の溝(MZ203)によって切られているが、南端は別の遺構に切られながらも調査区外へ延びていると思われる。確認長は(南‐北)9mである。近代以降の溝(MZ203)はこの溝に直交しており、区画となる北側の溝と重なる可能性もある。溝内より出土した遺物からこの溝の年代は中世後半と考えられている。この溝の北には平行に並ぶ確認長30mの溝(MZ101) がある。




□ 溝（MZ202）
□ 溝（MZ101）

第3図　富の原遺跡で検出した区画溝
（「富の原遺跡」から転載・加筆）

県内で確認されている3遺跡の区画溝を紹介したが、コーナーが確認できて明らかに区画を作り出すための溝と認めることができるのは畑中遺跡検出のものだけである。しかし、畑中遺跡検出の溝は区画の一辺の長さが確定できていないことから、竹松遺跡で検出した区画溝は一辺の長さが明らかになった溝として価値があると思われる。しかし、確認ができたのは西側の一辺のみで全容については不明である。溝内の自然科学分析の結果によると溝はわずかに流れる状態であったことから、自然流路とつながり入水と排水が行われていたと思われる。また、20102調査区で出土した豊前系土師器を中心とした大量の土師器の出土状況をみると、多くが破損せずに堆積した後に土圧によって潰れた状態であった。このことから、土師器が廃棄された際には溝の中には水が溜まり底には汚泥の堆積が進んでおり、廃棄された土師器は汚泥がクッションとなり破損せずにパックされたと思われる。出土した遺物からこの溝は13世紀の初頭には埋没してしまったと考える。

竹松を治めていたと考えられる武松氏が文書に現れるのは元応二（1320）年の「武松七郎入道」が初めてである。区画溝の時期から100年ほど後になる。「武松七郎入道」が区画の内に住んだ有力者の系譜を直接継ぐものかどうかは定かではないが、14世紀になると竹松遺跡では遺構や遺物の数が激減することから、竹松遺跡を離れたそう遠くない場所に当地を治める「武松氏」が居を構えていたと思われる。

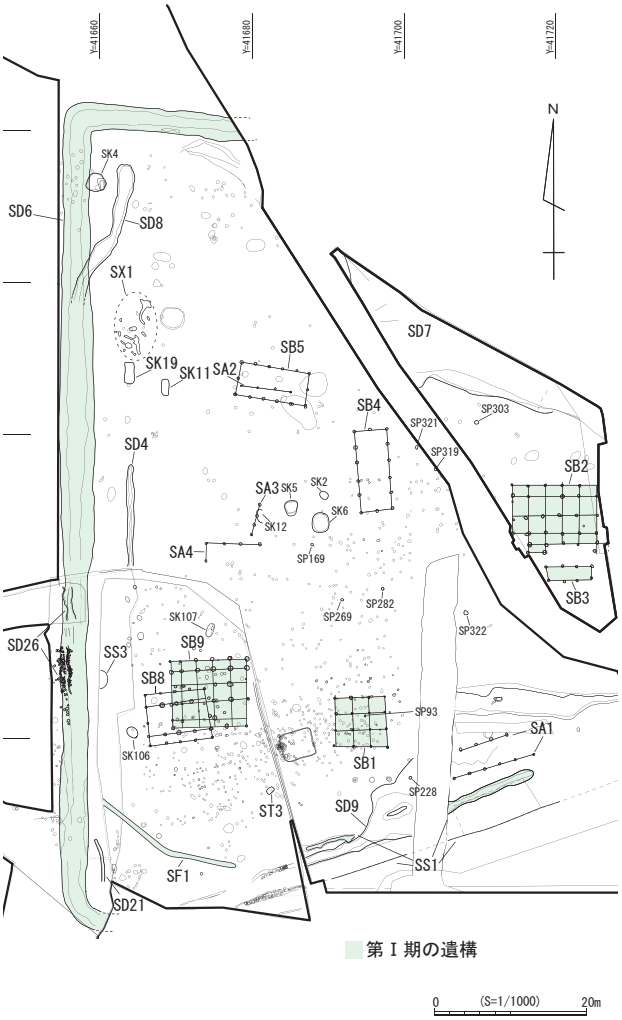
（註１）　平成25年11月24日に実施された現地説明会資料から要約

引用･参考文献

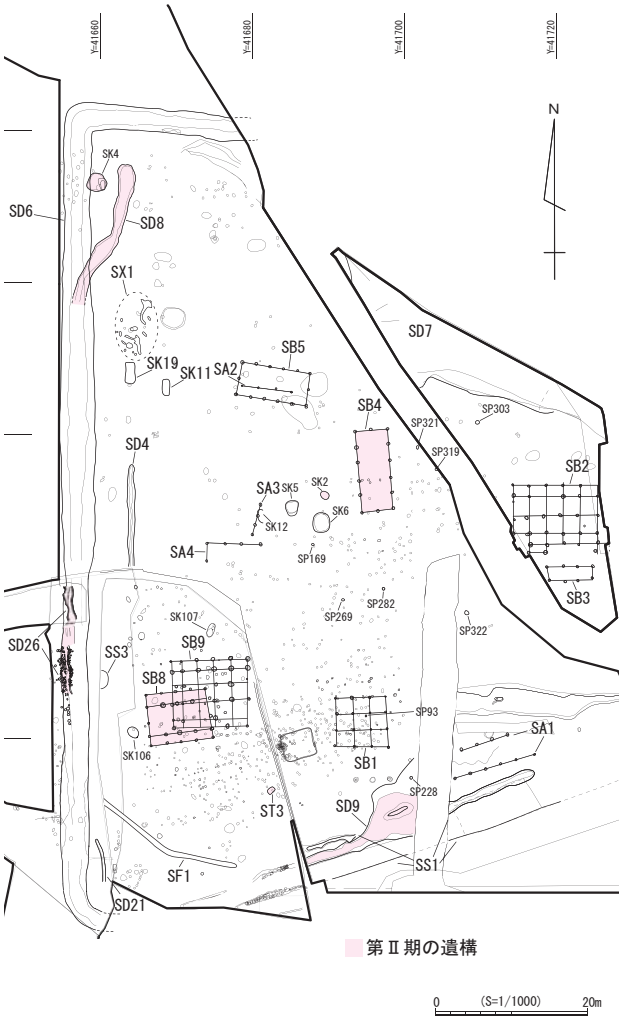
久田松和則1980「Ⅸ．文献に見る中世の郡川周辺」『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会
島原市教育委員会1994『畑中遺跡』島原市埋蔵文化財調査報告書第９集　島原市教育委員会
瀬野精一郎編2001『長崎県の地名』日本歴史地名大系第43巻　平凡社
久田松和則2014「第一節　鎌倉時代の彼杵庄」『新編大村市史第２巻中世編』大村市
大村市教育委員会2016『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第40集　大村市教育委員会

### ② 区画溝内の遺構の変遷（第4･5図）

区画内からは掘立柱建物6棟、土坑7基、集石2基、墓1基の遺構を検出した。区画溝は短い期間で埋没しており区画内の遺構も同じ時期に廃絶したと思われる。出土遺物から明確な時期差を出すことは容易ではないが、遺構の軸が区画溝と並行同じ時期と建物が西にわずかに振れる時期の2時期に分けることは可能と思われる。このことを考慮し遺物から遺構を年代ごとに分けたのが第4・5図である。




第4図　第Ⅰ期の遺構(12世紀中頃～後半)




第5図　第Ⅱ期の遺構(13世紀前半)

第Ⅰ期(12世紀中頃～後半)

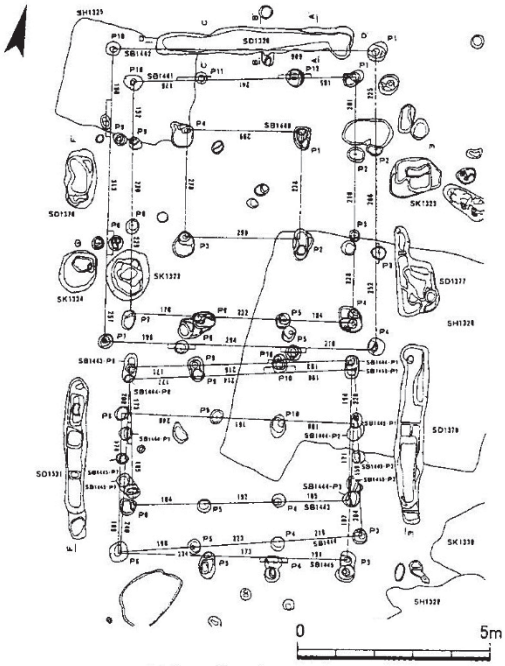
区画溝が掘られ中に建物が建つ。建物は区画溝と同じ軸を持ち区画溝の近くに2棟、やや離れた東に大型の建物が1棟建つ。区画の南には小礫が敷かれた道状(SF1)のものが作られ石列(SS1)も作られる。北には建物が建たない広場が作られ、区画溝のそばに土坑墓が2基(SK11、19)作られる。区画溝を強く意識した場の利用が行われていたことが感じられる。

第Ⅱ期(13世紀前半)

区画溝が埋まり区画内の遺構が減少する。建物は軸を北からわずかに西へずらし、規模も小さくなる。区画溝の後には幅1.2m～2.4m の浅い溝が掘られる(SD8、26)。道路状の遺構や石列があった場所には不定形の溝(SD9)や青磁椀が副葬される墓(ST3)が作られる。この期を最後にこの場所には遺構がなくなり14世紀代になり土坑が掘られるが、単発であり規模も小さいことから、積極的な場の利用ではなかったと思われる。

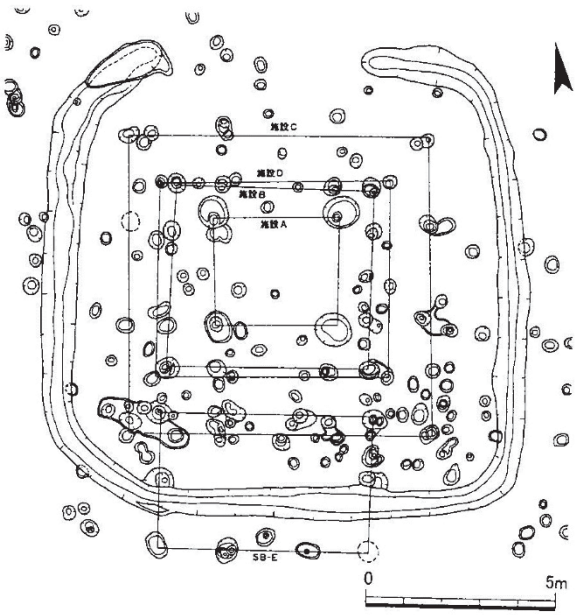
③ TAK201406調査区の SX1について

溝に囲まれた建物跡の県内での検出は初めてである。県外では佐賀県佐賀市御手水遺跡、徳永遺跡、久池六本杉遺跡がある。



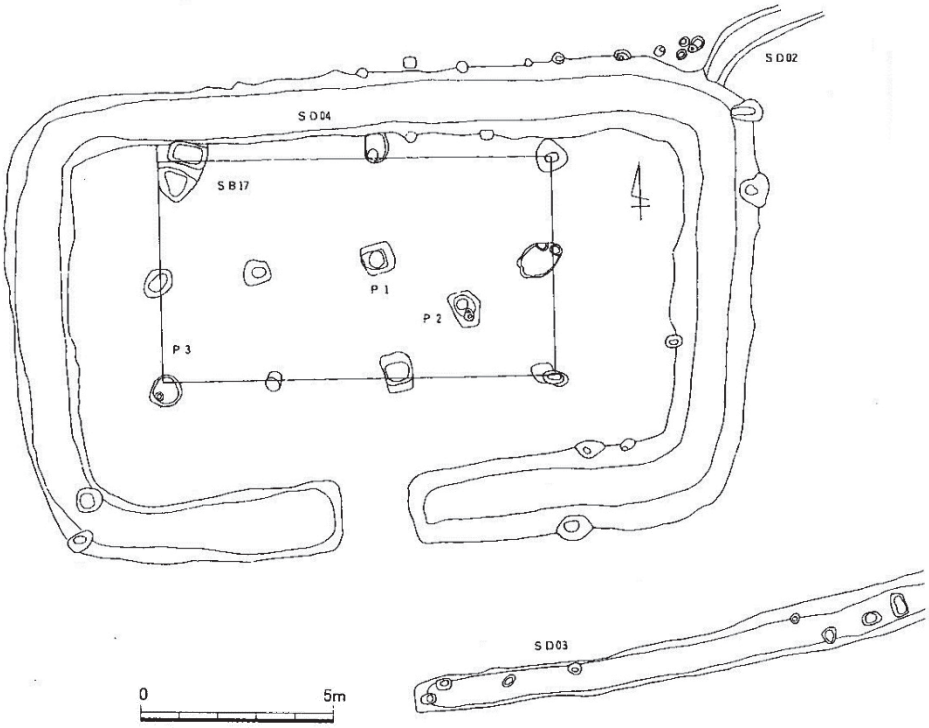

ＳＢ1446ａ～ｃ

徳永遺跡（木島 1997 より転載）




ＳＢ239ａ～ｃ

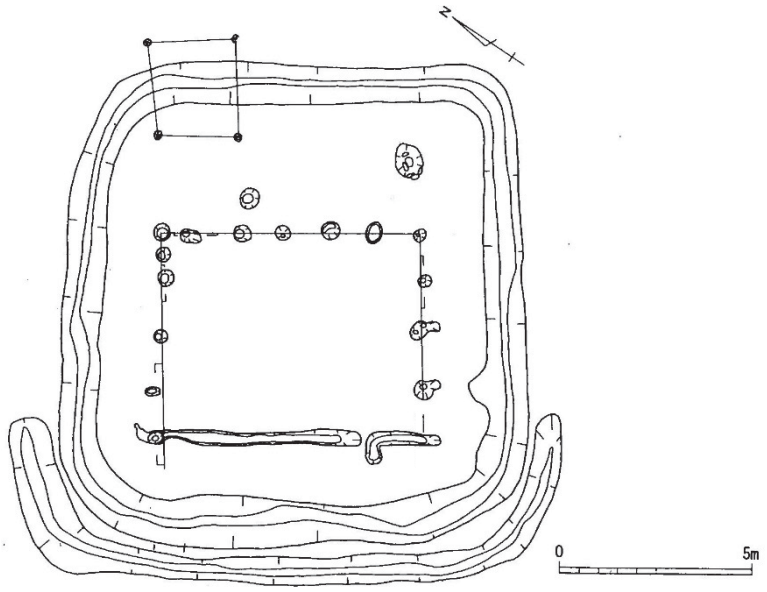
御手水遺跡（木島 1997 より転載）




SB17

久池井六本杉遺跡（大和町教育委員会 1990 より転載）

**第6図　周溝を持つ建物の例**




第7図　竹松遺跡　TAK201406調査区　SX1(S＝1/200)

調査年度が最も古い久池井六本杉遺跡の報告では、遺構の性格については述べていないが、遺構の時期については、建物を囲んでいる溝から出土した遺物の年代から、10世紀後半～11世紀代の年代を与えている（大和町教育委員会1990)。次の御手水遺跡の報告では、性格については同じ時期に整理作業が進んでいた徳永遺跡での考察に譲り、時期を平安時代と大きく括っている（佐賀市教育委員会1995）が、遺物の実測図を見ると8世紀後半～9世紀代と思われる。徳永遺跡の報告では、木島慎治氏により建物の時期を8世紀末～9世紀としたうえで3期に亘る遺構の変遷が明らかになり、遺構の性格については建物配置の他県での類例や当該建物の建つ位置（主軸の延長線上に信仰の対象となっている山が存在すること）等から「寺院施設」と「神社施設」の可能性を併記している。また、御手水遺跡の例についても考察を行い、ここでも3期の変遷が示された。(木島慎治1997)。

竹松遺跡で検出した周溝を持つ建物は出土した遺物から14世紀を想定した。佐賀市の3例と比べると古い例とは4世紀の開きがあり、新しい例とは2世紀の開きがある。竹松遺跡の場合は、周溝の形態は部分的な二重周溝で、内側の周溝は繋がり完全な区画地を作り出している。区画内の建物は建て替えが行われた形跡は見られない。周溝の構造を見ると竹松遺跡のものが佐賀市の3例よりも複雑な構造になっているといえる。遺構の性格については、周囲に堀をめぐらし区画すること、出入り口が一箇所しか無いこと、50m北西に四面廂の建物があることから、日常の生活とはやや離れた異なる特殊な空間と考え、佐賀市の3例と同じ宗教施設が適当と思われる。

引用･参考文献

大和町教育委員会　1990『久池井六本杉遺跡 - 第１次調査 -　 - 第２次調査 - 』大和町文化財調査報告書12集

佐賀市教育委員会　1995『御手水遺跡Ⅱ　２区の調査』佐賀市文化財調査報告書題64集

木島慎治　1997「御手水遺跡２区 SB239掘立柱建物および SD231溝の再検討」『徳永遺跡群Ⅰ　徳永遺跡１区　- 佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書４ - 』佐賀市文化財調査報告書86集　佐賀市教育委員会

### ④ 豊前系土師器について

区画溝からは豊前系の土師器がTAK201202調査区で集中的に出土した。区画溝から出土した底部の残存が1／2以上ある個体数は3年間の調査で出土した数を合計すると41点となる。市内での豊前系の土師器の出土は初めてで、県内においては佐世保市門前遺跡から出土した椀（註1）に次いで2遺跡目である。出土した点数の多さからは竹松遺跡と豊前地方の強い関りを予想させる。今回の報告では、大量に出土した区画溝以外にも豊前系の遺物が出土している。今後、溝内出土の豊前系土師器の出土量の精査と、区画溝以外から出土する豊前系土師器の分布状況等や出土状況の分析を行い今年度刊行予定の『竹松遺跡Ⅴ』で詳細を報告したい。

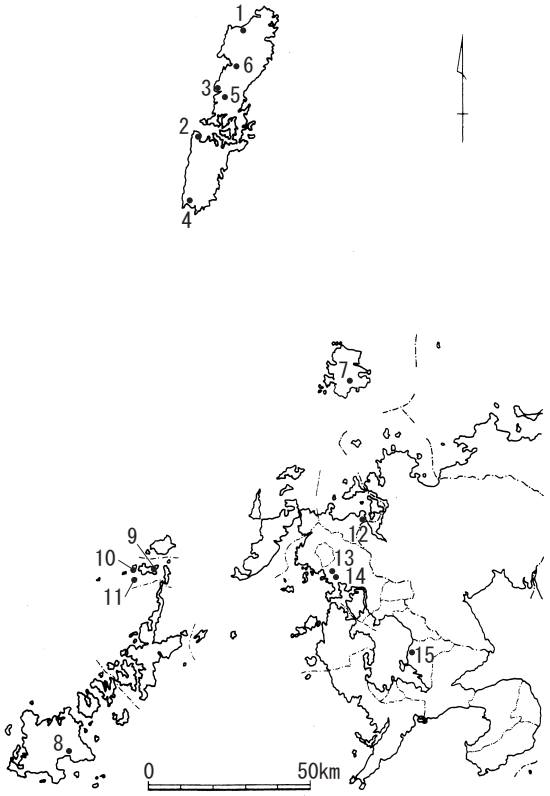
(註1)長崎県教育委員会　2006「３古代・中世　出土遺物」『門前遺跡　一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』長崎県埋蔵文化財調査報告書大190集　長崎県教育委員会

※上記文献では、生産地不明で「研磨土師器」の名称で４点の実測図が掲載されているが、佐世保市教育委員会の松尾秀昭氏のその後の調査により豊前系の土師器椀であることが分かった。松尾氏の教示による。

### ⑤ 高麗無釉陶器について（第1表、第8図）

本県において、高麗無釉陶器は地理的条件から対馬の中世の遺跡の調査ではよく目にする遺物の一つである。壱岐や五島、本土部での報告も近年見られるようになった。県内で高麗無釉陶が出土した遺跡の集成はすでに江上氏が行っている（江上2010）。その成果一覧に加筆したものが第1表である。

高麗無釉陶器は主税氏の集成によると、対馬から五島列島を含む北部九州に分布が集中し、南九州では見られずに南に離れた奄美群島と沖縄本島に分布する（主税2016）。これは、赤司氏が指摘しているように、国産の須恵器や陶器とは一見しただけでは識別が困難（赤司1991）であるために、報告する遺物としての選別にもれていることが予想される。今後、空白である南九州でも確認ができることは十分考えられる。




第8図　長崎県内の高麗無釉陶器出土遺跡

また、竹松遺跡からは初期高麗青磁が27点出土した。これは、これまでの県内本土部に所在する遺跡での出土数の中では最多の数である。山本氏によると高麗無釉陶器の分布は高麗青磁とほぼ重なる（山本2003）。

第1表　長崎県内の高麗無釉陶器出土遺跡一覧（江上2010に加筆）

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 出土内容 | 出典 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 大石原遺跡 | 対馬市上県町屋敷畑 | 掘立柱建物も含めた柱穴から59点が出土し、その他の遺構や包含層を含めると64点出土している | 上県町教育委員会　1996『大石原遺跡』上県町文化財調査報告書　第1集 |
| 2 | 水先（仮宿）遺跡 | 対馬市美津島町大字尾崎字仮宿 | 13点が掲載されている | 美津島町文化財保護協会　2001『水崎(仮宿)遺跡』美津島町文化財保護協会調査報告書　第1集 |
| 3 | 木坂海神神社弥勒堂跡 | 対馬市峰町大字木坂字タカイノクチ246番地 | 24点が掲載されている | 峰町教育委員会　1993『木坂海神神社弥勒堂跡』峰町文化財報告書　第11集 |
| 4 | オテタカ遺跡 | 対馬市厳原町大字豆酘字東保床 | 波状沈線が施された大型壺頸部1点が掲載されている | 長崎県教育委員会　2003『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ』長崎県文化財報告書　第172集 |
| 5 | 大田原ヤモト遺跡 | 対馬市峰町吉田大田原　ヤモト | 多くの朝鮮産陶磁器と一緒に波状沈線が施された大型壺頸部1点が掲載されている | 峰町教育委員会　1993『大田原ヤモト遺跡』峰町文化財調査報告書　第10集 |
| 6 | えーたん壇遺跡 | 対馬市上県町樫滝(仁田小学校校舎建設のために消滅) | 木坂海神神社弥勒堂跡を調査した元長崎県文化課職員安楽氏により町教委に保管されていた遺物が確認されている。点数は不明。 | 峰町教育委員会　1993『木坂海神神社弥勒堂跡』峰町文化財報告書　第11集 |
| 7 | 興触遺跡 | 壱岐市芦辺町湯岳興触 | 4点が掲載されている | 長崎県教育委員会　1998『興触遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第7集 |
| 8 | 大浜遺跡 | 五島市浜町大浜 | 旧沼地の埋土より31点出土している | 長崎県教育委員会　1998『大浜遺跡』長崎県文化財調査報告書　第141集 |
| 9 | 相津遺跡 | 北松浦郡小値賀町前方郷字大阪・相津迎 | 1点出土出土している | 小値賀町教育委員会　2000『相津遺跡』小値賀町文化財調査報告書　第13集 |
| 10 | 玉石鼻遺跡 | 北松浦郡小値賀町斑島郷字斑島 | 同一固体と思われる11点が出土している | 小値賀町教育委員会　2000『相津遺跡』小値賀町文化財調査報告書　第13集 |
| 11 | 大島赤尾遺跡 | 北松浦郡小値賀町大島郷199－1 | 1点出土出土している | 小値賀町教育委員会　2000『相津遺跡』小値賀町文化財調査報告書　第13集 |
| 12 | 松浦今福遺跡 | 松浦市今福町 | 3点出土している(報告書では須恵器と扱うが、後日江上氏により高麗無釉陶器と確認されている) | 松浦市教育委員会　1997『松浦今福遺跡』松浦市文化財調査報告書　第14集<br>長崎県教育委員会　2010『門前遺跡Ⅲ　武辺城跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第5集 |
| 13 | 門前遺跡 | 佐世保市愛宕町・中里町 | 18点出土している(報告書刊行後、江上氏により高麗無釉陶器と確認されている) | 長崎県教育委員会　2010『門前遺跡Ⅲ　武辺城跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第5集 |
| 14 | 竹辺Ｃ遺跡 | 佐世保市竹辺町 | 1点出土している(報告書刊行後、江上氏により高麗無釉陶器と確認されている) | 長崎県教育委員会　2010『門前遺跡Ⅲ　武辺城跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第5集 |
| 15 | 竹松遺跡 | 大村市竹松町・沖田町 | 253点出土 | 長崎県教育委員会　2019『竹松遺跡Ⅳ』新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集 |

引用・参考文献

赤司善彦1991「朝鮮製無釉陶器の流入」『九州歴史資料館研究論集』16九州歴史資料館

江上正高2010「門前遺跡未報告資料について」『門前遺跡Ⅲ　武辺城跡Ⅱ』　長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書　第5集

主税英徳2016「九州出土の高麗陶器」『考古学は科学か　下巻　田中良之先生追討論文集』田中良之先生追討論文編集委員会

山本信夫2003「東南アジア海域における無釉陶器」『貿易陶磁研究』No25日本貿易陶磁研究会

## ⑥ カムィヤキについて

カムィヤキは11世紀後半頃～14世紀にかけて奄美群島の徳之島で焼かれた、釉をかけない無釉の焼き締め陶器で、還元炎焼成のために灰色を呈する。そのために、カムィヤキはかつて「類須恵器」と呼ばれたこともあった。カムィヤキは、遺物に残る成形、調整、焼成などの技術や、器種の中心となる壺に施される波状文の加飾が同時期に朝鮮半島で生産されていた無釉陶器と似ていることから、カムィヤキの生産に朝鮮半島の技術が用いられたことが推測されている。初期高麗青磁や高麗無釉陶器が徳之島や徳之島の東に位置する喜界島の城久遺跡群から出土していることも朝鮮半島との関係を窺わせる。また、ちょうどこの時代に西彼杵半島で製作されたと思われる縦耳付の石鍋が琉球列島では多く出土し、さらには他所では見られない滑石を混ぜ込んだ縦耳付石鍋の模倣土器まで製作される。これらのことから「徳之島のカムィヤキ」「朝鮮半島の高麗無釉陶器」「長崎の滑石製石鍋」は強い結びつきがあったと思われる。カムィヤキはこれまで鹿児島県出水市の出水貝塚が本土部での出土の最北端であった（註1）が、竹松遺跡から出土したことでカムィヤキの分布が北上をした。さらに、前

述したように本土部の遺跡で、大量に出土した朝鮮半島製の焼き物、徳之島で焼かれたカムィヤキ、大量の石鍋（註2)、という3点が揃ったことは特筆すべきことであろう。

註1　伊仙町教育委員会　新里亮人氏の教示による

註2　現在竹松遺跡から出土した石鍋片の数量の集計を行っている。結果については『竹松Ⅴ遺跡』で報告したい

参考文献

赤司善彦1999 「徳之島カムィヤキ古窯跡採集の南東陶質土器について」『九州歴史資料館研究論集』24　九州歴史資料館

安里進2006　「カムィヤキ（亀焼）の器種分類と器種組成の変遷」『吉岡康暢先生古希記念論集　陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会

池田榮史2006 「カムィヤキ（類須恵器）」『鎌倉時代の考古学』高志書院

新里亮人2003　「徳之島とカムィヤキ古窯生産の流通とその特質」『先史学・考古学論究』Ⅳ龍田考古会

澄田直敏・野崎拓司2008 「喜界島城久遺跡群」『古代中世の境界領域』高志書院

宮城弘樹2015 「南西諸島出土滑石及び滑石混入土器出土遺跡集成」『廣友会誌』第８号廣友会

### ⑦ 石鍋の加工品について

滑石は硬度1と非常に柔らかい石であるために加工が行いやすく縄文時代から利用されている。そして、古代末から中世にかけては石鍋や石塔を作り出す大規模な工人集団が組織されていたと考えられている。長崎県の古代末から中世の遺跡では、生産地である西彼杵半島や長崎半島が近くにあることから、滑石製の石鍋片が多く出土する。また、中には石鍋片を加工して石錘や温石、バレン状石製品と呼ばれる補修具や容器状のものなど別の製品に作り変えられたものや、製作途中の未製品も出土する。石鍋の転用品や転用未製品については杉原氏が分類を行い（杉原2007)、バレン状石製品については松尾氏が検討を行った（松尾2007)。さらに、石鍋片の中には、加工を行った痕はあるが製品の形になっていないものも多く出土する。このような石鍋片について、池田氏は琉球列島での石鍋片の出土状況の検討や琉球列島だけに見られる滑石混入石鍋模倣土器の例から、破片そのものに価値があり移動があったのではないかと推測をしている（池田2003)。　今回の『竹松遺跡Ⅳ』では、製品としての完成した形にはなっていないが、「加工により定形となったもの」は、完成していない製品（「未製品」）として、また、「加工を行った痕はあるが一定の形になっていないもの」は加工のための素材（「加工素材」）として報告することに努めた。以下加工の種類について述べたい。なお、加工の種類については図上で色分けを行っている。

「切断」(図版8)

金属製の工具（鋸と思われる）で挽き切ること。最後まで切断せずに、残りの厚さが薄くなった段階で「折り取り」により断つ例が多い。

「折り取り」(図版9)

石鍋片を折って断つこと。石鍋片は器厚があるために「切断」との組み合わせで使われる。

「削り」(図版10)

鑿により断面を整えたり、面取りを行うこと。また、耳や鍔など突起物を除去する際にも行われる。小さな単位で連続して行われることが多い。

「刻み」(図版11)

鑿状の工具で鋭利な凹凸をつけること。小さな単位で連続して行われることが多い。

「溝」(図版12)

鋭利な工具で線状の傷をつけること。浅い例から深い例まである。切断との違いは、切断痕は直線的な線になるのに対し溝は粗い線であることが多い。中には定規を使用したと思われる直線的な溝もある。

「穿孔」(図版13)

穴を開けること。石鍋として使用していた際の穿孔との違いは、穿孔面の色調が馴染んでいた場合は使用中の穿孔と考え、新鮮な場合は加工時のものと考える。

図版8 「切断」

図版9 「折り取り」

図版10 「削り」

図版11 「刻み」

図版12 「溝」

図版13 「穿孔」

図版14 「こすり」

「こすり」(図版14)

面をこすり平滑にすること。削りと違い複数の平坦面が見られない。


参考文献

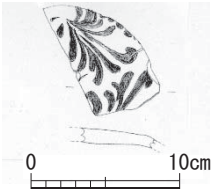
池田榮史2003「穿孔を有する滑石製石鍋破片について」『小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名護市教育委員会

杉原敏之2007「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺 - 考察編 - 』九州歴史資料館

松尾秀昭2007「石鍋の補修具とは」『西海考古』第７号　西海考古同人会

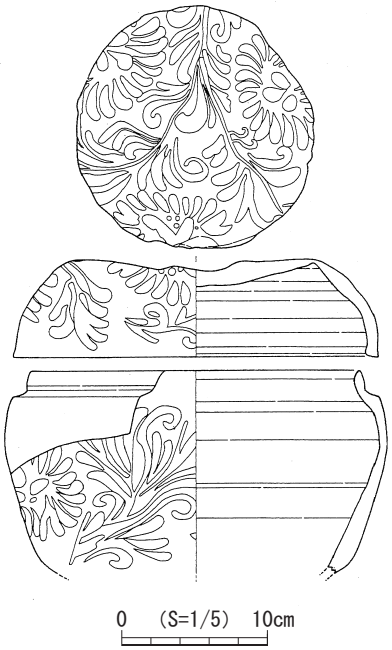

### ⑧ 鉄絵青磁蓋と初期高麗青磁壺について

第9図、図版15はTAK201405調査区①区2層から出土した鉄絵青磁蓋である（掲載番号788。P264に包含層2層出土の遺物として掲載)。貫入のある緑色の釉の下に、鉄絵で描かれた勢いのある草花文の葉や花弁が空間を埋めている。胎土は白色粒子を含んで粗い。内面は施釉されるが文様は描かれない。形状から蓋と考えた。陶器の盤にも鉄絵が施されるが同じ鉄絵の製品でもまったく異なっていた。そこで、生産地不明の鉄絵蓋として処理をした。その後、山本信夫氏にこの遺物を見ていただく機会があり調べていただいた結果、大韓民国海南郡の珍山里窯跡から良く似た文様の蓋が出土しているという情報をいただいた。その蓋が第10図、図版16である。報告書（註1）から関連する部分を抜粋し訳文を掲載する（註2）



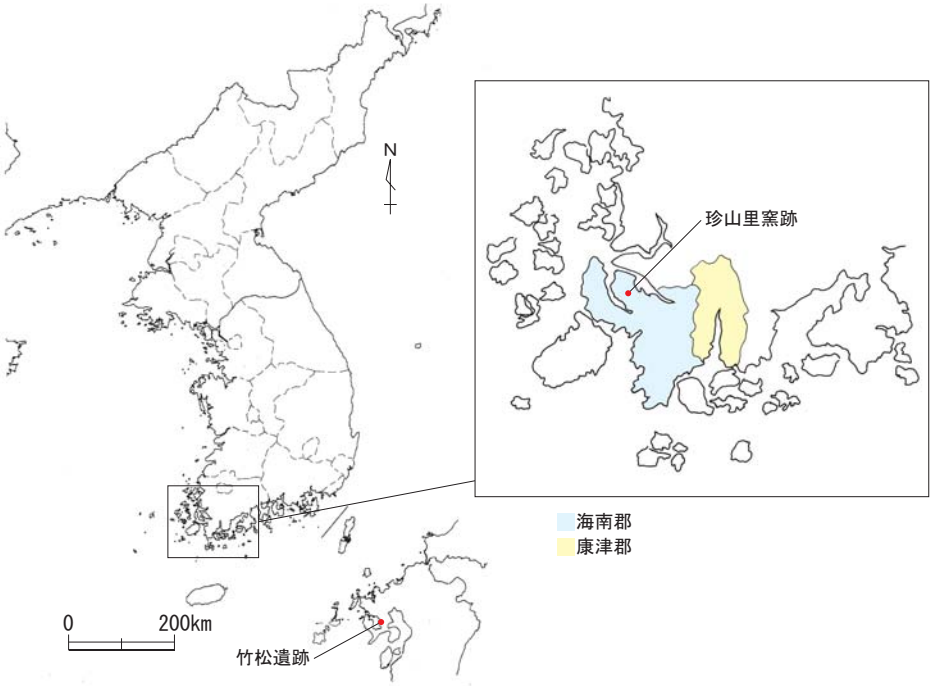

第9図　竹松遺跡出土鉄絵青磁蓋(S＝1/5)

図版15　竹松遺跡出土鉄絵青磁蓋




第10図　珍山里窯跡出土盒(S＝1/5)
(『海南珍山里緑青磁窯址』より)

図版16　珍山里窯跡出土盒(註3)
(『海南珍山里緑青磁窯址』より)




第11図　珍山里窯跡の位置

『海南珍山里緑青磁窯址』より抜粋

5) 盒

합은 1조를 이루어 출토된 것은 1점 뿐이고 그 외는 한쪽이 결실된 채 출토되었다.

① 青磁鐵畫牧丹草文 大盒(그림 32-①, 원색사진 6, 사진 61-④)

대발에 뚜껑이 있는 합이다. 뚜껑을 내화토+가는 모래받침으로 발과 뚜껑의 접지면에서 포개어 번조하였다. 발과 뚜껑 모두 기외면의 전면에 모란초문이 빈틈없이 시문되었다. 발은 뚜껑을 덮기 위해 경부를 내만시켰으며 약간 외반된 뚜껑과 겹치는 곳은 시유 후 유약을 닦아 내었다. 태토에 사립이 많이 섞인 조질이며 기포가 있어 기면이 고르지 못하다. 기벽의 두께는 일정치 않고 내면에도 시유하였으며 물레자국이 남아 있다. 뚜껑의 接地面 시유 후 번조받침이 있는 곳을 중심으로 일부 유를 닦아 내었다. 역시 태토는 사립이 많이 섞인 조질로서 기포가 많아 기면이 고르지 못하다. 내면 역시 동일하다.

발 구경 22㎝, 합 구경 24㎝, 높이 6.6㎝이다.

[訳文]

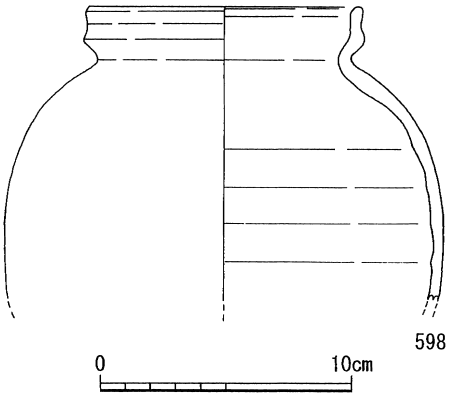
盒は1組をなして出土したものは1点のみで、そのほかは片側が欠失した状態で出土した。

① 青磁鉄絵牡丹草文大盒（図32－①、原色写真6、写真61－④）

大鉢に蓋がある盒である。蓋は耐火土＋細かい砂の支えで、鉢と蓋の接地面で重ねて焼成した。鉢と蓋の両方に器外面の全面に牡丹草文が隙間なく施文された。鉢は蓋をかぶせるために頸部を内湾させ、少し外反した蓋と重ねるところは施釉後、釉薬を剥ぎ取っている。胎土に砂粒が多く混ざった粗質で、気泡があり、平滑ではない。器壁の厚さは一定ではなく、内面にも施釉されているが、轆轤痕が残っている。蓋の接地面は施釉後、焼成用の支えがあるところを中心に一部、釉を剥ぎ取っている。やはり胎土は砂粒が多く混ざる粗質で気泡が多く、器面は平滑ではない。内面はやはり同一である。

鉢口径22㎝、盒口径24㎝、高さ6.6㎝である。

また、山本信夫氏からは『竹松遺跡Ⅱ』掲載番号598の陶器壺として報告している遺物(TAK201202調査区SP①1338出土遺物）は初期高麗青磁の壺で、似た形状の遺物が御笠川南条坊遺跡の調査から出土している（註3）との教示をいただいたので合わせて報告をする。




第12図 『竹松遺跡Ⅱ』SP①1338 出土遺物
（掲載番号598）

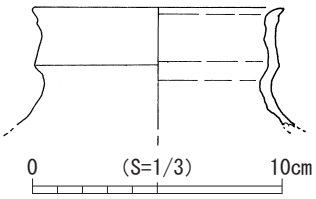
図版17 『竹松遺跡Ⅱ』SP①1338 出土遺物
（掲載番号598）

竹松遺跡出土の壺は、報告文には「**598**は貿易陶器壺である。最大径は肩部にあり口縁部は複合口縁となる。胎土には長石が多く含まれ内外面にオリーブ色の釉が掛かる。詳細な時期については不明である」と記し（註5)、観察表は次の通りである。

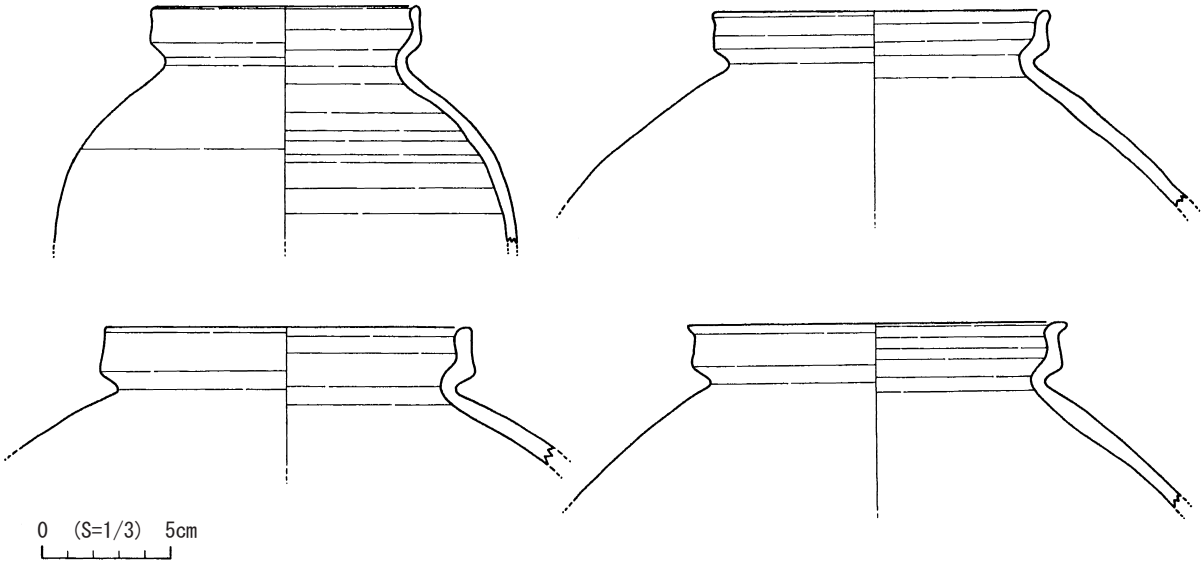
**第2表　SP ①1338出土土器観察表**

| 図版番号 | 器種 | 部位 | 法量(cm) | | | 調整 | | 色調 | | 焼成 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 598 | 貿易陶器　壺 | 口縁部～体部 | (10.8) | (11.5) | ー | ー | ー | 灰オリーブ | 灰オリーブ | 良好 | 長石が多く含まれる | 複合口縁 |

御笠川南条坊遺跡出土の資料811は、報告では「雑器」としてまとめられ、報告文には「811は器壁が薄く胎土は灰色ないし紫灰色で、緑味褐色の釉がかかっている」と記されている。
なお、珍山里窯跡からは複合口縁壺が出土している。




**第13図　御笠川南条坊遺跡資料（掲載番号811）**




**第14図　珍山里窯跡出土複合口縁壺（『海南珍山里緑青磁窯跡』より）**

註１　木浦大学校博物館･全羅南道海南郡1992　『海南珍山里緑青磁窯跡』木浦大学校博物館学術叢書第27冊
註２　和訳は長崎県埋蔵文化財センターの古澤義久氏による
註３　実測図の蓋平面図に合わせるために報告書の写真を180度回転させている
註４　福岡県教育委員会編1976　『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)』
註５　『竹松遺跡Ⅱ』の報告では「最大径が肩部にある」としたが､「最大径は胴部にある」の誤記であり訂正をする。

## 7　その他

# 長崎県本土部における古代の土師器坏研究の現状整理と若干の考察

## ―9世紀の彼杵郡・高来郡の土師器坏を中心に―

### はじめに

竹松遺跡のTAK2014の各調査区の古代の遺構や遺物の報告にあたり、長崎県本土部(奈良時代の彼杵郡と高来郡に限定する)の古代の土師器研究の現状を概観し、現状認識を踏まえたうえで、古代の土師器坏を中心に若干の整理を行う。

なお古代の土師器坏のうち、10世紀、11世紀の資料は本県では極めて少なく、検討できる状況に無い(註1)。したがって本稿では9世紀の土師器坏に限って検討することにする。

また本稿は、本県本土部の発掘現場担当者が当該期の遺構の時期決定にあたって、ある程度の目安となる土師器坏の型式分類と各型式の時期を提示することを目的とする。

なお、本来であれば、属性分析を経た議論を展開することが望まれるが、分析に耐えうる資料数が不足していることもあり、十分な資料蓄積と詳細な分析が加えられ、形式・型式設定が行われるとともに、九州内での検証が行われている大宰府の成果を参考に検討を加えていく。

### 1　長崎県における古代の土師器坏研究史

これまでの本県における古代の土師器坏のまとまった研究は、野澤(竹中)哲朗が雲仙市十園遺跡の報告書の中で行ったものが唯一と思われる(国見町教委編2004)。

野澤は同遺跡から出土した斉一性の強い土師器坏を「十園坏A類」と命名し、島原半島から出土した古代土師器坏との比較検討を行う中で、本県本土部では、8世紀中頃に須恵器を模倣した坏から「十園坏A類」へ坏の主体が変化したとの仮説を提起した。

また、出土遺物組成の違いから、雲仙市小中野A遺跡や島原市大野原七反畑遺跡など模倣坏のみが出土する遺跡、十園遺跡のように須恵器を模倣した坏と「十園坏A類」が出土する遺跡、雲仙市大園遺跡や島原市稗田原遺跡のように「十園坏A類」のみとなる遺跡という3類型の遺跡が存在することを示した。

野澤の検討以降は、良好な資料に恵まれないこともあって、本県本土部の古代土師器研究に進展がみられないのが現状である。

### 2　手持ちヘラケズリで成形された土師器坏と回転台を用いて成形された土師器坏

古代の土師器坏には手持ちヘラケズリで成形された土師器坏と回転台を用いて成形された土師器坏がある。

前者について、江神めぐみは「回転台の成形(ヘラ切離)よりも古い製作技法であり、古墳時代後期から古代における重要な製作技法のひとつである。本資料に着目することで、これまで明確でなかった古墳時代後期から古代への移行期における土器様相を見出すことができる」とその研究意義を強調している(江神2016)。

一方、後者は須恵器製作の影響を受け、回転台を用いて成形された土師器坏である。

本県の8世紀における両者の状況は判然としないが、現状では手持ちヘラケズリで成形された土師器坏は8世紀にも作られている(註2)。

### 3　器種分類

古代の土師器の供膳具には、坏・皿・椀・高坏などがあるが、本稿では坏をとりあげて検討する。

なお、山本信夫氏の編年に照らすと、大宰府土器型式Ⅱ・Ⅲ期の坏ａに、該当する(山本信夫1990)。

### 4　分析方法

(1)古代の土師器坏の法量による分析

法量分析には傾斜指数と器高指数を用いた。傾斜指数とは、口径から底径を引き、それを2分し、さらに器高で割った指数である(山本悦世1995)。傾斜指数が大きいほど、口縁部が外へ開き、傾きが大きい。

一方、器高指数とは、器高を口径で割り、100を乗じたものである(齋藤2010)。器高指数が大きいほど器高が高く、小さいほど器高が低いことになる。対象となる坏の大きさ(体積)を縦軸にとり、傾斜指数と器高指数をそれぞれ横軸にとり、分布図を作成し、検討した。

また、大きさ(体積)は、杯の口径、底径、器高を基にパソコンを用いて算出した(註3)。

本稿では、器高指数20以下を皿、器高指数33以上を椀として分類し、それ以外の器高指数を示すものを坏とした。

また、本来は完形ないし、完形に近いものを分析対象にすべきであろうが、本県ではそのような資料は極めて少ないため、図上復元の資料も含めて報告書に掲載された実測図や観察表によって分析した。

### 5　坏ａの検討

(1)坏ａを出土した遺跡

①雲仙市十園遺跡(国見町教委編2004)

総延長約46mの直線的な溝(12～14区 SD01)の覆土から出土した。勾配の緩い水路で、調査者は「覆土が一気に堆積したものか否かの判別はむずかしい」としている。ある程度の時間幅を有する資料であろう。

②島原市稗田原遺跡(長崎県教委編1999)

旧河道から出土している。ある程度の時間幅を有する。

③雲仙市大園遺跡(吾妻町教委編1991)

包含層からの出土である。

④島原市松尾遺跡(長崎県教委編1988)

包含層からの出土である。

⑤大村市寿古遺跡(大村市教委編1992)

本調査で出土したと報告されているが、出土状況は判然としない。遺構に伴うものではないようである。

⑥雲仙市矢房遺跡(国見町教委編2003)

矢房遺跡4区で出土している。報告書では「後世に寄せ集められたものを土坑中に埋設したものである」と記述されている。さらに報告者は「遺物には同時代的様子が強く、一括もしくは複数の火葬墓があったものと考えておく」としている。

⑦大村市竹松遺跡(長崎県教委編2018)

竪穴建物跡や土坑、溝などから出土している。

⑧長崎市深堀遺跡(長崎市教委編2005)

4号土坑墓より副葬品として土師器坏4、黒色土器A類1、小型の土師器甕1が人骨とともに出土している。人骨に乱れは無く、原位置を保つと考える。

(2)坏aの型式

①分布図の検討(第7図～第10図)

坏aの大きさ(体積)ごとの傾斜指数および器高指数の分布を見ると、傾斜指数、器高指数ともに、だ円形のまとまりを持った分布を示す(第1図～第4図)。特に大きさ(体積)250～360cm³、傾斜指数0.6～0.8、器高指数26～32の範囲に集中する(第1図、第2図)。この集中部分を拡大すると、さらに3つの分布の集中域があることが分かる(第3図、第4図)。

②坏aの形状

平底で、体部から口縁部が外方へ直線的に開く器形である。

③成形技法

いずれも回転台を使用し、底部を回転ヘラ切り離しによって成形している(註4)。

また、大園遺跡から出土した坏の底部は、とぐろを巻いたような粘土紐の跡が明瞭に残っており、底部成形から粘土紐巻上げ技法が行われていたことが分かる資料である。

(3)「十園坏A類」について

①「十園坏A類」の抽出

「十園坏A類」とは「底径7～8cm、口径12～13cm、高さ3.5～4.2cm。」の坏aで、前述のように十園遺跡の報告書において野澤哲郎が抽出した。

②「十園坏A類」の細分

本稿では、古代の土師器坏と同様に、大きさ(体積)と傾斜指数の分布ならびに器高指数との分布によって分析した。野澤の十園坏A類の定義に当てはめると、傾斜指数0.595～0.857、器高指数26.92～35、大きさ(体積)253.81～370.55cm³の範疇に入る土師器坏である。具体的には第1図、第2図の集中域に分布する坏である。ここでは分析の結果、「十園坏A類」をA1類からA3類に細分できた(第3図、第4図)。

A2類はA1類より大きさ(体積)が小さく、小型である。A3類はさらに小型である。

十園遺跡の報告書で示すと

A1類　報告遺書の45頁第31図1,6,8,9,14,15,40,43

A2類　同第31～32図　2,3,10,12,25

A3類　同第31図　5,11

となる。

(4)十園坏A類以外の坏aの型式設定

①十園遺跡から出土したその他の坏aの型式について

十園遺跡から出土した坏aも含めて、県内本土部には、十園坏A類より体部の開きが小さいもの、すなわち傾斜指数が小さいものと、いずれも大きいものがある。資料が少なく、型式として成立するかは不確定ではあるが、予察的に記載しておく。前者には稗田原遺跡の旧河道から出

土したNo6、竹松遺跡TAK201202調査区のSC08から出土したNo396の坏aがある。ここでは「稗田原坏A1類」とする。

後者には、稗田原遺跡の旧河道から出土したNo12、十園遺跡12・14区SD01から出土したNo37がある。ここでは「稗田原坏A2類」とする。さらに「竹松遺跡TAK201202調査区のSC05出土のNo380、同調査区のSK95から出土したNo530がある。「竹松坏A2類」とする(註5)。

また、十園遺跡12・14区SD01から出土したNo41、竹松遺跡TAK201202調査区のSK96から出土したNo96、大園遺跡から出土したNo50を「大園坏A1類」とする。加えて、大園遺跡のNo44、十園遺跡の12・14区SD01から出土したNo16を「大園坏A2類」とする。

(5)坏aの型式組列

型式組列を示すにあたり、傾斜指数が小さなものが古く、大きいものが新しいと仮定した。さらに大きさ(体積)が大きいものが古く、小さいものが新しいと推定した。

稗田原杯A類(傾斜指数0.4～0.6)

↓

十園杯A1類

↓

十園坏A2類　(傾斜指数0.6～0.8)　竹松坏A1類(註5)

十園坏A3類

稗田原坏A2類(傾斜指数0.8～1)

↓

竹松坏A2類　(同上)

↓

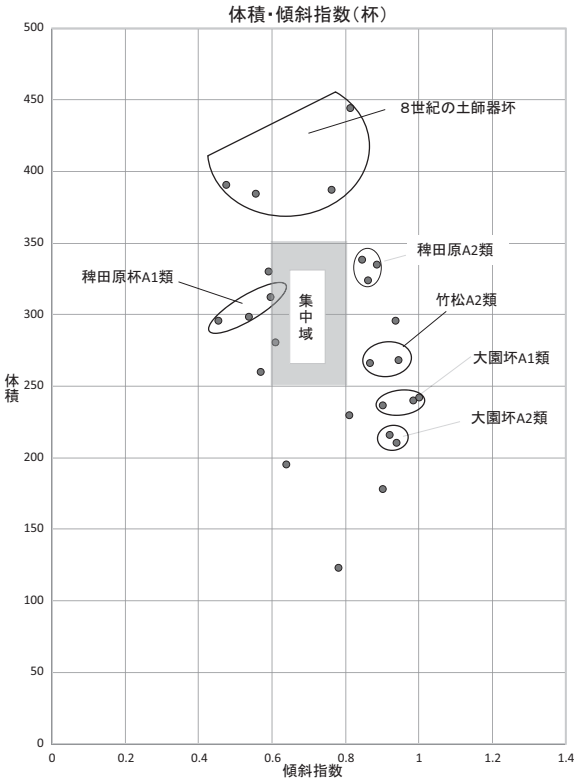
大園坏A1類　(同上)

↓

大園坏A2類　(同上)

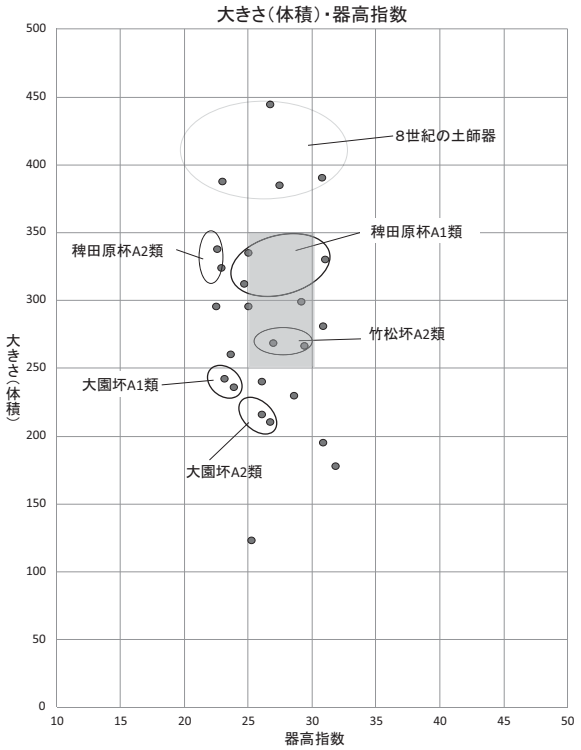
ここでは、上記のような型式組列を提示する(第7図)。

| No | 遺跡名 | 出土場所 | c(口径) | b(底径) | a(器高) | (c-b)/2/a | 大きさ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.4 | 9.6 | 3.1 | 0.45161 | 296.194 | |
| 8 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13 | 9.2 | 3.2 | 0.59375 | 312.685 | |
| 9 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13 | 9.2 | 4 | 0.475 | 390.856 | |
| 12 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 14.2 | 8.8 | 3.2 | 0.84375 | 338.488 | |
| 49 | 松尾遺跡 | 包含層 | 12.3 | 9 | 2.9 | 0.56897 | 260.4 | |
| 50 | 松尾遺跡 | 包含層 | 10.7 | 6.5 | 3.3 | 0.63636 | 195.5 | |
| 344 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 11 | 4.7 | 3.5 | 0.9 | 178.486 | |
| 369 | 竹松遺跡 | TAK201202SC04 | 13.8 | 8 | 3.1 | 0.93548 | 296.096 | |
| 380 | 竹松遺跡 | TAK201202SC05 | 13 | 6.4 | 3.5 | 0.94286 | 268.622 | |
| 396 | 竹松遺跡 | TAK201202SC08 | 12.2 | 8.4 | 3.55 | 0.53521 | 299.151 | |
| 520 | 竹松遺跡 | TAK201202SK87 | 12.6 | 8 | 3.9 | 0.58974 | 330.36 | |
| 530 | 竹松遺跡 | TAK201202SK95 | 12.6 | 6.2 | 3.7 | 0.86486 | 266.691 | |
| 531 | 竹松遺跡 | TAK201202SK96 | 12.6 | 7.2 | 3 | 0.9 | 236.66 | |
| 43 | 大園遺跡 | 包含層 | 14.6 | 9.5 | 3.35 | 0.76119 | 387.743 | |
| 44 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.1 | 6.3 | 3.15 | 0.92063 | 216.335 | |
| 50 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.7 | 6.2 | 3.3 | 0.98485 | 240.581 | |
| 41 | 大園遺跡 | 包含層 | 9.9 | 6 | 2.5 | 0.78 | 123.236 | |
| 1 | 矢房遺跡 | 火葬墓 | 11.9 | 6.4 | 3.4 | 0.80882 | 230.3 | |
| 39 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.5 | 9.4 | 3.7 | 0.55405 | 385.051 | |
| 13 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 15 | 8.5 | 4 | 0.8125 | 444.797 | |
| 16 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 6 | 3.2 | 0.9375 | 211.115 | |
| 37 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 14 | 8.5 | 3.2 | 0.85938 | 324.422 | |
| 38 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 14 | 7.8 | 3.5 | 0.88571 | 335.402 | |
| 41 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 7 | 3 | 1 | 242.688 | |
| 7 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 7.5 | 3.7 | 0.60811 | 281.153 | |



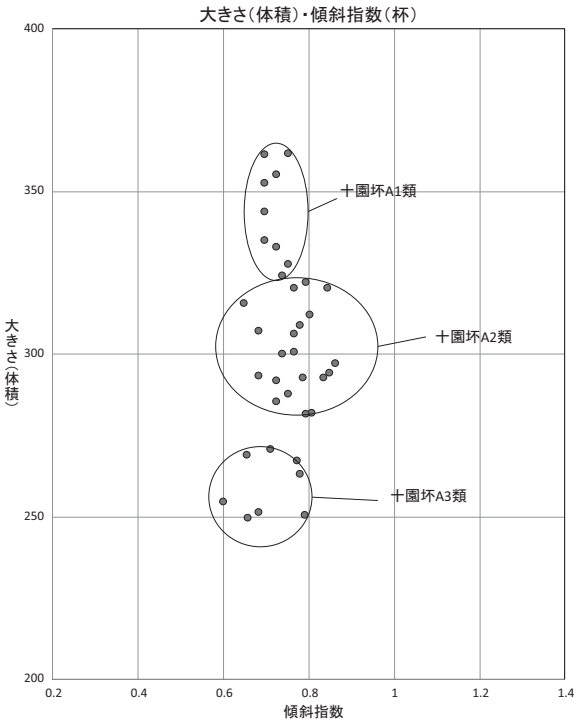

第1図　坏aの大きさ(体積)と傾斜指数の分布図

| No | 遺跡名 | 出土場所 | c(口径) | b(底径) | a(器高) | a/c*100 | 大きさ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.4 | 9.6 | 3.1 | 25 | 296.194 | |
| 8 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13 | 9.2 | 3.2 | 24.6154 | 312.685 | |
| 9 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13 | 9.2 | 4 | 30.7692 | 390.856 | |
| 12 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 14.2 | 8.8 | 3.2 | 22.5352 | 338.488 | |
| 49 | 松尾遺跡 | 包含層 | 12.3 | 9 | 2.9 | 23.5772 | 260.4 | |
| 50 | 松尾遺跡 | 包含層 | 10.7 | 6.5 | 3.3 | 30.8411 | 195.5 | |
| 344 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 11 | 4.7 | 3.5 | 31.8182 | 178.486 | |
| 369 | 竹松遺跡 | TAK201202SC04 | 13.8 | 8 | 3.1 | 22.4638 | 296.096 | |
| 380 | 竹松遺跡 | TAK201202SC05 | 13 | 6.4 | 3.5 | 26.9231 | 268.622 | |
| 396 | 竹松遺跡 | TAK201202SC08 | 12.2 | 8.4 | 3.55 | 29.0984 | 299.151 | |
| 520 | 竹松遺跡 | TAK201202SK96 | 12.6 | 8 | 3.9 | 30.9524 | 330.36 | |
| 530 | 竹松遺跡 | TAK201202SK95 | 12.6 | 6.2 | 3.7 | 29.3651 | 266.691 | |
| 531 | 竹松遺跡 | TAK201202SK96 | 12.6 | 7.2 | 3 | 23.8095 | 236.66 | |
| 43 | 大園遺跡 | 包含層 | 14.6 | 9.5 | 3.35 | 22.9452 | 387.743 | |
| 44 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.1 | 6.3 | 3.15 | 26.0331 | 216.335 | |
| 50 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.7 | 6.2 | 3.3 | 25.9843 | 240.581 | |
| 41 | 大園遺跡 | 包含層 | 9.9 | 6 | 2.5 | 25.2525 | 123.236 | |
| 1 | 矢房遺跡 | 火葬墓 | 11.9 | 6.4 | 3.4 | 28.5714 | 230.3 | |
| 39 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.5 | 9.4 | 3.7 | 27.4074 | 385.051 | |
| 13 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 15 | 8.5 | 4 | 26.6667 | 444.797 | |
| 16 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 6 | 3.2 | 26.6667 | 211.115 | |
| 37 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 14 | 8.5 | 3.2 | 22.8571 | 324.422 | |
| 38 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 14 | 7.8 | 3.5 | 25 | 335.402 | |
| 41 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 7 | 3 | 23.0769 | 242.688 | |
| 7 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 7.5 | 3.7 | 30.8333 | 281.153 | |



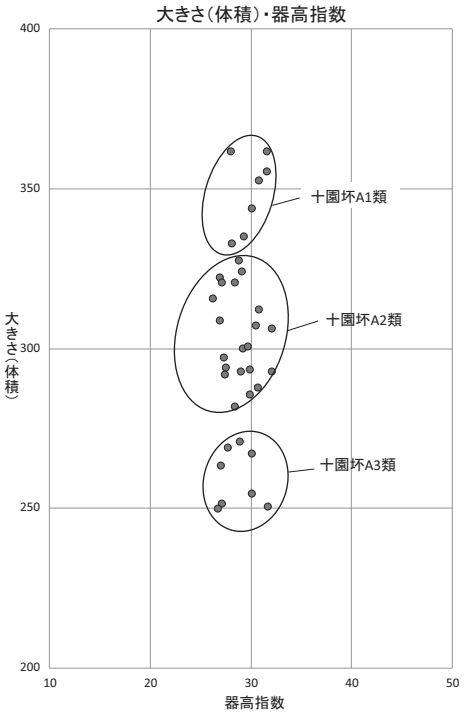

第2図　坏 a の大きさ(体積)と器高指数の分布図

| No | 遺跡名 | 出土場所 | c(口径) | b(底径) | a(器高) | (c−b)/2/a | 大きさ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.3 | 6.6 | 3.7 | 0.77027027 | 267.379 | |
| 5 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.4 | 7.8 | 3.6 | 0.77778 | 309.02 | |
| 7 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.8 | 7.6 | 3.5 | 0.72222 | 292.189 | |
| 11 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.2 | 8 | 3.7 | 0.72222 | 333.063 | |
| 13 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.6 | 8.2 | 3.8 | 0.75 | 361.842 | |
| 346 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 12.4 | 7.2 | 3.7 | 0.72222 | 285.638 | |
| 347 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 13.2 | 7.4 | 3.3 | 0.80556 | 282.231 | |
| 611 | 竹松遺跡 | TAK201202SP ⑤57 | 13 | 6.6 | 4 | 0.8 | 312.442 | |
| 613 | 竹松遺跡 | TAK201202SP ⑤66 | 12.4 | 7 | 3.8 | 0.75 | 288.065 | |
| 42 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.3 | 7.2 | 3.55 | 0.70833 | 271.093 | |
| 45 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.4 | 7.5 | 3.7 | 0.68056 | 293.513 | |
| 55 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.3 | 7.6 | 3.4 | 0.65278 | 269.287 | |
| 56 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.7 | 7.4 | 3.7 | 0.73611 | 300.313 | |
| 57 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.5 | 7.6 | 3.8 | 0.68056 | 307.415 | |
| 58 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.2 | 7.3 | 3.3 | 0.68056 | 251.57 | |
| 46 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.6 | 7 | 3.4 | 0.77778 | 263.439 | |
| 1 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 3.8 | 0.69444 | 335.26 | |
| 2 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.5 | 6.5 | 4 | 0.83333 | 292.954 | |
| 3 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.5 | 7 | 4 | 0.76389 | 306.567 | |
| 4 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 11.3 | 7 | 3.4 | 0.59722 | 254.921 | |
| 5 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 6 | 3.8 | 0.78947 | 250.699 | |
| 6 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 4 | 0.69444 | 352.906 | |
| 8 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 3.9 | 0.69444 | 344.083 | |
| 9 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.2 | 7.5 | 3.8 | 0.75 | 327.789 | |
| 10 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.8 | 7 | 3.8 | 0.76316 | 300.879 | |
| 11 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 7.8 | 3.2 | 0.65625 | 250.02 | |
| 12 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.7 | 7 | 3.6 | 0.79167 | 281.98 | |
| 14 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 4.1 | 0.69444 | 361.728 | |
| 15 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 7.8 | 4.1 | 0.72222 | 355.546 | |
| 25 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.1 | 7 | 3.6 | 0.84722 | 294.345 | |
| 40 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.4 | 7.7 | 3.6 | 0.79167 | 322.356 | |
| 43 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.1 | 7.5 | 3.8 | 0.73684 | 324.427 | |
| 86 | 松尾遺跡 | 包含層 | 13 | 8.6 | 3.4 | 0.64706 | 315.78 | |
| 1 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.4 | 7 | 3.8 | 0.84211 | 320.696 | |
| 2 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.3 | 7.8 | 3.6 | 0.76389 | 320.7 | |
| 3 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.2 | 7 | 3.6 | 0.86111 | 297.48 | |
| 4 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 12.8 | 7 | 3.7 | 0.78378 | 292.96 | |




第3図　十園坏 A 類の細分

| No | 遺跡名 | 出土場所 | c(口径) | b(底径) | a(器高) | a/c＊100 | 大きさ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.3 | 6.6 | 3.7 | 30.08130081 | 267.379 | |
| 5 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.4 | 7.8 | 3.6 | 26.8657 | 309.02 | |
| 7 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 12.8 | 7.6 | 3.5 | 27.3438 | 292.189 | |
| 11 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.2 | 8 | 3.7 | 28.0303 | 333.063 | |
| 13 | 稗田原遺跡 | 旧河道 | 13.6 | 8.2 | 3.8 | 27.9412 | 361.842 | |
| 346 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 12.4 | 7.2 | 3.7 | 29.8387 | 285.638 | |
| 611 | 竹松遺跡 | TAK201202SP⑤57 | 13 | 6.6 | 4 | 30.7692 | 312.442 | |
| 613 | 竹松遺跡 | TAK201202SC03 | 12.4 | 7 | 3.8 | 30.6452 | 288.065 | |
| 42 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.3 | 7.2 | 3.55 | 28.8618 | 271.093 | |
| 45 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.4 | 7.5 | 3.7 | 29.8387 | 293.513 | |
| 55 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.3 | 7.6 | 3.4 | 27.6423 | 269.287 | |
| 56 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.7 | 7.4 | 3.7 | 29.1339 | 300.313 | |
| 57 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.5 | 7.6 | 3.8 | 30.4 | 307.415 | |
| 58 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.2 | 7.3 | 3.3 | 27.0492 | 251.57 | |
| 46 | 大園遺跡 | 包含層 | 12.6 | 7 | 3.4 | 26.9841 | 263.439 | |
| 1 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 3.8 | 29.2308 | 335.26 | |
| 2 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.5 | 6.5 | 4 | 32 | 292.954 | |
| 3 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.5 | 7 | 4 | 32 | 306.567 | |
| 4 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 11.3 | 7 | 3.4 | 30.0885 | 254.921 | |
| 5 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 6 | 3.8 | 31.6667 | 250.699 | |
| 6 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 4 | 30.7692 | 352.906 | |
| 8 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 3.9 | 30 | 344.083 | |
| 9 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.2 | 7.5 | 3.8 | 28.7879 | 327.789 | |
| 10 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.8 | 7 | 3.8 | 29.6875 | 300.879 | |
| 11 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12 | 7.8 | 3.2 | 26.6667 | 250.02 | |
| 12 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 12.7 | 7 | 3.6 | 28.3465 | 281.98 | |
| 14 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 8 | 4.1 | 31.5385 | 361.728 | |
| 15 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13 | 7.8 | 4.1 | 31.5385 | 355.546 | |
| 25 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.1 | 7 | 3.6 | 27.4809 | 294.345 | |
| 40 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.4 | 7.7 | 3.6 | 26.8657 | 322.356 | |
| 43 | 十園遺跡 | 13,14区 SD01 | 13.1 | 7.5 | 3.8 | 29.0076 | 324.427 | |
| 86 | 松尾遺跡 | 包含層 | 13 | 8.6 | 3.4 | 26.1538 | 315.78 | |
| 1 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.4 | 7 | 3.8 | 28.3582 | 320.696 | |
| 2 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.3 | 7.8 | 3.6 | 27.0677 | 320.7 | |
| 3 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 13.2 | 7 | 3.6 | 27.2727 | 297.48 | |
| 4 | 深堀遺跡 | 第4号土坑墓 | 12.8 | 7 | 3.7 | 28.9063 | 292.96 | |




**第4図　十園坏A類の細分**

(6)坏aの実年代の推定

8世紀までは、共伴する須恵器から土師器坏のおおまかな時期を類推できたが、9世紀に入ると前半はともかく後半には須恵器生産が衰退していくため、土師器坏aとの共伴資料に乏しく、時期決定の決め手に欠ける。

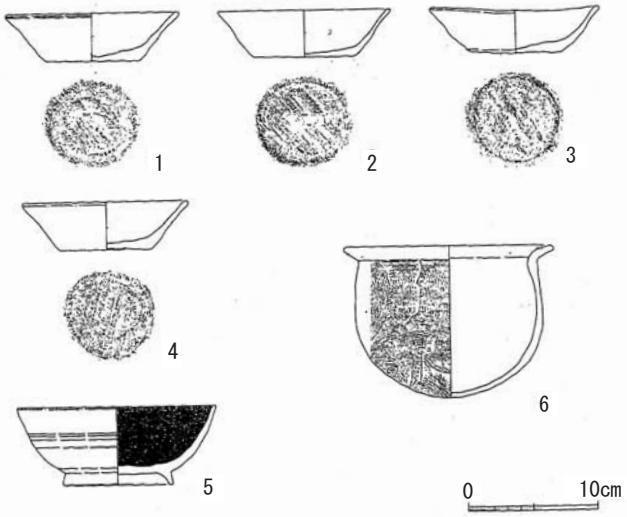
さらに竹松遺跡出土の坏a以外は、溝・旧河川・包含層などからの出土であるため、一次資料とはなりえないことは十分認識したうえで、あえて共伴した須恵器などでおおまかな時期を押さえておきたい。

先に、型式的に古いと考えた十園坏A1類、同A2類が多く出土した十園遺跡の12～14区SD01で共伴した須恵器を検討すると、牛頸編年ⅥからⅧ(7世紀後半から9世紀前半)の資料である(大野城市教委2008)。しかし、大宰府および西海道での回転台土師器の出現は、8世紀前半のどこかと言われており、7世紀まではさかのぼらない。

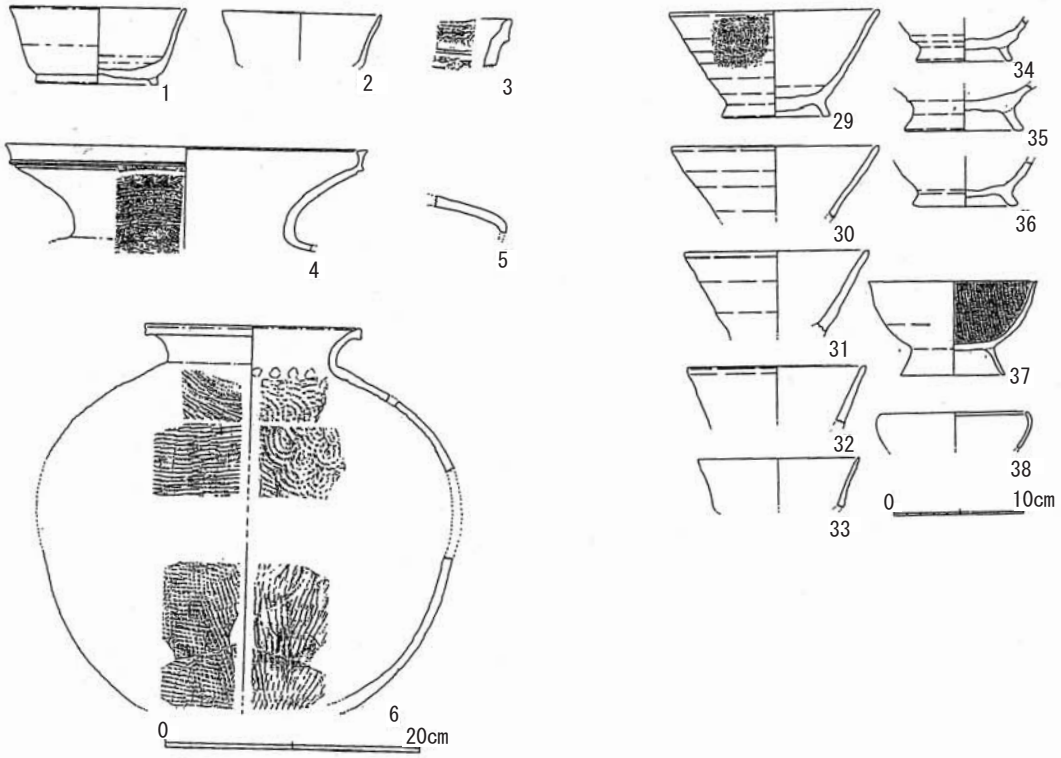
また、深堀遺跡の第4号土坑墓の共伴遺物で、十園坏A1類と同A2類が、黒色土器A類と共伴している(第5図)。黒色土器A類は9世紀前半のものであるため(山本信夫1992)、十園坏A1類と同A2類の中心は9世紀前半にあると考える。

したがって野澤が「十園坏A類」の当該地域の土師器坏の主体になる時期を8世紀中頃としたことに、異議を唱え、十園坏A1、A2類の主体となる時期を9世紀前半とする。

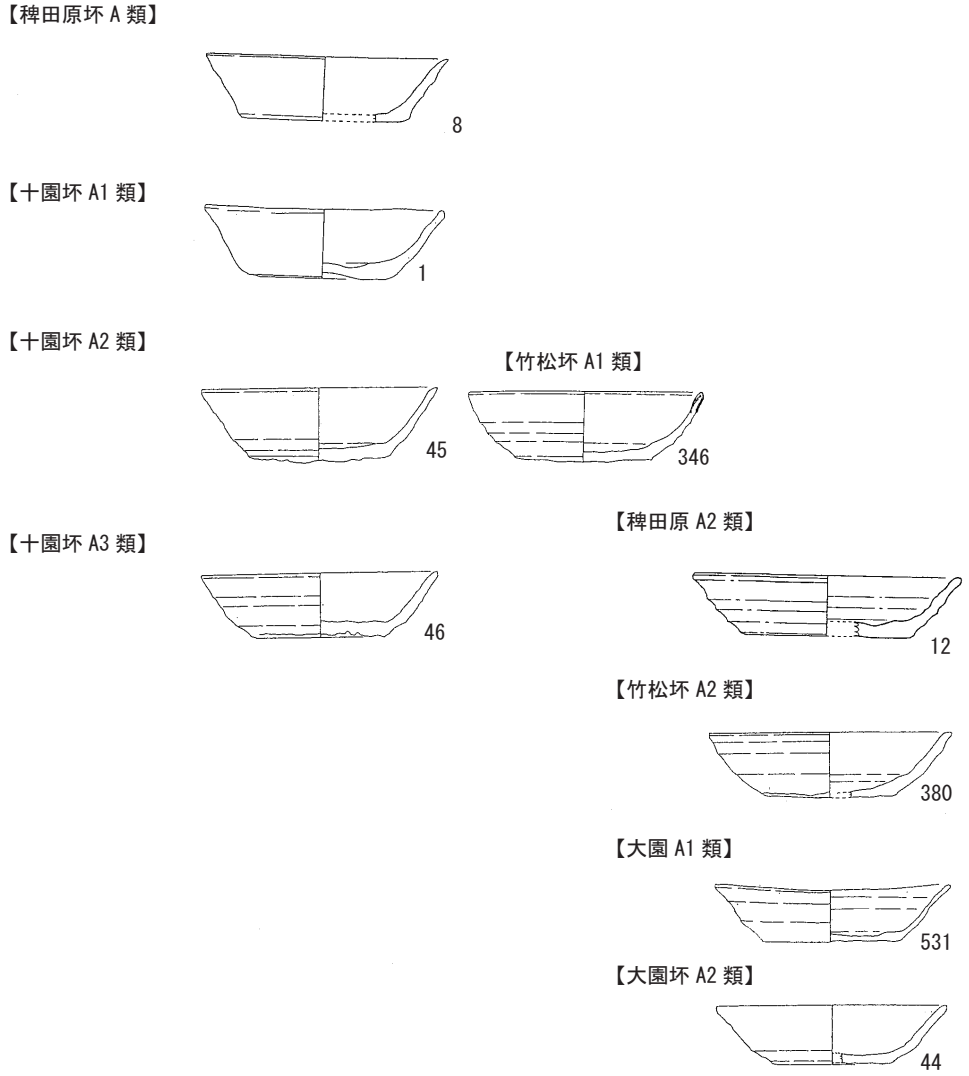
次に大園遺跡の報告書に掲載された須恵器坏(第6図1)は牛頸編年ⅦA(8世紀前半)の資料のよう




第5図　深堀遺跡出土土器(S＝1/6)




第6図　大園遺跡出土土器(S＝1/6)




第7図　坏 a の型式組列(S＝1/3)

であるが、出土した高台付きの土師器椀(第6図29)は9世紀に入る資料である。また、黒色土器 A(第6図37)は大宰府編年に照らすと、Ⅶ期(9世紀中頃から後半)の資料である(山本信夫1992、中島1992)。大園遺跡では、8世紀の資料と9世紀後半の資料が出土しているが、大園坏 A1類、A2類は同遺跡の9世紀の高台付き土師器椀、黒色土器 A などの9世紀後半の資料に伴うと考えられる(第6図)。

以上を整理すると、十園坏 A1類、同 A2類、同 A3類を9世紀前半、大園坏 A1類、同 A2類を9世紀後半としたいが、さらに大宰府編年と比較することによって検証する。

(7)大宰府編年との比較

本稿の坏 a は、大宰府の土器型式ではⅣ期(8世紀第3四半期)、Ⅴ期(8世紀第4四半期)、Ⅵ期(9世紀前半)Ⅶ期(9世紀後半)、Ⅷ期前半(9世紀第4四半期)までの坏 a に相当すると思われる。該当する大宰府土器型式の統計平均値は以下のとおりである。

| 大宰府土器型式 | 口径 | 器高 | 底径 |
|---|---|---|---|
| Ⅳ | (14.6) | (3.4) | (10.7) |
| Ⅴ | (13.3) | (3.4) | |
| Ⅵ | 12.65　13.3　13.95 | 3.2　3.45　3.7 | 7.05　7.4　7.85 |
| Ⅶ | 11.75　12.0　12.25 | 3.15　3.3　3.5 | 7.05　7.35　7.65 |
| Ⅷ | 11.2　11.5　11.8 | 2.6　2.8　3.0 | 6.75　7.3　7.75 |

本稿で示した各型式の平均値は下記のとおりである。

| 型式 | 口径 | 器高 | 底径 |
|---|---|---|---|
| 稗田原坏 A1類 | 12.53 | 3.28 | 9.06 |
| 十園坏 A1類 | 13.17 | 3.51 | 7.85 |
| 十園坏 A2類 | 12.85 | 3.72 | 7.24 |
| 十園坏 A3類 | 12.24 | 3.48 | 7.13 |
| 稗田原坏 A2類 | 14.1 | 3.2 | 8.65 |
| 竹松坏 A2類 | 12.8 | 3.6 | 6.3 |
| 大園坏 A1類 | 12.77 | 3.1 | 6.47 |
| 大園坏 A2類 | 12.1 | 3.18 | 6.15 |

両者を比較すると、十園坏A1類、A2類はⅣ期(9世紀前半)、十園坏A3類、大園坏A2類はⅦ期(9世紀後半)に位置付けられそうである。竹松坏A2類、大園坏A1類は大宰府編年に照らすと口径値からⅥ期となりそうだが、底径が小さくなっており、大園A2類に近い。したがって9世紀後半の古い時期に位置づけておく。一方、稗田原坏A1類、A2類の時期は難しい。先述の(4)で仮定した型式組列を踏まえ、稗田原A1類は、8世紀末から9世紀初めに位置づける。稗田原A2類は口径を見ると8世紀に上りそうであるが、底径が小さいため、傾斜指数が大きくなる。(4)で提示した型式組列に従い、9世紀後半としておく。以下、整理する。

| | | |
|---|---|---|
| 稗田原杯 A1類 | | 8世紀末から9世紀初め |
| 十園杯 A1類<br>十園坏 A2類 | 竹松 A1類 | 9世紀前半 |
| 十園坏 A3類 | 稗田原 A2類<br>竹松 A2類<br>大園坏 A1類<br>大園坏 A2類 | 9世紀後半 |

(8)竹松遺跡出土の坏ａ

既報の大村車両基地の調査で発見された古代の遺構から坏ａが出土している(長崎県教委編2017『竹松遺跡Ⅱ』)。以下で本稿の型式分類にあてはめて整理しておく。

①稗田原坏A1類(8世紀末から9世紀初め)

No.396(「竹松遺跡Ⅱ」158頁　第138図)竪穴建物跡(SC8)出土(註6)

②十園坏A2類(9世紀前半)(No.346,347は竹松坏A1類として分類)

No.611(「同」238頁　第285図)柱穴(SP⑤17)出土

No.613(「同」239頁　第289図)柱穴(SP⑤66)出土

No.346(「同」145頁　第127図)竪穴建物跡(SC3)出土(註6)

No.347(「同」145頁　第127図)竪穴建物跡(SC3)出土

No.751(「同」264頁　第320図文字資料　包含層出土

③竹松A2類(9世紀後半)

No.380(「竹松遺跡Ⅱ」153頁　第132図)竪穴建物跡(SC5)出土

No.530(「同」204頁　第199図)土坑(SK95)出土(註6)

④大園坏A1類(9世紀後半)

No.531(「同」205頁　第201図)土坑(SK96)出土

⑤大園坏A2類(9世紀後半)

No.944(「竹松遺跡Ⅲ」393頁　第307図)土坑(SK66)出土

## 【註】

註1　大村市竹松遺跡では、最近の九州新幹線西九州ルートや都市計画道路池田沖田線の建設に伴う発掘調査で、11世紀、12世紀の資料が増加している。

註2　竹松遺跡のTAK201302調査区の掘立柱建物跡(SB05)の柱穴P22から、手持ちヘラケズリの坏が出土している(長崎県教委編2018　371頁第262図No936)。報告者は「8世紀後半」と見ているが、後に山本信夫氏に実見していただいたところ「8世紀前半」とのご教示を得た。

註3　本稿での坏の「大きさ(体積)」の数値は、坏の口径・底径・器高より算出したものであり、編年作業のための「大きさ(体積)」である。当然ながら、実際の坏は、体部が内湾したり外反したりしているため、本稿の坏の「大きさ(体積)」の数値は対象となる坏の真の体積ではない。

註4　十園遺跡から出土した坏Ａの底部は、報告書ではすべて回転ヘラ切り離し技法が見られるような記述である。しかし、実見したところ、実際には資料の底部が丁寧にナデ消されており、切り離し痕が見えない資料がほとんどで、かろうじて5、6点に回転ヘラ切り離しの痕跡が残っていた。したがって報告書のとおり、その他の坏Ａも同じく回転ヘラ切り離しが使われたのであろうと推測できた。

註5　竹松遺跡から出土した竹松坏A1類は、十園坏A2類と同じ集中域に分布するが、体部が内湾するため別型式とした。竹松A2類も、やや内湾気味の体部を持ち、両者とも8、9世紀の本県本土部の土師器坏にはあまり見られない器形である。当初、竹松坏A1類は内湾気味の体部を根拠に9世紀後半としていたが、竪穴建物跡で共伴した土師器椀の検討、および本稿の分布図より、9世紀前半に位置づける。内湾する体部が時期差なのか、地域差なのか、はたまた外部からの影響なのか、今回は十分検討できなかった。また、太宰府分類の坏ｄとの比較検討も今後の課題である。

註6　No346、No396、No530の資料は、焼きが良く、他の土師器坏とは色調も異なり、褐色を呈する。在地土器ではなく、搬入された可能性がある。

## 【引用・参考文献】


吾妻町教委編1991『守山地区県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告』吾妻町の文化財第12集　吾妻町教育委員会

有明町教委編1993『概要報告書　大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書第10集　有明町教育委員会

石木秀啓2007「牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制　8世紀以降を中心として」国立歴史民俗博物館研究報告第134集　国立歴史民俗博物館

江神めぐみ2016「前原遺跡で出土した土師器の坏について－九州中部の出土状況をもとに－」『研究紀要・年報　縄文の森から』第9号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

大野城市教委編2008『牛頸窯跡群』－総括報告書Ⅰ－大野城市文化財調査報告書第77集　大野城市教委

大村市教委編1992『寿古遺跡』　大村市文化財調査報告書　第15集　大村市教育委員会

国見町教委編2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第3集　国見町教育委員会

国見町教委編2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第4集　国見町教育委員会

国見町教委編2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報)第5集　国見町教育委員会

齋藤　淳　　2010「野尻遺跡群の土器編年について」『研究紀要』第15号　青森県埋蔵文化財調査センター

中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」中近世土器の基礎研究Ⅷ　中世土器研究会

長崎県教委編1980『串島遺跡』長崎県文化財調査報告書　第51集　電源開発株式会社　長崎県教育委員会

長崎県教委編1988『長崎県埋蔵文化財調査集報』長崎県文化財調査報告書　第91集　長崎県教育委員会

長崎県教委編1993『県内重要遺跡範囲確認調査報告書』長崎県文化財調査報告書第109集長崎県教委

長崎県教委編1997『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第133集

長崎県教委編1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第152集　長崎県教育委員会

長崎県教委編2010『黒丸遺跡Ⅳ』長崎県文化財調査報告書　第204集　長崎県教育委員会

長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集　長崎県教育委員会

長崎市教委編2005『深堀遺跡－深堀純心幼稚園建設に先立つ埋蔵文化財範囲確認調査報告書－』長崎市教育委員会

山本悦世1995「第4章考察　1.備前地域における古代後半の土器様相」岡山大学構内遺跡発掘調査告書第9冊　『津島岡大遺跡6』―第6・7次調査―　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

山本信夫1990「統計上の土器－歴史時代は時期の編年研究によせて－」『乙益重隆先生　古稀記念論文集　九州上代文化論集』

山本信夫1992「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東―』奈良文化財研究所

# Ⅳ　附編（自然科学分析結果）

## 1. 竹松遺跡から出土した赤色顔料について(2)

九州国立博物館　志賀智史

長崎県大村市竹松町にある竹松遺跡から出土した赤色顔料について分析調査を行なった。今回の資料は、2014年度の発掘調査で出土した弥生時代後期前半の甕棺墓 TAK201405③区 ST6と TAK201405③区 ST9の計2基か検出された赤色顔料である。資料は包含土壌とともに筆者の元に持ち込まれた。調査は、資料を十分自然乾燥させた後に行った。調査手法は、前報(志賀2018)と大きな変更はないが、今回は、顕微鏡観察(実体、生物)と蛍光 X 線分析(HORIBA XGT－5200,Rh,50kv,100s, SDD, 測定径約100 μm, 検出器付近真空, 検出元素 Na-U)のみを行った。

弥生時代～古墳時代の出土赤色顔料は、これまでの調査によって水銀を主成分とする朱(HgS, 辰砂(Cinnabar))と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ($\alpha$-$Fe_2O_3$, 赤鉄鉱(Hematite)等)の二種類が知られている。

目視と実体顕微鏡(7－100倍)による観察では、両資料の赤色部分はショッキングピンク色を呈し、一般的に墳墓主体部等で目にする赤色顔料と考えられた。赤色顔料の大きな凝集塊は認められず、ほとんどが土壌と混在している状況であった(図版1・2)。両赤色顔料の粒子は、プレパラートに封入した資料を生物顕微鏡(側射光と透過光)で観察し、朱特有の樹脂状光沢を持つ赤色粒子を確認した(図版3・4)。主成分は、蛍光 X 線分析を行い、いずれも Hg(水銀)と S(硫黄)を検出した(図1・2)。その他、検出した Fe(鉄)については、顕微鏡観察の結果から土壌由来と判断した。

以上の調査結果から、両赤色顔料は朱と考えられる。なお、前報においても報告しているが、今回も土壌中に、ベンガラに類似する直径5㎜ 程度の赤色酸化鉄粒が含まれていた。この赤色酸化鉄粒は、楕円・円礫状を呈し、内部は淡赤色で半透明鉱物が多数含まれていることから、遺跡土壌を構成する砂の一部と判断した。

朱は、発掘調査の所見や現場写真から、床面から浮いた状態で検出されており、甕棺内面に塗布されたものではなく、遺骸に散布されたものと思われる。

弥生時代～古墳時代の墳墓主体部での赤色顔料の使用については、本田光子による北部九州の箱式石棺等墳墓を中心とした研究から、以下の3つに分類されている(本田1988, 1995)。

a 類：床面から朱だけが出土するもので、埋葬施設の床面あるいは遺骸から朱だけが検出され、朱は遺骸自身に施されていたものと推定される。

b 類：朱とベンガラが出土するもので、埋葬施設の内面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラを散布あるいは塗布した状態に a 類の遺骸を納めたものと推定される。

c 類：ベンガラだけが出土するもので、埋葬施設内面にベンガラだけを塗布したものと推定される。

a 類は弥生時代の初頭から認められる。b 類の朱とベンガラの使い分けは、北部九州の弥生時代中期後半もしくは後期中頃に始まり、古墳時代の開始とともに西日本各地に広まったと考えられている典型的な使い方である。近年では、弥生時代終末期の北九州市の城野遺跡1号方形周溝墓のように埋葬施設と頭部で朱を使い分ける事例(志賀2011)も知られるようになってきている。

今回の調査結果は、2基とも a 類に該当する。前報でも、箱式石棺墓・土坑墓の16基の調査から、a 類が11基、b 類が3基、c 類が2基であり、圧倒的に a 類が主体であった。

弥生時代後期の北部九州では、b 類が典型的な使用方法と考えられているが、本遺跡では a 類が最

も多い。この違いは、本田が分析対象とした遺跡は福岡県内が中心であり、長崎県内での分析事例が少なかったことによるものであろう。大村市周辺ではａ類を基本としていた可能性が高い。また、前報において指摘した在地調達の可能性の高い赤土素材のベンガラ採用の背景には、一般的なベンガラの生産方法を知らなかったか、一般的なベンガラの流通圏外にあった等の可能性が考えられよう。今後も調査を続けたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、長崎県教育委員会ならびに同　川畑敏則氏には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

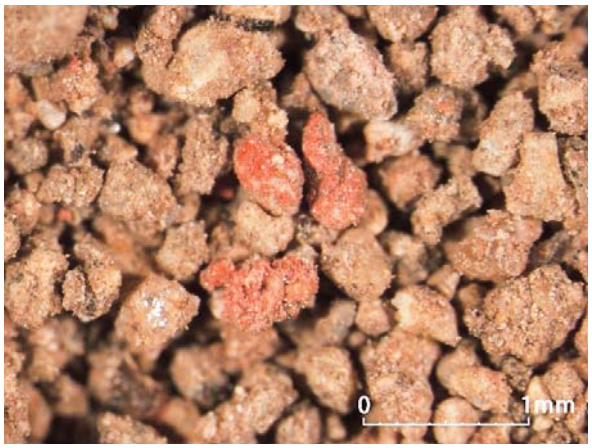
文献

志賀智史2011「城野遺跡出土の赤色顔料について」『城野遺跡1』北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

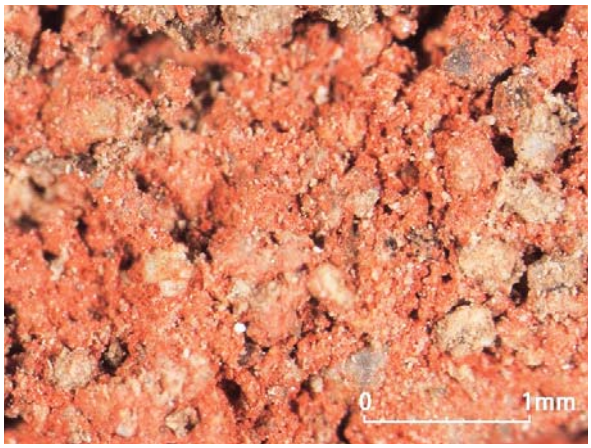
志賀智史2018「竹松遺跡から出土した赤色顔料について」『竹松遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会

本田光子1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北九州地方にみられる使用と変遷－」『九州考古学』第62号，九州考古学会

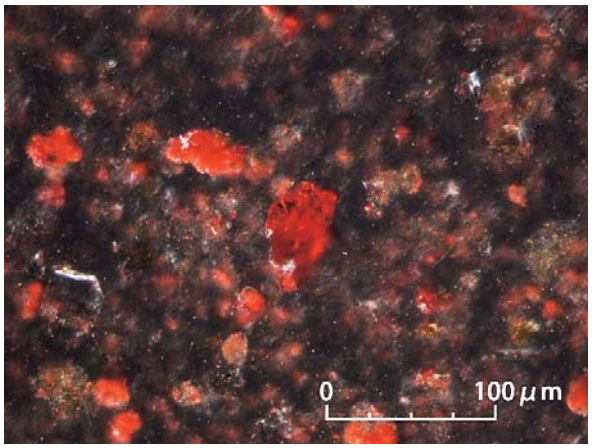
本田光子1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号（合併号），日本文化財科学会



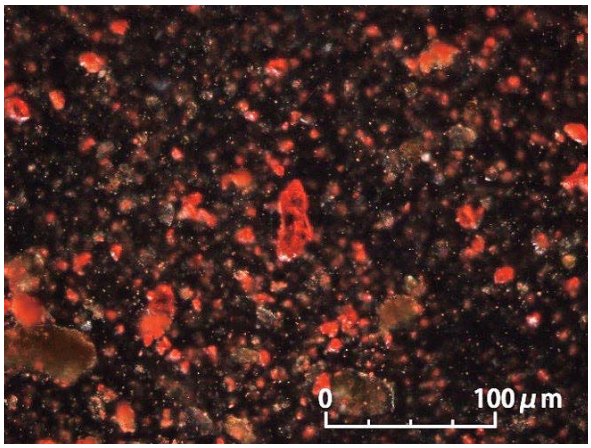

図版1　ST06　朱




図版2　ST09　朱




図版3　ST06　朱粒子(側射光)




図版4　ST09　朱粒子(側射光)

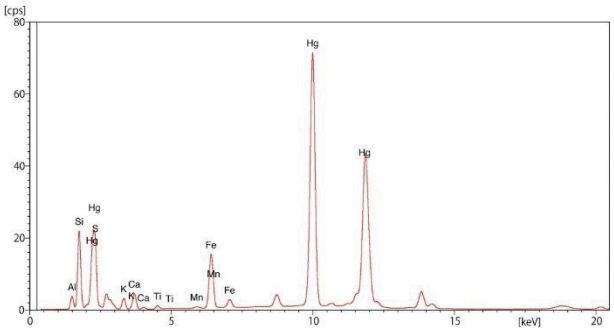



図1　ST06　蛍光 X 線スペクトル図

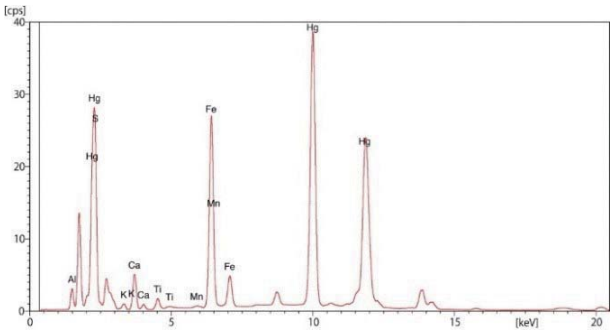



図2　ST09　蛍光 X 線スペクトル図

## 2. イスラム陶器の蛍光X線分析

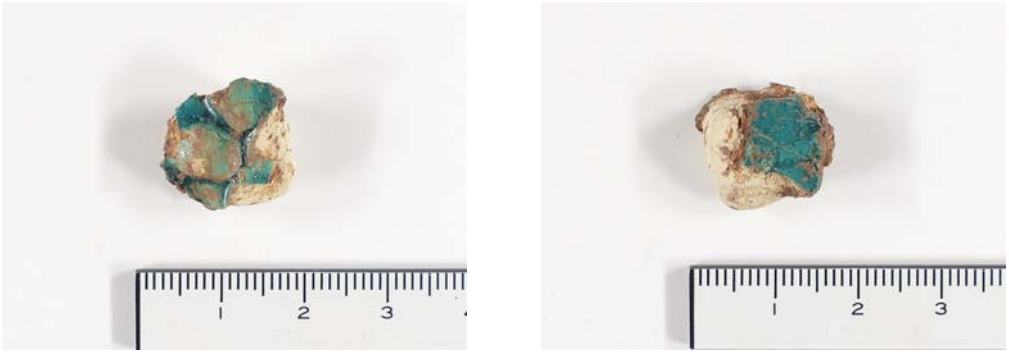
長崎県埋蔵文化財センター　片多雅樹

(1)はじめに

長崎県大村市所在の竹松遺跡【TAK201202⑦調査区8464グリッドの区画溝内覆土】からは3片の同一個体と思われるイスラム陶器が出土している(図版5)。いずれも白色の胎土に鮮やかな緑色の釉薬が施されており、また表裏共に釉薬が残存している。イスラム陶器の県内出土例は壱岐市所在の原の辻遺跡からイスラム陶器片として報告されている1片がある。この原の辻遺跡出土資料は、1998年大川地区の調査で初期貿易陶磁や土師器に交じって、たった1点であるが出土しており、8～9世紀の可能性が示されている。やや軟質の黄灰色を帯びた胎土に瑠璃色の透明釉が厚くかかっており、表面はガラス質で光沢がある。部位は壷の胴部を飾る貼付網文にあたる(図版6)。県外では、福岡県所在の大宰府条坊跡や筑後国府跡、福岡市多々良込田遺跡、博多築港線1次、鴻臚館跡などで出土例がある(安楽2000)。また、奈良県所在の西大寺旧境内からは2009年の調査でイスラム陶器の出土例があり、釉薬や胎土の蛍光X線分析を実施した結果が報告されている(奥山2013)。ここでは、竹松遺跡及び原の辻遺跡から出土したイスラム陶器に関して蛍光X線分析による非破壊調査を実施した結果を報告する。

なお、図版5の201202－1850は区画溝内履土上層、201202－1850と201202－2064は下層より出土した。

図版5　竹松遺跡出土イスラム陶器3片(左：A面、右：B面)




図版6　原の辻遺跡(平成10年度)出土イスラム陶器1片(左：A面、右：B面)

### (2)蛍光X線分析

釉(うわぐすり)は鉛の含有量によってアルカリ釉と鉛釉に大きく分類でき、また着色成分として銅(Cu)や鉄(Fe)、マンガン(Mn)等が検出されることで、それぞれ緑色や黄色、青色系に着色されることが知られている(田代ほか2007)。蛍光X線分析法は、資料にX線を照射することで、資料表面から発生する特性X線(＝蛍光X線)の強度を調べることにより、対象に含まれる元素の種類と含有量を調べることができ、各資料の釉部と胎土部の分析を実施した。今回使用したエネルギー分散型蛍光X線分析装置の仕様は次のとおり。EDAX社製：EAGLE Ⅲ XXL。上面照射式で、照射径は0.3mmΦ。Rh(ロジウム)管球、半導体検出器(SDD検出器)で検出器の冷却に液体窒素を要する。分析条件は、管電圧40kV、管電流は抵抗値によって自動設定とし、真空雰囲気で測定時間は100秒で実施した。

### (3)分析結果

代表的な分析スペクトルを図3～8に示す。分析スペクトルの横軸は蛍光X線のエネルギー値[keV]で、検出された元素によって固有のエネルギー値にピークが現れる。元素記号の隣に記しされているKaやLa、Maは蛍光X線の種類(それぞれKα線、Lα線、Mα線)を表す。縦軸は検出された蛍光X線の量［cps］を表し、ピークの高さが検出した元素の含有量を概ね示す。釉の分析では、竹松資料からはいずれも鉛(Pb)を多く検出しており、鉛釉を施された陶器であることがわかった(図3、4)。一方、原の辻資料からはガラス質の主成分であるケイ素(Si)のほかにカルシウム(Ca)とカリウム(K)、またわずかだがナトリウム(Na)を検出しておりアルカリ釉であることがわかった(図5)。両遺跡資料共に釉は緑色を呈しており、この着色成分として銅(Cu)が検出されている。西大寺旧境内出土資料の分析結果は原の辻資料と同じアルカリ釉で、緑釉の着成分として同じく銅が検出されている。胎土の分析では、竹松資料はケイ素、アルミニウム、鉄、カリウムを多く検出している(図6、7)のに対し、原の辻資料は鉄、カルシウム、ケイ素を多く検出し(図8)、同じ様相を呈する白色胎土であっても材質に差異があり、異なる材料を使用している可能性が高い結果となった。

### (4)まとめ

今回、長崎県下で出土したイスラム陶器2遺跡4片について、蛍光X線分析装置を用いて釉及び胎土の成分分析を実施したが、2遺跡で異なる成分を示す結果となった。イスラム陶器は出土例そのものが稀少であり、また分析例も少ないため、今回の分析結果が今後の類例調査の一助となれば幸いである。

文献

安楽勉2000「大川地区の調査」『原の辻遺跡－原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書－』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集　長崎県教育委員会

奥山誠義2013「イスラム陶器の釉薬・胎土の蛍光X線分析」『西大寺旧境内発掘調査報告書1』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第3冊　奈良市教育委員

田代哲也・中井泉・真道洋子2007「イスラーム陶器における緑釉の考古化学的研究～ラーヤ遺跡出土品を中心に～」『日本文化財科学会第24回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

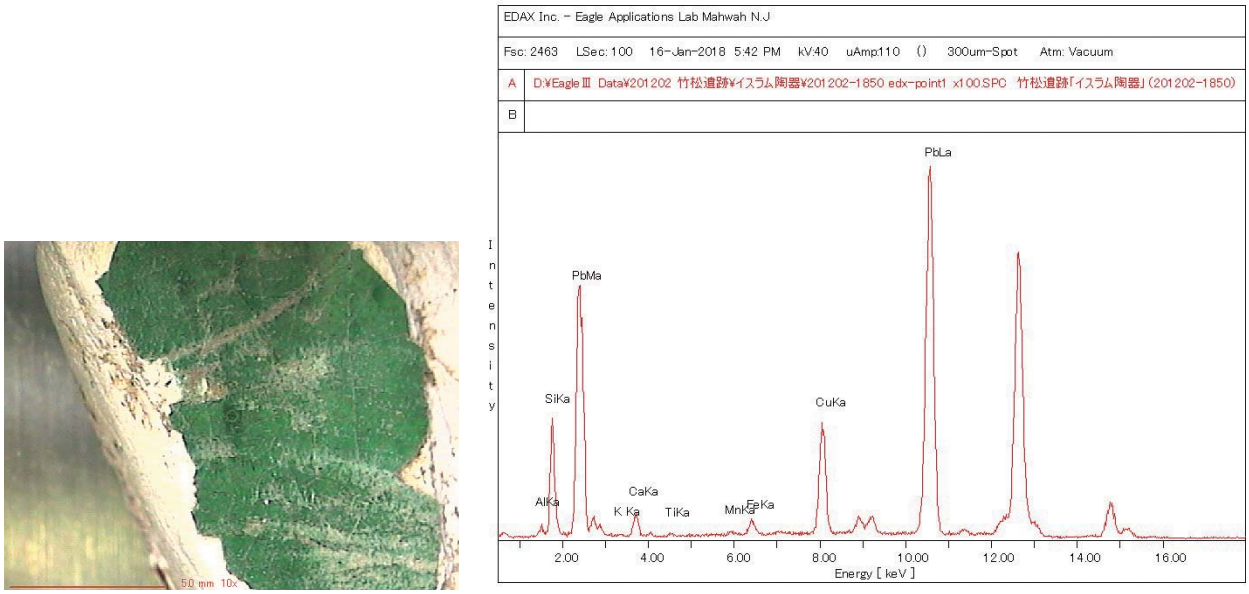



図3　竹松遺跡出土イスラム陶器片【201202－1850】釉薬部(A 面)蛍光 X 線分析結果

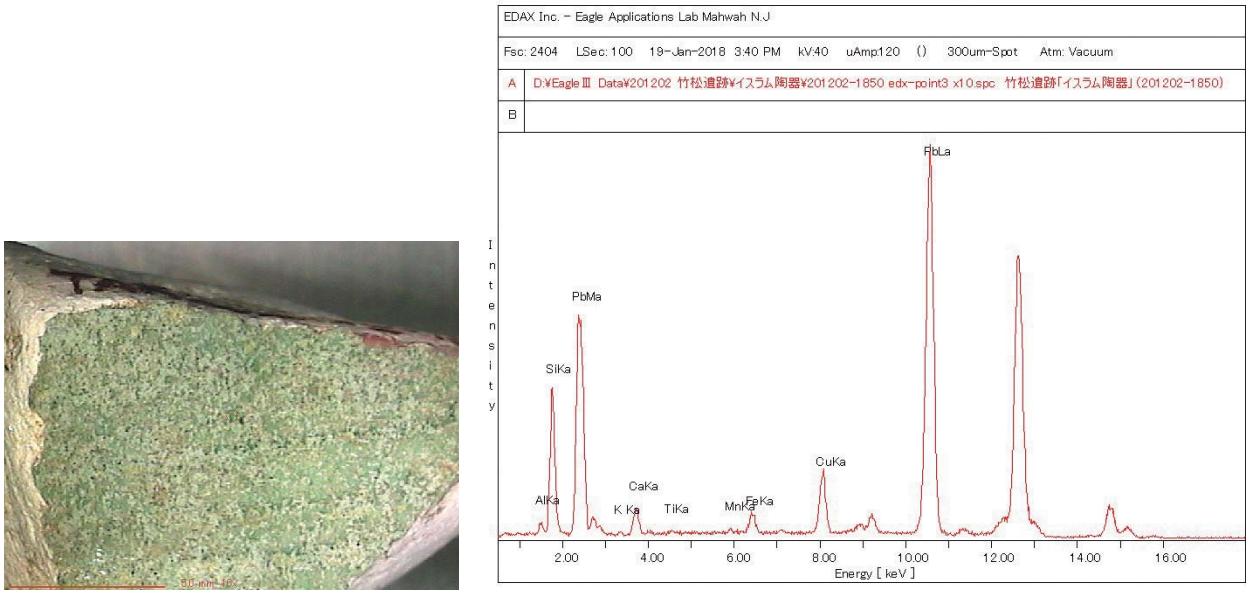



図4　竹松遺跡出土イスラム陶器片【201202－1850】釉薬部(B 面)蛍光 X 線分析結果

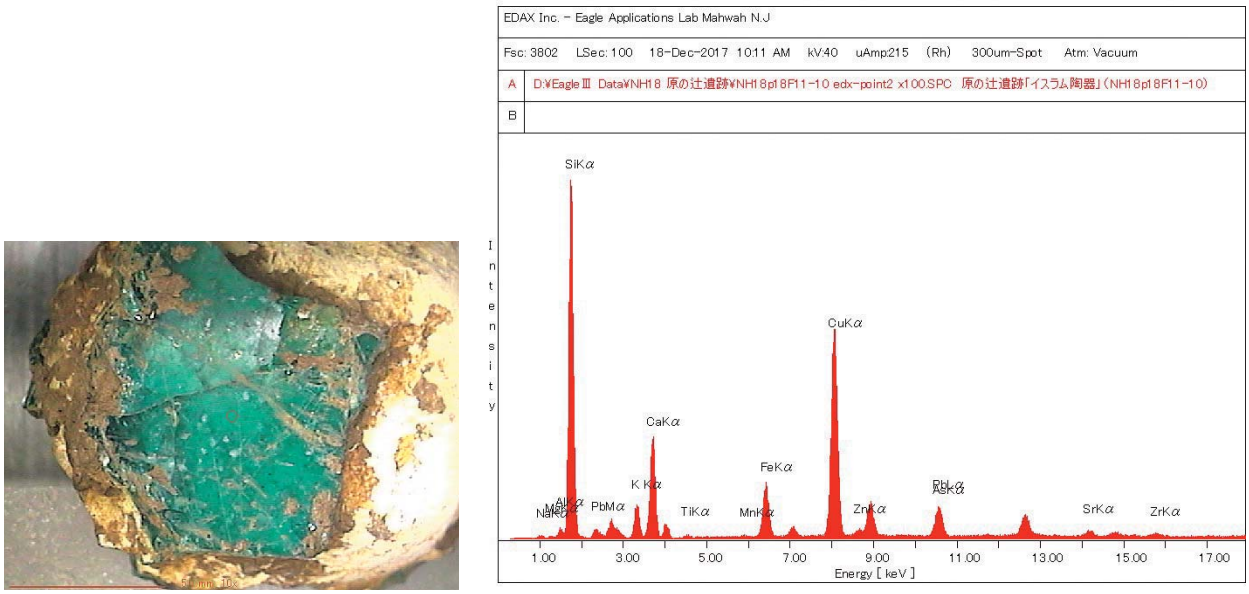



図5　原の辻跡出土イスラム陶器片【NH18p18F11－10】釉薬部蛍光 X 線分析結果

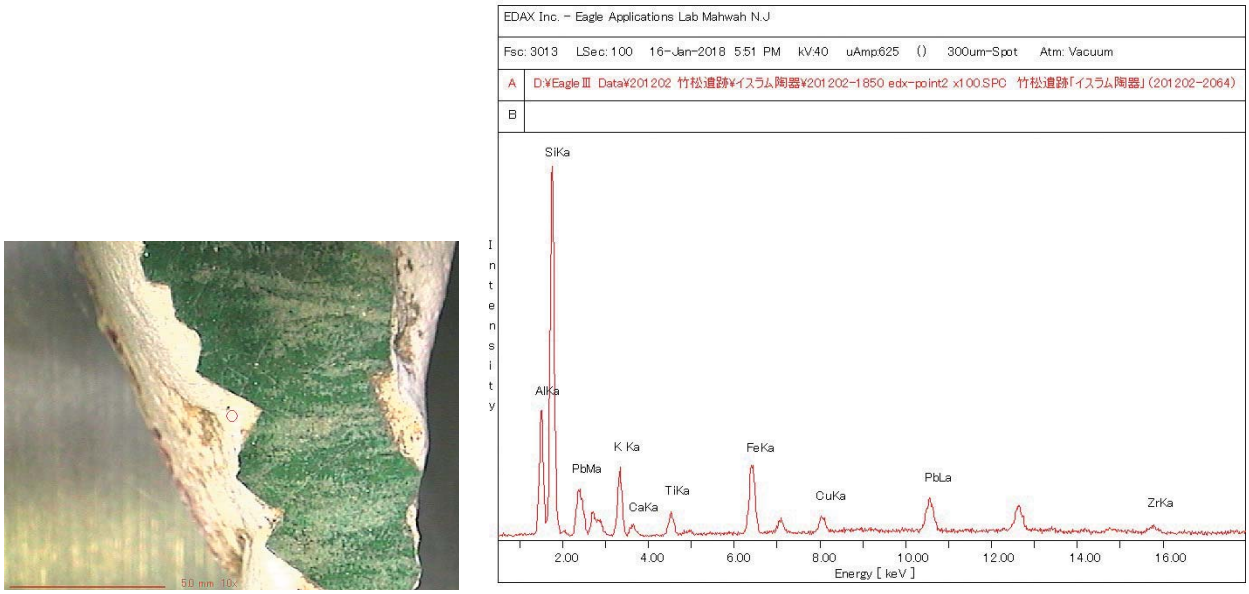



図6　竹松遺跡出土イスラム陶器片【201202－1850】胎土部蛍光Ｘ線分析結果

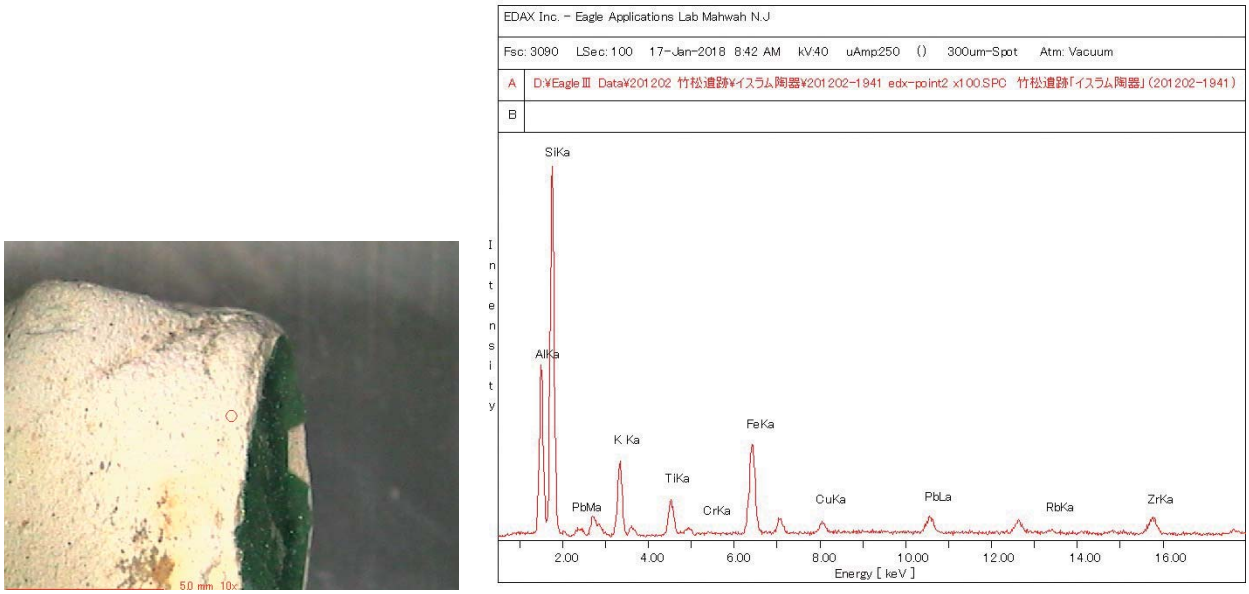



図7　竹松遺跡出土イスラム陶器片【201202－1941】胎土部蛍光Ｘ線分析結果

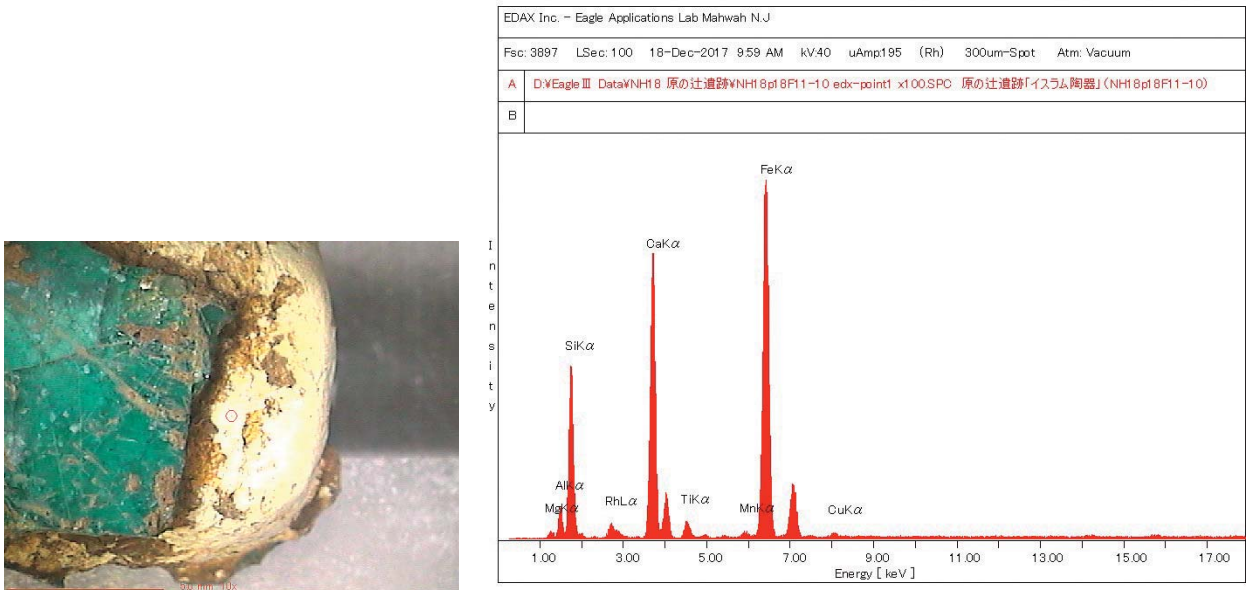



図8　原の辻跡出土イスラム陶器片【NH18p18F11－10】胎土部蛍光Ｘ線分析結果

## 3. 竹松遺跡における科学分析

はじめに

本報告書に掲載する自然科学分析は、(1)植物珪酸体分析、(2)花粉分析、(3)放射性炭素年代測定、(4)哺乳類骨分析、(5)珪藻分析である。

試料採集場所は挿図にて示した。

(1)植物珪酸体分析

①分析試料(図9、10、11、13、15、16)

【試料6～8】TAK201404B1区北壁　第2層、3b 層、3d 層(図11、16)

【試料12】TAK201302　ST1、【試料13】同 ST6、【試料14】同 ST9、【試料15】ST11

【試料16】同 ST18、【試料17】同 ST32　　試料12～17いずれも棺床直上から採取した。

【試料18～22】TAK201403調査区0668グリッド第3層　図10、15

【試料23～25】TAK2014062区水田　図13

(2)花粉分析

①分析試料(図9、10、11、15、16)

【試料9～11】(植物珪酸体分析の試料6～8と同一試料)　図11、16

【試料12】TAK201302　ST1、【試料13】同 ST6、【試料14】同 ST9、【試料15】ST11

【試料16】同 ST18、【試料17】同 ST32　　試料12～17いずれも棺床直上から採取した。図9

【試料18～22】TAK201403調査区0668グリッド第3層(図10、15)

※『竹松遺跡Ⅲ』の「花粉分析および寄生虫卵分析」554頁で報告した No9および11の資料採取場所を掲載していなかったので、今回の報告で掲載する(図12、14、本文第143図)。

(3)放射性炭素年代測定

①分析試料(図12、13)

【No1】TAK201405SD06　黒色土(区画溝)(図12)【No2】TAK201405SD06(区画溝)上層(図12)

【No3】TAK201405SD08(区画溝)下層(図12)【No4】TAK201406SP21(図13)

【No5】TAK201406　SX01(図13)

※『竹松遺跡Ⅲ』の放射性炭素分析報告③550頁で報告した PLD－25973(TAK201303A5区 SL05採取)の採取場所を掲載していなかったので、今回の報告で掲載する(図18、19)。

(4)哺乳類骨分析

①分析試料(図12、本文第245図)

TAK201405③区7866グリッド第3層採取

【試料 No】105, 111, 121, 122, 124, 145

(5)珪藻分析

①分析試料(図17、本文第143図)

【試料 No12～14】TAK201404調査区 B1区北壁2層、3b 層、3d 層下から採取

【試料 No15～22】SD06の1層～8層から採取

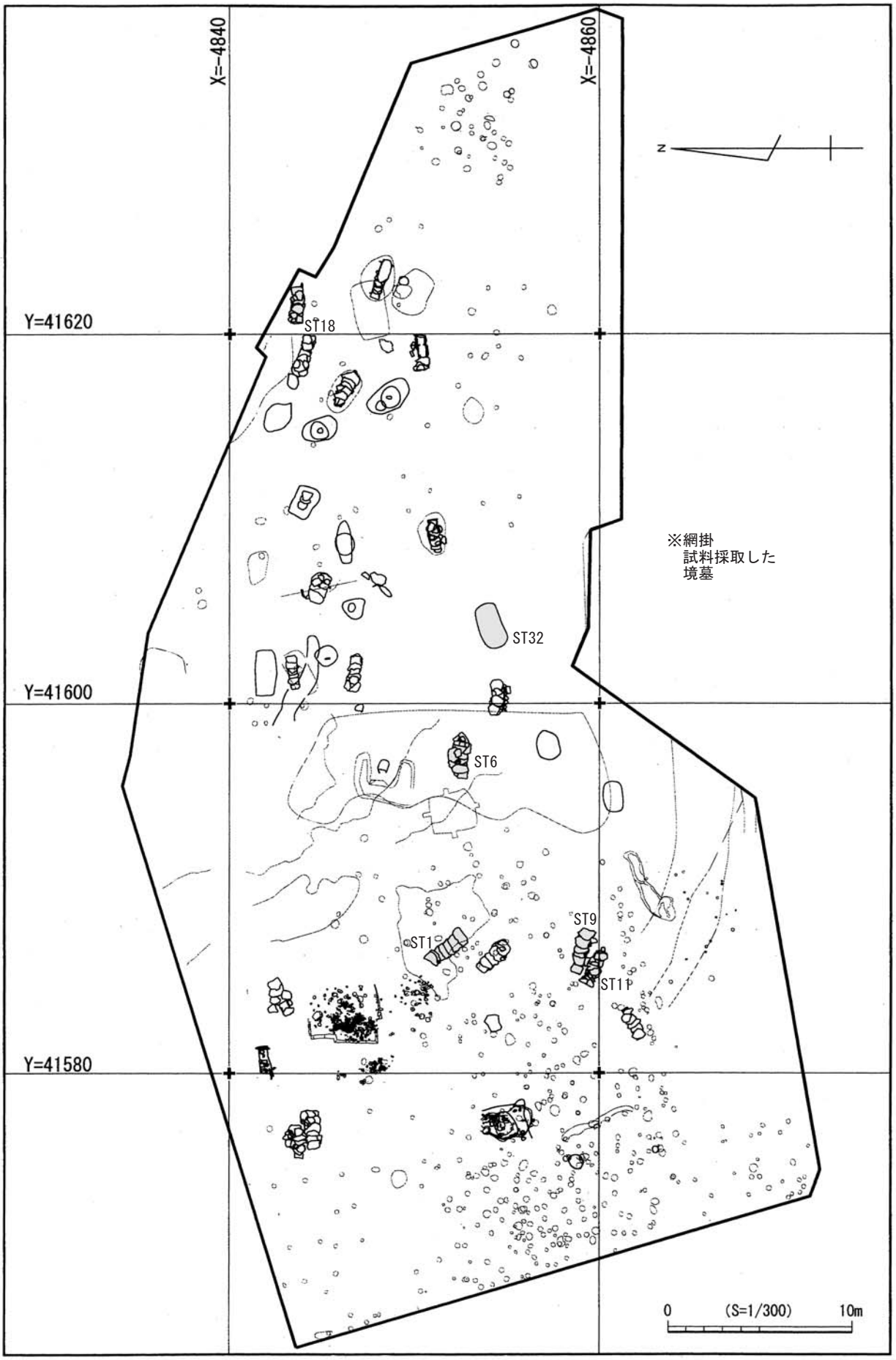



図9　珪酸分析・花粉分析－1試料採取地点(TAK201302調査区①区)

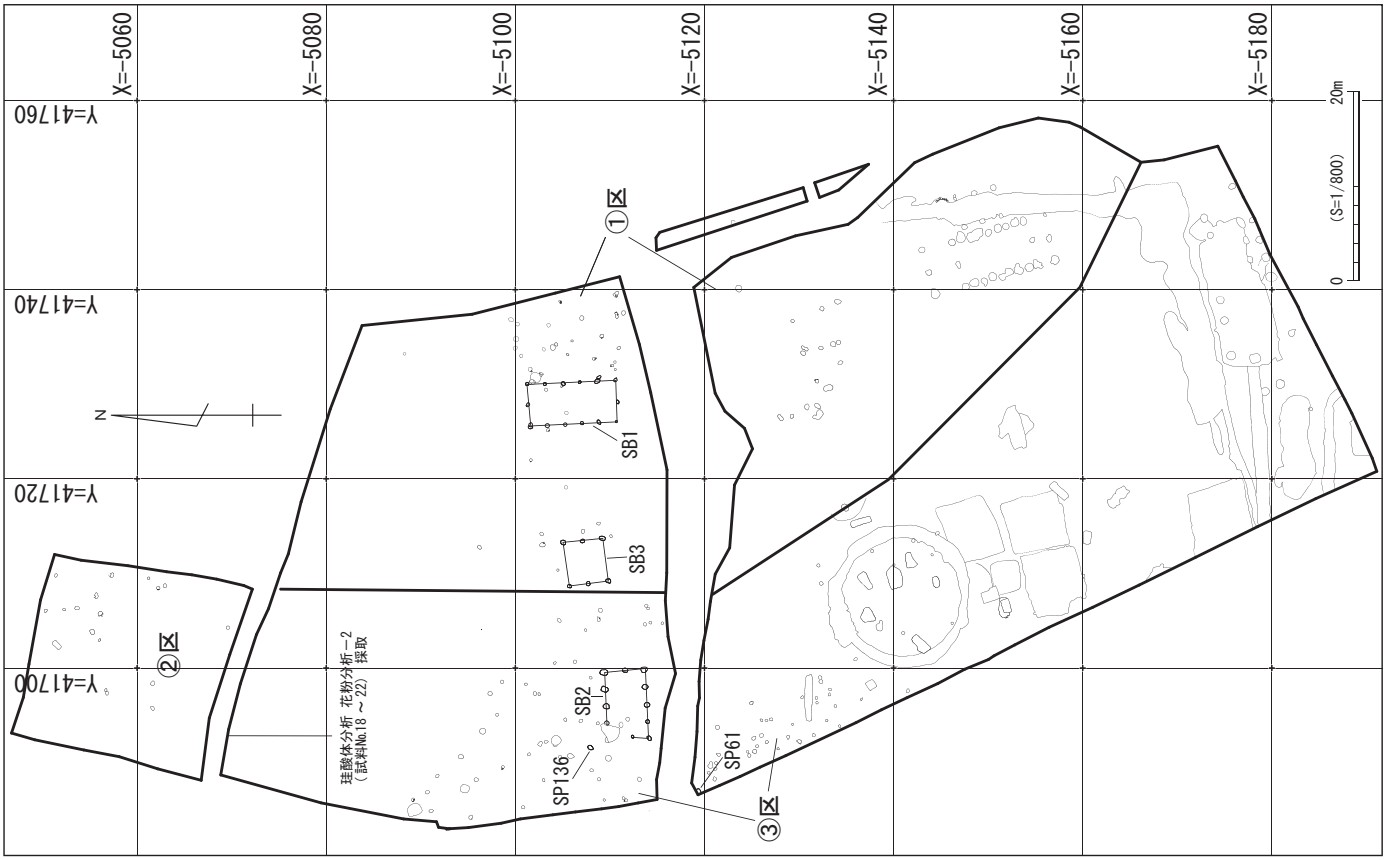



図10　TAK201403調査区　自然科学分析試料採取地点

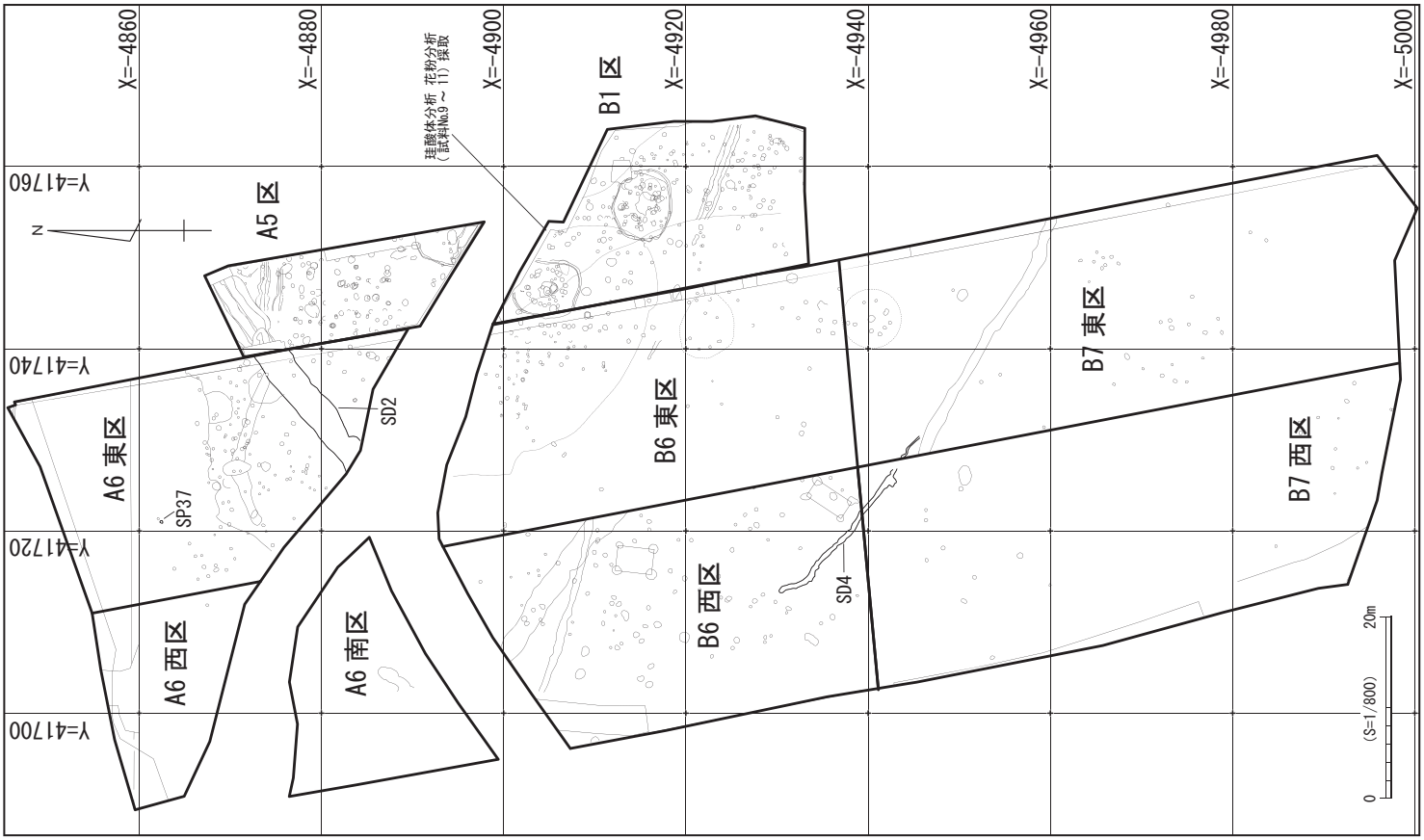



図11　TAK201404調査区　自然科学分析試料採取地点

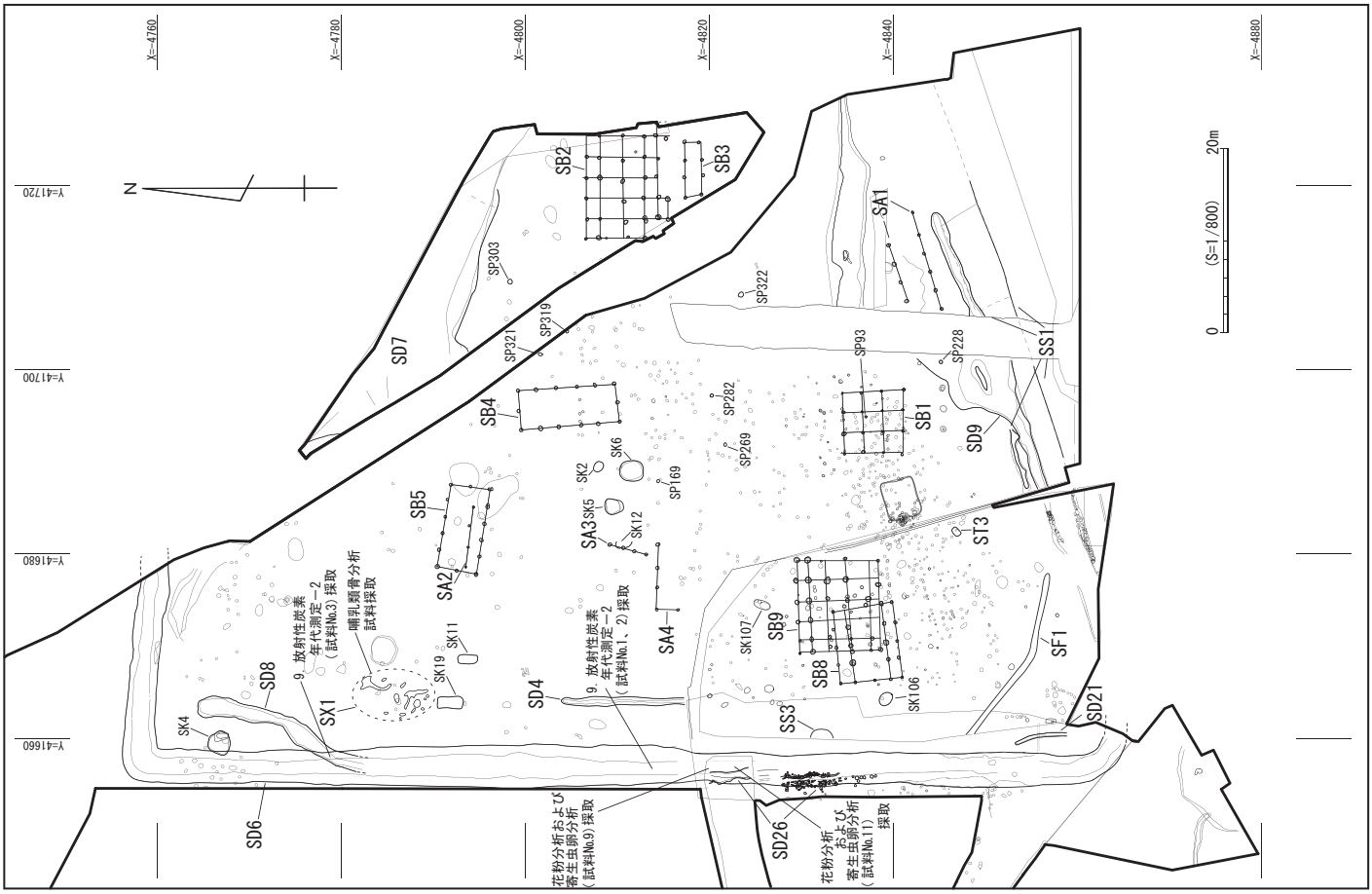



図12　TAK201405調査区　自然科学分析試料採取地点

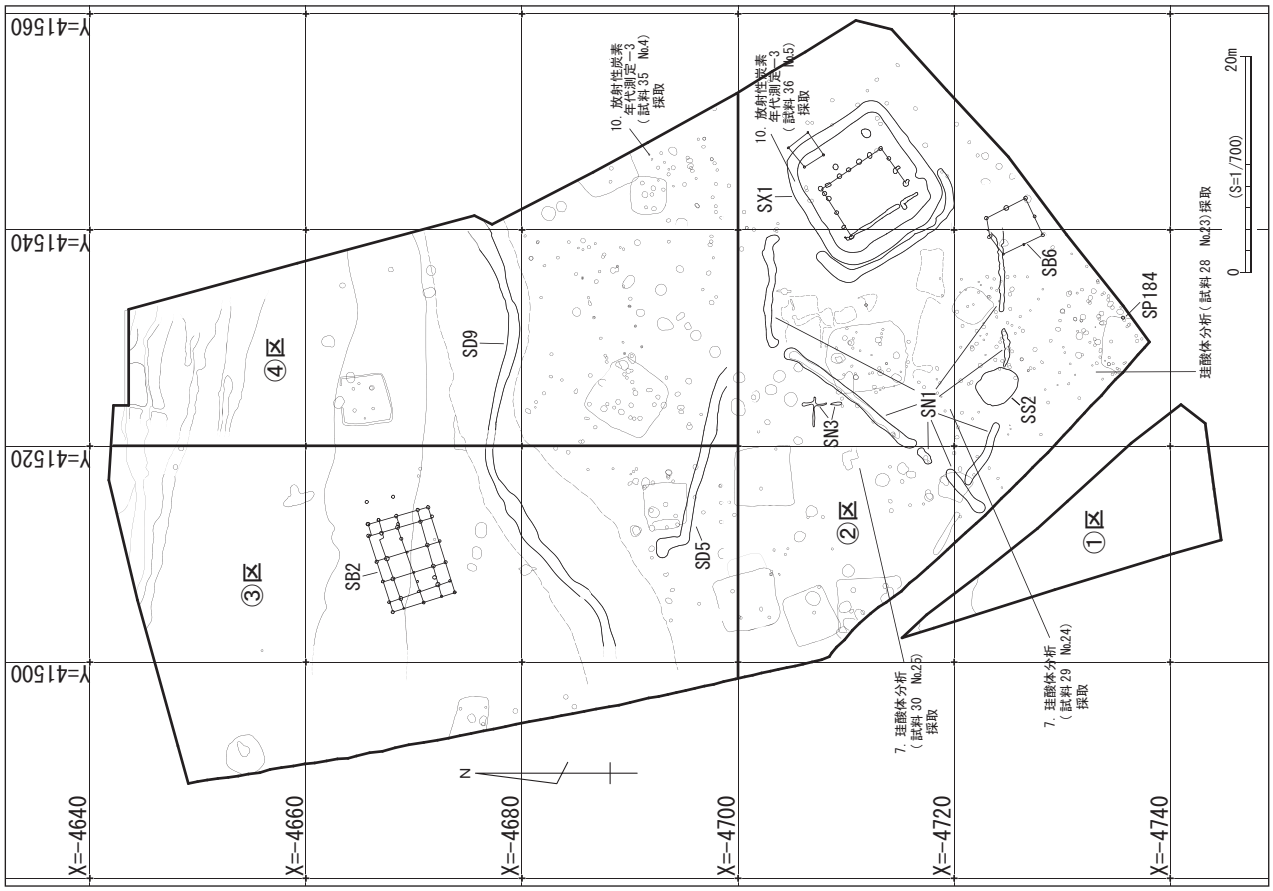



図13　TAK201406調査区　自然科学分析試料採取地点

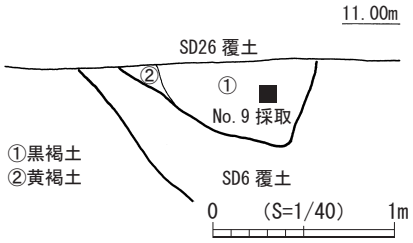



図14　花粉分析試料 No. 9採取地点

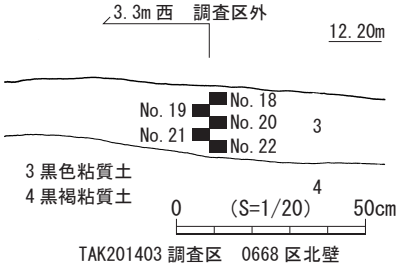



図15　珪酸分析・花粉分析－2
試料採取地点

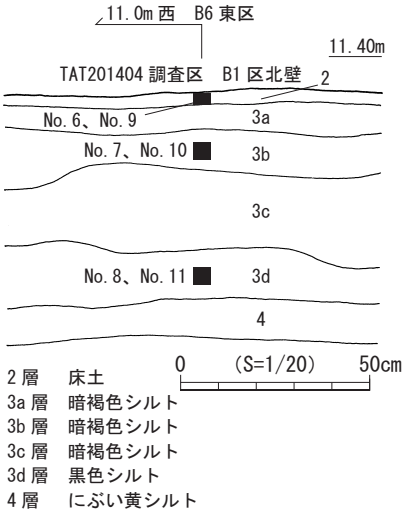



図16　珪酸分析・花粉分析－3
試料採取地点

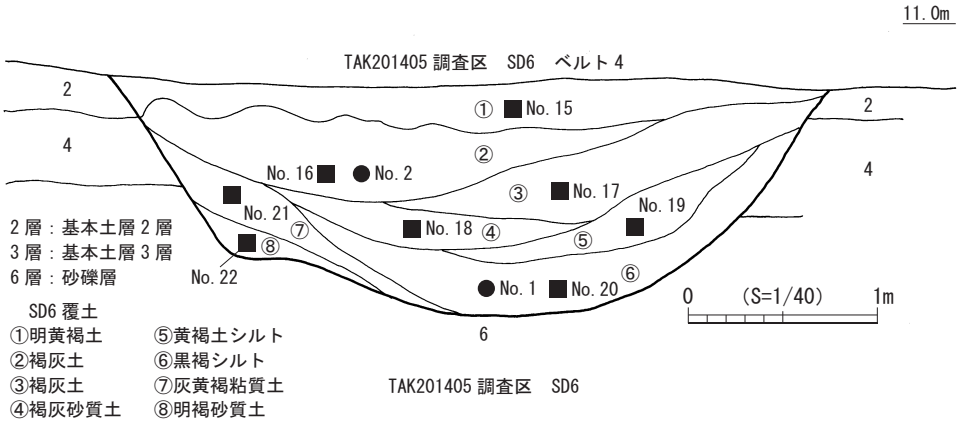



図17　珪藻分析(No. 15～No. 22)、放射性炭素年代測定－2(No. 1・2)試料採取地点

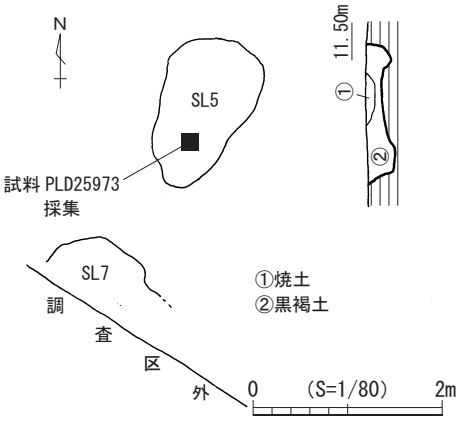



図18　放射性炭素年代測定－1
試料採取地点

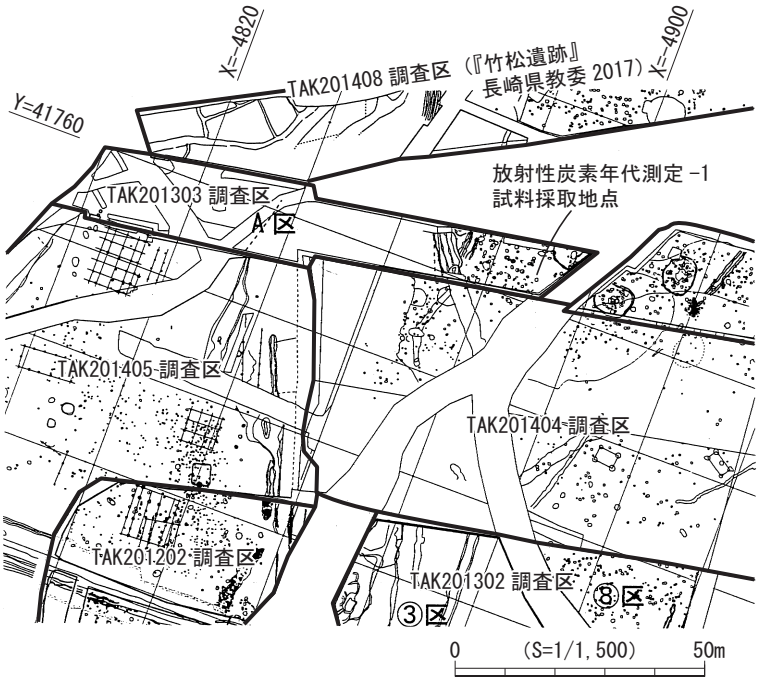



図19

## 4. 植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所

### (1)はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000, 杉山, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

### (2)試料

分析試料は、TAK201404：B1区北壁の2層、3b 層、3d 層から採取された試料6～試料8、TAK201302：弥生時代後期の墳墓(箱形石棺墓・土坑墓)内床面から採取された試料12～試料17、TAK201302：0668地点の3層から採取された試料18～試料22の計14点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### (3)分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

1)試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
2)試料約1g に対し直径約40μm のガラスビーズを約0.02g 添加(0.1mg の精度で秤量)
3)電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
4)超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
5)沈底法による20μm 以下の微粒子除去
6)封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
7)検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### (4)分析結果

**①分類群**

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図20～図22に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、アワブキ科、その他

**②植物珪酸体の検出状況**

1)B1区北壁(図9)

下位の3d層下部(試料8)および3b層(試料7)では、イネ科ではネザサ節型が比較的多く検出され、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、マダケ属型なども認められた。イネの密度は、試料8では1,900個/g、試料7では2,900個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。樹木では、照葉樹のマンサク科(イスノキ属)が比較的多く検出され、ブナ科(シイ属)、クスノキ科なども認められた。2層(試料6)でも、おおむね同様の結果であるが、イネの密度は5,300個/gと高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、2層ではイネが優勢となっている。

2)弥生時代後期の墳墓内床面(図10)

箱形石棺墓(SQ01、SQ06、SQ09、SQ11、SQ18)の床面から採取された試料12～試料16では、イネ科ではウシクサ族Aが少量検出され、部分的にイネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型なども認められた。イネが検出されたのは、SQ11(試料15)の1試料であり、密度は700個/gと低い値である。樹木では、照葉樹のマンサク科(イスノキ属)が比較的多く検出され、部分的にブナ科(シイ属)、クスノキ科なども認められた。土坑墓(SR05)の床面から採取された試料17では、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ブナ科(シイ属)、マンサク科(イスノキ属)などが検出されたが、いずれも比較的少量である。

3)0668地点(図11)

3層下部(試料20～22)では、イネ科ではネザサ節型が多く検出され、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は600～2,000個/gと比較的低い値である。また、試料21ではムギ類(穎の表皮細胞)が検出されたが、密度は700個/gと低い値である。樹木では、照葉樹のクスノキ科が比較的多く検出され、ブナ科(シイ属)なども認められた。3層上部(試料18、19)でも、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属は減少している。イネの密度は、試料18では4,100個/gと比較的高い値であり、試料19では1,400個/gと比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、3層下部ではヨシ属も多くなっている。

(5)植物珪酸体分析から推定される植生と環境

①B1区北壁

下位の3d層から3b層にかけては、比較的少量ながらイネが検出されることから、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。当時の調査区周辺は、ススキ属、ウシクサ族、メダケ属(おもにネザサ節)、マダケ属などが生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも見られたと推定される。また、当時の遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

2層の時期には、水田稲作が行われていたと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属、ウシクサ族、メダケ属(おもにネザサ節)、マダケ属などが生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

②弥生時代後期の墳墓内床面

箱形石棺墓(SQ01、SQ06、SQ09、SQ11、SQ18)と土坑墓(SR05)の床面から採取された試料について分析を行った。その結果、SQ11の試料からイネが検出された。ここで検出されたイネについては、密度が低いことから上層や他所からの混入の可能性も考えられるが、何らかの形で石棺墓に入れられた稲藁(藁製品)に由来する可能性も想定される。なお、イネの籾殻(穎の表皮細胞)に由来する植物珪酸体は検出されないことから、稲籾の存在については言及できない。

③0668地点

3層下部では、比較的少量ながらイネが検出され、部分的にムギ類(穎の表皮細胞)も認められることから、調査地点もしくはその周辺で稲作およびムギ類の栽培が行われていたと考えられる。当時の調査区周辺は、メダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめススキ属、ウシクサ族などが生育する比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺には、シイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

3層上部でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、ヨシ属が減少していることから、堆積環境の乾燥化が示唆される。また、この時期には周辺でマダケ属が見られるようになったと考えられる。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、植物珪酸体分析でマダケ属が見られるようになるのは、一般に中世以降であることが多い。

文献

杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69－84.

杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109－123.

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)．考古学と植物学．同成社，p.189－213.

杉山真二(2009)植物珪酸体と古生態．人と植物の関わりあい④．大地と森の中で－縄文時代の古生態系－．縄文の考古学Ⅲ．小杉康ほか編．同成社，p.105－114.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15－29.
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73－85.

## 表1　竹松遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度(単位：×100個/g)

| 分類群 | 学名 | 地点・試料 | TAK201404：B1区北壁 | | | TAK201302：弥生時代後期の墳墓内床面 | | | | | | TAK201403：201403地点 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 6 | 7 | 8 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| イネ科 | Gramineae | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ | *Oryza sativa* | | 53 | 29 | 19 | | | | 7 | | | 41 | 14 | 20 | 13 | 6 |
| ムギ類(穎の表皮細胞) | *Triticum-Hordeum* (husk Phytolith) | | | | | | | | | | | | | | 7 | |
| ヨシ属 | *Phragmites* | | 7 | 6 | 6 | 7 | | | 7 | 7 | | 6 | 7 | 33 | 27 | 32 |
| キビ族型 | Paniceae type | | | | | | | 7 | | 7 | | 6 | | 13 | | 6 |
| ススキ属型 | *Miscanthus* type | | 13 | 6 | 6 | 7 | | | 20 | | | 47 | 21 | 53 | 27 | 19 |
| ウシクサ族 A | Andropogoneae A type | | 40 | 29 | 38 | 20 | 20 | 7 | 40 | 7 | 21 | 77 | 69 | 99 | 87 | 65 |
| タケ亜科 | Bambusoideae | | | | | | | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Nipponocalamus | | 13 | 18 | 13 | 7 | | | 7 | | | 30 | 28 | 26 | 53 | 39 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | | 53 | 88 | 64 | | | 14 | 20 | 7 | | 325 | 221 | 389 | 247 | 181 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | | 7 | 6 | 6 | | | | | | 7 | 24 | 41 | 7 | 13 | 13 |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | | | 6 | | | | 7 | | | | 7 | 7 | 13 | 26 |
| マダケ属型 | *Phyllostachys* | | 7 | 6 | 6 | | | | | | | 6 | 14 | | | |
| 未分類等 | Others | | 13 | 18 | 19 | | 7 | 14 | 7 | | 7 | 284 | 241 | 264 | 194 | 227 |
| その他のイネ科 | Others | | | | | | | | | | | | | | | |
| 表皮毛起源 | Husk hair origin | | 20 | 53 | 19 | | | 7 | | | | 24 | 7 | 7 | 47 | 6 |
| 棒状珪酸体 | Rod-shaped | | 139 | 177 | 102 | 26 | 20 | 7 | 27 | 14 | 56 | 195 | 179 | 211 | 147 | 117 |
| 未分類等 | Others | | 225 | 241 | 262 | 139 | 47 | 35 | 60 | 50 | 70 | 225 | 345 | 178 | 294 | 233 |
| 樹木起源 | Arboreal | | | | | | | | | | | | | | | |
| ブナ科(シイ属) | *Castanopsis* | | 7 | 18 | 13 | | | | 7 | | 7 | 12 | 14 | 13 | 13 | 32 |
| クスノキ科 | Lauraceae | | 7 | 24 | 45 | 26 | | 7 | 13 | | | 59 | 55 | 46 | 67 | 129 |
| マンサク科(イスノキ属) | *Distylium* | | 60 | 59 | 51 | 46 | 61 | 69 | 87 | 50 | 56 | 12 | 7 | | 13 | |
| アワブキ科 | Sabiaceae | | | | | | | 7 | | | 7 | | 7 | | | |
| その他 | Others | | 27 | 88 | 90 | 86 | 34 | 49 | 20 | 21 | 42 | 89 | 48 | 92 | 60 | 84 |
| (海綿骨針) | Sponge spicules | | | 6 | | | | | | | | 6 | | | | |
| 植物珪酸体総数 | Total | | 689 | 865 | 767 | 363 | 190 | 222 | 329 | 164 | 273 | 1462 | 1324 | 1459 | 1322 | 1217 |
| おもな分類群の推定生産量(単位：kg/㎡・cm)：試料の仮比重を1.0と仮定して算出 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| イネ | *Oryza sativa* | | 1.56 | 0.87 | 0.56 | | | | 0.20 | | | 1.22 | 0.41 | 0.58 | 0.39 | 0.19 |
| ヨシ属 | *Phragmites* | | 0.42 | 0.37 | 0.40 | 0.42 | | | 0.42 | 0.45 | | 0.37 | 0.44 | 2.08 | 1.68 | 2.04 |
| ススキ属型 | *Miscanthus* type | | 0.16 | 0.07 | 0.08 | 0.08 | | | 0.25 | | | 0.59 | 0.26 | 0.65 | 0.33 | 0.24 |
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Niponocalamus | | 0.15 | 0.20 | 0.15 | 0.08 | | | 0.08 | | | 0.34 | 0.32 | 0.31 | 0.62 | 0.45 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | | 0.25 | 0.42 | 0.31 | | | 0.07 | 0.10 | 0.03 | | 1.56 | 1.06 | 1.87 | 1.19 | 0.87 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | | 0.05 | 0.04 | 0.05 | | | | | | 0.05 | 0.18 | 0.31 | 0.05 | 0.10 | 0.10 |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | | | 0.02 | | | | 0.02 | | | | 0.02 | 0.02 | 0.04 | 0.08 |
| タケ亜科の比率(%) | | | | | | | | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Nipponocalamus | | 34 | 30 | 28 | 100 | | | 40 | | | 16 | 19 | 14 | 32 | 30 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | | 56 | 63 | 59 | | | 100 | 50 | 100 | | 75 | 62 | 83 | 61 | 58 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | | 11 | 7 | 9 | | | | | | 100 | 9 | 18 | 2 | 5 | 6 |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | | | 4 | | | | 10 | | | | 1 | 1 | 2 | 5 |
| メダケ率 | Medake ratio | | 89 | 93 | 87 | 100 | | 100 | 90 | 100 | 0 | 91 | 81 | 97 | 93 | 88 |

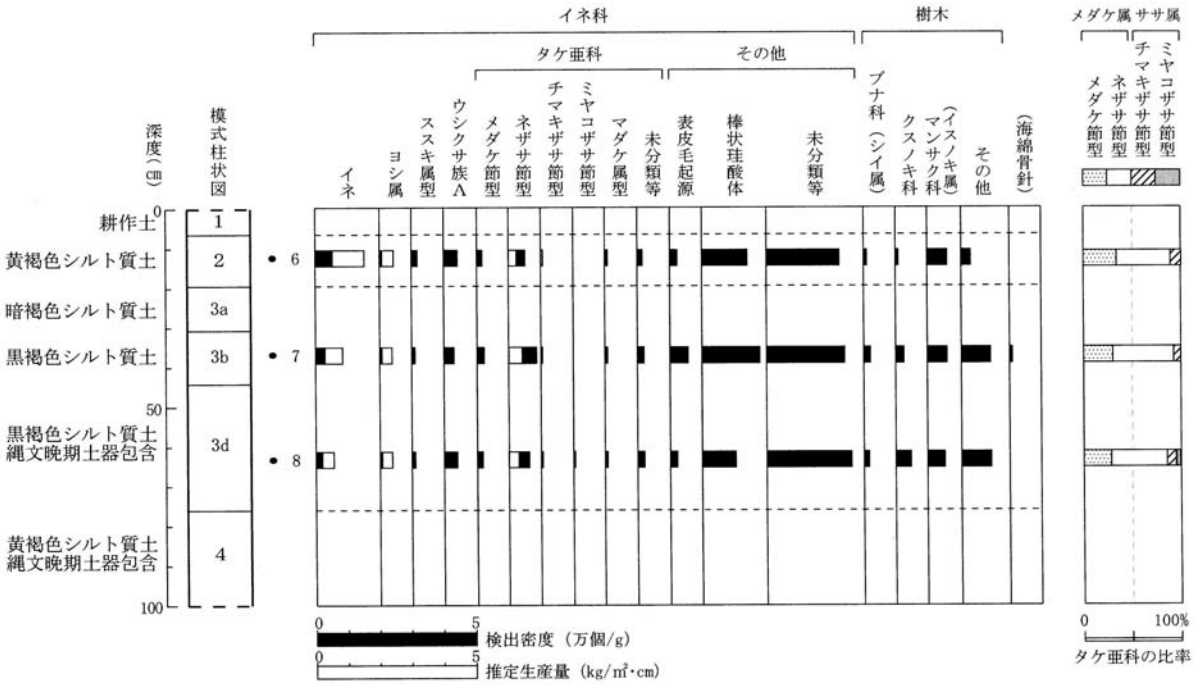



図20　竹松遺跡 TAK201404：B1区北壁における植物珪酸体分析結果

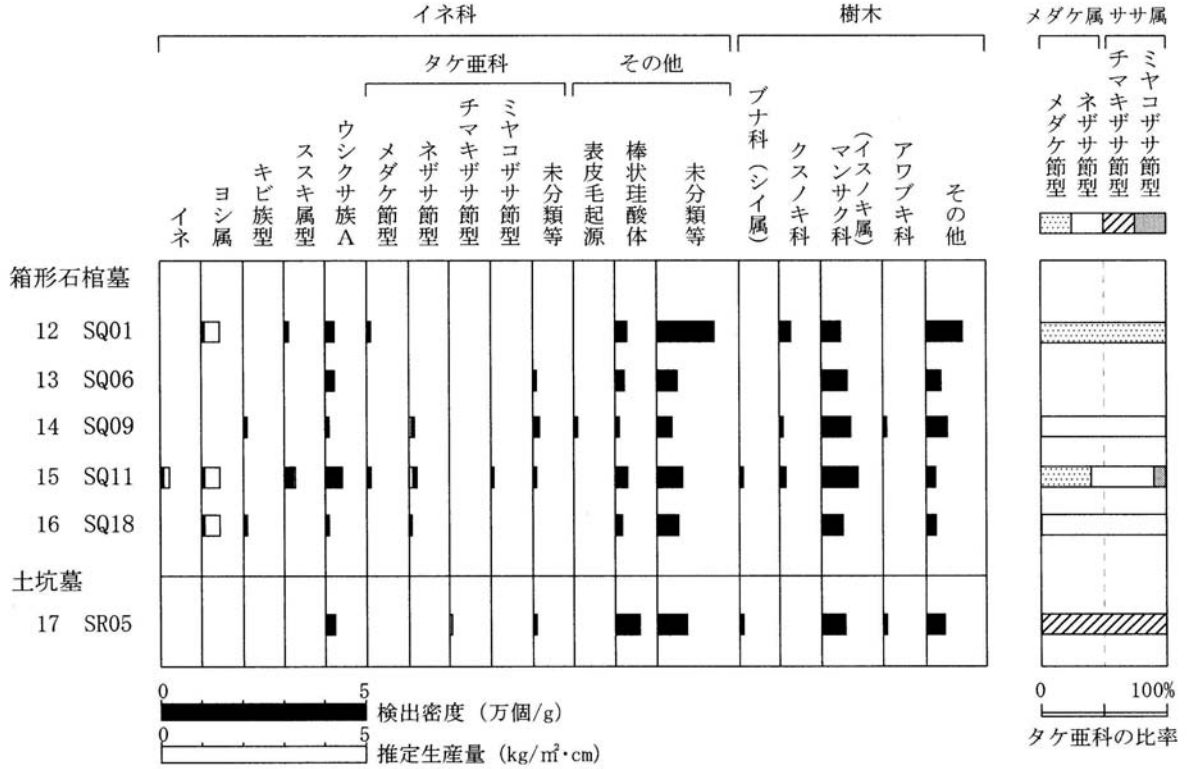



図21　竹松遺跡 TAK201302：弥生時代後期の墳墓内床面における植物珪酸体分析結果

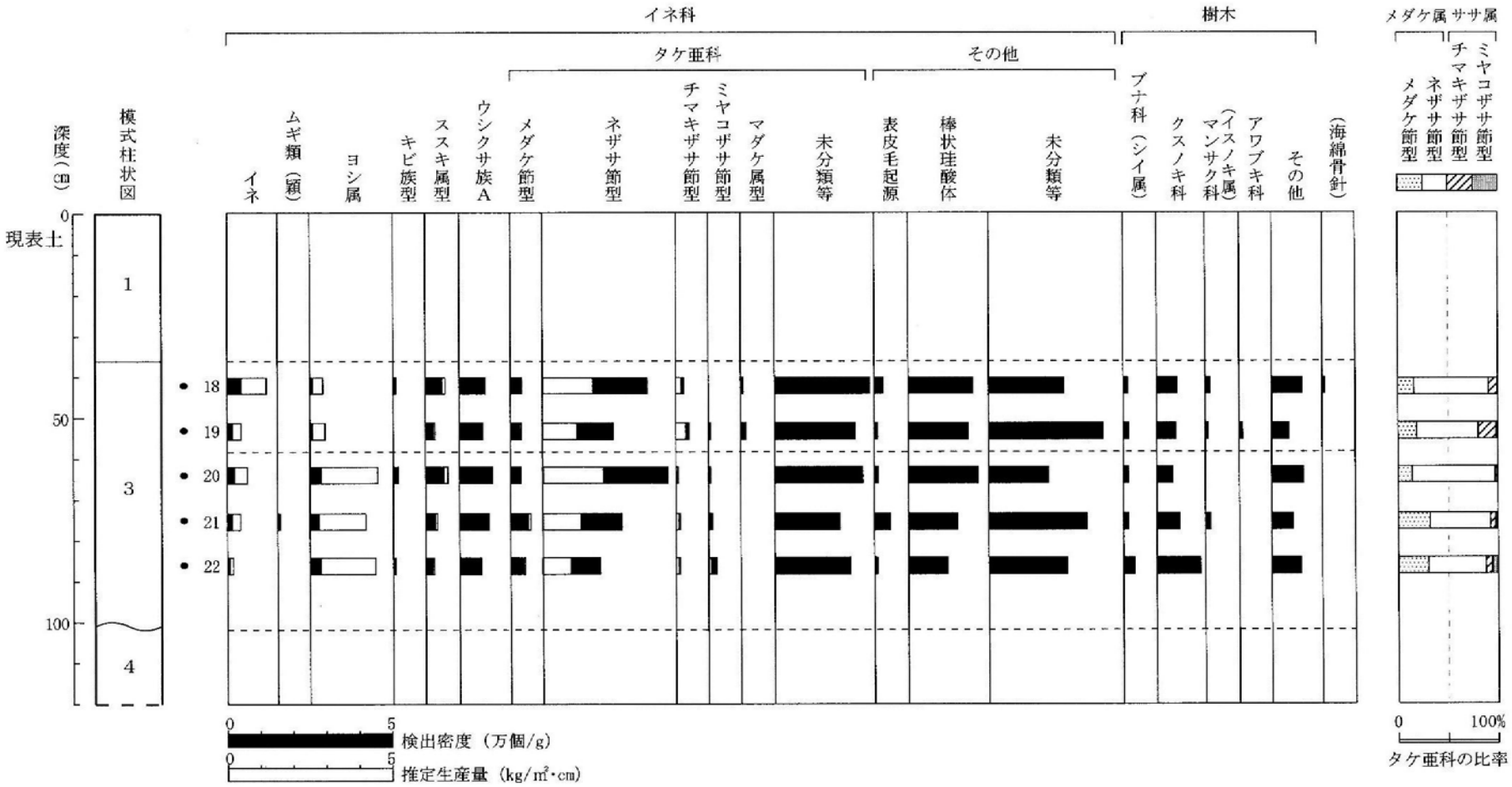
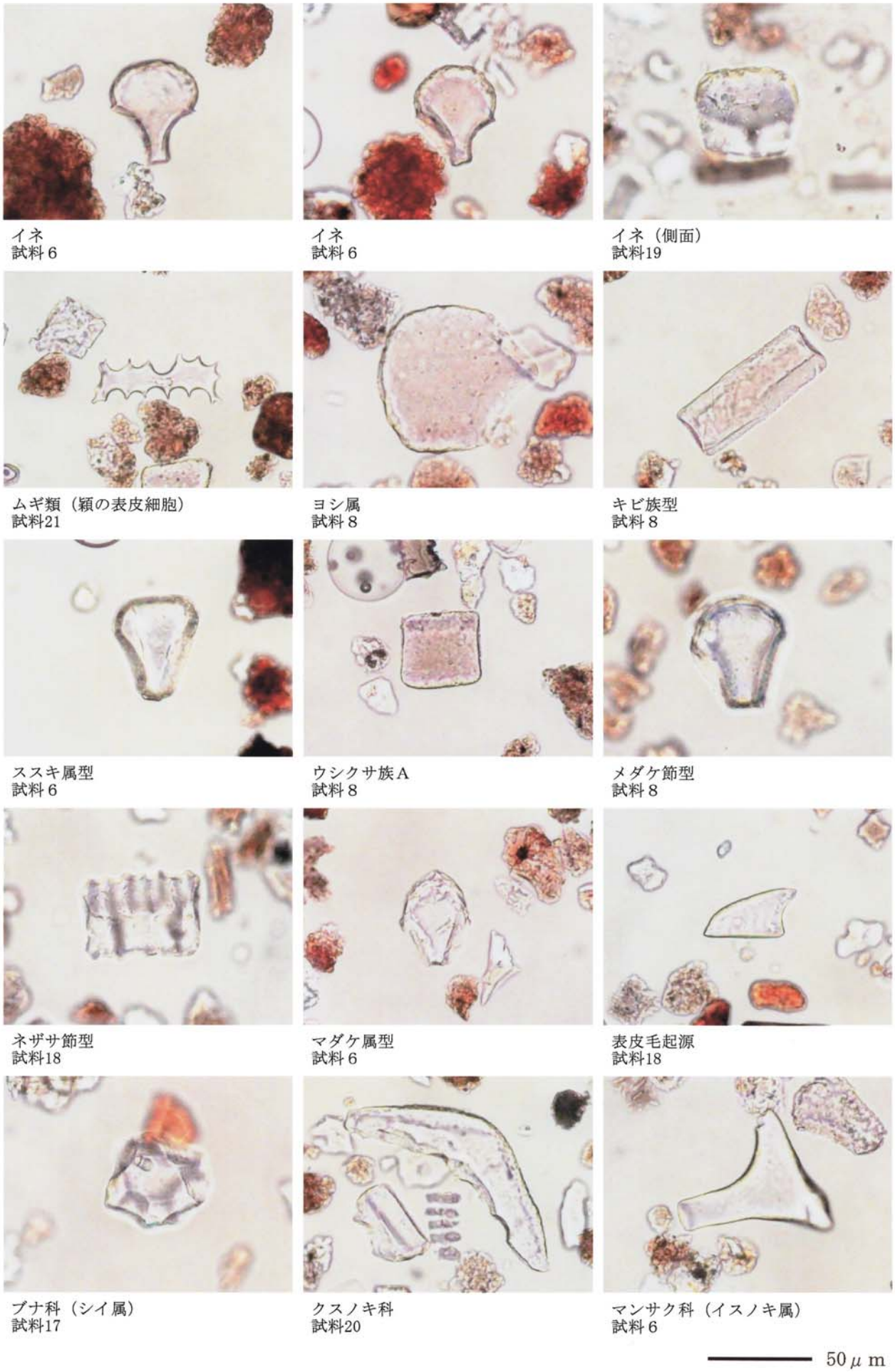



図22　竹松遺跡 TAK201403：0668における植物珪酸体分析結果




図版7　竹松遺跡の植物珪酸体（プラントオパール）

## 5. 花粉分析

株式会社古環境研究所

### (1)はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### (2)試料

分析試料は、TAK201404：B1区北壁の2層、3b 層、3d 層から採取された試料9～試料11(植物珪酸体分析の試料6～試料8と同一試料)、TAK201302：弥生時代後期の墳墓(箱形石棺墓・土坑墓)内床面から採取された試料12～試料17、TAK201302：0668地点の3層から採取された試料18～試料22の計14点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

### (3)方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

1)試料から1cm$^3$を秤量
2)0.5％リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
3)水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
4)25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
5)水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
6)再び氷酢酸を加えて水洗処理
7)沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
8)検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

### (4)結果

**①分類群**

検出された分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉14、シダ植物胞子2形態の計29である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表3に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ヤナギ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、カエデ属、グミ属、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

**②花粉群集の特徴**

1)B1区北壁(表2)

下位の3d 層下部(試料11)および3b 層(試料10)では、花粉・胞子がまったく検出されなかった。2層(試料9)では、草本花粉のイネ科、アブラナ科、ヨモギ属、およびシダ植物胞子が検出されたが、いずれもわずかである。

2)弥生時代後期の墳墓内床面(表2)

箱形石棺墓の SQ18(試料16)では、樹木花粉のスギがわずかに検出されたが、箱形石棺墓の SQ01(試料12)、SQ06(試料13)、SQ09(試料14)、SQ11(試料15)、および土坑墓の SR05(試料17)では、花粉・胞子がまったく検出されなかった。

3)0668地点(図12)

3層下部(試料21、22)では、花粉密度が比較的低く、草本花粉の占める割合が70％前後と高い。草本花粉では、ヨモギ属やイネ科が優勢で、タンポポ亜科、カヤツリグサ科、セリ亜科、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。植物珪酸体分析の結果から、イネ科にはススキ属やヨシ属などが含まれていると考えられる。樹木花粉では、クリ、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、シイ属－マテバシイ属などが認められた。3層上部(試料18～20)では、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科が大幅に増加し、ヨモギ属、イネ科は減少傾向を示している。また、3層最上部(試料18)ではソバ属が認められた。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が減少し、マツ属複維管束亜属はほとんど見られなくなっている。

## (5)花粉分析から推定される植生と環境

**①B1区北壁**

下位の3d 層と3b 層では花粉・胞子がまったく検出されず、2層でもほとんど検出されなで花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。土層の堆積状況などから、ここでは1)の要因が大きいと考えられる。

**②墳墓内床面**

墳墓(箱形石棺墓・土坑墓)内床面の分析では、SQ18で樹木花粉のスギがわずかに検出されたが、その他の試料では花粉・胞子がまったく検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、

前述のようなことが考えられる。今回の分析では、葬送儀礼に関係するベニバナなどの花粉の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

**③0668地点**

3層下部の堆積当時は、ヨモギ属やイネ科(ススキ属など)をはじめ、タンポポ亜科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にイネ科(ヨシ属など)、カヤツリグサ科、セリ亜科などが生育する湿潤なところも見られたと推定される。森林植生としては、周辺地域にクリ、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)、マツ類(マツ属複維管束亜属：クロマツ・アカマツ)などが分布していたと推定される。

3層上部では、アブラナ科が大幅に増加し、部分的に少量ながらソバ属も認められた。アブラナ科やソバ属は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、他の分類群と比較して過大に評価する必要がある。これらのことから、この頃にはアブラナ科をはじめソバ属なども栽培する畑作が行われていた可能性が考えられる。アブラナ科には、アブラナ(ナタネ)、ダイコン、ハクサイ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。また、周辺には畑作雑草のアカザ科－ヒユ科をはじめ、ヨモギ属、イネ科、クワ科－イラクサ科などが分布していたと考えられ、周辺地域にはクリ、カシ類などの樹木が分布していたと推定される。

文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248－262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純(1967)花粉分析．古今書院，p. 82－110.

中村純(1980)日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

星川清親(1992)改訂増補栽培植物の起源と伝搬．二宮書店，311p.

## 表2　竹松遺跡における花粉分析結果

| 分類群 | | TAK201404：B1区北壁 | | | TAK201302：弥生時代後期の墳墓内床面 | | | | | | TAK201403：0668地点 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学名 | 和名 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | | | | | | | | | | | | |
| *Pinus* subgen. *Diploxylon* | マツ属複維管束亜属 | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 7 |
| *Cryptomeria japonica* | スギ | | | | | | | | 2 | | | 1 | | 1 | |
| *Salix* | ヤナギ属 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| *Carpinus*−*Ostrya japonica* | クマシデ属－アサダ | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| *Castanea crenata* | クリ | | | | | | | | | | 8 | 12 | 8 | 10 | 14 |
| *Castanopsis*−*Pasania* | シイ属－マテバシイ属 | | | | | | | | | | 1 | 3 | 7 | 5 | 2 |
| *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | コナラ属コナラ亜属 | | | | | | | | | | 1 | 5 | 1 | 2 | 3 |
| *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | コナラ属アカガシ亜属 | | | | | | | | | | 3 | 5 | 7 | 10 | 14 |
| *Acer* | カエデ属 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| *Elaeagnus* | グミ属 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| *Symplocos* | ハイノキ属 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Arboreal･Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | | | | | | | | | | | | |
| Moraceae-Urticaceae | クワ科－イラクサ科 | | | | | | | | | | 3 | 22 | 7 | 8 | |
| *Sambucus*−*Viburnum* | ニワトコ属－ガマズミ属 | | | | | | | | | | | 2 | | 1 | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | | | | | | | | | | | | | |
| Gramineae | イネ科 | 1 | | | | | | | | | 31 | 41 | 63 | 82 | 56 |
| Cyperaceae | カヤツリグサ科 | | | | | | | | | | 3 | 1 | 2 | 2 | 11 |
| *Fagopyrum* | ソバ属 | | | | | | | | | | 2 | | | | |
| *Polygonum* sect. *Persicaria* | タデ属サナエタデ節 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| Chenopodiaceae-Amaranthaceae | アカザ科－ヒユ科 | | | | | | | | | | 32 | 29 | 7 | 4 | 1 |
| Caryophyllaceae | ナデシコ科 | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| *Ranunculus* | キンポウゲ属 | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| *Thalictrum* | カラマツソウ属 | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| Cruciferae | アブラナ科 | 4 | | | | | | | | | 48 | 79 | 42 | 1 | 2 |
| Apioideae | セリ亜科 | | | | | | | | | | 3 | 4 | 4 | 7 | 4 |
| Lactucoideae | タンポポ亜科 | | | | | | | | | | 11 | 4 | 5 | 6 | 16 |
| Asteroideae | キク亜科 | | | | | | | | | | 3 | 5 | 5 | 3 | 3 |
| *Xanthium* | オナモミ属 | | | | | | | | | | | | | 4 | |
| *Artemisia* | ヨモギ属 | 1 | | | | | | | | | 56 | 168 | 143 | 165 | 148 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | | | | | | | | | | | | | | |
| Monolate type spore | 単条溝胞子 | 6 | | | | | | | | | 5 | 3 | 7 | 2 | 1 |
| Trilate type spore | 三条溝胞子 | 4 | | | | | | | | | 21 | 31 | 30 | 61 | 69 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | | | | | | 2 | | 13 | 27 | 23 | 29 | 45 |
| Arboreal･Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | | | | | | | | 3 | 24 | 7 | 9 | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 6 | | | | | | | | | 191 | 331 | 271 | 274 | 245 |
| Total pollen | 花粉総数 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 207 | 382 | 301 | 312 | 290 |
| Pollen frequencies of 1cm$^3$ | 試料1cm$^3$中の花粉密度 | 0.6 $\times 10^2$ | | | | | | | 0.1 $\times 10^2$ | | 0.2 $\times 10^4$ | 0.6 $\times 10^4$ | 0.5 $\times 10^4$ | 0.3 $\times 10^4$ | 0.2 $\times 10^4$ |
| Unknown pollen | 未同定花粉 | 2 | | | | | | | | | 5 | 10 | 7 | 16 | 18 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | 10 | | | | | | | | | 26 | 34 | 37 | 63 | 70 |
| Helminth eggs | 寄生虫卵 | | | | | | | | | | | | | | |
| Total | 計 | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) |
| Stone cell | 石細胞 | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) |
| Digestion rimeins | 明らかな消化残渣 | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) |
| Charcoal ･woods fragments | 微細炭化物・微細木片 | (＜＋) | (＋) | (＋) | (＜＋) | (＜＋) | (＜＋) | (＜＋) | (＜＋) | (＋) | (＋) | (＋＋) | (＋＋) | (＋) | (＋＋) |

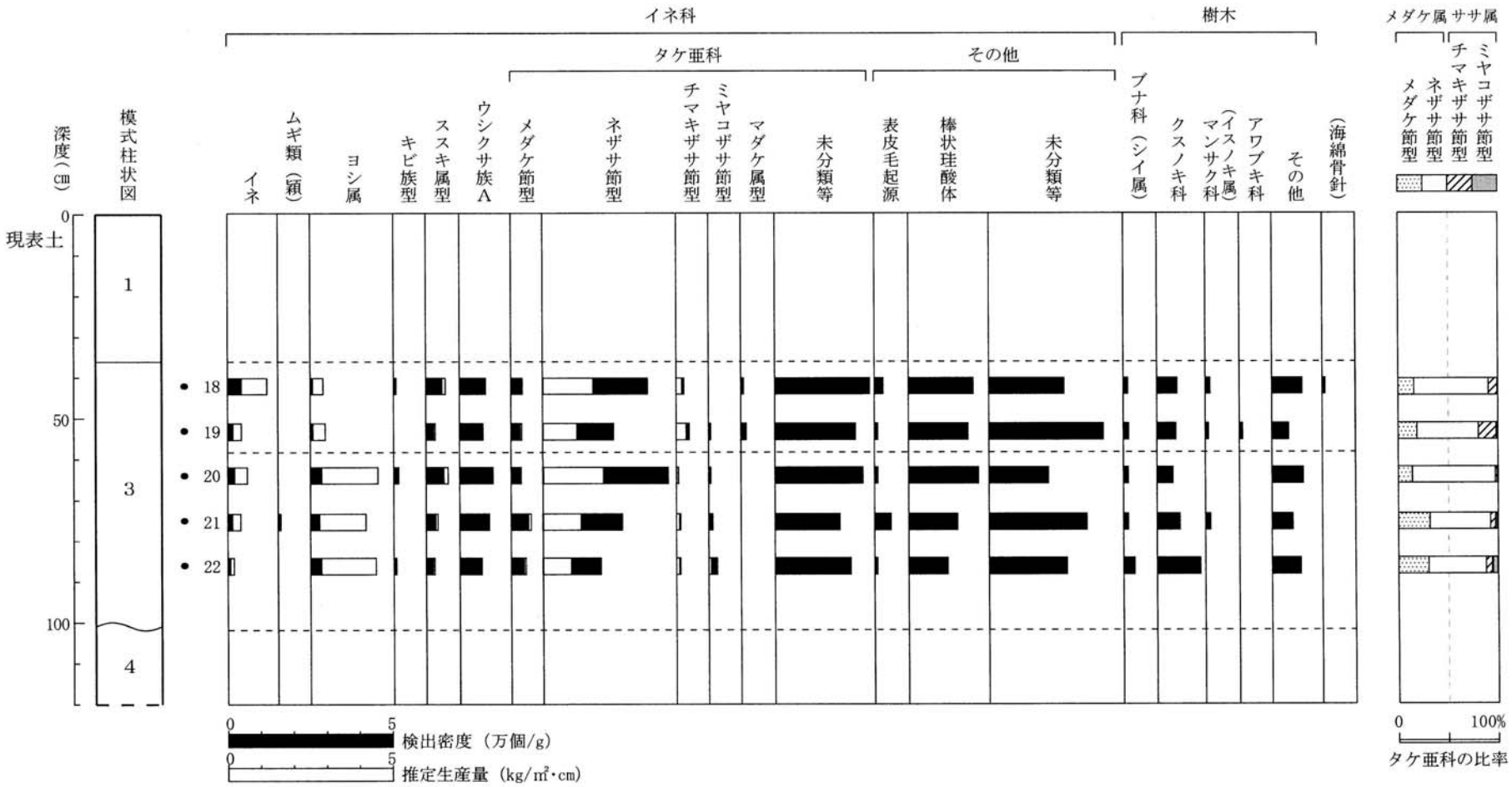
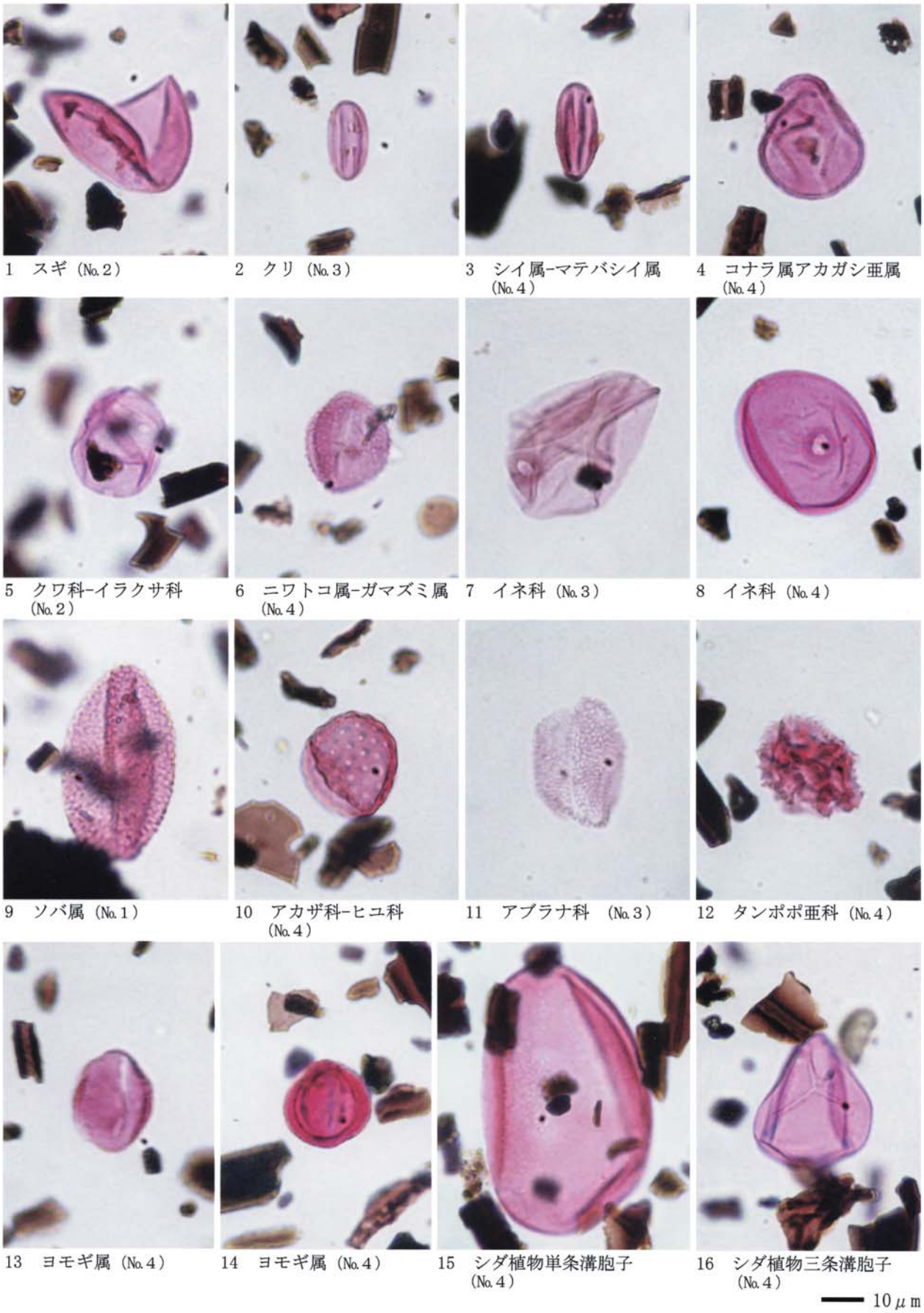



図23　竹松遺跡 TAK201403：0668における花粉ダイアグラム




図版8　竹松遺跡の花粉・胞子

## 6. 放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

### (1)はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素($^{14}C$)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村, 2003)。

### (2)試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

| 試料No. | 採取箇所 | 種類 | 前処理・調整法 | 測定法 |
|---|---|---|---|---|
| No.1 | TAK201405,SD06,黒色 | 炭化物 | 超音波洗浄, 酸－アルカリ－酸処理 | AMS |
| No.2 | TAK201405,SD06,上層 | 炭化物 | 超音波洗浄, 酸－アルカリ－酸処理 | AMS |
| No.3 | TAK201405,SD08,下層 | 炭化物 | 超音波洗浄, 酸－アルカリ－酸処理 | AMS |
| No.4 | TAK201406,SP21,2層最下部 | 炭化物 | 超音波洗浄, 酸－アルカリ－酸処理 | AMS |
| No.5 | TAK201406,SX01,C－3 | 炭化物 | 超音波洗浄, 酸－アルカリ－酸処理 | AMS |

### (3)測定結果

加速器質量分析法(AMS:Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた$^{14}C$濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素($^{14}C$)年代および暦年代(較正年代)を算出した。次表にこれらの結果を示し、図24に暦年較正結果(較正曲線)を示す。

| 試料No. | 測定No.<br>(PED-) | $\delta^{13}C$<br>(‰) | $^{14}C$年代：年BP<br>(暦年較正用) | 暦年代(較正年代)：cal- | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1σ(68.2%確率) | 2σ(95.4%確率) |
| No.1 | 27637 | －30.15±0.29 | 925±20<br>(926±19) | AD1045－1099(41.6%)<br>AD1120－1154(26.6%) | AD1037－1159(95.4%) |
| No.2 | 27638 | －27.12±0.30 | 1070±20<br>(1072±19) | AD909 －912 (2.8%)<br>AD969 －1013(65.4%) | AD900－922(15.5%)<br>AD948－1018(79.9%) |
| No.3 | 27639 | －28.08±0.30 | 930±20<br>(931±19) | AD1041－1056(11.7%)<br>AD1077－1109(26.0%)<br>AD1116－1153(30.5%) | AD1036－1156(95.4%) |
| No.4 | 27640 | －28.76±0.30 | 925±20<br>(923±19) | AD1046－1094(42.4%)<br>AD1120－1141(19.0%)<br>AD1147－1155(6.8%) | AD1038－1160(95.4%) |
| No.5 | 27641 | －25.56±0.29 | 640±20<br>(639±18) | AD1296－1310(23.8%)<br>AD1360－1387(44.4%) | AD1289－1320(38.2%)<br>AD1350－1392(57.2%) |

BP:Before Physics(Present),cal:calibrated,AD：西暦

①$\delta^{13}C$（デルタ）測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の$\delta^{13}C$値を－25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

②放射性炭素（$^{14}C$）年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。$^{14}C$の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は1σ（シグマ）（68.2％確率）である。$^{14}C$年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

③暦年代（Calendar Years）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中$^{14}C$濃度の変動および$^{14}C$の半減期の違いを較正することで、放射性炭素（$^{14}C$）年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な$^{14}C$測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と$^{14}C$年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal13、較正プログラムはOxCal4.2である。

暦年代（較正年代）は、$^{14}C$年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2％確率）と2σ（95.4％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。（）内の％表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は$^{14}C$年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4)所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№1では925±20年BP（2σの暦年代でAD1037～1159年）、№2では1070±20年BP（AD900～922，948～1018年）、№3では930±20年BP（AD1036～1156年）、№4では925±20年BP（AD1038～1160年）、№5では640±20年BP（AD1289～1320，1350～1392年）の年代値が得られた。

文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p.3－20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301－322.

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al.,（2013）IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

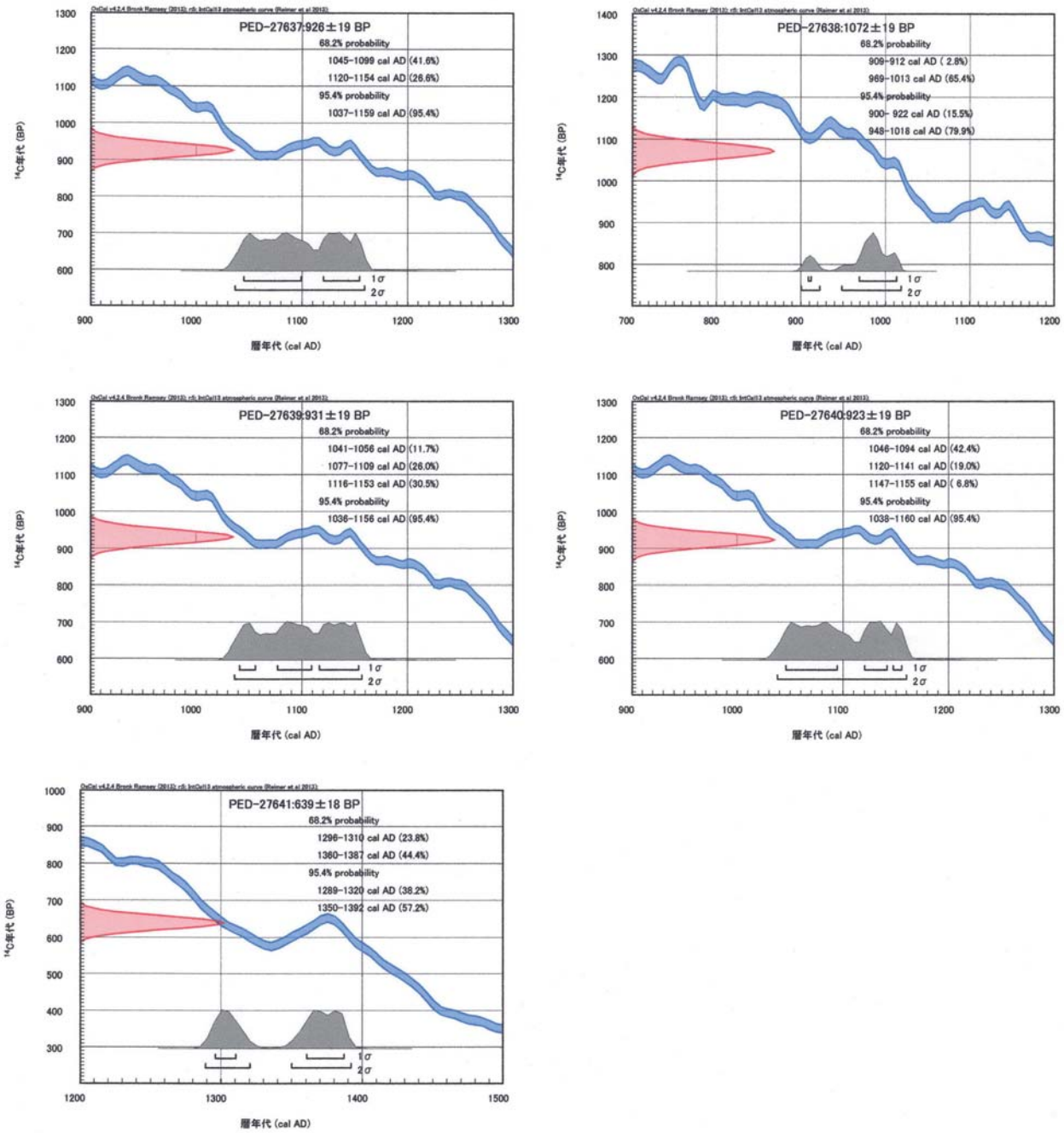

PED-27637:926±19 BP
68.2% probability
1045-1099 cal AD (41.6%)
1120-1154 cal AD (26.6%)
95.4% probability
1037-1159 cal AD (95.4%)
PED-27638:1072±19 BP
68.2% probability
909-912 cal AD ( 2.8%)
969-1013 cal AD (65.4%)
95.4% probability
900- 922 cal AD (15.5%)
948-1018 cal AD (79.9%)
PED-27639:931±19 BP
68.2% probability
1041-1056 cal AD (11.7%)
1077-1109 cal AD (26.0%)
1116-1153 cal AD (30.5%)
95.4% probability
1036-1156 cal AD (95.4%)
PED-27640:923±19 BP
68.2% probability
1046-1094 cal AD (42.4%)
1120-1141 cal AD (19.0%)
1147-1155 cal AD ( 6.8%)
95.4% probability
1038-1160 cal AD (95.4%)
PED-27641:639±18 BP
68.2% probability
1296-1310 cal AD (23.8%)
1360-1387 cal AD (44.4%)
95.4% probability
1289-1320 cal AD (38.2%)
1350-1392 cal AD (57.2%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ

図24　暦年較正結果

## 7. 竹松遺跡の哺乳類骨

株式会社パレオ・ラボ

### (1)はじめに

長崎県大村市竹松町に所在する竹松遺跡の発掘調査(TAK201405調査区)では、中世(12～13世紀)の居館が検出された。居館の区画内からは大型の哺乳類骨から成る骨集中地点が検出された(TAK201405③区 7866グリッド第3層出土)。ここでは、哺乳類骨についての同定結果を報告する。なお、同定や年齢推定にあたって、梶ヶ山真里先生に多大なるご協力を賜った。

### (2)試料と方法

試料は、TAK201405調査区③区で検出された骨集中地点(7×4mの範囲)から取り上げられた哺乳類骨である。哺乳類骨は、土ごと取り上げられ、6点に分けてタッパーに収められていた。試料の時期は、居館の区画溝の時期から、中世(12～13世紀)と考えられている。

骨を観察するために、土を除去した。ただし、骨が脆く、土を除去すると崩壊する場合は、土をそのままにした。一部の骨は、樹脂(パラロイドB72)で強化しながらの土除去を試みたが、あまり効果的ではなかった。

骨の観察は肉眼で行い、標本との比較により部位と分類群を同定した。

### (3)結果と考察

ヒト(*Homo sapiens*)あるいはヒトの可能性がある骨が確認された。

ヒトの左右不明大腿骨の骨幹1点が同定された(111)。大腿骨は、径が大きく、骨壁が厚く、成人と考えられる。性別は不明であるが、男性の可能性がある。

他に、ヒトの可能性がある四肢骨などが多数見られたが、状態が悪く、詳細は不明である。

表3　竹松遺跡201405調査区③骨集中地点哺乳類骨

| 試料番号 | 分類群 | 部位 | 左右 | 部分・状態 | 数量 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 105 | ヒト？ | 不明 | 不明 | 破片 | ＋ | |
| 111 | ヒト | 大腿骨 | 不明 | 骨幹 | 1 | 径太い、骨壁厚い |
| | ヒト？ | 四肢骨 | 不明 | 破片 | ＋ | |
| 121 | ヒト？ | 不明 | 不明 | 破片 | ＋ | |
| 122 | ヒト？ | 不明 | 不明 | 破片 | ＋ | |
| 124 | ヒト？ | 四肢骨 | 不明 | 破片 | ＋ | |
| 145 | ヒト？ | 四肢骨 | 不明 | 破片 | ＋ | パラロイドB72で強化 |
| | ヒト？ | 不明 | 不明 | 破片 | ＋ | パラロイドB72で強化 |

図版9　竹松遺跡③区骨集中地点出土のヒト大腿骨(試料番号111)

## 8. 竹松遺跡における珪藻分析

株式会社古環境研究所

(1)はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

(2)試料

分析試料は、TAK201404調査区B1区調査区北壁の2層、3b層、3d層下から採取された№12～№14、SD06の①層～⑧層から採取された№15～№22の計11点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3)方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1)試料から1cm$^3$を採量

2)10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置

3)上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)

4)残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5)マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

6)検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(4)結果

**①分類群**

検出された珪藻は、中塩性種(汽水生種)1分類群、貧塩性種(淡水生種)64分類群である。分析結果を表4に示し、珪藻数が100個以上計数された試料については珪藻総数を基数とするダイアグラムを示した(図25、図26)。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe(1974)や渡辺(2005)、陸生珪藻については小杉(1986)、環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記し　た主要な分類群を記し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔貧塩性種〕

*Achnanthes crenulata*、*Achnanthes lanceolata*、*Amphora copulata*、*Amphora veneta*、*Caloneis silicula*、*Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、*Cymbella sinuata*、*Cymbella tumida*、*Cymbella turgidula*、*Diploneis ovalis*、*Diploneis boldtiana*、*Diploneis sp.*、*Eunotia minor*、*Eunotia praerupta*、*Gomphonema clevei*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema spp.*、

*Hantzschia amphioxys*、*Navicula bacillum*、*Navicula capitata v. hungarica*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia acrosphaeria*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia spp.*、*Pinnularia viridis*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Synedra ulna*

**②珪藻群集の特徴**

1)B1区調査区北壁(図25)

下位の3d 層下(№14)では、珪藻がほとんど検出されなかった。3b 層(№13)では真・好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Navicula elginensis* や流水不定性種、陸生珪藻がわずかに認められた。2層(№12)では陸生珪藻の *Navicula confervacea*、*Nitzschia amphibia*、流水不定性種の *Cymbella tumida*、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula*、*Navicula elginensis*、*Cymbella turgidula* などが、わずかではあるが多様に認められた。

2)SD06(図26)

下位の⑧層(№22)と⑦層(№21)では、珪藻がほとんど検出されなかった。⑥層(№20)では、ほとんどが貧塩性種(淡水生種)で、流水不定性種、真・好流水性種が各40%、真・好止水性種が13%を占める。真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が優占し、中～下流河川指標種の *Cymbella turgidula*、*Rhoicosphenia abbreviata* が伴われ、流水不定性種では *Diploneis boldtiana* を主に *Gomphonema* spp.、*Navicula capitata* v. *hungarica* が認められた。真・好止水性種では、*Achnanthes crenulata* が認められた。⑤層(№19)と④層(№18)では、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula*、真・好止水性種の *Achnanthes crenulata*、陸生珪藻の *Navicula confervacea* などがわずかに認められた。③層(№17)では、真・好止水性種が45%、真・好流水性種が35%を占める。真・好止水性種では、*Achnanthes crenulata*、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が高率に認められた。②層(№16)と①層(№15)では、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula*、*Navicula elginensis*、陸生珪藻の *Navicula confervacea* などがわずかに認められた。

### (5)珪藻分析から推定される堆積環境

**①B1区調査区北壁**

下位の3d 層下では、珪藻がほとんど検出されないことから堆積環境の推定は困難である。珪藻が検出されない原因としては、1)珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、2)土層の堆積速度が速かったこと、3)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

3b 層と2層でも、珪藻があまり検出されないことから堆積環境の推定は困難であるが、陸生珪藻、流水不定性種、沼沢湿地付着生等の止水性種など多様な分類群が認められることから、水田周辺のような不安定で複雑な堆積環境が示唆される。珪藻があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

**②SD06**

遺構底部の⑥層は、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が優占しており、珪藻の付着基質となる水草が生育する流水性の滞水した沼沢湿地の環境が推定される。③層では、真・

好止水性種では *Achnanthes crenulata*、真・好流水性種で沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が高率であり、水草が生育する停滞しながら流れる水域が推定される。

その他の層では、珪藻があまり検出されないことから堆積環境の推定は困難であるが、②層や⑤層については③層とおおむね同様の状況であった可能性が考えられる。珪藻があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73－88.

伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23－45.

小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29－44.

小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1－20.

渡辺仁治(2005)群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能. 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, 666p.

Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental Reserch Center, 333 p.

## 表4　竹松遺跡における珪藻分析結果

| 分類群 | B1区北壁 | | | SD06 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| | 2層 | 3b層 | 3ｄ層 | ①層 | ②層 | ③層 | ④層 | ⑤層 | ⑥層 | ⑦層 | ⑧層 |
| 貧塩性種（淡水生種） | | | | | | | | | | | |
| *Achnanthes coarctata* | | | | | | 1 | | | | | |
| *Achnanthes crenulata* | 3 | 1 | | | 2 | 70 | 1 | 5 | 30 | | |
| *Achnanthes exigua* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Achnanthes lanceolata* | | | | | | | | 2 | 1 | | |
| *Achnanthes minutissima* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Amphora copulata* | 2 | | | | 1 | 2 | | 1 | 4 | | |
| *Amphora fontinalis* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Amphora ovalis* | 1 | | | | | | | | 1 | | |
| *Amphora veneta* | | | | | | | | | 2 | | |
| *Caloneis silicula* | 1 | | | | | | | | 2 | | |
| *Cocconeis placentula* | 6 | 1 | | 1 | 6 | 51 | 2 | 24 | 112 | | |
| *Cymbella silesiaca* | 2 | | | | | 1 | | 1 | 2 | | |
| *Cymbella sinuata* | | | | | | 2 | | 3 | 1 | | |
| *Cymbella tumida* | 5 | 1 | 3 | | 1 | 7 | | 7 | 4 | | |
| *Cymbella turgidula* | 7 | 1 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 13 | | |
| *Diploneis boldtiana* | | | | | 1 | 2 | | 3 | 61 | | |
| *Diploneis ovalis* | | | | | 1 | | | | 2 | | |
| *Diploneis* sp. | | | | | | | | | 7 | | |
| *Epithemia adnata* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Eunotia minor* | 1 | | | | | 1 | | | 2 | | |
| *Eunotia praerupta* | | | | | | | | | 2 | | |
| *Fragilaria brevistriata* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Fragilaria capucina* | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| *Fragilaria exigua* | | 1 | | | | | | | 1 | | |
| *Gomphonema angustum* | | | | | | | | 1 | | | |
| *Gomphonema clevei* | 2 | | | | | 5 | | 7 | 7 | | |
| *Gomphonema gracile* | 1 | | | | | | | | 1 | | |
| *Gomphonema minutum* | | 1 | | | | | | | 6 | | |
| *Gomphonema parvulum* | | | | | | 2 | 2 | | 4 | | |
| *Gomphonema* spp. | | 1 | | | | 1 | | | 12 | | |
| *Hantzschia amphioxys* | 2 | 1 | | | | 2 | | 2 | 3 | | |
| *Navicula bacillum* | | | | | | 1 | | 1 | 4 | | |
| *Navicula capitata* v. *hungarica* | | | | | | | | | 14 | | |
| *Navicula clementis* | 1 | | | | | | | | | | |
| *Navicula confervacea* | 17 | 1 | | | 1 | 13 | 2 | 4 | 9 | | |
| *Navicula contenta* | 1 | | | | | | | | 2 | | |
| *Navicula cryptocephala* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Navicula cryptotenella* | 1 | | | | | | | | 1 | | |
| *Navicula elginensis* | 3 | 2 | | | | | | | | | |
| *Navicula goeppertiana* | | | | | | 1 | | | | | |
| *Navicula ignota* | 2 | | | | | | | | | | |
| *Navicula kotschyi* | | 1 | | | | | | | | | |
| *Navicula laevissima* | 1 | | | | | | | | | | |
| *Navicula mutica* | 1 | | | 1 | 1 | 3 | | | 3 | | |
| *Navicula pupula* | | | | | | | | | 1 | | |
| *Neidium alpinum* | | | | | | 1 | | | | | |
| *Nitzschia amphibia* | 7 | | | | | | | 1 | | | |
| *Nitzschia nana* | | 1 | | | | | | | | | |
| *Nitzschia palea* | 1 | | | 1 | | | | 1 | | | |
| *Pinnularia acrosphaeria* | 2 | | | | | 1 | | | 1 | | |
| *Pinnularia appendiculata* | 1 | | | | | | | | | | |
| *Pinnularia borealis* | 1 | | | | | 1 | | | 2 | | |
| *Pinnularia divergens* | | | | | 1 | | | | | | |
| *Pinnularia hemiptera* | 1 | | | | | 1 | | | | | |
| *Pinnularia microstauron* | | | | | | | 1 | | 1 | | |
| *Pinnularia obscura* | | 1 | | | | | | | | | |
| *Pinnularia schroederii* | | | | | | 3 | | | | | |
| *Pinnularia subcapitata* | 1 | | 4 | | | | | | | | |
| *Pinnularia viridis* | 2 | | | | | | | 1 | 2 | | |
| *Pinnularia* spp. | | | | | | 1 | | | 1 | | |
| *Rhoicosphenia abbreviata* | | | | | | 2 | | | 7 | | |
| *Rhopalodia gibberula* | | | 1 | | | | | | | | |
| *Surirella angusta* | | | | | | | | 1 | | | |
| *Synedra ulna* | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | |
| 中塩性種（汽水生種） | | | | | | | | | | | |
| *Fragilaria fasciculata* | | | | | | | | | 1 | | |
| 合　計 | 77 | 15 | 9 | 4 | 16 | 176 | 8 | 66 | 336 | 1 | 0 |
| 未同定 | 1 | 1 | 2 | | | 4 | 1 | 1 | 11 | | |
| 破片 | 78 | 17 | 7 | 5 | 11 | 184 | 4 | 40 | 202 | 12 | 2 |
| 試料１$cm^3$中の殻数密度 | 0.2 $\times 10^5$ | 0.3 $\times 10^4$ | 0.2 $\times 10^4$ | 0.1 $\times 10^4$ | 0.3 $\times 10^4$ | 0.4 $\times 10^5$ | 0.2 $\times 10^4$ | 0.1 $\times 10^5$ | 0.4 $\times 10^6$ | 0.2 $\times 10^3$ | 0 |
| 完形殻保存率（%） | 50.0 | 48.5 | 61.1 | 44.4 | 59.3 | 49.5 | 69.2 | 62.6 | 63.2 | 7.7 | |

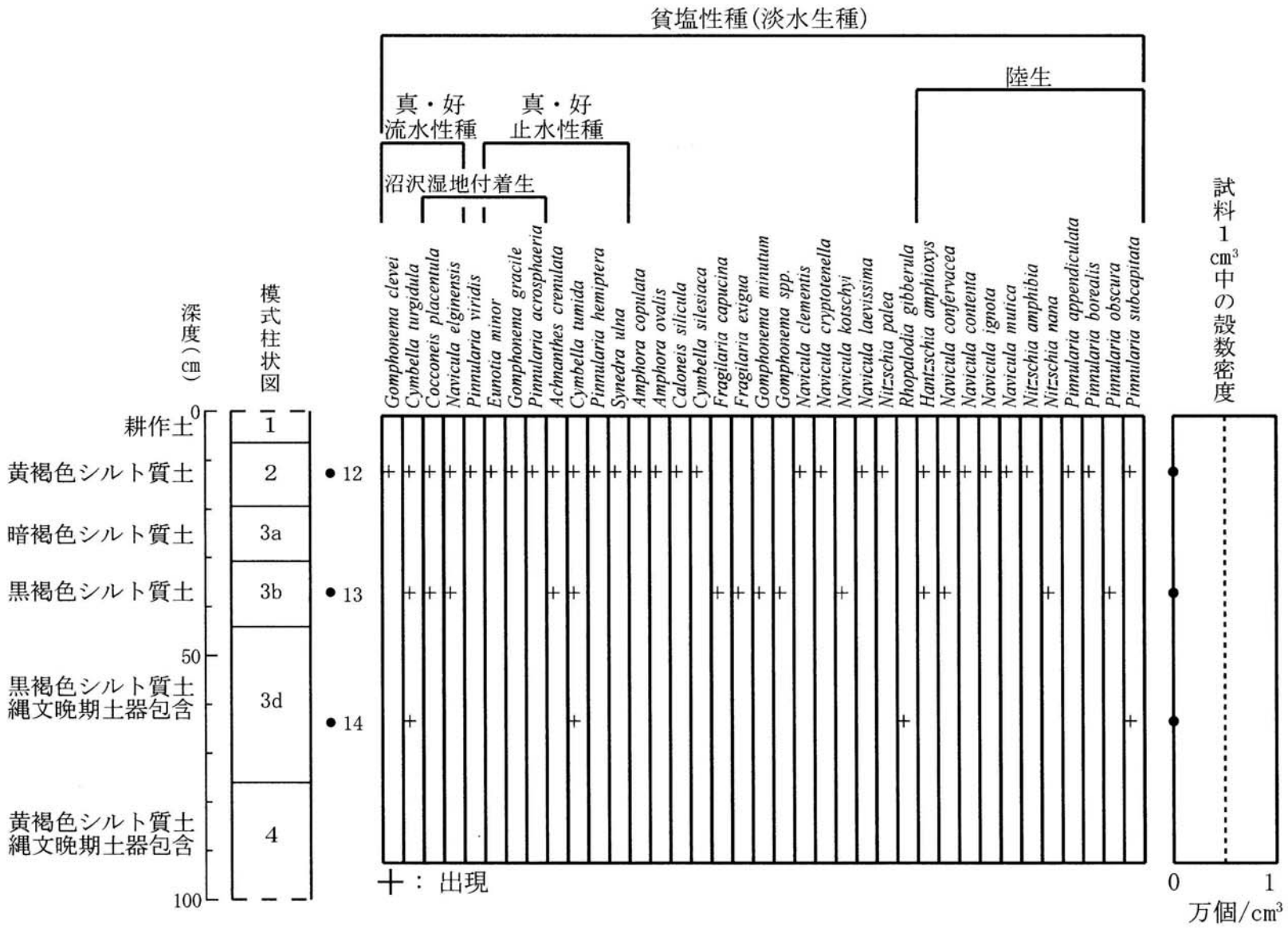



図25　竹松遺跡 B1区北壁における主要珪藻ダイアグラム

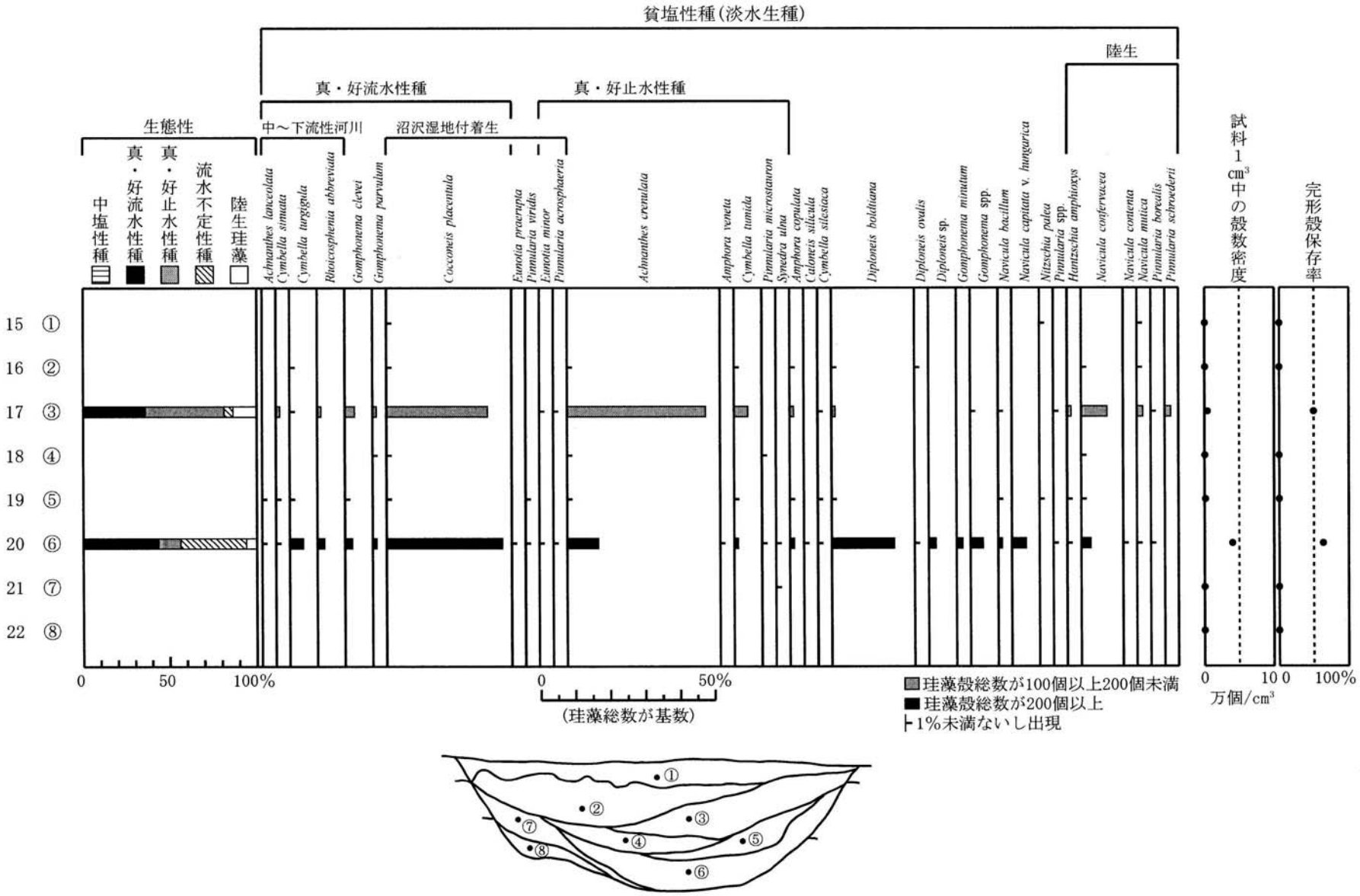
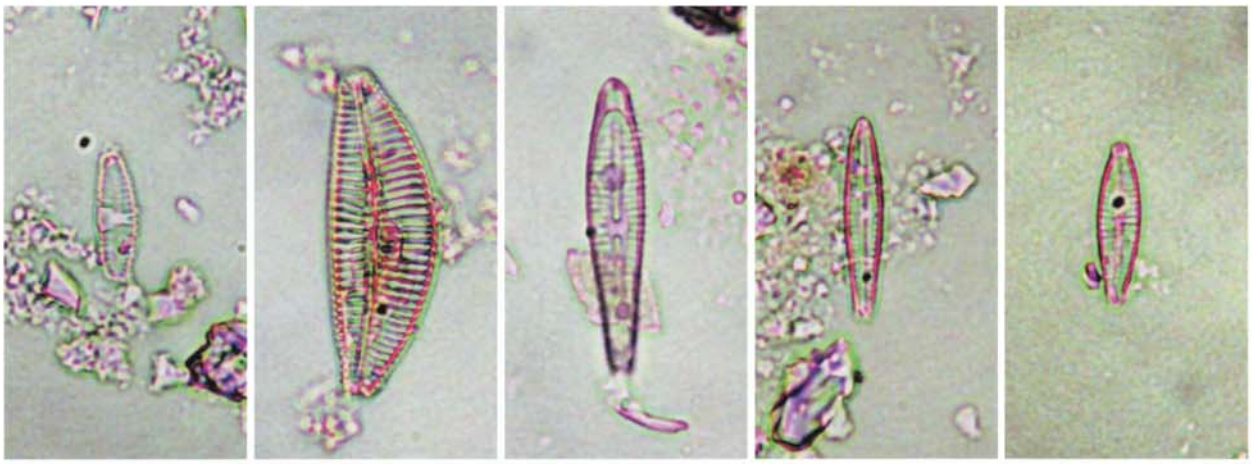
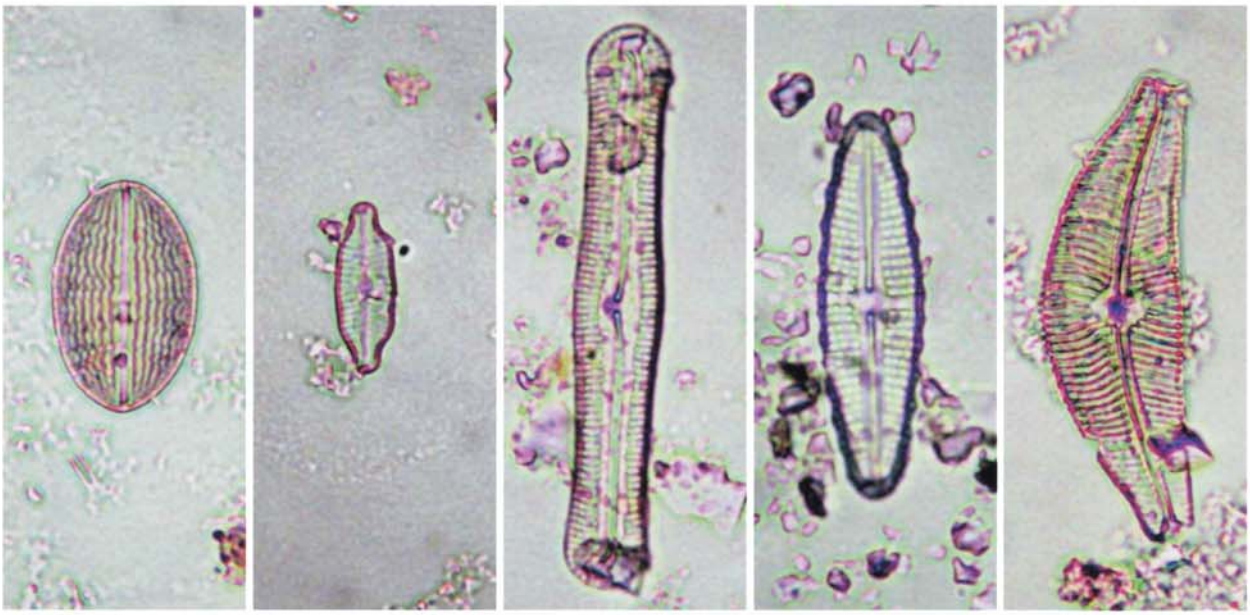



図26　竹松遺跡 SD06における主要珪藻ダイヤグラム



1 Cymbella sinuata No.19（SD06 ⑤層）
2 *Cymbella turgidula* No.12（B1区北壁 2層）
3 *Rhoicosphenia abbreviata* No.20（SD06 ⑥層）
4 *Gomphonema clevei* No.20（SD06 ⑥層）
5 *Gomphonema parvulum* No.20（SD06 ⑥層）



6 *Cocconeis placentula* No.19（SD06 ⑤層）
7 *Navicula elginensis* No.12（B1区北壁 2層）
8 *Pinnularia acrosphaeria* No.19（SD06 ⑤層）
9 *Achnanthes crenulata* No.17（SD06 ③層）
10 *Cymbella tumida* No.14（B1区北壁 3d層）

11 *Amphora copulata* No.20（SD06 ⑥層）
12 *Cymbella silesiaca* No.12（B1区北壁 2層）
13 *Diploneis boldtiana* No.20（SD06 ⑥層）
14 *Nitzschia palea* No.12（B1区北壁 2層）
15 *Navicula mutica* No.17（SD06 ③層）

10 μm

図版10　竹松遺跡の珪藻

## 9. 竹松遺跡における植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所

### (1)はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸($SiO_2$)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000, 杉山, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

### (2)試料

分析試料は、2区水田？のA地点～C地点から採取された№23～№25の計3点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

### (3)分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

1)試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)

2)試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)

3)電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理

4)超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散

5)沈底法による20μm以下の微粒子除去

6)封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

7)検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### (4)分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表5および図27に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

(5)考察

**①稲作跡の検討**

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

2区水田？とされるA地点～C地点から採取された№23(②7252)、№24(②7052)、№25(②7050)について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、A地点(№23)では密度が4,800個/gと高い値である。したがって、同地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

B地点(№24)とC地点(№25)では、密度が2,000個/gおよび700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

**②イネ科栽培植物の検討**

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

**③植物珪酸体分析から推定される植生と環境**

上記以外の分類群では、イネ科ではヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。樹木ではマンサク科(イスノキ属)、樹木(その他)が比較的多く検出され、クスノキ科なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢であり。№23ではイネも多くなっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。また、周辺

の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などが生育し、遺跡周辺にはイスノキ属やクスノキ科などの樹木(照葉樹)が分布していたと推定される。

### (6)まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、2区水田？とされるA地点では、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、B地点とC地点でも、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などが生育し、遺跡周辺にはイスノキ属やクスノキ科などの樹木(照葉樹)が分布していたと推定される。

文献

杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69－84.

杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109－123.

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)．考古学と植物学．同成社，p.189－213.

杉山真二(2009)植物珪酸体と古生態．人と植物の関わりあい④．大地と森の中で－縄文時代の古生態系－．縄文の考古学Ⅲ．小杉康ほか編．同成社，p.105－114.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15－29.

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73－85.

表5　竹松遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

| 分類群 | 学名 | 地点・試料　2区水田？ 23 | 24 | 25 |
|---|---|---|---|---|
| イネ科 | Gramineae | | | |
| イネ | *Oryza sativa* | 48 | 20 | 7 |
| ヨシ属 | *Phragmites* | 55 | 20 | 14 |
| ススキ属型 | *Miscanthus* type | 7 | 13 | 7 |
| ウシクサ族 A | Andropogoneae A type | 21 | 27 | 21 |
| タケ亜科 | Bambusoideae | | | |
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Nipponocalamus | 14 | 7 | 7 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | 7 | 20 | 14 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | 14 | 7 | |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | 7 | |
| 未分類等 | Others | 55 | 66 | 7 |
| その他のイネ科 | Others | | | |
| 表皮毛起源 | Husk hair origin | 14 | 27 | 14 |
| 棒状珪酸体 | Rod-shaped | 76 | 33 | 21 |
| 茎部起源 | Stem origin | | | 7 |
| 未分類等 | Others | 166 | 219 | 115 |
| 樹木起源 | Arboreal | | | |
| ブナ科（シイ属） | *Castanopsis* | | | 7 |
| クスノキ科 | Lauraceae | 14 | 7 | 21 |
| マンサク科（イスノキ属） | *Distylium* | 124 | 140 | 79 |
| その他 | Others | 117 | 120 | 64 |
| 植物珪酸体総数 | Total | 731 | 731 | 408 |

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・㎝）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| イネ | *Oryza sativa* | 1.42 | 0.59 | 0.21 |
| ヨシ属 | *Phragmites* | 3.48 | 1.26 | 0.90 |
| ススキ属型 | *Miscanthus* type | 0.09 | 0.16 | 0.09 |
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Nipponocalamus | 0.16 | 0.08 | 0.08 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | 0.03 | 0.10 | 0.07 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | 0.10 | 0.05 | |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | 0.02 | |

タケ亜科の比率（%）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| メダケ節型 | *Pleioblastus* sect. Nipponocalamus | 54 | 32 | 55 |
| ネザサ節型 | *Pleioblastus* sect. Nezasa | 11 | 39 | 45 |
| チマキザサ節型 | *Sasa* sect. Sasa etc. | 35 | 21 | |
| ミヤコザサ節型 | *Sasa* sect. Crassinodi | | 8 | |
| メダケ率 | Medake ratio | 65 | 71 | 100 |

図版11　竹松遺跡の植物珪酸体（プラントオパール）

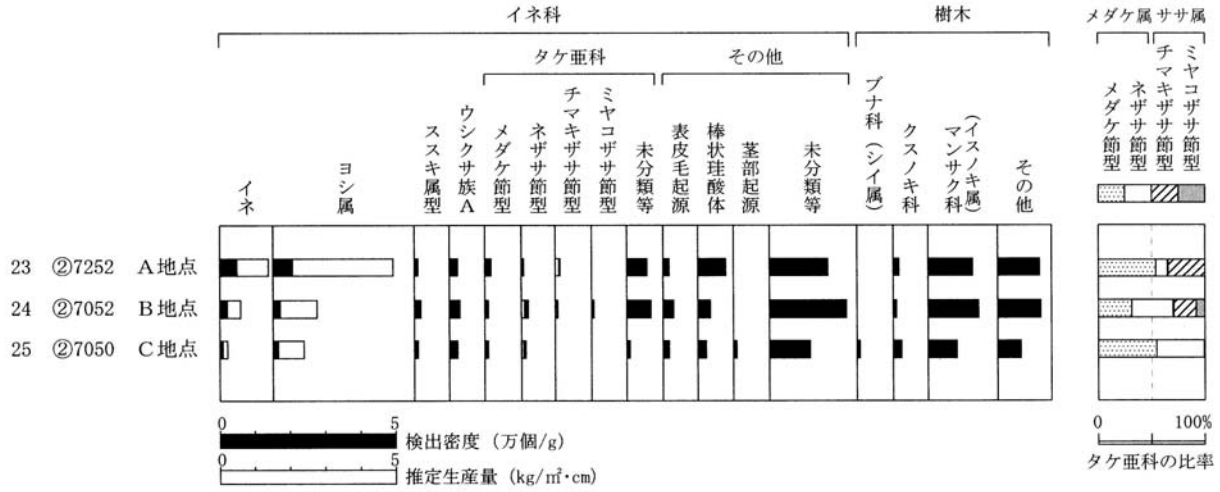



図27　竹松遺跡 TAK201406：2区水田？における植物珪酸体分析結果

# V　まとめ

竹松遺跡のTAK2014の各調査区の遺構、遺物の報告を簡潔にまとめる。

【旧石器時代】

旧石器・縄文時代の調査成果は上巻末に「小結」として整理している(上巻173頁)。

(1)遺構・遺物

旧石器時代の遺構は発見されず、遺物も包含層から出土した3点のみであった。

【縄文時代】

(1)晩期の竪穴建物跡と埋甕

縄文晩期の竪穴建物跡2棟と埋甕2基を発見した。本県の縄文時代の竪穴建物跡は報告事例が少なく、貴重な発見となった。

(2)石器組成

TAK2014調査区の各調査区の石器組成を検討した。その結果、TAK201404調査区では石鏃と扁平打製石斧の出土量が多く、竪穴建物跡の検出もあって、当地での「半農半猟」の定住生活を想定した。

また、TAK201406、TAK201407調査区では、扁平打製石斧、石核・剥片の出土が多いという調査結果を受け、同調査区では、石器の素材生産を行うと同時に、「農耕」という生業システムが成立していたと想定した。

(3)縄文時代晩期の剥片剥離技術

当地の縄文時代晩期の剥片剥離技術を学史的に整理し、従来の当該期の剥片剥離技術への評価に対し、渡邊康行による南島原市権現脇遺跡出土石器の検討結果を基に、再評価を行った。さらに、再評価された剥片剥離技術は、「栽培」に軸足を移した当地の生業システムが反映されたものと見なした。

(4)被熱痕跡を持つ石器

竹松遺跡からは、被熱痕跡を持つ晩期の石器が多数出土した。報告者は先行研究を踏まえつつ、実際に黒曜石に加熱実験を行い、先行研究と同様の結果を得た。黒曜石の石器製作過程での加熱の有効性や、加熱の目的、被熱痕跡を持つ石器の分布などは今後の課題である。

(5)黒曜石製石器の産地同定

近年、報告者が長崎県埋蔵文化財センターと共同で進める蛍光X線分析による黒曜石製石器の産地同定を竹松遺跡でも行った。

【弥生時代・古墳時代】

弥生・古墳時代の調査成果は中巻末に「まとめ」として整理している(中巻305頁)。

(1)竪穴建物跡

今回報告したTAK2014調査区に限定しているものの、弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡の検討を行った。まず平面プランの検討を行った結果、本県では、これまでも言われてきたことだが、竹松遺跡でも円形プランの竪穴建物跡が弥生時代終末期まで残存することがわかった。竹松遺跡では、方形のプランは弥生中期末から見られるが、隣接する遺跡を検討すると、旧彼杵郡・高来郡では中期後半には出現するようである。中巻末の「まとめ」では、竪穴建物跡の平面プランの方形化について本県壱岐市の原の辻遺跡との比較も行っている。

また、竪穴建物群の構成(グルーピング)についても検討した。それによるとTAK2014調査区では、弥生時代中期末から後期終末には、1～4軒からなるグループが12ほど存在することがわかった(aグループから1グループ)。グループ内の竪穴建物の数は、4軒でグループを成すものは1つのみ(cグループ)で、残りのグループは1軒か2軒から成る。そのことから、竪穴建物1、2軒で1グループを形成することが基本であることが分かる。

次に時期別のグループの数を見ると、中期末から後期初頭で3グループ、後期前半で4グループ、後期後半が0で、後期終末は3グループであった。

古墳時代になっても、グループが1軒ないし2軒で構成されることは変わらない。グループの数が最大になるのが、6世紀後半の10グループで、他の時期は2～3グループずつである。

このようにグループを構成する竪穴建物が、1，2軒であることは、私見ではあるが、本県本土部では、縄文時代晩期からほとんど変わらないと考えている。そのグループが、通常は一定時期に1グループか2グループ存在するが、時期によってそれ以上のグループに増加することが窺え、増加の原因や背景の検討が今後の課題である。

さらに中巻末の「まとめ」では、古墳時代建物跡のグループの特徴として「大型建物跡1軒＋小型建物跡1軒」、「大型建物跡＋中型建物跡1軒」のセット関係を指摘している。さらに「大型建物跡1軒＋小型建物跡1軒」の組み合わせは弥生時代と同じとした。

なお、TAK201403調査区で方形の竪穴建物跡(SC02)の北半分を確認して、調査したが、南半分は前年度に調査したTAK201301調査区にあったと想定されるものの、前年度調査の際には同遺構の検出にいたらず、SC02に隣接する遺構としてSK(土坑)27を確認したのみであった。そのため、SC02の全容が把握できなかった。さらにSC02に隣接し、同時期と思われる「L」字状の溝(TAK201403 SD6および、それに連続する前年度のTAK201301 SD2)の性格も十分検討できなかった。

(2)墳墓

TAK2013調査区(長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅲ』)では集団墓の報告を行ったが、今回のTAK2014調査区でも多くの墳墓を報告した。中巻末の「まとめ」では、TAK2013調査区の集団墓同様に墳墓群の構成(グルーピング)を考察している。

(3)カマドを持つ竪穴建物

TAK2014調査区ではカマドを持つ竪穴建物跡を複数発見した。TAK201406 2区SC1、TAK201406 2区SC2、TAK201406 2区SC8、TAK201406 4区SC13、TAK201406 4区SC14、TAK201406 4区SC15、TAK201407 1区SC1、TAK201407 1区SC4、TAK201407 1区SC5、TAK201407 2区SC14、およびカマドのみ発見されたTAK201404 B6 東区SL3である。カマドを持つ竪穴建物は本県では初の発見であった(註1)。カマドを持つ竪穴建物の時期は、ほとんどが6世紀後半である。それ以前の竪穴建物にはカマドは見られない。かねてよりカマドを持つ竪穴建物が本県では、なかなか発見されないことが不思議であった。竹松遺跡の調査結果を見ると、本県では、カマドを持つ竪穴建物が、地域的に、極めて限定して存在すると思わせるような現状である。

(4)円墳周溝(SZ1)出土の土器

本県の古式土師器の編年は未だ確立していない状況で、他地域との併行関係の検討も今後の課題である。今回報告した円墳周溝(SZ1)から出土した土器は、本文中にも記載したが、平成29(2017)年10

月7日に本県で開催された九州前方後円墳研究会の古式土師器見学会での、参加者の議論を参考にした。それによると円墳周溝の土器は蒲原編年の夕ヶ里式新段階、久住編年のⅡBで、円墳周溝が切るSC3(竪穴建物跡　本文では弥生時代の遺構として報告　19頁)は蒲原編年の夕ヶ里式古段階、久住編年のⅡAではないかとの意見を伺った。SC3出土土器と同時期の資料を竹松遺跡周辺で探すと、同じ大村市の冷泉遺跡6号住居跡出土土器があげられるという。いずれにしても円墳周溝出土土器は、本県においては数少ない古墳時代初頭の資料と言える。

また、円墳が前代の土坑墓を取り込む形で占地・造営されていることも興味深い(註2)。

【古代】

古代・中世の調査成果は下巻末に「小結」として整理している(下巻300頁)。

(1)越州窯系青磁Ⅲ類

越州窯系青磁椀Ⅲ類1点と浅椀Ⅲ類3点が出土した。県内での出土は初めてである。これらの優品が竹松遺跡にもたらされた歴史的背景の検討が今後の課題である。

【中世】

(1)四面廂建物跡

今回、竹松遺跡では2棟目となる四面廂建物跡を報告した(TAK201406③SB2)(註2)。四面廂建物跡は本県で初めて発見された遺構であり、1棟目は既に『竹松遺跡Ⅲ』(長崎県教委編2018)でTAK201302調査区⑤区SB05として報告している(369頁)。柱穴から出土した手持ちヘラケズリの土師器坏から8世紀後半の時期とした(註4)。しかし、平成30年(2018)の年末から翌年3月にかけて大村市教育委員会が、竹松遺跡の別地点で、中世の四面廂建物跡を3棟発見している。したがって、既に報告済みのTAK201302調査区⑤区SB05の時期については、再考の余地があると考えている。

(2)区画溝

区画溝については、下巻末の「小結」に詳しい。本県では4例目の発見であるが、その規模において本県では前例がない。「居館」と呼ぶにふさわしい遺構である。

(3)石鍋を再利用した加工品

下巻末の「小結」で、石鍋を再利用した、いわゆる二次加工品において、その加工技術に着目して類型化した整理を掲載した。石鍋の再加工品は、存在自体は注目されてきたが、再加工技術に注目した検討は、これまで少なかったので、さらに検討したい。

(4)カムィヤキ

竹松遺跡では本県で初めてカムィヤキを発見した。沖縄県で「3点セット」と称される「縦耳付きの石鍋・玉縁口縁白磁(白磁椀Ⅳ類)、カムィヤキ」が竹松遺跡でも確認されたことになる。

(5)初期高麗青磁

20点を超える点数が出土した。高麗無釉陶器も200点を超えて出土している。県内本土部の当該期の遺跡の中で、朝鮮半島産の焼き物の出土量が突出していることから、竹松遺跡と朝鮮半島の深い関係が考えられる。

【自然科学分析】

(1)赤色顔料

『竹松遺跡Ⅲ』(長崎県教委編2018)の続報として、九州国立博物館の志賀智史氏に分析を依頼した。

北部九州とは異なる赤色顔料の使用方法がさらに明確になった。

(2)イスラム陶器

竹松遺跡から出土したイスラム陶器は、本県では壱岐市原の辻遺跡に次ぐ発見である。長崎県埋蔵文化財センターに分析を依頼した。蛍光X線分析による非破壊調査の結果によると、原の辻遺跡出土のイスラム陶器とは異なる成分から成ることが判明した。今後の研究課題である。

(3)放射性炭素年代

中世の区画溝の年代推定の参考に、SD06の黒色土(溝底堆積土)中の炭化物を分析した。その結果、11世紀第2四半期から12世紀第3四半期の数値を得ることができた。

またTAK201406 SX1(囲繞住居)の年代推定の参考にすべく、C－3(囲繞溝より採取)の炭化物を分析した。その結果、13世紀第4四半期から14世紀第1四半期、および14世紀中頃から14世紀末の年代を得た。

(4)竹松遺跡の人骨

TAK201405③調査区の区画溝で囲まれた場所で、人骨が集中して出土した。分析の結果、成人男性の可能性があるという。

【註】

註1　竹松遺跡におけるカマドを持つ竪穴建物跡のうち、古代(9世紀後半)に属す出土例は、既に『竹松遺跡Ⅱ』(長崎県教委編2017)で報告している(TAK201202⑤区SC4、TAK201202⑤区SC5)。
今回の報告書では、同じ古代(9世紀後半)のTAK201405⑤区SC3、SC4のカマド付き竪穴建物跡を報告している。

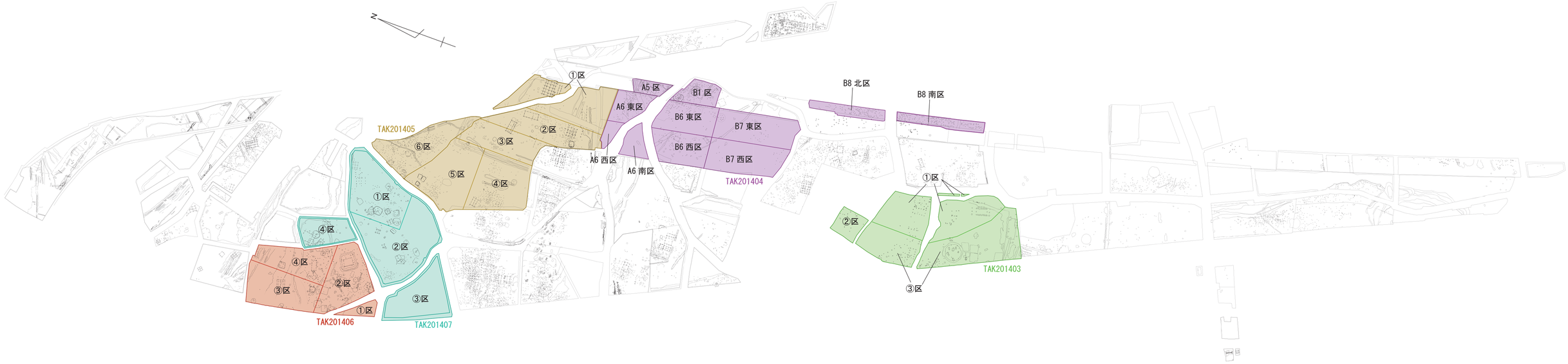
註2　本県では時代は異なるが、雲仙市龍王遺跡で前代の方墳を取り込んで、6世紀後半の前方後円墳が築造された例がある(雲仙市教委編2006)。

註3　調査時点では今回報告したTAK201405調査区①SB2も四面廂建物跡と考えていたが、調査後の整理検討の結果、三面廂建物跡と結論付けた。したがって、区画溝の中には四面廂建物は存在しない。

註4　この土師器坏は後に山本信夫氏に実見していただいて、「8世紀前半」とのご教示をいただいた。

【引用・参考文献】

雲仙市教育委員会編2006『龍王遺跡(倉地川古墳)－国見中部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報－』雲仙市教育委員会
長崎県教育委員会編2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査報告書第5集　長崎県教育委員会
長崎県教育委員会編2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査報告書第6集　長崎県教育委員会




第267図　竹松遺跡全体遺構配置図（1／1,500）

0　(S=1/1,500)　100m

写真1　重機による表土掘削作業1

写真2　重機による表土掘削作業2

写真3　トレンチ掘削作業1

写真4　トレンチ掘削作業2

写真5　遺構検出作業1

写真6　遺構検出作業2

写真7　遺構検出作業3

写真8　遺構検出作業4

写真9　遺構掘削作業1

写真10　遺構掘削作業2

写真11　遺構掘削作業3

写真12　配水管設置作業

TAK201403調査区　調査風景

写真13　重機による表土掘削作業1

写真14　重機による表土掘削作業2

写真15　掘削作業1

写真16　掘削作業2

写真17　遺構掘削作業1

写真18　遺構掘削作業2

写真19　遺構掘削作業3

写真20　遺物取り上げ作業

写真21　遺構計測作業1

写真22　遺構計測作業2

写真23　小学生の体験発掘1

写真24　小学生の体験発掘2

TAK201404調査区　調査風景

写真25　重機による表土掘削作業

写真26　遺構検出作業1

写真27　遺構検出作業2

写真28　遺構掘削作業1

写真29　遺構掘削作業2

写真30　遺構精査作業1

写真31　遺構清掃作業1

写真32　遺構計測作業1

写真33　遺構計測作業2

写真34　小学生の体験発掘1

写真35　小学生の体験発掘2

写真36　調査風景　遠景

TAK201405調査区　調査風景

写真37　重機による表土掘削作業

写真38　遺構検出作業1

写真39　遺構検出作業2

写真40　遺構検出作業3

写真41　遺構検出作業4

写真42　遺構掘削作業1

写真43　遺構掘削作業2

写真44　遺物取り上げ作業1

写真45　空撮作業

写真46　作業員への遺構説明

写真47　小学生の体験発掘1

写真48　小学生の体験発掘2

TAK201406調査区　調査風景

写真49　重機による表土掘削作業

写真50　掘削作業1

写真51　掘削作業2

写真52　トレンチ掘削作業1

写真53　トレンチ掘削作業1

写真54　ベルコン設置作業

写真55　遺構検出作業1

写真56　遺構検出作業2

写真57　遺構掘削作業

写真58　土層検討

写真59　小学生の体験発掘1

写真60　小学生の体験発掘2

TAK201406調査区　調査風景

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たけまついせき　よん　げかん　こだい・ちゅうせいへん |
| 書名 | 竹松遺跡Ⅳ　下巻　古代・中世編 |
| 副書名 | 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | ＸＩ |
| シリーズ名 | 新幹線文化財調査事務所調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第11集 |
| 編著者名 | 川畑敏則・志賀智史・片多雅樹 |
| 編集機関 | 長崎県教育委員会 |
| 所在地 | 〒850－8570　長崎県長崎市尾上町3番1号　TEL095－824－1111 |
| 発行年月 | 西暦2019年7月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード | | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 竹松遺跡（たけまついせき） | 長崎県（ながさきけん）<br>大村市（おおむらし）<br>竹松町（たけまつまち）<br>676番地<br>3他 | 42205 | 086 | 32°<br>57′<br>15″ | 129°<br>56′<br>45″ | 20140528～<br>20150306 | 35,323㎡ | 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）に係る車両基地建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 竹松遺跡 | 包含地 | 古代<br>中世 | 区画溝（中世）<br>四面廂建物跡<br>方形周溝を備えた掘立柱建物跡<br>掘立柱建物跡<br>竪穴建物跡<br>柵列<br>畦畔 | 土師器<br>須恵器<br>貿易陶磁<br>墨書土器<br>滑石製石鍋 | |

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ

竹松遺跡Ⅳ（下巻）古代・中世編

令和元年（2019）年7月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850－8570　長崎市尾上町3番1号
TEL095－824－1111

印刷所　株式会社　昭和堂
長崎県諫早市長野町1007－2
TEL0957－22－6000